

GIRLS und PANZER～少年は戦車道になにを望むか～

紅葉久

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

百式和麻は男ながらも乙女の嗜み『戦車道』を嗜んでいた。

西住、島田と並ぶ戦車道の名家・百式家の長男である和麻は、母の影響から戦車に憧れを幼い頃から抱いていた。

幼き頃から高校まで整備士としての道を進みながらも、和麻は戦車道を学ぶ。

疾風迅雷。その呼び名を持ち、乙女の嗜みである戦車道を嗜む彼は世間からある呼び名で蔑まれていた。

『疾風迅雷の異端児』

『戦車道を穢す日本の恥』

陰で蔑まれながらも、和麻は自身の道を歩んでいた。

自分を認める仲間と共に、自身の戦車道を貫いていた。

しかし高校一年のある時、とある事件から和麻は戦車道から離れてしまう。

それ以降、戦車道になるべく関わらないように過ごしていた和麻だったのだが、人生はそんなにも簡単ではなかった。

和麻の住む学園艦に来た『とある転校生』と出会った日――和麻は諦めた道をもう一度見つめ直すことになる。

夢を諦めた人間が、また夢を追い掛けていけない理由はない。

## 目次

PANZER・1 男が戦車に乗る対価

Prologue

1. 朝の風紀委員は鬱陶しい | 11

2. 騒がしい少女、お淑やかな少女 | 17

3. 男が戦車に乗ると……？ | 25

4. 戦車道の対価 | 31

PANZER・2 戦車道、始めます

1. 懐かしい夢 | 43

2. 倉庫に眠るのは……？ | 57

3. みほの葛藤、和麻の戦車道 | 71

4. サボることは、決して良いことではない | 82

5. 本当の気持ち、本当の想い | 92

PANZER・3 試合、やります

1. そこに眠るは、思い出の戦車 | 111

2. 眠る少女は、少年に苛立つ | 121

3. 少女の乗る理由、少年の笑顔 | 140

4. 喧嘩する二人、懐かしの知人 | 156

5. そして歩く、初めの一步を | 170

6. もう一度少女は問う、彼の道を | 185

PANZER・4 隊長、がんばります！

1. 真実を告げる時が来た | 207

2. 慢心せず、前に進むこと | 224

3. 期待という言葉 | 235

4. 事故を防ぐには、まず基礎を | 256

5. 敬語を使うに値する人 | 264
6. 知ること、知らないこと | 276
7. 向き合えない人に、前に進む資格はない | 296
8. 意味のない練習はない | 314
9. 放課後の寄り道も、たまには | 327
10. 逃げることは、悪いことではない | 342
11. 傷というのは、思ってるよりも深い | 350
12. 昔話も、たまには良いかもしれない | 362

PANZER・5 聖グロリアーナ戦です！

1. 鮮やかな記憶、輝かしい過去 | 382
2. 怒ることは、誰にでもある | 407
3. 向き合えていても、向き合えていない | 419
4. 前金を受け取るなら、それは承諾 | 429
5. 勝つことに、負けることに、意味がある | 445
6. やることやって、テンション上げてこい | 459
7. 珈琲と紅茶、どっちが良い？ | 468
8. 追う者、追われる者 | 481
9. 好きに走ってくると良いわ | 497
10. 聖グロの疾風、最速の淑女 | 511
11. つんつん作戦開始です！ | 523
12. 止めれば良いんです！ | 537
13. 休める時に休め | 555
14. クルセイダーの上手い使い方 | 566
15. 戦車に乗るのが楽しい | 580
16. こんな格言を知ってるかしら？ | 591

17.	この距離で外す?	603
17,	5. ジャイアントキリング	613
18.	二人の読み合い	618
19.	当てれるものなら当ててみる	635

# PANZER. 1 男が戦車に乗る対価 Prologue

とてとてと小さな体軀が歩く。

長い髪を三つ編みに結び、それを側頭部で二つに綺麗に纏めた髪型の小さな女子だ。

それは幼い容姿をした少女だった。小さな背丈から本来の年齢以上に幼く見える。しかしそんな彼女も高校一年生に部類されることから、彼女の身体の成長はあまりよろしくない伺える。

その身に紺色のカーディガン、ブルーのスカートに黒のタイツという制服姿で、小さな女子は自分の主を探す。

綺麗な洋風の廊下を歩きながら、女子は思い当たる場所を幾つか歩き回る。

そして三つ目に思いついた場所に行くと、女子は探していた主を見つけることが出来た。

少女が所属する聖グロリアーナ女学院の二階。談話室と呼ばれる場所に、その人は椅子に座りながら楽しげに紅茶を片手に本のページを捲っていた。

「ダーズリン様、一体何を見ているんですか？」

ようやく見つけたことに安堵した少女は、とてとてと近づくと彼女は驚かさないように優しく自身の主へ声を掛けた。

少女が着ている制服と同じ姿の少女こと——ダーズリンが声をかけられたことに捲っていたページの手を止めると、少女へと向いた。

綺麗な金髪の綺麗な容姿をした少女だった。整った容姿は可憐と思わせ、髪を綺麗に纏め結び上げたその姿は、どこかお淑やかな令嬢を思わせる。

ダーズリンは澄んだ蒼い瞳を小さな少女——オレンジペコに向けると、穏やかに頬を緩めた。

「アルバムよ。部屋の整理をしたら出てきたから、つい懐かしくて見ているの」

オレンジペコがダージリンの持つ本を見ると、そこには写真が何枚も貼られていた。

「よろしければ私も一緒にして良いですか?」

思わず、オレンジペコはそう言った。

自身の敬愛する人の過去を知りたい故か、オレンジペコは迷うことなくその言葉をダージリンに向けた。

「ええ、構わなくてよ」

オレンジペコの提案に、ダージリンは快諾する。

ダージリンの答えに嬉しそうにオレンジペコが笑みを見せると、彼女はすぐにダージリンの隣に立ち、座る前の準備を始めた。

ダージリンの座る椅子の近くにあるテーブルに視線を向け、オレンジペコは自分の分の紅茶を用意する。しかしその前に、彼女はダージリンの空いたコップへ新しい紅茶を注ぐ。

付き添いの者として、主を最優先にする。それはオレンジペコにとって「当たり前」になっている。

オレンジペコがダージリンの付き添いになってからまだ間もない。しかし敬愛する人の側にずっと居られることに、オレンジペコは楽しみに世話をする。

そしてダージリンと自分の紅茶を用意すると、オレンジペコは音を立てずに彼女の隣に座った。

オレンジペコが隣に座ったのを確認すると、ダージリンは先程まで見ていたアルバムのページをゆっくりと捲り出した。

ダージリンの持つアルバムにある写真。それは彼女が今より少し幼い頃の写真だった。

仲間達と紅茶を楽しんでいる姿。共に戦車に乗っている写真など、この聖グロリアーナ女学院で過ごした思い出の写真がそこにはあった。

オレンジペコはアルバムの写真を一枚一枚目を通す。まだ一年生の彼女は、入学する前のダージリンのことを詳しくは知らない。なのでアルバムにある写真すべてが彼女には新鮮に映った。

そして数ページかダージリンがアルバムを捲ったところで、オレン

ジペコは目に映った写真に声を出してしまった。

「あれ？ このダーズリン様と一緒に写っている殿方は、どなたなのですか？」

オレンジペコの目に止まった写真は、一枚の記念写真だった。

ダーズリンの乗るチャール歩兵戦車をバックに、当時の聖グロリアーナ女学院の生徒達数人が楽しげに笑っている写真だった。

しかしオレンジペコはその写真の一部。ダーズリンの隣に立っている男に視線を向けた。

それは聖グロリアーナ女学院の制服に似た服装を来た若い少年だった。凛々しい風貌の明るい印象を受ける少年が楽しげにダーズリンと笑っている。

聖グロリアーナ女学院は、女子校である。その名の通り、学校には女性しかいない。なのにどうして聖グロリアーナ女学院のカーディガンにズボンという姿をした男性と一緒に写真に写っているのか、オレンジペコはコトリと首を傾げた。

「この人は……昔、私と一緒に戦車道をしていた殿方よ」

オレンジペコの問いに、ダーズリンはゆっくりと答えた。

自分とその少年が写る写真をそっと指で撫で、どこか懐かしげに、そして寂しげな表情をダーズリンは見せた。

「殿方が戦車道を……？」

「ええ、変わってるでしょう？」

オレンジペコが目を大きくする姿に、ダーズリンはくすりと笑みを浮かべる。

戦車道。それは乙女の嗜みと言われる武芸のひとつとされている。礼節のある、淑やかで慎ましく、そして凛々しい婦女子を育成することを目指した武芸。

よって女性しかしない武芸であるのに、男性が戦車に乗っているのかとオレンジペコは顔を顰めた。

ダーズリンがそっと目を閉じる。まるで昔を思い出すような仕草で、彼女は瞼の裏に映る懐かしい光景を思い出しながら語った。

「この方は戦車道が大好きだったの。いつも楽しそうにあの人は戦車



に乗っていたわ」

「だった、ですか？ 今は……？」

過去形で告げるダージリンの話し方に、オレンジペコが訊き返す。

ダージリンは閉じていた目を開けると、写真の少年を見つめながら目を伏せた。

「……わからないわ」

ただどどしく、そして弱い声色でダージリンは答えた。

何か悪いことを言ってしまったのだろうか、オレンジペコは自身の言葉に不安を募らせ思わず「失礼なことを訊いてしまい、すいません」と答えた。

しかしダージリンは首を横に振った。気にすることは無いと言いたげに。

そしてダージリンは何か思い詰めるような表情を見せると、アルバムに向けていた視線をオレンジペコへと向けた。

「ねえ、ペコ……去年、この学校で当時の三年生が数人退学になった話は知っているかしら？」

唐突なダージリンの問いかけに、オレンジペコは眉を寄せた。

しかしダージリンの質問に答えられない訳にはいかない。オレンジペコは正直に質問に答えた。

「詳しいことは知りません。何か大きな問題が起こった程度のことしか……」

「そう……」

ダージリンが簡素に返事にする。まるで知らないことが良くないことだと言いたげな表情だった。

「この写真はね、去年にこの学校で撮ったモノなの」

そうしてダージリンが写真をしばし見つめると、彼女は静かにそう言った。

オレンジペコは黙ってダージリンの話に耳を傾ける。

ダージリンはオレンジペコが話を聴いているのを確認すると、静かに語り出した。

「この人は、聖グロリアーナ女学院の歴史で初の男子生徒だったのよ。」

戦車道において殿方ながら類稀なる才能を持った人よ。もし彼女が女だったら、戦車道の頂を登れる逸材と言われていたの」

ダージリンの話に、オレンジペコが目を大きくする。

聖グロリアーナ女学院に男子生徒が居たなんて話は今までオレンジペコは聞いたことがない。

男性は戦車道をしない。それが戦車道を嗜む者の少なからずの常識に近いモノだった。

今では廃れつつある戦車道。その人気も女性ばかりで男性にはあまり人気はない。

そんな中でダージリンは戦車道を嗜んでいた男性が居て、才能があり、その才は戦車道の頂点を狙える人物と言ったのだ。

まさか……とオレンジペコは疑いたくなくなった。

しかしダージリンが嘘を言っているとも思えず、オレンジペコは彼女の話そのまま信じることにした。

「聖グロリアーナ女学院で戦車道の強化という名目で特別入学した殿方で、私の古くからの友人」

「その方のお名前は、なんというのですか？」

ダージリンが古くからの友人と言ったところで、オレンジペコは思わず訊いた。

オレンジペコはダージリンに男性の友人がいるという話は聞いたことがない。

ダージリンのことを知りたいオレンジペコは、彼女の友人という人物に興味を湧いた。

オレンジペコの言葉に、ダージリンは少し言い淀む。しかしアルバムの写真を一瞥すると、彼女は眩くようにその名を告げた。

「……百式和麻」

オレンジペコが眉を寄せた。ダージリンの口から出た名に、彼女は心当たりがあった。

そう言うよりも、戦車道を嗜む者ならその名を耳にしたことが一度はある。

「百式？ それはあの百式ですか？」

百式という苗字。その名にオレンジペコは耳を疑った。

戦車道には、有名な家系がある。

西住、島田、そして百式。戦車道における数ある有名でもその三家はあまりにも有名過ぎたからだ。

「ええ」

驚くオレンジペコの言葉に、ダージリンは頷く。

表情を固くするダージリンだったが、頭を小さく振るうと彼女は話を続けた。

「私と和麻さんは戦車道を通じて中学生の頃に知り合ったの。最初の頃は、男性なのに戦車道なんて珍しい程度にしか思ってたわ」  
戦車道は女性の嗜み、それが常識だ。

男性が戦車道をしたところで公式戦などには出場出来ない。

なので戦車が好きな男性は整備士などの道を選ぶことが多いとオレンジペコは耳にしたことがあった。

「でも色々な訳があつて、当時の私と和麻さんは試合をすることになつたの」

「……勝敗は？」

オレンジペコが息を吞んでダージリンの話を聞く。その姿にダージリンは思わずくすりと笑った。

「勝敗は、私の完敗だったわ」

「完敗……!!? ダージリン様が？」

「ええ、その時の和麻さんは操縦手だったのだけど……操縦があまりにも上手だったわ」

「戦車は何を？」

ダージリンを完敗させた人が乗る戦車にオレンジペコに興味を湧く。

そのオレンジペコの興味にダージリンは懐かしむように答えた。

「クルセイダーだったわ」

「クルセイダーですか!!?」

クルセイダー巡航戦車。それはオレンジペコが好きな戦車だった。ピーキーな性能が特徴な戦車として名を馳せている。

最大速度を60kmと他の戦車と比べれば明らかに速度に特出している。しかし、エンジン寿命が短いなどのデメリットが多い戦車だ。

そのクルセイダー巡航戦車を上手く乗ることが出来ることを聞いたオレンジペコは目を輝かせた。

「流れるような和麻さんの運転に私達のチームは翻弄されたわ。五両編成でのフラッグ戦だったのだけど、和麻さんのクルセイダーに瞬間に三両も倒されたわ」

感情が籠り出した所為かダージリンの声に力が入る。

オレンジペコはクルセイダー巡航戦車の活躍に対する期待を胸に、ダージリンの話の続きを今かと待ち望んでいた。

「そして四両目と同士討ちし、最後は私の乗るフラッグ車が他の四両に囲まれて負けてしまったの」

過去の思い出を振り返るダージリンが、紅茶を口に添える。そして喉を潤すと、彼女はすぐに話を続けた。

「私はすぐにクルセイダーに乗っていた方に話を聞きに行ったわ。そして操縦手が和麻さんだったことをそこで初めて知ったの……それが私と和麻さんの出会いだったわ」

ダージリンと百式和麻との出会い。そのエピソードにオレンジペコはワクワクした表情で楽しそうに聞いていた。

「そこから友人として親しくしていた和麻さんが聖グロリアーナ女学院に特別入学して、私と和麻さんは切磋琢磨して戦車道を学んだの。結局、和麻さんは整備士としての道を選んだのだけだ」

「……残念ですね。そこまでの才能があるのに、男性だからという理由で戦車に乗れなくなるなんて」

「本当ね。彼は操縦だけでなく、隊長としての才もあったから」

オレンジペコが寂しげに話すと、ダージリンは彼女と同じように顔を暗くした。

心なしか紅茶の入ったカップを持つダージリンの手に力が込められているのを、オレンジペコは見逃さなかった。

「そして和麻さんが入学して半年が経って……それは起きたの」

ダージリンの表情が固くなる。それは悔しさの表情だとオレンジペコはすぐに理解出来た。

百式和麻という人間が聖グロリアーナ女学院に入学して半年後、オレンジペコが知らない事件が起こった。

「去年に起きた事件。その件以降、和麻さんは姿を消したわ。当時の私達に何も告げずに……私達の出来る限りで探したのだけど、結局見つからなかったわ」

悔しそうに口を紡ぐダージリンに、オレンジペコは彼女になんて言葉を掛ければ良いかわからなかった。

「だから今は何をしているのかも、私はわからないの」

「戦車道は、やっているのでしょうか？」

「——してないわ」

オレンジペコの疑問に、ダージリンは即答した。

ハッキリと告げたダージリンに、オレンジペコは言葉に詰まった。

ダージリンがカップをテーブルに置く。そして膝に乗せた手を強く握り締めた。

普段のダージリンが到底しないような行動だった。

いかなる時でも優雅に。それが聖グロリアーナ女学院の戦車道だ。

それを体現したようなダージリンが、感情のままに態度に示すことなどオレンジペコはほとんど見たことがなかった。

「彼は傷を負った。心と身体に深い傷を……戦車道が嫌いになってもおかしくなくくらいに」

ダージリンが表情に怒りを表す。彼女の内なる感情を、当時を知らないオレンジペコには、到底理解出来る筈もなかった。

「……この話はここまでにしましょうか。ここからは良い話ではないわ」

「……そうですか」

少し名残惜しいオレンジペコだったがダージリンの顔を見ると、それは咎められた。

ダージリン本人は分かっているかわからないかも知れないが、オレンジペコの視界に映る彼女の顔は見ている方も辛くなるほど悲痛なモノだった。

今にも泣きそうなダージリンの顔を見ていられなかったオレンジペコは、先程の話が気になっても聞こうとは思えなかった。

「あと気になったからと言って、アッサムとローズヒップにはこの話はいらないようにして。あの子達も、彼のことは慕っていたみたいだから」

「わかりました」

ダージリンは三年生だ。同じくして同学年のアッサム、そして二年生のローズヒップはダージリンと同じく百式和麻の名を知っているのだろう。

それを理解したオレンジペコはコクリと頷いた。

そして同時に、百式和麻の話は聖グロリアーナ女学院では禁句だということも理解した。

だからこそ、オレンジペコは入学して一度も自分の学校に男子生徒が在籍していたという話を聞いたことがなかったのだから。

「あの……ひとつだけ、良いですか？」

「……なに？」

しかしふと、これだけはオレンジペコはダージリンに聞きたいと思った。

ダージリンから承諾の意を受けると、オレンジペコはただどどしく言った。

「ダージリン様、その方に今でも会いたいと思いますか？」

オレンジペコの言葉に、ダージリンが僅かに目を大きくした。

「そうね……」

顎に手を添えて、ダージリンは少し考える仕草をする。

そして少しでもだけダージリンが考え、一度だけ自分に納得したように頷くと彼女はオレンジペコに笑みを見せた。

「ねえ、ペコ。こんな言葉を知っている？ 人生では、あなたが信じていることと出会うものだ」

「——ウェイン・グレッツキーですか？」

「ええ、信じていれば——きつと会えるものよ」

ダージリンが朗らかに頬を緩める。そんな彼女に、オレンジペコは

嬉しそうに「はい！」と答えた。

# 1. 朝の風紀委員は鬱陶しい

——大洗学園艦、大洗女子学園

日付は四月に入り、新しい新入生が入学する時期になった。

桜の舞う学園内の校舎を、これからの学園生活が楽しみで笑みを浮かべる者。友人達と楽しげに歩く者など多彩な生徒達が歩いているのが見える。

そんな中——女子しかいない学園内に、一人の少年が芝生で横になっっていた。

それは中肉中背の少年だった。少し長めの髪に、凛々しい顔立ちをしている。

変わった点と言えば、少年の右目に大きな眼帯が付けられているところだろう。顔の右側を覆うような大きな眼帯は少し異様に見える、それだけで少年が少し浮世離れした存在と思えてしまう。

腕を枕代わりにし、少年は潮風を浴びながら心地良い陽だまりの中で静かな寝息を立てる。

そんな少年に、ひとりの女子が近付いた。

足音を大きく鳴らしながら、不満そうに顔を歪めて女子は少年の元へと近づく。

そして女子が少年の横に立つと、彼女は息を大きく吸い込み——大きな声をあげた。

「寝てるんじゃないわよっ！ もう登校時間よ！ 冷泉さんじゃあるまいし早く起きなさいっ！」

耳元で大きな声が響いた所為か、少年は眠りから強制的に覚まされると——彼は薄く左目を開いた。

「……そど子か、何の用だ？」

芝生に横になったまま、少年が開いた左目を女子——園みどり子に向ける。

そど子。そう少年に呼ばれると、みどり子はムツと目を吊り上げた。



「そど子って呼ばない！ 良いから起きて教室に行きなさいよ！」

「うるさい、別に俺が行ったって仕方ないだろう」

「そういうところから風紀が乱れるのよ！」

みどり子の叫びが鬱陶しいと感じた少年が「ったく……」と呟いて、彼女に背を向ける。

しかしみどり子はそれに対して更に表情に怒りを灯すと、背を向けた少年の正面へと移動する。

そしてまた彼女は「起きなさい！」と叫んだ。

「……今朝は整備で早起きだったんだよ。頼むから寝かせてくれ」

「言い訳しない！ 学校が遅刻を許しても私は許さないわよ！」

百式和麻ひやくしきかずま！ 学校内で特待生だからって調子に乗ってるんじゃないわよ！」

みどり子に窘められる少年——百式和麻は寝ながら深くため息を吐くと、ゆっくりと起き上がった。

「別に調子に乗ってない。まったく……俺なんて居なくても問題ないってのに……」

芝生に座り込み和麻が頭を乱暴に搔くと、寝起きで据わった左目がみどり子を見た。

元々の和麻の風貌と右目の眼帯が相まって、少しだけ凶暴な雰囲気を出す。

それに少しだけビクツと驚くみどり子だったが、彼女は自分を奮い立たせるように頭を振るった。

「そういう問題じゃないの！ あなたみたいならしない人を見て、周りが真似したら大変じゃない！」

「……お前、俺がこの学校で何て呼ばれてるか知らないのか？」

大きな欠伸を漏らし、和麻がみどり子へわざとらしく戯けて肩をすくめる。

そんなこと知っている。そう言いたげにみどり子は大きく鼻をふんと鳴らした。

「大洗女子学園に『何故か』在籍してる男子生徒。右目の眼帯が奇妙なサボリ魔の変人。それぐらい常識よ」

和麻の学園内での評価をみどり子が告げる。それに和麻は納得した表情を見せて頷いた。

「わかっているじゃないか、なら俺の真似するヤツなんていないだろう。そういうことで、おやすみ」

ぱたりと芝生に和麻が倒れる。そして腕を枕代わりにして睡眠を取ろうとした。

「だから寝るんじゃないわよ！ まったく！ ゴモヨ！ パゾ美！ あんた達も来なさい！」

眠ろうとした和麻に腹を立てるみどり子が振り向く。そしてみどり子の後ろにある木の陰に隠れる二人の女子生徒に、彼女は声を荒げた。

「そど子くだって怖いよ〜」

「うう……殴られたら嫌だもん」

木に隠れて和麻とみどり子を恐る恐る見守る二人が小さく身体を震わせる。

みどり子と同じ姿、同じ髪型をした女子達だった。これで三人が姉妹ではないというのだから、初めて和麻がそれを知った時は随分と驚いた。

少し長めのおかっぱ女子が、後藤モヨ子。少し短いおかっぱ女子が、金春希美と言う。

二人は先陣を切って和麻を注意するみどり子を心配そうな目で見つめていた。

「そんなこと今までされたことないでしょ！ したら退学よ！ た・い・が・く！」

「んなことするわけないだろうが……」

みどり子に背を向けている和麻が呆れて呟く。何が楽しくて女の子を殴らなくてはならないのか？

もとより和麻にはそんなことをする気もないし、したいとすら思わない。

「……新学期、か」

背後で騒ぐみどり子達をBGMにして、和麻がしみじみと呟いた。

百式和麻が大洗女子学園に来て、三か月ばかりが経った。

半年前に在籍していた学校から転校し、故郷の学校に通うこともなく、和麻は家族の知り合いのいるこの大洗女子学園に特別転入して来た。

本来なら和麻は、学校に行くつもりはなかった。

しかし由緒正しい家系に籍を置いている和麻の家族は、それを許さなかった。

幾度となく繰り返される口論の末、和麻は現在いる大洗女子学園に転入することになったのだった。

と言っても、和麻の本来の目的は大洗学園艦にて整備の勉強をする為なのだが……その条件として大洗女子学園に籍を置かなくてはならないのだった。

なので和麻自身は学校にほとんど行こうとしない。それを彼の背後で騒ぐみどり子達三人が邪魔をしているわけである。

風紀委員に所属しているみどり子達三人は学内の風紀を取り締まる。

よって風紀の乱れとなる和麻を注意する日々が今日まで長い間続いているのだ。

この学校に来て早三か月。諦めもせず毎日毎日飽きもせず和麻のところへ注意しに来る風紀委員三人に、和麻は呆れを通り越して感心してしまうくらいだった。

「……放っておいてくれた方が楽なのにな」

和麻が呟く。脳裏に去年まで所属していた学校のことを蘇る。

和麻にしつこく構ってくる子も居た。お淑やかに注意する子も居た。そして、長い付き合いの金髪少女の顔が彼の脳裏に浮かんだ。

今の風紀委員三人に追い回される日々が、過去の思い出を蘇らせる。和麻にはそれが少しだけ辛いと思った。

一人にしてくれた方が、楽だ。それが和麻の本心だった。

「——なに寝ようとしてるのよ！ 良いから起きなさいよっ！」

そして和麻が思考の海に潜り、夢の中に潜ろうとしたところで急に腕を引っ張る感覚が彼を襲った。

和麻が顔を向けると、みどり子が自分の腕を引つ張っていた。

まったく折れる気がないらしい。和麻はそれを理解すると、鬱陶しそうに顔を歪めた。

「服を引つ張るな。わかった、わかったから……行くからその手を離せ」

諦めないみどり子に横になっただけで和麻が立ち上がる。

そして自分の腕を掴みみどり子の手を払おうとするが、彼女は頑固として手を離さなかった。

「手……離して欲しいんだが？」

「手を放したらあんた逃げるでしょ！ このまま連れてくわよ！」

目を吊り上げて、みどり子が和麻を睨む。

信用されていないらしい。和麻は呆れて肩を落とした。

「そんな子供みたいなことするかよ。ちゃんと行く」

「うるさいわね、良いからこのまま行くわよ。ちゃんと教室に行くまで見届けるに決まってるじゃない！」

まったく信用されていない。和麻は思わず顔を顰めた。

みどり子の身長は和麻の胸の高さくらいで小さい。そんな子供体型の女の子に連れていかれる構図は、いかなものだろうか？

みどり子が腕時計を確認する。そして時刻を確認すると、彼女は我が物顔で和麻の腕を引つ張りながら歩き出した。

「ほら行くわよ。もうちよつとでホームルームの時間になるじゃない」

「行くから手を離せって」

「だから離したら逃げるでしょ！ 知ってるんだからね、百式さんがホームルームだけは出席しなきゃいけないっていうのは！」

「なんで知ってたんだよ……」

みどり子の言葉に、思わず和麻が顔を強張らせた。

百式和麻は授業免除を適用されている。しかしホームルームだけは出席するようと言われているのだ。

和麻自身、この学校に友人と呼べる人はほとんどいない。いや、ほとんどと言うよりいないと言った方が適切かもしれない。

もとより友達なんてモノを作る気もない和麻だったのだが、生徒会などがしつこく構ってくるのが彼には面倒だと言えた。

「三か月前は許したけど今年からは絶対にホームルームに出席させるわよ」

和麻の腕を引っ張りながらみどり子が誇らしげに告げる。

和麻とみどり子が歩く後ろを恐る恐るモヨ子と希美が追い掛けている。

今だ登校中の生徒達が和麻と風紀委員三人が歩く姿を見て、ひそひそと話をしているのが見える。

そんな少女達を一瞥して、和麻は根負けした。

きつとまた妙な噂が立つのだろうな。和麻はそんな予感を感じながら、みどり子に連れられて自分の教室へと向かっていくのだった。

## 2. 騒がしい少女、お淑やかな少女

「また風紀委員に連行されたの?」

和麻が自分のクラスに連行され、自分の席に座ると、隣の席に座っていた少女が彼にそう話し掛けた。

すでに和麻のクラスでは、以前から彼のことを知る生徒達には風紀委員に連行される光景は当たり前になりつつあるらしい。

和麻は自分の席で頬杖を突くと、顔を顰めながら答えた。

「ああ、アイツ等もよく飽きないもんだよ。はあ……諦めてくれないかねえ……」

「無理じゃない? あの風紀委員だよ?」

「……」もつとも」

和麻の隣の席で少女がふふつと笑みを浮かべる。

肩まであるウェーブの掛かった髪の毛の少女だった。大洗女子学園の制服に身を包んだ、どこか抜けてそうな女。

それが初めて彼女——武部沙織を見た和麻の印象だった。

二年生になって同じクラスになり、朝に和麻とたまに話す程度の関係である。

最初の頃、和麻は沙織を無視をしようとしていたのだが一度無視した瞬間、彼女が泣きそうになったことから断念してしまった。

それ以来、話し掛けられれば答える程度の会話を和麻は沙織としている。

「百式君も授業出れば良いのに、なんでサボるの?」

ふと、沙織が何気なく和麻にそう問い掛けた。

「別に、この学校に男なんて居たって邪魔だろ？　いない方が色々精神的に良いに決まってる」

女子校に唯一在籍している男の存在など、他者から見れば邪魔な存在としか思えないだろう。

学校に来ようとしないうと和麻に理由は他にもあるが、沙織には一番妥当な理由を彼が告げる。

沙織はそんな和麻に小首を傾げた。

「そう？　別に私はなんとも思わないけど？」

「そんなこと言ってるから、お前は彼氏が出来ないんだよ」

「わっ！　ひっどーい！　そんな風に言わなくても良いじゃない！」

和麻の一言に、沙織が目を大きくして嘆く。

武部沙織がモテようとしているのは、彼女が一方的に自分の話をしている時に和麻は聞いたことがあった。

何をそんなに必死になるのか、というのが和麻の本音だったのだが……彼にはそれを本人に話すつもりは微塵もない。

しかし別段、横にいる沙織が男性からモテないとは和麻は思わなかった。

喜怒哀楽の表現が激しい、可愛らしい女の子。というのが和麻が沙織と話してわかった印象だった。

だが悲しいことにこの学校は女子校だ。なので所謂出会いの場と云うのが殆どないのだろう。

なのに必死に出会いを求めるのも変な話である。和麻からすれば出会いが欲しいなら共学の学校に行けば良い話だ。

「冗談だ。まったく……朝から騒がしいっての」

和麻の一言に必要以上に騒ぐ沙織に、彼が呆れる。

そんな和麻の態度に、沙織はムツと頬を膨らませた。

「なによー！ 別に私がモテないって決まったわけじゃないもん！ それに騒がしくする原因作った人がそれ言う!?？」

「わかったわかった。お前はモテるモテる。可愛い可愛い」

「うわ、なんかムカつく」

身体をぶるぶると震わせて沙織が口を尖らせる。

本当に素直な女だ。和麻はそう思った。

「——武部さん、百式さん。おはようございます」

和麻と沙織がくだらない話をしていると、そんな時一人の女子が二人に声を掛けた。

和麻が声の方を向くと、そこには髪の毛の長い和風美人と評されるような少女が立っていた。

「あつー・華ー・おはよー！」

和麻と沙織へ話し掛けてきた少女に、沙織が楽しげに返事をする。和麻は沙織と親しそうに話す華と呼ばれた少女の名前を思い出そうとした。

確か——五十鈴華。そんな名前だったと和麻は思い出した。

「百式さん、おはようございます」

和麻と目が合った華がお淑やかに一礼して挨拶する。

そんな華に、和麻は「ああ、おはよう」と淡白な返事をした。

「もうー！ 挨拶くらいちゃんとしなさいよー！」



和麻の挨拶に、呆れた沙織が彼を窘める。

しかし和麻は知らぬと言わんばかりに沙織からそっぽを向くと、彼女を無視した。

「良いんですよ、武部さん。百式さんとはまだあまりお話出来てないので」

怒りを露わにする沙織だったが、華が優しく笑みを浮かべる。

しかし沙織は納得がいかないと頬を膨らませた。

「でも〜！ せっかく華が話し掛けたのに！」

「良いんです。私は機会があった時にお話が出来れば良いので」

横で筒抜けの話を聞いて、和麻は小さく溜息を吐いた。

五十鈴華。礼儀正しい、お淑やかな雰囲気少女だ。

和麻は、華のことが苦手だった。と言うよりも彼女を見ていると、不思議と自分の知っている女の顔が蘇る。

金髪で淑女という言葉がピッタリな女。和麻にとって、今はその女の顔は思い出さなくなかった。

疎遠になった友人だった少女。今は何をしているかも知らない。

知りたいとも、思わない。それは彼女への自責の念からか、それとも……彼女が所属する学校への抵抗感か、和麻にはわからなかった。

「ダーズリン——あいつ、今は何をやってんだか」

ぽつりと、和麻がその女の名を呟いた。

昔、和麻の中学生の頃からの友人だった。

戦車道。女の嗜みと言われる武芸のひとつ。それを通じて、和麻はある少女と出会った。

ひよんなことから試合をして、そこから親しくなった気がする。

自分よりひとつ歳上の女。和麻より先に高校へ入学し、自分が遅れて彼女の学校へ特別入学した。

その頃、彼女はその学校で伝統である「紅茶」の名を冠していた。彼女の所属する学校では、戦車道で実力のある生徒には「紅茶」の名前を与えられる。

彼女の場合、それは「ダージリン」だった。簡単に言うとニツクネームみたいなモノらしい。

当時、彼女と同じ学校にいた和麻は周りに習うように彼女のことをダージリンと呼んでいた。

本人もその名前を気に入っているようだったので、それ以来、和麻はその名を呼ぶようにしている。

会わなくなってから半年。意外と月日の経つのは早いとしみじみと和麻は思った。

『和麻さん、今日はどんな走りを見せてくれるの?』

ダージリンの顔が脳裏に浮かぶ。その瞬間——和麻の右目に痛みが走った。

「——ツク?」

思わず呻き声をあげた和麻。右手でそつと眼帯の上から目を押さえる。

久しぶりの痛みだった。半年前に見えなくなった右目、たまにダージリンの学校のことを思い出すと決まって痛みが走る。

半年前に起きた一件以来、和麻は顔の右側に大きな傷を作った。

裂傷、火傷などからの外傷から右目を失明し、痕が残ると言われた自分の顔の右側を、和麻は大きな眼帯で隠している。

自分で見ないように、それが一番の理由だった。

傷を見たら、思い出してしまう。それが一番の和麻にとっての苦痛だったからだ。

思い出されるのは——向けられる大きな筒。弾ける炸裂音。揺れる視界。そして右顔の刺痛。

朦朧とする意識。自分の前に身を挺して守ろうと塞がる人影。騒めく生徒達——血だらけの右目を押さえる自分自身。

じんわりと、自分の右顔に痛みが宿り出したことを理解する。  
——不味い。和麻がそう思った瞬間、沙織が彼に声を掛けた。

「百式君？ 顔色悪いけど大丈夫？」

「——ああ、大丈夫だ。なんでもない」

また右顔に鈍痛が響こうとした瞬間——和麻はハッと意識を取り戻した。

先程まで感じていた微かな痛みの前兆。それが消え失せたことに、和麻はホッと安堵した。

やはり、思い出さないようにしなくてはならない。何度となく実感するが、いかんせん思い出してしまうのが女々しいと和麻には思えた。

「右目、痛むのですか？」

心配そうに華が和麻を見つめる。沙織も同じような目を彼に向けていた。

「ちよつと昔のことを思い出してな、悪かった。気にしないでくれ」

華と沙織に和麻が素直に謝罪する。

それはこれ以上、詳しく聞いてくるなという和麻なりの表れだった。

それをなんとなく理解した二人は顔を見合わせると、和麻にわからないように頷き合っていた。

「なら良いんですが……何かあったら言ってください」

「そうだよ、私達クラスメイトじゃん！」

そして二人が優しく心配してくれることに、和麻は「——すまない」

と返した。

二人が知る限り、珍しい表情だった。俯きながら、右の眼帯に手を添えて、和麻はどこか悲しげな表情を見せる。

そんな和麻が普段見せない表情に、二人は思わず話を変えることを選んだ。

「あー！　そう言えば今日転校生来るらしいよー！」

沙織が今思い出したと言わんばかりに声を大きくする。

それを聞いた華は興味津々と沙織の話に耳を傾けた。

「へえ、そうなんですか？」

「うん！　なんか遠くの学校から来るらしいよ！」

「どんな人でしょうか？」

「面白い人だと良いなあ〜」

沙織と華の会話を耳にしながら、和麻は二人に心の中で感謝する。

二人に気を使わせたのは、和麻には理解出来た。

だから樂しげに話す二人に口を挟むことをせず、和麻はただ黙って二人の隣で話を聞く。

転校生。その言葉に、和麻は妙な不安が襲った。

昔、自分が戦車に乗っていた頃に感じていた予感。

それは、何か自分に良くないことが起きる前触れとも言える感覚だった。

この感覚を、和麻は信じている。だからこそ、久しぶりに感じたこの感覚が一体なんなのか、理解に戸惑っていた。

「ねえ！　百式君はどんな子が来ると思うっ？」

ふと、沙織にそう問われる。

和麻が少し悩む素振りを見せ、そして一言だけ——彼は簡潔に答え

た。

「俺と関係ない人」

沙織がキョトンと惚ける。華も同じような反応だった。

しかし和麻は自分の言葉に念を込めて、告げた。

この自分に襲う感覚が外れてほしい。そう願って。

——他人の悲劇は、常にうんざりするほど月並みである

和麻の頭にそんな言葉が浮かぶ。紅茶を飲みながら、優雅に言葉を綴る少女を思い出しながら。

大体、彼女の言葉は当たる。それが和麻の不本意な確信だった。

### 3. 男が戦車に乗ると……？

西住みほ。それが今日、和麻のいるクラスに転入して来た生徒の名前だった。

ショートヘアの朗らかな印象を受ける可愛い顔立ちの少女。真面目そうな印象を受けるも、どこか気が抜けているような雰囲気を感じる女の子だった。

西住。その苗字は戦車道を嗜む者なら知らぬ者はほとんどいない。それぐらいに“西住”という苗字は有名であり、そして生まれた者に振りかかる呪いでもあった。

「はっ、初めましてっ！ 今日から皆さんと一緒に学ばせてもらうことになりました！ 西住みほと言いますっ！ わからないことが多いと思いますが……これからよろしくお願いしますっ！」

教室に入ってきて来て、たどたどしく自己紹介するみほに和麻は思わず目を大きくした。

大洗女子学園は、戦車道をしていない。なのにどうして戦車道で名家の西住家の次女がこんな学校に転校して来たのかと、和麻は困惑した。

西住みほと百式和麻は、互いに面識がある。

親同士がライバルという関係で、それ以外にも友人としての付き合いがある西住家と百式家。故に、子供であるみほと和麻は会う機会があった。

勿論、戦車道を共に嗜んだこともある。最初は西住家の姉妹に不審がられた和麻だったが、時間の経過と共にそれはなくなり、良きライバルとして友好を深めた。

しかし、和麻にとってはそのことは“過去”の話であり、今はもう戦車に乗ることを辞め、戦車道をしていない。

だからこそ、和麻は戦車道をしていない大洗女子学園に編入してきたのだ。

なのに何故、今この学校に西住みほがいるのだと、和麻は理解に苦しんだ。

「はい！ それじゃあ西住さんは廊下側の空いてる席に座って、ホームルームを始めるわよ！」

クラスで自己紹介が終わったみほを拍手で迎える。しかし和麻は拍手をしない。ただ黙って、みほがクラスに歓迎されている様を眺めているだけだった。

緊張した面持ちでみほが自分の席へと向かう。その際、みほがクラスを見渡すと——彼女が和麻の顔を見つけた。

みほの目が大きく開かれる。そして彼女はポツリと、自分にしか聞こえない程度の声量で呟いた。

「……かずくん？」

みほがそう呟いて、自分の空いている席へ座る。そしてホームルームが始まるなか、彼女はチラリと何度も和麻を見ていた。

そのことに気づかない和麻ではなかった。みほから見られている。それをすぐに理解すると、彼は気にしないように彼女からそっぽを向いていた。

「やっぱり……かずくん、だよね？」

新しい自分の席に座ったみほが和麻を一瞥して、呟いた。確かに、あの顔に自分は見覚えがあると。

西住みほは懐かしい顔を見つけた。そのことに彼女自身、驚きを隠せなかった。

顔の右側に大きな眼帯。それはみほが知る和麻が過去に付けていなかったモノだった。

何故、和麻が眼帯を付けているか。それにみほは覚えがあった。

みほはそれを母から聞いた。その内容を聞いた瞬間、驚きのあまり言葉を失ったことを、彼女は今でも覚えている。

みほの姉——まほも、同じような反応をしていた。そしてまほは一言、ありえないと言ったのがみほには印象的だった。

確か、百式和麻は聖グロリアーナ女学院へ特別入学をしていた。

戦車道を嗜む男子。そして百式家の長男。百式和麻のその名は、みほの知る限り戦車道界では有名な名前だった。

男は戦車道をしない。それは過去に男は戦車に乗ると否応なく批判されていたからだだった。

戦車に乗る卑怯者。武士道精神を侮辱する日本の恥などと、男が戦車に乗るということ自体が悪だという風潮が過去にあった。

当然ながら百式和麻にも、その言葉が降りかかった。しかし和麻は——それを覆した男であった。

類稀なる操縦手としての才能。そして戦況を操作する隊長としての才能。この二つが百式和麻の名を有名にした。

戦車道の公式戦に、男子は出場出来ない。

だが練習試合、または親善試合なら男子は特例で出場出来る。

それを上手く利用して、過去に和麻は戦車道の試合に出場していた。

周りに批判されても、試合が始まるとそれは消え失せ、すぐに歓声になる。

それがみほが思う和麻の凄いところであり、尊敬しているところであった。

戦車の操作が苦手なみほは、和麻の操縦に何度も憧れを抱いたこともある。

そんなことが幾度もあり、和麻の名前が戦車道界で有名になった時——ひとつの疑問が生まれた。

百式和麻の才能を、このまま腐らせて良いのか？

明らかに周りと比べて特出した才能を生まれ持った百式和麻を、戦車道から離れさせて良いのかと。

答えは「否」だった。



そして一番に名乗りを上げたのが——聖グロリアーナ女学院だった。

百式和麻を戦車道特待生として、特別入学させる。それが聖グロリアーナ女学院の出した答えだった。

戦車道の公式試合に出れない。ならば、その才を他の人間に教えれば良いと考えたのだ。

それをキツカケに有名校が百式和麻へ特別入学のアプローチを掛けたのだが……結局のところ、彼は一番最初に名乗り出た聖グロリアーナ女学院への入学を受け入れたのだった。

そして百式和麻を獲得した聖グロリアーナ女学院が半年後、大きな事件を起こす。

それが西住みほが聞いた。戦車道で最も起きてはならない事件だったからだ。

その事件以降、百式和麻は聖グロリアーナ女学院から姿を消したと聞いていた。

みほは母に今はどこにいるのかと聞いたが、当時のみほの母は「わからない」と簡潔に答えた。

聖グロリアーナ女学院在籍以降の百式和麻の行方が分からなくなったと、みほの母がそう語っていた。

だからみほ自身、和麻と会うのは一年振りだった。

そして久しぶりに見た和麻の顔を見て、みほは一瞬——誰か分からなかった。

たったの一年だけ会わないだけでこんなにも雰囲気が変わるものかと、みほは思わずにはいられなかった。

みほの知る和麻の印象は、元気で明るい真っ直ぐな男の子だった。いつも明るく、悪いと思うことに真っ直ぐに待ち向かう男の子。そ

んな彼が、こんなにも変わっていることがみほには困惑しかなかったからだ。

冷めた顔。どこかつまらなそうに虚空を見つめる横顔は、当時を知るみほには想像できなかった。

これが過去の和麻と同一人物と言われても、みほには信じられる自

信はなかった。

しかし、顔を見たらみほには分かった。この男の子は百式和麻だと。

どんなに雰囲気が変わっても、顔を見れば分かる。少しだけ不安だったが、見れば見るほど、過去の自分が知る和麻だということが。おそらくは、和麻の顔の右側の眼帯はその事件で受けた怪我だろうとみほは推察する。

みほ自身、とある理由から元いた黒森峰女学園を去り、この大洗女子学園に転入してきた。

ある意味で言えば、和麻も自分と同じような理由でこの学校にいるのかもしれないと、みほは考える。

しかしこの重さを比べるなら、それは和麻の方が何倍も重いとみほはハッキリと言えた。もし自分が和麻の立場なら、二度と戦車道をしないと公言できるからだ。

「かずくん、もう戦車道はしてないのかな……？」

和麻の横顔を見ながら、みほが呟く。

自分も、戦車道を辞めた。自分の戦車道が分からなくなったから。自分の信じていたモノが、分からなくなった。そして自分は逃げた。

みほはずっと胸に何か刺さるような感覚に囚われている。本当なら、戦車に乗りたくない。だから今、こうして戦車道がない大洗女子学園への転入をしたのだから。

願わくならば、このまま戦車道に関わらない人生をと思いながら。しかし、みほはふと感じた。

何か不思議な感覚。それは良い意味ではなく、悪い意味で。何か自分にあまり良くないことが起きるような気がする。

それは戦車に隊長として乗っていた時から時折感じる感覚だった。

この感覚は、過去に外れたことはほとんどない。

だから、みほは思う。なにか良くないことが起きるかもと。

また一度、みほは和麻の方を見る。

そして和麻の顔を見たみほは、その瞬間——ある疑問が生まれた。

「あれ……なんで女子校に、男の子がいるの？」

一番に気付かなければいけない疑問に、最後に気がつくみほ。

いつもどこか抜けている。それが和麻がみほに送る言葉だった。

#### 4. 戦車道の対価

「百式ちゃん、戦車道取ってくんない？」

目の前のツイントールの小さな少女が面倒そうに干し芋を口に運びながら、和麻に気だるく告げた。

「……あんたは、そんなことを言うためにわざわざ俺をここに無理矢理連れてきたのか？」

ソファに座りながら、和麻は部屋の奥で干し芋を食べる少女——角谷杏へ目を細めた。

昼に自分と西住みほに生徒会室への呼び出しがあったことを和麻は知っている。

しかし当然ながら面倒だと感じた和麻は呼び出しに応じなかった。そして放課後になり、帰りのホームルームに出席して帰ろうとしたところで生徒会に捕まってしまったわけだ。

突如帰り際に現れたメガネを掛けた気が強そうな女に、和麻は半ば強引に生徒会室に連行された。

そして今は生徒会室で自分と向き合うように座っている杏と二人きりにさせられている。

そのことに今だ不服だった和麻が目の中の少女に眉を寄せる。しかし杏は我関せずと飄々<sup>ひょうひょう</sup>としていた。

「そそ、だから今学期から履修する選択科目で戦車道を取って。あ、これ命令だから」

そして杏が干し芋を和麻に向けて口角を上げる。

そんな杏の態度に、和麻は少しだけ目を吊り上げた。

「取らない。俺は戦車道なんかする気はない」

そして杏へ和麻が即答する。もう話すことはないと言わないばかりの即答に、杏は特に気にしない素振りで干し芋を口へ運んだ。

「ふくん、そう」

干し芋を頬張りながら、杏が興味なさげに返事をする。

いちいち癩に触る女だ。和麻は素直にそう思った。

そして和麻はもう話はないと思い、彼はソファから席を立とうとした。

しかし杏は和麻が席を立とうとした瞬間、彼女は相変わらずの飄々とした態度で言った。

「百式ちゃん、そんなに戦車道取りたくない？」

「だから俺は——」

この女は、諦めという言葉を知らないのだろうか？

和麻は嫌気が差しながらも杏の言葉を否定しようとした。

だが和麻の声を、杏は無視して話を続けた。

「そう言えばさ、その目の怪我。聖グロリアーナで出来たんでしょ？」

「……だからなんだ？」

唐突な杏の言葉に、和麻は顔を顰めた。

急に話を変えた杏に、和麻は困惑する。しかもその内容が自分の過去のことだと言うことに、彼は少しばかり不愉快な気持ちになった。

「私は知ってるよおくだから百式ちゃんにこうやって声を掛けたんだから」

眉を寄せる和麻に、杏はにひひと笑みを浮かべた。

「確か去年だっけ？ 百式ちゃんが『まだ』戦車道をしていた頃、聖グロリアーナで起きた事件？」

杏が嬉々として語る。和麻はただ黙って彼女の話聞いていた。

「いやあ、話は聞いたけど怖いもんだねえ。まさか戦車の——」  
「おい、生徒会長……言つとくが、その先を言ったら殴るぞ？」

そして杏が自分の過去の内容を口にしようとしたところで、和麻は彼女の言葉を遮った。

目を鋭くし、和麻が杏を睨む。今にも殴りかかる勢いで、彼が表情に怒りを見せる。

角谷杏は三年生であるにも拘らず、二年である百式和麻は彼女に敬語を使わない。

と言うより、和麻は人と関わろうとしない故か、教師等以外の生徒達には敬語を一切使わなかった。

「おお、怖い怖い。でもねえ、こっちも引けないのよ」

しかし、杏は和麻の態度に怖がる素振りを見せることはなかった。

杏が目を細める。そこには彼女の先程までの飄々さはなく、真剣な目が和麻を見つめた。

「例え、百式ちゃんが戦車道をどう思おうとこっちにも引けない理由があんの。だから戦車道の選択科目取ってくれないと困んの」

芯のある杏の言葉。自分の言葉に臆することのない目の前の少女に、和麻は不審な目を向けた。

「……どうして、そこまでして俺に戦車道の選択科目を取らせようとする？」

悪ふざけで自分にこの話を持ってきているわけではない。それを僅かに理解すると、和麻は杏の行動が妙に引つかかった。

杏がソファに背を預ける。足を雑に組み、口に干し芋を啜えた。

「こっちの事情があんのよ」

「答えになってない。それに俺は授業を受けなくても良い扱いになってる。だから選択科目を取る必要はない」

和麻は大洗女子学園で授業免除になっている。と言うことは、自分に選択科目の授業を受ける必要はなかった。

「でも受けれる。そうでしょ？」

しかし杏は言った。例えば授業を受ける必要がなくても、受けられないわけではない。

「それはそうだが、取る必要がないものを取る理由はない。あんた達が何をしようと知らないが……俺は男である以上、女の武芸である戦車道の公式戦には出場出来ない。それを知らないお前達じゃないだろう？」

杏の行動の真意が読み取れない和麻が腕を組んで答える。

戦車道の公式戦に男は参加出来ない。これは戦車道のルールに記載されている内容だった。

それを知らない杏ではないだろう。和麻がそれを言うと、杏は「もちろん」と頷いた。

「知ってるよ。でもね、それを考慮しても百式ちゃんの腕は十分に

買う価値があるから」

「はっ、俺の何を知ってるんだか」

自信満々で話す杏に、和麻が思わず失笑する。

どうせ自分のことは人伝に聞いた話だろう。和麻のことをそのまま知らない杏に一体なにがわかるというのか？

しかしながら杏は戯けるように肩を竦めた。

「腕を見込んで頼んでるのよ、こちとら。百式ちゃん、あんたの技術を仕込んで欲しいのよ」

「……誰にだよ」

思わず、和麻がそう返した。

杏が楽しそうに笑みを浮かべる。そして彼女はハッキリと言った。

「これから始める戦車道の生徒達に」

「さつきから気になったが……大洗が戦車道を？ どうしてまた急にそんなことをする？」

和麻が杏の行動の理由を問う。

今まで大洗女子学園は戦車道をしていない。過去にしていたという話はあるかもしれないが、和麻の知る限り、ここ数年は確実にこの学校は戦車道をしていないのはハッキリと分かっていた。

だからこそ、どうして今まで戦車道をしていなかった大洗女子学園が今更ながら急に戦車道を始めようとしているのか、和麻には正直理解に苦しんだ。

「……こっちの事情があるわけ」

しかし杏は言葉を濁した。

話にならない。和麻はそう思うと、深く溜息を吐き出した。



そして大事な話を濁す杏に少なからずの苛立ちを感じながら、和麻はわざとらしく鼻を鳴らした。

「ふん……あんたが言わないなら俺も話には乗らない」

「そこをなんとかしてくれないかねえ」

参ったと言いたげに、杏が苦笑いする。

和麻としても、どうしてわざわざ杏が自分にこの話をしているのかという明確な答えを貰ってない以上、彼も不本意である戦車道をする気は毛頭なかった。

「ならない。もうこの話は良いだろう？ 決着はついた。俺は戦車に乗らないし、乗るつもりもない」

戦車道をしたくないから、戦車道をしていない学校に転校してきたのだ。もとより、和麻にはどんなことを言われようとも戦車に乗るつもりはなかった。

杏が「ん」と唸りながら、頭を雑に掻く。そして杏が深い溜息を吐くと、彼女は和麻に呆れた目を向けていた。

「ねえ、百式ちゃん。百式ちゃんはさ……本当はまだ戦車道嫌いじゃないんでしょ？」

「……」

嫌いだ、と即答するはずだった。しかし思ってた言葉が出なかったことに、和麻は自身に困惑した。

口を小さく開き、そして言葉に詰まる和麻を見て、杏は今まで持っていた干し芋の入っていた袋を机に置くと、彼女は真っ直ぐに和麻を見つめていた。

「……あんなことがあったから戦車に乗ることが怖い。違う？」

まるで親が子供に言い聞かせるような話し方で、杏が和麻へ語る。

対して、和麻が言葉を出すことを戸惑った。自分の答えがハッキリと出せなかった自分に自分自身で困り、そして彼は沈黙という形で口を閉じた。

そんな和麻の反応。杏には、それ自体が答えだと言えた。

「良い機会だから言っちゃえば？　ここには私しか居ない。私はそのことをある程度は知ってるから溜め込んでるもの吐き出せば、今の気持ちは案外楽になるかもよ？」

「……………」

杏の言葉を聞いて、和麻がゆっくりと目を閉じた。

下唇を少しだけ噛み、和麻は額に皺を寄せる。

そしてしばしの間、和麻が悩むような素振りを見せると——彼は静かに口を開いた。

「——違うよ」

「ほお？　怖くないと？」

ようやく和麻が口を開いたことに、杏が興味津々に彼の話に耳を傾けた。

杏の言葉に、和麻が首を横に振る。そして彼はポツリと、語り出した。

「俺は、戦車に乗るのが怖い訳じゃない……勿論、あの時は怖かったさ。だけど俺が一番怖かったのは……人間だったんだよ」

語り出した和麻に、杏はただ黙って話を聞くことにした。

杏は和麻の過去の大雑把な概要を知っている。しかしそれには限度があり、実際に当人から話を聞けるなら杏は素直に聞くことを選んだ。

「ただ男が戦車に乗っている。それだけで俺は『あんな目』に遭った。俺にとって戦車は自分の分身と言えるくらいには好きだったよ」話を切り出した和麻が、自分の顔にある眼帯に手を添える。

そして和麻が眼帯をゆつくりと撫でると、彼は杏に今まで見せたことのない悲しげな表情を見せた。

「戦車道。それは女の嗜み、それが常識だ。だが男がやってはいけない理由になんてならない」  
「そだねー」

杏が適当な相槌を打つ。話は聞いている、そういう意図で彼女は淡白な相槌だけを返した。

そのことに特に気にすることもない和麻は、そのまま淡々と胸の内を語る。

「だけど俺がいた頃の聖グロの当時三年の一部の女達は、それを許してくれなかったらしい。たったそれだけの理由で……あの女達が『生身の人間に向かって砲撃してくる』とは思わなかった」

失笑する和麻に、杏は表情を変えない。

しかしながら和麻の顔は、杏でさえも見るのに耐えがたいモノだった。

悲しげで、そして泣きそうな表情。和麻のそんな顔を未だかつて見たことがなかった杏には、正直に言うとは意外としか思えなかった。

俯きながら、和麻が目を瞑る。昔のことを思い出しながら、そして自分の溜め込んでいたモノを吐き出すように。

「砲撃を受けた……と言っても直撃した訳じゃない。俺のいた場所の近くで着弾して、俺はその爆風と熱に体を晒した。

その砲撃によって吹き飛ばされた俺は、当然大怪我を負った。右目

失明、顔の右半分に跡が残る大火傷、全身に火傷と打撲と裂傷、合わせて運良く全治三ヶ月。それが俺が今まで戦車道をやってきた代償だったらしい」

和麻が自分の眼帯を右手で覆う。これがその結果だと。

眼帯の下には、残った火傷の跡。そして失明した右目。それは今後決して消えることのない自分が戦車道をしてきたことに対する対価だった。

「戦車道をして色々言われたことは山ほどあった。だけど……その時の俺は流石に『折れた』よ。あんなに人の悪意を受けて、俺は戦車に乗ることが許されなんだと思っただけから——男が戦車に乗る。それだけで悪なんだってわかったから」

そして和麻は、笑った。乾いた笑い、それは覇気のない、弱々しい笑いだった。

一頻り笑った和麻が、杏を見る。一体、どんな顔をしてるか。しかし杏は先程から一切表情を変えず、机に置いていた干し芋をいつの間にか食べていた。

面倒そうにソファの上で胡座かきながら、杏は今まで話していた和麻に一言だけ返した。

「そ、だから？」

流石の和麻も、言葉に詰まった。

戦車道をしたくない理由を話した。もう戦車に乗ることも嫌だと言ったのに、杏は「それがどうした？」とハッキリと言った。

「別に百式ちゃんが聖グロで色々あったのは知ってるよ。でもね、ウチの学校は別じゃーん？」

「……変わらないよ」

女であることは変わらない。戦車道に関わる女は一部を除けば同じ、それが和麻の出した答えだった。

「ウチの生徒にそんな馬鹿みたいな人はいない」

「どうして断言出来る？」

しかし杏は首を横に振った。

あまりにも断言した杏の話し方に、和麻は呆れた表情を見せた。

「これでも生徒会長としてずっと見守ってきてるからねー。学校のことなら、なんでも知ってるから」

ずっと見てきたから、それだけで杏は断言したらしい。その答えがあまりにも稚拙で、そして真っ直ぐ過ぎた。

「馬鹿馬鹿しい」

和麻が呆れを通り越して、失笑してしまう。

どうあれ、自分の答えが変わることはない。それを和麻は納得している。

どの道、大洗女子学園が戦車道を始めて『仮』に和麻が参加したところで、自分への批判が来ることは容易に想像出来た。

「馬鹿だと言われようとも別に良いよ。あんまりウチの学校を舐めない方が良いよ〜?」

そして飄々と言った杏に、和麻は今度こそ話は終わりだと席を立つた。

席を立った和麻が杏を一瞥する。そこには、ただ自分を真っ直ぐに見つめる少女の姿があった。

和麻が小さな溜息を漏らす。そして彼は杏に背を向け、生徒会室から出て行くこうとする。

そんな和麻の後ろ姿を見ながら、杏は最後に一言だけ、彼に言い放った。

「あ、そうだ。この話ね、西住ちゃんにもしたから。百式ちゃんは、あの西住ちゃんとなら戦車道、出来る？」

後ろから聞こえた声に、和麻は立ち止まる。自分と西住みほが戦車道をする。そんな光景が本当にあるのかと。

そうして和麻の中に僅かにある考えが浮かんだ。

——あのみほとなら、自分も、あるいは……

しかし和麻はすぐに頭を小さく振った。余計なことを考えるな、そう自分に言い聞かせて。

「……勝手にやる話にするな」

和麻が生徒会室の扉を開ける。

和麻は生徒会室から出て行く前に、少しばかり悩むように立ち止まると……彼は出て行く瞬間に、杏にこう言い残した。

「——ありがとう。言ったら少しは楽になった気がする。感謝くらいはしてやるよ、生徒会長」

生徒会室から出て行く和麻を、杏は引き止めることなく見送る。

そして杏が袋に入っていた最後の干し芋を口に運ぶと、彼女は頬を僅かに緩めた。

「素直じゃないねえ……」

ソファに背を預け、杏は考える。

今後の自分達のことを。今後の大洗女子学園のことを。

しかし大洗女子学園が戦車道を始めても、詰まるところ彼と西住みほの協力が不可欠なのは事実なのは杏は嫌というほど、理解していた。

「さて、百式ちゃんはどう出るかねえ？」

虚空を見つめて、杏は一人そうぼやいた。

## PANZER. 2 戦車道、始めます

### 1. 懐かしい夢

今日は天気が良い。俺は空を見上げながら、ふと思った。

校舎の二階。外にあるテラス席で、俺はほんやりと空を眺める。

絶好の運動日。ともい、絶好の戦車道日和とも言える。こんな日は整った平地で戦車を乗り回してみたいと思うあたり……我ながら戦車が好きなんだなあと思わざるを得ない。

「今日の紅茶はアップルティーを淹れてみました。和麻様、良ければどうぞ」

そんな俺に、金髪のオールバックの女がそう言っただけで紅茶の入ったカップを差し出した。

そう言えば、俺が紅茶を飲むようになってどれくらい経つだろうか？

高校に入学して一ヶ月ばかり。その間に過ごしてわかったことだが、俺のいる学校はよく紅茶を嗜むらしい。

流石は英国をモチーフにした学校だ。俺はそう思いながら、差し出された紅茶を受け取った。

「アッサムの淹れた紅茶は中々よ。和麻さんも飲んでみなさいな」

そんなに俺に、隣に座る金髪の女——ダーズリンと呼ばれる女が微笑む。

ダーズリンがアッサムさんの淹れた紅茶を優雅に飲む姿は、いつ見ても絵になっているのが……無性にどこか腹立たしい。

ちなみに彼女も国籍は立派な日本人である。ダーズリンと呼ばれる少女の本名は別にあるのだが、この学校——聖グロリアーナ女学院は紅茶にちなんだ名前を付けられることがあるらしい。



戦車道。この学校で行われている戦車道で、優秀な生徒にのみ「紅茶の名が与えられる」と聞いたことがある。

それはこの学校では名誉であり、戦車道を嗜む者がこの学校で目指す目標のひとつと俺は聞いた。

だからこの学校では、彼女を皆は敬愛の意を込めてダーズリンと呼んでいる。

俺も、それに習うように彼女のことをダーズリンと呼ぶことにしていた。

たまに本名で呼ぶと、少し恥ずかしそうに拗ねるダーズリンが面白いので、俺はたまに彼女のことを本名で呼んで遊んだりしたこともしばしば。

聖グロリアーナ女学院。それが俺が高校入学に選んだ学校だ。

戦車道の特待生として、何故か俺は女子校に来てしまった。その理由としては、ひとつしかない。

俺に、男の俺に戦車道をさせてくれる。それだけでこの学校の女子校という大きな問題を俺は容易に無視出来た。

男は戦車道は出来ない。それは女の嗜みだというのもあるが、一番は学校等で男が戦車道をすることに賛同されないということだ。

だから学校で男の戦車道の活動は非常に難しい。故に、戦車に興味がある男子生徒はほとんどが「整備士」としての道しか選べないのだ。

戦車道戦術指南者などの専門家もあるのだが、それはほとんどが女性だ。男性でその手の職業に就いている人間はほぼ居ない。

女性が乗る乗り物を、男性が教える。それ自体が世間では批判の対象になる。だから男性は必然的に整備という部門でしか活動出来ないのだった。

そんな俺も例外ではなく、整備士としての道を選んでいた。

しかし中学生の頃の高校入学を決める時期に、ある時聖グロリアーナ女学院からこんな手紙が来たのだ。

『百式和麻様へ。この度、我が校の聖グロリアーナ女学院は、貴殿の戦車道での今までのご活躍を拝見しておりました。つきましては、我が

校「聖グロリアーナ女学院」は貴殿を「戦車道特別優待生」として、そして我が校で初の男子生徒として異例の特例入学をご依頼させて頂きたくご連絡させて頂きました』

こんな感じの手紙だった。内容はもつと細かく書いてあったのだが今は割愛する。

そんな手紙を受け取った俺と家族は長い話し合いの末、今に至る訳だった。

「……うん、美味しい」

アツサムさんから渡されたカップを口に添え、紅茶を飲む。

そして一言。素直に出てきた言葉を、俺は我慢することなく告げた。

紅茶なんて、この学校に来るまでは飲むことなんてほとんどなかった。

どちらかという俺は緑茶などの日本文化の方が親しみがあり、海外文化はあまり親しみがない。

しかしこの学校で過ごしているうちに、少しずつだが毒されているらしい。

俺の紅茶の感想に、ダーズリンとアツサムさんは誇らしそうな笑みを浮かべていた。

「それなら良かったわ。そう言えば……和麻さんも聖グロリアーナに来て、もう一ヶ月かしら？」

優雅に紅茶を飲みながら、ダーズリンがふと思いついたように呟いた。

「そうだな、気づけば早いものだよ」  
「もう一ヶ月、早いものね」

頷く俺に、ダーズリンはしみじみと答えた。

そしてダーズリンが手に持ったカップを口元へ傾けて紅茶を飲むと、嬉しそうに微笑んだ。

「ふふっ……でも、まさか本当に和麻さんが聖グロリアーナの入学依

頼を受けるとは思わなかったわ」

「……俺も思うよ。むしろ聖グロリアーナが俺に戦車道の特待生扱いで入学依頼をしてくるとは思ってたくらいだ」

今はこうして聖グロリアーナ女学院に在籍してる俺だったが、今だに俺がこの学校で戦車道が出来ていることが信じられないことだと思ってる。

学校での授業が終わり、そして放課後は戦車道。授業がない日は朝から戦車道。それは俺が本来、高校生から出来なかったことだ。

なのに聖グロリアーナ女学院は、わざわざ男である俺に学校で戦車道をしないかと声を掛けてくれた。そのことには、本当に感謝しかしていなかった。

「和麻さんの戦車道に対する想い。それを放っておくほど、世の中は非情じゃないってことよ」

誇らしげにダーズリンが語る。それは俺のことを知ってて言ったことなのか、よく分からなかった。

「有難いのか、それでも善意の押し付けなのやら」

「私個人としては……和麻さんと同じ仲間として共に戦車道を出ることを嬉しく思うわよ」

「そうかい……まあ、ありがとうとだけ言っておくよ」

「ふふっ、それで良いわ」

とりあえずは、軽口で返しておく。

そして俺とダーズリンが一通り話を終えると、今まで黙って話を聞いていたアツサムさんが俺に向いた。

「ところで和麻様、この学校での生活は慣れましたか？」

アツサムさんが小首を傾けて俺へ訊いてくる。

俺は少し悩んだ素振りを見せると、苦笑いしながら答えた。

「少しだけ。まだ自分はこの学校では異端だと思うので」

最初から分かっていたことだったが、俺の在籍している聖グロリアーナ女学院には俺しか男子生徒はいない。

それに伴って、本来女子校だった学内に男子生徒がいるということはそのだけで問題になりやすい。

「この学校で唯一の男子生徒ですからね。それも仕方ないでしょう。何か不便な点はありませんか？」

アツサムさんが頷く。そして続けて彼女から問われた内容に、俺は首を横に振って答えた。

「今のところは特にはないですね。一応、ここは女の子しかいない学校なのであまり出歩かないようにはしています。こういう場での自分の存在は問題が起きやすいと自覚していますので」

女の子しかいない学校で男が勝手に歩き回るとするのは、あまり良いことだとは思えない。

なので問題を起ささないようにするには、自宅から外出しなければ良い。

簡単な話だ。だから俺はこの学校では一人で歩き回ることはない。基本的に誰かと一緒に状況でなければ、休日などは用事がない限り出歩かない。

そう言っても、俺はほぼ毎日を戦車道に注いでいるので日用品の買い物程度にしか出歩かないが……

そんな俺の答えを聞いたダージリンが、紅茶を飲みながら少し不満そうに眉を寄せた。

「気にすることはないんじゃないかしら？ この学校は和麻さんに『お願い』をして来てもらったの。だからそんなに小さくなる必要はないわ」

続けてダージリンが「ドンと胸を張りなさいな」と言ってくる。

しかし俺は軽く話すダージリンに苦笑した。

「簡単に言ってくれるな。これでも結構気を使ってるんだけどな」

「あら？ そんなところがあって？」

この一言でダージリンが普段の俺をどう思っているか少しだけわかった気がする。

俺はダージリンの言葉が癩に触ると、溜息交じりに言った。

「男が関わっちゃいけない場所があるだろう？ 着替え時なり、会話とかの女の子だけの空間があるだろう？ あまり関わらないように俺だって気を使う」

俺に改めて言われたことに、ダーズリンとアッサムさんは「ああ……」と納得したような表情を見せた。

しかしダーズリンはそう呟いて不敵な笑みを見せると、俺になに食わぬ顔でこう言った。

「なら和麻さん、これからは私と一緒に到着替えする？」

きつと、俺は今物凄く顔を顰めているに違いない。

礼節とウィットに富んだ会話を楽しみたがるダーズリンは、たまに訳のわからない冗談を言いたがる。

時折、誇らしげに格言を言いたがるのもダーズリンの癖である。

俺は溜息を吐くと紅茶を一口飲み、ダーズリンにジト目を送った。

「俺と性別が一緒だったら考えてやる。出直してこい」

「あら、和麻さんのいけず」

くすりとダーズリンが笑う。俺は彼女のそんな仕草に肩を落としたり。

アッサムさんも不思議と楽しそうに俺とダーズリンの会話を聞いて微笑んでいる。少しだけ不服な気持ちになった。

「……とまあ冗談はさて置いて。それで和麻さん、この学校のみみんなとは上手くやってるかしら？」

一頻り笑ったダーズリンがそう訊いてきた。

急に話を変えられたことにダーズリンに遊ばれていたことを再確認して、俺は眉を寄せる。

そして俺はその質問に、少し遅れて返した。

「……仲良くやってるつもりだよ。隊長のアルグレイさんにも良くしてもらってる。同じ歳のメンバーとも上手くやれてると思いたくない。今現在は、俺は聖グロリアーナ女学院の戦車道メンバーと不仲ではない。友好かと言われるれば正直なところ悩ましいが……とりあえずは普通に接しているはずだ。」

俺の入学当初、聖グロリアーナの戦車道メンバーは奇妙な目で見られていた。

俺の名前を知っている生徒が割と多くいたのが意外だったが……そんな奇妙な視線も、数日経てば慣れたのだろう。俺の存在を受け

入れた戦車道メンバーが何気なく話しかけて来るようになったのは、ほんの少しだけ安心したのが本音であった。

「私の聞く限りだと、みんな和麻さんのことは慕っているみたいだったわ。私も正直なところ、ほんの少しだけ心配していたわ」

ダーズリンが安堵の表情を見せる。

なんだかんだと俺のことを心配してくれていたらしい。こういう時だけ歳上な部分を見せてくるあたり、ダーズリンも人が悪い。

しかし俺はそんなダーズリンに少しだけ真面目な表情を見せると、最近から思うようになったことを告げた。

「でも……おそらく、上級生の戦車道メンバーに自分をよく思っていない人達がいる。そんな気がする」

俺がカップを傾けて紅茶を飲む。気がつく、俺の持っていたカップの紅茶は無くなっていった。

それに気がついたアツサムさんが、わざわざカップに新しい紅茶を注ぐ。

アツサムさんにお礼を告げて、俺はダーズリンに続けて言った。

「最近……妙な視線を感じるんだ。昔、戦車道を始めた頃に感じていた嫌な視線だった。多分……いや、間違いなく俺のことを邪魔だと思ってる人がこの学校にいる」

俺の言葉に、ダーズリンが目を大きくする。そして彼女は首を横に振った。

「和麻さん、それは今のところないと思うわよ。それだったらもう私と和麻さんの耳に入ってもおかしくないから」

確かに表立ってはいない。むしろ次期聖グロリアーナ戦車道隊長候補であるダーズリンの耳にその話が来ていないのなら、気のせいだと言えるかもしれないだろう。

しかし俺は、首を横に振った。

「今は、な。ダーズリンも知ってるだろ。俺が戦車道をやってて今までどう言われ続けてたのかったのは」

「それは……」

ダーズリンが言い淀む。それはきつと昔の俺のことを知っている

からだろう。

戦車に乗る卑怯者。女の武芸を穢す日本の恥。そんな言葉を昔よく言われていた。

今ではほとんど聞かなくなったが、少なくとも俺をそう思っている人間はいる。

もとより分かっている。しかしそれでも、俺は戦車道をしたい。だから俺がこの学校にいるのだ。

「男が戦車道なんて、邪魔者扱いなのは知ってるさ。だから聖グロが俺にこの話を持ってきたのは……本当に意外だったんだよ」

しみじみと俺が告げる。そして紅茶を一口飲むと、俺は続けて話をした。

「今だから言える話だが、俺がこの学校に来ることを決めた理由のひとつも……ダーズリンが居たからだよ」

悲しげだったダーズリンが俺の方を向くなり「えっ？」と目を大きくした。

きよとんとした表情を見せたのもつかの間、ダーズリンは何故か頬を少しだけ赤らめると、カタカタと手に持つカップを震わせながら紅茶を一口飲んだ。

「……か、和麻さん。そ、それはどういう意味かしら？」

紅茶を飲んで一拍置いてダーズリンが俺に問う。

なんでそんなにたどたどしいか疑問だったが、俺は少しだけ引き攣った笑みを見せて答えた。

「知らない人が居ないより、居た方が良いだろう？ ただでさえ中学生の頃からの長い付き合いなんだ。それに戦車道仲間、知らない学校に行くより断然そっちの方が良いに決まってる」

実は言う俺の特別入学の依頼は聖グロリアーナ女学院以外にも来ていた。

アンツイオ、継続、知波単などの学校からも来ていた入学依頼の中から、俺は聖グロリアーナを選んだのだ。

理由としては、俺が昔からよく乗っていたクルセイダー巡行戦車があること。もうひとつは、その学校に知り合いの女の子が在籍してい

たことだった。

と言っても、アンツイオ高校にも俺に知り合いは居たりする。だがイタリアをモチーフにしたあの学校の戦車は俺の肌に合わなかった。CV33とかは嫌いではないが、正直ずつと乗りたい戦車ではない。

だから俺はダージリンが居て、クルセイダー巡行戦車がある聖グロリアーナ女学院を選んだ訳である。

「そ、そう。和麻さんは私がいるからこの学校に来てくれたのね……わ、私が居るから……私が……」

俺の答えにダージリンが頷く。そして何度も同じことを呟きながら、カップを口に添えていた。

そう言えば、ダージリンのカップの紅茶はもうほとんど無かった気がするのだが……どうして彼女は空のカップを口に添えているのか？

よく分からないが気にしない方が良いかもしれない。俺はなんとなく、そう思った。

「ふふっ、本当に仲がよろしいのですね。お二人は」

俺とダージリンを交互に見て、アツサムさんが微笑む。

俺は「何がですか？」と訊くが、アツサムさんは「いえ、別に大したことではないですよ」と笑ってはぐらかした。

そんなアツサムさんに俺は小首を傾げる。しかし追求してもこういう時の彼女は決して話さないことを俺はこの学校に来てからの一ヶ月の間で理解していた。

納得いかないと溜息を吐きたくなる俺だったが、俺はアツサムさんにそのことを追求するのをやめると、彼女に良い機会だと思いながら彼女に俺は「ある質問」をすることにした。

「アツサムさん、ちよつと良いですか？」

「どうしました？ 和麻様？」

「良い機会ですから失礼な質問をします。アツサムさん……突然ですが、この学校に入学してきた俺のことをどう思っています？」

こんな話をするには早々ないだろう。たまたま俺の学校での生



活についての話になったことを良いことに、俺はアッサムさんにそう訊いた。

アッサムさんの眉が少しだけ上がった。意表を突かれた表情だと思ふ。

「私ですか？　そうですね……」

俺の質問に、アッサムさんはカップを置く顎に指を添えて何かを考えた。

そして自分の中で考えをまとめたアッサムさんが、ゆっくりと口を開いた。

「……ダージリンの古くからの友人、それだけで和麻様は信頼に値する殿方とお見受けしていました。戦車道のことに関しては、私はあなたに心から尊敬を。操縦のことで数々と勉強させて頂いていますよ？」

随分と高評価だった。いや、どちらかと言うとダージリンが信頼しているから、という理由が強いかもしれない。

「殿方が戦車道とは随分と奇妙なモノと思いましたが、それも最初だけです。ダージリンの言う通り、共に戦車に乗るとすぐに分かりました。私としてはこうして和麻様と戦車道を共に学べることを誇りに思います」

確かアッサムさんは操縦手だった。その点は俺と同じである。

アッサムさんと違う点があるとすれば……俺の場合は、稀に車長をすることはある。だが本来は操縦手がメインで戦車道をしている。

俺の操縦にアッサムさんは学ぶ面があるらしい。誠に恐縮だった。

「特に和麻様が乗るクルセイダーは随一です。ローズヒップが喜ぶ理由もよくわかります」

後半の部分でアッサムさんが笑みを浮かべる。

多分、俺の顔を見て笑っているに違いない。アッサムさんが言った名前を聞いた瞬間、俺の顔が引き攣った。

「ローズ……嫌な名前が出てきた」

思わず、頭痛がしそうで俺が頭を抱える。

ローズヒップ。それは聖グロリアーナ女学院に所属する一年生の

名前だった。

「あら？ 確か和麻さん、ローズヒップに懐かれているのだったかしら？」

先程まで一人で上の空になっていたダージリンが何事もなかったように問いかけてくる。

俺はダージリンに頷くと、深く溜息を吐いて答えた。

「ああ、初めてクルセイダーをこの学校で操縦した時からだ。妙に懐かれて……」

「あの子も生粋のクルセイダー乗りですものね。和麻さんの操縦に魅せられるのもわかるわ」

ダージリンが納得したように頷く。しかし俺は勘弁してくれと言いつ返しにくくなった。

ローズヒップは聖グロリアーナ女学院の中等部からいる生徒だ。つまりは、中等部からダージリンと面識がある生徒である。

高校一年生から紅茶の名を冠するということは、その時点で戦車道に於ける実力は学内では上位に入るということだ。

実のところ、高校一年生で紅茶の名を冠することが出来るのは割と稀らしい。

ローズヒップは昔からのクルセイダー乗り。その点は俺と同じだった。

だから入学当初、俺とローズヒップはダージリンの命により同じ車両のクルセイダーに乗せられ、それがキツカケとなり俺はローズヒップに懐かれることになったわけだった。

普通に友達としての付き合いなら俺も問題はなかった。

しかしローズヒップの場合、その例に含まれない。それが俺のこの学校での頭痛の種であり、どうにも解消出来ない困ったことなのだ。

「頭が痛くなってきた……」

そのことを考え出した途端、急に頭に痛みが走る。

しかしそんなことを知ることもなく、アツサムさんは俺に追い打ちの言葉を告げてしまった。

「確か……お兄様、でしたか？」

「アツサムさん、その呼び方は勘弁してください……俺、ローズヒップと同じ歳ですよ?」

俺がアツサムさんに顔を顰める。

そう、何故かローズヒップは俺を「兄」と慕うようになったのだ。一体、どう湾曲したらそんなことになるのか俺は理解に苦しんだ。

だが当人のローズヒップは直す気がないらしく、一緒にクルセイダーに乗って以来、俺を「兄」と呼び続けている。

「あなたが歳下に好かれるのは前から知っていたけど……ローズヒップは特別ね」

ダージリンがくすくすと笑う。

俺は顔を固くして、苦笑いした。

しかしそんな時、俺たち三人が談話室にいるなか……部屋の外から大きな声が響いた。

「お兄様ああああ!!? どこに居ますのオオオ!!?」

背筋が凍った。比喻ではなく、本当に何か背中から冷たいものが通り抜けたような錯覚を覚えた。

固まる俺に、アツサムさんとダージリンがきよとんとした表情で談話室の入口を見遣る。

そして二人揃って顔を合わせて笑みを浮かべると、

「ほらお兄様、来たわよ?」

「お兄様、妹様が来ましたよ?」

俺に向かって楽しそうに微笑んでいた。

俺は引き攣った笑みを見せながら、二人に毒を吐いた。

「二人とも、本当に良い性格してる」

部屋の外から大きな音を当てる扉が開く音が響く。

おそらく、ローズヒップが手当たり次第に色々な部屋で俺を探しているだろう。

「和麻さん、こんな言葉を知っている? どんな悲しみに出会っても、それでも人生は生きるに値する」

「要するに?」

「諦めなさい」

大きな音を立てて、談話室の扉が開かれる。

扉の向こうには、満面の微笑みを見せる一人の少女。

俺はゆっくりと目を閉じた。

こちらに向かい、全力疾走している音を耳に受けながら、俺は数秒後の起きることを——諦めた。

「おっ兄様——!!?」

「俺を兄と呼ぶなッ!」

とりあえずは引っ付くローズヒップへいつもの罵声を浴びせることにした。

ダージリンとアッサムさんが俺とローズヒップを見てくすくすと笑っている。

そんな二人に、精一杯の苛立ちの視線を送りながら、俺はローズヒップの相手をするのだった。



随分と、懐かしい夢を見た気がする。

内容は思い出せないが、不思議と懐かしいと感じ、そして心が暖まるような錯覚を覚える。

「右目が痛い……聖グロの夢でも見たのか?」

背中に感じる芝生の感触を感じながら、俺は目を覚ました。

つい俺は痛む右目に手を添える。手に感じるのは、眼帯の感触。

たまに目が痛む時、決まって聖グロリアーナの夢を見ていると思う。

あの頃が懐かしく、名残惜しいのか……そう思うから、きっと俺は夢を見ているのだろうか?

俺が頭を左右に振るう。柄でもないことを考えたことに、自身に嫌気が差した。

「……あのせいだろうか」

大洗女子学園の生徒会長との話。おそらくそれが俺を揺さぶっているのだろう。

戦車道をやらないか？

何を企んでいるか知らないが、俺は自分のことを話してしまった。どうして？ と聞かれれば、俺は返事に困った。

多分、名残惜しいのだろう。どれだけやりたくないと言っても、きつと心のどこかで俺は戦車が恋しいと思っているのかもしれない。

「……女々しいな」

自分に毒を吐く。そして俺は腕時計で時間を確認した。

時刻は午後二時過ぎ。まだホームルームまで時間はある。

二度寝しよう……そう思い、俺が腕を枕代わりにして目を閉じようとしたところで何かが俺の近くに寄ってきたのを感じた。

「あ、百式だ」

そう声を掛けられて、俺が思わず顔を向ける。

そして俺は顔を顰めた。

四人組の女。全員が赤と白の体操着姿で、そこに居たからだ。

## 2. 倉庫に眠るのは……？

「やあやあ！ 百式ちゃん！ 来てくれたんだねえ〜」

そんなことを言いながら干し芋を頬張る少女——角谷杏に、俺は据わった目を向けていた。

両腕を赤と白の運動着を着た女二人に押さえ付けられ、無理矢理ここまで連行された俺は全くもって不愉快でしかなく、不機嫌な顔で角谷杏こと生徒会長を睨みつけた。

「無理矢理連れてきたくせに……アンタ、よくもそんな白々しく言えるな」

「別に百式ちゃんを連れて来たのは私じゃないし〜」

我関せずと惚ける生徒会長に俺は無性に苛立った。以前から思っていたが、この女……人の神経を逆撫するのが実に上手い。わざとなら才能だと思わずにはいられなかった。

「……この女、殴りてえ」

「……こら、ダメだぞ！ 暴力はダメだからな！」

俺の近くで運動着を着た小さな女が騒ぐ。

何故か一人で「根性ー！」と叫んでいる女に、俺は「わかってる」と返すと深く溜息を吐いた。

「何したいか知らんが……アンタ、俺をこんなところに連れてきてどうするつもりだ？」

運動着を着た女二人に両腕を掴まれながら、俺は生徒会長へ問う。

俺が連行された場所は、大洗女子学園内の野外にある大きな倉庫

だった。

角谷杏を始め生徒会メンバー二人が彼女の後ろに控えていて、他にも幾つかのグループがそれぞれいるのを確認する。

そしてその幾つかのグループの中に西住みほがいるのを横目に、俺は生徒会長へ舌打ちをした。

「いや／＼まさか百式ちゃんが本当に捕まるとは思わなかったね。うむ、運が良い」

「やっぱりお前の差し金じゃねえか……」

先程、校舎内の芝生で昼寝していた時のことだった。

四人組の赤と白の運動着を着た女達が見つけるなり、リーダーと思われる小さな女を筆頭に俺を無理矢理ここまで連行したのだ。

無理矢理引き剥がそうとしたが、相手は女だ。男ならまだ話は別だったが、俺には乱暴なことをする気もなく、結局は以前の風紀委員のごとくされるがままに連行されてしまったのだ。

「どうせ俺を見かけたら連れて来いとかそんなこと言っただら？」

なんとなく、生徒会長が言いそうなのが予想出来る。

そんな俺の言葉に、生徒会長はけらけらと笑った。

「おお、分かる？ 百式ちゃん、さっすが」

本当にいちいち腹が立つ女だった。

「……お前達もなんでこんなところに集まってんだ？ この時間はまだ授業中だぞ？」

「それ、百式君が言う？」

俺に向かって、武部が目を細める。まあ、正論だろう。

確か今の時間は午後の授業の時間だったはずだ。なのに今、学校内とは言え、校内で授業を受けていない彼女達に俺は首を傾げていた。

「今は選択科目の授業なんだよね〜」

生徒会長がぷらぷらと干し芋をちらつらせる。

その言葉に、俺は大まかな予想がつくと思わず舌打ちをしてしまった。

「……戦車道か」

「こそ、一昨日の全校集会で戦車道の選択科目を追加したから。だから今のこのメンバーは戦車道の選択科目を選択した生徒なんだよね〜」

生徒会長を横目に、俺は周りを見渡す。

なるほど、だからみほが居るわけか。だが肝心のモノが見当たらないことに、俺は思わず鼻で笑った。

「ふん、戦車道をするって？ この学校に戦車なんてあるのかよ？」

ここにきて数ヶ月。俺は大洗学園艦に戦車の影も見ることがない。

戦車が無いのに戦車道をすると言い張る生徒会長に、俺は呆れた表情を見せた。

「これが意外とあるんだよねえ〜」

「……なに？」

俺が聞き返す。そうすると生徒会長は笑みを浮かべると、彼女の背後にあった倉庫の扉が開かれた。

開いた倉庫へ生徒会長が我が物顔で歩いていく。それに生徒会メンバー二人が続くと、他のみんなもあとをついて行った。



そして俺を掴む女達も、一緒に歩いていく。言わずとも、俺も引つ張られながら後を追うことになった。

「——IV号戦車？」

そう、みほがポツリと呟いたのが聞こえた。

倉庫に入り、その奥——ひとつの大きな影が倉庫にあった。

「……随分と古びてんな」

そしてその影——一両の戦車を見た俺が、思わず言った。

装甲が一目見てわかるほど錆びており、履帯も壊れてはいないが錆びが張り付いている。

きつとかなり長い期間、この場所に放置されていたのだろう。それぐらいしないと、こんな古びた姿にならないはずだ。

皆が倉庫に鎮座するIV号戦車を見つめるなか——みほがソレに近づく。

「うん……かずくんの言う通り、かなり古びてる」

そつとIV号戦車に触れ、みほは呟いた。

そしてみほは何を思ったのか、IV号戦車に慣れたように身を乗り上げると、戦車の上部にあるキューポラもとい司令塔のハッチを開けて中を覗き込んだ。

中を覗き込んだみほが「うっ……」と鼻を押さえる。

「おい馬鹿！ みほ！ 無理に車両内を覗くな！ 酷い匂いだろ！」

「あっ……ごめん！」

そんなみほを見た途端、俺はつい叫んでいた。

装甲があれほど錆びているなら、中ももつと酷いことになっている

はずだ。

錆びと汚れ、それが生み出す空間は酷い有様に違いない。鼻が曲がるような感覚に襲われているに違いないだろう。

「つたく……！　おい、二人とも離せ。もう逃げない」

しかし俺の制止を聞いても車両の状態の確認を止めず車両内に入り込んだみほに、耐えられなくなった俺は両脇にいる女に少し強めの口調で告げる。

そんな俺に驚いた表情を見せて二人が俺から手を離すと、俺は「すまない」と言ってみほの居るIV号戦車に向かった。

「おい！　みほ！　まったく……なんでお前は戦車となると周りが見えなくなるんだ！」

車両確認をするみほに俺が愚痴をこぼす。

そして俺もIV号戦車に乗ると、ハッチから見える車両内にいるみほの頭を軽く叩いた。

「あたっ……！」

みほが頭を押さえる。俺はそれを確認すると、車両内にいる彼女の身体の両脇を掴み勢い良く引き抜いた。

相変わらず軽いな……と、そんなことは良いとして俺は引き抜いたみほの顔を自分に向けるとすかさずデコピンを放った。

「いたっ！」

頭を押さえていたみほが今度は額を押さえる。

そして少し涙目になったみほが俺に膨れた表情を見せていた。

「うう……かずくん酷い」

ふて腐れるみほだったが、俺は「当たり前だ」と言っただけで目を細めた。「無理に錆びだらけの車内に入る奴がいるか！ 怪我するぞ！ まったく……良いからお前はそこにいろ！」

車両に乗っているみほに俺が言い付ける。

そしてすぐに俺は、みほの返事を聞くより先にIV号戦車の車両内に入り込んだ。

「えっ!?? かずくん!??」

外でみほが何か言っているが、俺は無視する。

そして鼻を感じる不快な匂いを我慢しながら、俺は内部の点検を始めた。

「……こりゃ酷い。随分と錆びてんな」

ざつと内部を見渡して、俺は顔を引き攣らせる。

しかし俺はそこから内部にある器具の確認を始めることにした。

操縦席——椅子も錆びてる。ギアを変えるシフトレバーも錆びて、クラッチも固まっている。おそらくサスペンションやらエンジンもダメになってるに違いない。

通信席——通信機器も内部は分からないが、これも整備しないと無理だろう。

主砲——内部から確認するが、砲弾を入れる部分も錆びと汚れで固まっていた。これも同様に整備しないと使用できない。

「……ふや、でもこれはっ..」

全体を通して確認して、俺が呟く。

かなり錆びで酷いことになっているが、整備でなんとかなる内容だったからだ。

フル整備……レストアをすれば動くとは、正直意外と言えた。

点検を終えた俺が車両内から外に出る。

外の空気が心地良い。はつきり言って車両内の中は堪ったものはなかった。

「かずくん……大丈夫？」

戦車内から出てきた俺の顔を見るなり、みほが心配そうな顔を見せる。

多分、中に入っていたせいで酷い顔をしているのだろう。

俺は頷くと、みほに向けて中の状態を話すことにした。

「軽く見たが、かなりガタが来てる。錆びが特に酷い……多分エンジンとかもやられてるだろう」

「動く……？」

みほがそう訊いてくる。俺は渋々頷いた。

「これは流石にレストアしないとダメだけだな。見ての通り装甲も履帯も錆びを取れば大丈夫そうだ……多分、数日あればコイツ、動くぞ」

みほが「良かった」と安堵の表情を見せた。

そんなみほの表情に俺が苦笑いする。

そしてその瞬間——俺は「あ……」と固まった。

「……………なにやってんだよ、俺」

思わず、俺は頭を抱えてしまった。

今になって、ようやく俺はさつきまでの自分の行動を振り返った。  
なにを俺は馬鹿真面目に車両点検をしてるんだ……  
焼きが回ったのだろう。みほの危なっかしい行動に、思わずやって  
しまった。

しかし後の祭り。周りを見ると、他の生徒達が呆気に取られた顔を  
して俺とみほを見ていた。

「え……百式君。戦車分かるの？」

「あの先輩、すごい手慣れてたよ？」

「みほさんと百式さん、仲が良いですね〜」

みんながそれぞれ思い思いの言葉を告げる。

俺は参ったと顔を強張らせると、さつとIV号戦車から降りた。みほ  
も俺に追うように戦車から降りる。

「やあやあ〜！ 流石百式ちゃん、整備士志望だけあるねえ〜」

近くにいた生徒会長が俺に微笑む。

整備士志望。その言葉を聞いた途端、周りの何人が驚いた顔を見せ  
ていた。

俺は堪らず生徒会長を睨むと「うるさい」と言い張った。

「みほが危なっかしいのが悪いんだよ」

「うう……酷い」

みほが嘆いているのを横目に、俺が不機嫌にボヤク。

しかし生徒会長はそんな俺を楽しげに見ていた。

「確か西住ちゃんと百式ちゃんって知り合いだったんだよねえ〜」

そして次に生徒会長が言った言葉に、俺は眉を寄せた。

あからさまに周りに聞こえるように言っているのが本当にわざとらしい。

「みほって百式君と知り合いだったの!?!?」

生徒会長の話を聞いた武部が騒ぐ。

そんな武部に、みほは「うん」と頷いた。

「かずくんと私は、幼馴染なの」

みほの言葉に周りが目を大きくしていた。

そして武部が俺を見ると、俺に指を指して騒ぎ出した。

「百式君! どうしてみほが転校してきた時にそれ言ってくれなかったの!?!?」

続けて武部が「それなら私達と一緒にお昼とか食べれば良かったじゃん!」と叫ぶ。

「みほもどうして百式君と友達だって話してくれなかったの!?!?」

今度はみほへ武部が不満を告げる。

みほは「あはは……」と乾いた笑いを見せると、俺をチラリと見て話した。

「なんか言い出しにくくて……かずくん、なんか近寄りがたくなってきたから……」

「え!?!? 百式君って昔からこんな感じじゃなかったの!?!?」

俺を指差す武部。何か馬鹿にされている気がしたが、今は言わないことにした。

みほが武部に頷く。そしてみほか「昔は……」と切り出した瞬間、俺は彼女を制止した。

「みほ、その話はしなくていい」

「え……うん、わかった……」

多分、いやおそらくみほは俺の聖グロリアーナ時代のことを知っているだろう。

変に話がややこしくなるのは、今の俺には迷惑だった。

俺はそれに面倒と言いたげに雑に頭を搔くと、ちらりとみほを見て言った。

「……みほとは、話す機会がなかったんだよ。それに俺と知り合いつて言うのも、この学校じゃ面倒な話だろ？」

呆れた表情で俺が武部に答える。

しかし武部は頬を膨らませて俺を不満そうに見つめていた。

「授業出ない百式君が悪いじゃん！ それに百式君の評判も全部百式君が悪いんだからね！」

実に武部の言うとおりだった。と言っても、俺には直す気など微塵もないのだが。

「かずくん、この学校で評判悪いの？」

「……ああー、まあな」

意外そうな表情でみほが訊いてくる。

俺は言葉を濁しながら、頷いた。

「この人、サボリ魔の変人なんて言われてるんだよ！ みほ知ってた

!?？」

俺を指しながら武部がみほへ告げる。

この女、余計なことを……と言つても、どの道知られることだったので、俺は僅かに溜息を漏らした。

武部の言葉を聞いたみほが目を大きくした。

「……えっ? そんなこと言われてるの?」

「否定はしない」

事実である。元々、どう言われても気にしない俺だったので事実を否定する気もなかった。

「女子校に何故か在籍してる眼帯が奇妙なサボリ魔の変人。それが百式ちゃんのこの学校での評判だよ」

そうして俺とみほ、武部の話が進むと、ここぞとばかりに生徒会長が割り込んできた。

生徒会長の発言に、妙な悪巧みを感じた俺だった。

故に俺が生徒会長を制止しようとするが、その前に彼女は大きな声でこう言った。

「ではでは――! 改めて自己紹介と行こうか!」

干し芋を掲げ、生徒会長が掲げた干し芋を俺へ向ける。

一体この女、何を言い出すつもりだ……?」

そう俺が思うなか、生徒会長が口を開く。

そして生徒会長が言い出した内容に、俺は目を吊り上げた。

「みんなの知つての通り、この人は百式和麻君! 半年前にこの学校に転校して来た学園唯一の男子生徒! 何を隠そう、この人は」



！ 日本中高戦車道において、戦車の操縦の腕でその名を馳せた男の名操縦手〜！ もし彼が女だったら、戦車道の頂に辿り着く一人とまで言われた人だよ〜！」

生徒会長の言葉に、周りがざわついた。

心底俺を変な目で見ていたのだろう。意外だと言いたげな視線が俺に向けられていた。

「どれぐらい上手なんですか？」

誰かが生徒会長に質問する。

生徒会長はその質問に少し思い出すように悩むと、すぐに答えた。

「聞いたことある話だと……十対十の試合で戦車一両で九両撃破したとか？ しかもマシントラブルで退場だったから、実質撃破されてないって」

「化け物ぜよ……」

生徒会長の話の周りが驚く声をあげる。

そして俺は生徒会長を止めるよりも、彼女が言った内容に目を大きくした。

この女……どうして俺が聖グロリアーナに居た時代の練習試合の話を知ってるんだ？

その話は聖グロリアーナの戦車道メンバーと知波単学園の戦車道メンバーしか知らないはずだ。

どこから流れたか知らないが、この場で俺のことを話すのはやめて欲しい。

「百式先輩！ それ本当ですか！」

小さな女子。おそらく一年生だろう。俺に向かうと、キラキラした

目で聞いてきた。

隠すのは、無理そうだ……俺は苦虫を潰したような表情で仕方なく答えた。

「昔の話だ……足の速い戦車使えば、誰でも出来る」

「いや、出来ないよ。かずくん」

隣でみほが言ってるが俺は無視した。

不味い、俺のことを知られるのは……しかもここに居るメンバーは戦車道の選択科目の受講者。

なら経験者が目の前にいるとなれば、その後の行動も大体予想出来た。

「しかし残念なことにくもう百式ちゃんは戦車道を辞めちゃったんだよねえ〜」

そんな俺のことを知ってか知らずか、生徒会長がわざとらしく言った。

「もしまた始めてくれたら、みんなに戦車道のこと教えてくれるかもしれないのになあ〜！

操縦とかもすぐ〜く上手くなれるかもしれないのになあ〜！」

そしてトドメと言わんばかりに言った言葉に、俺は目を吊り上げて生徒会長を睨んだ。

「今、ここでその話をするか……お前……ッ!!？」

「ここままでやれば、百式ちゃんも少しは戦車道する気になった？」

睨む俺に、生徒会長が飄々と笑う。

何が何でも俺に戦車道をやらせようとしている生徒会長の魂胆に、

俺はキツパリと告げた。

「――俺は戦車道はやらないッ！」

「あゝ、やっぱりまだ折れないかゝ」

ハッキリと俺が言ったことに、生徒会長は気だるく干し芋を頬張る。

その態度に、俺は堪らず頭に血が昇るような錯覚を覚えた。

### 3. みほの葛藤、和麻の戦車道

「我が校の戦車道に西住と百式の腕は必要不可欠だ。百式、我が校のために戦車道をしろ」

俺が生徒会長に本気で苛立ちを感じた時、メガネを掛けた女が俺に告げた。

確かこの女……前に俺を生徒会へ無理矢理連れて行った女だったはずだ。

妙に強気な発言が多いことから、はつきりと覚えているくらい印象的で腹立たしいと俺は感じていた。

今の彼女の発言に、生徒会長の先程の言葉でイラついていた俺は彼女へ吊り上げた目を向けると、思わず舌打ちをしていた。

「うるさい、あんたに言われる筋合いはない」

思っていたことを隠すことなく俺が告げる。

俺の態度が癪に障ったのか、メガネの女はムツと表情を歪めた。

「貴様っ！ 先程から会長と私の先輩に向かって失礼な態度だな！ 歳下なら先輩に敬語ぐらい使え！」

そして俺に指を指して指摘する彼女だったが、俺は思わず失笑していた。

どうして俺が尊敬出来ない歳上の人間に敬語なんて使わないといけないのか？

ただでさえ腹立たしいのに、これ以上ストレスを溜める気すらない俺は、つい馬鹿にしたような笑いをしていた。

「はっ！ あんた達に敬語を使うくらいなら学校やめてやるよ！ そ

れともアレか？ もし大洗で戦車道をしないなら退学か？ それこそ、どうぞご自由に。俺はそれでも一向に構わない」

この生徒会ならそんなことを平然と言うという自信が俺にはあった。

生徒会長があんな態度なのだ。全員の前で俺の過去を本人の意思問わずに話すなら、戦車道をしないなら学校に居られなくするなど言い出すことは容易に想像出来た。

メガネを掛けた女の表情が俺の言葉で一変する。

目を吊り上げ、顔を赤くして苛立ちを見せた彼女は俺を鋭く睨んだ。

「なんだとお！」

「まあまあ、桃ちゃん。落ち着いて……」

激怒し罵声をあげて俺に向かってくるメガネの女だったが、隣にいた女に制止される。

それでも我慢出来ない様子だったメガネの女が「離せっ！ あの男は礼儀がなっていないっ！」と叫んでいた。

こちらの台詞である。俺は鼻でメガネの女を笑ってやった。

「ふん、権限を私用で行使する相手に遠慮なんてしない。それが俺の——」

ふと、俺は言葉に詰まった。いや、そこで俺は無意識に言葉を止めていた。

俺は……一体、何を言おうとした？

感情的になり過ぎて、我を忘れていたらしい。思わず、言いたくもないことを言おうとしていた自分を、俺は叱咤したかった。

それが俺の——戦車道。そんな言葉を、俺はどうして言おうとしたのか？

久しぶりに戦車の中に入った所為かもしれない。昔の感覚が自然と蘇っているのだろう。

百式家の戦車道。と言うより、俺の戦車道の掲げる信条なんて、今更掲げたところで何も無い筈なのに。

「ちっ……もう良い」

このままこの場に居ると、調子が狂う。そう思うと、俺は今居る倉庫から立ち去ろうとした。

「あっ、かずくん」

離れた俺に、みほが心配そうな声を掛ける。

俺はみほに顔だけ向けると、ぶっきらぼうに返した。

「近いうち、ちゃんとお前とは話すよ。だから今はほっといてくれ」

そう言い残して、俺はみんなが見つめるなか倉庫から立ち去った。

しかしその間、俺は生徒会長の目が気に食わなかった。

俺が立ち去るまで、生徒会長は退屈そうに干し芋を頬張っていた。しかしその目は、表情とは違い……真摯な目をしていたことが、俺には無性に不快だった。



「ねえ、みほ。百式君と幼馴染って言ってたけど、百式君って昔はどんな人だったの？」

私の隣を歩いてきた武部さんが、そんなことを唐突に訊いてきた。かずくんがIV号戦車があった倉庫から居なくなつて、その後生徒会の皆さんが倉庫にあったIV号戦車以外にもこの学園艦に見つかつていない戦車があるつて話をしました。

要するに私達の戦車道受講者の人数では、一両の戦車では足りなくて、他にも戦車が必要という話です。

なので、倉庫に居た私達みんなで学園艦内に“あるはず”の戦車を各人で探すことになつたのです。

「……かずくんのこと？」

「うん。さつきみほが昔は違つたつてちらつと言つてたから、ちよつと気になつて」

武部さんの話に、私はなんて返そうか悩みました。

先程、かずくんが私に昔の話をしないでくれと言つていたので、私は軽々しくかずくんのことを話す気もあまり起きませんでした。

「うーん……言つたけど……」

「あー、やっぱり言いにくい話だつたりする？」

私の話し方で、武部さんはなんとなく私が言いづらいことを察してくれました。

それに私は頷くと、たどたどしく答えました。

「色々あつたんだよ、かずくんにも。かずくんも私も同じような感じなんだけどね」

「みほつて、確かこの学校に戦車道やりたくないから来たんだよね？  
てことは……百式君も？」

私とかずくんの理由はかなり違うかもしれないけど、戦車道をやり

たくないということは同じでした。

倉庫で生徒会の皆さんとかずくんの言い争いで、武部さんもその点  
はなんとなく分かっているのだと思う。

「そう、だね……かずくんも昔は戦車道をやってたから」

私が思わず乾いた笑みを浮かべる。昔の面影が全くなくなったか  
ずくんのことが脳裏に浮かぶ。

しかし倉庫のIV号戦車の私との一件で、かずくんはやっぱり“かず  
くん”なんだと分かりました。

子供の頃。戦車のことになるのと周りが見えなくなる私を、いつもか  
ずくんは呆れて怒ることがあつたりしました。

懐かしい感覚でした。昔はよくかずくんにおでこにデコピンをさ  
れたことがあつたから……

やっぱり変わってないんだな。まっすぐで、素直で、優しいところ  
は本当に変わってない。

どれだけ変わっても、かずくんの内面が変わっていないことが私は  
嬉しかったから。

「百式さんはいつも悲しそうな顔をされてます……みほさんのように  
百式さんにも何かあつたんですか？ 私達で良ければお力になれる  
かもしれませんので……」

私と武部さんがそんなことを話していると、五十鈴さんが心配そう  
な顔でそう言いました。

きつと五十鈴さんの言う通り、かずくんはずつとこの学校でそんな  
風に過ごしていたんだ。

逃げる。と言うより、かずくんは自分から“手放した”んだと思  
う。私とは違って、かずくんはそうすることが一番なんだと思つたに  
違いない。

認めてくれなかった。どんなに頑張っても、どれだけ上手くなって



も、一部の人は認めてくれなかったんだ。

沢山の非難を受けてもまっすぐに前に進んで、ようやく沢山の人に認めてもらったのに……かずくんは「あの事件」で心が折れたんだと思う。

私がかずくんと同じ立場だったら絶対に立ち直れない。私は間違いないくそう言えた。

「ありがとう、五十鈴さん。でも、私達でなんとか出来る話でもない気がするんだ」

五十鈴さんに、私は心の中でごめんなさいと思いつつ返す。

私も、今は武部さんと五十鈴さんとなら——私の戦車道を見つけてくれそうな気がする。だから私は逃げた戦車道に、またもう一度少しだけ向き合うことにしたんだ。

だけど、かずくんの場合は……そんな簡単な話ではない。

かずくんの居た学校で彼の周りに居た人達が、かずくんを認めてくれなかった。だからあんなことが起きたんだと思うから。

男の人が戦車道をする。それを認められる人は、きつとそんなに多くないと思うから。

「……そうですか。残念です……私達がお力になれば良かったのですが」

「ありがとう、五十鈴さん。まだわからないけど、きつと私達がかずくんの力になれる時が来るかもしれないから、その時は協力してほしいな」

五十鈴さんの優しさに、私は頬を緩める。自然と出てきた笑顔を、私は止めなかった。

「うーん、百式君って結構難しいんだね」

「色々あるのですよ、やっぱり」

私の横を武部さんと五十鈴さんがそう話しながら通り過ぎていく。かずくんを二人が心配してくれていることに、私は胸が痛くなる。しかし今の私にはどうすることも出来ないことに、私自身も悔しいと思っていた。

「――西住殿」

そんな時、後ろから誰かが私にそつと声を掛けてきました。

私が振り向くと、そこには先程一緒に戦車を探すことになった同じ戦車道の選択科目の受講者――秋山優花里さんがいた。

「秋山さん？ どうしたの？」

私が小首を傾げて、秋山さんに問い掛ける。

そんな私に、秋山さんは少し言いづらそうな表情を見せた。

しかし秋山さんは私をじっと見つめると、はつきりと口を開いた。

「西住殿。自分、百式殿の話……知ってますよ」

「えっ……!?？」 秋山さん、知ってるの？」

言葉を返すより、私は思わず目を大きくしていた。

そして私が訊き返すと、秋山さんは「はい」と頷いた。

「百式殿の名前は西住殿がご存知の通り、戦車道界ではかなり有名です。私も勿論知っていましたし、あの話は一部ではかなり有名になっています」

確かに秋山さんの言う通り、かずくんの名前は中高戦車道の世界では有名だ。もともと百式と言う名字ですら有名で、そして男で戦車道をしているということから知らずと名が広まったのだと思う。

私はかずくんの入学した聖グロリアーナ女学院でのことは、お母さんから聞いた。お母さんが知っていたということは、つまり一部では知られている話なんだということに違いない。

「秋山さん……それ、誰かに話したりしたの？」

思わず、私は秋山さんにすぐに訊いていた。

しかし秋山さんはゆっくりと首を横に振りました。

「……流石に話せませんよ。内容が内容ですし、戦車道を実際にしたことがなかった私でさえかなり驚かされた話でしたから」

顔を強張らせながら秋山さんが話す。その表情は心から不満な表情だということは、なんとなくわかった。

「正直な話、あの一件は百式殿の居た学校で戦車道のチームが解体されてもおかしくない話です。もちろん、その話は実際にあつたみたいですが」

「……そうなんだ」

その話は、私は初耳でした。

私がお母さんから聞いたのは、かずくんが前に居た学校で事故に遭い、そして学校から姿を消したということだけだった。

確かに、考えればあれだけのことが起きたのだからチームが解散になってもおかしくない事件だった。

しかし私が前に居た黒森峰女学院で、かずくんが居た聖グロリアーナ女学院とは全国大会の時に試合をしたことがある。

と言うことは、実際に戦車道チームは解散にならなかったんだ。

「噂では、百式殿が色々抗議したみたいですよ」

秋山さんの話に、私は内心で納得した。

多分、かずくんが何かしたんだと思う。そうじゃないと聖グロリアーナはもう戦車道をすることはできなくなったはずだから。

「私も百式殿とお話をしてみたい所存だったのですが、あの話を知ってるだけで話しかけにくかったです」

言葉の声色から心から残念だということが感じられました。

先程、初めて秋山さんと会って今まで何度か話をしてわかったことですが……私はこの人は本当に戦車が好きなんだなと感じた。

言葉の端々から、戦車のことを話しているのが楽しいのだと分かる。

あの戦車がカッコいい。あの戦車が好き。どこの国の戦車がすごいなど沢山のことを先程に秋山さんは話していた。

まるで……昔のかずくんを見ているみたいな感じだった。

そう言えば、かずくんもお姉ちゃんをよく戦車の話をしていた気がする。

少しだけ、戦車のこと以外無頓着な私のお姉ちゃん。戦車に全てを捧げてきたお姉ちゃんと同じく戦車が大好きなかずくんの話は絶えることはなかったです。

脳裏に浮かぶ光景が懐かしく私は、秋山さんのそんな姿にほんの少しだけほっこりとしてしまいました。

私も、またかずくと戦車の話とか……してみたい、かも？

少しだけ苦手意識があるけど、かずくとまたお話しできるのなら……私はそれでも良いかもと思いました。

「……え、秋山さんも百式君のこと知ってるの？」

私と秋山さんが話していると、先を歩いていた武部さんが目を大きくして私達を見つめていました。

先を歩いているから聞いてないかと思っていたけど、意外と聞こえ

ていたみたいです。

「西住殿……どうします?」

秋山さんが、ポツリと私に訊いてきました。

多分、武部さんと五十鈴さんに話すの?　と言う意味だと思えます。

「……………」

私は、言葉に詰まりました。話して良いのか、やはり悩んでしまいました。

生徒会の皆さんみたいに、無理強いをすることは絶対がない。でも……かずくんが本当に心で戦車道をしたいなら、私は背中を押してあげたいと思った。

倉庫でIV号戦車の一件の時、かずくんは少し生き生きとした表情をしていた気がするから。

私と少しだけお話ししていたかずくんは、教室にいる時の暗い表情ではなくて……昔の頃の表情が見えた気がしたから。

だけど、私は悩みます。私も同じことをされたら、どんな気持ちになるのかなど。

かずくんの気持ちは、私にはわかりません。だから、私はどうするか悩みました。

『みほ、お前はきつと自分の道を見つける日が来る。西住家の戦車道じゃなくて……お前の戦車道を見つけられる日が来たら、それを大事にするんだぞ』

ふと、そんな言葉を思い出しました。

随分と前に、中学生の頃に私がお母さんに叱られた時に、地元の公園で泣いていた私に言ったかずくんの言葉でした。

あの頃は、よく言っている意味が分からなかった。

だけど、今ならわかる気がする。今、まさに私は自分の戦車道を見つめようとしているから。

なら、かずくんは……？

かずくんは、まだ戦車道をやりたいの？

先程のIV号戦車の時のかずくんは、どんな気持ちだったの？

私は考えますが、はつきりとした答えは出なかったです。

しかし私は、あの時のかずくんの表情が嘘ではないと思ったかった。

本当に、かずくんが戦車道を心から嫌いになっっていないのなら……私は、彼の背中を押してあげたい。

私は心の中でそう思い、納得すると一度だけ一人で頷きました。

そして私を見ていた武部さんと五十鈴さんに、私はまっすぐに向き合おうと、一度だけ頭を下げて言いました。

「——武部さん、五十鈴さん。良かったら聞いてもらえますか？ かずくんの話を……かずくんが本当に戦車道をやりたいなら、背中を押してあげたいんです！」

武部さんと五十鈴さんが二人で顔を見合わせる。そして二人が頷くと、私に笑みを見せました。

「もちろん！」

「私達がお力になれるなら、喜んで」

頷いて私にそう話してくれた二人に、私は「ありがとう」と返しました。

本当に、かずくんが戦車道をしたくないなら私はそれでも良い。

でも、まだ戦車道をしたかったと思うのなら……私はかずくんを支えてあげたいと思ったから。

#### 4. サボることは、決して良いことではない

最近、ふと妙な視線を感じるようになった。

それは昔、俺が戦車道をしていた頃に感じたことがある嫌な視線ではなく、ただ見られているだけの感覚だった。

別に特別不快ではない。しかしただ見られていると言うのは、どうしてか気分が悪いと思うのは仕方のないことだと思う。

そんな妙な視線を感じて数日経つ。最初は誰か全くわからなかったが、ようやく今日で誰か見当がついた。

「おい、武部。お前、俺に何か言いたいことでもあるのか？」

その視線の主である一人。学校の教室で隣の席に座る武部沙織に、俺は朝のホームルームが始まる前の時間にそう問い掛けた。

「へ……？ な、なんのこと？」

きよとんとした表情で、武部がたどたどしく返した。

武部、お前もう少しまともに嘘を付けないのかよ……

分かりやすい女だった。とりあえず俺は眉を寄せると、武部に溜息混じりに言った。

「何を聞いたか知らないが、言いたいことあるならばつきりと言ってくれ。ずっと見られてるだけってのは意外と気分が悪い」

本当は俺から武部に話し掛ける気などなかった。しかしただ見られていると言うのは思いのほか、気分が良いものではない。

俺はどうせ以前に学内の倉庫で生徒会と揉めた一件のことだろうと見当をつける。

生徒会長辺りが何か言ったのだろう。俺にはそれぐらいしか思い当たる節がなかった。

「べ、別に百式君のことなんて見てないもん！」

頬を膨らませる武部だったが、俺は頬杖を突きながら小さな溜息を漏らす。

「……生徒会長から何か聞いたのか？ それに俺は答える気は全くないが」

武部が何について聞いたかは大体察することが出来る。多分、俺の昔の話でも聞いたのだろう。

戦車道受講が何人もいる倉庫で生徒会長は“あんなこと”をワザとらしく言ったのだ。俺のことを平然と話しても何もおかしくはない。

「一昨日の倉庫のこと？ 生徒会長からは何も聞いてないよ？」

「生徒会長からは……ねえ」

俺の返しに、武部は「あ……」と声を出した。

この女……絶対に嘘とかつけないタイプの人間だ。俺は確信を持ってそう思った。

生徒会長からは何も聞いてない。なら、俺のことを知ってるような人間は……

「……みほか？」

思いついた心当たりの名を俺は武部に言った。

消去法で出てきた人間は、一人しか居なかった。

しかしあのみほが簡単に人の過去を話すような女でもないのは、長



い付き合いだから知っている。

「ち、違うよ！ みほは何も言っていないよ！」

「語るに落ちるって言葉、お前知ってるか？」

武部の分かりやすい反応に、俺は苦笑する。

しかしみほが言った、と言うのも妙だった。彼女は俺が知る限り、人の嫌がることを極力避ける人間だ。

他に考えられることがあるとすれば、みほ以外に俺のことを知っている人が学園艦内にいる。それも有り得る話だ。

戦車道にかなり精通している人間なら、一応、あの話が広まらないようにしていた”としても知っていてもおかしくない。

例えば、みほの母である西住流の西住しほさん。または日本の自衛官である蝶野亜美さんなどが挙げられる。

戦車道の顔とも言われる人達ならば、知っていてもおかしくない。しかしこの大洗学園艦にそんなに戦車道に精通している人間がいるのかというのは、正直なところ怪しいと思えた。

「俺の昔のことを聞いてるなら別に良い。誰に聞いたかは聞かない……だけどな。ただ見るくらいならハッキリと言え。その方が楽だ」

武部にハッキリと俺は告げる。言いたいことがあるなら言えと。

武部はそんな俺に、目を伏せる。そして彼女は何か考えるように顎に指を添えた。

そして数秒して、武部は俺を恐る恐るチラリと見ると、彼女は言った。

「ねえ、百式君。百式君って……昔は戦車、好きだった？」

その言葉に、俺は眉を寄せた。

なんで戦車に乗らないの。でもなく、なんで戦車が嫌いなのか。で

もなく……昔は好きだったと聞いてきたか。

俺は一瞬、口を噤んだ。しかし俺は口を開くと、思ったことを正直に告げていた。

「さあな……分からなくなった。それだけだ」

俺が昔に戦車道をしていたことを、既に武部は知っている。だから特別隠すことはなかった。

嫌い、そう言えば良いはずだったのに。どうしてかそれが出ず、俺は曖昧な返事を出していた。

「そつか……じゃあそれって、また百式君が戦車に乗れるかもしれないってことで良いの？」

「ないな。俺は、もう戦車に乗らない」

しかしこの答えは、すんなりと出てきた。

俺は、戦車にもう乗らない。正しくは、もう戦車道をする為に戦車には乗らないと言えば正しいだろう。

俺は戦車道をするべきではない。その答えを既に得ている俺は、ただそう答えた。

「どうして？」

俺の答えに、武部が訊いてくる。

その質問に俺が「別にお前には関係ない」と答えようとした。

「別に——」

武部が質問してきた瞬間に、俺は呆れながらその答えを返そうと口を開いたところで——言葉に詰まった。

「どうして、百式君は戦車に乗りたくないの？」

武部の目を見た途端、俺は言葉に詰まっていた。

どうしてこの女は……そんな目を俺に向けるのかと、俺は素直に戸惑ったからだ。

興味本位でなく、哀れみでもなく、ただ真剣に俺を見つめる武部の目に、俺は口を噤んだ。

いつも見る気の抜けた表情でなく、ただ真剣に俺に問いかけている武部が俺には理解できなかった。

「……………」

この目を向ける人間を、俺はしばらく見たことはなかった。

脳裏に浮かぶのは、金髪の淑女。しかし俺はそれは脳裏から追い出すと、武部の視線から目を逸らしていた。

言葉を返さない俺に、武部が黙って俺の返事を待つ。

俺に、武部の質問に答える言葉はない。そんな答えなど、持ち合わせていない。

いや、答えはある。しかしその言葉を俺は、口に出さずにいた。

嫌い。たった一言言うだけで良いのに、何故俺はその言葉を出すことを躊躇っているのか？

多分、俺は分かっているのだろう。認めようとしてないだけで、分かろうとしてない。

「……男が戦車に乗るもんじゃない、ただそれだけの話なんだよ」

気がつくのと、そう言っていた。

それに気がついた俺が反射的に席を立つ。そして武部の反応を見ることなく、俺は教室から出て行った。

武部がどんな顔をしていたかなど、見たくもなかった。

「……調子が狂う」

ホームルームのチャイムが鳴るなか、俺はポツリと呟いた。誰もいない廊下を一人で歩く。目的地は、いつも通りに校舎の適当な芝生。

午後のホームルームに顔を出せば良いだろう。先生には小言を言われるが、別に良い。

戦車の話は、もう勘弁してほしい。どうしても戦車の話をしていると調子が狂うから。

何故か苛立つ。ぶつける場のない苛立ちが、無性に腹が立つ。

「寝よう。寝れば少しは忘れられる」

モヤモヤとする感覚が苛立ちを増す。惰眠を貪れば多少は解消されると思いながら、俺は目的の場所へと向かうことにした。

「かずくん……どこ行くの?」

「……あ?」

声を掛けられたことへ反応するのに、少し時間が掛かった。

誰もいないはずの廊下で、まさか声を掛けられるとは思ってもいなかった。

俺が声の方に振り向くと、そこには学生鞆を肩に掛けたみほが居た。

「……遅刻かよ」

素っ気なく、俺はそう言った。

そんな俺に、みほは「あはは……」と乾いた笑いをすると居心地が悪そうに頬を掻いた。

「ちよつとね。眠たそうな人が居て、心配だから一緒に登校して来た  
らこんな時間になったの」

「なんだそれ……？」

訳のわからないことを言い出したみほに、俺は顔をしか顰めた。

とりあえずはみほは遅刻した。それだけは確かということだけ、俺  
は理解することにした。

「まあ良い、さっさと教室に行つてこい。もうホームルーム始まつて  
るぞ」

「あつ……うん」

顎で教室の方を指して、俺がみほに告げる。

そして俺は当初の目的だった校舎の外へ向かおうと、みほの横を通  
り過ぎていく。

みほがチラリと俺を見つめてくる。しかし俺は特別気にすること  
なく、彼女に背を向けて歩き出した。

「みほが遅刻ねえ、珍しいこともあるもんだ」

みほと分かれて、俺は二階から階段で一階に降りる。そして昇降口  
で上靴から外靴に履き替えて外へ出て、少し歩けばいつもの場所に到  
着だ。

しかし俺が靴を履き替えたところで、俺は思わず言っていた。

「みほ……お前、いつまでついてくるつもりだ？」

俺の後ろにいるみほに、俺は思わず言っていた。

何故かみほも上靴から外靴に履き替えている。彼女の靴を見て、俺  
は眉を寄せていた。

「……なんとなく、かな？」

どうして疑問系なのかは、聞かないことにした。  
俺は溜息を吐くと、みほに呆れた視線を向けた。

「ついてくるな。さっさと教室に行け」

「……私も、今日はサボろうかな？」

「……はあ？」

みほから出てきた言葉に、俺は耳を疑った。

まさかみほからサボるなんて言葉が出てくるとは、夢にも思っていなかった。

「どういう風の吹き回しだ？ お前がサボるなんて？」

思わず、俺はみほにそう訊いていた。

みほは「えへへ……」と小さな笑みを見せると、俺の隣に立っていた。

「かずくんと話す機会、あんまりなかったから……良い機会かなって」

頭を抱えなくなった。そんなしょうもない理由で、この女は授業をサボろうとしていることに。

「俺と一緒に居ても良いことないぞ。さっさと戻れって」

「ううん、決めたから。私もサボるよ」

「お前な……戻れって」

「ううん、戻らないよ」

首を横に振るみほに、俺は呆れ果てた。

昔の付き合いから分かる。一度こうなると、みほはまず折れないことを。

みほの頑固なところは、本当に姉妹揃って似ている。いや、家族揃ってか？

俺は呆れ果てて溜息を吐き出すと「好きにしろ」と言っ、先に歩き出した。

「あ！ かずくん！ 待ってよ！」

「うるさい、勝手にしろ」

慌てて追いかけてくるみほに、俺は淡白な返事を返す。

昼寝、出来そうにないな……これは。

隣を歩くみほをチラリと見ながら、俺は肩を落とす。

一年振りに会った幼馴染と授業をサボる、か。

まさかみほと授業をサボる日が来るとは思ってもみなかった。

「かずくん、久しぶりにお話ししようよ」

みほが楽しげに言ってくる。何をこの女は楽しげにサボろうとしてるんだ？

みほの切り替えの早さに、俺は引き攣った笑いを浮かべる。

「気が向いたらな」

「ええーダメ？」

「気分が良かったらしてやる。黙ってついて来い」

「むう、かずくんの意地悪」

「はいはい」

みほに軽口を返して、俺は目的地へと向かう。

まあ、互いに聞くことは色々あるだろう。

俺がこの学校にいる理由。みほがこの学校にいる理由。

多分、みほも何か抱えているかもしれない。そんな気がする。そんな予感を感じながら、俺は隣を歩くみほに一言だけ訊いた。

「みほ、お前の戦車道は見つかったか？」

俺の質問に、みほが少しだけ息を飲んだのが聞こえた。

歩く歩幅を変えずに淡々と訊いた俺に、みほは首を横に振った。

「ううん、まだ見つかってないよ」

「そっか……」

みほの悲しげな表情に、俺は素っ気なく返す。

なんとなく今のみほに、俺と同じ雰囲気を感じたのは……どうしてだろうか？

妙に印象的だったみほの表情に、俺はそんな疑問を感じた。

しかし俺は、なんでみほにあんな質問をしたのか？

そのこと自体に疑問を感じながら、俺はただ目的地へと向かった。



## 5. 本当の気持ち、本当の想い

西住みほが俺の在籍している大洗女子学園に転校して来てから一週間ほどが経ち、俺とみほはようやく二人だけでの対面を果たした。

武部と不本意な会話をして教室に居る気が無くなった俺が適当にサボろうとしたところで、何故か遅刻して来たみほと出会い、何故か彼女も俺と一緒にサボると言い出して今に至るわけだ。

呑気に校内の片隅で芝生で木を背にして座る俺と、俺の隣に同じようにみほも木を背にして座っていた。

視界の端に見える学校から一時限目の授業が始まるチャイムの音を聞きながら、俺はみほをチラリと見る。

「ん〜！ 風が気持ち良いね〜！」

心地良さそうにそよ風を受けながら、みほが背伸びをしていた。サボることに何もこの女は抵抗を感じていないらしい。

肝が据わってるのか、それでも呑気なだけなのか……多分、前者だろう。

時折、みほは肝が据わってるところがある。それを俺はなんとなくだが、昔からの長い付き合いで理解していた。

「ここは、俺の特等席だ。この場所はあまり見つかからないし、木があって日陰だからこの時期は過ごしやすい」

俺が深呼吸をしてホッと一息つく。

しかしながら、この場所は風紀委員の三人にバレている。

なので授業の合間や昼休みになると、大体この場所にそど子が鬼のような顔でやって来る。

まあ来ると分かっていたら、その時間だけ適当に別の場所に行けば良い話である。

しかしそれでも見つかる時があるので、あの風紀委員の索敵能力には悪い意味で感心しか出来なかった。

「あ、そうなんだ。うん……良い場所だね。ここならすぐくのんびりできる」

「寝るにはもってこいだからな」

みほが心地良さそうに頬を緩める。

そしてみほは俺の方に向くと、楽しげに微笑んだ。

「うん、ホントだね。気を抜いちゃうとすぐ寝ちやいそうだよ」

みほが俺に嬉しそうな声色で告げる。

俺はそんなみほに苦笑いした。

「確かにな。本当に良い場所だよ。まさかみほとこうして一緒にサボる日が来るとは思わなかったけどな」

「そうだね……私も、この学校に転校して来てかずくとこんな風と一緒にいるなんて思わなかったから。それにかずくん、私のこと避けてるみたいだったから」

「すまん。それは俺が悪かった」

今までみほを避けていたことに、俺は素直に謝罪する。

この学校において、俺の存在は異端だ。その原因を作ったのも自分自身なのだが、その点は触れないで欲しい。

そんな俺とみほが接するのも、あまり良いこととは言えない。加えて、俺が昔のことを触れられるのが嫌だったと言うのが本音である。

「ううん、大丈夫。かずくとお話ししてみたけど……かずくんにも色々あったのは知ってるから」

みほが俺と同じようにボンヤリと空を見上げる。

かずくんにも……か、と言うことはきつとみほも何か「訳アリ」なのだろう。

黒森峰女学園に在籍していたみほが、何故この学校に転校して来たのか？

戦車道において名高い西住流の次女たるみほが、どうして戦車道に無縁の場所にわざわざ転校して来たのか？

みほが転校して来た瞬間から俺が思っていたことだ。

「俺が言える話じゃないが、みほ……お前、なんで大洗に来たんだ？」

俺はそんなみほに、ボンヤリと青い空を眺めながらポツリと思わず訊いていた。

その瞬間、みほの顔が暗くなるのが俺の視界の端に映った。

「……言いたくないなら言わなくて良い。悪かったな」

俺はその顔を見て、僅かに吐息を漏らした。やはりみほも訳アリなのだと確信して。

しかしそんな俺に、みほは首を横に振っていた。

「ううん、大丈夫。私のことは武部さん達にももう話したから……それに私だけかずくんのこと知ってて、かずくんが私のこと知らないのもズルいし」

こういうところがみほらしいと、素直に俺は思った。

素直というか、律儀というか、変なところが真面目なのは相変わらず変わっていないようだ。

「別に気にしなくて良い。言いたくないなら言うな」

「ダメ。ちゃんとおあいこにしないと」

何故かムキになっているみほだった。

俺はそんなみほに、呆れて溜息を吐いた。

先程のみほが授業をサボる件と同じ流れだった。こうなったら俺に自分がなぜ大洗に転校してきたかという理由を話すまで、みほは折れることはないのだろう。

「……わかった。話してくれ」

だから俺の方が折れることにした。多分、こうなったらみほは自分のことを話すまで俺と揉めることは容易に想像出来たからだ。

そうして俺がそう言うと、みほは一度だけ頷いて静かに話を始めた。

「ねえ……去年の戦車道全国大会の決勝戦。かずくんは見た？」

唐突に質問して来たみほに、俺は首を横に振っていた。

「いや、見てない。その時は俺は病院に居たはずだ。それに戦車道に関わることには触れないようにしてた」

去年の戦車道全国大会は、確か夏にあったはずだ。

去年のその頃は、俺は病院で入院していた。

全国大会の前に俺は大怪我を負い、三ヶ月ほど入院生活をしていなかった。

みほは俺に「そっか……」と頷くと、話を続けた。

「去年の全国大会決勝戦で、私は黒森峰が負ける原因を作ったの。私あの時にしたことが、周りには認められなかったから……連覇出来るはずだった黒森峰の歴史に泥を塗ったって」

みほの話に、俺は少しだけ目を大きくした。  
黒森峰が負けた？ 近年全国大会連覇の西住流が率いる黒森峰が？

「…………お前、なにをしたんだよう。」

そう思った途端思わず、俺はみほに訊いていた。

それにみほは少しだけ間を置くと、ゆっくりと語り出した。

去年の戦車道全国大会決勝戦。黒森峰女学園対プラウダ高校。

プラウダ高校は、確か背丈の小さい子供みたいな二年生が隊長だったのは覚えている。二年にして隊長になった珍しい人材と聞いたことがある。

それに一度だけ、確かその隊長の名前は忘れたがダージリンと交友があったことから直接話したことはないが会ったことがあった。

そのプラウダ高校との決勝戦。天気が荒れた豪雨の中での試合で、それは起こった。

みほが乗るフラッグ車とそれを守る車両達が敵チームのフラッグ車を追っている時に——みほの乗るフラッグ車を守るはずの車両が一両、足場が悪く荒れる川に落ちて浸水したらしい。

それを見たみほは、すぐに乗っていたフラッグ車から降りて川に落ちた車両に乗っている乗員を助けに行った。

車長であるみほを失った黒森峰のフラッグ車は行動不能となり、そこを突かれてプラウダ高校の敵車両が撃破。つまり、黒森峰の敗北である。

しかしみほは無事、川に落ちた車両から乗員を助けることは出来たらしいが……それに伴う代償は、大きかった。

全国大会十連覇が掛った大事な大会で、決勝戦だったのだ。

それをみほの所為で逃した。それを黒森峰の生徒達は許さなかった。

言われようのないみほへの周りからの他責の視線と言葉の数々。

そして西住流を敗北させたと母親からの叱咤。

学校では居るだけで責められる毎日。それにみほは耐えられなくなった。

ただ勝つこと。それが西住流の戦車道だった。

しかし目の前の助けなければならなかった人を見捨ててまで、勝つことが正しいのか？

故にみほは、自分の戦車道が分からなくなった。

自分のしたことは間違っていたのでは？ と、自分の道が分からなくなつたのだと。

だからみほは黒森峰から姿を消し、戦車道のない大洗女子学園へ転校して来た。

それがみほが語る。戦車道を辞めることになつた理由だった。

「私のしたことが、間違っていた。そう言われて……私は分からなくなつたの。私は何のために戦車道をして来たのかつて、だからもう戦車道はしたくない。もう戦車に乗ることが怖くなつたから——」

みほが語る内容を俺は黙って聞いていた。

体育座りで顔を膝に隠しながら静かに語るみほに、俺は何も声を掛けずにただ話を聞いていた。

「——これが私の大洗に来た理由だよ。かずくん」

そしてみほは話を終えると、そう締め括つた。

そんなみほに、俺は目を閉じると一言だけ言った。

「お前も……俺と同じか」

「……えっ？」

みほが声をあげる。そんな彼女に俺は目を閉じたまま、右目の眼帯を触つた。

「……お前と同じだよ。俺も、分からなくなった」

思い出されるのは、去年の記憶。

あの時、俺の心は折れた。あの時の一件で、俺は右目の視力を失い、身体中に今でも大火傷の跡が残っている。

俺は自分の道を進んでいた。しかしそれを周りの人間は許さなかった。

だから俺は、その対価を払うことになった。

男が戦車道をする事。それが罪になると知って以来——俺は自分の戦車道を見失ったのだ。

「かずくんは違うよ。私とは全然違う」

しかしみほは俺の言葉に、即答していた。

閉じていた左目を開け、俺がみほを見る。

悲しそうな顔が目の前にあった。みほが俺を見つめる目に、俺は目を細めた。

「一体、何が違うって言うんだ？」

無意識にみほに話す声色が強くなっていた。

みほはそれに少し肩をビクツとさせるが、彼女はまっすぐに俺を見つめていた。

「かずくんは私と違うよ！ だって、かずくんは私なんかよりずっとずーっと頑張ってたの知ってるから！ 公式戦に出れなくても練習試合に出て、周りからたくさん嫌なこと言われても、試合で周りを見返して驚かせるくらい戦車の操縦がスゴく上手かったもん！」

中学までしか戦車道出来ないって言ってたのに、認めて貰って聖グロリアーナに入学したのも私は本当にスゴイって思ったから！」

みほが声を張って、俺に自分とは違うと話す。  
しかし俺は首を横に振っていた。

「お前だつて頑張つてたんだろ？ 黒森峰で副隊長になれるくらいまで努力したんだ。俺と何も変わらない」

確かに、俺は努力した。母さんから鬼のような教えを受け、戦車の操縦も目を瞑つても出来るくらいにまで練習した。戦車を自分の身体のように動かせるまで毎日練習した。

しかしみほも同じだ。西住家の人間として、並大抵ではない辛い毎日を送っていたはずだ。

親から泣きたくなるほどキツく怒られ、そして出来るまでやらせられる。そんな日々をみほは送っていた。

だからみほは黒森峰の副隊長になれたのだ。それは間違いなく、彼女の努力があつてこそだと思える。

「変わるよー」

しかしみほは俺の言葉を否定した。

首を何度も横に振り、みほは「違う！」と言った。

そんなみほに俺は「変わらない」と返すが、彼女は一貫して俺の言葉を否定した。

「かずくんは男の子なんだよ!?? 戦車道は女の人がやる武芸なんだよ!?? それなのに周りから認められるってどういう意味か分かるの!??」

みほが声を大きくする。男が戦車道をする意味と周りから認められたことの意味、それを彼女は真摯に問う。

そんなこと……お前に言われなくても、分かる。



だが、俺はそれを認めてはいけない。前者はともかく後者を認めることの意味を俺は理解していた。

「その代償がコレだよ。俺は……戦車道をやるべきじゃなかったんだ」

認めてくれた。しかし一部の人間は認めなかった。だからこそ、今の俺がいるのだから。

「私も自分もそうだって、そう思ってた。戦車道をやるんじゃないかって」

みほが俯きながら、表情を暗くする。

しかしその表情のなか、みほは僅かに頬を緩めると、嬉しそうに言った。

「でも武部さん達と居ると、なんだか楽しいんだ。まだ少しだけ怖いんだけど……でも私、みんなとなら見つけられそうな気がするんだ」「なにを？」

そんな表情を見た俺がみほに問う。その顔に不思議と不快な気分を感じながら。

「私の戦車道、ここでなら見つかる気がするの」

そうしてみほは満足そうな表情で、そう言った。

その顔があまりにも嬉しそうで、あまりにも誇らしそうで、俺はみほから視線を逸らしていた。

「だから、かずくんも見つかるとかもしれないよ。見失った道を、かずくんの戦車道を」

そうしてみほは俺に言った。  
しかし俺は首を横に振っていた。

「もう終わった話だ。もう俺は、戦車には乗らない」

俺がもう話すことはない、話を完結させようとする。

もう俺が戦車道をする為に戦車には乗らない。整備の道で、メンテナンスで乗るのは別だ。しかし選手として、俺は乗ることはない。

選手として乗ることで、どんな対価が必要かを俺は嫌というほど理解していた。

「かずくん。本当は戦車道、嫌いになっただけじゃないでしょ？」

その一言を聞いた瞬間、俺は言葉に詰まった。

前に、生徒会長から問われた言葉だった。

俺は少しだけ間を開けると、ハッキリと答えた。

「……………嫌いだよ」

「なら、なんでそんな辛そうな顔するの？」

「……………はあ？」

そうしてみほが続けた言葉に、俺は思わず眉を寄せていた。

この女、一体なにを言っているんだ？

俺が聞き返すと、みほは少しだけ悲しそうな表情を見せた。

なんでそんな顔をする？　なんでそんな悲しそうな顔で俺を見るんだ、お前は？

そんな俺の疑問に、みほは答えた。

「かずくん、分かってないの？　かずくん、普段どんな顔してると思う？」

俺が返事に困る。普段、どんな顔をしていると言われても答えようがなかった。

いつも通りの顔をしている。そうとしか俺には答えようがなかった。

しかしみほは、まっすぐに俺を見つめると——ハッキリと告げた。

「——泣きそうな顔してるんだよ」

息が詰まるような感覚が俺を襲った。

この女が言っている意味が分からない。

驚くことも、言い返すこともせず、ただ無表情で俺はみほを見つめていた。

「いつも悲しそうで、何か思い詰めたような、泣きそうな顔。鏡見て分からないの?」

「わかるわけないだろ……そんなこと」

「なら、なんで泣きそうな顔してるの? 本当は自分でも分かってるんじゃないの?」

諭すようなみほの話し方に、俺は言葉が出なかった。

しかし俺は分からなかった。自分がそんな顔をしている理由なんて……分かりたくなかった。

そしてみほが真剣な表情で俺を見つめていると、彼女は俺に言った。

「戦車道、本当は嫌いになっただけじゃないんでしょ?」

聞きたくない言葉を、みほはハッキリと告げた。

俺はすぐに言葉を返すつもりだった。しかし思ったように喉から言葉が出なかった。

「俺は……俺は……」

「あんなに楽しそうに昔から乗ってた戦車を、かずくんは今更嫌いになんてなってるよ。知ってる？ 前に倉庫で私と戦車の話をしていたかずくん、すごく楽しそうだったよ？」

続けてみほが話す内容に、俺は背筋が凍るような錯覚を覚えた。

そして頭に血が昇るような感覚が襲い、俺はみほに堪らず目を吊り上げた。

「……………るさい」

自然と言葉が出ていた。自分でも分からないくらいに小さな声で、俺は何かを呟いた。

しかしみほは、俺の声を無視して話を続けた。

「誰よりも戦車が好きで、誰よりも戦車道に一生懸命だったかずくんが、戦車道を嫌いになるなんて思えないよ」

「——うるさい！ それ以上言うな！」

そして俺は遂に我慢出来ず、大声でみほの言葉を制した。

聞きたくない。それ以上、戦車道の話をするなど。

「本当にかずくんが戦車道を嫌いなら言わないよ。かずくんの口から本心から嫌いだって聞かない限り、絶対にやめない」

だがみほは俺の大声に臆することなく、まっすぐに俺を見つめるだけだった。

そんなみほに、俺は更に目を吊り上げた。

「——なら言ってるよ！ ああ、嫌いだよ！ 戦車なんてもう大ッ嫌

いだ！ 男が戦車に乗るだけで責められる？ そんな武芸があつて  
たまるか！」

「じゃあなんでそんなに悲しそうな顔してるの！」

みほに大声で本心を吐き出す。

そして俺はそこで言葉を止めるつもりだったはずなのに、何故か言葉が続けて出ていた。

「出来なかつたからに決まってるだろうがッ!!？」

あれ、なんで俺こんなこと言ってるんだ？

もう言わなくて良い。もう嫌いだと言つたんだ。だから、そう何も言う必要はないんだ。

「俺だつて戦車道続けたかつたよ!!？ みんなと……聖グロのアイツ等と戦車道を続けたかつたに決まってるだろッ!!？」

勝手に出てくる言葉を、止められなかつた。

今まで話すことを拒んでいた言葉の数々が、なぜか勝手に出ていた。

止めようとしても、止められなかつた。

「男の俺を受け入れてくれたアイツ等と、俺は戦車に乗っていたかつた！」

やめてくれ。もう言わなくて良い。ただ一方的に否定して、話を終わらせろ。

これ以上、みほに俺のことを話す必要はない。

「許されなかつた！ 認められなかつたんだよ！ だから俺はあの日、砲撃されたんだ!!？」 驚かせる為の砲撃だとしても、生身の人間

に向かつて砲撃されたんだ!!? それがどんな意味を持つかなんて分かるに決まってるだろ!!?」

吐き出すように告げるなか、脳裏に浮かぶのは去年の記憶。

身体に受けた熱い熱気。身体中に感じる石と砂。そして右目に受けた——激しい刺痛だった。

右目に鈍痛が走る。しかし俺はそれを無視して右目の眼帯を押さえながら言葉を吐き出していた。

「だから……俺は戦車に乗るべきじゃなかったんだ!!? 中学で仲間と安齋先輩に認められた! 高校で聖グロから認められた!!? 嬉しかったに決まってる!!? 俺は戦車道をやっても良いんだって思えた!!? 今までの努力は無駄じゃなかったんだって思えた!!?」

楽しかった思い出があった。

初めて中学生の頃に、俺を認めてくれた先輩のこと。それをキツカケに俺を認めてくれた仲間達のことを。

練習試合しか出れなかったのに、俺のことを仲間だと言ってくれた安齋先輩。気さくで、頼もしい人だった。

あの人のおかげで、俺は中学校で戦車道が出来た。

「でも認めてくれたのは一部だった……嫌がらせは昔からされていた。耐えられた、俺を認めてくれる仲間が居たから……でも……でも……あの日で、俺は折れたんだよ……」

そして高校で聖グロリアーナ女学院から、入学依頼が来たのだ。

認められた高校で、認めてくれた新しい仲間との戦車道。しかしそれでも……俺は、認められなかった。

「あの日に俺は身体に大火傷して、右目まで無くなった。このまま続けたら、俺は今度は何を失う? 左目か? 右腕か? そうやって

色々なモノを失った先にあるものなんて……虚しいだけなんだよ」

身体に負った傷。これ以上、戦車道を続けたらきつと更に何かを失うことになる。

そんな失った先にあるものなんて、虚しさだけしかない。

「俺があの日に入院して……聖グロのみんなが来た時の顔が今でも忘れられないんだ。あの悲しそうな顔、それを俺が作ったと思うと今でも自責の念に駆られる」

そうだ、俺がダーズリン達に会いたくないのはそれだった。

あの事件から入院し、見舞いに来たダーズリン達の表情が忘れられないんだ。

俺を見るなり、泣きそうな表情で俺を見た顔。あの顔が未だに忘れられないんだ。

泣いていた子もいた。ごめんなさいと謝った人もいた。そして俺の右目に触れて、目に涙を溜めてごめんなさいと言った人がいた。

「俺が戦車道をしなければ、俺はこんな目に合わなかった。そしてアイツ等が——ダーズリンが悲しむこともなかったんだ。だから俺はそれに気付くと……心が折れた」

あのみんなの顔を見た瞬間、俺の心が折れた。

あの顔を作らせたのは……俺だった。

俺が居なければ、こんなことにはならなかった。

俺が戦車道をしなければ、俺は大怪我を負うこともなく、誰も傷つかなかった。

俺が戦車道をして、誰かが傷つく。そんなこと……俺は認められなかった。しかし俺は、認めてしまった。

「その日から俺の胸に確かにあった想いが、無くなった。あの日から

俺の中にあつた戦車道への想いが消えたんだ……もう戦車に乗るなと言われている気がしたんだ」

あの日から、俺はカラツポになった。

それは俺に戦車に乗るなど言っているように感じられて、あれから俺はずっと虚無感を感じていた。

そして俺は言い聞かせた。自分に、もう戦車に乗るなど。絶対に選手として、今後戦車に乗るなど。

「だから俺は戦車道を辞めたんだよ！ 誰も悲しまなくて良いように！ 自分が辛い思いをしないように！ 逃げたんだよ!!? 男が戦車に乗ることを否定する全部から！」

だから俺は逃げた。戦車道から、聖グロリアーナから、認めてくれたみんなから。

戦車に乗る俺を否定する人達から、俺は逃げた。

しかしそれでも、戦車道は俺を苦しめた。なるべく戦車道に関わらないようにしても、それでも戦車道は俺を蝕んだ。

「今だって夢に出てくるんだよ!!? あの日々が！ 戦車に乗ってた頃の思い出が俺を苦しめるんだ！」

たまに夢に出てくる。懐かしい日々。

見るたびにどこか心地良い気分になるが、それと同時に、胸が……心が痛くなる。

起きると必ず右目が痛くなるのもそれだ。戦車道をやっていたからこうなったんだぞと、右目に痛みが灯る。

そして俺は、自責の念に駆られるのだ。

「なのに、なんでお前達は俺を戦車に乗せようとする？ 乗りたくない……乗ったらまた俺は傷つく……俺以外の誰かが傷つくなんて見



たくない……もうウンザリなんだ……」

大洗女子学園に転校して、平和な日々を過ごさせていた。

何もしないで、ただこの艦で整備の勉強をするだけの日々。何も心が痛まない。誰とも触れ合わず、接することもなく……気楽な日々だったのに。

なんでみんなは俺に戦車道をさせようとする？

もう辛い思いをしたくない。誰かが悲しむ姿を見たくない。

だから一人にしてほしい。俺に戦車に乗ってくれなんて言わないでくれ。

もう耐えられなくなる。これ以上言われると、心が持たなくなるから。

だからみほ……お願いだから、

「——もう放っておいてくれ！」

そうして怒涛のように吐き出した言葉を、俺はそう締め括った。

もう戦車道のことを言わせないように、勝手に出てきた言葉の数々を俺はそう言って終わらせた。

吊り上げた目で、俺はみほを睨む。

俺の目に映るのは、目を震わせて顔を引き攣らせるみほの顔だった。

もう、折れてくれ。そう俺は願った。

みほが顔を俯かせる。そしてみほが袖で目を拭うと、俺は安堵した。

折れた。みほは、もう俺に戦車道の話はしないと。

みほが顔を上げる。目を少しだけ赤くして、みほが俺を見ると——  
彼女は首を横に振った。

「うん。放って置かないよ」

「……お前……なんで」

自分の声が震えているのが、嫌でもわかった。

こんな最低なことを言っている俺に、なんでそんな顔が出来る？

優しく微笑む顔。なんでそんな顔を俺に向けられるんだ？

みほが俺の両手を取る。そして俺の手に僅かにある火傷の跡に、みほは触れた。

「辛かったんだね。傷ついてる時に側に居てあげられなくて、ごめんね」

違う、違う、そんなことを言われたい訳じゃない。

誰かに側に居て欲しいわけじゃない。誰かに慰めて欲しいわけでもない。

「かずくん、やっぱり優しいね。自分だけじゃなくて、誰かが傷つくのが嫌だから辞めるって」

優しくなんてない。俺は嫌になっただけだ。

俺の所為で誰かが嫌な思いをする。それが堪らなく嫌なだけなんだ。

「頑張って、認めてくれた人達が夢に出てくるのは簡単だよ。あの頃が楽しかったから、それだけ」

みほに、返す言葉がなかった。

……納得してしまった。覚めると自分を苦しめる夢だとしても、見ている時は、夢の中にいる時だけは……心の底から安堵出来ていたから。

夢の中にずっと居ることが出来たら、そう思ったことは何度もあったから。

「私はね。かずくんが戦車に乗ってる姿が好きだった。男の人でも周りに認められるくらい戦車道が上手で、操縦席に乗るかずくんの姿がカッコ良かったから」

ふと、目が熱くなる感覚が俺を襲った。喉が震える、呼吸が荒れてくるのは……どうしてだろうか？

「だから最後に訊くよ。本当にかずくんが戦車道が嫌いなら、もう言わないから——」

そして、みほは言った。

俺の顔に笑みを見せながら、赤く腫らした目を俺に向けて。

「かずくん。大洗で戦車道、私と一緒にやらない？」

楽しそうに微笑むみほに、俺は顔を俯かせた。

胸の中に色々な気持ちがせめぎ合っていた。

今までの仲間達のこと。俺を認めてくれなかった人達のこと。

自分の気持ち、自分がどうしたいのかわからなくなる。

いや、分かっている。元から分かっている、

しかし……だけど……俺は認める勇気が出なかった。

今までのことが俺を立ち止まらせる。前に進ませないと俺の身体に絡みつくような錯覚が、蝕む。

「かずくん。かずくんはどうしたいの？」

「俺は、俺は……俺は——」

何度も俺は答えようと呟く。

それに、みほはただ優しい笑みを見せていた。

PANZER. 3 試合、やります

1. そこに眠るは、思い出の戦車

とてととと、小さな少女が歩いていった。

今日も少女——オレンジペコは、また自身の主人を探して歩いていた。

聖グロリアーナ女学院の“紅茶の園”と呼ばれる場所で午後に行われる“お茶会”に姿を見せない主人を心配して、オレンジペコは小さな身体を忙しく動かして歩く。

そして今回は二番目に思いついた場所で、オレンジペコは主人を見つけることができた。

聖グロリアーナ女学院の校舎内。その内部にある戦車道チームが保有する“記念館”と呼ばれる場所に、オレンジペコの主人は居た。

記念館とは、英国風の校風を持つ聖グロリアーナの戦車道の歴史が詰まった場所だった。

今では使うことが無くなった戦車やパーツ、歴代隊長達の写真などが大きな建物ひとつに詰まっている。言わば、この学校の歴史そのモノと言える場所であった。

「ダージリン様！ 探しましたよ！」

そしてその記念館の奥。記念館に展示されている戦車が並ぶ場所に、オレンジペコの主人——ダージリンが立っていた。

ただ立ち尽くし、一両の戦車を見つめていたダージリンがオレンジペコの方を向く。

「……ペコ？ 何かあったのかしら？」

慌てていたオレンジペコを見て、ダージリンは小首を傾げた。

そんなダージリンに、オレンジペコは溜息混じりに少しだけ走って

荒くなった息を整えてから彼女は口を尖らせた。

「お茶会の時間になってもダージリン様が紅茶の園に来なかったの探しに来たんです」

「あら？　もうそんな時間？」

オレンジペコの話聞いたダージリンが腕時計を確認する。そして時刻を見ると、彼女は少しだけ目を大きくした。

「……もうこんな時間だったのね」

「珍しいですね。ダージリン様がお茶会の時間を忘れるなんて」

オレンジペコが知る限り、ダージリンは紅茶をこよなく愛している。そんな彼女がほぼ毎日行われているお茶会に出席しなかったことがオレンジペコには非常に珍しかった。

「私だって、そんな時もあるわ」

ダージリンが頬を膨らませる。少しだけ不満気ある目で、彼女はオレンジペコに口を尖らせた。

オレンジペコには、そんな不貞腐れるダージリンが面白く映り、口手を添えて慎ましく微笑んだ。

笑うオレンジペコにダージリンが「笑い過ぎよ、ペコ」と咎めると、彼女は「すいません」と一頻り笑ってから言葉を返した。

「ところで、ダージリン様？　さっきから何を見てられたのですか？」

探していた主人が見つかり、その主人が一体どのような目的があっているのか気になったオレンジペコがダージリンに問う。

先程から不貞腐れていたダージリンがその質問にキョトンと顔を惚けると、彼女は目の前に鎮座する一両の戦車を見つめて、答えた。

「……クルセイダーよ」

ダージリンが見ていたのは、一両のクルセイダー巡航戦車Mark IIIだった。

手入れを隅々までされた白銀に輝く装甲が眩しく、しかし数々の消えることのない傷が、今までのこの戦車の戦闘の歴史を物語っていた。

鎮座するクルセイダー巡航戦車。それをオレンジペコがダージリンに言われて確認すると、彼女は首を傾げた。

記念館とは、過去の歴史を展示する場所であった。つまり言ってしまうと「古いモノ」が飾られる場所であるはずなのに——ダージリンが見ていたクルセイダー巡航戦車は、それに含まれなかった。

「そう言えば前から思っていたのですが……これって、なんで記念館に置いたままなのですか？ Mark IIIですから試合で使えるんじゃない？」

かく言うオレンジペコも、この記念館には何度も足を運んだことがあった。

初めてこの学校に入学して、戦車道チームに所属してまず最初に来たのがこの記念館だった。

この学校の戦車道の歴史。それは見ているだけで心が躍るような、そんな錯覚を覚えたのを今でもオレンジペコは覚えていた。

そんななか、オレンジペコはずっと思っていたことがあった。

古い戦車が並んでいるはずなのに——一両だけ、他の戦車と比べると真新しい戦車があった。

それがこの巡航戦車クルセイダーMark III。聖グロリアーナ女学院が保有する戦車の一両だった。

チャーチル歩兵戦車、マチルダ歩兵戦車。そしてクルセイダー巡航戦車が聖グロリアーナ女学院が保有する主戦力とも言える戦車達。

他にクロムウエル巡航戦車があるが、それは先代隊長が使っていた戦車で今は記念館に鎮座されていた。

そんな主戦力とも言える戦車であるクルセイダー巡航戦車が一両だけ、記念館にあることにオレンジペコは以前から不思議だった。

何故、戦力として使えるはずの戦車を一両だけ記念館に置いているのか？

そんなオレンジペコの疑問を、ダージリンは少しだけ間を置くところ―ゆつくりと答えた。

「……これはね。和麻さんがカスタムした特注のクルセイダーなのよ」

その答えに、オレンジペコが目を大きくした。

その名を、オレンジペコは以前にダージリンの口から聞いたことがあった。

百式和麻。去年、聖グロリアーナ女学院に在籍していたと言われる男の名だった。

以前にダージリンから聞いて以来、一度も聞かなかった名を彼女が口にする。それにオレンジペコは思わず聞き返していた。

「百式さんが……？」

「ええ……この戦車はクラッチから始まり、ギアとエンジン、サスペンションを全て高校戦車道のレギュレーション内に収めて、なおかつ和麻さんが自分と聖グロのメンバーで操縦するためだけにフルチューンした特別なクルセイダーよ」

そのダージリンの話に、オレンジペコが顔を歪めた。

ダージリンの話で聞いたことがないが、百式和麻は操縦手として類稀なる才能を持つと聞いている。

「……これ、操縦出来るのですか？」

それ故に、オレンジペコは思わず訊いていた。

そんな人物がフルチューンした戦車。それは一体どれほどのモノなのか、オレンジペコには想像も出来なかったからだ。

「もちろん動くわよ。でも、今のグロリアーナのメンバーではこれを操縦出来る人はいないわ。見た目は同じだけど普通のクルセイダーとは中身が別物で、和麻さんが言うには相当ピーキーな仕様になっているの。グロリアーナでこれを操縦出来るのは——アッサムだけよ」

聖グロリアーナ女学院で操縦出来る人がいない。それだけで目の前にあるクルセイダー巡航戦車が異質だとすぐに理解出来た。

そしてダージリンが最後に言った一言に、オレンジペコは意表を突かれた。

「え、アッサム様って操縦手出来るんですか？」

意外な名前が出たことに、オレンジペコは驚いた。

三年生であるダージリンと同学年のアッサムは、共にチャール歩兵戦車に乗るオレンジペコが知る限り砲撃手だった。なのに目の前にある特製フルチューンのクルセイダー巡航戦車を操縦出来る唯一の一人と言われたことが信じられなかった。

驚くオレンジペコに、ダージリンがくすくすと小さく笑う。そして笑い終わると、彼女はクルセイダー巡航戦車を見つめながら答えた。

「知らない子も多いけど。元々、アッサムは操縦手よ。今は砲撃手に転向してるけど」

「……操縦は、上手だったのですか？」

オレンジペコが質問する。

ダージリンはそれを聞くと、誇らしげに答えた。



「私が知る限り……最高の操縦手だったわ」

ダージリンが「と言っても、和麻さんの次にだけど」と続ける。

そして楽しい表情から少しだけ表情に影が生まれると、ダージリンは寂しそうに語った。

「前にペコに話した去年の一件以降、アツサムは操縦手として戦車に乗ることを辞めたのよ。多分、あの子が操縦手として座るときは……」

そこでダージリンは言葉を止めた。ぼんやりとクルセイダー巡航戦車を見る彼女の目は、どこか悲しげであった。

オレンジペコはダージリンの止めた言葉の先を、なんとなくだが理解出来た。

——アツサムという少女が操縦手として戦車に乗る時、それは百式和麻が戦車に乗る時だと

戦車道の道から離れた百式和麻と同じく、アツサムも今まで携わっていた操縦手の道を捨てた。

それは紛れもなく百式和麻という人間を思つての行動だろう。故に、アツサムは百式和麻と同じ得意とする操縦手の道を捨てたに違いない。

それを理解したからこそ、オレンジペコはその先をダージリンに求めない。それを主人に言わせるほど、オレンジペコは不出来ではなかった。

「和麻さんの操縦は、ハッキリ言つて異質よ。まるで砲弾が戦車を避けているような錯覚さえ覚える動きをするの。相手の砲撃の間隔時間を一度見ただけで把握して、最小限の操作で避けるのを初めて見たときは——畏怖を覚えたわ」

そして止めた言葉からダージリンが話を続けたことに、オレンジペコは疑問を抱かなかった。

おそらくは、その先は踏み込んではいけない場所だと僅かならに察していた。

「そんなに恐ろしいと感じたのですか？」

「ええ、味方であることが本当に心強く。そして敵ならばあれほど恐ろしいお方はそうそういないわ」

実際に会ったことも、そして百式和麻が戦車に乗る姿を一度も見ることがないオレンジペコには、ダージリンの話が浮世離れしているような感覚だった。

それ故に、会ってみたい。そんな気持ちがオレンジペコの胸に募るのを、彼女は無意識に感じていた。

「このクルセイダーを試しに何人かに操縦させてみたけど、みんな言っていたわ。これを作った人は感覚が違うって」

「感覚、ですか？」

漠然とした話し方をするダージリンに、オレンジペコは疑問符を浮かべる。

そんなオレンジペコに対し、ダージリンは先を話すことで答えた。

「アクセルとブレーキの反応を限界まで上げてるの。繊細な操作が出来るようになって、ちょっと踏んだだけで普通以上に動くみたいだから。旋回運動もかなり普通のクルセイダーと全然違うらしいわ」

聞けば聞くほど、今オレンジペコの目の前にあるクルセイダー巡行戦車がどれほど異端か理解出来た。

普通では操縦出来ないピーキーな性能。それが出す答えは簡単だった。

「これは中学時代の和麻さんが乗っていたクルセイダーの上位互換らしいから。このクルセイダーを見れば、和麻さんの異質さはよく分かるわ」

高校戦車道と中学戦車道のレギュレーションは違う。だから高校戦車道用にチューンナップされたのだろう。

もう表舞台に上がることのないクルセイダー戦車。それがこの場にあるのは――

「どうして、元に戻さないのですか？」

もう百式和麻は、聖グロリアーナ女学院にはいない。

ならばこのフルチューンのクルセイダー巡行戦車に、役目は訪れない。

なのに未だに元ある形に戻されず、記念館に鎮座されているのは、宝の持ち腐れである。

一両の戦車。それは戦力の低下にもなり得る。それなのに去年から置かれているのは、正直なところ奇妙でもあった。

「きつと……諦めきれないのよ」

オレンジペコの問いに、ダージリンが答えた。

目を伏せて、ダージリンが腹元で手を組む。

何かを願うように、そんな印象をオレンジペコは感じた。

「我がグロリアーナの戦車道チーム、その二年と三年は罪を背負っている。その事実を隠すことしか出来ず、その罪を償うことも出来なくても。でも、私達は待っているの……心の何処かで」

泣きそうな表情で、ダージリンは告げた。

一年生であるオレンジペコの代が知らない。二年生から三年生が背負う罪というものを。

そして彼女達が待つことを、オレンジペコは問うてしまった。

「何を待っているのですか？」

問い掛けるオレンジペコの言葉に、ダージリンは彼女を一瞥すると、たどたどしく答えた。

「我が校に……和麻さんが、戻ってきてくれることを」

それは願いと言える言葉にオレンジペコには聞こえた。

ダージリンが心から願う言葉。そして彼女が想う叶わぬ願いを。

行方知れずの百式和麻が聖グロリアーナ女学院に戻ってくることは、今のところはあり得ない。

それなのにそれを願うことは、あまりにも無礼だ。

聖グロリアーナが犯した罪であるのに、なのに身勝手な願いを求めている。

しかし自分勝手だと、そう思われてもダージリン達は思わずにはいられないのだろう。

手放したくなかった。なのに手放してしまった。

自分達の意味に反して、そうなってしまったことを悔やみ。そして後悔をしている。

それがダージリン達の心を蝕んでいるのだと、オレンジペコは理解した。

「さて、話し過ぎたわね。そろそろ紅茶の園に行きましょう。みんな、待ってるわ」

一頻り話し終えたダージリンが腕時計を見ながら踵を返し、オレンジペコの横を通り過ぎる。

そんなダージリンに、オレンジペコは振り向くと背を向ける彼女に思わず訊いていた。

「あのー、ダージリン様、どうして急に記念館に来たのですか？」

ダージリンが足を止める。そして彼女は、振り向くことなく答えた。

「夢を見たのよ……和麻さんの」

表情が見えないダージリンに、オレンジペコは不意を突かれた。

そしてダージリンの背中が、聖グロリアーナを率いる大きな背中が、いつもより小さくなっているような気がした。

「夢……ですか？」

「ええ、本当に懐かしい夢を見たわ」

オレンジペコの言葉に、ダージリンが頷く。

声色が楽しそうなのに、どうしてそんなにも寂しそうな背中を見せるのか？

オレンジペコがダージリンを心配する。思い詰める彼女を思っ  
て。そうしてダージリンは、歩き出した。オレンジペコが慌てて後を追う。

そしてオレンジペコが追いかけるなか、ダージリンが歩きながら  
咳のを彼女は耳にした。

本当にポツリと、ただ誰にも告げる意図もない。小さな咳きを、オ  
レンジペコは聞いた。

「近いうち——和麻さんに会えそうな、そんな気がするのよ」

その言葉が本当になるかは、オレンジペコには知る由もなかった。

## 2. 眠る少女は、少年に苛立つ

今日は随分と空が騒がしい。

和麻はぼんやりと空を見ながら、深く溜息を吐いた。

「……寝れない」

芝生で先程まで寝ていた和麻が、目を瞑り眠ろうとする。

しかし先程「あるモノ」に叩き起こされた所為で、和麻の頭はすっかり冴えてしまっていた。

今日も和麻は授業をサボり、午前のひと時を睡眠で過ごしていた。

そんな時だった。校舎内の芝生で眠っていた和麻の上空——大洗学園艦の上空を飛行機が通り過ぎた。

耳障りとも言えるエンジン音を立てて上空を飛ぶ飛行機に、和麻は強制的に眠りから叩き起こされた訳である。

それと同時に、飛行機から学園艦に何かが降下した音が響き渡る。

全くもって和麻には不愉快極まりなかった。

思わず空を飛ぶ飛行機のパイロットに文句のひとつでも言いたくなる和麻だったが、既に騒音の元凶である飛行機は空の彼方へと飛び去っていた。

そのおかげで、和麻の衝動も叶わぬ夢となった訳だった。

そんなやり場のない苛立ちを感じながら芝生で横になり二度寝をしようとする和麻だったが、妙に目が冴えてしまっていた。

目を瞑り、和麻が再度眠ろうと試みるが頭が冴えてしまったので眠れる気がしない。

和麻には、非常に迷惑な飛行機だった。彼にとって、学校でホームルーム以外に時間を潰す方法は寝ているか、整備の勉強をするぐらい

しかない。

きつと武部沙織がそれを聞いたら、授業に出席しろと言われるに違いないが……和麻にはそんな気など全くなかった。

本来、和麻はこの学校に居てはならない人間だ。女子校であるはずの大洗女子学園に生徒として在籍していること自体、あり得ない話なのだ。

しかし実のところ、百式和麻は高校の授業を受けなくても良いと言われるほど博識ではなかった。

と言つても、一般の生徒と比べれば和麻には学がある。有名校である高い偏差値を持つ聖グロリアーナ女学院の授業についていけるくらいには、和麻も勉強は出来た。

それを学園側で考慮され、和麻には特例で授業免除を適応されている。

加えて、女子生徒達とのトラブルを避けるため、学園側が配慮した措置でもあった。

しかし授業免除を与えられても、和麻は学校に出席する為に一日二回あるホームルームにだけは出なくてはならない。これだけは和麻が守らなくてはならない唯一の例外だった。

学校への出席日数。これだけは免除の対象にならなかった。故に和麻はこうしてホームルームだけ出席し、他の授業は他の場所で時間を潰すことを余儀なくされたわけだ。

他の生徒達が授業を受けている間は、昼寝か整備士となる為の勉強。これが大洗学園艦にいる和麻の学生生活となっていた。

こんな今日のように目が冴え眠れない時は、適当に整備関連の書籍を読むことが多い和麻なのだ……今日はそんな気分にもなれなかった。

変わらない日々であるはずなのに。そんな日々であるのにも関わらず、和麻の内心はそうではなかった。

「……戦車道、か」

ぼんやりと空を眺めて、和麻がボヤいた。

みほと一緒に授業をサボった日から二日経ち、それから和麻は一人で悩むことが多くなった。

正確には、みほと口論から和麻は考えていた。

みほに戦車道を一緒にやらないかと言われて、彼女に自分の想いを吐き出してしまっただけから、和麻は葛藤していた。

『かずくん。大洗で戦車道、私と一緒にやらない？』

あの日、みほに問われたその言葉に。和麻は——返事が出来なかった。

と言うよりも、言葉が出なかったのだ。

自分の中の激しい葛藤から、本心が出なかった和麻はみほに申し訳ないと言う思いを込めて「……返事は待ってくれ」と絞り出して、答えを失ってしまった。

情けない。それが和麻が自分に与える評価だった。

あれだけみほに言っただけで、そして彼女に諭されたのに……自分の気持ちを整理できなかつたのだから。

答えなど、既に出ている。しかしそれを実行出来るほど……和麻は自分に素直にはなれなかった。

この学校で、自分が戦車に乗る。それに伴う結果が怖くて、和麻は自分の気持ちに向き合えずにいた。

正直に言えば、既に和麻にとってトラウマとも言えるほどに心を蝕む原因である「戦車道」に向き合うことなど、簡単には出来ない話だ。

だからこそ、和麻はそのトラウマと向き合っていた。

自分の気持ちは、どれが本当なのかと。

仲間と自分が傷つくことを恐れた自分と、戦車道を諦めたくない自分。どれが本当なのかと。

しかしそれから二日経つても、その答えを和麻は得られていなかった。



「……戦車か」

乗れるなら、また乗りたい。しかし乗ると、怖くなる。それが今の和麻の気持ちだった。

無理矢理乗せられるのは断固拒否の和麻だったので、乗る時は自分から乗ろうと和麻は決めている。

あの操縦席で握るギアと踏むクラッチの感触は忘れてはいない。足で踏むアクセルとブレーキの感触も、もはや自分の一部と言って良いほどに鮮明に覚えている。

しかしそれを実際にすぐ出来るかと言われれば、返事に困る和麻だった。

戦車に乗ることをやめて、もうすぐ一年になる。そのブランクがどれ程のモノなのか、和麻には知る術もなかった。

「……ん？」

ふと——そんな時、和麻は違和感を感じた。

自分の居る地面が揺れる感覚。何か大きなモノが動いているような感覚だった。

妙にこの感覚に覚えがある。それを和麻はなんとなくだが感じていた。

芝生で寝ていた体勢から、身体を起き上がらせて和麻が周りを見渡すと——和麻が見つけた視線の先に見たものは、

「……IV号戦車？」

自分の方に向かって走ってくるIV号戦車だった。

止まる素振りを見せないIV号戦車に、和麻が思わず顔を顰める。

そして自分の存在に気づいていないIV号戦車に和麻が危険を察知

して慌ててその場から起き上がると、ちょうどそれと同時にIV号戦車の右側面のハッチが開いた。

「かずくん！ 危ない！」

ハッチから顔を出したのは、みほだった。

和麻へ迫るIV号戦車。みほの言葉に和麻は咄嗟に反応すると、その場で大きく跳び上がり、手慣れた身のこなしでIV号戦車の上に跳び乗っていた。

「おい！ 前方確認くらいしろ！ 危ないだろうがッ！」

そしてIV号戦車に乗り上がるなり、和麻はIV号戦車に乗る全員にそう叫んでいた。

「うっ……ごめん」

和麻の怒声に一番に反応したみほが、和麻へ頭を下げる。

みほに続いて、他の乗員達が続いて謝ると和麻は眉を寄せて舌打ちをしていた。

そして和麻がIV号戦車の乗組員を確認すると、彼は更に顔を顰めていた。

「ん？ 武部に……五十鈴？ お前達、何してるんだ？」

見覚えのある顔ばかりの光景に、和麻は思わずそう訊いていた。

キューポラ……車長が居るべき場所に武部沙織の姿が、操縦席には五十鈴華がいた。そして装填手の席から顔を出している西住みほが、和麻の視界に映っていたのだ。

「それはごっちの台詞だよ！ 百式君こそこんなところで何してるの

!?？」

キューポラから顔を出していた沙織がそう和麻に叫ぶ。

それに和麻は「昼寝」と簡潔に返すと、沙織は溜息を吐きながら納得していた。

「それでお前達、こんなところでなんでIV号戦車なんて転がしてるんだよ?。」

動くIV号戦車の上で和麻が三人に問い掛ける。

午前中は、確か授業中のはずだった。なのに何故こんな時間からみほ達が戦車を動かしているのか、和麻には疑問しかなかった。

そんな和麻に答えたのは、装填手のハッチから顔を出すみほだった。

「えつと……今、練習試合してるの」

「はあ!?？」 みほはともかく……お前達は初心者だろ!?？ いきなり操縦させるやつがあるか!?？」

みほの答えを聞くなり、和麻が目を大きくした。

操縦するためのマニュアルなどをしっかりと理解していない状態で戦車を動かすことの危なさに、和麻は声を大きくしていた。

「だって教官がそう言ったんだもん！」

沙織が泣きそうな声色で叫ぶ。

和麻が気になりその詳細を詳しく聞くと、その内容に彼は呆れてしまっていた。

「五両でのロワイヤル戦で、みほ以外全員が素人なのにいきなり練習試合って……よくもまあそんなことを……」

驚きよりも、呆れの方が強く、和麻はむしろ感心すらしてしまっていた。

和麻がみほ達から聞くところによると、今日は戦車道連盟から教官が指導に来ているらしく。来て早々に練習試合をすと言い出して今に至るらしい。

激しく揺れるIV号戦車の上で、和麻は言葉を返す気力すら起きなかった。

「誰だよ……そんなこと言った教官は……」

「えっと、確か教官の名前は——」

和麻の呟きに、みほが答えようとする。

しかしその時——大きな音が響いた。

空気を震わせる轟音。IV号戦車からかけ離れた場所に大きな爆発が起きた。

正体を和麻とみほは、すぐに理解した。これは——戦車の砲撃音と炸裂音だった。

「かずくん！　今は危ないから中に入って！」

「ったく！　わかったよッ！」

IV号戦車の中に入るように促すみほ、和麻はすぐに彼女の言う通りに装填手ハッチからIV号戦車の中に入り込んだ。

「つてもう五人乗ってんじゃねえか！　一人多いぞ!?!？」

そしてIV号戦車の中に入った和麻は、中を見るなりそう叫んでいた。確か和麻の知る限り、IV号戦車の総乗員は五人だった。

IV号戦車の内部では砲手の席にボブヘアの女が、そして通信席には和麻が知らない長い髪の女がだらしない顔で寝ていた。

「それは良いから！ とりあえず私の隣に座って！」  
「お前の隣って、そこ二人だと狭いだろ！ 適当に座ってるから大丈夫だっての!?!?」

みほと和麻が言い合うなか、再度砲撃音が響く。

今度はIV号戦車の近くに着弾した砲撃の爆風で車体が揺れるなか、和麻はみほに叫んだ。

「おい！ 砲撃されてるぞ！ 車長が指示出せ！」

みほが車長と思つた和麻が、彼女に叫ぶ。

しかしみほが「違うよ！」と返すと、彼女は車長席にいる沙織を見遣つた。

それを見た途端、和麻は目を皿のように大きく開いていた。

「……は？ 武部？ お前が車長？」

「ああああ！ 今、絶対百式君、私のこと馬鹿にしたでしょ!?!?」

車長席から和麻を指差して沙織が叫ぶ。

和麻にとっては当然だった。沙織が車長とは、一番似合わないとハッキリと言えた。

しかしこれ以上余計なことを言うのも面倒だった和麻は、とりあえず沙織の言葉を無視することにした。

「してないしてない。良いから早く指示を出せ！」

そして車長である沙織に、和麻が催促する。

しかし沙織は、和麻の催促にアワアワと慌てていた。

「どうしたら良いのっ!?!?」

軽いパニック症状が出ていた。しかしその中で沙織は「とりあえず逃げよう!」と叫んだ。

それを操縦席の五十鈴が聞くと、IV号戦車は速度を上げて動き出した。

激しく揺れる車内で、和麻が通信手のハッチから顔を出す。そしてすぐに彼はIV号戦車の周りを確認した。

「八九式とIII突? 国の統一感ゼロだな……」

和麻がIV号戦車の後方に確認したのは、二両の戦車だった。

日本の八九式中戦車甲型。ドイツのIII号突撃砲F型。みほ達が乗るIV号戦車を追う二両が、砲身を向けていた。

そして八九式が軽機関銃をIV号戦車へ撃ち放った途端、和麻は慌てて中に戻り、ハッチを閉めた。

戦車道において、軽機関銃を撃つことはよくある。しかし軽機関銃での車両撃破は到底不可能なので威嚇射撃等の意味しか成さない。

しかし何年かに一度程度でごく稀に乗組員に当たる事実を知っていた和麻は、幼き頃から母から教わっていた通り軽機関銃が鳴った瞬間に車内へと入っていた。

「おい! III突の砲身こっち向いてるぞ! 相手の射線に入らないようにしろ!」

そしてハッチを閉めると、和麻はすぐに操縦席に座る華に叫んでいた。

「えっと……あの、どうすれば……?」

危なげな動作でギアとクラッチ操作をする華が首を傾げる。

そんな華に、和麻は思わず頭を抱えていた。

そう言えば、この女は今初めて操縦しているのだった。なら戦車の急停止と急発進なんて言われて出来るわけがない。それを理解した和麻は違う方法を華に伝えることにした。

「ならそのまま走れ、相手も素人なら動いてる戦車にまず当てられない！ その代わり絶対に車両を止めるなよ！」

「わかりました！」

相手が素人と分かっているなら、こちらは動けば良いだけだ。難しく考える必要はなかった。

止まっている的より、動いている的を動きながら当てることは容易ではない。

そうして華がIV号戦車を操縦し、追ってくる八九式とIII突から逃げていると——急に華がブレーキを踏んでいた。

「おい!? どうした!?？」

「前が……！ 渡れませんか……！」

急停止した所為で大きく車体が揺れる。思わず和麻が訊くと、華はそう返していた。

それをみほが聞くと、ハッチを開けて前方を確認するなり車内から外へ飛び出していた。

和麻がみほに続いてハッチから身体を出す。すると彼は前方を見るなり顔を強張らせた。

「流石にこれは……五十鈴には無理だな」

和麻の目の前にあったのは、大きな橋だった。

和麻達が乗るIV号戦車の横幅と同じくらいしかない橋。それを見た瞬間、和麻は納得していた。

明らかに操縦技術が必要な橋だった。渡るには正確に真つ直ぐに

走る技術がいる。

それを華に求めるのは、到底無理な話だった。

「みほ！ 危ないよ!!?」

IV号戦車から降りたみほに、沙織が叫ぶ。

しかしみほは「次の砲撃まで時間があるから大丈夫!」と返して、橋の上へと走って行った。

「みほ！ ！ どうするつもりだ!?!?」

橋の上を走っていくみほに、和麻が大声で訊く。

「ゆっくり前へ来てくださいっ!」

そんななか、みほが両手を挙げると自分の方へ向かって来いと手を動かしていた。

「アレで方向を教えてるつもりか……? 随分と雑なことを……」

みほの行動に和麻が困惑する。しかし現状、操縦しているのが華である以上、彼女の操縦で橋を渡るようにするにはみほの行った行動しかなかった。

華が操縦席から顔を出して、みほの動作を確認する。

それを頼りに華がたどたどしく操縦すると、徐行でIV号戦車が動き出した。

「曲がってる曲がってる!」

沙織が叫ぶ。橋の上を真っ直ぐに走れず、車体が橋の左側に寄っていた。その際に橋全体が左へと傾く。



「五十鈴さん！ こっちこっち！」

そんな華へ、みほが左へ曲がるように身体で指示を出していた。華はそれを見て再度操縦するが、今度は車体が反対に傾いていた。またみほが慌てて逆方向へと指示を出す、車体が方向転換をする前に――IV号戦車の車体が制御出来ず橋のワイヤーを無理矢理引き裂いた。

橋のワイヤーの一部を失った瞬間、橋が大きく揺れる。

IV号戦車の車体の重みで橋が傾く。重量が重過ぎる所為で、橋が大きく傾いていく。

「落ちるうう〜！」

「嫌だあああ〜！」

橋が傾いていくなか、華と沙織が叫んでいた。

しかしそんな悠長なことをしている彼女達を、後方から迫る八九式とⅢ突が許さなかった。

――IV号戦車に砲撃が着弾。橋が更に大きく揺れた。

「なッ――着弾したッ!?？」

荒れる車体の中で和麻が目を大きく見開く。

慌てて和麻が装填手のハッチから飛び出ると、IV号戦車に着弾した部分をすぐに確認した。

側面装甲に砲弾の着弾を確認。しかし戦車からフラッグが出てないことから、撃破扱いにはならなかった。

戦車道において、戦車から白旗のフラッグが出ることは撃破されたという扱いにある。よってIV号戦車は先程の砲撃で撃破扱いにはならなかった。

「当たり前どころが良かったか」

装甲にめり込んだ砲撃を見て、和麻は肩を落とす。当たり前どころが悪かったら確実に撃破扱いになっていた。

しかしIV号戦車が撃破されなくても——乗員はそうとは限らなかった。

「あつ……!」

「五十鈴殿!?!」

沙織とボブヘアーの女が声を揃えた。

和麻が操縦席の方を見ると、そこには力無く意識を失っている華が操縦席で倒れていた。

「華ッ! 大丈夫ッ!?!」

「操縦手失神! 行動不能!」

失神した華に、沙織が大声で名前を呼ぶが返事はなかった。そしてボブヘアーの女が、操縦手である華が失神したことを告げた。

「おい! 五十鈴! 返事をしろ!」

和麻がすぐに華の元へ駆け寄る。近くで彼が名前を呼ぶが、反応は無く力無く華は操縦席で倒れていた。

「五十鈴さんっ!」

橋の上にいたみほがそれを聞いた瞬間、全力でIV号戦車に戻って行く。

そして華を介抱する和麻の元に駆け寄ると、みほは何度か華に呼び

掛けるが、意識を失っている華からは返事はなかった。

「次の砲撃が来る前に五十鈴を退かすぞ！　　まったく、面倒だツ！」

和麻がIV号戦車の中に入る。そして操縦席で倒れる華の両脇を抱えると、彼は手慣れた動作で彼女の身体を持ち上げた。

「かずくん！　ひとまず通信手席に五十鈴さんを！」

「わかった！」

みほからそう促された和麻が抱える五十鈴を操縦席から隣の通信手の席へと移動させる。

和麻が華の身体を脇から持ち上げ、彼女の足をみほが支える。そして二人の慣れた動きで、彼女をすぐに通信手席へと移動させた。

「失神してるな、起きるまでそつとした方が良い」

意識を失った華を見た和麻が、そう判断する。

見たところ、華に頭を強く打ったなどの怪我は見られない。

ならば先程の砲撃による揺れのショックで意識を失ったのだろう。なら起きるまで安静にしているのが一番妥当な判断だった。

「華が居ないと誰が操縦するの！」

しかし沙織の言う通りだった。

IV号戦車の操縦手である華が失神による戦闘不能により、操縦手が不在になっていた。

「操縦は苦手だけど、私が……」

眠る華を見て、みほが顔を強張らせる。

そんなみほに、和麻は首を横に振っていた。

「いや……お前、操縦下手だろ。この傾いた橋の上での車体制御はかなり難しいぞ?」

「……だよね」

和麻の言葉に、みほが苦笑いする。

だが今のメンバーで唯一の経験者であるみほが操縦手をするしか方法はなかった。

ただ、一人を除けば……

「じゃあ百式君が操縦手やってよ!?」

沙織が言った言葉に、和麻は反応が一瞬遅れた。

言われた言葉を理解するなり、和麻は沙織に目を細めた。

「……俺にやれと? 操縦手を?」

睨むような目で和麻が沙織に見る。しかし沙織はそんな和麻の表情を気にかけることもなく、続けて言った。

「だって百式君、昔は操縦手だったんでしょ!? 戦車道で有名な名門学校に入学出来るくらい上手で、戦車が好きだったんでしょ!」

沙織が言ったことに、和麻は確信した。

この女は、自分ことを確実に知っている。

沙織が言った有名校——おそらく聖グロリアーナ女学院のことを言っている。

「なんで俺が操縦しないとイケないんだ? 戦車道の試合中に外に居るのが危ないから、俺はIV号戦車に仕方なく乗ってるだけだ。お前達

「がやらないといけない試合にどうして俺が関わる必要がある？」

操縦を催促する沙織に、和麻が告げる。

本来、和麻はIV号戦車に乗ることはなかった。しかし戦車道の試合中に外に居ることが危険ということを考慮して、彼は仕方なく戦車に乗らざるを得なかったただけだった。

「じゃあ百式君も私達と一緒に戦車道やろうよ！」

和麻の返事に、沙織が頬を膨らませる。

そんな沙織の何気ない一言に、和麻は目を鋭くさせた。

「……男の俺が戦車道をする。武部、お前はその意味を分かっているのか？」

目を吊り上げて、和麻が沙織へ問う。

しかし沙織は、和麻の話にただ素直に返した。

「別に男とか女とか関係ないじゃん！　なんで男がしたらいけないの!?　戦車道って武芸なんだから男の人がやったらいけない理由なんてないじゃん！」

「——ならこれを見ても、お前は同じことが言えるか？」

沙織の話に、和麻は言った。

和麻が右目の眼帯に、手を添える。そして和麻が今まで右目に付けていた眼帯を、外した。

「——かずくん」

そうして和麻が眼帯を外した瞬間、みほが声を震わせた。

和麻の眼帯の下——彼の右目を見た瞬間、沙織は目を大きくした。

「男が戦車道をする事。その対価がコレなんだよ」

外した眼帯を手にして、和麻が沙織を見つめる。

顔の右半分は、ただれたように変色した肌。それは紛れもなく火傷による色素沈着の跡だった。額から目、そして頬と大きな跡が、和麻の顔にあった。

そして和麻の右目を見て、IV号戦車にいるメンバー達が息を止めた。

右目に大きな傷。まるで過去に何か突き刺さったような跡が、痛々しく残っていた。

「武部、それでもお前は俺に戦車を操縦しろと言うのか？ 俺に、このIV号戦車を操縦しろと？」

「あ、そんな………」

和麻の目を見た沙織が動揺する。

思った以上の傷跡に、そしてその痛々しさに、沙織は見ているだけで気分が悪くなっていた。

あまりにも酷い。それが沙織の偽りない言葉だった。

そして自分が言ってしまった言葉に、沙織は後悔が募っていた。

「俺が戦車を操縦すると、みんなきつと後悔する。それが怖くて、俺は戦車に乗らないんだよ」

外していた眼帯をまた右目に取り付けて、和麻が溜息混じりに言った。

「……………ごめんなさい」

和麻が眼帯を付けたのを見て、沙織が俯きながら謝罪の言葉を告げ

る。

和麻はそんな沙織に「別に気にしてない」と答えると、続けて言った。

「武部。お前に、この傷を見ても俺に戦車に乗れというなら……」

砲撃の音が響く中、和麻が沙織に問う。

自分のことを知っていて、男が戦車をやることの意味を理解して……それでも乗れと言うのなら。

和麻を見る沙織が口を震わせる。

和麻の問いに、沙織は返事が出来なかった。

沙織の心に、ある不安が過る。

きっと彼が戦車に乗ったら、もしかしたらまた彼が傷つくかもしれない。

その考えが最初に出た時点で、武部沙織という女は優しい女と言えた。

痛そう。不気味。そんなことを一切思わず、ただ戦車道を彼にさせることの不安が最初に出たことが、沙織の優しさを表していた。

「……どうする？」

和麻が沙織に、再度問い掛ける。

そして沙織か返事に戸惑うなか——それは起きた。

——ゴトンとIV号戦車が揺れた

「「えっ？」」

和麻以外の三人が声を揃えた。そして和麻も、すぐに状況を理解した。

動いている。IV号戦車が動いていると。

それに気付いた和麻達が操縦手席を見遣ると、そこに居た女に和麻は顔を顰めた。

「……お前、さっきまで寝てなかったか？」

操縦手席に座っていたのは、先程から戦車の中で寝ていた少女だった。

操縦手席で本を広げながら、少女はまるで知識で知っていることを再確認するようにたどたどしい操縦をしていた。

「さっき起きた。お前の話を聞いてるとムカついたから、私が操縦する」

和麻の言葉に、少女がつまりならぬように答えた。

そしてIV号戦車の傾いた車体を直しながら、少女は続けた。

「お前のことなんて、私は何も知らない。だけどそんなウジウジしてるのを見ると腹が立つ。だからお前は何もしなくていい」

少女が広げた本を見ながら、操縦する。

そして片手間に、和麻に言い放つ。

それはまるで——和麻を邪魔だと言いたいような印象を受ける声色だった。



### 3. 少女の乗る理由、少年の笑顔

「私はお前がムカつく。だから操縦は私がする」

操縦手席で本を広げながら、髪の毛の長い少女は和麻にそう言い放った。

「お前に操縦が『出来る』って言うのか？」

顔を顰める和麻が少女に言い返す。

その和麻の言葉に、少女は顎で目の前に広げた本を指した。

「今覚えた。だから問題ない」

少女が広げていたのは、IV号戦車にあったマニュアル本だった。

和麻が見る限り、目の前で操縦手をしている少女は確実に先程まで寝ていた。

ならばこの少女は、起きてから僅かたった数分で戦車の操縦方法をマニュアルを見ただけで出来ると言い放ったのだ。

「流石は麻子……学年主席なだけある」

沙織が感嘆の声を漏らす。少女の名前を知っているということは、この女は沙織と同じ二年生と和麻は推察した。

そしてこの少女を学年主席と沙織は言った。目の前の女は二年生の中で最も優秀な生徒ということだろう。

だがそんな優秀という言葉では、和麻は納得しなかった。

「ただマニュアルを見ただけで操縦が出来ると思うな。お前、操縦手を舐めんなよ」

麻子という少女の発言に、和麻は内心で激怒していた。

そんなに簡単な世界ではない。ただアクセルを踏み、ギアを変え、戦車を操縦する。文字だけで見れば簡単だろうが、操縦手に求められるのはそれ以上なのだ。

車長の指示通りに的確に動かす技術。操縦手自身の咄嗟の判断、そして走っている現在地と戦場での状況を理解して最適な操縦をすることを常に求められる。

それが出来て、初めて操縦手は自分の口から戦車を操縦出来ると言えるのだ。

和麻は自身がその段階に進み、そしてそれを母親に認められたのは……戦車を操縦して五年以上の歳月を掛けた中学三年の頃だ。

それを身に染みて理解しているからこそ、簡単に出来ると言い張る麻子に和麻は苛立ちを感じていた。

「こんなのマニュアル見ただけで十分だ。お前が操縦するくらいなら私がした方がマシだ」

しかし麻子は依然として態度を変えなかった。

橋の上で傾いていた車体を麻子が修正し、彼女は和麻を一瞥する。

興味が無さそうに、そしてつまらなそうに和麻を見る麻子の瞳に、和麻は頭の血流が激しくなる錯覚を覚える。

「はっ……！ 一体何があつたんです!?」

しかしそんな最中、戦車が動く振動で今まで意識を失っていた華が驚くように目を覚ましていた。

キョロキョロと周りを見回す華に、みほが気付くと彼女に心配する声を掛けた。

「五十鈴さん、大丈夫？」

「あつ……はい！ すいません！」

「良いから休んでて」

「いえ！ 大丈夫です！」

通信手席で頷く華に、みほが呆れたように苦笑いする。

和麻と麻子との良いとは言えない雰囲気の中で起きた華に、みほは思わず引き攣った笑みを浮かべた。

沙織とボブヘアーの少女がその状況で困惑する中、和麻はそんなことを一切気にすることなく、視線の先にいる麻子に冷たい目を送った。

「……お前が俺に喧嘩を売ってるのは十分にわかった。そこまで言うならやってみろ。そこまで言ってお前が下手な操縦したら……分かってるだろうな？」

静かに和麻が告げる。内心の怒りを抑えながら、その目を鋭くさせて麻子に向ける。

対して、麻子は知らぬ顔と言いたげに飄々としていた。

「ふん、嫌々操縦するやつよりマシだ。お前はそこで黙って座ってる」

「ならお手並み拝見と行こうか、寝坊助女」

「精々お前はそこでウジウジしてろ、逃げ腰野郎」

互いに声を荒げず静かに告げた。

しかし、二人のその目は鋭く。互いに睨み合うと、麻子はすぐに行動した。

まずは車体の制御を行った。次は敵車両との戦闘だった。

「あの……私が気絶にしている間に何かあったんですか？」

「五十鈴さん。とりあえずは……今は気にしないで良いよ」

みほが不思議そうにする華にそう告げる。

操縦手席に座る麻子とその後ろに座る和麻を交互に見つめながら、華は小首を傾げて「えつと……わかりました」と答えた。

みほと沙織から見れば、よくこんな状況でそんな言葉が華から出てきたとしか思えなかった。

麻子と和麻が言い争っていることで察することをしなかったのだろう。そんな華に、みほと沙織は改めて悪い意味で感心していた。

「車長。指示」

「車長、指示をこいつに出してやれ。こいつがどこまでやれるか見ものだ」

しかしそんな華を、二人は一貫して無視していた。

麻子が気だるく言い放つ。そして和麻も操縦手席の近くで雑に座りながら、そう言い放った。

二人の険悪な雰囲気と言葉に、沙織があわあわと慌てる——しかしそれを理解して、指示を出した少女が居た。

「秋山さん！ 砲塔回して！ 冷泉さん、徐行してください！」

みほが砲撃手に座る少女に声をあげた。

その指示に冷泉こと——麻子が頷き、秋山という女は「はい！」と返事をする、すぐに行動した。

IV号戦車に対して、後方に位置する八九式中戦車甲型とIII号突撃砲F型へ砲塔を回す。

ゆつくりとIV号戦車の砲身が回り出す。しかし、それを黙って見ている相手ではなかった。

——二両からの砲撃がIV号戦車へ放たれる

III号突撃砲F型——III号突が放つ砲撃がIV号戦車の横を通り抜

ける。しかし八九式中戦車甲型——八九式の砲撃がIV号戦車の側面装甲に衝突するが、運良く砲弾が装甲によつて弾かれた。

だが砲撃の装甲衝突による衝撃。それはIV号戦車内に振動を与えた。

「危ない危ない！」

揺れる戦車内で慌てる沙織に、それに反してみほは冷静に状況を把握する。

装填手席のハッチからみほが身体を乗り出し、敵車両の位置を確認。そしてIV号戦車の砲塔が八九式へ向けられた瞬間、彼女は秋山に指示を出した。

「次の砲撃まで時間はあります！ ゆっくりと照準を合わせて、合図と一緒に発射してください！」

「はいっ！」

「八九式の装甲ならこの距離で抜けます！ 慌てず、ゆっくりと！」

秋山が砲撃手席からみほの指示通りに動く。照準を敵車両へ定め、彼女がみほの合図を待つ。

そして橋の上で揺れていた車体の揺れが治しずまるのと同じタイミングで、みほは告げた。

「——撃てッ！」

瞬間、空気が震えた。IV号戦車の砲塔から、轟音が響いた。

砲撃音と共に、IV号戦車D型の短砲身24口径7.5cm砲から放たれた砲弾が八九式へと飛翔した。

安定した車体。そして風もないこの状態で、砲弾を邪魔するモノなどない。

そして数秒後——IV号戦車から放たれた砲弾は八九式への装甲を

貫いた。

小さな爆発。それと同時に八九式の車両から白い旗が飛び出した。戦車道において、戦車から白い旗が出る意味はただひとつ。それは車両撃破の合図だった。

「まずは一両か」

八九式から上がるフラッグを見て、和麻は静かに呟いた。残るはIII突。和麻から見れば、ここからが正念場だった。

「うわ……す……す……！」

「じんじんします……！」

IV号戦車から放たれた砲撃の余韻。それに沙織と秋山が声を震わせていた。

そして敵車両を撃破したことによる高揚感が、二人の感情を更に高めていた。

目を大きくして、秋山と沙織が感動するなか——一人だけベクトルが違う感動を覚える少女が居た。

「なんだか……気持ち良い……！」

通信手席に座る華だけが、砲撃の余韻に“快感”を感じていた。それを聞いた和麻が内心で思う。

——この女、絶対に砲撃手向きの性格だと

砲弾を撃つことに快感を覚える人間。それは間違いなく優秀な大数の砲撃手が持つ感覚のひとつだ。

この感覚があるからと言って、才能があるとは限らない。だがそんな快感を感じた時点で、この女は今後砲撃手をするだろうと和麻は確信する。

一度得た快感を、人間はまた求める。それ故に、きつとこの女は自

分から言い出すに違いないと。

「まずは一両撃破です！ 次の準備を！」

空になった砲塔にみほが次の砲弾を詰めるなか、初めて車両を撃破したことにメンバー全員がそれぞれ違った感動を感じていた。

「さあ、寝坊助女。ここからお前の仕事だ」

胡座で座りながら、和麻が麻子に静かに告げた。

麻子が横目で和麻を一瞥する。そして小さな舌打ちを鳴らした。

「お前は黙つてろ、弱腰野郎。西住さん、私に気にせず『普通』に指示を出してくれ。言う通りに動く」

そして麻子がみほに指示を仰ぐ。

みほ自身も和麻と麻子の険悪な雰囲気を感じていたが、彼女はそれを理解して、和麻と麻子の言葉に頷いた。

和麻と麻子が操縦が出来るか出来ないかで揉めているなら、自分はその二人が求める指示を出さなければならぬと。

「わかりました。では、全速でバックしてください。III突の砲撃に注意しなくてはならないので、私の合図があつたら急停車と前進をしてください」

「了解した」

みほの指示により、麻子が操縦手を開始する。

橋の上だったIV号戦車をまずはIII突がいる整地へ。橋の上にいる状況ではどちらにせよ、狙い撃ちをされてしまう。

「III突の砲塔は回らない。なら常に敵車両の射線外にすることを

心掛ける」

和麻が麻子に助言する。

流石の和麻も操縦において「ど」が付く素人である麻子に、助言のひとつかふたつはくれてやろうと思っていた。

敵車両の知識。それは紛れもなく操縦手に関わる必須事項だったからだ。それを知らないから操縦が上手く出来ないなどと仮に言われるのも、和麻には不愉快極まりないからこそその考えでもあった。

III突の持つ砲塔は、長砲身の75mm StuK 40 L/43。構造上、この車両は砲塔が回らない。

ならば結論、III突の正面に居なければその砲撃がIV号戦車に当たることはまずない。

「うるさい、お前は黙っているろ」

しかし和麻の助言を麻子は一蹴した。

そんな麻子に、和麻は舌打ちを鳴らしながら冷たい視線で彼女に告げた。

「素人が調子に乗るな。良いから聞け、目の前にいるIII突の砲撃間隔時間は約十七秒だ。向こうもお前と同じど素人だから装填がかなり遅い。次の砲撃音から頭の中でカウントしろ」

そして和麻は麻子へ操縦手としての情報を与える。

麻子が「聞くかボケ」と口を返し、和麻は「黙って聞け馬鹿たれ」と言い返す。

そんな二人のやりとりに、ようやく慣れてきた沙織は二人の言い争いをあまり気にすることなく疑問をみほに訊いていた。

「え、百式君。もしかしてずっと数えてたの？」



沙織の疑問とは、和麻が告げた敵車両の砲撃間隔時間についてだった。

先程、和麻が乗車してからIII突からIV号戦車に放たれた砲撃は三発。

たったそれだけの砲撃回数で、和麻はIII突から放たれる砲撃間隔時間を覚えたと言っても過言ではないことを言ったのだ。

「うん、多分ね。かずくんの得意分野だよ。普通は車長が把握するんだけど、かずくんは車長と操縦手どっちも出来るから並列して秒数を覚えてるみたい」

本来、和麻の行った行動——敵車両の砲撃間隔時間の把握は通常、車長が行う。

それを元に、車長は操縦手及び砲撃手へ指示を出す。敵砲撃の回避、そして反撃。時間短縮も考慮し、車長は冷静な判断を要求される場面がある。

「それが普通なの？」

「全然、普通は戦場の中で戦車を操縦しながら頭の中で別のことを考えるなんて出来ないよ」

沙織の質問に、みほが苦笑いで答えた。

そうである。操縦手は車長の指示で動くのみなので、本来しなくていい思考だった。

「だけど、かずくんは無意識で数えられるみたいなの。初めの砲撃音から次の砲撃音までの時間を自然に数えられるって」

「え、でもさつきみたいに二両から砲撃の音が鳴った時はどうするの？」

「違う車両なら……音が違うから分かるんだって」

みほの返事に、沙織が言葉を失った。

自分には先程の二両の砲撃音の違いなど、聞き分けられない。それがどれだけ奇妙で、異質かを沙織は理解した。

やはり、以前にみほが言った通り……この人は普通じゃない。それを身に染みて理解した瞬間だった。

「十秒経過。そろそろ来る」

和麻が告げる。III突から放たれる砲撃の時間を。

それを聞いた瞬間、みほはハッチから顔を出すとIII突の砲塔がIV号戦車に向いてないか確認した。

——III突が動く、回らない砲塔をIV号戦車へ向けようと

そしてIII突の砲塔がIV号戦車へ向いた瞬間、みほは麻子に叫んだ。

「——停車ッ！」

みほの指示から、麻子が反応する。

指示が聞こえたと同時に、麻子がブレーキを踏みつける。そして停車する寸前に、クラッチ操作からアクセルを素早く踏んでいた。

III突から砲撃音が響く。しかし放たれた砲弾の先に既に目標は無く、IV号戦車は無事橋の上から整地へと移動していた。

「大口叩くだけある。よく急停止と急発進が出来たな」

整地を走るIV号戦車を操る麻子に、和麻は少しだけ感心した声色で言った。

和麻が見た限り、麻子の操縦は確かに初めてにしては上出来だった。

まだ拙い部分が多いが、今まさに初めて操縦手として座っているのなら……和麻は少しだけ認めざるを得なかった。

この女……冷泉麻子に、確かに天才と言われる由縁はあると。たった一度のマニユアル読破でここまで操縦出来るのなら、それは本物だろうと。

「当たり前だ。書いてある通りにやれば良いだけだ」

「素直に受け取れ、寝坊助女」

しかし毒舌を止めない麻子に、和麻は苛立つ。この女に感心した自分が恥ずかしいとつい思ってしまった。

「III突の側面に走ってください！ この距離なら装甲が抜けるから大丈夫！」

そしてみほが絶えず指示を飛ばす。

麻子が操作し、IV号戦車がIII突の側面へと向かう。

「おい、寝坊助女。今のカウントは何秒だ？」

そんななか、和麻が麻子へ質問する。

「数えてるわけないだろう。馬鹿たれ」

「さっき言ったよな。数えろって」

「なんで私が、お前の指示を聞かなきゃいけないんだ？」

みほの指示とは一変して、和麻の助言を麻子は決して聞かない。その麻子の言葉に和麻は目を据わらせると、ハッキリと言った。

「俺がお前より、何倍も操縦が上手いからだ。素人なら助言くらい聞け」

和麻も、自分自身で驚く発言だった。

まさか他人に、自分の方が上手いから指示を聞けなどと言う言葉が出てくるとは夢にも思っただけだった。

無意識的に、この麻子に自分は期待しているらしい。

和麻は今の言葉で、それを理解した。

「嫌だ。聞かない」

「勝てる試合を捨ててもか？」

「そうだ。お前の指示で勝つくらいなら、負けたほうがマシだ」

「……なら、どうしたら聞く？」

麻子の頑固さに、和麻は嫌気が刺す。そして思わず出てしまった言葉を今更訂正する気にもならなかった。

麻子が和麻を一瞥する。そしてそのまま麻子が沙織をチラリと見ると、彼女は和麻へこう言っていた。

「後でちゃんと沙織に謝れ。そうしたらお前の言うことを聞いてやる」

その言葉に、和麻は目を大きくした。

そしてこの女が、操縦手として急に乗り出した理由も同時に理解した。

和麻が沙織を責めるような話し方をしたから。たったそれだけの理由で、麻子は操縦手として今座っているのだと。

確かに、和麻も言い過ぎたと思った。

しかし無理矢理戦車に乗れと言われる和麻として、沙織の言葉を受け入れることなど到底出来なかった。

結果として、和麻は自分の傷付いた目を見せてまで、沙織を責めてしまった。

それを麻子は許せなかった。ただそれだけなのだ。

「え、私!?」

麻子の口から出て来た自分の名前に、沙織が目を大きくする。そんな沙織を横目に見ながら、和麻は少し考えると——彼はゆっくりと頷いた。

「……わかった。さつきは流石に言い過ぎたと思ってる。試合が終わったら、ちゃんと謝る」

「約束したからな。破ったら許さない」

「んなことで約束破るか馬鹿たれ。それで、俺の話は聞くのか？」

「良いだろう。聞いてやる……ああ、ちなみに今のカウントは十二秒だ」

「しつかり数えてんじやねえか……この寝坊助女が」

二人の会話を他所に、みほがハッチから指示を出した。

「秋山さん！ 砲撃準備！」

「了解であります！」

秋山にみほが指示を出す。常に砲塔をIII突へ向けて回していた彼女に、その指示は容易だった。

「次の砲撃を回避して急停車！ 私の合図で撃ってください！」

絶えずみほから指示が出る。それに麻子と秋山が返事をする、すぐに行動した。

旋回してIII突がIV号戦車へ砲塔と向ける。しかし動いている戦車に照準を合わせることができず、砲撃はまだない。

そして走り続けるIV号戦車に痺れを切らしたのか、次の瞬間——III突から砲撃が放たれた。

「止まる必要はない。そのままアクセル踏み切って走れ。絶対に当た

らない」

砲撃音が鳴る直前、僅かな時間で和麻は麻子へ告げた。

麻子が思い切りアクセルを踏む。そして止まることのないIV号戦車の後方を、III突の砲弾が通り抜けた。

「止まれ、もうこっちの砲塔は向いてる」

空気が震える音がIV号戦車の横を通り抜けて、和麻は静かに言った。

和麻の言葉と共に、麻子がIV号戦車を止める。そしてIV号戦車がIII突の側面に停止した瞬間——みほの声が響いた。

「——撃てツツ!!？」

IV号戦車から鳴り響く轟音。そして直後に小さな爆発音が響いた。和麻がハッチを開けて、III突を見る。そして見えた光景に、彼は口角を上げると——どこか楽しそうに頬を緩めた。

「撃破……よくやったよ」

III突から飛び出した小さな白い旗を見て、和麻はハッチを閉めながら呟いた。

「ふう……なんとかかなりましたね」

撃破したIII突を見て、みほが安堵の声を漏らす。

しかし次の瞬間、IV号戦車の外から大きな砲撃音が響いた。

「そう言えば、敵は四両だったな」

沙織が慌てふためくIV号戦車の中で、和麻が思い出したように呟いた。

そして和麻がハッチを開けて、音の方へ向くと——彼は視線の先にいる車両の名を告げた。

「アメリカのM3リーとドイツの38か」

橋を跨いで、先にいるのはM3中戦車リーと38t戦車だった。

あれを倒せば、映えてIV号戦車は全車両撃破となる。

先の二両を確認して、和麻はハッチからIV号戦車に乗るメンバーに笑みを見せると——彼は楽しそうに独り言のように言った。

「あの二両倒したら……お前達が一番だな。どうする？ なんならお前達が倒すか？」

楽しそうに話す和麻に、みほ達がキョトンと惚けた。

それは今まで大洗女子学園で見たことがない。楽しそうな笑顔だった。

みほが笑みを浮かべる。そして沙織が惚けた後、腕を掲げて叫んだ。

「こうなったらやつちやおうよ！ あの生徒会にギャフンと言わせてやるんだから！」

沙織が叫ぶと、和麻以外のみんなが『おーっ!!?』と声を揃える。

そんな沙織の言葉に、和麻は良いことを聞いたとほくそ笑んだ。

「へえ、あのどっちなかに生徒会が乗ってるのか？」

「かずくん……すごい悪い顔してるよ？」

和麻の顔を見たみほが、引き攣った笑みを見せる。  
しかし和麻は、そんなことを気にする素振りもなく意地の悪い笑みを見せた。

「生徒会には散々嫌な思いをさせられたからな。こんな時くらい……仕返ししてもバチは当たらないだろう？」

和麻の話に、沙織と五十鈴が頷いた。

どうやら、IV号戦車の一部のメンバーは生徒会に不満を持っているらしい。

みほはそれを理解すると、呆れたようにため息を吐いた。

そして肩を落としながら、みほは全員に告げた。

「それでは、残りの二両と交戦します！ 各人、戦闘準備！」

みほの言葉に、全員が声を揃えて『了解！』と叫ぶ。

そしてIV号戦車は、先にいる二両との交戦のために前進を始めた。



#### 4. 喧嘩する二人、懐かしの知人

『試合終了了！ 勝者Aチーム！』

試合終了の通信が響いた。

Aチーム——それはIV号戦車に乗るみほ達だった。

III突と八九式を撃破し、そして続けて現れたM3中戦車リーと38t戦車B/C型との戦いで、IV号戦車に乗るAチームは無事勝利を手にした。

と言つても、その二両の試合内容は大したものではなかった。

履帯が泥濘ぬかるみにはまり、無理矢理駆動した所為でエンジントラブルにより撃破扱いになったM3リー。

そしてIV号戦車と対峙した38t戦車は、IV号戦車へ砲撃を何度か放つが全て掠りもせずに一撃で撃破された。

苦戦を強いられることもなく、難なく全ての車両を撃破したIV号戦車もといAチームは試合終了の合図の後、指定された集合地点に移動することとなった。

指定された場所は、以前にIV号戦車が放置されていた学内の倉庫前だった。

試合が終わり、気付けば夕方だった。IV号戦車が倉庫に着くと、そこには既に和麻とみほ達五人以外の戦車道受講者達が揃っていて、彼女達の到着を待っていた。

「いやいや、やられちゃったねえ〜」

到着したみほ達がIV号戦車から降りると、角谷杏が煤で汚れた顔で参つたと笑っていた。

砲撃直撃、またはそれに準ずる爆発等の車両撃破で時折車内の乗員が煤などに晒され、身体中が汚れることが多々ある。

そこで浮上する疑問——何故、砲撃及び爆発があつても戦車内の乗

員がほぼ無傷なのは、それは戦車道の特殊規則により守られているからだった。

戦車道の特殊規則により、全ての戦車に“ある加工”を義務付けられている。

特殊な素材を使った強度が非常に高いカーボンで車内をコーティングすること。これが最も守られなくてはならない戦車道の必須特殊規則だった。

これがあるから、戦車に爆発等が起きても車内にいる乗員を必ず守り、選手が大怪我をしないように配慮されているわけである。

故に、IV号戦車を除く撃破された戦車道受講者達は皆見たように身体中に怪我はないが、身体や制服が汚れているのが確認出来た。

「お前、後でちゃんと約束守れ。分かったか？」

「お前さつきからしつこいぞ。その言葉、今ので何度目か言ってやるうか？」

「うるさい、良いからお前はわかつたって言えば良い」

「……いい加減に俺に対するその態度直さないと張つ倒すぞ、この寝坊助女が」

「やれるものならやってみろ、弱腰野郎」

みほ達が続けてIV号戦車から出て行き、そして最後に和麻と麻子が口論しながら全員の前に姿を現した瞬間——皆が目を大きくしていた。

「え？　なんで百式が戦車から出てきたの？」

運動着を着た背丈の小さい少女が和麻を見て指を向ける。

そして何故、和麻と麻子が口論しているのかとIV号戦車メンバー以外が不思議に思っていた。

「二人とも、そろそろやめなよ。みんな見てるよ？　教官も見てるし」

そんな口論している二人に、沙織が呆れたように注意する。

沙織に注意されて顔を強張らせる二人が嫌々顔を見合わせると、互いに舌打ちを鳴らしてそっぽを向いた。

口論はやめても、喧嘩はやめないらしい。それに沙織が気づくと、呆れて溜息を思わず吐いていた。

「おお〜！ まさか百式ちゃんが乗ってるとはねえ〜！ もしかして戦車道、やる気になった？」

そんな二人を見た杏が、和麻ににひひと笑みを浮かべる。

和麻は杏に眉を寄せると、彼は杏に対して首を横に振っていた。

「別に俺はあんたの思惑通りになる気はない。仕方ないから乗っただけだ」

「連れないねえー百式ちゃんは、そろそろ素直になっても良いんじゃない？」

「ならあんたのその小馬鹿にした態度をまずはやめることだな」

「あらら、こりや参った」

和麻の言葉に、杏が苦笑いする。しかし彼女は和麻の言う通りにする気などなく、一貫して態度を変えなかった。

和麻の杏への態度に、メガネの女が「百式！ 会長に向かってその態度はなんだ!?!？」と声を荒げるが、隣にいた大人しそうな女に抑えられていた。

「さて、みんな揃ったわね！ 全員集合！」

そんな皆が騒ぐなか——一人の女の声が響いた。

騒々しい中で、よく響く声だった。凜とした、活気ある雰囲気を感じる声色。その声を和麻は以前に聞いたことがあった。

声の元に、和麻以外のメンバー全員が揃って集まっていく。

「……あの人は」

そんな声の主を和麻が見ると、彼は少しだけ驚いたような表情を見せた。

自衛官の服に身を包んだショートカットの女性だった。凜とした大人の雰囲気醸し出しながらも、どこか綺麗な顔立ちから活気ある一面を感じる。

足から頭まで、まるで一本の筋が通っているような立ち姿は、年齢以上に大人の女性という雰囲気を感ぜられた。

「……あらっ？」

全員が集まったのを確認したその女性が、ふと孤立した和麻の方を向く。

そしてその瞬間——先程まで笑顔だった彼女の顔が和麻の顔を見た途端、驚愕と言わんばかりに驚いた表情を作っていた。

「あなた……もしかして和麻君!?!？」

軍服を着た女が和麻を見ると、目を大きくして彼の名を告げた。

彼女がすぐに和麻の元に歩き出す。そして近づいた和麻の間近で顔を確かめると、納得したように彼女は息を飲んだ。

「……まさか、こんなところで会えるとは思わなかったわ」

和麻の両肩をガシツと掴み、軍服の女が微笑む。

そんな彼女に和麻が苦笑すると、深々と頭を下げていた。

「大変、お久しぶりです。蝶野さん」

「本当に久しぶりね。和麻君……戦車道、ちゃんと続けてくれてたのね」

「いえ……今回は仕方なくIV号に乗っただけで、戦車には『あの時』から乗ってませんでした」

亜美の嬉しそうな声色に、和麻が申し訳なさそうに返す。

和麻が大洗で初めて戦車に乗ったのは、先日倉庫に放置されていたIV号戦車の点検で乗った時だ。

それを含めて、今回で和麻は二回しか戦車に乗っていない。

「そうだったのね。悪いことを言ったわ」

亜美はその言葉に納得すると、小さく頷いた。

「……すみません」

「良いのよ、気にしないで。ただ私は、和麻君のことを心配してただけよ。それに……こうしてあなたとまた会うことが出来て本当に良かったわ」

「本当に、ご心配をお掛けしました」

頭を下げる和麻に、蝶野が彼の肩を「気にしない！」と揺ると無理矢理彼の顔を上げさせた。

それに和麻が驚きながらも微笑ましい笑みを見せる蝶野に、彼はまた頭を下げていた。

「いえ、俺は……蝶野さんには迷惑を掛けたと思っています。去年の『あの時』も、蝶野さんには随分と無理を言ったと思っていますから」

頭を下げて和麻がそう言うと、蝶野は少しだけ悲しそうな表情を見せた。

和麻の脳裏に過るよぎるのは、最後に亜美と会った記憶だった。

白い病室で頑なに頭を下げる自分と、それを納得出来ないような表情で見つめる亜美と母親。

それを思い出すと、和麻にはただひたすらに亜美に申し訳なさを感じていた。

そんな和麻に、亜美は首を小さく横に振っていた。

「……あの時の話は後でしましょう。その眼帯のことも……とりあえずは、また和麻君の元気そうな姿が見れて良かったわ」

蝶野が自分より背の高い和麻の頭をガシガシと雑に撫でる。

そして和麻の背中を手で叩くと、蝶野は「ほら、和麻君も来なさい」と促して皆の元へと戻って行った。

「……変わらないな。あの人は」

撫でられた後のくしゃくしゃになった髪を直しながら、和麻が呟く。

あの人に頭を撫でられたのは、随分と久しぶりだった。

蝶野亜美——それが彼女の名前だった。和麻が小学生の頃、母親から友人と紹介された自衛官の一人だった。

和麻にとって、亜美とは去年以来の再会だった。そんな懐かしくも男らしい亜美に、和麻は何も言わずただ彼女の後について行った。

「あの百式君が敬語使ってる……っ？」

そして和麻が整列した皆の元に行くと、沙織が目を大きくして彼のことを凝視していた。

——本当に気分を台無しにしてくれる

不快なことを言い出した沙織に眉を寄せながら、和麻は彼女に深く溜息を吐いた。

「お前が普段、どんな風に乗俺を見てるかよく分かったよ」

「え……だって、百式君だよ？」

「どういうことか説明してもらおうか？」

真顔で告げる沙織に、和麻が額に血管を浮かび上がらせる。

確かにこの女から馬鹿にされている。それを理解した和麻は思わず握り締めた右拳を沙織に見せながら、彼女に顔を引き攣らせた。

「お前は不良だってことだ。なんだお前、やっぱり馬鹿だな」

拳を見せる和麻に沙織が後ずさった時、和麻の隣に立っていた麻子があっけらかんと言った。

和麻が麻子を睨む。しかし麻子はまっすぐ前を向いたまま、彼に見向きもしなかった。

「やっぱり張つ倒されたいみたいだな。お前」

「事実を言ったまでだ。言い返せるものなら言い返してみろ」

「……ちよつとお前、こつち向け」

麻子の態度に、和麻が彼女に促す。

そんな和麻に麻子が舌打ちをしながら彼の方に向く——すると、彼はおもむろに向かい合った麻子の両頬をいきなり掴み、*“割と”*強い力で左右に両頬を引っ張った。

「ふがつー！」

「そんな舐めたこと言うのはこの口か？ んん？ この口が悪いのか？」

「いだい！ いだい！ ふあなせーっ！」

両頬を引っ張られた麻子はその場で暴れる。しかし和麻はそれを無理矢理押さえつけながら、心の中で十秒数えるまで彼女の頬を引っ

張り続けた。

そして十秒経ち和麻が麻子の頬から手を離すと、麻子は慌てて彼から距離を置いた。

「——ふおのっ!!?」

しかし離れる寸前に、和麻の脇腹にすかさず拳を打ち込むのを忘れない辺り……麻子も肝が据わっていた。

脇腹に激痛。和麻は脇腹を押さええながら、その場で片膝を突いて蹲うずくまった。

「ぬおお……この女……ッ!」

「ふおまえがふあきにやったふあらだ、ふあんせいしろ」

真っ赤になった両頬を摩りながら、麻子が涙目で和麻に言い放つ。流石の和麻も、こればかりは頭に血が上った瞬間だった。

今、目の前にいる少女にジャイアントスイングでもしてやろうかと本気で思った。背丈が小さい分、気持ち良いくらいに回してやれると思いつながら。

「はいはい、二人が仲良しなのは良いから。教官も笑ってるよ?」

そんな一触即発の二人に、沙織が呆れるように話す。

その言葉を聞いた瞬間、二人が揃って沙織を睨むと、

「こんな奴と仲良しでたまるかッ!?!?」

そう、互いに指を向けながら声を揃えていた。

しかし声が揃った瞬間、また二人が「真似すんな!」と声を合わせる。

そしてまた和麻と麻子が睨み合う。全くもって行動と言動が同じ



だった。

「はいはい！ 騒ぐのはそこまで！ 全員、チーム毎に整列する！」

そんな光景に、微笑ましく笑みを浮かべながら大きな音で手を叩いて、亜美は全員に再度指示を出した。

流石の二人も教官である亜美に反抗する気はないらしく、二人は舌打ちをすると亜美の指示通りに行動した。

しかし和麻は今回の戦車道のチーム振り分けに参加していない。なので、亜美の全員整列の声と共にその場から立ち去ろうとしたが――

「ちなみに帰ろうとしてる和麻君は、ちゃんとAチームに並ぶように」

と、そつと立ち去る和麻に気付いた亜美から指示されて、彼は嫌々ながらもAチームに並んで整列することになった。

「良し！ みんなちゃんと整列したわね！」

そして全員が整列したのを見渡して、亜美は満足そうに頷いた。明らかに不服そうな表情をしている人間が二人いたが、細かいことを気にしない性格の亜美の眼中には全くもって入っていなかった。

「さて！ みんなお疲れ様！ Good job！ Very niceよ！ 初めてでこれだけガンガン動かせれば上出来だわ！」

試合が終わった全員を労う言葉を亜美が掛ける。

満足そうな表情で聴く者。不甲斐ないと思いつながら聴く者。

全員が各々の気持ちで、亜美の話を聞いていた。

そして亜美はその言葉の後、Aチームを見ると誇らしげに満足そうな表情を見せた。

「それと特にAチーム……良くやったわね。それじゃあみんな、明日からは日々走行訓練と砲撃訓練に励むように！ 分からないことがあったら、いつでもメールしてね」

亜美の言葉に、メガネの女が「一同！ 礼！」と声をあげる。それに亜美が敬礼し、全員が礼をして教官の訓練は終了となった。

「良し！ それではこれにて訓練はおしまい！ 何か質問があったら聞くわよ！」

訓練終了を告げて、亜美が全員に告げる。  
そうすると一人の生徒が、その場で大きく手を上げていた。

「うん！ 元気良く手を上げて良し！ じゃあそこのあなた！」

亜美が最初の人へと質問を促す。

亜美へ質問したのは、運動着を着た背丈の小さい女の子だった。

「あの……さつき百式と知り合いみたいでしたけど、教官は百式と知り合いなんですか？ それと百式ってそんなに有名な名前なんですか？」

その質問に、一番先に反応したのは和麻本人だった。

まさか本人の前で、百式の名について質問するとは夢にも思っていなかった。

亜美も少しだけ目を大きくするが、その質問に一度頷いてから答えた。

「ええ、和麻君とは昔からの仲よ。和麻君のお母さんにはお世話になっただけで、和麻君のことは彼が中学生の頃から知っているわ。それ

と百式家については、有名なものにも西住家と並ぶ戦車道名家のひとつよ」

そして亜美が告げた話に、この場に居た全員が驚いた。

西住流のことは、既に全員が聞いていた。しかし百式という名が、それほどまでに有名な名だとは思ってもいなかったからだだった。

「勝つことがすべて——撃てば必中。守りは固く。進む姿は乱れ無し。鉄の掟、鋼の心。それが西住流の戦車道よ」

「じゃあ百式流にも、そんなのがあるんですか？」

亜美の説明に、続けて運動着の少女が質問する。

それに亜美が答えようとするが、それよりも先に口を開いた人間が居た。

「己の信じる道に迷いなく——疾<sup>は</sup>る姿は狩人。狩人は常に友と共に。駆ける姿は風の如く。疾風迅雷の矢となりて、敵を討つ。これが百式家の戦車道だ」

説明したのは、和麻だった。

腕を組みながら、嫌々ながらも言っていると言いたげな顔で和麻は全員に説明する。

しかし西住流と百式流の戦車道の言葉をイマイチ理解出来ない顔を見せる生徒達に、亜美は分かりやすく簡潔に説明した。

「要するに簡単に言えば、西住流は圧倒的火力で敵を殲滅。百式流は圧倒的速度で敵を翻弄つてことよ」

実に分かりやすい説明だった。

その説明に、和麻は異議を唱えない。事実だったからだ。

周りが納得したように頷くなか——亜美は思い出したように続け

た。

「あと百式流の最大の特徴は、その操縦技術にあるの。数ある日本戦車道流派の中でも、百式流の戦車操縦技術は日本屈指と言われている」

亜美が和麻を横目に話を続ける。

その話全員が興味津々で聞き、そして皆が和麻を見ていた。

以前に杏が言っていた話にあったことを、全員が思い出す。

ここに居る百式和麻は、戦車の操縦でその名を戦車道界に知らしめた有名な選手だったということ。

「でも、男の人が戦車道って変わってるよね」

しかし、そんな時だった。背丈の小さいメガネを掛けた少女が、そんなことを言い出したのは。

和麻が眉を寄せる。その言葉を、随分と久しぶりに聞いたと思いつながら。

「そう言えばどうして男の人なのに、百式先輩は戦車道をやってるんですか？」

そして続けて、一年生と思わしき生徒の一人が和麻へそんな質問をしていた。

彼女には、何気ない質問だったに違いない。しかしその一言が、和麻の心を揺さぶっていた。

何も知らない人からすれば、当然の疑問だった。男であるのに、なぜ女の武芸である戦車道をしているのかと。

だがその当然の疑問が、和麻にとっては酷く堪えた。

この疑問が、その僅かな疑問が不快に変わった時——導かれる言葉が分かっていたからだだった。

「……………」

思わず、和麻が言い淀む。そして彼が一年生の方を向くと——その目つきに、一年生の生徒が怯えていた。

鋭く尖った左目。それは先程までの和麻とは打って変わって、まるで触れてはならないことに触れたと言わんばかりの目だった。

「かずくん、怖い顔してるよ」

一年生を無意識に睨んでいた和麻が、みほに声を掛けられた途端——ハツと表情を緩めた。

完全に無意識だった。みほに言われるまで、和麻は自分のしている表情の変化に気付きもしなかった。

やはりみほと的一件以来、相当敏感になっているらしい。和麻は改めてそれを理解した。

前までは、たとえばそんなことを言われても反応することもなかったのだ。

しかし目の前の一年生の言葉を聞いた途端、酷く貶されたような錯覚を覚えた。

「…………悪かった。すまない」

和麻が咄嗟にした自分のした行動に頭を雑に搔くと、彼は怯えた一年生へ素直に謝った。

だが和麻が謝っても怯える一年生に、彼はもう自分は今はこの場にいる方が良いと判断した。

怯える一年生を横目に、和麻がその場から立ち去る。しかし立ち去る前に、彼が一年生へ一瞥いちめつすると——彼は簡潔に言った。

「俺が戦車道をやる理由なんて、簡単だ…………好きだったからだよ、戦車

が」

和麻が申し訳なさそうに、そう言った。

そして和麻が皆から背を向けて、立ち去っていく。

それを亜美が見届けると、彼女は呆れたように肩を竦めながら全員に手を叩きながら告げた。

「うん。じゃあ質問もここまで！　じゃあみんな、これからも訓練に励むように！　頑張ってるね！」

そう締めくくり、亜美は歩き去っていく和麻の後を歩いて追いかけて行った。

全員が立ち去っていく和麻と亜美を見つめる。

しかし誰も二人が消えていくまで、動くことはなかった。

和麻の立ち去る前の表情。それがあまりにも印象的だったからだ。

どこか諦めた顔。そして立ち去る寂しそうな背中。

その表情と背中が、どこか悲しく見えたから。

## 5. そして歩く、初めの一步を

「……何がしたいんだろうな、俺は」

そんなことを呟いて、和麻は自分に問い掛けた。

大洗学園艦内にある海がよく見える公園のベンチに座りながら、和麻はひたすらに広がる海を見つめながら溜息を吐く。

思わずしてしまった行動に、和麻は自己嫌悪していた。

何故、あの時……自分は蝶野亜美が答えようとしていた『百式流の戦車道』を言ってしまったのだろうか？

百式家が掲げる戦車道。それは、和麻が第一に教わった戦車道の道だった。

『己の信じる道に迷いなく——疾<sup>は</sup>る姿は狩人。狩人は常に友と共に。駆ける姿は風の如く。疾風迅雷の矢となりて、敵を討つ』

誰よりも速く、その先へ。それが和麻が一番初めに母親から教わったことだった。

『和麻、私達百式家は西住の圧倒的な『制圧力』でも島田の変幻自在の『技術』でもなく……疾風迅雷の『速度』を追求した。でも和麻……私は、あなたに百式の道を進めとは言わないわ。』

あなたはいつか『百式流』ではなく『自分の道』を見つけなさい。それが、私が——息子へ渡す『最大の課題』よ』

懐かしい母の言葉を、和麻が思い出す。

男である和麻には、百式流を継ぐことは出来ない。

女の武芸である戦車道を男が継ぐことは、決して許されない。幾重にもあるどの流派も、家元は女が継いでいる。

男が戦車道をする事。それ自体が異端である。

だからこそ、初めて和麻が戦車道をしたと言った時……百式家は勿論反対した。

しかし母だけは、和麻が戦車に乗ることを唯一認めたのだ。

その時の母親が、どんな考えで認めたのかは和麻にはまだわからない。

だが当時の幼い和麻には、戦車に乗れるということ自体が嬉しくて仕方なかった。

しかし母親が認めても、世間が許さない。

故に、和麻が百式を継ぐことをたとえ母が許したところで……それは戦車道への冒涇だと言われるだろう。

それを和麻が戦車道を始めた幼き頃に、母が「あなたには百式流を継ぐことは出来ない」と本人に告げた時、続けて母はそう言った。

悲しそうに、そして誇らしく、母が自分にそう言っていたのを和麻は忘れはしない。

自分の道を進めと、母がそう言ったのなら……自分の道を進むと和麻は決めたのだから。

百式家の息子が戦車道をする。それを百式家に許されたことさえ、和麻には誇らしいとさえ思ったのだ。

百式の戦車道を継げないのなら、ならば自分の道を進め。それを母は言いたかったのだらうと、和麻は幼くともそれを理解することが出来た。

だからこそ、和麻は探し続けた。辛くとも充実した日々を過ごし、そして彼はようやく見つけたのだ。

中学生で和麻は自分の戦車道を見つけ、それを自身の心に掲げている。

だがそれも和麻にとって、今では過去の話なのだが――

「……あんな言葉で、俺がイラつくなんてな」

そしてまさか……何気ない質問をした一年生を睨むとは、和麻自身も思ってもなかった。



みほに言われるまで、和麻は自分が一年生を睨んでいるなど思ってもいなかった。

自分らしくない。それが和麻の自身に対する評価だった。前までの自分なら、ただ聞き流すことなど平然と出来ていたはずなのに……

「和麻君、少し探したわよ。意外と歩くの速いのね」

ふと、そんな時——後ろから自分を呼ぶ声が聞こえた。

和麻が声の方へと振り向くと、そこには呆れた表情の蝶野亜美が立っていた。

「……蝶野さん？」

和麻が亜美を見ると、少しだけ目を大きくした。

「隣、良いかしら？」

亜美がそう言って、和麻の隣に座る。返事を聞かないで座る辺り、やはり男らしいと感じる和麻だった。

「どうして——」

隣に座る亜美に、和麻が眉を寄せる。

何故、自分のところにわざわざ来たのかと。

それを和麻が問うより先に、亜美が口を開いた。

「久しぶりに弟分と会ったのだから、ゆっくり話したいじゃない。積もる話もあるでしょ？」

亜美が手に持っていた缶コーヒーを和麻に放る。

和麻がそれを片手で受け取ると、亜美が手慣れた手つきで片手で缶コーヒーのプルトップを開けていた。

「それでも飲んで一息入れなさい。そんな顔してたら幸せが逃げるわよ」

そうやって、亜美が缶コーヒーを口元で傾ける。

しかし和麻は缶コーヒーを手に持ったまま、亜美にしか顰めた顔を向けていた。

「そんな酷い顔してますか？」

「してるわ。悩み悩んでる若人の顔ね」

そう即答されて、和麻が口をっく噤んだ。

そして和麻が諦めたように溜息を吐くと、手に持っていた缶コーヒーを開けて一口飲んだ。

「苦い。これ……ブラック？」

「紅茶の方が良かったかしら？」

「紅茶は随分……飲んでないですよ」

くすくすと笑いながら、亜美が和麻の顔を見て笑う。

笑えない冗談だった。和麻は顔を強張らせると、手の缶コーヒーをまた一度口元で傾けた。

「最後に会ったのは、確か去年の十二月頃だったわね」

亜美がしみじみと歌い出して呟いた。

苦いブラックコーヒーを飲みながら、和麻は頷いた。

「怪我が治って、退院して以来ですね」

「前も聞いたけど、その目は……もう？」

「駄目ですね。見えませんよ」

「そう……」

亜美が和麻の眼帯を見つめる。

和麻の顔の右半分を覆う黒い眼帯。その下の傷跡を見たことがある亜美は、ただ肩を竦めた。

「聖グロのみんなとは、もう会ってないの？」

「……会えるわけじゃないでしょう。俺は、戦車道をするべきじゃなかったんです」

吐き出すように答えた和麻に、亜美は少しだけ眉を寄せた。

和麻の言葉とは裏腹に、彼の表情はひたすらに悲しそうに見えた。

外見は変わっても、相変わらず中身は変わっていない。

亜美はそれを理解すると、和麻に笑みを向けながら言った。

「和麻君——悩んでるなら話してみなさい。大人のお姉さんが聞いてあげるわよ」

亜美に言われて、和麻は言い淀んだ。

去年から今まで、本当に色々あった。

聖グロリアーナでの一件。大洗女子学園への編入。生徒会からの戦車道への勧誘。そして、西住みほに諭されたこと。

未だ自分の気持ちに向き合えない和麻は、ただ悩むことしか出来なかった。

答えの出ない自己問答。それを何度も繰り返したところで、出てくるのは返事のない停滞だったのだから。

一度、足を止めてしまった人間は……再び歩き出すのに、人一倍の勇気がいる。

それを無意識に理解していた和麻に、止めた足を再び動かすことな

ど到底無理な話だった。

「……悩んでるんです」

しばらくの沈黙の後、和麻がポツリと言った。

亜美が小首を傾げる。そして彼女は和麻に顔を向けると、

「なにを？」

ただ一言、和麻に問うた。

和麻が腹元で手を組む。それは何かに願うような、そんな印象を受ける仕草だった。

「俺は……もう一度、また戦車に乗っても良いのかって」

「——愚問ね」

そして和麻の悩みに、亜美は即答した。

和麻が顔を強張らせる。そして亜美は、彼に戯けるように肩を竦めた。

「ねえ、和麻君。あなたが戦車に乗ろうと思ったキツカケはなんだったの？」

突然の質問だった。思わず、和麻は顔を顰めた。

「それは……」

「あなたは、どうして戦車道をしようと思ったのか。それが今のあなたの悩みの答えよ」

亜美が微笑んで、言い淀む和麻に告げる。

その言葉に、和麻は何か考えるように口を噤んだ。

そして少しして、和麻は小さく口を開いた。

「俺は……憧れた。ただ本当に、それだけでした」

そして和麻が語る。自分の戦車道の原点を。

何故、自分が戦車道を始めたのか？

戦車を好きになった理由。そして男でありながらも、戦車道を嗜むことを決めた理由を、彼はまっすぐに海を見つめながら思い出した。

それは、本当に……憧れから始まったと。

「小学生にもなつてなかった子供の頃に、初めて母さんの戦車道の試合を見て……初めて母さんが戦車に乗る姿を見た時のことでした」

忘れもしない。まだ物心ついて、小学生になる前のことだ。

百式家の家元である和麻の母親が出場する試合を、和麻が家族に連れられて見たのは。

まだ戦車の種類も分からなかった歳の頃、和麻が試合会場でモニター越しに見た母親の姿を——初めて見た瞬間だった。

「——格好良かった。いつも優しくかった母さんの戦車に乗る背中が……震えるほど格好良く見えて、戦車に乗って戦う姿が、本当に……すごく綺麗だったんです」

沢山の戦車を率いて勇敢に、そして凛々しく戦う母親の姿を和麻は忘れもしない。

いつも笑顔で優しい母親が、戦車に乗るだけで別人のように凛々しくなった姿。

率いる仲間と共に敵と戦う母親の背中を、和麻は震えて見ていた。恐れではなく、それは感動だった。

そしてただ思った。本当に……綺麗だと。

「戦車に乗る母さんの顔が本当に楽しそうで、その幸せそうな顔が忘れられなくて……俺はそんな顔に憧れたんです。自分も、あんな顔を試してみたいって」

仲間と笑い合う姿。苦戦して悲痛な顔をする姿。

当時の幼い和麻が、知らない母親の顔の数々を見た瞬間だった。それを見て、和麻はひたすらに思ったのだ。

——自分も、あんな顔を試みたいと。

幸せそうな表情が羨ましくて、本当に楽しそうにする表情が妬ましいと思うくらいに、羨ましかった。

あんな顔が出来る戦車道。そうされてくれる戦車。それに和麻が魅入られたのは、ある意味必然とも言えた。

「俺も、あんな風になりたい。それだけだった」

自分もあんな顔をしてみたい。そう思った。

だから和麻は、その後すぐに母親に懇願したのだ。

『おかあさん！ ぼくも戦車道やりたい！ ぼくもおかあさんみたいになりたい！ 戦車に乗りたい！』

その言葉を言った時の母親の顔は、和麻にはとても印象的だった。

幸せそうな表情だった。目を大きくし、そして口元を押さえながら目を潤ませる顔をしていた。

しかしその中に僅かに見えた悲しそうな表情を、当時の和麻は理解していなかった。

そして幼い背丈の小さい和麻を抱えて、母親は言った。

『私みたいに……なりたい？ うん……じゃあ仕方ない！ なら和麻も私と一緒に戦車に乗ろっか！』

そう、キツカケは本当にそれだけだった。

そして百式家の反対を押し切り、和麻は戦車道を母親の元で学んだ。

辛くとも、楽しかった日々を。次第に上達していく自分に、母親が誇らしそうに褒めてくれたことを。

そうして和麻は、現実と向き合うことになる。

男が戦車道をするこの意味。

小学生の頃の時点で、和麻へ戦車道をしていたことに対する非難があった。

イジメのようなこともあった。しかし和麻はそれでも折れなかった。

あの時の母親に憧れて、和麻はそれを胸に決して折れなかった。

そして中学生の頃に、戦車道チームに所属して和麻はその非難を覆した。

男でありながらも、戦車道を嗜む異端児。

それが和麻に最初に当てがわれた世間の評判だった。

操縦手と車長を担当し、そして和麻は中学生にして認められたのだ。

もしも百式和麻が女だったら、彼は戦車道の頂を登れる存在だと。

そのことを当時の和麻自身が知るのには、少し先になる。

それと同時に和麻が試合に出ることに対して、世間からの非難が出ることは少なくなっていた。

そして高校生になり聖グロリアーナ女学院で、和麻は折れてしまった。

胸に掲げていた想いを、忘れたのだ。逃げて、そして捨ててしまった。

世間のしがらみ。向けられる誹謗中傷の数々。そして身体中に負った大怪我と……仲間が傷付く姿で、和麻の戦車道は折れた。

「なのに、どうして……こんな風になったんですかね」

それは、和麻の本心だった。  
簡単だった。しかし簡単ではなかった。  
小さな憧れから始まった道が、あまりにも険しかった。道を進むうちに、色々なモノが絡みついた。  
まっすぐに歩かせてくれなかった。それだけだった。

「戦車道を始めたこと、後悔してるのかしら？」

和麻に、亜美が問い掛けた。  
和麻が俯いて顔を暗くする。

「後悔したくはなかった。でも……後悔するしかなかったんです」  
「後悔して、戦車が嫌いになった？」

その問いの答えを、和麻は持っていた。  
しかしその先を、その言葉を口にすることが出来なかった。  
角谷杏に過去に言った。怖いのは戦車じゃなく、人だと。  
戦車が悪いわけではない。ただ世間が許さず、戦車道を男がすることを認めない世の中が怖いだけだった。  
だからこそ——答えなど既に決まっていた。

「嫌いになんて……なれるわけないじゃないですか」  
気づくと、和麻の声が震えていた。  
今まで止めていた何かが外れたように、和麻は声を震わせて両手を強く握り締めた。

虚無感しかなかった胸が、少しだけ痛くなる。  
そして少しだけ、懐かしい感覚が和麻の心に灯った。

「俺は……俺は……戦車に乗りたかった……仲間と、みんなと……戦



車に乗って笑っていたかったっ」

そして和麻が吐き出した。以前のみほど同じように、心の底に隠していた想いを。

「なら簡単じゃない。やっても良いのよ」

和麻が目を鋭くさせて、亜美を睨んだ。

そんな和麻に、亜美が口角を上げて笑みを見せる。

「そんな顔して、小難しく考えるのはやめなさい。私は和麻君のことを弟のように大事に思ってるわ。だからその怪我を作った去年の聖グロの一件のことは許せないし、それ相応の対処をしたわ。

そして和麻君が戦車道をしたくないならそれで良いと思ってる。むしろ……あんなことがまた起きないように、和麻君に戦車道をしてほしくないと思ってるくらいよ」

そして亜美が「でも……」と続けると、その先を真剣な表情で告げた。

「和麻君。あなたがそれでも、男でありながら女の武芸である戦車道をすることを辞めずに。自分の戦車道を進むと言うのなら、私は応援するわ。だって……あなたの戦車道、私は嫌いじゃないもの」

ふと、和麻の目が熱くなった。

自然に流れる小さな涙を、和麻は止めることもなく……自分が泣いていると気づくのさえ、しばらく時間が掛かった。

「あなたがあの頃の気持ちを今でも忘れてないのなら……また乗れるわよ。どんなことを言われようとも、戦車に乗るあなたを認めてくれる人達」がちゃんというってことを、決して忘れてはいけないわ」

そして亜美は言った。自分を認めてくれた人達のことを忘れてはならないと。

和麻の脳裏に、色々な人達の顔が浮かぶ。

『凄いじゃない！ 流石は私の息子っ！』

戦車道をすることを認めてくれた母。

『和麻君？ じゃあ 〃かずくん〃だね！』

『いつかお前とみほと一緒に、試合が出来る日が来ると良いな』

初めて出来た戦車道の友人である西住姉妹。

『良おし！ 和麻ああ！ 今日私とひとつ走り行くぞお！』

中学生で、初めて自分の戦車道を認めてくれた安斎先輩とその仲間達。

『和麻さん、今日はどんな 〃走り〃を見せてくれるのかしら？』

そして聖グロリアーナ女学院にいる仲間と――ダージリンの顔が、

和麻の脳裏に浮かんだ。

「……でも、俺はみんなを悲しませることになる。そうなるくらいなら」

「あなたに戦車道をやめるなんて、その人達は一言でも言った？」

「それは……」

「それが答えよ」

そんな言葉を言われたことなど、一度もない。

仲間から戦車に乗るなども、戦車道をするなども言われたことはただの一度もなかった。

仲間達は、決して自分を見捨てることなどしなかった。

そう……見捨てたのは、紛れもなく和麻自身だった。

「ちゃんと自分の気持ちに正直になりなさい。誰かのため、そんな理由を重ねるのも良いことでしょう。でも一番大事なのは……あなたはどうしたいのか、よ」

亜美の言葉が、和麻の胸に刺さる。

気持ちがせめぎ合う。色々な考えと色々な想いが頭と心の中で絡み、そして自身でも訳が分からなくなつた。

自分がどうしたい？

決まっている。しかしそれを認めることを……認めて良いのか？

その自問自答を何度も繰り返した。何度も、何度も、ひたすらに続けた。

そうして和麻の行き着く答えは——ひとつしかなかった。

「蝶野さん……俺ば……ぜんじやに乗っただらだめなのに……乗りだいでんです」

導き出した答えの先に、和麻は泣いていた。

途切れ途切れになりながらも、和麻は言ってしまった。

本当に自身の願う懇願を、和麻は言っていた。

もう戻れない。和麻はひたすらに涙を流し、嗚咽を漏らしながら手で目を覆った。

溢れてくる涙を止めようとも、それは決して止まらない。

今まで塞き止めていたモノが崩壊したように、和麻は嗚咽を漏らす。

「うん！ よろしい！ その気持ちを大事にしなさい！」

亜美が和麻の背中を叩く。相変わらず変なところが大雑把だった。

「それと後ろの芝生にいる子達！ 出てきなさい！」

続けて、亜美が叫ぶと後ろから物音が響いた。

和麻が慌てて涙を拭う。そして彼が振り返ると、彼は赤く腫らした目を大きくしていた。

「バレてるバレてる！」

「……流石は教官であります」

「あはは……」

和麻と亜美の後ろに居たのは、IV号戦車に乗っていた五人だった。

「お前達……なんで……」

「まあなんと言うか……百式君が心配で」

和麻の声に、沙織が言いづらそうに答える。

和麻は腫らしていた目を細めると、五人を不満そうに睨んだ。

「盗み聞きとは趣味が悪いぞ。みほ、お前もだ」

「あはは……ごめんね」

乾いた笑いを浮かべるみほに、沙織と秋山が居心地の悪そうな表情を見せる。

そして麻子が和麻の近くに寄ると、彼女は彼の目を指差して小馬鹿にした笑みを浮かべた。

「お前の泣き顔を見に来てやったぞ。おお、目が真っ赤だな……泣き虫野郎」

「てめえ……っ！」

和麻がベンチから勢い良く立ち上がると、麻子が慌てて逃げて行った。

思わず和麻が追いかけてようとする。しかしその時——彼の隣に居た亜美がポツリと言った。

「ねえ、心配してくれる人達が居るって……相変わらず悪いもんじや

ないでしょ?」

和麻が足を止める。そして彼は頷くと「……そうですね」と呟いた。

「あなたがこの大洗で何をするかは自由よ。行く先を阻むものがあるなら、ぶち破ってやりなさい。あなたのお母さんみたいに、どんな困難を突き破るくらいの気合を見せてもバチは当たらないわよ」

そして亜美は言った。好きなことをしろと。

また目が熱くなった。しかし和麻は忘れるように顔を横に振るった。

「はい………頑張ってみます、蝶野さん」

そう言つて、和麻は走り出した。

逃げる麻子に向かい、全力疾走で。

逃げながら和麻を煽り続ける麻子に、和麻が罵声を吐き出しながら追いかける。

それを慌てて止めようとする沙織とみほ。そして華と秋山が見守る。

「ふふっ………良い仲間じゃない、和麻君」

そんな騒がしい声を聞きながら、亜美はベンチで缶コーヒーを飲み干して楽しそうに笑った。

## 6. もう一度少女は問う、彼の道を

「武部……あの時、IV号戦車の時は悪かった。言い過ぎた、すまなかつた」

和麻が頭を下げてそう言うと、沙織はその言葉に慌てながら手をわたわたと自身の顔の前で振って動揺した。

「えっ!? そんな大丈夫だよ! あの時は私も百式君に酷いこと言っただんだけ……」

沙織が自分も悪いことを告げる。しかし和麻は首を横に振っていた。

IV号戦車で沙織の言葉が発端で、結果的にIV号戦車で和麻は沙織を責める言葉を向けてしまった。

あの口論の発端が武部沙織だとしても、和麻が一方的に彼女を必要以上に責める必要はなかった。

ただ沙織が和麻のことを人伝に聞いていた故に出てきた言葉ということは、和麻自身も理解していた。

百式和麻が戦車道で優秀な操縦手だと知り、五十鈴華の失神で操縦手不在となったIV号戦車内で、戦車を完璧に操縦出来る人間が和麻しか居なかったからこそ出てきた言葉だ。加えて、沙織自身は和麻を責めるような言葉を一切言っていない。

沙織は、ただ和麻にIV号戦車を操縦して欲しいと言っただけだった。決して彼のことを悪く言ったりなど言ったりはしていない。

そして沙織自身も、あの状況で軽いパニック症状が出ていたことを和麻は理解していた。

それをすべて分かっている、和麻は湧き上がった一時の感情で沙織を責めてしまった。自身の顔の傷跡を見せてまで、責めてしまった。

そのことが和麻の内に、沙織への罪悪感を募らせていた。

「だとしても、俺は武部を必要以上に責めたんだ……反省してる。すまなかった」

だからこそ、和麻はしっかりと沙織に謝罪した。

そしてIV号戦車で冷泉麻子と約束した「武部沙織への謝罪」。それを確かに果たした。

「私こそ……ごめんなさい。百式君のこと知ってたのに慌てて思わず『あんなこと』言っちゃったから……本当にごめんなさい。反省してます」

謝る和麻の言葉に、沙織も頭を下げて謝罪した。

「俺のことは、もう良いんだ。ある意味……お前達のお陰で、ようやく向き合えた気がするから」

和麻が首を小さく左右に振る。

そんな和麻に、沙織は「えっ……？」と小首をコトつと傾げた。

「……どういうこと？」

「本当に今更かもしれないが……また戦車道、ここでやってみようと思うんだ。色々な人達に言われて……見つめ直してみようと思うんだ。この大洗が俺を認めてくれるなら、俺は自分の気持ちに正直になろうって」

和麻が沙織に向けて頬を緩める。楽しそうに、そして優しく微笑む彼の表情に、沙織は少し意表を突かれた。

百式和麻はこんな顔もできるのかと、沙織は内心で素直に驚いていた。

いつもどこか遠くを見ているような表情。悲しそうに、そしてどこか孤独を感じる表情。それが沙織の知る和麻の顔だった。

しかし今の和麻の見せる表情は、それとは真逆だった。

それは、高校生の男子が時折見せる。子供のような笑顔だった。そんないつもと違う和麻の表情に、沙織は不思議と違和感を感じなかった。むしろ、納得さえしていた。

おそらく、これが彼の本当の表情なのだろうと。

和麻の過去を人伝から聞いた沙織は、素直にそう思った。

色々な“しがらみ”から逃げ、自分を認めた人達と認めなかった人達を全て避けて、孤独に生きようとした和麻は、きつと本来の姿から変わってしまったのだと沙織は感じた。

自分の一部を取られたような感覚に、和麻はずっと悲しんでいたのだろう。

だがしかし、今はそれを取り戻そうとしている。それ故に、彼は本当の自分を無意識に出しているに違いない。

沙織はそんな和麻を見て、不思議と自分の胸の内が暖かくなるような安堵を感じた。

「かずくん……！」

そして和麻の言葉を聞いたみほも、まるで自分のことのように嬉しそうに微笑んでいた。

ようやく自分の気持ちと向き合ってくれた和麻が嬉しく、そして彼が自分と戦車道をしてくれることがたまらなく誇らしかった。

そんな沙織とみほを見て、和麻が優しく微笑んだ。

「だから、いつかお前達が俺を“避けることになる”まで、俺はこの大



洗でお前達と同じ戦車道の道を進んでみる。お前達の戦車道の先に何があるか……俺は見てみたいんだ」

しかし和麻のその言葉の一部に、沙織とみほは思わず目を大きくした。

やはりこの男は、まだ引きずっている。その表情から自分が言った言葉の意味を分かってないのだろう。

それを理解した沙織はムツと頬を膨らませると、彼女は和麻に堂々と人差し指を向けた。

「百式君！　そういうこと言わない！　私達が百式君を避けるわけないでしょ！　そういうこと言うから百式君はダメなんだよ！」

「え……っ？」

和麻へハッキリと告げた沙織に、彼は言われてようやく自分が先程なにを言ったのかを理解した。

そして自分の言葉を思い返して、和麻は苦い顔をする。「……すまない」と眉を寄せていた。

「これから百式君は私達と一緒に戦車道やるんですよ！　なら私達は仲間で——友達なんだからね！　百式君もそう思うなら『そういうこと』を言うのやめる！　わかった!？」

「……………」

沙織が続けた言葉に、和麻は返す言葉が出なかった。

こんな言葉を向けられたのは……本当に久しぶりだった。

自分のことを仲間だと、友達だと言った沙織の言葉に和麻は胸が不思議と暖かくなるような気持ちになった。

「どうして、そんな言葉が出てくるんだ？　俺はお前に優しくした覚えもないのに……」

しかし和麻は思った。自分は沙織に対して、好意的な一面を見せた覚えは……一度もない。

なのにどうしてこの女は、そんな言葉を自分に向けてくるのかと。

「そんなの決まってるでしょ！ 教室で仲良くお喋りしたら友達なんだからね！」

今度こそ、和麻は意表を突かれた。思いもしない答えだった。

あんな今までの素っ気ない自分との会話で、目の前の女は自分を友達と言っているのだから。

この女は馬鹿だと、素直に和麻は思った。

しかし同時に、この女には敵わないと和麻は認めてしまった。

和麻が笑みを浮かべる。そして彼は思わず「ははっ……」と小さく笑い声を溢していた。

「むう……！ なに笑ってるの！」

笑い出した和麻に、沙織が不満そうに眉を寄せる。

一頻り笑った和麻が「すまん、悪かった」と素直に謝った。

そうして彼は納得したように一人頷くと、沙織とみほ、そして二人の後ろにいる華と秋山を一瞥した。

「もう言わない、悪かった。俺みたいな変わり者だが……これからよろしく頼む」

和麻が全員に告げる。それを見て、四人はそれぞれが「よろしくー」と声を揃えた。

その答えに、満足そうに和麻が微笑む。それは今まで沙織が見たこ

とのない、嬉しそうな笑顔だった。

「——それでさ、百式君。それ、いつまでやってるの？」

そして沙織がその後顔を引き攣らせると、ふと和麻の手元を見つめていた。

みほも同じように苦笑いする。彼女の視線も、沙織と同じように和麻の手元を見つめていた。

和麻が自分の手元を一瞥する。そして彼は先程から手元で拳をひたすらに動かしながら、それに悲鳴をあげる女を見ながら答えた。

「こいつが謝るまでだ」

「痛い痛い！ 早くその手を放せッ！」

それは先程から和麻の手元で悲鳴をあげる麻子だった。

ほんの少し前に泣いていた和麻を煽った麻子は、見事和麻に捕まっていた。

そして和麻が捕まえた麻子の頭を両拳で抑えると、彼はそのまま拳を動かして彼女の頭を圧迫した。

硬い拳で圧迫される頭に走る鈍痛に、麻子は暴れることすら出来ずに頭から走る激痛に涙目になっていた。

「いたいいたいっ！ お前！ いい加減に放せっ！」

「うるさい。我慢の限界だ。お前のその生意気な根性、叩き直してやる」

しかし麻子の叫びを和麻は一切無視した。

今までの鬱憤を晴らすように、和麻はひたすらに麻子の頭を圧迫するだけだった。

「さ、沙織っ！ 私を助けてくれっ！」

そして気づくともう限界とばかりに、麻子は目に涙を貯めて目の前にいる沙織に助けを求めていた。

「いや、全部麻子が悪いから。さつきから言い過ぎだよ、ちゃんと百式君に謝りなさい」

沙織に見放されて、麻子が絶望に顔を染める。

そんな中でも絶え間なく頭に走る激痛に、遂に麻子は暴れるように頷いた。

「痛い痛い痛い！ わかった！ 謝る！ 謝るからその手をはなせっ！」

力を振り絞って麻子が暴れる。

そして麻子の口から「謝る」と聞いた和麻は、ようやくかと言いたげに呆れながら拳を麻子の頭から離れた。

「ほらよ」

和麻が手を離れた瞬間、麻子はその場で崩れ落ちる。その後彼女は頭を抱えながら、その場で蹲うずくまった。

「うう……頭が割れるかと思った……」

こめかみを激しく摩りながら、麻子が涙目で嘆く。

完全に自業自得だった。今までの和麻に対する麻子の行動の結果でしかない。

沙織達も麻子の行動には流石にかばう気にもなれなかったのは、

至って当たり前だった。

「ほら、麻子。ちゃんと百式君に謝らないと」

そして沙織から促されて、麻子は「うう……」と嫌そうな顔を見せる。

しかし沙織の怒った顔を見ると、麻子は渋々ながらも和麻に向き合うと——彼に向かって頭を下げた。

「……ごめんなさい」

「約束だ。俺もちゃんと謝った。だからお前もその態度を改めろ」

「……わかった」

和麻に言われて、麻子が渋々頷く。

そんな麻子に、和麻が満足そうに頷いた。

「と言うかき、なんで麻子そんなに百式君のこと目の敵にするの？」

その二人のやり取りの後、沙織がふとそんなことを麻子に問い掛けた。

その質問に和麻は自分も少し気になると、内心で思った。

麻子が和麻に対して今までのような態度を取る理由は、彼が知る限りひとつしかない。

和麻が沙織を責めてしまった。このひとつしかない。

しかしその件については、IV号戦車で和麻が沙織に謝ると約束をしていた。ならば、そこまで悪質な態度を取る必要はないと思えた。

この和麻の前にいる麻子が、頑固で約束が果たされるまで確信が持てないというなら……多少は合点がいく。

だがそれでも……和麻にとっては納得出来る理由にはならなかった。

「……気に食わないからだ」

そんななか、麻子がポツリと答えた。

そんな麻子に、沙織がムツと小首を傾けた。

「それはもうあの戦車の中で終わった話でしょ？ あれは私が全部悪かった話だけど、あの時百式君ちゃんと謝るって約束したじゃん。それなのに麻子、どうして？」

沙織も和麻と同じ疑問があつたらしい。

麻子はそれに少し言い淀むと、渋々ながら口を開いた。

「この男が沙織を責めたのが一番許せない、それが一番気に食わなかったのと……こいつの言ってることと顔が全然合ってなかった。だから腹が立った」

妙な言い方だった。和麻と沙織が顔を見合わせ、互いに眉を寄せた。

「何が合っていないんだよ？」

和麻が思わず、麻子に訊き返した。

麻子はそんな和麻へ溜息交じりに答えた。

「お前、今まで自分の気持ちに嘘をついていただろ？」

その一言に、和麻は言葉が出なかった。

みほにも言われた言葉だった。自分の気持ちに嘘をついていると。

しかしそれを初対面だった麻子に言われると思っていなかった和麻は、少し顔に動揺を見せていた。

「……そんなに分かりやすかったか？」

「お前は鏡で自分の顔見たことないのか？ あんな顔してたら分かるに決まってる。本当のことを隠して、自分に嘘をついてるのがバレバレだ。だから気に食わなかった」

麻子が顔を不満そうに見せる。そして彼女は和麻達の言葉を待つこともなく一方的に話を続けた。

「それに“今は”かなりマシになったが、初めて見た時の顔が一番気に食わなかった。特に沙織に話してた顔が一番腹が立った」

和麻をジツと見つめて、麻子が告げる。

ⅠⅤ号戦車で和麻と沙織が口論した時のことを、その時に和麻が見せた顔を思い出して。

そうして麻子が次に告げた言葉に、和麻は言葉を失った。

「百式さん。お前……みんなに自分を“責めて”欲しかったんじゃないのか？」

「……………」

心臓を鷲掴みにされたような錯覚が和麻を襲った。

言葉が出ないとは、本当にこのことだと実感した瞬間だった。

そして麻子に言われて、初めて和麻は理解した。彼女が言った言葉の意味を。そして自分の内で無意識に思っていたことを。

「麻子……どういうこと？」

そんな麻子の言葉を理解出来なかった沙織が、彼女へ訊き返す。

「簡単だ。多分、無意識だろうが……こいつの考えは相当捻くれてる」  
「……………ひねくれてる？」

その質問に麻子が首を傾げる沙織を一瞥すると、顔を強張らせた和麻を見つめて答えた。

「この男はきつと誰かに『戦車道をするな』と言われる方が楽だと思っていたんだ。あの時の戦車で見た沙織を責めていたこの男の顔は、まるで言われたいって顔をした。」

だからお前は沙織にただ操縦をやりたくないと言えば良いはずだったのに、わざわざその顔の傷跡を見せてまで沙織を責めた——違うか？」

違う、と言えるはずだった。しかし和麻は思った言葉を出すことができなかった。

咄嗟に出た沙織の言葉に、彼女を責める言葉を向けた和麻。

しかしその根底にあるモノ。和麻自身すら理解していなかった根本的なモノが抉り出されるような錯覚を彼は感じた。

「でも、あれは私が原因だったじゃん！ 百式君に言っちゃいけないかったこと言ったから——」

「ならあの時、操縦はやりたくないって一点張りすれば良いだけだった。わざわざ自分の見せたくない傷跡を見せてまですることじゃない。そんな傷を見せてまでするってことは、結果的にあの時の全員に『操縦するな』と言われたいってことに違いないだろう」

「——でも！」

麻子に言い返そうとする沙織だったが、それを遮って麻子は話を続けた。

「なんで、そう思ったんだ？」

そして和麻が、麻子にそう尋ねた。



和麻が麻子を見つめる。それに彼女は向き合おうと、しっかりと彼の目を見つめて答えた。

「あの時のお前の顔と話を聞いてたらバレバレだ。あんな矛盾した態度と言葉、誰が聞いてもお前が戦車道がしたいって分かる。それであんなこと言う理由なんて大体想像がつく」

確かに、和麻は自分の気持ちに嘘をついていた。

男が戦車に乗ることで生じるしがらみ。それから逃げ、彼は戦車に乗ることを諦めた。

仲間に認められたが、世間には認められなかった。信頼出来る仲間が居たが、自分の所為で仲間が悲しんだ。

そしてその先に待つ未来が恐ろしくなり、和麻は今までのモノを全て捨てた。

このまま自分が戦車道をすれば、きつとまた自分は傷つき、仲間が悲しむ。そうなるなら、もう戦車に乗るべきではないと。

だから自分の気持ちに蓋をして、自分は戦車道をしてはいけないと和麻は自身に言い聞かせた。

「お前は、誰かに『男が戦車道をする事』を責められたかったんだ。そうすれば自分の気持ちの落とし所があるから、なにも言われなくて……落とし所がなくて気持ちが揺らぐ」

そしてその気持ちから生じた和麻自身すらも理解していなかったことを、麻子はそう彼に言い放った。

戦車道をしてはならない。それが和麻が心に決めた根底にあるモノだった。

ならばそれを他人に言われること。それが一番自分の心に『効果』があるからだった。

周りの人達が男が戦車に乗ることを認めない。だから乗る必要はない。

それを誰かに言われれば、自分は戦車に乗ることが出来ないとな納得できる。

しかし逆に言われなければ、気持ちが揺らいでしまう。

自分で決めたことが揺らいでしまう。乗りたいけど乗れない、それが維持出来なければ自分は揺らいでしまうのだから。

本心はひとつしかなかった。戦車道を続けたいという本心。その自分の気持ちから和麻は逃げ、そして蓋をした。

そしてその蓋に「誰かに責められる」という重石で圧力を掛ける。それが今の和麻を維持する最適な方法だった。

「私から言わせれば、そんな怪我を負ったら普通は二度と戦車道をしようと思わない。なのにお前はそれでも戦車道をやりたいって思ってる。お前、なんで戦車道を続けたいと思うんだ？」

麻子の問いかけに、和麻が口を閉ざす。

しかしそれも一瞬の事。和麻はすぐに答えを口にしていった。

「……好きだからだよ、戦車が。それ以外に答えなんてない」

その言葉は、和麻はすんなりと口から出てきた。

もう立ち止まることをやめた和麻に、もう躊躇う理由はなかった。

戦車道とまた向き合うことを決めた和麻に、麻子はため息を吐いた。

「それなら昔に認めてくれた仲間とやってたなら、やれば良かったんだ。お前を信じてくれる人達がいるなら、他の人なんて無視したら良かったんだ。」

やりたいならやれば良いのに、無自覚か自覚してるが分からないが「するな」と言われれば楽だと思ってる。だから逆に戦車道をやっても良いと言われたらお前は更に揺らぐ——例えば「自分は本当に戦車道をして良いのか？」って」

凶星だった。その言葉に、和麻には反論が出来なかった。簡単なことだった。自分の気持ちに素直になれば良いだけのことだったのだから。

戦車道をすることで責められる。そして自分のことで周りが悲しんだ。それが辛かった。

しかし和麻の仲間は誰も責めなかった。むしろみほなどから和麻が戦車道をやめたことに悲しまれたことの方が多かった。

「だから私は言ってやった。お前は戦車を操縦しなくて良いって、でも私にそう言われた方が『お前は更に嫌な顔』をした。矛盾してるな、百式さん。だからなおさら腹が立った」

麻子が目を細める。それは苛立ちを見せる表情だと、和麻はすぐに理解した。

「私は、沙織が失言した所為でお前に責められるだけだったら何も言わなかった。私が一番腹が立ったのは……百式さんが自分の勝手な思惑で必要以上に沙織を責めたことが一番許せなかったんだ」

そして麻子はそう言った。自身が和麻へ対する一番の苛立ちの理由を。

「自分の気持ちに嘘をついて、その嘘にまた自分で傷つく。まさに悪循環だ。だからお前はいつまでもウジウジしてる……まったく馬鹿ここに極まれり、だな」

麻子が溜息を吐く。呆れるように、そしてどこか哀れむように。

和麻はそんな麻子に、苛立つことも出来なかった。むしろ、目の前の女が恐ろしいと感じていた。

あんな一時のやり取りだけで、ここまで自分の胸の内を見透かされ

るとは思ってもいなかった。

「極め付けがお前が戦車に乗ってた時だ。お前、私に指示出してる時……笑っていたぞ、楽しそうに」

麻子に言われて、和麻があの時のことを思い出そうとするが……自分の表情など覚えてなどいなかった。

しかし麻子は確かに見ていた。自分に操縦の指示を出す和麻の顔を。

楽しそうに、笑っていた。自分は戦車に乗ってはいけないと言っていた男が、確かに楽しそうに戦車道をしていたことを。

「矛盾に矛盾を繰り返すお前は、あまりにも哀れだ。だからお前は悩んでたんだ。そしてまた同じ自問自答を繰り返してた。

その先に答えなんてなかった。既に答えなんてお前はわかっているんだ。既に手元にある答えを見ようとしなくて馬鹿みたいに探し回ってる。

そんな姿なんて馬鹿を通り越して哀れ以外になんて言える？ 見てる方が辛い、ハッキリ言って迷惑だった」

麻子の言葉に、誰も口を挟まなかった。

和麻は、自身のことを的確に当てる麻子にひたすら驚いていた。そして納得していた。

反論する気も起きなかった。今までの気持ちに整理がつくくらい、むしろ納得できたのだから。

「どうせそんな矛盾に気がつかないで、お前はずっと苦しんでたんだろう。だからあんな顔をした。

戦車道を知らない私だって分かる。男は戦車道をしないなんて。それを建前に、そしてお前が怪我をした一件をキツカケに自分は折れたと言いつたんだろう」

麻子が話を終え、疲れたと言わんばかりに息を吐く。その姿に、沙織が麻子に近づくと少しだけ悲しそうな表情で告げた。

「……麻子、言い過ぎだよ」

沙織が和麻を一瞥して、麻子を窘める。しかし麻子はそれに対して、首を横に振っていた。

「いや、これぐらい言われた方がこいつは良い。こういうタイプの間は言われるまで絶対に気がつかない人間だ」

麻子が沙織に淡白に答える。

そんな麻子の態度に、沙織が目を吊り上げた。

「そんな言い方はないでしょ！ 百式君だって大変だったんだよ！！？」

沙織が麻子に声を荒げる。

声を大きくする沙織に、麻子が言い返そうを口を開く。

しかしそれを、和麻は彼女の前に手を出す事によって制した。

沙織と麻子が和麻を見つめる。いきなり話を遮った本人に向かって。

苛立ちを見せる目と、冷静そうに淡白に見つめる目が和麻を見た。そんな二人に、和麻は無表情で頷いていた。

「……その通り、なんだろうな。納得してる自分がいる」

そして和麻がポツリと言った言葉に、沙織は目を大きくした。

「百式君！ あれは私が悪かった話でしょ！ 麻子が言い過ぎなだけじゃん！」

沙織が声を大きくするが、和麻は静かに首を横に振った。

「いや、この女の言う通りだ。俺は……自分の気持ちに嘘をついていた。自分でも、言われて初めて気がついたこともあったけど……大体納得出来たから、きつと本心なんだろうな」

和麻が目を伏せる。そして彼は、ポツリと呟いた。

「俺は……逃げたんだ。あの日から……色んなことから。だから誰かに戦車に乗ることを認めてもらわないほうが楽だと思ってた」

和麻の脳裏に色々なことが蘇る。今までの戦車道の思い出。そして自身へ降りかかった様々なしがらみを。

「だから、俺は駄目だったんだ。色んな人達に迷惑を掛けて、自分の気持ちに嘘ついて。沢山の人達に支えられていたのに……本当に、馬鹿だったんだなあ……」

和麻が自分の右目に手を触れる。眼帯をそつと撫でて、彼は乾いた笑みを浮かべた。

そして眼帯を撫でた手を胸元で握りしめると、和麻は沙織を見つめていた。

続けて、和麻が麻子を一瞥して、最後にみほを見つめる。

「かずくん……」

みほの不安そうな表情を見ながら、和麻はそんなみほに小さく笑うと——彼はゆっくりと頭を下げていた。

「本当に、今まで悪かった。迷惑を掛けて、ごめん」

和麻が頭を下げたことに、みほが驚く。

しかしみほは頭を下げる和麻にそつと近寄ると、安心したような笑みを浮かべていた。

「かずくん」

みほに声を掛けられて、和麻が顔を上げる。

顔を上げた和麻に、みほは微笑んだ。

「また、訊いても良い？」

「……なにをだ？」

みほの唐突の問い掛けに、和麻が首を僅かに傾ける。

しかしみほは嬉しそうな表情を見せると、一言だけ和麻に訊いていた。

「かずくん……私達とこの大洗で戦車道、一緒にしてくれる？」

和麻が静かに目を大きくした。

前に、みほに言われた質問だった。

答えることが出来なかった質問。それを問われたことに、和麻は参ったと認めた。

どうやら、自分はこの女にも敵わないな。和麻は心からそう思った。

今なら、自信を持って答えられる。和麻はそう理解して、微笑むみほと同じように、頬を緩めて答えた。

「俺こそ、お願いだ。ここで俺に……お前達と戦車道をさせて欲しい。」

お前達の戦車道を、俺も一緒に歩かせてくれ」

今まで言えなかった言葉が、簡単に出てきた。

和麻はそのことに心から安堵しながら、思わず微笑んでいた。

「うん！ こちらこそよろしく！ かずくん！」

みほが嬉しそうに笑顔を見せる。

先程まで目を吊り上げていた沙織も、和麻とみほを見ていると納得したように肩を落としていた。

「百式君、これからよろしくね」

「武部……これからもよろしく頼む」

沙織の言葉に、和麻が同じく返す。

それに続いて、今まで口を閉ざしていた華も同じように和麻にお辞儀をしていた。

「百式さん、これからよろしくお願いします」

そして華の隣にいたボブヘアの少女も、和麻に向かって拙い敬礼をしていた。

「自分は秋山優花里であります！ これからよろしくであります！  
百式殿！」

華と優花里を見て、和麻が頷く。

これから共に戦車道の道を進む者として、彼は笑みを浮かべて答えた。

「こちらこそ、よろしく頼む」



二人に応えた和麻が、最後に麻子を見つめる。  
淡白で冷静な眠たそうな視線が和麻を見つめていた。

「確か……お前、冷泉だったな。お前、戦車道はやるのか？」  
「別に、私はあの時たまたま操縦しただけだ。もう乗らない」

麻子がダルそうに答える。先程までの威勢はどこに行ったのかと思えるくらいの態度に、和麻は眉を寄せていた。

「ええー！　麻子やらないの!?!?　戦車道の授業受けると、出席日数免除になるんだよ!?!?　またおばあに怒られるよ!?!?」  
「うぐ……」

沙織が叫んだ内容に、麻子が顔を顰める。  
その態度に、和麻は沙織に思わず訊いていた。

「武部、こいつ……そんなにヤバイのか?」  
「麻子、遅刻常習犯だから単位足りてないんだよ。風紀委員にも目を付けられてるもん」  
「そいつはまた……」

沙織の話した内容に、和麻が苦笑する。  
和麻自身も人のことは言えないが、単位が足りないわけではない。  
なので麻子と比べれば、まだ大丈夫だと言えた。

「おい、冷泉。戦車道を取れ。キッチリ指導してやる」  
「やだ。私は戦車道の授業取らない。めんどくさい」

麻子が首を横に向ける。しかしそんな彼女に、沙織は呆れながらも  
問い掛けた。

「おばあに怒られてもいいの?」

「うぐ……」

「単位足りてないんでしょ?」

「うぐ……」

「進級出来なくなったら、私達だけ先輩になるんだよ? 私のこと試しに先輩って言うってみて?」

「さ、さおり……せんぱ……」

沙織に言葉責めに合う麻子が辛そうに震える。

そして麻子が頭を抱えて唸ると、彼女は諦めた表情で頷いていた。

「……わかった。私も受ける、戦車道」

あまりにも哀れだった。自業自得の結果に、和麻は麻子に同情すら出来なかった。

だからこそ、和麻は麻子に追い打ちを掛けることにした。

自然と顔が緩む。そんな感覚を覚えながら、和麻は麻子の頭を掴んで自分に向かせると、こう言い放った。

「安心しろ、お前は俺がキツチリ指導してやる」

「ふん、お前の指導なんて別に大したことない」

麻子が気だるそうに答える。

そんな麻子に、和麻は表情に苛立ちを見せると引き攣った笑みを浮かべていた。

「出来ないって泣いてもやらせるからな、覚悟しろよ」

「その場面は来ないから安心しろ」

「絶対にお前だけキツくしてやるからな! 覚えておけよ!」

「勝手に言ってる……はあ、眠い」

「おい！ 立ったまま寝るな！」

「うるさい、寝れない」

和麻と麻子のやり取りを他のみんなが安堵して見つめる。そしてみほが麻子に声を荒げる姿を見て、一人微笑んだ。

「本当に……良かったね。かずくん」

そう呟いて、みほは騒ぐ和麻を止めるために歩を進めた。

PANZER. 4 隊長、がんばります！

1. 真実を告げる時が来た

昼過ぎのひと時に、紅茶を飲んでいた三人の空間でふと電話が鳴り響いた。

「……珍しいわね。紅茶の時間に電話なんて」

鳴り響く電話の音を聞きながら、ダージリンが呟く。

紅茶の入ったカップを傾けながら、目の前にあるテーブルの中央に鎮座する洋風の電話にダージリンが視線を向ける。

聖グロリアーナ女学院では、他校から見れば妙な風習がある。

それがお茶会だった。ただアフタヌーンティーを楽しむだけのことなのだが、この学校は午後の授業の合間に必ず一度決まった時間に“お茶会”をする時間が存在する。

その時間だけは、生徒と教師は全員揃って紅茶を嗜む。

談話室と呼ばれる場所で紅茶を嗜む者も居れば、各々の友人達と自室で嗜む者も居り、所属する部活の部室で紅茶を嗜む者も居る。

今日のダージリンは、最後に部類されていた。紅茶の園と呼ばれる戦車道チームが校舎内に保有する部屋で、彼女は紅茶を嗜んでいた。

この学校で呼ばれる“紅茶の園”とは、聖グロリアーナ女学院戦車道チームに於いて、自身の名に紅茶の名を冠した生徒のみが自由に入室出来る特別な部屋である。主に大事な会議や試合の作戦会議などに使われることが多いが、それよりも多いのは“お茶会”として使われることだ。

聖グロリアーナ女学院の紅茶の園でお茶会に参加する。これが聖グロリアーナ女学院の戦車道を嗜む者達が目指す目的のひとつとされている。

聖グロリアーナ女学院で実力から自身の名に紅茶の名を冠するこ

とを許され、周りの羨望と期待の目を受けながら、尊敬する人達と紅茶の園で紅茶を飲む。これだけでこの学校に於いては、生徒達からの羨望の目を向けられるのだ。

「この部屋の電話って、確か教員室からしか来ない電話でしたよね？」

ダージリンの隣に座っていたオレンジペコが鳴り響く電話を見つめながら、そうダージリンに訊いていた。

「ええ、普通に電話として使えるのだけど……掛ける時は別として、相手から掛かってくる時がちよつと特殊なのよね」

オレンジペコにダージリンが頷く。そして不思議そうに肩を竦めていた。

「学校の部室にある電話って、全部教員室に繋がってるんですか？」  
「そうよ。まずは教員室……というより学校の電話に電話して、そこから各自室の電話に繋げてもらわないとこの電話は鳴らないのよ」

ダージリンはそう呆れながら言い、紅茶をそつと一口飲む。そして手に持っていたソーサーとカップを音を立てることなくテーブルへ置いた。

「この学校も『そういうところ』は厳しいみたいね。この電話から勝手に何処かへ掛けても、電話した履歴が残るくらいよ」

聖グロリアーナ女学院の規則の厳しさが窺える話だった。

電話の履歴が全て学校側に知られ、なおかつ相手から掛かってくる時は全て学校側に一度要件を伝えないと部室への電話につないでもらえないのだから。

ダージリンはそう言って、鳴り響く電話の受話器へと手を伸ばし

た。

「とりあえず電話に出ますわ。多分、私宛でしょうし」  
「試合の申し込みですかね？」

アッサムが小首を傾げながら、呟く。  
ダージリンはその言葉に「さあ？　どうかしら？」と言うと、鳴り響く電話から受話器を取った。

「はい。こちら戦車道部室、部長のダージリンですわ」

電話の相手にダージリンが礼儀良く対応する。  
そしてダージリンが電話の相手から要件を聞くと、

「わかりました。では、先方に電話を繋いで貰えますかしら？」

ダージリンは頷くと、そう答えた。

「ダージリン、相手は？」

電話の合間にアッサムがダージリンに問い掛ける。  
その質問に、ダージリンは受話器に声が聞こえないように手で塞いで答えた。

「大洗女子学園と言うところからよ。試合の申し込みですって」

アッサムが納得したように、一人頷いた。

「珍しいですね。大会前なのに試合の申し込みなんて」  
「そうね。しかも大洗……昔に戦車道をしていたくらいしか聞いたことがないわ」

オレンジペコとアッサムがダージリンを他所に話をする。

ダージリンはその話を小耳に挟みながら、繋がった相手への対応に意識を向けた。

「はい。こちら聖グロリアーナ女学院、戦車道チーム隊長のダージリンですわ」

ダージリンが電話対応をした瞬間、オレンジペコとアッサムが会話を止める。

二人がダージリンへと視線を向けるなか、彼女は気にせず電話の向こうにいる相手の声に耳を傾けた。

『初めまして。私は大洗女子学園、生徒会広報の川嶋桃と申します』

「初めまして、私は戦車道チーム隊長のダージリンと申しますわ」

互いに通過儀礼と言えるような挨拶を交わす。

そして大洗の川嶋桃から、すぐに要件を伝えられた。

『この度は、我が校で再開した戦車道チームの練習試合を申し込ませて頂きたくご連絡させて頂きました』

ダージリンが内心で「へえ……」と呟いた。

ダージリンが聖グロリアーナ女学院で戦車道を嗜む間、大洗女子学園という学校名は聞いたことがない。

小耳に一度だけ、昔は戦車道で有名だった程度のことしか聞いたことがない学校だという認識しかダージリンは持ち合わせてなかった。

「大洗女子学園……戦車道、再開しましたのね。おめでとうございませす」

しかし同じ戦車道の道を進む者達が増えたことを、ダージリンは微笑ましく思った。

実力など関係ない。同じ戦車道を嗜む者を卑下するようなことをダージリンが思うことはない。

故にダージリンは、素直に大洗女子学園の戦車道再開に言葉を贈った。

『ありがとうございます。それで……練習試合は受けていただけですか?』

「結構ですわ。受けた勝負は逃げませんの」

そして大洗からの試合申し込みに、ダージリンはそう答えた。

受けた勝負は逃げない。それは先代から続く聖グロリアーナ学院戦車道チームの方針である。

大会前だろうと、断る理由はなかった。

『受けて頂き、ありがとうございます。それでは詳しい日程は再度また連絡させて頂きます』

「ええ、こちらこそよろしく願いますわ」

試合が決まり、詳細が後日決めることを聞いたダージリンが「では、また後日に」と言って耳から受話器を離し、電話を切ろうとする。

しかし、ダージリンが耳から受話器を少し離れた瞬間——受話器から声が響いた。

『最後にひとつだけ良いでしょうか?』

ダージリンが電話を切ろうとしたところで、受話器先の相手からそう問い掛けられた。



ダージリンが少し眉を寄せる。もう要件は済んだはずなのに、一体なにか用でもあるのかと。

ダージリンは渋々ながら、少しだけ耳から離れた受話器をもう一度耳へと当てた。

「……まだ、なにか？」

受話器の向こうへダージリンが問い掛ける。彼女がそう訊くと、受話器からすぐに答えが出た。

『——に会えるとしたら、あなたは会えますか？』

「今……あなた、なんと仰つしやいました？」

一瞬、ダージリンは何を言っているのか聴き取れなかった。

正確には最初の部分だけ、ダージリンには全く聞こえなかった。

同時に、ダージリンは自分の胸の鼓動が激しくなるのが分かった。どうしてかわからないが……ひどく動揺していた。

「ごめんなさい……もう一度、言ってもらえるかしら？」

再度、ダージリンが受話器へと問い掛ける。

そして次に受話器から聞こえた内容に、ダージリンは酷く動揺することとなった。

『もしも百式和麻に会えるとしたら、あなたは会えますか？』

「なっ——!?？」

その聞いた内容に、ダージリンは思わず席を立ち上がった。

テーブルのカップが激しく揺れようとも、そんなことは気にも止められなかった。

まさか聖グロリアーナ女学院の戦車道チームへ一番触れてはいけ

ない者の名前を出したとは、ダージリンは夢にも思っていないかった。その名前を聞いた瞬間、ダージリンは声を少しだけ大きくして、すぐに思うままに電話越しに問うた。

「まさか大洗に！　そこに居るといっておつもりで!?!?　百式和麻さんが!?!?」

『さあ?　どうでしょう?　特に気にしないでください、妙なことを聞いて失礼いたしました。では、今度の試合でお会いしましょう。それでは』

大洗女子学園の川嶋桃が電話を切ろうと話を終える。

しかしダージリンはそんなことを一切無視して、声を大きくしていた。

「待ちなさいっ！　私はまだお話が——!」

しかしその先を言えることはなかった。

受話器の向こうから、静かに電話が切れる音がダージリンの耳に響いた。

「ッ……!!?!?」

ダージリンが通話の切れた受話器を見つめる。

無性に相手に対する苛立ちが募った。しかしそれをぶつける先もなく、ダージリンは思い切り受話器を置きたくなる気持ちを抑えながら、手に持つ受話器を電話へと戻した。

「……まさか、いえ、そんなこと」

椅子に腰を下ろし、ダージリンが頭を抱える。

そして大洗から出た名前のことを、ダージリンは深く真剣に考え

た。

試合を申し込み、受けさせるための嘘。聖グロリアーナ女学院の戦車道チームを動揺させるための嘘。

色々な考えが出てきたが……それをダージリンは全てあり得ないと一蹴した。

大洗にそこまでするメリットがない。わざわざ百式和麻のことを持ち出した時点で、大洗女子学園は聖グロリアーナ女学院に宣戦布告をしたのだ。

今後、同じ戦車道を嗜む者として百式和麻のことを知っているのなら……わざわざ相手を怒らせるようなことをほのめかすことは今後の関係を最悪にするだけだ。

ただ試合を受けさせる為だけに、百式和麻が大洗にいるなどという嘘が発覚した時——ダージリンを含む聖グロリアーナ女学院戦車道チームの逆鱗に触れるのは、目に見えていた。

リスクとりターンが釣り合っていない。そこまでして、大洗が試合を受けさせる理由があるなら別だが……ダージリンはそれが嘘と発覚した瞬間、今までにないほどに激怒する自信があった。

わざわざ百式和麻の名を出した。ということは、少なからずも……本当に百式和麻が大洗学園艦にいるかもしれないということだろう。

「ふう……」

気持ちを落ち着かせる為に、ダージリンが深呼吸をする。

確かめる方法は、ひとつ。大洗との練習試合の日、百式和麻が本当にいるかないか確かめなければならない。

ダージリンはそれを理解する。ちようど電話の最中、席を外していたアツサムが替えの紅茶を持って戻って来ていた。

オレンジペコが目を大きくしているのを横目に、話を聞いていなかったアツサムへと彼女は声を掛けた。

「……アツサム」

「はい。なにか?」

新しい紅茶を全員のカップに注ぎながら、アッサムが答える。

ダージリンはアッサムが紅茶を淹れ終わり、椅子に座るのを確認してから——彼女へ要件を伝えた。

「多分、和麻さんの居場所がわかったわ」

「……なっ!?? どこです!??」

アッサムが目を大きくして、声を大きくした。

全くダージリンと似たような反応だった。

ダージリンはそれを嬉しく思いながら、先程の電話の内容を伝えることにした。

「大洗よ。私達と練習試合することになる。また戦車道を復活させるから、試合をしたいと申し込まれて……その時に言っていたわ——あなたは百式和麻と、会うことが出来ますかと」

アッサムの表情が顔に動揺を見せる。そして彼女は少しだけ身を乗り出して、ダージリンに訊いていた。

「和麻様が……! 試合は……試合は受けたのですか!??」

「勿論、受けたわ。戦力は、いつも通りにチャーチルとマチルダで良いわ。クルセイダーは……一応、用意しましょう。和麻さんが居るのなら、クルセイダーで戦うのが礼儀でしょう」

アッサムが頷く。そしてダージリンは続けて、彼女へある指示を出した。

「二年と三年をすぐに集めましょう。和麻さんが本当に大洗にいると言うのなら、私達も相応の準備をしなくてはならないわ」

ダージリンの指示に、アッサムが頷く。

アッサムが頷いた後、彼女は少し間を置くと、ダージリンへある質問をしていた。

「はい、もちろん。それでダージリン」

「なに？」

「本当に大洗に和麻様が居て、お会いになった時——どうされるつもりですか？」

アッサムの質問に、ダージリンが言葉を詰まらせる。

本当に大洗に百式和麻が居て、会った時——ダージリンはどうするのかと。

目を伏せて、ダージリンが考える。しかし答えなど元から出ていた。

「決まってるじゃない」

ダージリンがアッサムを見つめる。

真剣な眼差しから、ダージリンは優しく微笑む。そして彼女はサラッと答えた。

「一発、平手を差し上げるわ」

アッサムが意表を突かれ、きよとんとした顔を作った。

しかし次の瞬間、アッサムも笑みを浮かべるとダージリンへ頷いていた。

「ふふっ……では、ダージリンと一緒にこのアッサムも」

「私達をあれだけ心配させたのなら当然よ。私達の戦車道に反しますが、今回は特別」

いつも優雅に。その言葉を戦車道の道として掲げる聖グロリアーナ女学院戦車道チーム。

その言葉に反する行いと理解しているが、ダーズリンはそう思わずにはいれなかった。

「でも本当に……和麻さんが、大洗に居るっていうの?」

しかしダーズリンはポツリと、そう呟いた。

加えて、相手は大洗女子学園。名前の通り、女子校である。

その中に百式和麻が居ると、本当に言えるのか?

学園艦内ではなく、学校に百式和麻が居るのかと?

「まさか……まだ戦車道を続けられてるとでも……」

アツサムが告げた一言に、ダーズリンが少し目を見張る。

あり得ない。しかしそれでも、百式和麻がまだ戦車道の道を諦めていなかったなら……可能性はあった。

もしも本当に、百式和麻が戦車道を諦めていなかったなら……ダーズリンは自分は何をしなければならぬのかと考える。

そして自身の中で出てきた答えに、ダーズリンは納得して一人頷いた。

「アツサム、一年も集めましょう」

「それは……まさか?」

アツサムがダーズリンの言葉の意図を理解する。

ダーズリンは、それにコクリと頷いた。

「ええ、話すわ。一年の子達にも」

「……良いのですか?」

アツサムが再度確認する。ダージリンはそれにまた一度頷いて、答えた。

「ええ、本当に和麻さんが大洗にいるなら……本当にあの方が、もう一度戦車道をしているなら……私達、聖グロリアーナ戦車道チームは知らないといけないわ。いえ、知らせないといけないわ」

ダージリンがハッキリと告げる。そして彼女は話を続けた。

「私達、聖グロリアーナ女学院がずっと背負わなければならぬ罪を。ある一人の殿方が進むはずだった戦車道の栄えある道を、我が校で閉ざしてしまった罪を」

語るダージリンに、アツサムは頷き、オレンジペコはただ耳を傾けていた。

「そしてあの三年の方々が無くなった今、和麻さんを責める人はこの学校にはいない……だからこそ私達の代は、その責任を負わないといけないかった」

この学校が犯した罪。決して忘れてはならない罪。

その責任を負う必要があった。しかしダージリンは目を伏せると、悲しげな表情を作った。

「でも、私達は……グロリアーナはその事実を隠してしまったわ。隠せるはずがないのに」

そう、聖グロリアーナ女学院はどんな形であれど、その罪を隠してしまっただけ。

決して、隠せるはずがない行い。一部の戦車道関係者と戦車道を嗜

む者達に、知れていることはダーズリン自身も十分に理解していた。故に、聖グロリアーナ女学院が陰である呼び名があることをダーズリンは知っていた。

日本戦車道の恥を潰した英雄校、と。

初めてそれを聞いた瞬間、ダーズリンは身体中の血液が沸騰する感覚に苛まれた。

しかし事実は変えられない。それを甘んじて受け入れたのは、ダーズリンの和麻への贖罪とでも言えた。

「探しても、探しても見つからなかった。何処にいるか全く分からなかったあの方が……ようやく見つかった以上、私達は全力で和麻さんに会わなくてはならないの」

そしてようやく、今まで見つけることが出来なかった百式和麻の糸口が見つかった。

だからこそ、ダーズリンを始めとする聖グロリアーナ女学院戦車道チームは彼に会わなくてはならない。

会うことで、何か変わるわけでもない。しかしそれでも、会わなくてはならないという使命を感じていたのだから。

「和麻様のお名前は戦車道界では有名ですからね……」

アツサムが唐突に、そう呟く。

ダーズリンはその言葉に、肩を竦めて答えた。

「その通りよ。僅か入学して三ヶ月でグロリアーナの疾風迅雷なんて言われたくらいですもの」

「今はローズヒップが聖グロの疾風と名乗ってますけどね」

「あの子も、和麻さんのことを忘れたくないのよ。だから私達はあの子の言葉に何も言わなかったのよ」



ダージリンがそう言つて、アツサムを見つめる。

「アツサム……あなたも、あの方がグロリアーナを去つてから操縦手として戦車に乗ることをやめたわ。それに私達が何も責めなかったように、ローズヒップもその責任を取ろうとしてたからよ」

アツサムが目を伏せて、ゆっくりと頷いた。

「和麻さんの名を決して忘れないように。あの方がこの学校に確かに居たのだと証明するように」

聖グロリアーナ女学院の戦車道チームの二年生と三年生は、各々が何かしらの責任を取ろうとしていたことをダージリンは知っていた。

アツサムが操縦手をやめ、砲撃手となった。ローズヒップが百式和麻の異名の一部を借りている。

百式和麻がこの学校にいたということを忘れないように、誰にも忘れさせないようにと。

「バナラ、ルクリリ、克蘭ベリーと名を持つ数々の生徒達は、忘れてはいない。特にクルセイダーチームのメンバーは片時も忘れてはいないことを私は知っているわ」

特にクルセイダーに乗るメンバーは、片時も忘れてはいない。

最も百式和麻と親しかったメンバーは、ある言葉を信条にクルセイダーに乗っていることをダージリンは聞いたことがあった。

「疾風迅雷。その言葉を胸にクルセイダーチームは戦車に乗っている。一年生達は、その意味を知らないでしょうけど……その意味を知る時が来たわ」

その事実を知るのは、二年生と三年生のみだ。

しかし百式和麻の糸口がつかめた。彼に会えるかもしれないというのなら、一年生がその意味を知る時が来たとダージリンは思った。

「百式和麻は、確かにこの学校に居た。その事実をチーム全員が知る時が来たの。ようやく、胸を張って言える日が来たから」

今まで隠していた罪を、その全てを伝える。

百式和麻と会った時、胸を張って謝罪出来るように。

聖グロリアーナ女学院に、一人の男子生徒がいた事実を伝えられる日が来たのだから。

「今日の練習は中止よ。それよりも、もつと大事なことだから……今すぐにチーム全員を集めるわよ、アツサム」

「はい！ すぐに集めます！」

ダージリンにそう返して、アツサムが慌てて部屋を立ち去る。

決して走ることはしないが、その足は極めて早く走ることを我慢していると言いたげにアツサムは出て行った。

アツサムが居なくなり、オレンジペコがダージリンを見つめる。

そんなオレンジペコに、ダージリンは彼女を見つめると一度だけ頷いた。

「ペコにも、ちゃんと話す時が来たわ」

「はい……でも、本当によろしいのですか？ 私聞いても？」

「知らなくてはならないことよ。グロリアーナの戦車道チームが知るべき事実。それを全て話すわ」

今まで真剣そのものだったダージリンの表情が、微笑ましく緩む。

テーブルに置いていたカップとソーサーを持ち、ダージリンが紅茶を一口飲む。

そしてダージリンはオレンジペコに、彼女が今までに見たことがな

いほど綺麗な表情で告げた。

「この学校に居た素晴らしい殿方のことを。そしてあの日の事件の全てを」

オレンジペコがその表情に、思わず言葉を失う。

そのあまりにも綺麗な表情に、そしてそこまで誰かを想うダージリンの気持ちに心を打たれていた。

「あの方の操縦をまた見れるなら、私はその罪をいつまでも背負い続けるわ。どれだけあの方に責められようとも、蔑まれても、それを受け入れる覚悟はあるのだから」

ダージリンが続けて話す内容に、オレンジペコは言葉に詰まっていた。

そこまで誰かを想えるダージリンが酷く脆く見えて、強く微笑む彼女にオレンジペコはただ思った。

本当に、なんて強い人なんだと。

「……わかりました。ちゃんとお聞きします。この学校で起きたこと、そして百式様のことを」

「忙しくなるわ。全力を持って、私達は大洗との試合に臨む。それが……和麻さんへ私達がしてきた今までの非礼に対する謝罪、礼儀というものだと思うから」

ダージリンがカップに入った紅茶を飲み干す。

オレンジペコが空になったカップに紅茶を注ぎ、ダージリンがカップの中を覗くと、彼女は楽しそうに微笑んだ。

「あら？　茶柱が立ってるわね」

今から慌ただしくなるといふのに、ダーズリンは呑気にそんなことを言っていた。

オレンジペコには、そんなダーズリンが酷く悲しそうに見えてしまった。

## 2. 慢心せず、前に進むこと

「あら？・見送りに来てくれたの？」

軍専用輸送機に乗り込む前に、蝶野さんが俺に手を振りながらにこやかに微笑んだ。

あの一件——俺がもう一度戦車道をする決めた次の日の朝。俺は大洗学園艦から早朝に立ち去る蝶野さんの見送りに来ていた。

やはり自衛官の蝶野さんも多忙らしく、そこまで長い期間の滞在も難しいらしい。しかし僅か一日で帰ると聞いたときは流石に俺も驚いた。

「はい、折角ですから見送りをと思ひまして。また今度、お会いしましょう。蝶野さん」

今の時刻は六時前とかなり早い。と言っても、俺も今日は整備の勉強という名のアルバイトがあり、かなり早く起きていた。

今日の朝に大洗学園艦を発つ予定と蝶野さんから聞いていた俺は仕事を早く終わらせて、今は大洗女子学園の運動場に着陸していた軍専用輸送機に乗り込む蝶野さんの見送りに来ていたわけだった。

「ええ、そうね。それはそうと、昨日の夜にあなたがアルバイトしてるとは聞いていたけど……その格好、何のアルバイトしてるの？」

そう言えば、昨日の一件の後に蝶野さんにそんなことを話した気がする。

作業着を着たまま来てしまったせいとか、蝶野さんは俺の格好を見るなり小首を傾げていた。

「学園長からの好意で。整備の勉強を兼ねて、学園艦にある車とかの点検を少し。あとは学園艦の整備で人手が足りない時に臨時で手伝

いをしてる感じですよ」

「じゃあバイト代は、学園長が？」

「ええ、確か給料は学園艦から出てるらしいですよ」

俺がそう答えると、蝶野さんは納得したように頷いていた。

この大洗学園艦に来てから、俺はアルバイトをしている。

将来に整備関連の職業に就く為、学園長のツテでフリーランス的な扱いで、臨時に学園艦内の整備を手伝うアルバイトだ。

元々、戦車道をしてた俺だが戦車道が将来的に出来なくなることを知っていたので、整備関連の職に就く為に勉強はしていた。

そのため親には「厳しく」された。おかげで、自分の乗る戦車の整備と簡単なカスタムが出来るくらいにまで技術を持てた事を考えれば……今は感謝しかない。

そんなわけで整備の仕事は人並みに出来る俺だったので、行く先々で上司の人達に快く受け入れられていた。加えて、学校とは違い「真面目」に仕事をしてるおかげか……学園艦内の整備関係者には良い意味で「色々」と仕込まれている。

そして元々大洗学園艦内の整備士の人手は足りているので週に大体二、三回程度の頻度でしか仕事はない。

そのおかげで俺の普段の生活に大きな影響もなく、俺は整備のアルバイトを続けられているわけだった。

「そう……整備ね。戦車道の方はどうするの？」

蝶野さんが納得して頷いた後、唐突に俺にそう訊いてきた。

俺は少し考えて間を少し置くと、肩を竦めながら答えた。

「昨日言った通り、また始まりますよ。でも、俺はどう考えてもこのままじゃ高校生までしか戦車道が出来ない。整備士の道しかない」と聖グロの時から決めていましたので、今後も整備の勉強は続けますよ」

本来、俺は中学卒業後は整備関係の学校に行く予定だった。だがそれは聖グロリアーナ女学院の入学依頼でやめた。

しかし戦車道を大人になっても出来るとは思ってないので、その点は割り切った。女の武芸である戦車道で男は公式戦に出られない。

それでも男が戦車道に関わろうとするなら、結局のところ整備の道しかなかった。

結局、男は女の嗜む戦車道をサポートをする職業にしか就けないのだから。

「分からないわよ。戦術指南者とかもあるから」

そんな俺に、蝶野さんは笑みを浮かべていた。

戦車道戦術指南者。それはその名の通り国内戦車道に於いて、各プロの戦車道チームに所属する戦車道の選手を指導、チーム戦術のアドバイスをする者のことだ。

大体の戦術指南者は、現役を引退した人になる職業だが……その職に就くことが出来るのは現役時代に名が知れ渡った有名な選手ぐらいだ。

名前を知らない選手に教わるのと有名だった選手に教わるのでは、やはり後者の方が良いに決まっている。

「男の俺に教わるってのも、色々と問題だと思えますけどね」

俺はそう言った蝶野さんに、苦笑いしながら答えた。

まず大前提に、俺は戦車道の公式試合に出場出来ない。その時点で、戦車道のプロになどなれるわけがないのだ。

そのため、俺は高校生以降の戦車道の道は閉ざされていた。

「いえ、あの職業は実力ある者だからこそ出来る仕事よ。チャンスがあれば、なることをお勧めするわ」

「なれたら、ですけどね。俺には先の道がないですから、実力もまだ足

りないと思ってます」

もし俺に大人になっても戦車道の道があるというのなら、諦めたくない気持ちは勿論ある。

中学生、そして高校生の初期まで通用した俺の実力だが……今後のことを考えるとまだ実力不足だと考えられる。

母親に認められたとは言え、まだ俺は百式家の戦車道チームに属する操縦手達には届かない。

俺が一番乗っていたクルセイダーが今この場がない以上、速度に特出した百式家の技術は発揮できない。

速度を重視した技術の向上が出来ない以上、俺自身の成長にも限界がある。

俺には操縦手としての技術しかない。隊長としての策を練る力や部隊を統率する力も、おそらくは各校の隊長達には届かないと思えた。

「……あまり自己評価を低くするのは、周りへの嫌味にもなるわよ？」

呆れたような顔をして蝶野さんが唐突にそんなことを言い出した。

そして俺の顔を見るなり、蝶野さんは溜息を吐いていた。

「あなたの思ってることを当ててあげるわ。今の自分では、まだ全国各校にいる強豪の選手達には届かない……そんなところでしょ？」

その言葉に、俺は目を見張った。

まさか本当に当てられるとは思ってなく、言い当てられたことに驚いていた。

「なんで分かったかって顔してるわね。分かってないと思うけど、そういうところ意外と顔に出やすいわよ？」



蝶野さんの話と同時に、俺は思わず自分の顔を触っていた。

……自分で触つても、よく分からない。

俺は困ったように眉を寄せると、自分自身に呆れて溜息を吐いていた。

「……気をつけます。多分、無理そうですね」

「ふふっ……まあ、分かりやすいのは良いことよ。あなたは自分らしく居れば良いの。変に肩肘張る必要もないでしょ？」

「そりゃ……まあ……」

曖昧に答える俺に、蝶野さんは面白いのか口元を隠すように小さく笑っていた。

そして蝶野さんが俺に近づくと、俺の左肩に左手をトンと乗せた。

「自信を持ちなさい、和麻君。あなたの操縦の腕は誇れるモノよ。それを自惚れるのではなく、誇ることが実力ある人の資格よ。『日々精進あり、慢心せず一步でも前に進むこと』……知ってると思うけど、あなたのお母さんの言葉よ」

蝶野さんに誇らしそうに、そう告げられた。

随分と懐かしい言葉だった。昔、よく母親に言われていた言葉だった。

昨日の自分を超えられるようになりなさい。そんな意味の言葉だ。今思えば、意識が高い言葉だと思う。しかしそれが母さんの信条のひとつなのだから呆れてしまう。

「あの『疾風迅雷』の名を受け継ぐ和麻君なら、きつと前に進めるわ。だから、前だけ見てなさい。立ち塞がるものを突き破るくらいの気合を見せること——良いわね？」

蝶野さんが俺の目をまっすぐに見つめる。

きっとそれは今までの俺に対して言っている言葉なのだろうと、なんとなく思った。

後ろを振り返り、ただ立ち止まっていた俺に対する言葉なのだろう。

全てから逃げて、そして停滞した俺への言葉。

だから立ち止まることを止めたのなら前に進めと、どんなことでも突き破るくらいの気持ちでいなさい。そう言いたいのだろう。

俺はそれを理解すると、蝶野さんの目を真っ直ぐ見つめて頷いた。

「はい。一度無くした俺の道ですが……また進みます。俺の掲げる戦車道のように、まっすぐに、一直線に」

「よく言ったわ！ 流石はあの人の息子ね！」

蝶野さんが俺の肩を力強く一度だけ叩く。

あまりの力の強さに思わず俺は顔を顰める。相変わらず、色々なところが男らしい人だと思った。

蝶野さんは俺の返事に満足したのか、俺から離れると背を向けて軍事用輸送機へと向いた。

「じゃあ、そろそろ行くわ。色々仕事もあるしね」

そう言って、蝶野さんが一歩足を動かす。

しかしその瞬間、蝶野さんは何か思い出したように立ち止まると――顔だけ俺に向けていた。

「それにしても一姫<sup>かずき</sup>さんも人が悪いわね……和麻君の居場所教えてくれないんだもの。前に会ったけど、和麻君のこと毎日心配してるわよ。たまには連絡でもしてあげなさい」

「母さんが……？」

久しぶりに聞いた名前だった。

一姫<sup>かずき</sup>。それは俺の母親の名前だ。

百式流家元、百式一姫。それが俺の母親だ。

疾風迅雷の姫君が戦車道界で一番有名な呼び名である。狂った風神、爆走の狂人、疾風の巫女など多彩の悪名と異名を持つ現役の戦車道選手の一人だ。

「母さんには、しばらく連絡してないです。もう嫌われたと思ってました」

気まずさから、思わず額に皺が寄る。

戦車道を辞めて、この大洗に来て以来、俺は家族に連絡をしていない。

連絡が来るのが嫌だったから携帯も勝手に新しいモノに変えている。今まで使っていた携帯は、部屋の中で電源を切って放置していた。

戦車道を辞めたことに対する罪悪感があったから、母さんに憧れて始めた戦車道に対する申し訳なさがあった。

そして今まで俺に戦車道のなんたるものを叩き込んでくれた母さんに、見せる顔がなかったから。

「あの親バカな一姫さんがそんなことするわけないでしょ？」

背を向けていた蝶野さんが俺に向くと、肩を落としていた。

呆れる蝶野さんに、俺は首を横に振っていた。

「戦車道をやめたから……ずっとそう思っていました」

俺が目を伏せて、ポツリと返した。

蝶野さんは苦笑すると「違うわよ」と言って、首を振っていた。

「あの人は悔やんでるのよ……息子に戦車道をさせるべきではなかつ

たのかもって。あんな大怪我をするくらいだったら、聖グロに入学させたのは間違いだったのじゃないかって」

蝶野さんが目を伏せる俺に、そう告げる。

そして蝶野さんが少し間を開けると、表情を少し暗くしていた。

「それを言った時……泣いてたわよ、一姫さん。私と同じ道を進ませるのではなかったのかもって」

「……そうですか」

蝶野さんの話に、俺は胸が痛くなった。

そんな風に思わせてしまったことが、本当に心が痛かった。

本当は誇って欲しかった。誇れる息子で居たかった。戦車道をさせて良かったと思っただけで欲しかったから。

蝶野さんにそう言われて、改めて俺は戦車道を辞めたことを後悔した。

大怪我をしてしまったこと、戦車道を辞めてしまったこと。それが無ければ良かったと、心から思ってしまったくらいに。

「まあ、それでも息子自慢はしてたわよ。それもいつこいくらい……アレは何年経っても、やめる気はないみたいねえ」

暗かった蝶野さんの表情が、急に明るくなる。

その話の内容に、俺は疑問を抱くことをやめた。

母さんのその手の話には、耳を向けないようにしていた。

過去を振り返っても、その手の話には良い思い出がない。それを俺は十分に理解していた。

「だから、気が向いたら連絡してあげなさい。戦車道、始めたってだけでも良いから」

その言葉に、どう返そうかと俺は思わず言葉に詰まる。  
答えは、どうせ出ている。俺は肩を竦めると、頷いた。

「はい。分かりました。今度、連絡してみます」

その答えに、蝶野さんは嬉しそうに微笑んだ。

「なら良し！　じゃあ今度こそ行くわね！」

「はい！　ではまた今度、お会いしましょう！」

手を振って立ち去る蝶野さんに、俺も同じように手を振る。

そして蝶野さんが軍事用輸送機へと乗り込んでいく。

「和麻くーん！　今年の全国大会、楽しみにしてるわよー！」

乗り込んで行くなか、蝶野さんが大きな声でそう叫んでいた。

蝶野さんが軍事用輸送機の中へ消えていき、それと同時に輸送機が  
離陸する。

そしてゆっくりと飛び上がる軍事用輸送機を見つめながら、飛び  
立っていくのを見届けると、

「楽しみにしてください、蝶野さん」

そう、俺は呟いた。

腕時計の針を確認する。時刻は六時を過ぎたところだった。

蝶野さんが乗る軍事用輸送機が飛び去っていくのを見つめながら  
——ふと、俺は考える。今後のことを。

今は四月の中旬、戦車道全国大会は六月の初旬。

今から一ヶ月半で、この大洗の戦車道チームを全国大会に通用する  
チームへとしなくてはならない。

「ちよつと……いや、かなり厳しいか……」

そう考えると、思わず頭痛がしそうになった。

ドがつく素人の集まりのチームを、強豪校が集まる全国大会に通用させるにはどうすれば良いだろうか？

俺には、自分の技術を仕込むことしか出来ない。他に、チームを勝利へと導く手立てがあるとするなら――

「みほ、だろうな」

頭に一番に浮かんできた顔を、俺は言葉に出していた。

姉の陰に隠れていた妹として見られていた西住みほ。彼女の真髄を見られる日が来るかもしれない。

西住家特有の圧倒的武力で制圧するのではなく、柔軟な思考と基本に忠順でありながらも奇抜な作戦などを用いて戦う彼女なら、多分面白い結果が出るかもしれない。

あの“みほ”なら、大洗のチームをどう動かすか？

それはそれで、楽しみな気がしてきた。

大洗の戦車道チームの隊長をするなら、きつと“みほ”が選ばれるだろう。

多分、強要ではなくみんなの言葉で、あの女は自分でチームを率いることを選ぶだろうと、そんな気がした。

「なら俺の役目は……」

なら、俺の役目はひとつしかない。

みほの出す指示と作戦が実行出来るレベルにまで、この大洗の戦車道選手の技術の向上と育成だろう。

「これから忙しくなりそうだ」

ド素人の集まりに、ある程度の技術を身に付けさせること。それが俺の仕事だろう。

初めて俺が母さんから教わったように、今度は俺が教えなくてはならないのだと。

頭の中で今後の教育方法について考えながら、俺は学校から立ち去ることにした。

まずは家に帰ってシャワーを浴びよう。

そんな呑気なことを考えながら、俺は自宅へと歩を進めた。

### 3. 期待という言葉

蝶野さんを見送った後、時刻は進み学校に行く時間になった。

しかし俺は、本来生徒達が登校してくるより早く学校へ向かっていった。

腕時計の針をちらりと見れば、時刻は七時を過ぎる頃。校内には学校の生徒は少なく、早朝の部活動の練習をする生徒達がグラウンドに見えるくらいだった。

俺はそんな生徒達を横目に、目的の場所へと足を進める。

事前に連絡を入れてもいないが、おそらく……あの憎たらしい女なら多分居るだろうと思いつながら、俺は気付くと目的の場所に辿り着いていた。

「おお〜！ 百式ちゃんがこんな朝にわざわざ生徒会室まで出向いて来るなんて思わなかったよ〜！ もしかしてえ？ 戦車道、取る気になった？」

生徒会室に入るなり、俺にそう憎まれ口を叩くチビ。

偉そうに干し芋を食べながら話す辺り、本当に人の神経を逆撫でするのが上手いと思う。その才能を感じるとある意味、感心してしまう。

生徒会長の座る席で俺を見遣る角谷杏に、とりあえず溜息を漏らしながら俺は備え付けられたソファに我が物顔で腰を落とす。

普通ならこんな失礼極まりない態度など取るわけがないが、目の前にいる女に舐められるのも癪だった。

ソファに座り、部屋を見る。今日は珍しくいつも一緒にいると思っていた二人が居なかった。眼鏡を掛けた腹の立つ女と天然な雰囲気を感じる女、ある意味ない方が俺には都合が良かった。



「あんたに用があつてきた。正直に答えなかつたら、俺はあんた達に協力しない」

そして角谷杏に茶化される前に、俺はそう告げた。

角谷杏が俺の言葉にキョトンと顔を惚ける。しかしそれもつかの間、彼女は面白そうな表情を見せた。

「私に？ ふうーん……で、なに？」

相変わらず口調はいつも通りだった。

俺は腹を立てるのを諦めて、本題を告げた。

「あんた達がなんでこの大洗で一度無くなった戦車道を始めたのか？

この質問に正直に答えないと、俺は大洗の戦車道に協力しない」

俺の質問に、角谷杏が僅かに目を大きくしたのを俺は見逃さなかつた。

昨日、実のところ俺は少し調べていた。この学校での大洗戦車道チームについて。

かなり昔にこの学校の戦車道チームはそこそこ強豪と言われていたらしい。そして当時の車両編成などを知ったが……俺が知れた情報はその程度だった。

ただ戦車道をしたかった、という角谷杏の答えを俺は信じられなかつた。

最初、角谷杏は俺のその質問をはぐらかした。その時点で「裏」があることは、大体予想がついた。

俺とみほを無理矢理にでも戦車道チームに引き入れたいということとは、少なからず「そうしなくてはならない理由」があると考えられる。

俺はまたこの学校で戦車道をするつもりだか……その理由を聞けない限り、目の前の女を信用することは出来なかつた。

人の利己的な思惑に動かされるなんて、俺には我慢出来なかったからだ。

自分の信じることを貫く。それが俺の掲げる戦車道の道のひとつでもある。

それを今更掲げること自体、おこがましいと言えるが……また見失った俺の道を取り戻すなら、どの道避けては通れないことだった。

「言えない……て言っても、引いてくれないみたいだねえ」

俺の顔を見て、角谷杏が苦笑いする。

俺は鼻を鳴らすと、角谷杏の顔を見つめた。

「ふん……そんなの俺とみほを強引にチームへ入れようとする時点でハッキリしてる。確かあのメガネを掛けた女も言っていたな？ 我が校の戦車道に俺とみほが必要だと、言うことは——それだけのことをしないといけないことがあるんだろう？」

ただ戦車道をするだけなら、俺とみほは要らない。必要と言うことは、チームにある程度以上の実力を必要としていることを証明しているようなモノだった。

「俺はあんたを信用して良いか見定めてる。あんたが俺にこの学校で戦車道をさせようとした理由、意味を知らない限り……俺はあんた達生徒会を信用できない」

だからこそ、俺はそれを知ろうとした。

元々、戦車道をする女を最初から信用出来るほど俺は素直になれない。いや……なれなくなった。と言うのが妥当だろう。

角谷杏が口を閉ざす。その表情は何かを考えている顔だとすぐに分かった。

「うーん……そうだねえ。あ、一個確認しても良い？」  
「なんだ？」

角谷杏の唐突な質問に、俺は思わず訊き返す。  
それに角谷杏は先程までの戯けた態度を止めると、真剣な表情で訊いて来た。

「私はその質問に答えたら、百式ちゃん。この大洗で戦車道、やってくれんの？」

今までと打って変わった表情に、俺は少しだけ目の前の女の評価を改めた。

こんな顔もするのかと、素直に思った。

いつもどこか人を小馬鹿にしている顔しか見たことのない俺には、その顔は彼女に対する印象を変えるモノと思えた。

名ばかりと思っていたが、この学校を纏める生徒会長と言われる部分が垣間見えた気がした。

そう思いながら、俺は角谷杏へ答える。答えは、既にあるのだから。

「ああ、約束してやる。必ずあんた達のチームに入ること、俺がこの学校で戦車道をする事約束する」

「証拠は？」

角谷杏が続けて、そう問う。なんとなくだが彼女自身も、俺のことを信用するか見定めている気がした。

今までの俺の態度ならそれも納得出来た。散々嫌がってきた俺が、急に戦車道をするなんて言えば当然と言えた。

俺はどう証明するか悩んだが、それを証明することなど俺にはひとつしかなかった。

自分の胸に右手を当て、角谷杏を見つめながら——俺は答えた。

「……俺の掲げる戦車道の道に誓って」

証明出来る方法なんて、俺にはこれしかなかった。

自分の道の先にあるモノを見つめることをやめ、目を逸らしてきた俺が今更掲げるなんておこがましいと思える。

しかし俺はまた歩き出さなくてはならない。一度捨てた俺の道を。

角谷杏は、そんな俺の言葉に目を細めた。そして何か思うようにド  
ンツと椅子に背を預けた。

「あんだけ戦車道を嫌がってた百式ちゃんが、そこまで言うとはねえ  
……気持ちがかわった？ それとも、正直になった？」

妙に的を射ている言葉だった。

俺はその言葉を見無視することにした。別段、答える必要はない。

「さあ、そこら辺は勝手に思っ調べてくれ。どちらにせよ、俺は戦車道を  
また始める。みほ達ともう一度……捨てた道を取り戻す為に」

角谷杏の言葉を無視して、俺はただ自分の思うことを告げる。

そんな俺に角谷杏は腑に落ちないと言いたげに眉を寄せた。

「西住ちゃん達ねえ……まあ、良いか。どの道、百式ちゃんはキツカケ  
が欲しかっただけの話でしょ？ それが西住ちゃん達だったってこ  
となら納得もできるか」

その独り言に、俺はいつの間にか眉を寄せていた。

この女……知ったような口を。

胸の内から湧き出る苛立ちに、俺は目を瞑る。

またこの女に調子を崩されている。俺はそれを理解すると、それに  
ついて考えることを放棄した。

前々から話してて分かった。この女は、人を“見る”のが上手い。

俺が蝶野さんに言われた通り、分かりやすい人間だとしてもこの女は他人を見る目があるらしい。

憎たらしい。俺はそう思いながら、その言葉に反応することをしなかった。

「……それで、あんたは答えるのか？ 俺の質問に？」

俺が角谷杏に、再度問い掛ける。

これで答えなかったら、俺はこの女——この学校の生徒会を信用することはないだろう。

角谷杏が椅子に背を預けて「ん〜どうしようかねえ〜」と唸る。そして椅子を雑に揺らしながら、干し芋を口に啜えて何かを考え出す。

そうして角谷杏が啜えていた干し芋を食べ切ると、彼女はおもむろに生徒会長の席から立ち上がった。

俺が見守るなか、角谷杏は俺とテーブルを挟んであったソファに向かい腰を下ろした。

俺はその行動の意図が読めず、顔を顰める。しかし角谷杏は俺に向かい、目を合わせると、

「わかった。良いよ、話してあげる」

そう、俺に告げていた。

そして角谷杏が次に口にした言葉に、俺は思わず眉を寄せることとなった。

「ただし、絶対に私と百式ちゃんのこの場所だけの話にすること。これを守らなかつたら、百式ちゃん。この学校に居られなくなるよ？」

その言葉の意味を、俺はどう受け取るか反応に困った。

それは選択科目で戦車道を履修させるための言葉ではない。それを察することはできたが、それ以上の意図を理解することができな

かった。

「どういう意味だ？ それとも単純に……俺を脅してるのか？」

その言葉に思わず、俺は角谷杏に訊き返していた。

しかし角谷杏の表情は、悪ふざけでもなく真剣な表情そのものだった。

「それがそのまんまの意味なんだよねえ……言葉通り、これが学内に知れ渡ると百式ちゃんだけじゃなく戦車道受講者含め、全生徒がこの学校に居られなくなる」

ますます意味が分からなかった。学校に居られなくなるというのが「俺自身」だけでなく、全生徒に及ぶ？

頭の中で幾つか理由を考えるが、予想はついてもどれが正解など分かるわけがない。

俺は少しだけ考える素振りを見せる。そして俺は角谷杏へ「……わかった」と返した。

「良いだろう。ここだけの話にしてやる。話してくれ、あんた達生徒会が……戦車道に拘る理由ってやつを」

俺がそう話すと、角谷杏は「それなら良いよ」と言っけて干し芋を啜えた。

「百式ちゃんに分かりやすく話すとすると、最初からの方が良いかね？ 百式ちゃん……この学園艦、この学校の誇れるところって何があると思う？」

「……急に質問してくるとは思わなかったな」

「良いから、言ってみ？」

唐突な角谷杏の質問に、俺は素直に答えることにした。  
しかし少し考えても、漠然とした問いに答えが出なかった。  
だが答えるとしたら、多分これくらいしかない。

「……温かいことだと思う」

「ふーん？ 理由は？」

特別、興味のなさそうな反応を角谷杏が見せる。俺は自分に慣れた  
と言い聞かせて、答えることにした。

「この学校に男の俺がここに居ても、何も言われてない。ここ女子校  
だぞ？ 普通は本来居たらいけない俺に何かしらのイジメなり、嫌が  
らせをされると思ってたくらいだ」

「百式ちゃん、生徒達に怖がられてるからねえ……報復が怖いんじゃない？」

角谷杏が面白そうに笑みを作りながら干し芋を頬張る。  
完全に馬鹿にしてるな、この女。

俺はその言葉に、思わず舌打ちをしていた。

「うるさい。元々、俺はこんなじゃなかったんだよ」

俺が言葉を返すが、角谷杏は更に面白いと言いたげに笑っていた。

「百式ちゃんが？ 真面目って言葉が似合わない生徒はこの学校にな  
かなか居ないよ？」

「言ってる。真面目にやる必要がないからしてないだけだ。俺だって  
真面目にやろうと思えば幾らでもやれる」

俺だってやろうと思えば、幾らだって真面目になれる。元々、俺は  
真面目だった。

子供の頃から戦車道をやっていたこともあり、普段の素行が悪いと色々問題になることを無意識のうちに知っていた。元より素行は悪くなかったもので、その点は心配なかったのだが……今は違うとだけは認められた。

普段の素行や口が悪くなったのも、この学校に来てからだ。

加えて言えば、偏差値が高かった聖グロの授業にも遅れることはなかったとだけ、俺は心の中で呟いた。

「——話戻すぞ。さっきの話だが……この艦に住んでわかったが、良い人が多い。バイトしててよく分かる。この艦では人の温かさをよく感じる。街の人達も良い人が多い」

先程俺が言った嫌がらせ等を受けてないという事に関しては、無関心という面が強いだろう。加えて、俺が素行の悪い生徒という噂がそれに拍車を掛けていると思う。

在学してわかるが、この大洗女子学園に不良と言われる生徒など無いに等しいだろう。

故に、俺に対して極力関わらないようにする。というのが正しい選択だと察しているに違いない。

アルバイトに関しては、本当にこの艦の人達は良い人が多いと思えた。

アルバイトをさせてくれ、と学園艦に無理を言って仕事をさせて貰っているが、快く受け入れてもらえた時点でそれを察していた。

整備班の大人達から良くしてもらっている。その点には感謝しかない。

時折町を歩くが、全員が仲が良いというのが見てわかる。手を取り合って、艦の人達が協力し合って過ごしている良い町だと心から思っただくらいだ。

「そう言えば、百式ちゃんってバイトしてるんだっけ？　確か、艦内整備とかの」



「……知ってたのか？」

俺がアルバイトしてるのを言ったのは、学園長と蝶野さんくらいだった。

いや、この女なら俺のことを調べていても何も不思議じゃないと思えた。

「こう見えても私は生徒会長なんだよ？ 大洗艦に来てすぐ始めたみたいだねえ。学園長から許可は貰ってたみたいだから何も言わなかったけど」

「別に俺が何しようと思手だろう。とやかく言われる筋合いはない」

角谷杏が「そりやそうだ」とけらけらと笑う。

そして笑いながら、角谷杏は干し芋をまるで煙草のように啜えた。

「まあその話はもう良いか。百式ちゃんの貴重な意見が聞けたし……でもね、百式ちゃん。その理由で新しい新入生が増えると思う？」

「……………」

唐突な質問だった。

俺が答えに戸惑うと、それよりも先に角谷杏は言葉を続けた。

「特別な実績……部活とかだね。大して良い活動実績がなく、それに加えて特別他校に比べて目に見えた違いがない学校で、生徒数の減少が起きてる学校に何が起これると思う？」

端的に言えば、有名ではない学校ということだろう。

聖グロのように英国をモチーフにした学校。黒森峰のように戦車道に特出した学校。アンツイオのようにイタリアをモチーフにした学校など世間には個性ある学校が沢山ある。

大洗にも誇れるところがある。しかしそれは内側から見た姿であ

り、外から見た人達は同じことを思うだろう。

どこにでもある学校だと、他の学校と比べて大洗を選ぶ理由はないと。

そう言った理由から、そのような学校に起きることを俺は理解していた。

「……大体は他校との統合。それか廃校だろうな」

角谷杏が頷く。

その反応で、俺は頭の中で何かが嵌ったような感覚を覚えた。

何も実績を持たない大洗。戦車道に急に力を入れ始めた生徒会。

今は春。その先、夏には……高校戦車道全国大会が控えている。

すぐに実績を持つとうとしている学校。つまりは、すぐに何か実績を作らなければならない理由がある。

そして今の角谷杏が仄めかした『実践を持たない学校に起きること』という言葉。

「なるほど……そういうことか」

「察しが良くて助かるねえ、説明する手間が省けるし」

俺の言葉に、角谷杏は笑みを浮かべた。

そして彼女は俺が理解したと察して、その先の話を続けた。

「今から少し前、三月頃に文科省から役員が来て話があった。この学校に特別な実績もなく、生徒数の減少が見受けられるって、だから——この大洗女子学園を廃校にして艦を解体させろって」

廃校。その言葉が、分かってはいても重い言葉に聞こえた。

そして角谷杏は、その時に起きたその役員との話を説明した。

文科省の役員が『この学校の部活動の実績はありますか?』と質問した。

角谷杏の答えは分かりきっていた『いいえ』と。

更に役員は『この学校への近年の新入生は、例年と比べるとどうですか?』と問い掛ける。

角谷杏はその問いに『減っています』と事実を告げるだけだった。そうやって幾つもの質問を繰り返しながら遠回しに廃校する旨を仄めかし、そして最後に事実を告げてきたことを。

“大洗女子学園は今年度をもって廃校”ということ。

「……………」

そう語る角谷杏の話を、俺は腕を組みながら聞いていた。

正直に言うと、聞いているだけで俺には不快な話だった。それをあえて遠回しに告げた役員に、それを簡潔に答えなければならなかった角谷杏の役回りに、俺は無性に腹が立った。

俺は目の前の女に、情なんて感じていない。ただでさえ日常迷惑していた生徒会の人間に、今更情なんて湧くはずもない。

しかし角谷杏の話で出てきた“文部科学省学園艦教育局長”という肩書きを持つその役員——大人のやり方が、あまりにも不快だった。

反論させる余地を生まない為の行為だと理解出来る。それは目の前の女も理解しているだろう。

高校生であるが、世間では自分達は子供だ。それを分かっているながら、そうした大人に俺は気分が悪くなった。

そしてそれを受け入れた角谷杏の生徒会長としての役目を果たそうとする姿勢を、俺は何故か不快だと思った。

それを俺がどうこう言うつもりはない。ただ俺がそう思ってしまった。それだけの話なのだから。

「その時にある話が出たってわけ、この学校は昔に戦車道でそこそこ有名だったことがねえ。それで私が言ったわけ……“なら戦車道全国大会で優勝すれば、その廃校を無かったこと出来るのか”って」

そうして役員と生徒会は、戦車道の話に行き着いたらしい。

角谷杏の大洗女子学園の廃校という事実を打ち消す道を作るために、僅かに出てきた可能性を掴もうとして。

「それに文科省の人間はなんて答えたんだ？」

俺がその言葉に問い掛ける。

角谷杏は少しだけ呆れたような表情を見せると、小さく笑みを浮かべて答えた。

「小馬鹿にした顔で、出来るものなら、考えても良い」つてさ」

「そういうことか……分かったぞ。ようやく、あんた達がそれまで戦車道に拘る理由が」

そうして俺はこの学校……いや、この目の前の女がやろうとしていることを理解した。

口で言うのには簡単で、本当に実行するにはとても無謀と言えることを。

「高校戦車道全国大会で優勝する。それがこの大洗学園の存続する唯一の可能性か……随分と無茶な話だ」

大洗が戦車道の選択科目を追加したこと。戦車道受講者に特権を与えること。様々な利点を与えてまで戦車道受講者を集めたのは、それが理由だろう。

しかしあまりにも無謀だった。

高校戦車道全国大会に出場するのは、過去から名の知れた有名校ばかりだ。

つまりは強豪校を倒さなければならない。それをど素人が出来るとても本当に思っているのかと。

「西住ちゃんと百式ちゃんが居れば、なんとかなると思ってたねえ」

西住と百式。それは戦車道界で名が知れているのは、十分に理解してる。

力の西住。速度の百式。それがそれぞれの家系の名を世間に知らしめたのだから。

西住みほは、例年優勝校として名を馳せた黒森峰女学院戦車道チームの副隊長。それだけで結果はどうあれ希望を見出すのも理解は出来る。

だが百式の方は――

「みほはともかく、どうして男の俺のことを知ってたんだ？」

そう、それに尽きる。俺は公式戦には一切出た覚えはない。

たまたま聖グロリアーナ女学院の人間と友好があり、それがキツカケで俺を見つけてもらったただけだ。

本来なら女の戦車道界で名が知れることもなかったのに。

角谷杏は、俺の言葉に顔を顰めると小馬鹿にした声色で答えていた。

「はあ……まだわかんないの？ 百式ちゃん？ 自分の名前がどれだけ有名か？」

「……少し有名程度だろう？ 女の戦車道界で俺はそこまで有名人になった覚えはない。他の奴らより、操縦が出来るってだけだ」

色々と批判を受けてきた俺だったが、それを無視して色々としていた結果として多少名前が知られた思っている。

俺の操縦の腕も、まだまだ足りない。百式家の抱える操縦手達には、未だ届かない。

ただ自信を持って言えるのは、誰よりも練習してきたということだ

けだ。

それがなければ、俺は練習試合だろうと『あの舞台』に立てることはないのだから。

「ここまで自分のことを知らないのは、僻みにしか聞こえないよ？ 百式ちゃん、何度も言うけど戦車道をちゃんと知ってる人なら誰でも知ってるよ。ちよっと前まで戦車道について無知だった私も調べてすぐに分かったくらいに」

角谷杏が呆れた表情で話を続ける。

そして次に出た言葉は、俺が以前に聞いた話だった。

俺に対する批判とも言える言葉。そして一部から言われた評価。そして侮蔑とさえ言える言葉を。

「操縦ならば、中学戦車道内でトップクラス。中学生の当時から高校戦車道にも優に通じると言われていた操縦技術。かの有名な『疾風迅雷』の名を継ぐ戦車道の異端児。もしも男ではなく女でしたら、戦車道の頂に上り詰めることが出来た逸材。そして……日本戦車道を汚す日本の恥と言われている」

角谷杏が睨むように俺を見つめる。

それは俺に対する嫌悪などではなく、俺には『自分の価値を知れ』と言っているように見えた。

「たったの三ヶ月で『聖グロの疾風迅雷』と謳われた名操縦手が大洗に居るんだよ？ 使わない理由がない。西住ちゃんの転校手続きも知ってた。なら、二人をどんな手も使っても引き入れるつもりだった」

「たった五両しかない戦力でなんとかなるって思ってたのか？ 大会だと準決勝まではこの学校の倍以上の車両が出てくるんだぞ？」

俺とみほを引き入れたところで、そもそもの戦力が圧倒的に足りていないのは明らかだった。

準決勝までは、ルールによれば十両までの戦車の導入が許可されている。そして決勝には、二十両までの導入が許可される。

つまり倍以上の戦力を有する強豪校に勝たなければならぬというデイスアドバンテージを大洗は背負っている。

絶対に勝てないという訳ではない。何かしらの作戦、相手の意表を突くことをして、なおかつフラッグ車のみを撃破することだけを考えれば可能性はある。

戦車道には、二種類の試合ルールがある。

それが殲滅戦とフラッグ戦だ。前者は出場している全車両撃破が勝利条件。後者はフラッグ車と呼ばれる車両の撃破が勝利条件だ。

高校戦車道公式戦には、フラッグ戦が採用されている。各校の戦力差を補う為のルールとして採用されている。

だから絶対に勝てないことはない。しかしそれでも拮抗してもいい。ない。明らかかな戦力差だと、勝てる保証もない。

「なんとかなる、じゃないんだよ。百式ちゃん」

そんな俺に、角谷杏が答えた。

その顔はあまりにも真剣で、まっすぐに何かを見つめているような顔だった。

俺は……この顔をどこかで見たとあると思った。

「絶対になんとかしないとイケない。百式ちゃん……私はね、この学校が好きなんだよ」

廃校を何があろうとも阻止しようとする意志を感じた。

戯言や虚言などではない。この女は本当に本気でやろうとしているのだと、俺は理解してしまった。

「だから何としてでも、廃校にさせる訳にはいかない。だから私はその為なら悪魔にだって鬼にだってなる。それくらいじゃないとこの問題は解決なんてしない」

自分がどうなっても構わないという覚悟を持って、この女はこの件に望んでいる。

ひたむきに、がむしやらに、前を見続ける姿勢。その姿がどこか懐かしいと思える気がした。

その顔に、その言葉に、俺は妙な既視感を覚えた。

「だから西住ちゃんと百式ちゃんが必要だった。大名家と言われる三大戦車道名家の二家がこの学校にいるっていう他校には決してないアドバンテージをみすみす捨てるなんてことをすると思う？」

そうだ。俺はこの顔を知っている。

この前を見続ける目。絶対に折れないと言い切れる気迫。

がむしやらに自分の信念を曲げないと決めたこの姿は……紛れもなく、俺は知っている。

いや違う。知っているんじゃない。知っているも何も……これは俺の――

「西住の力の戦術、百式の最速の技術。これがあれば今後増えるかもしれない戦力を足して、僅かでも可能性があるなら継るしかなかった。それだけの話ってやつ」

そうして角谷杏は話を終えた。

西住と百式の二家を抱えることの有利性。そして現在の五両しかない戦車が増える可能性を信じ、そして素人達の乗員だけで臨む戦車道全国大会に優勝するためならば……継ると。

俺はその話を聞いて、真っ先にある質問をしていた。



「この話、戦車道受講者には？」

その問いに、角谷杏は肩を竦めて小馬鹿にしたような笑みを見せた。

「言うわけないでしょ？ 百式ちゃん。あの子達に今後の大会試合で一回でも負ければ廃校だなんて言っつて、マトモな試合出来ると思っつる？」

頭に浮かぶのは、以前に蝶野さんが受け持った大洗での練習試合の時に見た戦車道受講者達の顔だった。

俺はそれを思い出すと、思わず「無理だろうな」と答えていた。

角谷杏は俺の答えに満足気に頷いていた。

「でしょ？」

「だから全員にはバレるまで、言う気はないと？」

「もちろん。そのまま気付かないでいてくれた方が、こっちは助かるくらいだからねえ」

さも当然と言いたげに答えた角谷杏に、俺はここ最近で一番の深い溜息を吐いていた。

何が何でも廃校を阻止しようとしているくせに、その考えがあまりにも幼稚に見えてしまった。

問題を解決する為の計画が破綻していると思えない。

まず、この問題はいずれバレる日が来るのは明白だろう。もしバレなかったとしたとしても、そもそも問題がある。

俺は呆れながらも、その点だけをあえて目の前の女にキツク話すことにした。

「馬鹿か？ アンタ、呆れるほど無計画過ぎる。目の前の壁が大きいことを理解してるのか？ 戦車道全国大会はトーナメント方式、妙な風習から実力がある高校しかエントリーされないことからここまで

大勢の高校が出場しない以上、強豪校が殆どだ。最低でも優勝まで四回は勝たないといけない。アンタ……四回勝つてどれだけ大変なことか分かってるのか？」

たったの四回勝つ。そうすれば優勝出来る。

だが、その数字の重みはとてつもないものだ。

高校戦車道全国大会は、トーナメント方式。そして妙な過去からの風習で、有名校もしくは実力校しか大会に出場して来ない。稀にそうではない学校が出場するが、その手の学校は大体が初戦で負ける。

つまりは、新米校にとって初戦が一番難しい。強豪校に勝つということは、それだけ困難ということの証明でしかない。

一回勝つことが出来るだけで御の字のことを四回もしなくてはならない。

それがどれだけ大変なことか、この女は本当に分かっているのだろうか？

「分かってるよ。だから私は西住ちゃんや百式ちゃんをチームに入れたかった。そして戦車道チームのメンバーも、戦車も集めた。後は……勝てるだけの要素を集めるしないってことも。そして最後は勝つだけ、勝ち続けるだけ」

そう答えた角谷杏に、俺は目を細める。

対して、角谷杏は干し芋を啜えながら俺を見つめていた。

これだけ言っても、やはり折れる気はないらしい。それを目の前の女の目が証明していた。

思わず、舌打ちをしてしまう。そして俺は色々と「諦めて」ソファから立ち上がった。

そして俺は干し芋を食べてる角谷杏を見下ろしながら、

「まあ良い、あんた達が何故そこまでこだわるかわかったから良しとする。別に俺にとってこの学校がどうなろうと、あんた達が今後どう

なろうと、俺は知ったことじゃないが——」

俺の言葉に、角谷杏は目を細めた。

明らかに怒っている表情だ。しかし、俺は無視して話を続けた。

本音しか言っていない。俺の知ったことじゃない。廃校になったら、地元の学校に行かされるか整備の専門学校に行くかのどちらかしかない。

知ったことではない。大洗が負けて、廃校になることになっても、だが負けると分かっている試合を見るのも——非常に癩に触る。

「負ける試合ほど、悔しいモンはない。やるからには勝つ、じゃないと……つまらないだろう?」

俺がそう告げると、角谷杏がきよとんと惚けた。食べていた干し芋を落としそうになるくらいに。

俺がそう言って話は終わりと、生徒会室から出て行こうとする。そうして俺が生徒会室の扉に手を掛け、出て行こうとして——

「百式ちゃん。私はさ……期待しても良いのかな?」

角谷杏が後ろで、そう呟いていた。

俺は振り返ることなく、答えた。

「生憎、期待とは反対の言葉が多かった身としては答えにくい質問だな」

振り返れば、期待より失望に近い言葉を言われてきた。

だから俺には、こう答えるのが正しいと思って答えることにした。

「そもそも……期待っていうのは、自分には出来ないって認めて諦めたやつが他人に言う言葉だ。あんたには、到底似合わない言葉だろう

よ。

やれるだけやろう。だけど俺は試合には出れない。出来るのは……やる気がある奴らを鍛えるくらいだ」

何も答えない角谷杏に、俺は生徒会室の扉を開けながら言い残した。

「また戦車道の授業でな、会長さん。そのふざけた態度もたまには改めろよ」

「なら百式ちゃんも、その不良みたいな態度を治してから言っ  
てねえ」

生徒会室から出て行く瞬間に、角谷杏のおちやらかした声が耳に入る。

俺は口の減らない女だと思いながら、憎まれ口を叩いておく。

「うるせえ、チビ女が」

そして俺は生徒会室から立ち去った。

とりあえずは生徒会の目的を知れたのだ。少しばかり生徒会を信用してみよう。

目の前にある問題が多すぎて、頭が痛い。

今後の課題を考えながら、俺は立ち去った生徒会室で角谷杏が呟いた言葉を耳にすることなく頭を抱えていた。

「また、か……百式ちゃんも、ちよつとは変わってきたのかねえ」

そう、少女は呟いたことを。

#### 4. 事故を防ぐには、まず基礎を

その日は、午後から戦車道の選択科目の授業がありました。

今日は勿論訓練をする、と副会長が言ったのをキツカケに生徒会の人達が主導のもと、授業という名の訓練が始まったのですが……

「五両の並列運転!?？ いきなりそんな全体練習させる奴がいるか！

まずは改めて個人の役割を決めて、各人の役割を把握させるところから始めるに決まってるだろうが！」

「うるさい！ 生徒会の決めたことに文句あるのか！」

私達の目の前でかずくと広報の川嶋先輩が言い争いをしていました。

そんな姿を私達全員は、引き攣った表情で眺めていました。

「文句しかねえよ！ 各役割の大切さを教えるところから始めるに決まってる！ 無視して事故に繋がったらどうするんだ！」

「昨日の練習試合では問題なかった！ だから省略したんだ！」

「砲撃手と操縦手の操作ミスで怪我人が出たらどうするんだよ!?？」

今日の全体点呼の時に、改めてかずくんこと百式和麻君の選択科目の戦車道を取ることが決まり、私達の大洗戦車道チームに参加することが決まりました。

全員にかずくんが自己紹介をして、早速練習が始まると思った矢先……二人は言い争いをしていました。

「まあまあ、かーしま。百式ちゃんが折角言ってくれてるんだから、聞いてやんなよ」

「しかし会長っ！」

言い争いをやめないかずくと河島先輩に、会長が仲裁に入りま

す。だけど河島先輩が全体練習をすることを諦めないことに少し苦笑いすると、会長は私の方を見て、

「西住ちゃん的には、どっちに賛成？」

そう、私に訊いてきました。

思わず戸惑う私でしたが、答えは決まっていました。

私としては、かずくんの意見に賛成だったから。いきなり並列運転は、確かに難しいと思う。

こう言ったら失礼だけど、まだ初心者な人達が難しい訓練をするのも怪我や事故になりやすいかもしれないから。

「えつと……かずくんに賛成です」

「くう……!!？」

河島先輩が悔しそうに顔を歪めていました。

かずくんは納得と言いたそうに頷いて、会長は「そっか」と言うのと干し芋を頬張っていた。

「じゃあ百式ちゃん、西住ちゃん。今日はどんな練習をしたら良い？」

そして会長は私とかずくんを見るなり、そう言っていました。

私が「えつ……？」と言ってしまう、会長はそれを見て苦笑した。

「だってかーしまが決めた練習がダメなんですよ？　ならそうした百式ちゃんと西住ちゃんが決めるのが筋つてもんですよ？」

「えつと……その……」

そんなことを言われた私は慌ててしまいました。

思わず私がかずくんの方を見ると、かずくんは肩を竦めて苦笑いしていました。

「別にこつちで決めて良いなら、そうさせてもらう。とりあえず、今日は担当毎に分かれて俺とみほで役割を教える」

「そんなことすぐに終わるだろうー!」

かずくんに河島先輩が突っかかりました。

そんな河島先輩に、かずくんは目を細めて眉を吊り上げました。

あ……あれ、怒ってる時のかずくんだ。

「……あなたは戦車を分かってない」

かずくんが河島先輩に、静かに言いました。

いつもの優しいかずくんじゃなくて、アレは怒ってる時のかずくんの話し方だと私にはすぐに分かった。

「なんだと! 百式! 私を馬鹿にしてるのか!!?」

河島先輩が今にも掴みかかろうとする勢いでかずくんを睨みつけます。

だけどかずくんは、そんな河島先輩に向き合おうと静かに言いました。

「河島先輩。あんたは戦車をなんだと思ってる?」

「戦車がなんだと? そんなもの武芸の道具に決まってる!」

河島先輩の答えに、かずくんは首を横に振りしました。

「ハズレだ。ただ婦女子を育成する戦車道の道具じゃない。ちゃんと扱わないと人が大怪我する『危険な乗り物』だ。

包丁と一緒だ。扱いを間違えたら怪我をする。アンタは、いきなり包丁の使い方を知らない子供に包丁を使わせるか?」

私はかずくんの言葉に納得していました。

確か、私も似たようなことをお母さんに言われたことがあった。

それにかずくんが言う人と人一倍説得力があるのは、ハッキリとしていたから。

かずくんの右目の眼帯を見て、私はそう思ってしまったから。

「そ、それは……」

「戦車は、乗員全員が乗る乗り物だ。一人のミスが怪我に繋がりやすい乗り物なんだ。だから一人一人が自分の役割を理解して、基礎を学ぶことの大切さを言ってるんだ。」

「アンタはそこまで馬鹿じゃないだろう？　ここまで言っても分からないのか？」

河島先輩が顔を歪めて悔しそうにします。

そうして河島先輩は、かずくんを睨むと「……わかった」と答えていました。

「今回はお前の言う通りにしてやる。だが、そこまで言ったんだ。ちゃんと今日の訓練をまとめるのはお前だからな！」

「本当にいちいちデカイ声を出すのをやめてくれ、耳に響く……わかった。今日は俺と“みほ”が受け持つから安心しろ」

……ん？　かずくん今変なこと言わなかった？

なんか私がかずくんと一緒に訓練をまとめるとか言っていた気がしたけど？

「か、かずくん？　私も？」

思わず、私がかずくんに訊いていた。

かずくんが私を見るなり、小さな笑みを浮かべると、



「お前もだ、みほ。砲撃手と装填手、通信手の方を頼んだぞ」  
「ええええええええー!!?」

かずくんの一言に、私は声を大きくした。

私が教官みたいなことするなんて聞いてないよ!

私、そんな人に教えたりしたことあんまりないのに!

近くにいた沙織さんと華さんの方を見ても、二人は苦笑いしてながら、

「みほりん、諦めよ?」

「みほさん! 頑張りましょう!」

揃って頷いて、そう言っていました。

「西住殿! 頑張りましょう!」

ああ、優花里さんまで……

「うう……わかったよお……」

逃げ場を無くした私は、諦めて頷くしか出来なかった。

「俺は車長と操縦手の方を担当する。ああ、戦車はそつちで使ってくれ。俺の方は『今日は戦車は使わない』から」

「え、かずくん? 戦車使わないの?」

かずくんは私に不思議そうに首を傾げていました。

「砲撃のやり方とか、装填のやり方の復習に使うだろ? それに通信手も通信器具を使うんだから当たり前だろ?」

「でも操縦手の方も使うんじゃないよ……って、まさか……?!?!」

私は操縦手で戦車を使わない基礎訓練について、頭に「あることが浮かびました。」

私の言葉に、かずくんは笑みを浮かべていました。

「まあ、それは操縦手達の答え方次第だ。車長の方も話だけはしておく。三時間後に集合で」

「う、うん。分かったよ、かずくん」

そしてかずくんが指示を出すと、それぞれ担当のチーム毎に分かれて私とかずくんのところへ集まることに。

私の方は戦車が置いてある倉庫のところで、かずくんの方は集まるなり私達から離れると、校庭内の森林の中へ歩いて行きました。

去っていくかずくん達を見つめながら、私は「大丈夫かなあ……」と呟いてしまいました。

「みぽりん、そんなに心配してどうしたの?」

「百式さんが久々に戦車道をされるのが心配なのですか?」

沙織さんと華さんが、私に心配そうに声を掛けてくれる。

そんな二人に、私は困ったような表情をしてしまいました。

「いや……なんというか、その……」

「西住殿……もしかして百式殿。百式流のアレをやるつもりですか?」

たどたどしく話す私に、優花里さんが苦笑いしていた。

「優花里さん……もしかして、知ってるの?」

「一応……百式流の名物と言われているらしいですし」

あ、多分優花里さんの思ってること、私と同じだ。  
私と優花里さんの反応に、沙織さんと華さんが首を傾げていまし  
た。

「みぼりん？ あっち、何かまずいことするの？」

不安そうにする沙織さん。

別にまずいことではないんだけど、あっちの人達はこっちより結構  
大変だなあ……って。

「まあなんというか、かずくんの方は結構大変だなあって思ってる  
え、何やらされるの？」

沙織さんが眉を寄せて訊いてきます。

その質問に、私よりも先に優花里さんが答えました。

「百式流の操縦手は、最初に“あること”をさせられるんです」  
「あること、ですか？」

華さんが首を傾げる。

その質問に、優花里さんはかずくん達が去っていった方を見つめ  
て、答えました。

「戦車は自分自身。それを身体に教え込むらしいです」

その答えに、沙織さんと華さんは不思議そうに揃って首を傾げた。  
まあ……普通は、そうなるよね？

私はかずくん達の方をあまり考えないようにして、自分の任された  
ことをすることにした。

砲撃手は照準方法の確認とかで。装填手は装填時の怪我とかの話

とか。通信手は、通信器具の使い方と……  
頭の中でぐるぐると色んなことを思い出しながら、私は自分のやることを考えるので精一杯になるのです。

## 5. 敬語を使うに値する人

さて、ここで問題だ。

今日、女子校である学校で戦車道の部活動に突如本来居るはずのない男が入部して、いきなり自分達に戦車道を教えると言われた時——女子生徒達の反応はどうなるだろうか？

反応は勿論、困惑だった。

俺が全員に改めて自己紹介をした時から、その「違和感」のようなモノを感じ取っていた。

こればかりは仕方ない。それが俺の素直な感想だった。

一応、生徒会長から以前に一方的に伝えられていた情報から、俺は戦車道に詳しい人間ということが知られているが……彼女達の反応を見る限り、あまり歓迎されているとは思えなかった。

主な原因は、俺の学内での評判。特に何人かの一年生は、前に俺が睨んでしまった所為で怖がられている。

こんなことになって、普段の行いがここで影響してくると思わなかった。完全に自業自得であるのだから、文句も言えなかった。

この問題を早く解決しないと、後々面倒なことになるのは目に見えている。

教える側に対して不信や不満を募らせると、ダラけたりサボりをする人間が出てくる。

そんな人間が出てくると、周りの人間に感染し、グループは崩壊するというのが自然な流れだろう。

俺はその問題を「俺自身の課題」として解決しなくてはならなかった。

よって、俺が教える前に必要なことは何か？

今俺に出来ることは、ひとつだろう。

「百式先輩！　なんで眼帯してるんですか!?!?」

目的の場所へ歩くなか、俺の前を歩く小さな女がそんなことを俺に訊いてきた。

先程、歩きながら互いに自己紹介した時に名前を聞いていた。

確かこのちっちゃい女は……坂口桂利奈だったか？

ショートカットの元気がありそうな、何も考えてなさそうな直感タイプ印象を受ける。この女は操縦手専攻だろう。絶対に車長向きではない。

「ちよつと桂利奈！ そんな失礼な質問したら……!?？」

そんな坂口を注意する女が、慌てて俺に「すみません！」と謝っていた。

セミロング気味の髪型に、真面目そうな印象を受ける。この女は、澤梓だったはずだ。

間違はなくこの女は車長だろう。見るからに一年生。ならこの二人がペアだろうと予想出来た。

「澤、気にするな。お前達は俺のこと、何も知らないだろ？ 答えられる質問なら幾らでも答える」

俺の答えに澤が慌てた様子で「桂利奈が……すみません」とまた謝っていた。

怖がられてるな、これは……

ここまで露骨に反応されることがなかったので、少しだけ効いた。後ろで角谷杏がにひひと分かっている声が聞こえる。

俺は顔を引き攣らせるが自業自得と自分を納得させると、坂口の質問に答えることにした。

「この眼帯な。前にちよつと大怪我して、それでしてるんだ」

「じゃあその目、見えないんですか？」

続けて質問してくる坂口。それに澤が顔を強張らせていた。まあ、気になるんだろうな。素直に訊いてくるあたり、何も考えなくて訊いてるに違いない。

「見えないよ。だから眼帯で隠してるんだ。これ……そんなに怖く見えるか？」

興味津々の坂口とおどおどして俺の様子を伺う澤を見ながら、俺は眼帯を指差した。

澤は相変わらず怖がって顔を強張らせている。

しかし桂利奈は、妙に違った反応をしていた。

何か素敵なモノを見つけたような、キラキラした目を俺に向けていた。

「それ！ スゴイカッコいいです！ なんかヒーローみたいな感じですよ！」

……ああ、こいつ絶対に馬鹿だ。

予想の斜め上の返事に、俺はそう思った。

このお馬鹿な感じ、ローズヒップと良い勝負だった。

聖グロ時代に一緒にいた俺のことを「兄」と呼び出した女。それと同類としか見えなかった。

「ぶぶっ……百式ちゃんがヒーロー……」

「アンタ、後で覚えておけよ……」

後ろで笑った角谷杏に、俺は振り向いて引き攣った笑みを見せる。

「隻眼と言えば、かの伊達正宗、柳生十兵衛……渋いぜよ」

そんな俺に隣に居たメガネを掛けた紋付を羽織った女が、訳のわか

らないことを言っていた。

そしてその女の隣に居た軍服の上着と帽子を着た女が頷いて居た。って……あれドイツ軍の軍服か？ あの二人もセットで間違いない。そう確信した。

この二人、名前聞いた時に意味不明なこと言ってたな。

メガネの方が「おりよう」で、ドイツ軍服が「エルヴィン」って名乗ってたはずだ。

馬鹿にされてると思って何度か聞き返したが、ソウルネームだとか言い出したから面倒になって諦めたんだった。

「なるほど、なら第二次世界大戦で活躍したドイツのクラウス・フォーン・シユタウフエンベルクも隻眼だった」

「俺を戦国武将やら剣豪にするな。最後のやつなんてヒトラーの暗殺計画の首謀者じゃねえか……」

思わず、俺は突っ込んでしまった。

まだ日本の戦国武将なら許す。しかしドイツのは勘弁して欲しい。暗殺計画の首謀者みたいなんで言われるのは、正直やめて欲しい。

俺がそう答えると、二人は何か驚いたような顔をして俺を見て居た。

「ん？ 百式はその手の話が出来る口なのか？」

「別に知ってるだけだ。ある程度しか知らない」

エルヴィンが俺に訊いてくる。

知ってるも何も授業で受けた内容だろうが……まあ俺の場合は地元の中学と聖グロ時代を受けたから、大洗の方は知らない。

歴史の方は、戦車道絡みで世界史の方に興味があつて割と調べたりして覚えてるのもあるが……

「おお、なら百式にもソウルネームを考えなくてはならないかもしれ



ないな」

「仲間ぜよ」

勝手に話が進んでいる。というか、ソウルネームってなんだよ？  
妙なことをされると思ってた咄嗟に断ろうとしたが、喉まで出かけた  
言葉を何度か飲み飲んだ。

今はあまりぞんざいに扱うのは不味いだろう。今より嫌われるの  
も、今後の訓練の妨げにもなるかもしれない。

俺は出そうになった言葉を我慢すると、なんとか誤魔化すだけの返  
事をした。

「一応……考えおく」

「任された！」

エルヴィンが嬉しそうな笑みを見せる

俺は溜息が出そうになるのを我慢して、二人を放っておくことにし  
た。

「百式！ バレー部には興味ないの!?!？」

「……なんだって?！」

今度は運動着を着た小さな女が俺に掴み掛かりそうな勢いで訊い  
てきた。

この女……前に俺を捕まえた運動着四人組の一人だったな。磯辺  
典子とか言ってた気がする。

「バレー！ 百式もやらない!?!? 部員募集中！」

「先輩！ やりましょう！ 是非バレー部へ！」

今度はデカイ女が俺に勧誘してくる始末だった。

サイドテールのこの女にしては身長高いな。俺より少し小さいく

らいだ。こいつは、デカイから印象的だった。確か、河西忍って名前だった筈だ。

と言うか、駄目だ。この二人も色々と濃い。

今は戦車道の授業中に何を他のスポーツに勧誘してんだ？

しかもお前達は戦車道やってるんじゃないか？

頭が痛くなってきた……色々な意味で。

ずっと気づかなかったが戦車道メンバーの殆どキャラ濃すぎだろ

……

「バレ部は……遠慮しとく。今は戦車道の時間だから、な？」

自分の顔が引き攣ってるのが、嫌でもわかった。

色々と不安になるメンバー達に、俺は今後のことが不安で仕方ない。

やっぱり俺……この件から降りた方が良いのかな？

そんなことすら思いたくなるくらい、色々と参っていた。

「プププ……あの百式ちゃんが参ってる参ってる」

「会長、そんな風に言ったら百式君に失礼ですよ」

また角谷杏が俺のことを煽っていた。

まだ角谷杏のことを制している人間がいる限り、あの女のストツパーが居てくれて助かったと思いたくなる。

生徒会長メンバーの二人。生徒会長の角谷杏に、副会長の小山柚子。色々と俺に「嫌がらせ」をしていた二人だ。

どうせ首謀者は角谷杏で間違いないだろう。おそらく副会長の方は見る限り「マトモ」と思いたい。

「だってあの百式ちゃんがバレ部って……ぶぶっ」

「会長、良い加減にしてくださいって」

口を押さえて笑う角谷杏を小山柚子が窘めている。

そしてちようど振り向いた俺と目が合うと、小山柚子は俺の方に近づいて来た。

ちようど俺の周りにいたキャラの濃い人間達がそれぞれ話しているところだったので、彼女は俺の隣に来ると申し訳なさそうに頭を下げた。

「百式君、会長が色々とごめんなさい。かなり迷惑掛けたってこと分かっているから……」

そして頭を上げて、小山柚子がそう俺に言った。

俺はそんな態度に、目を大きくしていた。

生徒会と言えば、人を小馬鹿にした生徒会長と人に高圧的な態度を取るメガネの女が居るのだから、全員何かしら問題があると思っているのに……

いや、演技かもしれない。あんな二人がいる生徒会にマトモな人間がいるわけがない。

天然そうな抜けた印象しか受けないこの女は、きっと何かヤバイ一面があるに違いない。俺はそう思っていた。

「会長も桃ちゃんも『色々』あったの。だから百式君に、色々と迷惑掛けちゃったよね。私から謝らせて……ごめんなさい。百式君が戦車道やってくれるって聞いて本当良かったって思ってるから」

申し訳なさそうに謝る小山柚子に、俺は更に顔を強張らせた。

これ、演技か？ いやいや、そうに決まっている。あの会長と一緒にいる女だぞ？ きつとこの後すぐに人を馬鹿にしたことを言うに決まっている。

頼むぞ？ ある意味期待通りでいて欲しい。会長と副会長揃って俺を煽ってくるんだろ？

そう思うなか、小山柚子が近くに人がいないことを確認する。

ちやうど先程まで話していたメンバー達は、俺達より先を歩いているのが見えた。

それを見て、彼女はそっと俺に耳打ちをしていた。

「——会長から聞いたんだ。百式君がなんで私達の学校が戦車道をするかって理由を話したって」

小山柚子が耳打ちをやめる。そして隣で彼女が小さく笑みを見せた。

「ありがとう。百式君、どんな形でも私達に協力してくれて」

そう言つて、小山柚子は頭をまた下げていた。

俺はそんな姿を見て、額に皺を寄せていた。

「いや、別に……俺は自分で出来ることしかする気はない」

思わず、俺は素っ気ない返事をしていた。

しかし小山柚子は、そんな反応をされても嫌な顔をひとつしていなかった。

「ううん、百式君にしか出来ないことを私達はお願ひしたかったんだよ。これから大変かもしれないけど、色々と教えてくれると助かるから……これからよろしくお願ひします」

そしてそう言つて、また俺に頭を下げていた。

歳下の俺に頭を下げる小山柚子の姿に、俺は素直に感心していた。話には聞いていた。生徒会は全員三年生で構成されていると。

だから三年生が俺に頭を下げている姿に、思わず感心していた。歳下に頭を下げる事が出来る人なのだ。

そしてあの二人とは違って、この人はしっかりと自分達が悪いと認

めている。

そう言ったのを含めて、この人は俺に頭を下げることができる歳上の女だと、理解してしまった。

そういうことが出来る歳上の人間に、向ける言葉は決まっていた。

「小山先輩。何度も頭を下げないで大丈夫です。俺は自分のやりたいことをしているだけです。だから気にしないでください」

自然と言葉が出ていた。敬語を使うに値する人間だと、俺は無意識に理解したのだろう。

俺が敬語を使ったことに、小山先輩が少し驚いた表情を見せていた。

「百式君……？ 今、敬語……？」

「あなたは俺が敬語を使わなくてはいけない人と思っただけです。気にしないでください……これからもよろしくお願いします」

俺が足を止めて、小山先輩に握手を求める。

小山先輩はそんな俺に驚いていたが、すぐに俺の手を握っていた。

「うん。よろしくお願いします。百式君」

「百式ちゃん？ うちの小山に手を出さないでほしいなあ？」

そんな俺達に、角谷杏が小馬鹿にした表情で干し芋を食べていた。

「別にそんなことしてない。握手してただけだ。何か不満でもあるのか？」

「あれれ？ 百式ちゃんは私に敬語は使ってくれないの？」

「誰が使うか！ その態度を改めてからにしろ！」

思わず、角谷杏に反論してしまう。

小山先輩に敬語使い、自分に敬語を使わないことに不満そうな角谷杏が何か考える素振りを見せる。

そして意地の悪そうな表情を作ると、角谷杏は小山先輩を指差して言った。

「小山が欲しいなら私を通してからだよく？ 百式ちゃん。いくら小山の胸が大きいからって、そういうことは禁止だよ？」

俺と小山先輩の空気が凍った。

いや、比喻ではなく。本当に空気が凍った気がした。

小山先輩が恥ずかしそうに俺から離れて胸を隠す素振りを見せる。

確かに「ある部分」が大きい人だったが、そんな風に言われたら勘違いされてもおかしくないのは当然だった。

俺は引き攣った顔で、角谷杏を見つめていた。

「アンタ……言っている冗談と悪い冗談の区別もつかないのか？」

「べつにつく？ 私はそうなのかなって思っただけだし？」

関係ないと言いたげに角谷杏が口笛を吹く。

俺は腹の立つチビ女を無視すると、小山先輩の方を見た。

「百式君？ 私は気にしてないから大丈夫だよ？」

いや、俺から離れてる時点で気にしてるでしょ？

別に小山先輩とどうこうなるつもりもないし、なる気もない。

俺は角谷杏の行動に、今日一番で腹が立った瞬間だった。

文句のひとつでも言おうと、目を据わらせて角谷杏の居た方を向く。

しかし、そこに角谷杏の姿が居なかった。

「は？ あの女、どこ行った？」

俺が居たはずの女が居なくなったことに顔を顰める。  
しかしすぐに、角谷杏の居場所がわかった。

「みんなあ〜！ 百式ちゃんが副会長を口説いてるよお〜！」

……人はある一定以上怒ると冷静になるらしい。

俺は前にいた戦車道メンバーに嘘を教えってる角谷杏に、殺意を覚えた。

「あの女……絶対に泣かす！」

「百式君、暴力はダメだからね!?？」

「小山先輩、人は限度を超えたことをするとバチが当たるってことを理解しないとイケない日が来るんです」

小山先輩が俺を制しようとする。しかし俺はそれを一蹴した。

目の前から先程まで先を歩いていた戦車道メンバー達が面白いものを見つけたと言わんばかりに走って来る。

俺はその奥にいる角谷杏を睨みつけると——走り出した。

その足掴んでぶん回してやる。そして泣きながらごめんなさいと言わせてやると意気込んで、俺は叫んでいた。

「ぶん回してやるからそこ動くなよッ！ チビ女ッ！」

「捕まえられるもんなら捕まえてみな〜！ ひゃ・く・し・き・ちゃん  
〜！」

「絶対泣かすッ！」

角谷杏が走り出す。目の前には戦車道メンバー達が迫る。

俺はその集団の先にいる角谷杏に向かって、走り出した。

小山先輩が「暴力はダメだよー！」と叫んでいたが、俺は聞く耳を持たなかった。

走り去った後の俺を見ながら、小山先輩が呆れた表情をしていることにも気付かず、

「ああ……まあ良いか。なんか百式君、みんなと馴染んでくれてるみたいだし」

そうつぶやいていた小山先輩の言葉も、もう俺には聞こえていなかった。



## 6. 知ること、知らないこと

みほ達と居た校舎倉庫から歩いて十分程、学園内の倉庫から森林を抜けるとある広場に、俺は操縦手チームと車長チームの全員を連れて来た。

何故、みほ達と一緒にやらないのか？ という疑問は、当然車長と操縦手メンバーに訊かれた。

俺はその質問を適当に流して誤魔化したのが、勿論理由はある。

無論、戦車道の練習の為である。朝のホームルームの後からわざわざ地図と自分の足を使って確認した内容だが、それを使うも使わないも彼女達次第というわけだ。

と言つても、大洗のことを考えれば……選ぶ選択肢なんてひとつしかないのだが……

「かいちよー、大丈夫ですか？」

視界の隅でうつ伏せに倒れている角谷杏を、磯辺典子が人差し指で突いているのが見えた。

先程、逃げ回る角谷杏を捕まえて文字通り “ぶん回して” 放置していた結果だった。

両脇を後ろから抱え、とりあえず全力で角谷杏を回してやった。

要するにジャイアントスイングの逆である。脇を抱えて、自分を軸に回るだけのことなのだが……

最初は平気そうな声で俺を煽っていた角谷杏だったが、時間が経つと気分が悪くなったのか顔色を悪くして「あっ……これやばい……吐きそう……」と言いだしたので、少ししてから解放した。

角谷杏がすぐに芝生の上に倒れると、そのまま深い呼吸をしたまま動かなくなつたわけだった。

責められる言われは俺にはない。スカートを着た女子の足を掴んで回ることをしなかつただけ、慈悲をくれてやったつもりだ。

角谷杏がぶん回されてあるところを他のメンバーが見ても、特別止

めることをしなかった時点で、生徒会長の威厳はどうしたと言いたかった。

むしろ笑って見ている人達が多かったので、俺を特に責める人はいなかった。強いて言うなら、小山先輩に少し窘められた程度だった。

「じゃあ早速練習始めるぞー！」

「完全に生徒会長を放置してるぜよ」

「あそこまで無慈悲だと、むしろ清々しいものを感じる」

「そこ、うるさいぞ。あそこの会長は放つとけ。先に操縦手メンバーから始めるから、そいつは休ませておけ」

おりようとエルヴィンが倒れている角谷杏を見ながら、何かしみじみと語っていた。

どうせ三半規管が揺れて酔っただけだ。休んでおけば元に戻る。

正直、俺はこれを「ある人」にやられたことがあるから辛さは十分に分かる。勿論、ジャイアントスイングの方だ。

誰って？ 決まってるだろ？ そんなことやる人なんて蝶野さんくらいしかない。

女の人の癖に、中学の時の俺をぶん回せるとか腕力がどうかしてるというのは、今は割愛しておく。多分、あの人なら今の俺をぶん回せる気しかしない。

「ほら、操縦手メンバー集合。集まらないとぶん回すぞ」

俺がそう言うと、操縦手メンバーがすぐに集まって来た。

随分正直な女達だった。余程ぶん回されるのが嫌らしい。

「あの先輩！ 冷泉先輩がいません！」

そんな時、坂口が手を挙げてそんなことを言っていた。

集まったメンバーは、一年の坂口桂利奈と河西忍。二年はおりよ

う、三年は小山柚子の四人だった。

本来居るはずの冷泉がいない。サボりなら引きずってでも連れてくるが、今回は別だった。

「あの女はみほ達の方にいる。戦車動かせる人が一人はいないと話にならない」

みほ達の方には砲撃手と装填手、通信手しかいない。一人は操縦手が居ないと、戦車を動かすことができない。

危なっかしい運転をされて怪我でも事故でも起きたらと考えての結果だ。正直、あのメンバーで戦車を満足に動かせる奴なんていないだろう。

みほも一応動かせるが、あいつはあまり操縦が上手い方ではない。もとより車長を専攻してるから当たり前の話だが……加えるなら、あいつは今回教える側だ。一々戦車を動かして説明するのも手間ではない。

ならば一人だけ、操縦手を付けるのが一番手っ取り早い話だった。

「と言うことは、百式から見て冷泉は操縦は上手いのか？」

そう思っていると、近くで聞いていたエルヴィンが俺に訊いてきた。

俺は首を横に振って、即答した。

「いや全然。まだ下手くそだ。とりあえず戦車を動かすくらいなら文句はないから、今日は外してもらってる」

「相変わらず、百式は容赦ないな」

エルヴィンが苦笑いする。俺は「そういう風に言われる方が悪い」と淡白に答えていた。

冷泉については、IV号戦車の時に一度操縦を見ている。

その時に戦車を「動かす」くらいなら十分だと判断した。  
現状、冷泉は今いる四人より運転は出来るのは確かだと思っ  
てる。

実際見て見ないと分からないが、この四人も同じくらい運転出来る  
かもしれない。しかし冷泉に関しては、前に言っていたことを本当に  
実行する気にいる。

「安心しろ。あいつには一番辛い練習メニューをやらせるから」  
「何を安心するのか分からないんですが……」

俺の言葉に、河西が困惑した表情を見せる。他のメンバーも同じよ  
うな顔をしていた。

冷泉には、俺に「あれだけ」大口を叩いたのだ。なら本当に辛いメ  
ニューをやらせる。

と言っても、基礎は勿論やらせるが……あの女がそれを簡単にこな  
すようなら本当に実行する気でした。

「まああいつのことは放っておいて良い。今はお前達だ」

だから冷泉のことを放置して、俺は話を進めた。

車長チームが倒れている角谷杏を介抱している間に、俺は操縦手  
チームの方を先に指導することにした。

目の前に四人に向かって、俺はある質問をすることにした。

「今からお前達にひとつだけ質問する。その答え方で、今後の練習メ  
ニューを決める」

四人が不思議そうな表情を浮かべる。

俺は右手を顔の横にあげると、指を二本立てた。

「長い時間を掛けてゆつくりと上手くなるのと、一ヶ月で上手くなる。

どっちが良い？」

「百式君……どういうことかな？」

小山先輩が小首を傾げて、俺に訊いてきた。

その質問に、俺は簡潔に答えることにした。

「簡単な話です。今後、俺が操縦手として教える貴女達の方針を決めるだけです」

俺はそれに立てた二本の指を一本に立て直して、話を続けた。

「説明する。先に言った方は、上手くなるには一年を見積もって欲しい。ゆっくりと色々なことを丁寧教える。だから上達したということも実感出来るには時間が掛かる」

丁寧と言っても、十分大変だと思おう。今後俺が数年掛けた内容を一年でやるのだから。

次に俺は一本の立てた指を、二本に戻した。

「で、次に言った方。そっちは一ヶ月で最初に話した段階にまで上手くしてやる。ただし、嫌だと思ってくらいにキツくする。出来ないと言っても、出来るまでやらせる。その後に、俺の知ってる技術を叩き込んでやる」

俺の話に、四人が顔を強張らせていた。

そうだろう。両極端な質問をしているのだから。

実際、大洗での問題を考えれば「後者」を選ぶしかない。

小山先輩を見れば、先程の質問に驚いてはいたが答えは決まっていると言いたげな顔をしていた。

そんな小山先輩を一瞥して、俺は四人の顔を見て、再度訊いた。

「……四人共、どうしたい?」

「今、決めないとダメですか?」

河西が手を挙げて、俺に訊いてくる。

俺は頷くと、ハッキリと答えた。

「駄目だ。今、ここで決めろ。みんなで相談しても良いし、俺に質問しても良い」

小山先輩以外の表情が険しくなる。

しかし河西がまた手を挙げると、俺に質問してきた。

「どれぐらい辛いんですか?」

「さあ? まあどんな泣き言も聞かないつもりでいる。絶対に出るようにさせるのは確かだ」

たったの一ヶ月程度で、強豪校と張り合うには並の努力じゃ足りない。いやないと全国大会まで到底間に合わない。

色々な行程をスパルタで教え込んでいく。じゃないと全国大会まで到底間に合わない。

「後者だとどれぐらい上手くなれるぜよ?」

「そこらへんの学校の操縦手より上手くなれる。素人のお前達が一ヶ月で全国の操縦手と戦えるくらいになれる」

おりよの質問に、俺は更に話を続けた。

「素人がたったの一ヶ月で試合で勝てるようになるには、並大抵の努力じゃ足りない。俺も百式家で操縦手として認められるまで五年以上掛かった。そこまでは言わなくとも、素人が試合で十分に戦える程度まで引き上げる」

俺の言葉に、小山先輩以外が悩む素振りを見せる。

「西住先輩が居るから、そこまでしなくても大丈夫じゃないんですか？」

そんななか、坂口が呑気にそう言っていた。

俺は首を横に振ると、坂口に「それは違う」と答えた。

「みほが居るから勝てるわけじゃない。あいつが作戦を立てたとしても、それを実行出来る技術がお前達にないと話にならない。操縦手と砲撃手、装填手の腕前。通信手同士の連絡の取り合いで、状況が変わるんだ。お前達次第で、作戦の幅が広がる。」

加えて言うなら、戦車道は一人でやる武芸じゃない。勝つ為には全部お前達全員が頑張らないといけない話なんだよ」

みほが居るから勝てるというのなら、あいつ一人でやれば良い。そういう話ではないのだ。

「二人の力で勝つのは、他のスポーツにでも食わせておけ。戦車道は違う。戦車に乗るそれぞれの乗員がひとつのチームになって、戦車が集まってひとつのチームを作る。そしてチームが連携して、相手に勝つんだ。一人で勝てるなんて夢にも思わないよ」

この話は、昔によく母にされていた話だった。

決して、一人で勝つ武芸ではないと。戦車道で一人で勝つなんていう人間は、絶対に折れることになる。

その言葉の意味も、試合に出るようになったら嫌でも分かるようになる。

戦車道とは、個人戦ではない。ほとんどが団体戦で行われる競技なのだということ。

「今のお前達なら、どこの学校にも勝てない。ただひたすらに基礎練を一年重ねるか、一ヶ月死ぬ気で練習して試合に勝てるかもしれないようになるか、どっちを選ぶかはお前達次第だ」

俺の話聞いて、四人が真剣な表情を見せる。

悩んでる表情だった。そんな表情を見せる四人だったが、気がつく  
と一人の女が前に出ていた。

「百式君、私は一ヶ月の方で良いよ」

小山先輩が、ハッキリと答えた。

三人が驚いた表情を見せる。そんな三人を他所に、小山先輩は俺を  
見て言った。

「絶対に上手くなれるんだよね？ 絶対に試合で勝てるようになれる  
んだよね？」

その質問の真意を俺はすぐに理解した。

生徒会メンバーしか知らない、大洗の問題を知っていればその意味  
はすぐに分かった。

負けられない、その言葉が小山先輩の頭にあるのだろう。

一年など待てるわけがない。待てば、その間に大洗は廃校になるの  
だから。

「全力でしてみせましょう。その代わり、泣いても何があってもやら  
せませす」

「良いよ。それでも、だから私は一ヶ月で良い」

ハッキリと小山先輩が告げた。真剣な表情で、まっすぐに俺の顔を  
見つめて。



小山先輩が三人に向く。そして彼女は、三人に言った。

「貴女達は、どうしたい？ 試合に勝てるようにさせてくれるのが一ヶ月なら、やる価値はあると思わない？」

その時、俺は小山先輩に妙な迫力を感じた。

俺はその姿を黙って見守る。そんな時、河西が頷いていた。

「私も一ヶ月で良いです。バレーも試合に勝てないと、つまらないから」

「それもそうぜよ。なら私も頑張ってみることにするぜよ」

「じゃあ私もー！」

小山先輩の声で、全員が一ヶ月で良いと言った。

多分、こんな流れになると少しだけ思っていた俺は、肩を竦めると納得しながら「わかった」と答えた。

「じゃあ、一ヶ月程度で教えるメニューでやる。早速だけど四人共、これ受け取れ」

俺が手渡しで持っていた鞆の中から、四人にそれぞれある紙を渡す。

四人がそれを受け取って、中身を確認すると四人のうちの誰かの声が聞こえた。

「……地図？」

そう、地図だった。

俺が渡したのは、大洗女子学園の校内地図。

その地図に赤字でルートを記入した特別な地図だった。

「今渡した地図に書いてる赤字分かるやついるか？」  
「あれ？ これもしかして、校内の森林を一周するようになってないかな？」

小山先輩が一番初めに気付いた。やはり生徒会だけあって、学校のことには詳しいようだった。

「その通り、これは学内というか学園艦で学園が使える森林を一周してくるようを書いてある。じゃあ、早速だが——今からこの地図に書いてるルートを歩いて来い」

「……えっ？」

四人の表情が固まったのが、見てわかった。

坂口が地図を震えた指で、地図を指差していた。

「これ、めっちゃ長いんですけど……」

「軽く二キロはある。大体一分で五十メートルゆっくり歩くと考えても、単純計算で一時間くらいは掛かるぞ」

三人が険しい顔をした。しかし河西だけは、表情に何も変化はなかった。確かバレー部とか言っていたから、運動関係は得意なのだと察することにした。

実際に俺も歩いてみたが、ゆっくり歩いたとしても一時間ぐらいは掛かった。

確か大洗学園艦は全長七キロある。その中に設置されている森林エリアは、大洗女子学園の管轄だったはずだ。

じゃないと前の練習試合で好き勝手に戦車を動かさないとこらな。

森林エリアを一周してくる。と言っても色々と細かく道順を決めているから、ジグザグに歩いていくイメージだろう。

「ずっと歩くんですか……!?？」

「戦車道の練習じゃなかったのかぜよ……」

坂口とおりようが早速文句を言っていた。

俺は言われることを知っていたので、特に気にすることなく次の一言に河西以外の三人は声を揃えていた。

「誰が一時間で歩いて来いつて言った？」

「「えっ？」」

俺は時計を確認する。そして今の時刻から計算して、妥当だと思う時間を彼女達に告げていた。

「今は一時だな？ 五十分で帰って来い」

河西以外が目を大きくしていた。

しかし俺は相変わらず無視して、話を続けた。

「それとこのルートを必ず歩いている時、歩いている道を意識して歩いて来い。坂、水辺、地面の状態。それを足でしっかりと意識して歩いて来い。身体で歩く道を感じて来い」

「え、本当にこれやるの……？」

小山先輩がたどたどしい声で、そう訊いてくる。

俺は「あえて」答えなかった。腕時計を指差して、早速四人に告げた。

「はい、スタート。一時過ぎたぞ、ちなみに帰ってこれなかったらペナルティーだ」

「な、何をやらせるぜよっ」

おりようが不安そうに訊いてくる。

俺は少し悩む素ぶりを見せる。本当なら目隠しバック駐車を帰宅時間までフルで出来るまでやらせる予定だったが……まだそれは早いだらう。

「そうだな……学校にあるグラウンド二十周で良いだろう」

「確か一周三百メートルくらいだったから……」

「……六キロメートル」

小山先輩が一周の距離を思い出して、坂口が顔を青くしていた。

「先輩、走ってきてても良いんですか？」

しかし河西だけは、やる気満々でいた。良い心がけである。

だが俺はそれを「駄目だ」と一蹴した。

「走ってこなくて良い。歩いて戻って来れる時間設定にしてる。早過ぎても駄目だから、普通に歩いて来い」

「……この練習に意味があるか？」

「じゃないとやらせない」

「わかりました」

河西がそう納得して、一番先に歩いて行った。

おりようと坂口、小山先輩がその姿を見つめる。

俺は腕時計を見て、彼女達を煽ることにした。

「三分経過、時間は待ってくれないからな」

「鬼！」

「悪魔！」

「サボリ魔！」

「最後に言ったやつ、喜べ特別メニューを加えてやる」

ちなみに言ったのは、おりようだった。俺にそう言われて、おりようはどこか絶望したような顔をしていた。

「これ以上、メニュー増やされたくなかったら行つてこい」

そしてトドメと言わんばかりに、俺はそう言い放った。

小山先輩が二番目に歩き出す。そして残りの二人も小山先輩に慌ててついていくように歩いて行つた。

四人が森林の中に消えていくのを見送って、俺は納得したように頷いた。

多分、あの感じならサボったりはしないだろう。どの道、サボると必ずバレるようになっている。

「百式ちゃんは最初から容赦ないねえ」

そんな時、横からそう話し掛けられた。

声の方へ向くと、そこには先程まで倒れていた角谷杏が干し芋を食べていた。

「あんなの序の口だ」

「へえ、じゃああのあと何やらせるの？」

「今、行かせたルートの後三回やらせる。その中の二回は走らないと間に合わない時間にする予定だ」

「百式ちゃん、鬼だねえ」

珍しく角谷杏が苦笑いしていた。

「あいつらが選んだんだ。どの道、百式流をやるにはアレをやらないとダメだからな」

「今の歩かせに行つたやつか？」

いつの間にか俺の横に居た磯辺が訊いてくる。  
俺は頷くと、それに答えることにした。

「あの四人には言うなよ。まあ、簡単に言うとはアレだ。戦車で今後走らせる予定の道を歩かせてる」

その答えに、磯辺は小首を傾げた。よく分からないと言いたいのだろう。

「車長チームのお前達だから説明する。お前達もやらないといけないかもしれないからな」

「それは勘弁してほしい」

「うるさい。説明するから黙って聞け」

エルヴィンの声を無視して、俺は車長チームの四人に説明した。

先程の操縦手チームにやらせたのは、百式流で最初にやらされる歩行だと。勿論、俺もやらされた。

戦車で走る道を実際に歩かせる。最初は歩いて、そして回数を重ねるにつれて歩きではなく走らされる。

そして戦車で走る道を身体で覚えて、実際に戦車に乗って操縦してもらうわけだ。

戦車に乗ってるだけでは分からない坂道なり、ぬかるみ、地面の状態などを身体で実感してくる初歩練習である。

「あれ？　ならコレって私達もやらないとダメなんじゃ？」

一通りの説明を受けて、まず磯辺がそう答えていた。

俺はその答えが出てきた時点で、十分だと思えた。

「正解。車長って言うのは、戦車を頭で動かす司令塔だ。てことは

……試合の会場状態も把握しないといけないわけだからな」  
「じゃあ私も走ってくるー！」

そう叫んで、磯辺が走り出そうとしていた。  
俺は分かっていたので、走り出す磯辺の襟首を掴んでいた。  
首を絞められた磯辺が「ぐっ……！」と苦しそうな声を吐き出して  
いた。

「勝手に行くな。今日はお前達に別のメニュー考えてる」  
「はーい……！」

妙に悲しげな磯辺だった。そんなに走りたいたのか、お前は。

「私達も一ヶ月とか決めるのか？」  
「いや、お前達にはそれはない。とりあえず詰め込めるものは詰め込んでく方針だ」

エルヴィンの質問に、俺は簡潔に答えた。  
そして俺は鞆の中から資料を取り出すと、それらを四人に渡して  
いた。

一年生の澤梓、二年生の磯辺典子とエルヴィン、三年生の角谷杏の  
四人に資料が渡ったところで、俺は話を始めた。

「これを丸暗記しろ。暗記したと思ったら俺のところに来い」  
「あの……これ、なんですか？」

澤が渡された紙を見て、そんなことを言っていた。  
俺は見てのままだと言いたかったが、ちゃんと説明することにし  
た。

「大洗にある各車両のデータだ。五両分ある。これをまず覚えろ」

「自分の分だけじゃダメなのか？」

エルヴィンが手に持った紙をひらひらと遊ばせていた。

「ダメだ、覚えろ。車長が一番頭使う役職だからな。じゃあ試しに……澤、車長の役割言ってみろ」

俺に当てられて、澤が慌てる。

澤は慌てながらも、考えながらたどたどしく答えた。

「えっと……同じ戦車に乗る人の指揮とかですよね？」

「半分正解ってところだな」

澤の答えに、俺が思ったことを使える。

しかしそれ以上先が澤には分からないらしく、彼女は小難しそうに小首を傾げていた。

俺はそれを見て、仕方ないと一から説明することにした。

「車長って言うのは、澤が言った通り指揮をする役割だ。半分正解と  
いうのは、それに加えて周りの状況判断——警戒と監視の役割を持つ  
てる」

「車長以外が戦車の中にいるから、車長がそれを見るのが仕事ってこ  
とか？」

「そういうことだ」

エルヴィンの答えに、俺は頷くと話を続けた。

「車長以外も知らないといけないが、情報って言うのは知るだけで違  
う。例えるなら、砲身が動かない戦車が敵にいたとして、自分の戦車  
の有効射程」と、相手の有効射程を計算して動かす指示を出さな  
いといけない。



これを知ると知らないじゃ戦術の幅が変わる。知っているからこそ活きる場面が沢山ある。速い戦車でも、エンジントラブルが起きやすいから自滅し易いとかかな」

試合に置いて情報、つまり知識の差で勝ち負けは決まり易い。

戦術を知っているのもそうだが、戦う相手の情報、自分の戦力の情報を知らないと知らないでは動き方が全く違う。

相手の有効射程を知っているから、ある距離にいても問題ないなどの判断が出来る。知らないでは、どの場所においても砲撃を受けるかもしれないという不安が募るわけだ。

エンジントラブルの話もそうである。エンジンリミッターを外すと更に加速する戦車もある。使えばエンジントラブルを起こす諸刃の剣というのを知れば、極端な話逃げていけば勝手に自滅する。

そもそもそんなエンジンリミッターを外す時点で、絶対に相手を倒す確信がないと使わないが……それは今は言わないことにした。

勿論、エンジントラブルの話はクルセイダー巡航戦車のことである。俺の愛機と言える車両だ。

「なるほどねえ……てことで手始めに自分達の戦車のことを覚えろと？」

「そうだ。だから操縦手チームが戻ってくるまでにその紙を暗記しろ。覚えたとしたら、俺が問題を出す。答えられなかったらやり直しだ」

「勿論、問題は全範囲から？」  
「当たり前だ」

角谷杏が干し芋を食べながら「了解」と言うなり、芝生の上に座り込むと渡していた資料に目を通し始めた。

なんだかんだあの女は、やる気だけはあつらしい。目つきを見れば、一目瞭然だった。

「あつちも大変そうだが、こつちも大変だな」  
「うーん、色々書いてあつて覚えられるかなあ……」

苦笑いするエルヴィンと顔を顰める澤が各々ボヤク。

しかし文句を言わずに、真剣に資料を見ているので俺はその眩きに特に反応をしないことにした。

「百式！ 覚えたぞ！」

「磯辺、嘘つくな」

とその時、先程まで黙っていた磯辺が意気揚々と俺の前に現れていった。

「大丈夫！ 覚えたから！」

「なら八九式中戦車甲型に於ける整地での最高速度と巡航速度、不整地での速度は？」

俺がそう問うと、磯辺の表情が固まっていた。

いや、お前の乗る予定の戦車の問題だぞ？

しかも一番簡単な問題を出したんだぞ？

これを答えられないようなら、話にならない。

「はい、不合格。やり直し」

「うう……イケると思つたのに……」

磯辺つて案外……じゃなくて見た目通り馬鹿なのだろうかと思いたくなる一面だった。

次、また同じミスするようならデコピンでもしてやろうと俺は心で決意した。

「ちなみに百式はこれ、全部覚えてるのか？」

「覚えてるから安心しろ」

「……マジか？」

エルヴィンが目を大きくしていた。澤も同じような顔をしていた。信じられないと言いたそうだったので、俺は溜息を吐いた。

「そんなに気になるなら、問題出してみろ。どこでも良い」

「じゃあLT-38の懸架方式は？」

意外なところついてくるな……LT-38とは38t戦車のことだ。生徒会チームが乗る戦車でもある。

「リーフスプリング方式ボギー型、リーフ式サスペンションって言った方が良かったか？」

「合ってる……次、IV号戦車D型の主砲は？」

「口径七十五ミリメートルの二十四口径長」

「八九式中戦車甲型の主砲を詳しく説明」

「五十七口径の九〇式五糶七戦車砲。砲身長は十八・四口径で、最大射程は約五千メートル。砲弾初速は毎秒三百四十九メートルの九二式徹甲弾を使用だが、戦車道規定で類似してる競技用砲弾に変更される」

「……全部合ってる」

エルヴィンが声を震わせていた。

教える側なんだから、そりゃ覚えるだろう？

澤も資料と俺を交互に何度も見ていた。

「……満足したか？ ならさっさと覚えろ。覚えたら車長の役割を色々詳しく話すから」

神妙な顔をして暗記を始めるエルヴィンと澤。睨むように資料を

見つめる磯辺と干し芋を食べて読んでいる角谷杏に、俺は操縦手チームも車長チームも前途多難だなど思いながら、いつもの溜息を吐いていた。

そんな不安を抱えながら、俺はみんなを待っている間に今後の練習メニューを考えることにした。

「百式！ もう覚えたぞー！」

とりあえず、この女にデコピンを授けよう。

溜息を吐きたくなりながら、俺は磯辺に問題を出すことにした。

結果？ 勿論、キツイ一発を額に当ててやったよ。

全国大会まで……本当に間に合うのかねえ……

## 7. 向き合えない人に、前に進む資格はない

期限を計算してみようと思う。

勿論、期限とは全国大会が始まるまでの残り時間のことだ。

今の現状は四月の中旬に差し掛かるところ、確か例年の高校戦車道全国大会の開催は夏になる少し前の六月初旬から中旬頃に始まる。

一般的な高校大会とは別で、実は高校戦車道はインターハイ扱いられていない競技なので全国大会の開催時期が他の競技と違って実のところかなり早い。

例年の妙な風習により、名のある有名校もしくは強豪校しかほとんど参加しない全国大会であることから総勢で多くても二十校程度の学校しか参加しない。年度毎にばらつきがあるが、大体の目安として参加する学校の数はある程度絞られている。

その点で計算すると、最低でも四回から五回は勝たなければ優勝出来ないという条件が発生するが、この時点ではそれを割愛させてもらう。

全国大会公式戦の一回戦から準々決勝までの使用車両の上限は十両まで認められ、準決勝は十五両、そして決勝戦は二十両までの使用を許可される。ちなみに最低参加車両は五両までだったはずなので、ここを大洗女子学園がクリア出来ただけでも良しとする。というか、しないと色々俺の心が持たないし、話にならない。

……とりあえずは現状の四月中旬で、今後全国大会が始まる六月までの約一ヶ月半でどれだけ俺のいる大洗女子学園の戦車道チームが成長できるかというのが最大の課題であり、俺の役目でもある。

大洗女子学園の保有する戦車の総数は、全国大会の最低参加車両数の五両。

IV号戦車D型。38t戦車B/C型。八九式中戦車甲型。III号

突撃砲F型。M3中戦車リーの計五両だ。

大洗女子学園の戦車道受講者は俺を除くと二十二名。加えて、西住みほ以外は戦車道に関してはドの付く素人。

——はつきり言えば本当に話にならない。これを一ヶ月半で全国大会で戦えるようにしろというのが、到底無理な話だ。

と言つても……やり方によつてはやれないことはないが、それだのみほ以外のメンバーにはかなり辛い思いをすることになる。

いくつか考えた案の中で、一番勝つことだけを考えた可能性をひとつあげるのなら、みほがこの素人集団を指揮をすれば戦えないこともない。

しかしそれは前提としてみほの指示に『全員がちゃんと動ける』場合に限る。この時点でそれを可能にする技術も経験も足りない素人の彼女達に求めるのも間違っているのだが、全国大会に勝ち抜くという目標を達成するならば話は変わってくる。

極論、勝ちたいなら上手くなるしかない。対戦相手よりも技術が上手く、相手より上回る策を練って勝つのが理想だが、それを全て求めるのはあの集団には酷というやつだ。

だから今回の大会が始まるまでに俺がしなくてはならないことは、個々が上手くなるという点よりも、みほが出すであろう指示に全員がちゃんと動けるようにすることだ。

みほが指揮を執り、車長が指示を受け、それを各メンバーが理解して行動する。これを確実に出来れば、勝てる可能性が見えるかもしれない。

ひとまずは、車長と操縦手の成長が一番初めの課題となる。次に砲撃手及び装填手の技術向上、そして通信手の連携について。最後に車両及び戦車道メンバーの増員くらいだろう。

これだけで十分に頭が痛くなるが、これとは別に……俺がなんとかしなければいけない一番の問題がある。

それは大洗女子学園が廃校になるということを隠した状態で、生徒会以外のメンバーのやる気をどう維持するかということだ。

全国大会で優勝しなければならぬ理由を知る生徒会とそれを知らない他のメンバー達とは、そのやる気の温度差に明らかな差が出てくる。

一つ間違えれば、練習が嫌になり何人かが戦車道チームから去ってしまうかもしれないという不安要素を抱えて、俺は彼女達を成長させなくてはならないのだから難易度が高いなんてものではない。

ただやらなくては勝てない。なら、どうしなければいけないだろうか？

結局のところ、その点に関しては答えはすぐに出た。

各人の向上心の上げ方は大体考えている。

しかしその中でも……やはり反抗心からの成長を促すのが、一番手っ取り早い。



かずくんが私達の戦車道チームに入って、一週間が経ちました。

初めは怖がられていたかずくんも、今では少しずつみんなと打ち解けていると思います。

相変わらずかずくんは学校の授業は出てなくて、沙織さんにホームルームの時間に会うたび怒られている光景に、私も慣れつつあります。

そんなかずくと沙織さんを見て、華さんもかずくと話してみたいと言っているんだけど……あんまりお話ができてないみたい。

たまに二人が戦車の砲手についての話をしているのを見たことがあるけど……なんだろう？ どころなくかずくんが華さんのことを苦手みたいな顔をしてる気がする。

今度、かずくに訊いてみようと思います。華さん、すごく優しい

人だから、かずくんもすごく仲良くしてほしい。

優花里さんは念願叶って、先日かずくと戦車道の話をする事ができました。すごく元気に戦車道のことを話す優花里さんに、かずくんも平然とついていけているから流石だなあと思うばかりです。

優花里さんって戦車道したことがないのに、ものすごく戦車に詳しい。詳しく過ぎるから本当に戦車道を今までしてきた人や戦車に詳しい人しかついていけないくらい色んなことを知ってます。

そんな優花里さんに、かずくんも平然と話についていけるからやっぱり変わってないんだなあと安心したりしている私がいちります。

そんな風に一年生の子達と私達二年生組、三年生の先輩さん達とも馴染みつつあるかずくんが戦車道のチームに入って、一週間が経って……少しずつ変わってきたことがありました。

「あの……麻子さん……今日も目つき悪いけど大丈夫?」

「別に普通だ。問題ない」

「そうなら良いんだけど……」

走るIV号戦車の中で、私は操縦席に座る麻子さんにそう訊いていました。

後ろからちよつとだけ見える麻子さんの横顔がものすごく怖い。いつも気だるそうな顔をしている麻子さんだけど、選択科目で戦車道の時間になると決まってこんな顔をするようになりました。

そして操縦席に座る時だけ、まるで呪いのように一人で呟くことも多くなりました。

「絶対に次は勝つ。あの男、絶対に次は勝つ。あの男、絶対に次は泣かすっ!」

「まーた言ってる。麻子、また“それ”出てるよっ!」

沙織さんがそんな麻子さんに呆れながらそう言うと、麻子さんはハツとして顔を歪めていました。



「ごめん。つい……」

「そんなに悔しいの？ 三日連続タイムトライアルで百式君に負けて？」

通信手席に座る沙織さんが隣の操縦手席に座る麻子さんに質問します。

麻子さんは沙織さんの質問に大きく頷くと、

「当たり前だ。それに私がああ男の所為でどれだけ嫌々あの辛い練習してると思ってる」

「練習キツくなったのって全部自業自得じゃん」

「何度、戦車道辞めてやろうかと思ったか……！」

「辞めると単位貰えなくなって進級出来なくなるよ？ おばあに怒られても大丈夫？ あとそれすると百式君から逃げたってなるから逃げるに逃げれないの分かってるよ？」

「くっ……！」

冷泉さんが悔しそうしているのが、なんとなく後ろ姿だけで分かった気がしました。

戦車道の授業が始まってから一週間が経って、一番大変なのは操縦手チームというのが私達大洗戦車道メンバーの常識になっていました。

かずくん主導の下で操縦手チームで決まった一ヶ月成長計画が始まってから、鬼のような練習の日々が続いていました。

こっそりとかずくんが練習内容を聞いたとき、その内容に私は少しだけ引いてしまいました。

一週間目は本当に初歩的な戦車を運転するための基礎。二週間目に基礎の応用を終わらせるようです。

そして三週間目は更にその応用で、四週間目が実践をとことんやるという流れを目標としているみたいでした。

各週で本来沢山時間の掛かる練習を無理矢理やらせると言ったときのかずくんの顔は……明らかに本気でした。

そんなかずくんの思惑通り一週間経って、まず第一段階の初歩的な基礎は終わっているみたい。

戦車を運転する為に必要な最低限の知識と操縦は、もう全員問題ないってかずくんは言っています。

毎日宿題を操縦手チームの皆さんに出して、午後からの選択科目の時間から下校時間まで全部使って土日も休みなく一週間練習した成果だとかずくんは話していました。

そろそろ朝練を入れていかないと間に合わないかもしれないとかかずくんが話していた時、私は心の中で操縦手チームの皆さんに黙祷を捧げました。

だけど操縦手チームの皆さんがそんな一週間で練習してるなか、ひとりだけ明らかに違う練習メニューをやらせられている人がいました。

察しの通り、麻子さんです。

麻子さんだけは特別でした。最初の数日、練習メニューを苦もなくこなしていくうちに、明らかにかずくんが麻子さんだけ難易度が高い練習をさせていることはすぐにわかりました。

そのことに麻子さんが気づかないわけがなくて、かずくんに直談判をしたのですが……

『おい冷泉、俺に言ったよな？　どんな練習でも出来ないなんて場面はないって？』

『お前の出す練習メニューなんて簡単過ぎて話にならない。だからと言って私だけ違う練習しても結果は変わらない』

売り言葉に買い言葉でした。かずくんの話に麻子さんがすぐに言

い返すと、いつもの喧嘩が始まりました。

それを沙織さんが慌てて止めるのがいつもの流れになってしまいました。

そして二人が喧嘩しないように沙織さんが見張るなか、話し合いの結果——かずくんは諦めたように、麻子さんへ言いました。

『はあ……そこまで言うなら、俺と戦車で勝負して勝てたらこれからの練習をかなり楽にしてやる。ただし、負けたらその日の練習量増やすからな』

その一言から戦車道の授業が始まって僅か四日目から急遽始まった、今では恒例行事となっている麻子さんの『百式チャレンジ』が始まったわけです。ちなみに命名は会長さんです。

百式和麻に勝てれば、練習メニューがかなり楽になる。

そういうルールで始まった百式チャレンジですが、操縦手チームのみなさんに伝えても、実際に挑戦したのは麻子さんだけでした。

後で他の皆さんに聞いたところ、口を揃えて『四日しか練習してないのに自分がある人に勝てるわけない』と答えていました。

そんな麻子さんの挑戦した百式チャレンジの最初の三日間は、IV号戦車を使ったタイムトライアルでした。

決められたルートをどちらが速いタイムで走れるかという内容で始まった勝負。かずくんはブランクがあるから、かなり麻子さんでもしかしたら有利かもという当初の皆さんの意見でしたが——

かずくんはたったの二回だけIV号戦車を試運転するだけで、麻子さんに大きなタイム差をつけて勝ってしまいました。

同じ戦車、同じルートを使っている勝負なので、勝負の内容は本当に技術しかありません。

どちらが速くコーナを曲がれるか、減速と加速をする判断の早さ

とかの技術面での勝負に、かずくんは九ヶ月くらいのブランクを感じさせない走りを見せていました。

こればかりは麻子さんも言い返せない様子で、悔しそうな顔をしているのがとても印象的でした。

そんな麻子さんですが、私から見て麻子さんの運転は十分に凄いと思っっています。

かずくと勝負して大きな差で負けてしまいました。麻子さんはまだ初めて戦車に乗ってから二週間も経っていません。

そんな人がもう十分に戦車を動かしているのですから、麻子さんはやっぱりすごい人なんだと思うばかりです。

そして今日も麻子さんは、かずくに挑んでいました。

今日もタイムトライアルでの勝負と思っっていました。かずくんは少し悩む素振りを見せて、

『そうだな……今日は趣向を変えてみよう。予定より〃かなり早い〃が、模擬戦を試みようか。俺はIV号以外の戦車に乗る、照明弾使用の一撃被弾ルールで一本勝負でやってみるか』

急遽、模擬戦をしようと言いました。

私は素直に驚いていました。かずくんの練習計画を聞いていたので、まさか予定を変えるなんて思っってもなかったからです。

『どうした？ タイムトライアルで私にそろそろ負けそうだから模擬戦にでもするのか？』

『俺とタイム差縮まらない奴が何言っただよ。曲がる時のブレーキとアクセルの踏み方が上手くなっただけから言ってる。それと車体が勢いに乗っかって曲がるのが遅い。今のままだといつまでも俺には勝てない』

『くうう……い！ こんのっ！』

『痛ッ!? お前！ 人の脛蹴りやがったなッ！』

そんな驚いていた私を余所に、かずくと麻子さんがまた喧嘩を始めました。

私を含め、全員が『またか』と呆れた顔をしていました。

そんな二人を沙織さんが怒るのも、いつもの光景です。

そして私は、後々になって気づくのでした。

かずくんは危ないと思うことは、まずさせません。

模擬戦なんて基礎が出来てない操縦手にかずくんがやらせるわけがありません。

ということは——かずくんはある程度麻子さんを認めていることに、私はしばらく経ってから気づくのでした。



相変わらず久しぶりに座る操縦席は、かなりのブランクがあるにも関わらず、意外にもしつくりと馴染んだ。

戦車に乗って四日目なのに、毎回懐かしいと感じてしまう自分と運転していることが楽しいと思えてしまう自分がこそばゆい感じた。

操縦席の窓から見える限られた視界。身体全身に感じる車内の振動がとても懐かしく感じた。

失明して右目で視野が左側しかないが、もともと操縦手席から見える視野は狭いので片目でも不自由はなかった。

今こうして運転している戦車も、今まで操縦したことがない戦車だが……スペックは理解している。試運転もある程度先程したので問題はないだろう。

操縦席のある両サイドのハンドルレバーと加えて中央にシフトレバー、足下にあるアクセル、ブレーキとクラッチの位置は把握している。

ドイツのⅢ号突撃砲F型。砲身が回らないことで有名な固定砲台を持つ車両だ。元々は歩兵支援用車両だったという話もあるのだが、その辺りは歴史の流れがあり今のF型になったとだけ言っておこう。

乗員四名。全長約六メートル、戦備重量は約23トン。エンジンは

マイバッツハHL120TRM・4ストロークV型12気筒液冷ガソリンを採用。整地での最高速度は四十キロメートル、不整地の速度は十九キロメートルで走れる。

とりあえず十分に動かせる「速度」がある戦車だから問題ない。チャーチル歩行戦車のように整地で二十キロ程度しか出せない戦車だったら百式流は一切使えない。

機動力で戦う戦車と全く違う戦い方をする戦車とは、百式流は相性がかなり悪い。

きつとダージリンの耳にでも入れれば小言のひとつでも貰いそうな気がするが、そんなことを話す機会は今はまだないから好きに言わせてもらおう。

「冷泉は懲りないなあ、余程百式に負けてるのが悔しいと見た」

操縦席の後ろでエルヴィンがそんなことを言い出した。

「タイムトライアルで三日連続挑んで立て続けに負けてはムキになるのも無理ないぜよ」

「それも自分と同じ戦車使つてのタイムトライアルだからなあ」

おりようとカエサルが装填手席でそんな会話をしているのが聞こえる。

俺は久しぶりに感じる操縦の高揚感を感じながら、エルヴィン達に答えた。

「もとはあいつが言い出したことだからな。前まではタイムトライアルだが、今回は趣向を変えて一両対一両の模擬戦だ。気合い入れて指示を出さないとIV号にやられるぞ?」

「百式が操縦してるのにか?」

エルヴィンが意外そうな声で返してくる。

俺は溜息が出そうになるのを我慢して、ちゃんと説明することにした。

「俺だって車長の指示がないと動きにくいに決まってる。見える範囲ならなんとかなるが、操縦席の視界の悪さ分かってるだろう？」

操縦手は万能じゃない。操縦手席から見える視野は狭いに加えて、前方だけしか見えない。サイドミラーなんてモノもないので、俺には前しか見ることができない。

ということは周りの状況の把握をするのには、車長からの指示と報告がなければ意味がない。

砲塔が向いているかいないかなどの敵の位置の把握は車長頼みなのが操縦手の宿命だ。

昔を思い返すなら安斎先輩やローズヒップならこの辺りを把握して報告をするので、俺はかなりやりやすかった。

「百式ならなんとかしそうな気がするぜよ」

俺の後ろでおりようがポツリと呟いていた。

俺は「そこまで俺は万能じゃない」と返して、苦笑いしていた。

三突の乗員は四人だが、今回はハンデという形で俺の後ろでおりようが乗っている。

おりようの仕事はもちろん俺の操縦手を見ることだ。

こうしておりようが無駄口を叩いているが、後ろから視線を感じるのでもしつかりと学んでいると思いたい。

盗めるものは盗んでおけ、と内心で思いながら俺はいつも通りに操縦手としての仕事をこなす。

「おっと……二時の方向、IV号の砲身がこっちに合わせてきてるぞ」

エルヴェインからの報告を受けて、俺はすぐに三突の車体を二時の方

向に向ける。

そして俺からもIV号の姿を確認して、IV号の砲塔が動いているのを目視する。

目視で多分二百メートル程度先に、IV号が三突を軸に反時計回りで移動しているのが見えた。

確か五十鈴の砲手の腕前は素人にしてはなかなか良いはずだった。ならば、ある程度照準を真ん中に合わせて来るだろう。

更にもほなら俺を近づけることを避けるだろう。なら今、俺が向かってきていることを嫌がる。

IV号の砲身が細かく動き、そして止まる。それを俺が目視すると、すぐに行動を始めた。

「了解。揺れるからちゃんと身構えておけ」

俺はそう言って、車体操作を開始する。

しばらくやっていないはずなのに、身体に染み付いた動作は忘れていなかった。

息をするようにペダルとギア、ハンドル操作をする。

俺の操縦に因應るように、車体が大きく揺れる。そしてその瞬間、IV号から砲撃音と共に砲撃が飛んできた。

車体を右にズラしていたので、左側に砲弾が通り抜けていく音を聞きながら俺はIV号戦車に向かっていった。

「……相変わらず綺麗に回避するな」

「でも相手の砲撃に逃げるんじゃないじゃなくて向かってくのは毎度ヒヤヒヤする。当たらないとは分かかっていても」

「喋るのは良いが手を動かせ。やり返すぞ」

エルヴィンと左衛門左が無駄口を叩いていたが、俺はIV号戦車に向かって操縦手しながら簡潔に伝えた。



「距離を詰める。エルヴィン、停車後の砲撃合図は任せた。左衛門左、しっかり決めろよ」

「了解！ 任された！」

エルヴィンと左衛門左が気合いの入った返事をする。その後、エルヴィンがハッチを開けて外を見ながら、IV号との距離を報告してくる。

俺は近づけさせないと言わんばかりの砲撃と移動をするIV号戦車に、思わず顔を顰めながら眉を寄せた。

「相変わらず、みほの指示が相手だとやりにくい」

俺の手が読まれているみほに、一本取るのはかなり大変みたいだ。

冷泉に負ける気なんて更々ないが、俺はリハビリを兼ねて本腰を入れて操縦に集中することにした。



「改めて見ますが、やはり百式殿の操縦する戦車は圧巻ですね。西住殿」

「うん。やっぱり掠りもしない……かずくんが操縦するとかかなり厄介だよ」

IV号から撃った砲撃を車体を左にズラして回避した三突を見て、私と優花里さんは同じような感想を言っていた。

相変わらず、操縦に関してのかずくんの腕はズバ抜けて上手い。

「距離を詰めればよろしいのでは？」

私の前で砲撃手席にいる華さんが提案してきます。

しかしそれに私は首を横に振って答えました。

「それは駄目。かずくんに至近距離に近寄られるのはまずいから」  
「でも三突は砲身が回らないんでしょ？ なら前みたい横にいるようにして砲撃を躲してから打ち返せば良いんじゃない？」

私の答えに、沙織さんが質問してきます。

きつと前に模擬戦で戦った時のことを言っていると思います。

確かに、砲塔が回らない相手には本来はそれで良いんですが――

「かずくんがそんなことさせてくれると思う？」

私は、すぐにそう答えていました。

沙織さんが不思議そうな顔をしていたので、私は全員に説明することを兼ねて話をすることにしました。

「かずくんの操縦なら、向かい合ってる状態で撃てば絶対に躲されません。しかも回避されて接近されれば、きつと側面に車体と砲塔をこっちに合わせてすぐに砲撃してくるはずですよ」

「……百式くん、そんなこと出来るの？」

沙織さんが目を大きくして驚いているのが分かりました。

私は頷くと、かずくんの技術のひとつを説明していました。

「急な車体操作はかずくんの得意分野だよ。いきなり車体が横に転回するのなんてお手の物だよ。多分、かずくんが操縦してるだけで三突の砲塔が回らないっていうのもあんまり関係ないかも」

百式流の得意とする車体転回でした。熟練の操縦手だと思う方向に的確に転回出来るという話をかずくんとお母さんから聞いたことがあります。

「前にも簡単にお伺いしましたが、百式流ってそんなに凄いですか？」

そんな私の話を聞いて、華さんが不思議そうに訊いてきました。

私はそのことについて答えようとしたが、私より先に優花里さんが話を始めていました。

「西住、島田と続く戦車道三大名家のひとつですよ、五十鈴殿。最大速度での精密操縦と繊細で大胆な車体操作が有名なのが百式流です。しかも百式殿は中高生戦車道界で過去に『疾風迅雷』という異名で呼ばれた名操縦手ですから、あの方から一本取るとなるとかなり大変かと思えます」

優花里さんの言う通りでした。

戦力で圧倒する西住流。変幻自在の技術で圧倒する島田流。そして圧倒的な速度で圧倒する百式流。

かずくんは一度過去にその名前が各校に広まるくらい有名になったことがある操縦手です。

いくら三突に乗っている人達がまだ戦車道を初めて間もない人達でも、かずくんが乗ってるだけで話は変わってきます。

操縦手が違うだけで、戦車の動きは全然違います。砲撃手や車長でも変わりますが、一番の違いが出るのが操縦手です。

「日本の操縦手と言えば百式流とまで言われています。操縦手だけでもそうですが、更に砲撃手との連携が完璧だと一対一ではまず負けないという噂です」

確かその噂を作った人って、かずくんのお母さんだった気がします。

かずくんのお母さんって主に車長をしています、操縦手として運転することが多い珍しい人です。

その時の戦車の動きは私も映像や実際に見たことがありますがお母さんも『アレは操縦の技術を極みにまで登り詰めた結果』とまて言わせた程でした。

そんな噂を広めるまでになった操縦手の名家の百式流の長男で「疾風迅雷」と呼ばれた人が目の前にいるわけです。

「ねえ……麻子、そんな人に勝てるの？」

沙織さんが引き攣った表情で、隣で操縦する麻子さんに話しかけていました。

麻子さんは話に特に動じるところもなく、黙々と逐一出している私の指示に従って操縦していました。

「勝てるかじゃない。勝つ、絶対にあの男の泣きつ面を見てやる」「相変わらず百式君のことになると頭に血が登るんだから……」

相変わらず、目つきが据わっている麻子さんでした。

沙織さんが呆れているのも、なんとなく私もわかる気がします。

私はそんな麻子さんに少しでも答えようと思い、全員に言いました。

「とりあえずやれるだけやりましょう。かずくんみたいな人と戦う機会はあまりないですから、麻子さんのいう通り勝つ気持ちで頑張りましょう」

私の言葉に皆さんの返事を聞きながら、私はハッチから三突の姿を確認します。

その時、エルヴィンさんと目が合いました。

楽しそうな顔をしているエルヴィンさんを見て、私も無意識に負けたくないと思いました。

かずくんに負けるのは、ちょっと悔しい。

私はそう思うと、早速華さんと麻子さんに指示を出していました。



Ⅲ号突撃戦車とⅣ号戦車D型が模擬戦をしている様子を見ながら、角谷杏が顎に手を添えて嬉しそうに頷いていた。

「良いねえ……」

思っていたよりも順調に進んでいる。そのことに角谷杏の表情に笑みが浮かんだ。

また一週間しか経っていないが、見る限り練習が順調なことがわかる。

確か百式和麻から角谷杏が聞いた練習内容は覚えてる。最終的には模擬戦を主にするというのも、しっかりと覚えていた。

しかし今のままでは一対一での模擬戦しか出来ないということも、和麻の口から困った声色で聞いていたことも杏はしっかりと覚えていた。

大会直前になると練習試合を受ける学校なんてほぼ無い。それを杏は和麻から聞いていた。

しかし試合経験をなんとかさせる方法がないか考えておくと和麻が言っていたが、杏もそこまで投げやりにするつもりは毛頭なかった。

和麻の予定とはかなり違うことになるかもしれないが、経験を詰ませるためには「ある程度」順番が変わっても仕方ないだろう。

調べてみたが、いくつか練習試合を受けてくれそうな学校はある。

杏は、その内のひとつの学校に目を付けていた。

「かーしま。この勢いでそろそろやっちゃおつか？」

自分の隣にいた河島桃に、杏がそう告げる。  
桃は杏のその言葉の意図を理解すると、すぐに頷いていた。

「はっ！ 連絡して参ります」

「えっ？ 何がですか？」

杏に返事をして立ち去る桃に、小山柚子が訳がわからずに目をパチクリとさせている。

しかしそんな柚子を無視して、桃は颯爽とその場から立ち去って行った。

杏は立ち去っていくのを足音で確認しながら、二両の模擬戦を見届ける。

「百式ちゃんにも、向き合ってもらわないとねえ」

杏が三突を見つめて、呟いた。

彼が過去と向き合って前に進むためには、それだけじゃ足りない  
と。

色んなモノを放棄している人間に、前に進む資格なんてない。

和麻に酷かもしれないが、杏はやめる気はなかった。

それが学校の為に、彼の為になると自信を持って言えたからだっ  
た。

## 8. 意味のない練習はない

操縦手チームの運転は、とりあえず俺が見る限りなら「動かす」だけなら問題ないと実感できるようになった。

それは俺がこの大洗の戦車道チームに入ってから、十日が経過してようやくと言ったところだ。

基礎の中の基礎を一週間で無理矢理叩き込んで、次の応用を覚え始めた三日目辺りから最初の頃に比べれば「ある程度」見れる運転ができるようになっていると俺は実感している。

この十日間で今だに誰一人欠けることがなく、ここまで俺の練習に食らいついてる彼女達の努力は、ちゃんと認めなければならぬと思う。

本当は全員に朝から夜まで一日中させたいところだが、俺の突発的にある早朝バイトや全員に学校があることから午前中の練習が基本的にできない。

全国大会前になれば流石に朝練をしていく予定だが、今はまだその段階ではないから今現状の練習時間でやりくりしていくことにしている。

このまま彼女達のモチベーションを維持していききたいところだが……正直なところ、彼女達が戦車道に対してどのような気持ちを持っているかはわからない。

毎日ただ辛い練習をしているだけで、まだ彼女達は戦車道の「楽しさ」というモノを実感していない。

今のメンバーのほとんどの理由は、ただ戦車道を受講すると色々な利点があるから受けているというのが主な理由だろう。

前に秋山から聞いた話になるが……俺はもちろん出てなかったが、全校集会で戦車道受講者を募る話があったらしい。

戦車道受講者で成績優秀者になった者には食堂の食券百枚、通常授業の三倍の単位、遅刻見逃し二百日などの特典を設けると言っていたらしい。

生徒会か戦車道をする理由を知っている俺からすれば、そこまでの「エサ」を撒き散らして生徒を集めようとしていたことに呆れてしまう。

と言ってもそれを聞いた以上、俺もそれを受け取る資格はある。そんな話を聞いていなかった俺は、すぐに角谷に確認しに行った。ここでは割愛するが、俺がその特典を受け取るか否かについて「一悶着あった」とだけ言っておく。

しかしながら、それだけでも十九人しか集められなかったというのも、妙な悲しさがある。この学校の生徒は大きなエサで釣られるような人間はそんなにいなかった、ということなのだろう。

そんな余談はさておき、話を戻そう。

先程の話した戦車道受講者の特典目当てで現時点で戦車道をしている彼女達は、本当に戦車道を楽しんでいると思っではないだろうか。今はただ辛い練習をしているだけだ。だから、まだ彼女達は知らない。

戦車道が楽しいという気持ちを、やって良かったと心から思える瞬間にまだ会えていない。

どれだけ辛いと思われようとも、俺のことが見るのも嫌で嫌いになろうとも、その先の気持ちに出会えることを俺は切実に願っている。

だからこそ、今はその為の準備期間。

車長にはみほ主導のもと、乗員の指揮と索敵・警戒についての理解。更に座学で戦術と戦略についての理解を深めてもらっている。

砲撃手には、精密射撃と行進間射撃の技術の向上。

装填手は、ひたすら砲弾の装填練習。及び車長の補佐を兼ねる為に座学を少し。

通信手では、各車両での通信連携の取り方などを座学と実践で練習。



操縦手については俺が主導のもと、戦車を自分の手足を動かすように操縦できることを目標にして練習。

これが、今の火洗の練習メニューの大まかな内容となる。

これを午後からの選択科目の時間から下校時間まで平日を毎日、一部は土日休むことなく練習をさせている。

本当のところこれだけで誰か一人でも欠けると思っていたが、思いのほか全員が参加している。全員の根気強いところには、俺も内心驚いているが内緒にしておく。知られてあのメンバーに調子に乗られても困る。

ここ最近だと、前に俺と冷泉で行った模擬戦が全員のモチベーションを上げているらしい。

実際に戦っている姿を見ていた者には、自分も早く戦車で戦ってみたいという気持ちがあるみたいだ。何人かに自分達も模擬戦を試みたいと俺に直談判してきたメンバーもいたくらいだ。

勿論、俺は「俺が良いと思うくらいに操縦手が上手くなってからな」と一蹴した。

そんななか意外な収穫があった。

おりようこと——野上武子が、前の模擬戦の時に俺のⅢ突の運転を見てから何か思うところがあつたらしく、ひたむきに練習するようになった。

特に俺に練習させてほしいと言っているのが、Ⅲ突の砲塔転回を出るようになりたいらしい。

エルヴィンやカエサルから聞いた話だが、授業中にすら俺が操縦手全員に渡している運転教本を読んでいる時があるらしい。

……なんで俺がおりようの本名を知ってるかって？

角谷に頼んで、学校の生徒名簿見ただけだ。

突然、俺が本名で呼んだ時のアイツの顔は見ものだった。顔を真っ赤にして焦っていた時は、笑うのを我慢出来なかった。

冷泉は、いつも通り俺に対して対抗心を燃やしている。本当に扱

やすい。特に俺との模擬戦から集中力が増して運転の精度が上がっている。

俺を倒すことしか頭がない故か、俺がやっていることを無意識に覚えていく節がある。

手本で一度しか見せていないことなどを明らかに覚えているような操縦を見た時は、流石に俺も舌を巻いた。

これならあの女に「アレ」を教えても良いかと思っているところだが……今はまだ様子を見ておくことにしよう。

色んな意味で、今後の成長に期待している女だ。

他の三人もそれぞれ操縦の傾向と特徴が見えてきているので、それを踏まえて今後の成長に期待したい。

そしてその成長する操縦手を更に活かすには、車長の成長も忘れてはいけない不可欠な要素だ。



今日は私こと西住みほが担当している車長のチームの練習に、かずくんが来ました。

ここ最近各チームに練習内容を伝えて、操縦手チームに付きつきりだったかずくんは、今日は車長チームの練習に参加するようです。

かずくんが私達の戦車道チーム参加してから、練習メニューはかずくんが決めるようになりました。

それぞれ細かく指示を出していて、それを実際にやっていないと後々でわかるようにしているみたいなので、全員がサボることなく練習しています。

昔に私のいた黒森峰みたいに失敗すると怒鳴られたりするような厳しい練習というわけではないのですが、確かに私を見る限り基礎をしつかりと学ばせている練習をしているとなんとなく実感しています。

す。

そんなかずくんがその日の練習内容を各チームに伝えて練習を始めたのですが、何故か車長チームだけ練習内容を伝えずに私達のところに来ると、肩に掛けていた大きな鞆からある物を私達に見せて「今日の車長チームはこれで練習する」と言ったのがはじまりでした。

「え……？　かずくん？　それって、まさか……？」

かずくんの手にある片手で持てるくらいの薄い箱で『戦車道大作戦！』と書かれたモノを見て、私はそれがすぐに何かわかりました。

昔、小学生の頃によくお姉ちゃんとお母さんで遊んでいた覚えがある子供も大人も楽しめるというテーマに作られたオモチャに、私は思わず首を傾げてしまいました。

かずくんはそんな私に、楽しげな表情で答えました。

「ん？　勿論、みほは知ってるだろ？　ボードゲームだ」

『……ボードゲーム？』

車長チームの皆さんが声を揃えていました。

そんな驚いている声に気にする様子もなく、かずくんは小さな笑みを浮かべて言いました。

操縦手チームの大変な練習をよく見ていたので、どんな大変な練習をさせられるかと思っていましたが、それは気のせいだったみたいで  
す。

「今日はこれで五戦を一セットとして、結果が勝率八割になるまで下校時間まで帰れないからな」

『ええええええええ！？！』

前言撤回です。相変わらず……スパルタなかずくんでした。

驚く私達を見て、楽しそうな笑顔を見せるかずくんはやっぱり皆さ

んが言うように「鬼」というのが、なんとなくわかる気がする私でした。

「文句を言うくらいなら、手を動かして頭を動かせ。車長の仕事だ」

さて、このゲームのルールは至って簡単です。

一対一の二人で行う戦車道をモチーフにした対戦ゲームです。

車両は五から十五両まで使えて、それぞれの戦車の特性を活かしてターン制で各プレイヤーが自分のターンで行える行動回数を使ってマップ内で戦車を動かし、相手の戦車を倒していく内容です。

使う車両は互いに同じ数しか使えないので、使う車両の総数で難易度が変わってきます。かずくん曰く、ここで子供から大人まで遊べるようにしているのが「売り」らしいです。

ルールもフラッグ戦と殲滅戦の二つと本格的に選べて、誰でも戦車道を簡単に楽しめるオモチャなわけです。

かずくんが今回指定した車両数は十両のフラッグ戦。使う国の車両は試合前にクジで決めて、国で固定するということらしいです。ドイツ、イギリス、フランス、日本、アメリカの中で決められた五つの国で使える戦車を使って、合計五戦で勝率が八割——つまり四回勝つまで、下校時間まで帰れないというのが今日の練習とのこと。

今回の参加メンバーは、私達車長チームとかずくんの計六人です。そんな説明を受けて、早速ルールを教わった皆さんで始まったボードゲーム大会が始まりました。

「だああああ！勝てないっ！」

そうして私の前で、磯辺さんが頭を抱えています。

アメリカのM26パーシングの駒を握りしめて、膝から崩れ落ちた磯辺さんを見て私は苦笑いをするしかありませんでした。

「西住ちゃん、強いねえ〜」

私と磯辺さんの試合を見ていた会長さんが干し芋を食べて楽しそうにしています。

私は「いえ……そんな」と苦笑いしてしまいました。

本当に言いにくいのですが、磯辺さんが弱過ぎました。

私がドイツを引いてしまったので電撃戦で戦ったのですが、磯辺さんがそれに対処出来ずに全滅してしまっただけです。

アメリカの戦車なら戦い方は沢山あったのですが、戦車の特性を活かして戦えなかったのが敗因でした。

もっと磯辺さんが「アメリカの戦車の特性」を知っていれば、戦い方も違ったと思うのですが……

……あれ？　もしかしてかずくんのこの練習の目的って、まさか……？

「先輩方、あつちの方が凄いですよ……見てください、あの盤面」

私がかずくんの考えがなんとなくわかった時、私と磯辺さんの試合を見ていた澤さんが私達にそう言っ指を向けていました。

私が澤さんが指差す方を見ると、そこで対戦している盤面を見て少し引いてしまいました。

「うわ……かずくん。相手フラッグ車を一両だけ残して包囲網構築してる」

そこにはイギリスを使うかずくとイタリアを使っていたエルヴィンさんが戦っていました。

かずくんは森林マップでエルヴィンさんのフラッグ車を八両の戦車で包囲していました。

一切手加減していない盤面に、かずくんはエルヴィンさんを無慈悲に見つめていました。

「どうした？ 降参するか？」

かずくんは明らかに勝敗が決まってある盤面なのに、エルヴィンさんに降参させようとしていました。

エルヴィンさんは盤面を強く睨みつけながら、なんとか打破する方法を考えているようでした。

でもエルヴィンさん……流石に八両相手に一両で勝つ方法はないですよ。戦車道の本当の試合ならまだしも、ゲームだと数が圧倒的に勝ち目がないです。

「くううう……！ これはまさしく背水の陣！」

「……背水もなにも、もう詰みだ。もう少し考えて戦え」

エルヴィンさんが肩を落としました。負けを認めたようです。

かずくんはそんな姿に溜息を吐くと、目の前の盤面のエルヴィンさんの使っていた駒を指差しました。

「もうお前の負けで良いよな？ 駒をさっきの盤面に戻すぞ？ この

時のこの盤面だ。お前、P40をなんでここに動かした？」

「百式のチャーチルを側面から狙おうとして……」

「それならP40を先に出すべきじゃない。せつかくCV33がいるんだ。陽動に使い、どうせCV33じゃ撃破は無理なんだ。俺のチャーチルとマチルダを誘い出す手を考えていれば話は変わってきた。例えばここでお前のコイツが——」

かずくんが駒をひとつひとつ動かしながら、ゆっくりと話していきます。

確かに基本の考え方でした。私がエルヴィンさんの立場なら、同じことを考えていたと思います。

と言っても、相手がかずくんならそれを読まれるのを考えて別の動かし方もすると思いますが、それはまた別の話になると思うのでエル

ヴインさんには言わないでおこうと思います。

「なら、ここでこうしたら？」

「それなら俺は多分こう動かしたろう。それならお前はコイツを動かせば有効打を打ち込めるチャンスがある」

「なるほど……流石は伊達政宗、深い読みだ」

「……人を勝手に伊達政宗にするな」

一通り説明を終えたかずくんが、苦笑いしてエルヴィンさんに呆れていました。

とりあえずはまだエルヴィンさんの勝率八割は無理そうな感じでした。

「そういえば百式ちゃん。今日は操縦手の方に行かなくて良いの？」

そんな時、会長さんがかずくんにそう訊いていました。

私も気になっていたので、後で聞こうと思って話でした。

かずくんは使っていた駒を片付けながら、思い出したように答えました。

「ああ、アイツらは今出掛ける。それに俺もいつまでも操縦手だけ見てるわけにもいかないからな」

かずくんが続けて「そろそろ他のチームも見ていかないと意味がない」と妙に意味深なことを言いました。

なんとなくかずくんの考えがわかる気がするのですが、確信が持てないので練習が終わった時にでもこっそり訊いてみようと思います。

多分ですが、かずくんはメンバー全員に自分がしている練習の目的を明確に言うことをあえて控えている気がします。

自発的に目的に気づくことを大切にしているところがよく見えます。

このボードゲームの目的も、かずくんは目的をちゃんと一言も話していないからです。

私が練習を見ている限り、会長さんとエルヴィンさん辺りは気づいている感じですよ。澤さんはなんとなく察している感じで、磯辺さんは……言わないでおきます。

「なるほどねえ……それで今日は操縦手チームはどんな練習をさせてるわけ？」

干し芋を食べながら会長さんがかずくんに続けて質問します。

かずくんは少しだけ考えるような顔を見ると、渋々と言いたげに答えました。

「……アンタが知ってるか分からないが、艦内にあるせんしや倶楽部って店に置いてあるアーケードゲームを難易度ノーマル以上でクリアして来いって言うてる。クリアしたらゲームリザルト画面と自分の姿の写真を撮って戻ってくるようになってな」

かずくんの答えに、私は思わず声を出していました。

「えっ？ それってあの戦車を操縦して戦うゲーム？」

確か前に優花里さん達と行ったお店だったはずですよ。

そこで優花里さんが遊んでいたゲームが一台あったような気がします。

「そう、それだ」

かずくんが頷いているので、気のせいではないみたいでした。

お店のゲームってあまり遊んだことがないので、お金を使うはずですよ。



「かずくん、アレってお金使うんだよね？ お金はどうしたの？」

「全員に五百円渡してる。それ以上は自腹でやれって」

「一回いくら使うの？」

「百円。だから十分な額を渡した」

五百円って……つまり五回しか出来ないってこと？

ゲームって簡単にクリアできるモノじゃない気がするんだけど

……

「百式ちゃん、相変わらず鬼だねえ」

会長さんが面白そうに笑っていました。

かずくんは会長の態度に「うるさい」と眉を曲げていました。

「俺だって自腹切ってるんだ。それ以上は出す気はない。人の金だと真剣味がないだろうし、予算超えると自腹っていうのが更に真剣にやるだろうさ」

やればやるほど自分のお金が減っていく、ということらしいです。

私は操縦はあまり得意じゃないので、自分でなくて良かったと正直に思いました。

「それに今回の練習の本質に気づけばすぐにわかるはずだ。俺はアイツらにはただ「クリアしろ」としか言っていない」

「……その言い方だと、始める前に攻略法を探しても良いってことか？」

エルヴィンさんがかずくんの言い方に気がついたみたいです。

かずくんはエルヴィンさんの質問に頷くと、

「そういうことだ。多分、アイツらは最初は普通にやるはずだが、基礎しか出来てない状態だけだと、まず勝てない。だから弱点とか動きのパターンを調べてやれば良いんだよ。戦車道の試合にも通じることだ」

なるほど……？

結構強引な気がしますが、大体合っているので否定も出来ませんでした。

勝つためには、相手の情報も大切です。試合に出てくる戦車を知られたり、作戦を知られたらそれに対する作戦を立てるだけです。

「あのゲームは俺もやってみたが意外とよく出来てて、シミュレーターとしては十分に使える。今回のアイツらの基礎応用編の練習目的は、車長以外でも自発的な敵の情報収集をしないとイケないってことを理解させることだからな」

かずくん、それはかずくんだけだと思う。

そこまでは流石にどこの学校もしてないと思う。

かずくんレベルになると話は違うかもしれないけど……大体は車長と隊長が受け持つところだよ？

「なるほど……ちなみに百式はクリアにいくら掛かったんだ？」

エルヴィンさん……その質問は駄目だと思います。

多分、私の予想通りの答えが返ってくると思います。

「百円」

「……だと思った」

エルヴィンさんが苦笑いしていました。

そういう練習をさせるってことは、かずくんのことだから実際に自

分でもやってみたのでしよう。

それで成果があると思っただから、そんな練習をさせているに決まっています。

「それ、みんな気づかなかつたらどうするつもりなの？」

私が一番気になるところをかずくに確認します。

みんながそんな察しが良いわけありません。もしかしたら気づかない、なんてこともあり得ます。

「あいつらが無駄に金を使い続けるだけだ。多分、冷泉辺りならすぐに終わらせてくるだろう。アイツは楽したがるからな。俺がクリアしろとしか言っていないことに気づいて攻略法を調べるか、それか予算の範囲で模索するだろうさ」

「かずくん。それ、結構無茶ぶりだと思うよ？」

かずくんに、私が思ったことをそのまま伝えます。

操縦手チームの皆さん、大丈夫かなあ……

かずくんは私の言葉に目を大きくすると、少しだけ不思議そうな表情を作っていました。

「……そうか？ 俺はいつもこんな感じで母さんに教わってたぞ？」

「百式ちゃんのお母さんがどんな人か知りたいねえ……」

会長さんがけらけらと笑っていました。私達はそんなかずくんの練習をさせられている操縦手チームに思わず苦笑いをしていました。

## 9. 放課後の寄り道も、たまには

「ねえ、百式君。一緒に帰ろーよ！」

戦車道の練習が終わり各々のチームが帰宅していくなか、武部が唐突にそんなことを言い出した。

別段、この後の予定は俺にはなかった。ここ最近までは練習メニューの予定を立てたりや自動車部と戦車点検などがあったから忙しかったのだが……珍しく今日は何もなかった。

と言っても、練習メニューの練り直しは毎日確認している。今日は特別急ぎの用事はない、という意味をわかってほしい。

「いや、遠慮しておく。いつも通り五人で帰るといい」

しかし俺は予定がなくても、一緒に帰るつもりはなかった。

俺が戦車道の練習に加わって、以前より武部や他のメンバーと話す機会や関わるが多くなったが、俺は必要以上に仲を深めることを避けたかった。

多分、まだ内心で聖グロのことを引きずっているのだと考える。必要以上に仲を深めても、いつか後悔させるかもしれない。そう思っている節が俺にはあるのだと。

「ええー！ー！ またああ!!? 百式君、それ十回目だよ!!?」

十回、ということは俺が戦車道の練習に加わってほぼ毎日この女は俺を誘っていたらしい。

俺を誘って一緒に帰っても楽しくないだろうに……

「まったく……みほからも武部に言ってくれ」

このままだと話が進まないと思った俺は、武部の隣にいたみほに話を振る。

みほは俺と武部と交互に見て、少し考える素振りをすると、

「私も、かずくんと帰りたかな？」

小恥ずかしそうに言って、笑みを見せていた。

多分、今の俺の顔は眉間に皺が寄っているに違いない。

「俺と一緒に帰ったってつまらないだろう？ 女同士、帰りにコンビニでアイスでも買い食いして駄弁って帰れ」

思わず反射的に思ったことを口にしてしまう。後半の方はほとんど適当に言っていた。

武部は俺の話に面白くないと言いたげに口を尖らせていた。

「そんな小学生みたいなことしないもん！ コンビニ行くなら74アイスクリームに行くもん！」

「コンビニから74アイスクリームにランクアップただけじゃねえか」

アイスのランクが上がっただけで、やっていることは全く同じだった。

俺がコイツらとアイス食って駄弁る姿……想像したくもない。

「かずくん、たまには一緒に帰ろ？ 今まで私とかずくんって別の学校だったから、こういうこと」は一緒にできなかつたでしょ？」  
「……………」

みほの言葉に、俺が返事に困った。

確かに俺の住んでいた愛知県とみほが住んでいた熊本県で学校が

違えばそんなこと出来るわけがない。

本当に偶然で同じ学校になっただけに、みほがそう言うとな下手に断りづらかった。

みほは俺が知る限り、子供の頃から友達を作るのがとてつもなく下手だった。

人見知りが激しく、人前に出るのが苦手な性格のせいで小学校でも仲の良い友達が作れなかったとみほの姉から聞いたことがあった。

中学生では、みほの家が戦車道の名家であることから下手に仲良くする人もいないみたいだった。多分、黒森峰でも同じような感じだったのだろう。

そういう一面を知っている故に、俺は思わず顔を顰めた。

しかし次にみほに言われた一言に、俺は完全に返す言葉を一択に絞られてしまった。

「それに……学校から一緒に帰るって友達みたいなことかずくんとしてみたいから……」

……駄目だ。俺には断れない。

みほがここまでハッキリと言ってくるようになっただけでも、十分に以前より素直になっている。

武部や五十鈴達と付き合いを始めて、みほもこういうことを正直に言えるようになったんだろう。

みほの姉さんが聞いたら喜びそうな話だ。別に話す予定も会う予定も今のところはないが……

「百式殿、たまには折れることも大事だと思いますよ?」

そんな時、いつの間にか俺の後ろにいた秋山が小さな声で話していた。

「秋山、お前まで……」

「みほ殿も沙織殿もそう仰ってるんです。百式殿も、たまには一緒に帰っても良いと思いますよ？ 勿論、私は歓迎です！」

お前は戦車の話が出来る奴なら誰でも良いの間違いじゃないか？

「つたく……」

思わず、俺が頭を雑に搔く。

五十鈴もみほと武部の後ろで笑っているし、冷泉はどちらでも良いと言いたげに眠そうにしていた。

そしてみほのシヨボくれた顔を見て、俺は溜息を吐いて、折れた”。

「……はあ、わかった。降参だ。お前達と帰る」

「ほんと!?? やったね！ みぽりん！」

「うん！ ありがとう！ 沙織さん！」

俺と一緒に帰るくらいでそんなに喜ばなくても良い。

みほが嬉しそうに笑う表情を見て、俺は諦めたように苦笑いをしていた。



「で、俺は寄り道するなんて聞いてないんだが？」

そして学校から出て、先に行く五人の歩く道を俺が秋山とみほの相手をしながらついて行くと、とあるお店に来ていた。

入口の前にある『せんしや倶楽部』と書かれた看板を見て、俺は店内に入って行く五人に顔を顰めた。

「別に良いじゃん？ 学生の基本だよ？」

五人が店に入ろうとしたところで、武部が俺に悪びれもせずに応えた。

別にこの五人が寄り道をどこでしようが俺には関係ない。

だが俺も一緒に行くなんて一言も同意した覚えはなかった。

「だからと言っても——」

俺が続けて「俺は良いとは言っていない」と言おうとしたところで、先程まで眠そうにしていた冷泉が武部の後ろから姿を見せると俺より先に口を開いていた。

「別に沙織達は一言も寄り道しないなんて言っていない。ほら、言い返してみろ」

明らかに棘のある口調だった。

俺はその意味深な言い方に、どこか既視感を覚えた。

そしてすぐに思い当たる節があったので、俺は冷泉を呆れた目で見つめていた。

「お前……今日のこと根に持つてるだろ？」

車長チームとボードゲームをした時に、そんな話をしたのを思い出した。

曖昧な言い方をあえてして、自発的に練習の意図を理解させようとした話を確かあの時にしたはずだった。

冷泉は不満そうにふんと鼻を鳴らすと、俺を冷たい目で見つめていた。



「別に全員ノーマルでクリアなはずなのに、何故か『私だけハードモード』でクリアに文句があるなんて思ってたない」

「お前、語るに落ちるって言葉って知ってるか？」

明らかに隠す気はなかったらしい。

確かに俺は冷泉にだけ別枠でメニューを与えていた。

冷泉だけ練習の難易度を上げていた。全員がノーマルでクリアにしていたが、この女だけはハード限定にしていた。

確かにイージー、ノーマル、ハード、エキスパートと四段階の難易度でハード自体の難易度は少し高めだった。

と言っても、攻略を知っていればノーマルもハードも変わらない。敵が早く動くか動かないか程度の違いしかない。

冷泉なら無難にクリアしてくるだろうと予想していたが、本当に何事もなくクリアしてきた時は……少しだけイラっとした。

「丁度良い。この店に来たんだからお前もアレをやってみろ。勿論、難易度はハード……いや、お前は私よりも戦車の『操縦が上手い』ならエキスパートもできるはずだな？」

小馬鹿にした顔で冷泉が俺を煽ってくる。

この女は一日に一度は俺に喧嘩を売らないと死ぬ病気でも患っているのか？

握りたくなる拳を心の中で抑えて、俺は冷泉を鼻で笑った。

「別にやる理由がない。勝手に言ってる」

「そうやって誤魔化すのか……私達に自分ができないことをさせているのなら正直に言えばいい。やっぱりゲームと本物は違うからな」

「そう思ってるならお前はまだまだだな。練習の意味を理解できない察しの悪い生徒は色々大変そうだな」

「そうかそうか、百式は私に喧嘩を売りたいようだな。ご自慢の腕もゲームでは通用しないのを誤魔化すのに必死みたいだ」

この様子だと冷泉は、アレに気づいていないみたいだ。  
俺は呆れた顔を見せると、冷泉にそれとなく話すことにした。

「お前、あのゲームのスコアランキングは見たか？」

「……藪から棒になんだ？」

冷泉が眉を顰める。俺はそんな彼女を無視して、もう一度同じ質問をすることにした。

「見たか？ 見てないのか？」

流石にここまで言えば、冷泉も何か思い当たる節が出てきたのだろう。

目を大きく開けて冷泉が店に振り向くと、彼女は身体を震わせながら呟いた。

「まさか……！」

「気になるなら見てこい……っってもう行ってるし」

俺の話を聞く前に冷泉が駆け足で店内へと向かって行った。

他の四人が苦笑いしながら、冷泉に続いて店内へと向かっていく。

俺はそのまま帰ろうとしたが――

「はーい、百式君。逃げなーい」

武部にしつかりと腕を掴まれていた。

逃す気はないらしい。ここまで来たのだから、とことん付き合えと言いたいらしい。

俺は呆れ半分、諦め半分と思いながら軽く肩を落として「……わかった」と答えた。

諦めて一緒に店内に入ることにした俺とみほ達と一緒に店内に入ると、先程話していたアーケードゲームが店の奥にあるのが見えた。そしてそこにいる女を見て、俺は予想通りの反応に思わず小さく笑った。

「あ、冷泉殿が両膝をついて項垂れてます」

その言葉通り、冷泉が力なく項垂れていた。

小刻みに震えている辺り、悔しさが垣間見える反応と思えた。

秋山が冷泉に近づいて話しかけるが、何も反応しない冷泉を見てから秋山がアーケードゲームに視線を向ける。

そしてその画面を見るなり、秋山は声を大きくしてゲーム画面に食いついていた。

「凄い！ イージーからエキスパートまで全部同じ人がハイスコアで一位取ってます！ このゲーム凄い難しいって有名なのに！」

「秋山さん、そんなに難しいんですか？」

「五十鈴殿！ 勿論ですよ！ 四段階ある中でエキスパートは群を抜いて難易度が高いんです！ 私も何度も挑戦しますがエキスパートをクリアするのにどれだけ使ったことか！」

「ゆかりん、このゲームそんなにやってたんだ……」

秋山が騒いで語っているのを五十鈴と武部が相手をしているのを俺とみほが眺める。

そんな時、ふとみほが俺の方をチラリと見ると、

「ねえ、かずくん……アレって？」

みほがポツリと訊いてきた。

まあ、さっきの俺と冷泉の話から流石に気付くだろう。

俺は頷くと、みほに肩を竦めて答えた。

「見ての通り、やらせる側が出来ないと話にならないからな」  
「……だと思った。ちなみに全部クリアでいくらか使ったの？」

続けて、みほがそう訊いてくる。

その質問に俺は少し考えて、使った額を思い出して答えた。

「イージーからハードで三回と……エキスパートで三回だから計六回だな」

「え？ かず君でも失敗したの？」

少し驚いた表情で、みほが意外そうにしていた。

「ああ、かなり難しかった。他の難易度と全く別の動きしてたから最初の一回で初見で無理だと気づいたから調べて、二回目で出来るところまで動きを確認して、三回目でクリアしたよ」

「それでも三回なんだ……」

引き攣った笑みを見せるみほに、俺は首を傾げる。

かなり困った表情をしている風に見えるが、別に変なこと言ったつもりはないんだが……

俺も本職は操縦手だから普通に操縦が似てるゲームでいつも通りに操縦してれば、ある程度は出来ると思ってたんだが……みほには思っていた答えではなかったみたいらしい。

「もう一回やる……エキスパートで」

そんな話をみほとしてしていると、先程まで落ち込んでいた冷泉がゆったりと立ち上がるとそう言っておアケードゲームに座っていた。

「冷泉殿……流石にやめた方が……」

「あの男が出来たなら私だってやれる」

「麻子のその自信はどこから出て来るんだか……」

「頑張ってください！ 冷泉さん！」

そしてアーケードゲームを始めようとする冷泉に、秋山と武部が止めるがそれを無視して麻子はゲームを始めていた。一人だけ応援している五十鈴は放っておこう。

それに対して、二人は呆れたように諦めて俺とみほのところへ戻ってきた。そして五十鈴も何事もなかったように戻ってきていた。

おい、五十鈴。そこは応援していた以上は付き添うところだろうか？ 前々から気付いていたが、この女はマイペースなところか目立つ。砲撃手としての座る時は、俺も眼を見張るくらいの集中力を見せるのに……その差が大きい分、俺はこの女が未だによく分からない。

「麻子は放っておこ、勝手に諦めて戻って来るでしょ？」

武部が溜息混じりに、呆れて肩を落とす。

俺の予想だと、持つてるお金使い切るか武部が無理矢理やめさせるまで戻ってこないだろう。

みほはそんな武部に苦笑いして頷く。俺も特に言うことはなかったので、とりあえず頷いていた。

「ところで、せんしや倶楽部に何か用があつてお前達は来たんじゃないのか？」

そして俺がふと思ったことを続けて、訊いていた。

俺がそう言つて、店内を見渡す。

以前に一度来ただけで、詳しく見ることはなかったが意外と色々揃っている店だと思った。

前に来た時は、たまたまあのアーケードゲーム機を見つけてしまったのでそれだけで帰ってしまったので、しつかりと見ていなかった。

プラモデルに、実際の戦車で使うパーツや部品、色々な資料などが揃っていた。

と言っても店内を見る限り、プラモデルに一番力を入れているようだが……

「私は通信手の本とかあつたら買おうかなって」

「自分はパーツとか見れば満足でしたから、週に一回は来ていますし」

武部は向上心がある良いことを言っていた。うん、その姿勢は素晴らしい。本人には絶対に言わないが。

秋山、お前はいつも通りだから何も言わない。別に何か言うときの場合、話が色々な方向に発展するからめんどくさい。

「そうか……折角来たんだ。俺は操縦手と車長の資料でも見てみるか……みほ、お前も手伝え」

「えっ？ 私も？」

みほが目を大きくする。俺は「当たり前だ」と即答した。

「お前も車長なんだ。他のメンバーに使う本探すのに、この場で一番適任だろう？」

「それもそうだけど……かずくん、一人でも別に大丈夫じゃないかな？」

みほがそう言って、俺に「不安そうな目」を向けて来る。

俺はみほが言いたいことをなんとなく理解して、呆れながらみほのおでこを人差し指で軽く突いた。

「あう……」

「お前の言いたいことはなんとなくわかるが……俺はお前が一番適任

と思つて言つてるんだ。それくらい察してくれ、俺もお前に頼りたい時はある」

珍しく、俺がみほに本心を告げる。

おそらくだが、未だにみほは黒森峰のことを引きずっている節があるんだろう。

自分が車長であることが正しいことなのか？

そんな疑問を常に持つているかもしれない。本当かどうかは本人にしか分からないが、あの顔を見るとそんな気がした。

みほは俺に突かれたおでこを摩りながら、少し驚いた顔を見せる。そしてみほが小さく笑うと、

「うん、わかった」

そう、俺に答えた。

「前から思つてたんだけどさ……あの二人つて付き合つてたりしてるのかな？ ゆかりん？」

「流石に……と言いたいですが、西住と百式の家は交流があると有名ですし、みほ殿と百式殿は幼馴染ですから……あり得ない話では……」

全部、聞こえてるからな。二人とも。

俺が聞こえたということは、みほも聞いている。

みほは顔を赤くすると、慌てて二人のところへ小走りで向かっていった。

「わ、わ、私とかずくんはそ、そういう関係じゃないよ！ 昔から幼馴染ってだけだもん！」

みほの弁解に、武部と秋山が笑みを浮かべて何か質問をしている。

多分、あの顔はみほで遊んでいる顔だった。

本来なら俺も弁解をするところなのだが……面白いから放つておこう。

俺がみほと「そういう関係」ねえ、考えたこともない。

そう言ったことに縁がなかった身としては、特に悩んだりしたこともない。

みほと「そういう関係」か……仮にそうなっていたら、色々変わっていたのだろうか？

俺の目の傷が出来ることのないことも、あり得たのかもしれない。そんなことを思いながら、子供の頃から中学の頃を振り返ってみる。そして高校——聖グロのことを少しだけ思い出して、

『ねえ、和麻さん。こんな言葉を知っているかしら？』

「ッ——!?？」

頭にその言葉が過った瞬間、右目に痛みが走った。

思わず、俺が眼帯を押さえる。

久々だった。右目の中を電気のように走る痛み。

戦車道と向き合うことを決めてから、一度も来ることがなかったのに……

本当に一瞬だけ、何か知らせるかのように走るその痛みには俺は顔を歪めていた。

嫌な予感がする。それだけが不思議と理解出来た。

何か分からないが、きつと良くないことが起きる。そんな不安が悪寒として背筋を走っていた。

「——かずくん？ 大丈夫？」

気付くと、みほに声を掛けられていた。

いつの間にか痛みは消え、俺はみほに「大丈夫だ」と答えた。



「目、痛むんですか？」

「百式君、大丈夫？」

「百式さん、まだ痛みますか？」

他のメンバーが心配そうに俺の顔を覗き込む。

そんな四人に俺は頷いて「もう大丈夫」と返した。

「考え事してたら、突然疼いただけだ。気にしないでくれ」  
「何を考えてたの？」

みほの質問に、俺は少し考える。

「誤魔化しても、追求されるだけだろう。」

「俺とみほが『そういう関係』だったら、どうなったのかなって」

だから素直に答えることにした。

別に言うつもりはなかったが、言わないとみほは言うまでしつこく聞いてくるような気がした。

言ってから気づいたが、色々とすつ飛ばして端的に言ってしまったかもしれない。

「あ、あう……え？」

みほの顔が一瞬で林檎みたいに赤くなっていた。

あ、コレは誤解されてるな。

「やっぱり、二人つてそういう関係なんだよ。ゆかりん」

「お二人はいつの間にかそういう関係に」

「あらあら」

「もう！ みんな、違うってば！」

気付くと、みほが三人にまた弁解していた。

俺も流石にみほの弁解を手伝おうと思ったが、やめた。

俺の目について、偶然だが話を変えたから良しとした。

顔を赤くするみほと三人を見ながら、俺は収まるのを見届けることにした。

「……………」

そんな時、ふと店内の天井から設置してあるテレビに視線を向ける。

自転車のロードレースのニュースが終わり、次のニュースに切り替わると見慣れた文字がテレビに映っていた。

『それでは、次のニュースです。次は戦車道のニュースをお送りします』

そのニュースの内容に、俺は久々に“ある女”の顔を見た。

## 10. 逃げることは、悪いことではない

『次は戦車道の話題です。高校生大会で昨年MVPに選ばれて、国際強化選手となった西住まほ選手にインタビューしてみました』

その言葉と同時に画面が変わる。そして店内に備え付けられたテレビに映った顔に、俺は随分と久々にその顔を見た。

「……まほさん」

思わず、久々に見た顔に俺が名前を呟いていた。

みほと同じショートヘアの髪型。俺とみほより一つ上のみほの姉だ。しかしながらみほと顔立ちがとても良く似ているのに、テレビに映る顔はとてもみほとは同じとは見えない。

まるで正反対。それが久々に見たまほさんの印象だった。

変わってない。いや、どちらかと言うと鋭さが増したとでも言えばいいかもしれない。

昔は……と言っても、俺が最後にまほさんと会ったのは聖グロに入る前だったはずだから一年と少し前なる。

あの頃に比べて、更に刺々しい印象が強くなった気がする。黒森峰の高等部に入学してから、人一倍自分に厳しくしている反動でそうなったかもしれない。

昔はもつと優しい顔をしていた気がする。黙っていると仏頂面みたいな顔するから勘違いされやすいが、まほさんもみほまでとは言わないがかなり優しい人だ。

笑うと綺麗な顔をする人だった。しかし普段が普段なだけあって、人に勘違いされやすい。こんなところがみほと良く似ている。

『戦車道の秘訣とはなんですか?』

そんなことを考えながらテレビを見てみると、テレビに映る黒い制服を着ている二人組の内の一人であるまほさんへ取材者からマイクが向けられていた。

マイクを向けられたまほさんが表情を特に変えることもなく仏頂面のまま取材者をまっすぐ見つめながら、答えた。

『諦めないこと。そしてどんな状況でも……逃げ出さないことです』

最後の言葉でまほさんがカメラを見つめる。

やっぱり変わってない。昔からよくまほさんが言っていたことだ。決して諦めず、逃げない。そうすれば必ず勝機が見える。

子供の頃、戦車道の話をする度にまほさんがよく言っていた言葉だ。

戦車道に於いてその言葉は、なにひとつ間違っていない。その言葉には、俺も同意出来る。加えて西住の戦車道なら、その信念は尚更強い。

負けることを決して許さない。勝つことこそが全て。それが西住流だ。

まほさんは、自分は西住流そのものだと言っている。ならば、その言葉の重みは語るまでもない。

しかし最後の言葉。気のせいと思うが、それは不思議と誰かに向けているような気がした。

——逃げ出さないことです

不思議と俺の胸に、刺さる言葉だった。

逃げることを続けてきた俺に、その言葉に言い返す資格なんて持っていない。

俺は十分に理解している。自分のしてきた“間違い”を。

だからこそ、俺は逃げることをやめた。少しずつ、向き合っていない。なければならぬ。

しかし俺の隣にいる「コイツ」には——姉からのその言葉は重過ぎた。

「……お姉ちゃん」

みほが本当に小さな声で呟いた。隣にいる俺でも、僅かにしか聞き取れない程度の声だった。

顔を強張らせ、テレビから向けられるまほさんの視線から逃げるように俯いた。

俺はそんなみほの顔を見て、思わず彼女の頭へ手を乗せていた。

「お前は別に悪くない。逃げることは、悪いことじゃない」

「……かずくん？」

みほが不思議そうに、俺を見上げる。

俺はまほさんの言葉が正しいと思いつつも、ある言葉を告げるところを決めた。

「逃げたって、何も悪いことはないんだ」

それは俺の母が俺に告げた。悲しい言葉でありながらも、ひとつの道であることを示してくれた言葉だった。

俺が戦車道を辞め、戦車道の全てのことから背を向けた俺に——母さんは責めることもなく、叱ることもなく、ただ俺に告げた言葉だった。

その顔は今でも覚えている。悲しそうな顔をした母を。

『和麻、背を向けることを責めては駄目よ。自責も、後悔も、挫折も、色々なことから「逃げる」ことは誰にでもあるわ。私にもあるし

……あつた。

貴方の決めた“それ”は、貴方が自分自身で決めた人生の選択なの。私は和麻が決めたことに何も言わないわ。

だけど、これだけは言わせて……自分の選んだことに悔いて責め続けることをしないで、自分を偽らないで。お母さんのお願ひよ』

俺が大洗に行く日に、母さんから貰った言葉だ。

あの時の俺は聞く耳を持たずに、適当な返事をして家を出て行った。

あの日以来、俺は母さんと連絡を取っていない。

今思えば、俺を心から心配しての言葉だったと実感できる。

そしてとても優しい言葉を向けられていたんだと思う。母親として、師匠として、尊敬していた人からの言葉。

責めることも、叱ることも、見捨てることもせず、逃げた俺の背中を押した言葉だ。

道を違えて、見失つて、立ち止まっていた俺を少しでも前にちゃんと進められるようにと。

やはり母親には敵わない。きっと俺の“本心”ですら、分かっているに違いないのだから。

だからこそ、俺自身もみほを導かなければならない。

俺に向き合う力をくれたみほに、俺自身から彼女へ自分の“しがらみ”と向き合う力を。

「俺だって、逃げたんだ。自分の答えが分からなくなつて逃げるなんて誰にでもあるし、起こることだ」

だから俺の言葉で、みほに伝えよう。

逃げることは悪いことではない。その道に、間違いはない。

俺も逃げるみほの背中を押そう。逃げることは悪くないと。

「俺に戦車道や聖グロとのしがらみがあるように……お前が黒森峰か

ら離れても、そのしがらみはずつと残る。だから大事なことは、お前がそのしがらみにどう向き合っていくかだ」

しかし向き合うなら、俺は向き合う道標を示そう。

みほが暗い道に迷うのなら、俺はその道を開く光を作ろう。

「どう……向き合っていくか？」

みほが俺の言葉に不思議そうに訊き返した。

みほの不安げが目が少し揺らぐのを見て、俺は頷いた。

「そうだ……お前がまたこの大洗で戦車道を始めた以上、いつかそのしがらみと向き合う日が必ず来る。黒森峰や家族のことで、向き合わないといけない日があるんだ。その時に、お前がどんな答えを出せるかが大事だと俺は思う」

戦車道をまた始めたことに対して家族に怯えるみほに、俺は答え方を教える。

数学のように計算の方法を教える。それにどの答えを出すかは、みほ次第だ。

その計算に正しい答えなんてない。それが答えが正解か不正解かなど、みほ本人にしか知り得ないのだから。

目を大きくして俺を見上げるみほに、俺は苦笑いした。

「俺もお前と同じだから、よく分かる。俺だって、向き合わないといけないんだ」

そう、俺だって同じだ。

俺にも、必ず向き合う日が来る。

「だから黒森峰やお前の姉さんや家族のことは気にするな。今、お前

と一緒にいる仲間とできる戦車道を目一杯楽しめ。そして姉さんに会った時にハッキリと言えば良い」

同じように、俺もその日までは気にしない。今を精一杯やってやる。

いずれは聖グロリアーナ、百式流、そして男が戦車道をするという絶対的なしがらみ。それらと向き合わなければならぬ。

そして会った時に、自分の気持ちを伝えよう。

謝罪と感謝。今までの自分の心に嘘をついていたことを、そして戦車道をしたという気持ちを伝えよう。

だからそれと同じように、みほにも向き合う勇気を持つて欲しいと願って——みほに過去に一度告げた言葉を、もう一度告げた。

「私は姉さんや西住の戦車道じゃなくて『私の戦車道』を見つけたって、自信を持って答えられるようになる日が来るようになる」

みほの目がハッキリと変わったのがわかった。

暗い目から、なにか大切なことを見つけたような光が灯るようになって安だった顔が晴れていた。

少しだけみほが俺を見つめる。そして意を決したように頷くと彼女は笑顔で答えていた。

「かずくん……うん！ わかった！」

「それで良い」

少しはみほの手助けになったと思いつつながら、俺は彼女の返事に満足して頷いた。

俺もみほみたいに素直に人の言葉を聞いていれば、少しは変わっていたのかもしれない。

そんな柄でもないことを考えて、俺はそれを忘れるようにみほの頭に乗せていた手を乱暴に動かした。



「うわわ！ かずくん！ 髪の毛ぐちゃぐちゃにしないで！」

頭の髪を乱されたみほが慌てて俺から離れる。

俺に文句を言いながら髪を手で梳かすが、上手く出来ていなかった。

「ちよつと百式君！ 女の子の髪の毛は命なんだからね！」

「みほさん。今、櫛で梳かしますからね」

慌てているみほに、武部と五十鈴が寄り添う。

みほはそんな二人に「ありがとう」と言つて、素直に髪を直されていた。ちゃんと俺を一瞥して、頬を膨らませるのも忘れていないのを見る限り……しばらくは不貞腐れるかもしれない。

しかしとりあえずはみほが暗い顔をしなくなったのを良しとして、俺は「まあ、いいか」と内心で呟いた。

「優しいですね、百式殿」

「うるさい」

いつの間にか俺の隣で秋山が小さな声で嬉しそうに呟く。

黙って聞いてたお前達も、大概だろうが。

俺は安堵した様子の子の秋山を横目で見つめる。

何を勘違いしているか分からないが今の言葉はみほの為に言った言葉でもあるが、しかしその言葉は――

「……俺にだつて、言えることなんだからな」

「今、何か言いましたか？」

「なんでもない。気にするな」

首を傾げる秋山を適当にあしらう。

だが秋山は気になるらしく、何度も「なんて言ったんですか？」と訊いてきた。

思わず、溜息を吐いた。こういう時のコイツは地味にめんどくさい。

「良いから『ゴレ』で黙ってる」

「いだった？？」

うるさい秋山に、俺は彼女の額に左手の中指を強めに弾いて黙らせた。

「いだった……酷いでありますよ、百式殿」

額を抑えてその場で悶える秋山に自業自得だと思いながら、ふと腕時計を確認する。

気付けば、大分時間が経っていた。そろそろ夕飯時か、と思うくらい時間だった。

「そうだ！ 今日、みほの家に遊びに行ってもいい？」

そしてみほの髪を梳かしていた武部がそんなことを言い出した。

みほが頷く。この後の予定が決まったみたいだ。

俺はようやくやく帰れると思って、またひとつ溜息を吐いていた。

## 11. 傷というのは、思ってるよりも深い

結局、冷泉は武部に帰ると言われるまでアーケードゲームをしていた。

武部に強制的に時間切れでやめさせられて冷泉の悔しそうな顔を見る限り、クリア出来なかったらしい。

一体どれぐらい財布の中身が無くなったか俺が訊くと、

『千円使った！ 八回戦までしか行けなかった！ このっ!!?』

そう言っただけ俺の脛を蹴ってきた。

勿論、その後は冷泉の顔を押しさえつけて額に指を強めに弾いてやった。

この女、あのアーケードゲームは十戦でクリア出来る。それを八戦までやってのけるのか……最大難易度は俺だって苦戦するほどの難しさだったはずなのに。

おそらく冷泉以外の大洗メンバーが挑戦しても、精々良くて半分くらいまでしか進められないだろう。

それよりも……俺が「一番苦戦した七戦目」を素人のコイツが短時間でクリアした。そのことに、俺は少しだけこの女の素質の認識を改めた。

正直、この女の底が見えない面が最近見えてきている。

俺が一度しか見せていない技術を模倣したりなど、時折俺が目を見張ることをするようになっていた。

もしかすると操縦だけなら……この女、本当に……

それを思う瞬間、俺はその意識を頭から捨てた。

まだ考えなくていい。まだ考える必要はない。

いずれ、その時が来れば嫌でも分かる。それはその時に証明される。

その時が来れば、俺は全力で応じれば良い。

俺はそう思い、そのことを一度考えないように忘れようと心掛けた。

とまあそんなことは、さて置いて。

ようやくせんしや倶楽部から出て、家に帰れることが出来る。

みほ達は、この後はみほの家でみんなで夕飯を作って食べるらしい。

実に仲の良い高校生らしい。いつも学校や戦車道の練習で大変だろうから、そういうところで目一杯楽しんで欲しい。

そんな建前のようなことを思いながら、俺は店を出ると早速五人に軽く手を振って別れを告げることにした。

「それじゃあ、俺の家は向こうだからここまでだ。また明日、戦車道の授業で」

せんしや倶楽部を出て、五人がみほの家に行くタイミングで俺はそう切り出した。

しかしその時、武部が意味が分からないと言いたげに顔をキョトンとして首を傾けていた。

「え？　なに言ってるの？　百式君も来るに決まってるじゃん？」

むしろ俺が返事に困る言葉だった。

おい、武部。思い出してみろ。お前、さっきの会話で俺の名前が出たか思い出してみろ。出てなかったぞ。

「さっきの話の流れでそう思うならみほに聞いてみる。絶対に俺はそこの中に含まれてない」

どうして女の家に女同士で料理作って夕飯を食べる中に、俺が混ざるようなことになるのだろうか？

呆れた顔で俺がみほに同意を求めてみると、みほも俺の話にキョトンとしていた。

「え？ かずくん……来てくれないの？」

みほの返事に今度こそ、俺は堪らず顔を顰めていた。

「……みほ。お前は男を家に簡単に入れるな」

呆れてみほに諭すように俺は話す。

お前は女の子なんだから、そんな「流れ」で男を家に入れるようなことをするものじゃない。

しかしみほは、そんな俺の言葉に不思議そうに首を傾げた。

「だってかずくんは幼馴染だし……普通の男の子ならアレだけど」

「幼馴染だろうがなんだろうが、俺はお前の言う男の子だ。お前達で良いから楽しんでこい」

有無を言わせず、俺はみほの家に行くことを拒否する。

幼馴染だろうとなかろうと男を自分の家、そして女しかない場所に入れるもんじゃない。

みほは俺の顔を見て、その意味が分かったのだろう。

ほんの少しだけ悲しそうな顔を見ると、納得したように頷いていた。

「女の家に行くのが恥ずかしいならそうと言えば良い。なんだお前、そんな見た目してそういうことは初心なんだな」

しかしその瞬間、冷泉が俺とみほの間に入って俺を見つめていた。静かに見据える冷泉の目に、俺は溜息を吐いた。

「相変わらず……お前は俺に喧嘩を売りたいらしいな」

冷泉の言葉に、俺はいつも通りに応じる。  
しかし冷泉はそれに小馬鹿にしたように鼻を鳴らすと、

「なら来れば良い。西住さんが良いって言うててお前は誘われているんだ。断る理由、あるのか？」

据わった目で、俺を見つめていた。

「……………」

冷泉のその目を見て、俺は既視感を覚えた。

この女のこの目、どこかで見たことがある。

そして思い出した瞬間、俺は無性に気分が悪くなった。

——この目は、IV号戦車で俺に喧嘩を売った時の目だ

俺の内面を読み切った目。喧嘩を売る感情的な目じゃない。

これはただ俺を見つめている。俺の内面を見ている目のような気がした。

しかし俺は隠していることなんてない。

それなのに、どうしてこの女はそんな目を向けてきている？

理解出来なかった。だからこそ、俺は無性に気分が悪かった。

この女にしか見えていない部分が俺にでもあるのだろうか？

そんな考えが頭を過ぎるが、俺はそれを一蹴した。

あり得ない。別に隠すこともない。

今回の件も、別に女が男を家に入れるなど言いたいだけだ。

「断る理由はさっきから言ってる。女が男を入れるなって言うてるだろう？」

だから俺は素直に理由を言った。

しかし冷泉はその言葉に溜息を吐くと、俺の腕を掴んだ。

「西住さん。西住さんの家はどっちだ？」

「えっ……？ あっただけど……」

「そうか、分かった」

冷泉がみほにそう質問して、頷く。

そして掴んでいた俺の腕を自分の腕と組ませると、無理矢理歩き出していた。

「お、おい！ お前、なにやって——！」

「良いから、来い」

無理矢理引っ張る冷泉を止めようとするが、彼女は無視して歩き出す。

止まろうとしても冷泉が無理に歩く為、下手に振り解けば転ばせることにでもなりかねない。

下手な怪我は戦車道に響く。足でも捻られたら、練習すら出来ない。

無理矢理振り解くことが出来ない以上、俺は冷泉に引っ張られるままに歩き出していた。

「冷泉！ その腕を離せ！」

「嫌だ。諦めて、お前も来い」

「行かないっての！ お前達だけで行け！」

「何度も言わせるな。嫌だ」

俺の制止を無視して、冷泉が歩いていく。

後ろからみほ達が慌てて追いかけて来るのを足音で聞きながら、俺は少し強めに冷泉に言った。

「だから何度も——」

「お前は『友達』の沙織達」と『幼馴染』の西住さん』に誘われてそれを

無下にするのか？ お前もたまには遊ぶことくらいしろ。

お前も私達と同じ高校生だ。一人でいるより誰かと遊ぶくらいしても良いだろ……一人に慣れるな」

しかしそれよりも先に冷泉が言った言葉に、俺は返す言葉を失っていた。

コイツ、急になにを言い出したんだ？

なにが言いたいか分からない。しかし何故か冷泉の不思議な言い分を納得した自分がいたことに、俺自身が驚いていた。

意味が分からないが、この女の言い分を俺は良しとしていた。後ろを見れば、みほと目が合う。

不安そうな、そんな目だった。

俺はその目を見た瞬間、立ち止まっていた。

何故か、冷泉も俺と同じタイミングで立ち止まる。

しかし俺はそれよりも先に、みほに質問していた。

「なあ、みほ。お前は俺と一緒に居た方が……楽しいのか？」

自然とその言葉を口にしていった。

なんでそんな質問をしたのか、俺にも分からなかった。

みほは俺の質問に意表を突かれた顔をするが、すぐに何度か頷いていた。

「うん！ かずくと一緒に居た方が私は楽しいよ！」

みほの返事に、俺は少し間を空けて「……そっか」と返した。

そして先程まで嫌だった気持ちも、不思議と消えていた。

今さっきまで言っていた話も、何故かどうでも良いと思えるくらいに。

「わかった。じゃあ、お前の家にお邪魔するよ。迷惑だったら、いつで



も言ってくれ」

「かずくんならいつでも歓迎だよ！」

嬉しそうにするみほに、俺も何故か頬を緩めていた。



「ねえ、麻子。なんで百式君を頷かせられたの？」

百式君が前でみほと華で歩いている後ろ姿を見ながら、隣に居る麻子にそんな質問を私はしていた。

さつきまであんなにみほの家に行くのを嫌がってた百式君を頷かせたのが、私は不思議だった。

何か意味深なこと言ってたし、麻子にしか分からないことでもあったのか気になった。

麻子が私をチラリと見る。そして小さく溜息みたいな吐息を吐いていた。

「簡単だ。アイツは、まだ捻くれてただけだ」

前に聞いた気がする台詞だった。

思い出した。確か……百式君がIV号戦車で私に怒った理由を麻子が話す時に言った台詞だ。

「さつきの顔を見る限り、意識してやってないみたいだが……あの男、たまに私達を拒絶する時がある。沙織は心当たりないか？ お前や色んな人があの男を何かに誘っても、私が知る限り一度たりとも首を縦に振ってない」

「言われてみれば……？」

そう言つて、私は振り返つてみた。

戦車道の練習が終わつた後、ご飯を食べに行こうとバレー部の子達が言つても断つてたし、エルヴィン達が寄り道に誘つても断つてた。

多分、百式君も私達が知らないところで戦車道のことを影で色々やつてゐるつてみほが言つてたから、それもあると思うけど。

思い出す限り、麻子言う通り百式君は全部の誘いを断つていた。

「あの男を見ていると、私にはそれが怯えてるように見える。理由は知らないが、私達と必要以上に仲良くなるのを避けてる。まるで仲良くなつた後が怖いみたいなの、喧嘩して疎遠になるのを怖がる臆病な子供みたいだ」

その話に、私は心当たりがあつた。

みほが前に話してくれた百式君のことだ。

確か聖グロリアーナに居た時に、三年生の人達に戦車道で酷いことをされて大洗に来たつて。

私は顔以外見たことないけど、そのせいで身体にもずっと残る跡が沢山あるつて言つてた。

それで仲の良かった人達からも離れたつて、そう聞いていた。

「その様子だと、沙織は知つてゐるみたいだな」

「私も、詳しくは知らないよ。みほから少しだけ聞いただけだから」

みほはきつとほとんど知つてゐるのかな。百式君が戦車道を辞めちやつた理由。

みほが細かいことを言わないつてことは、みほが自分から話したら駄目な話なんだと思う。

それぐらい私の想像が出来ないくらい大変な話なんだつて、何となく分かつたから。

「そうか、まあ私には関係ない話だから別に良いか」

私の返事に、麻子は興味がないみたいなお返事をした。そんな麻子を見て、私は少しだけイラツとした。

「……そういう言い方はないんじゃないの？」

それだけ百式君のことを分かっただけで、そんな言い方は酷いと思う。

人の気持ちが分からない子じゃないのに、なんでそんな言い方をするの？

だけど麻子は眠そうに欠伸をして、興味がなさそうに百式君達を見ていた。

「別にあの男が話さないことを詮索する気はない。私だって、無理に知りたいとも思わない」

別に私だって無理矢理聞こうとは思わないけど、それでも麻子の態度は酷いと思う。

確かに麻子の言う通りかもしれないけど、私は友達が悩んでるなら相談してほしいし、話してほしい。

百式君が私のことをどう思ってるかわからないけど、私は友達って思ってるから。

「言いたくない話は誰にでもある。あの男の場合、あんな傷が出来るくらいの話だ。簡単に話すことはまずないだろう」

麻子に言われて、私はふと思いついた。

初めて見た百式君の眼帯の下。見た時は、私も目を逸らしたくなるような傷だった。

肌色の筈の顔の右側が違う色になっていて、閉じている右目に何か

が刺さったような跡があった。

そんなことをする人達の正気を疑いたかった。普通の人ができることじゃない。

私がああ傷を見た後、心配してくれたみほが私に話してくれた。

百式君のあの傷は、戦車の砲撃を間近で受けたからだって。

この話は絶対に他の人にしないですって言われたから、私はみほ以外に話したことはない。

戦車に乗るようになってから分かるようになったけど、戦車の砲撃を人の近くに撃てるなんて私には到底出来っこないし、するつもりもない。

そもそも生身の人に砲撃を向けることがおかしい。それは百式君が砲撃手の人達にしつこいくらいに最初に話していた。

『戦車に乗ってるなら良いが、生身の人間がいる場所には“絶対”に砲撃を向けるな。安全が配慮されてる戦車道の戦車にある専用砲弾でも、十分に火力はある。』

砲撃手の指一本で簡単に人に重傷を与えられるってことを忘れるな。間違いだった、で済まされると思うなよ。試合の勝敗と同じように……お前達の指にある引鉄が、戦車をスポーツの道具から凶器に変えることができるのをこの先絶対に忘れるな』

脅しにも聞こえる話だったけど、百式君の怪我を知っている私はその意味も理由もわかった。

だけどそれもみほから聞いた話。私が直接百式君から話してもらえた訳じゃない。

百式君が戦車道をまた始めるって言った時、自分のことと向き合うんだって言うてから。

「もう大丈夫って言うてたから、大丈夫だと思ったのに」

「本人がそう思ってるだけだろう。ああいう“傷”は本人も分からないうところまで行ってるものだからな」

意味深なことを麻子が気だるそうに話す。

私にはよく分からないけど、なんとなく言いたいことは分かる気がした。

私が返事に悩んでいると、麻子は続けて話していた。

「どちらにせよ、私はあの男に勝てればなんでも良い。あの男が悔しがる顔が見たいだけだ」

そう締め括って、麻子が欠伸をもう一度した。

「それにしても、麻子は百式君のことよく見てるね」

「含みがある言い方だな。沙織」

「べっつにー!」

面白くなさそうな顔を麻子がする。

私は思ったことを言っただけだもん。

「……私もあいつの技術を盗むのに必死なんだ。そのせいかあいつを視界に入れて見てるのが習慣になっただけだ」

「なにもそこまでする必要はないんじゃないの?」

麻子と百式君の二人は犬猿の仲っていうのが私達の常識みたいなものになってる。

いつも一日に一回は喧嘩してる。私とかみほが止めに入らないと永遠に言い争いして、結局麻子が手を出して手が付けられなくなる。

そんな麻子が百式君のことを見ているのが習慣になってるなんて、なんか変な感じだった。

喧嘩してるって言っても、私から見れば嫌いと言うわけではなくて、普通とは違う仲の良さがある気がする。

二人に言ったら怒るだろうけど、本人達からすれば分からないんだ

と思う。

「あの男に勝つには、そこまでしないとダメだ。最初は嫌でも分かった、私は『まだ』勝てない」

麻子の話には私は素直に驚いた。

あれだけ毎日百式君に勝とうとしてる麻子が勝てないなんて言うとは思ってなかった。

だけど最後の部分だけ、妙に強調されているような気がしたのは私だけなのかな？

「まだ、ねえ」

「ふん……！」

麻子が不貞腐れて鼻を鳴らした。

女の子がはしたないよ。私がそう言っても、麻子は「うるさい」と面倒そうにしていた。

こういうところが百式君とよく似てるんだよ。似た者同士、つてことなんだ。

「どうせ時間の問題だ。単位の方が大事だが……あの男の戦車に白旗を上げさせる。それが出来れば私は満足だからな」

鬼を狩るような目で、麻子が百式君の後ろ姿を睨みつける。

あ、百式君が振り向いた。

麻子の顔に焦りが見えたのに、私は思わず笑っていた。

私も、今よりも百式君と仲良くなれる日が来ると良いな。

そう思っ、百式君にちよつかいを出して先に逃げて行つた麻子と追い掛ける彼を見つめて、二人の喧嘩を止める為に追いかけることにした。

## 12. 昔話も、たまには良いかもしれない

冷泉に強引に連れられ、結局俺は武部達とみほの家に向かっていた。

全員の歩きについて行きながらみほや武部に話を聞いていると、みほの家でみんな夕飯を食べようという話になったらしい。

その話を聞いて俺が思わず「お前達、自炊出来るのか？」と訊いたところ、ちゃんと出来るのが武部だけと聞いた途端、無性に不安が湧いたが……多分大丈夫だと思いたい。

五十鈴は出来ると思っていたが、意外と出来ないらしい。みほも手伝いを少ししていた程度らしく、秋山はサバイバル知識しかない。

冷泉は論外。アイツに料理が出来るとは思えない。勿論、それを本人に言ったら喧嘩になった。

そんな話になったので、とりあえずはスーパーに寄った。

武部が俺にカゴを渡して先導して行き、みんなに何が食べたいか聞きながらカゴの中に食材を入れていた。

俺に最優先でカゴを渡したことに關しては少し小言を言いたくなかったが、そこは男だからという理由で即答される自信があるので何も言わなかった。

カゴの中にある食材を見る限り、作るのは肉じゃがと唐揚げ、刺身って感じだろう。

まあ無難に手軽く作れるだろう。唐揚げは端的に言えば揚げるだけだし、刺身は切ればいい。手間が掛かるのは肉じゃがくらいだ。

流石にこの五人……それぐらいは作れるだろ？



そんなことがありながらも結局、俺はみほの家に来てしまった。  
みほの家は大洗学園艦の寮ではなく住宅街のマンションの一室  
だった。

みほ達が階段を上がるのについて行きながら、俺はふと先程のことを思い出していた。

そもそもなんで俺は、冷泉の言葉を納得していたのだろうか？

別にこの大洗で高校生らしい生活、なんて望んだ覚えもない。

元より戦車道をしていた所為で、同じ男友達も少なかつた。

小学生の頃はそうではなかったが、中学生の頃は色々あった。

一部の生徒から男が戦車道をしていることに差別のような扱いを  
されていた。

しかし戦車道が好きな生徒も男女問わずいたので、友達が居なかつたという訳ではなかった。

だが俺の中学生生活を円満にした一番の要因は、俺が一年の頃に安齋先輩と出会ってからだつた。

あの時のことは、よく覚えてる。むしろ忘れることはない。

春から夏に変わる頃の学校帰り。校庭を歩いていた俺の前に勢いよく現れたあの時のことを。

『なるほど！ お前が噂の戦車道を嗜む男子だな！ 良し、戦車道少年よ！ 私と一緒に戦車道をしないか？』

突然に現れるなり、他にも居た安齋先輩の戦車道仲間に行きされて、俺は色々割愛するが安齋先輩の戦車道チームに入った。

後から本人から聞いたが、噂を聞きつけて俺を見つけた瞬間に勧誘することを決めたらしい。

確か俺の通っていた中学にあった戦車道チームは、当時かなり弱かつた。その為に戦力が欲しかったらしい。

男でも、戦車道をするなら仲間だと言ってくれたあの人の言葉を俺は忘れることはないだろう。



それから戦車道チームのみんなと三年間を過ごした。だから中学生生活はそれなりに楽しく過ごしていたと思いたい。気付けば、俺の中学の戦車道チームはそこそこ有名になったらしく、それをアンツイオ高校に見つけられて安斎先輩が特待生として入学した。

あの人が居たから、俺は自分の道を見つげられた。師である母とは違う。師というよりも、姉のような存在だった。まさか聖グロの入学依頼を受けようとしていた時に、アンツイオからも来ていたとは思わず目を大きくしていたが……

安斎先輩と一緒に学校に行くことをしなかったのは、色々な理由があるが……今は関係ない話だから別に良い。

ともかくそんな日々を思い出して、俺は冷泉の言葉を思い出した。

『一人に慣れるな』

その言葉の意味を、俺はよく理解出来なかった。

何故、冷泉がその言葉を俺に向けたのか、それを納得した俺自身が理解出来なかった。

色々と考えても、答えが出ないもどかしさが妙に苛立つ。

なんでこんなにも腹が立つのか、それ自体が分からなかった。

別に今は戦車道をしている。みほ達と、なのにどうしてみほに「俺が居た方が楽しいか」なんて訊いたのか？

その問いに、俺は答えを出せないでいた。

「百式さん？ どうされましたか？」

ふと、五十鈴に声を掛けられた。

気付くと、俺は階段で登っている止まっていたらしい。いつの間にか考えることに集中していたみたいだった。

「いや、なんでもない。少し考え事しててな」

「なら良いんですが……嫌でしたか？ 私達とみほさんの家に行くの？」

どこか心配そうな顔をして階段の上から見下ろす五十鈴に、俺は見当違いな質問をされた。

近い質問ではあったが、俺の考えていたこととは少し違っていた。

俺は首を横に振って、五十鈴を追うように階段を登った。

「嫌じゃない。一緒にいるのが嫌なら来ないよ。だから気にするな、ただの考え事だ」

そう言つて、五十鈴の横を通り過ぎる。みほの家はもうひとつ上の階みたいだ。

俺は先程の自分の自問自答を一度頭から忘れることにして、階段を登ることにした。

「百式さん……なら、どうしてそんな辛そうな顔をされるんですか？」

階段の下でそう言っていた五十鈴の言葉は、もう俺の耳に届いてはいなかった。

聞いていれば、きっと何か変わっていたのだろうか？

その問いすらも、俺には答える術を持っていなかった。



階段を登り、みほの家に辿り着いた。

全員がドアの前に立ち、みほがドアに鍵を使って入ろうとした瞬間

——みほの手がピタリと止まった。

そして俺を一瞥すると、

「かずくん！ ちょっと待って！」  
「ん？ ああ、わかった」

慌てていたみほに俺が訳が分からず頷くと、みほはドアを僅かに開けてその中に入り込んで行った。

「どうしたんだ？ アイツ？」

妙な行動だった。まるでドアの先を見せたくないような入り方をしたことに、俺は首を傾げていた。

「男子に見られたくない物が無いか確認してるだけだろう」

そんなことを思っていると、冷泉が俺の呟きに答えていた。

言われてみれば納得だった。むしろそれを察せなかった俺が悪い。珍しく俺が納得できることを冷泉が言ったことに感心しながら、俺は頷いた。

「なるほど、そういうことか」

「麻子！ そういうこと言わない！」

そんな俺と冷泉の会話に、武部が冷泉を窘めた。

正論過ぎて俺も流石に何も言えない。

ダーズリンとかがこの場に居たら、きっと大層怒られるに違いない。  
い。

そんな居ない人のことを思い出しながら、みほがドアから「もういいよ」と言われるまで、武部に女心を分かってないことに対してチクチクと小言を言われていた。



『お邪魔しまーす!』

武部達がそう言ってみほの家に入っていく。  
俺も遅れて入って行きながら、

「お邪魔します」

ワンテンポ遅れて言っていた。

みほらしい部屋。それが俺の感想だった。

ベットと兼用のソファ、勉強机、テレビに机と一般的な部屋だと思えるが……

しかし部屋を入って左にある棚に、沢山のぬいぐるみが置かれていた。

ふと見渡せば、部屋の至る所に同じデザインのぬいぐるみが置かれていた。

「ボコのぬいぐるみか……確かお前好きだったな」

クマのぬいぐるみ。しかし身体中に怪我しているらしい傷跡や包帯が巻かれているデザインは特に稀だろう。

みほの部屋に置かれているぬいぐるみが全て色やデザインは違うが、怪我をしているクマのぬいぐるみ“だった”。

ボコられクマのボコ。確かそんな名前だった。

そのぬいぐるみを見て、俺は妙な懐かしさを感じた。

「うん！ 大好きだよ！」

みほが俺の見ていたボコのぬいぐるみを見て頷く。

たまにみほの感性が分からない時がある。

このぬいぐるみ、可愛いかな？

みほに言ったらどれだけボコが可愛いかを力説されるので絶対に口にしたくないが……過去に経験があるから二度と言わないと決めている台詞だった。

ボコのDVDを見たこともあるが、アレを見て可愛いと思う人が一定数いるのだから世の中になが流行るか分からないと実感する。

ボコが何もしてないのに喧嘩を売られ、または一方的に売って喧嘩してボコボコにされるだけの話だ。

どんなに負けても果敢に立ち上がる姿には不思議と良い話と見えるが、結局ボコボコにされて終わる。

昔にみほにそれを聞いたら、見てる方も清々しいほどの誇らしい顔で言っていた。

『それが、ボコだから！』

俺はその言葉を聞いて、きつとボコの魅力に気づくことはないんだなと理解した瞬間だった。

「そう言えば確か……」かずは「葉ちゃんも好きだったよね？」

ボコを見つめていると、唐突にみほがそんなことを言っていた。

みほの口から出た名前に、俺は思わず顔を固くした。

「そう、だったな」

反射的にそう答える。しかしみほは俺の顔を見た途端、何かを察したように気まずそうな顔をしていた。

そんな顔をさせる気はなかった。俺が慌てて誤魔化そうしたが――

「え、誰？　もしかして百式君の彼女？」

それよりも先に武部が反応していた。

みほが不味いと言うような顔をしていたので、俺は武部を止めよう

とするみほを「別に大丈夫だ」と言っただけで手制した。

「違う……俺の妹だ」

その言葉に、みほと俺、秋山以外が目を大きくして驚いていた。そんなに驚く必要があるか？ 妹がいるだけで？

みほは会ったことがあるし、秋山辺りなら知ってても同じくない話だった。

「百式君って妹いたの!?!?」

「百式さんの妹ですか、気になります」

「不良の妹か、さぞ柄が悪いに違いない」

とりあえず丁度近くにあった冷泉の頭を掴んで、割と強く握った。すぐに冷泉が痛がるのを見て、俺が手を離す。その場で蹲る冷泉に「口が悪い」と告げて、俺は武部達に答えることにした。

「話す話題なんてなかった。別にいても変じゃないだろ?」

「まあ、そうだけど……でも意外、いるとは思わなかったなあ」

武部が俺の顔をジッと見て、意外そうに話す。

俺は溜息が出そうになるのを我慢しながら、一葉のことを思い出して答えた。

「百式流を継ぐことになってる三歳下の妹だ。いつも俺の後ろを歩くような奴だよ」

百式一葉。母である家元の百式一姫の長女であり、俺の妹。

俺が戦車道を始めてから物心がつく頃には自分も戦車道やると言っただけで、俺と同じように練習をしていた。

お兄ちゃんと言って俺の後をついてくるような可愛げのある妹

だった。

今は確か地元の中学に通ってるはずだ。一葉とも、俺が家を出てから連絡を取っていない。

母と同じように、一葉とも連絡を取るのが怖かったと言うのが正しいかもしれない。

俺が入院して、見舞いに来た時の一葉の顔は聖グロのみんなと同じように記憶に残っている。

そして聖グロを誰よりも憎んでいることも、俺は知っている。

ダージン達が見舞いに来た時に鉢合わせした時、一葉は今まで見たことがない顔で怒っていた。

『なんで……なんで貴女達がこんなところにいるですか!!? 聖グロの貴女達に！ 私のお兄ちゃんに会う資格なんてあると思ってるんですかツツ!!?』

初めてだった。あんなに怒る一葉を見たことは、一度もなかった。その時は俺は聖グロの艦内にある病院で入院していたので、たまにしか来れない一葉と聖グロのみんなが鉢合わせすることは数回しかない。

毎回会う度に、一葉は聖グロのみんなに怒っていた。俺や家族が止めても、一葉は止まらずに怒鳴っていた。

それに対して一切口を返さないダージンにも、俺は心を痛めた。全て受け入れているんだと、わかったから。

過程がどうあろうと、聖グロがしてしまった結果を甘んじて受け入れた。

それがあまりにも、一人で背負おうとしているその姿が否応なしに俺には辛かった。

そんな辛い思いをさせたくなかった。そんな顔をさせる為に、俺は聖グロに入学したのではなかったのに。

退院して地元に戻って、俺が大洗に行く時も一葉は怒っていた。

『なんでお兄ちゃんが家を出て行くの!?? お兄ちゃんは何も悪くないのに!!? 戦車道を辞めたのも、全部聖グロの人達が悪いのに!!?』

泣いて叫ぶ妹を、俺は「ごめん」と言っただけで家を出て行った。

あの頃の俺は、ただ逃げたかったのだと思う。

俺に戦車道の道しかないと分かっている、整備士として生きる道を選んだ。

俺にはその生き方しか分からなかった。だから整備士としての逃げる道を選んでいたのである。

今は、もう違う。だけど、そのことを思い出すと胸が痛くなった。

連絡をするべきなのは、十分に理解している。

蝶野さんに言われた通り、母親に戦車道を始めたこと伝えるだけでも良いから連絡しなさいと言われた。

それと同じように一葉にも、話さないといけないのは分かっている。

しかし少し臆病になっているのか、自分でも分かった。

どんなことを言われるのか、どんな風に見られるのか分からない。背中を押してくれた母親から喜ばれるのか悲しまれるのか、妹から

怒られるのか蔑まれるのか。

自信を持って戦車道を始めたと言えれば良いだけなのに、それをすることが怖いと思う自分がある。

踏ん切りがつかなくて、俺はまだ連絡出来ないでいる。

キツカケがないと、連絡する勇気がない。

俺はそれを再度実感して、自分が嫌になる。

変わったと思っても、変わっていない。それを実感するのが酷く痛かった。

「いつか会ってみたい! どんな子か気になるし!」

俺の考えも知らず、武部が楽しそうに話す。



俺はそんな武部に、少しだけ笑みを浮かべた。

「そうだな……その内、機会があったら」

その日が来るかは、まだ分からないが。

◇

「よし！　じゃあ百式君の妹と会う約束もしたし、みんなで料理作ろうよ！　華はジャガイモの皮剥いて！」

「わかりました」

俺の妹の話が一区切りして、武部がそう切り出した。

五十鈴が頷いて野菜の入った袋を持ってキッチンへと向かう。

「自分はぐい飯を炊くであります！」

秋山が続けてそう言うと、背負っていたリュックを下ろして中身を取り出した。

そしてリュックの中から取り出したモノを見て、俺は思わず眉を寄せた。隣にいた武部も同じように困った顔をしていた。

「え、なにそれ？」

「お前、いつも持つてるリュックにそんなもん持ち歩いてるのか？」

秋山のリュックから出てきたのは、飯盒一式だった。しかもキャンプで使う型ではなくて、軍用らしきモノだった。

「ええー！　いつでも野営できるようにー！」

コイツのリュックの中身を想像すると、頭痛がしてきた。

いつでも野営出来るようにってことは、サバイバル出来る道具一式を常に持ち歩いているということだろう。

教科書など入っているとは思えなかった。そういう野営用品を決して使う機会なんてない学園艦で持ち歩いている秋山を見て、俺は心底思った。

「馬鹿だコイツ」

「それを言っただけで、百式君」

「二人とも！ 酷いでありますよ！」

俺と武部の話には、秋山が声を大きくする。

そんな秋山に俺と武部は同じことを思ったに違いない。それ以外に、どう言えば良いのだろうか。

「痛っ！」

そんな時、キッチンから五十鈴の音が聞こえた。

俺はキッチンでそういう声がすることに、すぐに察しがついた。

慌てて俺がキッチンに行くと、五十鈴がジャガイモを持っていた手の人差し指を啜っていた。

「おい！ お前指切ったのか!?？」

「はい……花しか切ったことなくて……」

少し痛そうに五十鈴が眉を寄せる。

「絆創膏！ 確かあったはず！」

俺の声を聞いたのか、みほが慌てて部屋を漁っていた。

医療用品はみほに任せて俺は五十鈴に近づくと、彼女の持っていた包丁を取り上げて啜っていた指の手を掴んだ。

「指！ 見せてみる！」

「えっ？ は、はい」

勿論、答えは聞いていなかった。

五十鈴の手を確認する。人差し指の先に少しだけ薄く線が入っていた。血が少し滲んでいる手を見て、俺はホッと安堵した。

「……少し刃が掠めただけか、良かった。深く入ってない」

傷を見る限り、皮膚を少し切っただけだった。

肉や骨まで刃が入っていないことに思わず安心していた。

しかし俺は少し目を細めると、先程まで五十鈴が使っていた包丁手に取った。

そしてジャガイモをもう片方の手で持つと、俺は五十鈴にリビングへ行くように顎で指示した。

「五十鈴は包丁使うな。俺がやる」

「え、百式さんが？」

「百式君、料理できるの？」

俺の話に五十鈴と武部が揃って驚く。

俺は明らかに馬鹿にされていると思うと、苛立つ気持ちを抑えながら言い返した。

「お前達、人を馬鹿にしてるな。皮剥きくらい出来るに決まってるだろ」

苛立つ気持ちを罪のないジャガイモにぶつけることにする。

ジャガイモに刃を当てて、ジャガイモを回しながら皮を剥いていく。

「わっ、本当に出来る」

俺の皮剥きを見て、武部が目を大きくしていた。

俺が家で一人暮らしで自炊している話をする、武部は信じられないと顔を歪めていた。

「なんかイメージじゃない。百式君の食べるご飯ってリンゴとかを直で齧ってると思ってたのに……」

「うるさい、俺は肉じゃがの野菜の下ごしらえしてやる。武部は何するんだよ?」

随分と酷いことを言い出す武部を黙らせて、俺は武部に何をするか訊いた。

俺の問いに、武部は自分を指差すと、

「私? 私は唐揚げの準備でもしようかな? 百式君が料理出来るなら野菜準備まかせる。出来たらそっちの肉の用意するから」

「了解、まかせろ」

俺の返事を聞いて、武部が自分の鞆に手を伸ばす。

武部が鞆の中から小さな容器を取り出すと、彼女は目に指を当てて何かを両目から取り出していた。

「思ったより意外とみんなが使えないし……良し!」

そして更に鞆から小さなケースを取り出して、赤い眼鏡を掛けていた。

「武部、お前コンタクトだったのか?」

「ん? そうだよ、家ではメガネにしてるの」

つい、俺は思ったことを本人に訊いていた。

武部は自分の掛けていている眼鏡を撫でると、小首を傾げた。

「変だった？」

「いや、意外だったってだけだ。別に変じゃない、似合ってるよ」

普段眼鏡を掛けていない人が掛けると、別の印象を受ける。

いつもの抜けた顔が少しだけ頭が良く見える。

話したら面倒くさいことになるから、言わないでおくが。

と言っても、似合っているというのは嘘ではない。

「百式君から初めて褒められた気がする」

しかし俺の言葉に、ありえないモノを見る顔で武部が震えていた。

こういう顔を見ると、普段の武部が俺をどう見ているかよく分かる。

俺は呆れながらも、武部に訊いていた。

「俺、そんなに褒めたことないか？」

「うん。逆にあると思ってたの？」

そう言われて、武部との今までのことを思い出す。

思い出して……確かに褒めた覚えがなかった。

柄にもないのと思うが、少し武部に悪いことをしたかもしれない。

俺は武部の質問に答えることをせず、目の前の野菜に向き合うことにした。

横でチクチクとうるさい小言を言う武部に、俺は自分で撒いた種をどう黙らせるか考えることにした。



『いただきます！』

そんなことが色々ありながらも、無事夕飯が完成した。

肉じゃが、唐揚げ、刺身、サラダ。そしてご飯と味噌汁と一般的な夕飯になった。

量が多い気がするが、六人もいれば問題なく食べきれんだろう。

しかし六人もワンルームの部屋で夕飯を食べるのは、かなり狭い。

みほの部屋のテーブルでは小さ過ぎると言う話になり、わざわざ俺が自宅にある小さいテーブルを持って来させられたのには文句を言いたくなった。

往復で十五分の距離だったので別に良いのだが、何故武部は俺の名前をそう言った時に最初にあげるのか？

男だから、そんな答えが出て来る気がしたのでスーパーの時のように諦めたのは秘密にしておこう。

だが俺が持ってきたテーブルを足しても、十分狭かった。

そんな狭いところに行くのが嫌だったのか、冷泉が我先にとみほが使っている勉強机に座っていた。

どう考えてもその場所は俺が使うべきだろう。

しかし俺が何を言っても、冷泉は動かなかった。

力尽くで引き剥がしても良かったが、みほの家に迷惑を掛けるわけにもいかず……俺は仕方なくテーブルに座ることにした。

俺の右にみほ、左に武部。前に五十鈴と秋山が座る。そして視界の端に冷泉が見える。

そんな座席で、色々あったが夕食が始まった。

「ところでなんで肉じゃがなんですか？」

各人が食べていると、唐突に秋山がそんなことを言い出した。

俺が黙って唐揚げを食べていると、武部が箸を指揮棒のように上に

向けて誇らしげに答えていた。

「男を落とすには肉じやがって本に書いてたんだもん！」

「つまりは百式殿を落としたいと！」

「もう！ そういうことじゃないー！」

秋山と武部の馬鹿話を聞きながら、俺は黙々と食べ進める。

過去の経験からこう言った女子トークには不用意に参加しないようにしている。加わって面倒になったことの方が多かった。

「そのところ、実際はどうなんですか？ 百式さん？」

しかし五十鈴から思わず話を振られて、俺は啜っていた味噌汁を吹き出しそうになった。

どうにか堪えて食器をテーブルに置くと、俺は五十鈴にある意味で感心していた。

「お前……たまにとんでもないパスを出すよな」

その嫌味にも無反応な辺り五十鈴自身、自覚がないらしい。

こういう女を天然というのだろう。わざとだったらこの女は大物だ。

そんな質問を五十鈴がしたせいで、全員が俺を見ていた。

俺は溜息を吐きたくなる気持ちになりながらも、無難に本音を返した。

「さあ？ 肉じやがが男を落とすか知らないが、好きなやつには効果あるんじゃないのか？」

「えー！ なんか適当に答えてない？」

「何を俺に求めてるだか……どうせその雑誌に肉じやがはお袋の味とかでも書いてたんだろ」

「……なんでわかったの？」

「なんとなく、そういう話を中学の時に同級生が話してた」

中学の時、素敵な嫁という馬鹿みたいな話で盛り上がるクラスメイトの話を思い出した。

俺は大して話に参加してなかったが、全員が馬鹿みたいな理想を語っていて聞いている分には面白かった。

「百式さんはどんな中学生だったんです？」

俺の中学という言葉に反応したのだろう。五十鈴がそんな質問をしてきた。

俺は肉じゃがを頬張ると、食べきるまで考えながら答えた。

「別に普通の中学生だったよ。学校行って、授業受けて、戦車に乗って、そんな毎日だった」

「普通の男子は戦車道しないよ、かずくん」

俺の話にみほが苦笑いしていた。

確かに、俺は普通の男子じゃなかった。

「ねえねえ、百式君の話聞かせてよ。思ったら私、百式君の話とか聞いたことないし」

話の流れで武部が何気なく話す。

俺は箸を進めながら、面倒だと答えるように鼻を鳴らしていた。

「別に聞いてもつままない話しかない」

「それでも、友達だし！ 友達のこと知りたいって思うのって普通じゃない？」

「……そうかい」



こういう馬鹿か素直なのか分からない武部に、俺は反応に困る。  
俺の話……そんなのに興味があるのかと。

思ったことを正直に話す奴だから、本心なのだろう。

友達、と正直に言える人間はあんまり居ないと思うのに……珍しい女だと相変わらず思った。

「……そんなに聞きたいか？ 俺の話？」

気がどうかしたのか、反射的にそう答えていた。

気付いたのも後の祭り。訂正も間に合わなかった。

「私は聞きたいよ。百式君の話」

「私も聞きたいです。百式さんの昔話」

「自分も百式殿の話は興味あります！」

三人か揃って同じ反応だった。

冷泉は先程からずっと黙々と食べているから、放っておく。

横目でみほを見ると、目が合ったみほが目で語っていた。

『好きにしたら良いよ』

そんな言葉が聞こえるような目だった。

俺はまた少し間を置いて、考える。

そうして自分に「まあ、いいか」と言うと、俺は今日ぐらいいと思  
いながら口を動かした。

「中学の頃の話で良いのか？」

俺が言うと、三人が頷いていた。

その反応に、俺は苦笑いしながら昔を思い出しながら話すことにし

た。

たまには思い出話というやつも、良いかと。

仲間というやつがいる空間に、気が触れたのだろう。

興味深々の武部達に、俺は懐かしい昔の話をすることにした。

そうだな。俺が中学で戦車道を始めたキツカケでも話してみようか。

一番の思い出を思い出して、俺は語ることにした。



『連絡事項だ！ 今週末、練習試合をすることになった！ 試合相手は——聖グロリアーナ女学院だ！』

そして翌日、俺は今までにない怒りを覚えて——角谷杏の胸倉を掴んでいた。

PANZER. 5 聖グロリアーナ戦です！

1. 鮮やかな記憶、輝かしい過去

それは、輝かしいまでの鮮やかな記憶。

限りなく鮮やかな、少女がずっと胸に留める過去。

ただの戦車乗りだった少女が、眩しいほど輝かしくも——世間に蔑まれる<sup>愚者</sup>少年と出会った一幕。

その日の出会いを、少女は決して忘れることはない。

たとえ“今”がどう変わろうとも、過ぎ去った“過去”は変わらな  
いと信じて。

それがひとつの偶然で、運命と思えるように。

刻まれた記憶は、ただ少女の中に輝きを放つ。

それは衝撃から始まる。思い出の一幕。



それは少女にとって、衝撃だった。

瞬くように駆け抜ける“ソレ”に、少女は文字通り戦慄した。

その日は、練習試合と言う名の交流戦だった。

愛知県にある中学校と決まった試合。

その学校のチームに特質した情報は特にない。強いて言うなら、こ  
こ一年で名を上げていると言う点だけだろう。

神奈川県の中学校に属する少女には知る由もないが、愛知県では  
中々の実力を持つ学校と言われているらしい。

それがまず初めに少女が知った試合相手の情報だった。

しかし不思議なことに大会では成績が良くない。それなのに練習試合などでは、愛知県内では負け無しと言われている妙な話がある学校らしい。

公式戦では実力を出せない本番に弱い学校なのか、それとも優秀で気分屋な隊長がいるからなのか、はたまた特出した才能を持つ変人の選手達がたまたま集まっただけかは、分からない。

とりあえずは、その愛知県にあるその学校と試合をすることになった。それだけだった。

所謂、遠征というものだ。今回は少女が属する学校が愛知県への遠征をするらしい。

高校生でもないのに、学園艦に所属してない身から言えば珍しいの一言だった。

神奈川県を代表する学園艦にある『聖グロリアーナ女学院』の影響を大きく受けている少女の学校は、イギリスの戦車を中心として使われている。

少女が属する学校からも、聖グロリアーナ女学院へ入学する生徒もかなり多い。

しかしながら偏差値が高いことでも有名であるので学力が一般以上あるか、戦車道で特待生にでもならない限り、入学はかなり難しいという門が狭い学校と少女の地元では有名な話だった。

戦車道。それは少女が嗜む武芸だ。

乙女の嗜み。礼節のある、淑やかで慎ましく、凛々しい婦女子を育成することを目指した武芸と言われている。

名前の通り、戦車を使う。ということは勿論、試合でも戦車は使われる。

当然だと思いが戦車の移動というのは、かなり面倒なのだ。

剣道や弓道のように道具を手軽く持ち運べるものではない。戦車数両で一般公道を勝手に走ることが出来ないのです、運搬用の特別な車や船で移動しないといけないから非常に手間が掛かる。

故に、学園艦というのは非常に戦車道をするのに最適な乗り物だ。船で学校ごと移動する。戦車も手軽く運べるので、練習試合もそれほど手間ではないだろう。船を運用する整備班などの苦労は除外するとして、になるが……

それはともかく、少女が属する中学校は陸にある。よって戦車の運搬などは学園艦と違って本来「かなり面倒」なのだ。

だからこそ、中学校では同じ県内でもない限り練習試合はあまり行われない。

資金を多く持つ学校なら別だが、仮にあつたとしても練習試合に資金を大盤振る舞いする学校も稀だ。

という少女も、気づけば三年生。自身の所属する学校で戦車道を三年やって来たが練習試合、それも県外とすることはあまり多くはなかった。

実力のある有名校と年に数回、稀にある親善試合くらいだった。

少女が三年になり、戦車道チームを率いる隊長となって今回が初めての遠征試合になる。

今までを知っていたからこそ、少女は心から珍しいと思うばかりだった。

そんな妙な学校とわざわざ遠征してまで練習試合をすることになるとは、夢にも思わない。

それを少女は顧問に問うてみた。その問いに、顧問は意外そうにしながらも、面白そうに答えたのが当時の少女には印象的だった。

『きつと、面白い試合が出来るわ。貴女達に新しい風をくれる試合になるかもしれないからね』

その言葉の意味を少女はよく理解できなかつた。

しかし試合をして、少女は否応なく理解させられた。

間違いなく、この試合は自分達を変えることになる。

それを知ることになる原因が、たった一両の戦車とは夢にも思わな  
いだろう。

◇

「くっ……い！　こんなことが……い！」

顧問の言葉を思い出して、少女が苦悶した。

まさしく噂通り、大会で成績が出ない理由がわかる。

ある程度まで大会で成績を出しても、練習試合と公式戦で成績の違  
いが違うと言われる学校の理由がこんなにも単純だとは思わなかつ  
た。

大会に出場していた車両構成を事前に聞いていた。資料に並べら  
れる車両を確認し、実際に試合をするリストに載っていなかった車  
両が一両試合に参加していた。

まさかその「たったの一両」の戦車で、ここまで苦戦を強いられる  
とは夢にも思わなかった。

「全車両、慌てずに前進！　私と一両は後ろから来るクルセイダーを  
抑えるわ！　他の車両は前から来る車両を抑えて！」

駆けるクルセイダー巡行戦車 Mk. III を見据えて、少女は車内と全  
車両に指示を出す。

その一両の戦車。よりにもよってクルセイダーに苦戦することに  
なるとはと。

試合が始まって、互いに森の中で接敵する静かな時間にソレはやっ  
て来た。

フラッグ戦であることから、右側面から飛び出して自陣へと迫る戦  
車はフラッグ車ではない。

不整地を少女が見たことがない走りて走るクルセイダーを見た途端、一瞬思考が止まった。

妙な走りだった。不整地である以上、車体が大きく揺れるはずの道で何故か必要以上に車体が揺れていない。

キューポラから顔を出している顔は、確か試合前に挨拶した隊長だった。名前は——安齋千代美と名乗っていた。

通常、隊長が率先して前に出て来ることなどあり得ない。

指揮を執る人間が最前線に出て撃破されれば、その時点で試合は終わったも同然だ。統率の取れないチームに、勝機などある訳もない。

その筈が何故こんな序盤に、こんな突撃という暴挙に出ているかと少女は理解の範疇を超えていた。

愚か、それ以外の言葉もない。

そのような自滅行為に、少女が指揮するチームが負けるはずもない。

何が自分達を変えるかもしれない試合だ。馬鹿馬鹿しいと、少女は嘆息した。

わざわざ遠征までして、こんな素人みたいな試合をすることになるなんて思いもしない。

「右翼、転回。さっさと終わらせましょう」

せめてもの情けで、すぐに終わらせてあげようと少女は溜息混じりに指示を出す。

自身の乗るフラッグ車を中心として、左右に各二両を展開した鶴翼の陣の内、右に配置した二両をクルセイダーへ向ける。

「砲撃、開始」

そして少女の指示により、迫るクルセイダーは華々しく白旗を上げ

るだろう。

戦車内からその行く末を見据える少女だったが、砲撃音と共に起きた出来事に……目を疑った。

「……何をしているの？ しっかり当てなさい」

不思議なことに、右二両の砲撃が正面から迫って来るクルセイダーに当たらなかった。

左右に大きく動くような素振りは見られない。前からまっすぐ向かって来るだけの的に当てられていないことに、少女は眉を寄せた。

「再度、砲撃」

続けて、砲撃の指示を出す。

しかしその指示からすぐに砲撃が開始されても、その砲撃がクルセイダーに当たることはなかった。

「何をしているの!?？ しっかりしなさい!」

これには堪らず、少女は少しだけ声を大きくした。

いくら舐めていたとしても、これは見逃せなかった。

まさか射線から動かない的に当てることが出来ない砲撃手が乗っているのかと。

しかし通信で聞こえた返事は、奇妙だった。

『当たった筈です! 間違いなく照準も合っていました! 隊長、あのクルセイダーは変です!』

「一体なにを言って……!」

再度砲撃指示を出す。そして少女は目を凝らして、クルセイダーを凝視した。



炸裂する砲撃音。そしてクルセイダーへ飛翔する砲弾。  
その瞬間、起きた出来事に少女は目を見開いた。

「避けている……？ あの前かな動作で？」

砲撃が炸裂する数秒前、クルセイダーの車体が僅かに左にズレていた。走行する振動や地面の揺れなどで起きたと錯覚したが、少女の勘が告げていた。

まぐれではないと。

三度の砲撃を潜り抜け、右端に配備されていた車両へクルセイダーが接近する。

こちらの右翼の次弾装填まで時間を要する。左側の車両からの砲撃では右側に配置している味方へフレンドリーファイアを起こしてしまう。

その僅かな隙に、クルセイダーはすかさず入り込んだ。

一度左へ移動し、マチルダIIに対して左側から接近する。

クルセイダーが右端に位置する戦車——歩兵戦車Mk. II マチルダIIを軸に時計回りで車体を滑らせた。

ドリフトと呼ばれる動きだった。そして車体が急に一時停止したと同時に砲撃音と履帯の駆動音が鳴り響く。

ほぼ零距离からの側面への砲撃。結果は言うまでもなくマチルダIIに白旗が上がり、撃破判定になっていた。

そしてその事実を突きつけられるよりも、目の前のクルセイダーに少女は目を奪われていた。

砲撃からまるで停止していないようにクルセイダーが後退。残った右側一両の砲撃も外れ、全車両から放たれた砲撃を掻い潜ったクルセイダーはすぐに森の中へと消えていった。

「なんて……なんていう……！」

少女は先程まで起きていたこと。この目の前で起きた事実言葉

が出なかった。

通常、戦車の行動はどれだけ早くしても遅い。

停止から移動までの時間。砲撃から次の移動までの時間。全ての動作に戦車は“一定時間の動作”が必要になるはず……なるはずだった。

「なんですか……今の……普通じゃない」

少女の乗る戦車の砲撃手から、そんな声が漏れる。

車内全員が、先程の出来事に言葉を失っていた。

砲撃が当たらず、瞬く間に側面に接近し、砲撃余韻もなく立ち去って行ったクルセイダー巡行戦車 Mk. III。

見たことがない動きだった。足の速い戦車は今まで沢山見てきた少女達だったが、今のクルセイダーは別格だった。

全ての動作が一連の流れで行われた。まるでそれが当然と言われるように。

どんなに速い戦車でも、必ず停車する時間が存在するはずなのだ。なのに、あのクルセイダーにはソレが無かった。

一瞬、少女は感動すらした。

ここまで自在に戦車を操れる乗り手に、未だかつて出会ったことがない。

中学校なら全国レベルだと言い切れた。いや、全国でもあそこまで繊細でかつ大胆な操縦技術を持つ中学生など聞いたことがない。

何故、こんな選手が表舞台に出てこないのか？

そもそも何故クルセイダーを公式試合に出さないのか？

色んな疑問が脳裏を過る。しかしそんな疑問が浮かんでも現実として目の前に実際にいる以上、それをやり切る選手が現実にいるのだ。

表舞台で出てこないこのクルセイダーは、間違いなく強敵となり得

る存在と確信した。

少女はゆつくりと通信機に手を伸ばし、静かに告げた。

「全員、気を引き締めなさい。アレと今後戦える日はそうそうないわ。今日の試合を今後の糧にする為に……全力を持つて挑みなさい！」

そんな選手がいるチームと試合出来ることを、少女は誇りに思っ  
た。

間違いない。この試合は、今戦っている自分達にとって刺激となり  
得ると。

全車両の隊員の返事を聞いて、少女は静かに頭を回転させる。

あのクルセイダーと残りの四両またはフラッグ車両を撃破する方  
法を。

こちらの戦車の装甲の硬さを利用した浸透強襲戦術を使うのが妥  
当。しかしクルセイダーが厄介極まりなかった。

こちらの放つ砲撃をあのような動作で回避されれば、こちらの隊員  
の士気が下がるのは明白だった。

まだ砲撃手が拙いという理由なら、本人にも納得ができるだろう。  
しかしそれが相手が奇妙という理由なのだからタチが悪い。

自分の撃った砲撃を最低限の動作で回避されるということは、つま  
り相手に射線を把握されているということに相違ない。

放物線を描く戦車の砲撃でそんな芸当をできる人間自体が奇妙極  
まりないのだが……その点は無視する。

それはともかくとしてそんな動作で回避をされ続ければ、撃たれ続  
ける相手戦車より、回避され続けられている味方の砲撃手の心が折れ  
る。

たった一度の接敵で、少女が率いるチームのメンタルが揺らいでい  
る。

あのクルセイダーを降さない限り、こちらに軍配は上がらない。

それを確信させるほど、あのクルセイダーは異質だった。

——まるで砲弾が戦車を避けているような動き

どこかでそんな言葉を聞いたことがある少女だったが、脳裏に浮かぶ言葉をすぐに追い払った。

今は試合に集中しなければならぬ。既に五個の駒の内、一個を失った。

向こうの駒は五個。少し少女達の分が悪い。

更にフラッグ車両を先に知られてしまったことが痛手だろう。

少女はいつ現れるかわからないクルセイダーに神経を張り巡らせて、全車両へ前進の指示を出した。

「前方十時の方向に敵影確認！ 距離五百！」

味方からの連絡を受け、少女は告げられた方角を確認する。

相手は少女が見る限り、チグハグな編成だった。国の統一感もない、掻き集めた編成のチームというのが妥当と言えるだろう。

そんな四両の内、一両の戦車に白いフラッグがあるのを確認。相手のフラッグ車両だ。

フラッグ車両を少女は各隊員に伝え、少女はすぐに告げた。

「全車前進、フラッグ車両を叩くわ。あのクルセイダーがいつ来ても良いように各車長は側面を警戒、背面は私が警戒するわ」

『了解！』

果たして、両者のチームが接敵する。

互いに砲撃を放つが互いに距離が離れていることと森の中ということで砲撃が木に邪魔される悪環境での戦いだった。

この状態ならば、少女のチームに分があった。

高装甲を活かして、前からの砲撃に関してはそう簡単に装甲を抜かれない。

こちらは所謂壁だ。その壁が壊される前に相手を撃破する。簡単

な話だ。

しかし少女は前の戦車達を眼中においてはいなかった。おそらくアレは陽動だと、フラッグ車両を使ってまで行う危なげな陽動と看破した。

本命は、あの安斎という隊長が率いるクルセイダー。

乱戦時に現れるか、それともある程度接敵した瞬間のこちらの動揺を誘う手を打ってくるか……考えられる方法は幾重にもあった。

だからこそ逆の立場で、少女は考える。

自分のチームに“あのクルセイダー”が居たとして、あの奇抜な動きを常時出来ると想定して。自分はどうかやってこの状態で“あのクルセイダー”を使うかと。

少女は言うまでもなく、ひとつの方法を選ぶだろう。

乱戦時ではフレンドリーファイアの恐れがあり、クルセイダーを間違えて撃破する可能性もある。

長距離の撃ち合いでは、突然現れても意味がない。

と言うことは、答えはひとつ。

互いに有効打を撃てる中距離、一番気を張って居なければいけないタイミングで――

「全車両、慌てずに前進！ 私と一両は後ろから来るクルセイダーを抑えるわ！ 他の車両は左から来る車両を抑えて！」

後方からクルセイダーが現れると同時に、少女は四両中の二両をクルセイダーの迎撃に当てた。

キューポラから少女がクルセイダーを見据える。同じくクルセイダーのキューポラから見える安斎が意外そうな顔を見せるのが癪に触った。

まさか簡単に読まれるとは思ってなかった、と言いたげな顔が少女は小馬鹿にされているような気がした。

しかしクルセイダーは止まらなかった。

不整地でも揺らぐことのない走り、少女の率いる二両へと迫る。

「砲撃開始ッ!!?」

至近距離に接敵される前に、潰す。それが少女選んだ答えだった。放たれる二発の砲弾。しかし安斎の顔に揺らぎはなかった。

少女も同時に戦車から放たれ、なおかつ先程の回避は出来ない幅で飛翔する砲弾を躲すなど出来ないはずだ。

真つ直ぐに向かつてくるクルセイダーへ、左右へ逃げられない二発の砲弾が迫る。

しかしクルセイダーは、またもや少女の想定を超える動きを見た。

「……なっ!??」

クルセイダーが一瞬の間に、車両一両分左にズレていた。

少女から見て、クルセイダーの左に移動する姿は一瞬しか見てなかった。

少女の体感で瞬きをするような一瞬に、クルセイダーは移動していた。

勿論、そんな動きをされればこちらの砲撃は回避されるも同然だった。

「次弾装填急ぎなさい！　クルセイダーを近寄らせないで！」

少女の中で目の前のクルセイダーへの警戒レベルが一段階上がった。

間違いなく、このクルセイダーは「異質」そのものだった。

近寄られれば、確実に撃破される。確信を持って断言できた。

しかし続けて放たれる二発の砲弾も、クルセイダーは難なく回避し

て接近してくる。

少女の背筋に汗が走る。不味い、このまま接敵を許してはいけない。

「——そう、それなら」

その時、少女の頭に活路を見出した。

確率は低いが、試してみる価値はあると自分の戦車道の経験が告げる。

少女は脳裏に浮かんだ「案」を自車両の砲撃手に伝えたと、砲撃手は驚きながら答えた。

「本当にソレ大丈夫なんですか!?!? この状態で!?!?」

「やってみなさい。私の考えが正しかったなら、多分上手くいくわ」

「……わかりました」

不安げな表情を見せるも、砲撃手は少女の命令に頷く。

そんな会話の中、クルセイダーは着実に接近してきている。

しかし少女は先程よりも冷静にタイミングを計る。そして他の車両に命令を出して、少女は機会を待つ。

クルセイダーを見つめ、周りに気を張る。そして味方車両から砲撃が放たれた瞬間、少女は命令した。

「砲撃!」

味方の砲撃とタイミングを遅らせて、少女は自車両へ砲撃命令を告げた。

少女の声と共に放たれる砲撃。先に放たれている砲弾を追いかけるように飛んでいく。

先の初弾をクルセイダーが「左」へ僅かに移動して回避する。

そして少女の命じた砲撃手が放ったクルセイダーに対して僅かに

“左”へ照準を移動して放つように命じた砲撃が、少女の予想通りクルセイダーへ向かっていった。

「これなら……いー」

少女の予想通りだった。

クルセイダーは先程から“左”へ車体を移動する場面が多かった。おそらくは乗り手の癖だろう。少女はその癖を利用して、回避した瞬間を狙った。

当たる。撃破出来る。そう思った。

しかしその砲弾の行く末に、少女は苦悶した。

放たれた砲弾が、クルセイダーの側面を掠った。いや掠められたというのが正しかった。

大きな音を立ててクルセイダーの側面を砲撃が僅かに削る。そしてその側面からの衝撃にクルセイダーが大きく左へ車体を揺らした。

「あの状況で、更に移動したですって……?」

これには少女も目を見開いた。これまでになく手応えだと思えばかりの砲撃だった。

しかし回避された以上、次の行動を考えなければならない。少女はすぐに次弾装填を急がせた。

左に大きく移動したクルセイダーがそのまま左へと駆ける。

そして次弾装填までの時間の間に、クルセイダーは少女の四両の内の一両の車両に後方から迂回して接敵した。

先程の状況が終わった後でも、引く気は毛頭無いらしい。

クルセイダーのキューポラから見える安斎が車内に向けて、驚いた顔をする。

そうして右端の戦車へ接近したクルセイダーが左側の戦車達に隠れるように、車体を右端にいる戦車へ移動した。



先程見た車体移動だった。ドリフトをするような流れで移動し、そして戦車の陰に隠れた途端、砲撃音が響く。

そしてクルセイダーはすぐに後退するとそのまま後ろへ下がっていた。

これで二両が撃破された。

少女の表情が芳しくない。またひとつ劣勢になってしまったからだ。

前から四両の砲撃、更に自在に動くクルセイダー。

対して、こちらはフラッグ車と二両の戦車。

なんとかして、先に相手フラッグ車を撃破しなくては。

クルセイダーが後退していくのを見て、少女は思考する。

しかしクルセイダーの次の行動に、少女は考える余地すらも失った。

「二体、なにを、しているの？」

少女が思わず口を開けて、見ていた。

後退、バックして離れていくと思っていたクルセイダーが「バックしたまま」大きくUの字を描くと、そのまま戦車の背中を見せた状態で少女達の乗る三両の戦車へ向かってきていた。

もはや操縦手の頭がどうかしていると思えない。

戦車にバックミラーなど無い。ということ、あのクルセイダーに乗る操縦手は狭い視野に加えて前しか見えない状態でバックしたままこちらへと向かってきている。

クルセイダーのキューポラから安齋が少女達を見据えて、何かを話している。間違いなく通信機での連絡だ。

操縦手とやり取りしていると思うが、それでも無茶苦茶だった。

口頭で伝えられた情報でクルセイダーの操縦手は見えない道を走っている。

走りによるめきはない。確固たる意志で、走っている。

そんなクルセイダーが少女達の三両の戦車を軸に時計回りで移動

する。

そして今度は左端にいた戦車へと、弧を描いて接近していた。絶えず少女の戦車が放つ砲撃も、横へと移動している状況では当てることすら出来ない。

左端の戦車へバックしたまま接近するクルセイダーは瞬く間に走りながら半回転して、気づけば左側にいた戦車の側面に丁度良く零距离で砲撃を放てる状態になっていた。

同時、砲撃音が響く。遂に……三両目が撃破されていた。

「

その時、少女は——心から畏れを感じた。

そして、心から目の前のクルセイダーを称賛した。

その走りに淀みなく、自由自在に駆け巡ったクルセイダーの姿に

……少女は全身に鳥肌を立てた。

まるで羽が生えたような軽々しい戦車の動き、自分と同じ人間が乗っているとは到底思えなかった。

ひとつの芸術、そう言っても過言ではなかった。

ただ上手いなどという言葉で片付けて良いモノではない。

それこそ相手に対して無礼と、少女にはハッキリと言えた。

敵として、未だかつてない畏れを抱いた。

戦車に乗る者として、心からの称賛を送った。

ひとりの人間として、ただ感動していた。

そんな感情を少女が感じるなか、クルセイダーは絶え間なく動いていた。

もはや二両となった少女達に、勝ち目はない。

そんな二両にクルセイダーが少女の戦車を守る一両に接近してい

た。

また同じように、放たれる砲撃を回避してクルセイダーが少女を守る最後の戦車の側面へと。

しかしその時、少女の耳に聞こえるはずのない「音」が聞こえた。

——ガコン、と大きな音が響いた。

クルセイダーの車体が大きく揺れる。本来側面で止まるはずのクルセイダーが大きく弧を描いて移動していた。

少女が思わず、目を大きくしていた。

クルセイダーの左の履帯が、外れていた。移動の軸となる足が壊れた瞬間だった。

しかしクルセイダーは残る右の履帯を回転させながらも、車体を無理矢理敵戦車へと合わせる。

気づけば、こちらの戦車の砲塔がクルセイダーへ向かっていた。

クルセイダーが停車し、砲塔が相手戦車へと向けられる。

瞬間、大きな炸裂音が二つ鳴り響いた。

白旗が互いの戦車に上がる。それは紛れもなく、撃破扱いの白旗だった。

呆気ない幕引きだった。

まさかあのクルセイダーが車体の破損が原因で撃破されるとは、少女も思ってもいなかった。

果たして、四両失ったフラッグ車両だけを残す少女のチームとクルセイダーのみを失った相手チームの四両が向かい合う。

「……………完敗だわ」

迫る四両の敵戦車へ砲撃しながらも、少女は静かに呟いた。紛れもなく、これは完敗だと。そして四両の戦車に囲まれた少女の戦車は、瞬く間に白旗を上げた。

◇

「安齋さん。あのクルセイダーに乗っていた操縦手はどなたですか？」

試合が終わり、各学校で片付けをしているなか——少女が安齋に近くなり、そう質問していた。

長い髪を雑にひとつにまとめた背の小さい少女——安齋千代美が少女へ向くと、

「ん？ ああ、アイツのことか？」

近くで整備されているクルセイダーを見つめて答えた。

少女は安齋に掴みかかるような勢いを抑えて、静かに告げた。

「会わせてください。あのクルセイダーを操っていた操縦手に、是非とも会わせていただけないかしら？」

懇願する少女に、安齋が少し悩む素振りを見せる。

しかし少し考えて納得したように頷くと、安齋はクルセイダーに向かって叫んでいた。

「和麻—— ちょっとこっちに来て！」

安齋が呼んだ名に、少女が耳を疑った。

「和麻……?」

思わず、自身の口で復唱してしまうほどに。

そしてその和麻という名前から、少女の行き着いた答えに少女自身が驚いた表情を見せていた。

「まさか、男の人が戦車に……!?」

あり得ない。少女はそう思った。

男が戦車に乗るなんて、聞いたことがない。

乙女の戦車道と呼ばれる武芸を、まさか男がしているなど到底あり得て良い話ではなかった。

少女の言葉に、安齋が僅かに目を鋭くさせた。紛れもない非難の目だった。

クルセイダーのキューポラから、一人の少年が姿を見せる。

少し長めの髪に、幼さが少しあるも凛々しい顔立ちをした少年だった。

その少年が安齋の呼び掛けに反応すると、彼は手慣れた動きでクルセイダーから降りて安齋のもとへ走ってきた。

少年が「先輩、なんですか?」と忙しいと言いたげな表情を見せる。そして少年が安齋の前にいる少女を見ると、不思議そうに小首を傾げた。

安齋はそんな少年の反応を無視して、彼に向かって誇らしげに腕を広げた。

「では、紹介しよう。これが我がチームのエースだ。男だろうと女だろうと関係ない。これが私の大事な切札であり、私の大事な後輩の百式和麻だ」

「百式……? はっ!!? まさか貴方、あの噂の百式流の!?」

安齋に少年を紹介され、少女はその名を聞いた途端、思い出した。前に聞いたことがあった。

西住、島田と並ぶ名家の百式流。

その百式流に、異端児と呼ばれる男の操縦手がいると。

まさか目の前の男子が、噂のソレだとは夢にも思わなかった。

「どんな噂か想像が出来ますが……初めまして、百式和麻です」

和麻は少女の反応に面白くないと口を尖らせる。

少女は和麻の反応に慌てて謝罪した。

「そういう意味ではないの。気分を悪くしたなら正直に言って……ごめんなさい」

「ああ……いえ、別にそんな風に謝らないでください」

少女の対応に、和麻が毒を抜かれたように大人しくなる。

まるでそんな対応をされたのが珍しいといえる反応だった。

安齋はそんな和麻の肩に手を置くと、楽しそうに笑っていた。

「コイツは『そういう反応』には慣れてなくてな。大目に見てやってくれ、それとその言葉で『さっきの言葉』は聞かなかったことにおくから」

さっきの言葉とは、間違はなく少女が口にした『男なのに戦車に乗っている』という発言だろう。

その発言を少女がした時、安齋は敵をみるような鋭い視線を少女へ向けていた。

安齋がその意味を込めて話した内容に、少女は静かに目を伏せた。謝罪の意味だった。

「和麻、この人は分かると思うがさっきの試合の隊長さんだ。何か言

いたいことはあるか？」

安齋に少女のことを紹介され、和麻は納得した表情で少女を見やった。

少し悩むと、和麻はすぐに口を動かした。

「クルセイダーが砲弾を避けた時、左にズラして砲撃したのはたまたまですか？ それとも、分かっています？」

和麻のその質問に、少女は頷いた。

「ええ、半分は勘でしたが……左に避けているのが多かったので多分癖だろうと」

少女に言われると、和麻は参ったと言いたげに頭を乱暴に掻いていた。

そして悔しそうに顔を顰めて、和麻はどこか納得したように肩を落とした。

「やっぱり治さないと駄目か……母さんに言われた通りだ。それにしても、まさか俺の癖を初見で見抜いてくるとは思ってたなかったです。思わずカツとなってしまいました」

「そうだぞ！ 引けと言ったのに勝手に前に出るんだからこっちは冷や汗ものだったんだからな！」

安齋が和麻の脇腹を肘で突く。和麻はそれに対して反論出来ないのか、困った顔をして謝っていた。

「まあそれは過ぎた話だ。今後気をつけろよ、和麻」

「はい。精進します」

「それで良い。それにしても……まさか和麻に“クイツク”と“アク

セルブロー”、更に”ドライブアクション”まで使わせるとは、神奈川県の有名校は流石だ」

二人の会話が一区切りし、安齋がふと少女にそんな言葉を投げ掛けた。

少女は安齋の話がよく分からなかった。知らない単語をいくつか話されて、少女は眉を寄せた。

「なにを話しているの?」

少女の問いに、安齋は質問の意味を理解すると申し訳なさそうに「ああ、すまない」と謝罪して説明した。

「さっきのは和麻が使う百式流の技術ってやつなんだ。かなり本家とは違ってアレンジしてるみたいだが……端的に言うと、砲弾を躲す技術と相手に零距离砲撃を撃つ時に使った移動方法とかだ」

少女が説明に納得する。

なるほどと、やはり通常の技術ではなく”速度の百式”と謳われた百式流の技術だったのかと。

それならば、納得出来た。というよりも更にソレを女ではなく、男で会得している和麻に興味が湧いていた。

少女が和麻を見つめる。そしてしばらく見つめると、少女は少したどたどしく訊いていた。

「百式さん。どうして、貴方は戦車に乗るように……?」

ふと、湧いた疑問。それを少女は思わず訊いていた。

男なのに何故? という言葉が頭に浮かばない辺り、少女の和麻への見方……というよりも男が戦車道をする事への批判的な偏見がないことを証明していた。



和麻はその質問に、少し目を大きくする。  
そんな質問のされ方をするとは思っていない、ただ驚いた。  
しかし和麻は、ハッキリと答えた。

「えっ……？ そんなの決まっていますよ」

和麻の見せたその顔を、少女は今後忘れることはないと確信した。  
それは——どこか遠い先を見つめたような、長い道の先を見つめるように、真っ直ぐ前を見据える顔だった。

「俺には憧れている人がいるんです。俺はその人が見ていた景色、その憧れた人の景色が見たい。あとは、戦車に乗るのが好きだから……ただそれだけですよ」

そして最後に楽しそうに和麻が笑みを浮かべた。  
不貞腐れた顔でもなく、困った顔でもなく、心から戦車に乗ることを喜びとしている変わった少年の顔を。

『ああ……そういうこと』

少女は心の中で、そう呟いた。

今まで会ったどの戦車乗りとも違う、まるで子供のような笑みを見せる和麻に、少女は心を打たれた。

こんなにも楽しそうに、そして誇らしく戦車に乗る人を少女は見たことがない。

そしてその顔に、その言葉に、間違いなくこの少年は少女の心へ“新しい風”を運んだ。

「そうだ。俺、まだ貴女の名前を知らないです。良ければ、教えてください」

手を差し出して、和麻が少女へ握手を求める。

少女はその手を恐る恐る握り返すと、和麻の目をしっかりと見つめて答えた。

これからの関係が続きますように、そう思い少女は自身の名を告げた。

その偶然と思える出会いが、きっと運命だと信じて。

「初めまして、百式和麻さん。私の名前は——」

これが一人の少女と少年との出会い。

少女が少年の道に魅入られた、始まりの過去的一幕だ。



随分と、懐かしい夢を見た。

心地良い微睡みのなか、少女——ダージリンがそつと起き上がる。

そつとベッドから起き上がり、部屋のカーテンを開ける。

随分と天気が良い。間違いなく、今日は晴れだと確信する。

「久しぶりに見たわ……あの夢」

そつと唇に指を添えて。少女はダージリンではなく、*“本当の名”*を呟く。

まるであの時のように、和麻へ告げた時を思い出すように呟いて……嬉しそうに微笑んだ。

「やっと、この日が来た」

そして窓の外をもう一度見つめて、ダージリンは目を鋭くする。練習試合が決まった日から、随分と待った気がする。

たったの一週間程度が、まるで年単位のような気さえした。

しかし、ようやくこの日が来た。

待ちに待った。待ち望んだ日が、やっと訪れた。

今日はきつと色んなことがある。

悲しいこと、嬉しいこと、きつと色んな気持ちになる日になる。

ダージリンはそれを理解して、自分に言い聞かせるように呟いた。

「和麻さん、貴方にまた会えるのなら……私は……」

どんな罪と罰を受けても良い。

ダージリンはそう思いながら、胸に当てた左手を強く握り締めた。

## 2. 怒ることは、誰にでもある

「今週末、練習試合をすることになった。試合相手は——聖グロリアーナ女学院だ」

それは和麻が大洗女子学園の戦車道チームに加わり、十一日目の練習が終わった時に河島桃によって告げられた。

和麻はその言葉を瞬間、本当に目の前の女が何を言っているか理解出来なかった。

そして河島の言葉をしばらくしてから理解すると、和麻の意思とは関係なく無意識に角谷杏の胸ぐらを掴みに行くほど、和麻は心の底から激怒していた。

周りが和麻の行動に呆気に取られていようとも、彼には関係なかった。それほどに和麻は杏に怒りを露わにしていた。

「おい……一回しか訊かないぞ。今、あの女……なんて言った？」

罵声になりそうな声をどうにか抑えて、和麻は静かに杏に問い質す。

しかし杏は和麻に胸ぐらを掴まれてる状況でも変わらずに、飄々とした表情で答えた。

「だから言ったじゃん。〃試合するよ〃って」

「俺に何も相談なしに聖グロリアーナに試合を申し込んだのか？俺、言ったよな？練習の日程についても……言ったよな？」

飄々と小馬鹿にするような杏の態度に、和麻の不快指数が劇的に上

昇する。

その態度に和麻の口から反射的に罵声が出ようとした瞬間、杏を掴んでいられる彼の腕を誰かが掴んでいた。

「かずくんっ！ やり過ぎだよっ！！っ！」

みほが慌てて、和麻の腕を掴んで叫んでいた。

その声を聞いて、和麻が今自分がしている行為に気づき、頭に上っていた血が少し引いていく。

みほに止められた和麻は舌打ちすると、杏を掴んでいた手を乱暴に放した。

「百式！ 喧嘩はダメだぞ！」

「先輩！ 流石にまずいです！」

磯部と河西が咄嗟にみほを引き離して和麻の腕を掴む。続いて他のバレー部メンバーも和麻を抑えに行った。

そして和麻の身体を抑えたバレー部の四人が杏から引き離し、杏は小山柚子に崩れた制服を整えられていた。

「百式ッ！ 貴様、会長に向かって手を出したな！」

そして次の瞬間、河島が和麻に向かって目を吊り上げて迫っていた。

しかし今度は和麻に向かっていく河島が一年生達に慌てて止められていた。

今にも掴み合いの喧嘩になりそうな雰囲気の中、和麻はバレー部四人抑えられていても暴れることなく河島に怒鳴っていた。

「うるさい！ まだお前達に試合させるわけにいかないから怒ってるんだらうが！」

「貴様っ！ 会長がやることに文句あるのか！」

一年生に抑えられている河島が無理にでも和麻に向かっけいこうとする。しかし一年生六人に抑えられている所為でその場で無理に暴れているだけだった。

「当たり前だ！ あるから怒ってるんだよ！」

「何が気に食わない！ 勝手に試合を組まれたことか!?？ それとも試合する学校が気に食わないのか!?？」

河島が一年生に止められながら叫び、そして和麻も叫ぶ。

確かに河島の言う通り、和麻は全て気に食わなかった。勝手に生徒会で練習試合を組まれたことも、そして試合を申し込んだ「相手」にも全てに文句を言いたかった。

「気に食わねえよ！ だけどこっちはな！ もっと大事なことに腹が立ってんだよ！」

しかしそのことよりも、和麻には更に腹が立つことがあった。

バレー部の四人に止められながらも、和麻は河島に向かって睨みながら叫んだ。

「頑張ってるお前達に負ける試合なんてさせられないから怒ってんだろうが！ この馬鹿がッ！」

その時、河島は目を見張った。河島を止めていた一年生も、和麻を止めているバレー部も、全員が同じような反応をしていた。

そして河島が言い返さないことに、和麻はここぞとばかりに声を荒げて彼女を怒鳴りつけた。

「確かに負けることで成長出来る時もある！ 悔しさをバネに努力す

ることも大事だろうさ！ 試合の経験も必要だ！ だけどな！ これだけ毎日辛い練習を投げ出さないと努力してるお前達を——試合で勝たせてやりたいと思う俺のどこが悪いんだよっ!?？」

和麻が叫ぶ。怒りの理由を。

その叫びを聞いて唾然としていた河島がハツとすると、すぐに口を返した。

「なら勝てば良いだけだろう！ 練習は十分してきた！ もう試合しても問題ない！」

「お前は馬鹿かッ！ このド素人が……！」

和麻の目が鋭くなる。河島の口から出る言葉の全部が彼を苛立たせた。

「なら相手考えてから言え！ 初心者集団の学校の初めての試合に全国強豪校を申し込む馬鹿がどこにいる！」

「私達はこれから全国大会に出るんだ！ ならすぐに強豪校と戦うことに意味がある！」

本来なら河島の話にも、一理あると言えるだろう。

普通ならその考えで問題はない。戦力がある程度整った弱小校ならば。

しかし和麻の考えは、その話を全て切り捨てていた。

「この大洗の戦力を見て言え！ たったの五両しかないんだぞ！ 例え戦う学校が同じ車両数でも扱うスペックが他校と違って低く過ぎるんだよ！」

大洗が保有する戦車は五両。しかし保有する戦車は他校の戦車と比べれば、あまりにも非力と言えた。

I V号戦車D型、38t戦車B/C型、八九式中戦車甲型、Ⅲ号突撃砲F型、M3中戦車リーと並ぶ大洗保有戦車で十分に撃ち合える戦車は半分もない。

砲弾を撃つことは問題なく全車両出来るが、撃った砲弾で相手を撃破判定にさせるだけの“威力”を撃てる戦車が少ないのだ。

「なのに聖グロと試合だと!? マチルダとチャーチルの装甲はⅢ突以外は至近距離からの砲撃じゃないとまず抜けない！ 百メートル以内か至近距離で撃たないと撃破できない相手なんだぞ！」

聖グロリアーナ女学院には、イギリスの戦車が保有されている。その中の“ある二両”においては、試合においてほぼ必ず使われている。

それがチャーチル歩兵戦車とマチルダⅡ歩兵戦車だ。

その二両に関して、和麻が最も危惧する点が装甲である。

戦車の内部を覆う装甲が非常に厚く、防御力に特出した戦車を使うのが聖グロリアーナ女学院の特徴でもある。

その厚い装甲を突き破るだけの威力を持つ砲撃を長距離や中距離で撃てる戦車が、そもそも大洗にはⅢ号突撃砲F型しかない。

しかし威力が低くとも全部の戦車が抜けないというわけではない。

一部の戦車に関しては、それすらも不可能なのだが。

それを可能とするには長距離や中距離ではなく、至近距離からの砲撃しかないのだ。

飛翔すればするだけ砲弾の威力が下がるのだから、端的に言えばゼロ距離で撃てば撃破出来る可能性はある。

しかしそれを言葉で言うのは簡単だが、現実として実行出来るかはまた別の話である。

「それをやるには明らかに全員の技術がいる！ 聖グロの浸透強襲戦術を突破するには更に作戦を立てないと不可能だ！」



そして更に最初の問題である装甲という壁を乗り越えても、相手が黙っても至近距離に迫ってくる強襲戦術を聖グロリアーナが使ってくることを和麻は知っていた。

聖グロリアーナ女学院では、伝統的に浸透強襲戦術を使う。

簡単に言えば、前線に穴を開ける戦術だ。前線を突破した後には敵の裏側に回り込む——つまり敵陣に「浸透する」作戦だ。

重装甲の戦車を使い突破口を開き、他の戦車を送り込み敵の裏側から崩すのが主な内容となる。

ここから細かい発展など沢山のパターンがいくつかあるが割愛する。その作戦を聖グロリアーナに使われることが現場の大洗には非常に良くなかった。

まず第一に、まともに撃ち合えない。正面の装甲を皿突以外の砲撃で突き破ることができないのだから。

至近距離まで接近されれば、大洗の戦車が聖グロリアーナの戦車を撃破する前に確実に撃破される。

しかし相手の砲撃を掻い潜り、更に威力の低い砲弾でも撃破判定にさせる弱<sup>ウイークポイント</sup>点を撃ち抜ければ勝算もあるのだが——

そもそも実力と経験が足りていない大洗に「ソレ」を要求すると自体が間違えている。

仮に聖グロリアーナの浸透強襲戦術を崩すだけの作戦を立てたとしても、それを実行できる技術があまりにも足りていないのが現実だった。

「例え作戦を組んだところでその作戦を実行するためには、確実に全員の技術がいるんだよ！　だから全国大会までに仕上げる予定を組んでたんだ！」

だからこそ、和麻はそれを見越して考えていた。

たったの五両の戦車で、幾重にもいる強豪校の戦術を攻略するために必要な事柄を。

作戦を実行できるだけの技術を、それを自信を持って行える経験

を、戦うことに諦めない勇気を。

全てを完全に仕上げることなど不可能と思いながらも、和麻は少しでも近づけるようにと考えていた。

「その予定を全部台無しにするようなことをするな！ まだお前達に試合は早い！」

それをたった一度の練習試合で崩すことなど、和麻には到底容認できずきるわけがなかった。

和麻の叫びに、全員が目を見張る。

自分達よりも遥かに自分達のことを考えていた和麻に、少なからず“ほぼ全員”が困惑していた。

誰よりも大洗の現実を理解して、それでも自分達を勝たせようと真剣に考えていたことをハッキリと全員が理解した。

「でも決まっちゃったんだから、試合すれば良いじゃん？」

しかし杏は、そんな和麻に変わらない飄々とした顔で答えた。

和麻の目が鋭く、杏を睨みつける。

和麻の表情の変化に、思わずバレー部の四人がが彼を抑えつける力を強めていた。

「ふざけたことを言うのも大概にしろよ……お前……！」

「百式ちゃんの言うこともわかるけど、自分達の実力がどこまで通じるか知ること大事だと思うよ〜」

そして杏が全員を一瞥すると、和麻に胸を張って言い放った。

「ならみんなに聞いてみれば良いじゃん？ 百式ちゃんが思ってるよ、みんなそんなに弱くないんじゃない？」

そして杏が堂々と右手を大きく上げると、気だるそうな声色で楽しそうな笑みを浮かべた。

「週末、試合したい人〜!」

杏が全員に告げる。そして河島桃と小山柚子が続くように手を挙げていた。

しばらくの沈黙の後、次々と他のメンバーも手を挙げていた。

「お前達……なんで……」

その光景に、和麻が目を大きくした。あれほど駄目だと言ったはずなのに、どうして手を上げるのかと。

「先輩、私は今の自分の実力がどこまで通じるか戦ってみたいです。先輩に教わってきた技術を使った操縦手として、今の私がどこまでやるかやってみたいです」

「やっぱり試合でないと分からないこともあると思います!」

和麻を抑えるバレー部の河西忍と佐々木あけびが、彼を見つめる。他に手を上げていたメンバーも、同じように和麻を見つめていた。そんな周りの反応に和麻は顔を顰める。どうして自分の話を理解していないのかと。

怒りを通り越し、和麻はもはや呆れてしまっていた。

しかし呆れる和麻に、杏は戯けた表情で彼に問い掛けた。

「そんなに百式ちゃんは試合に反対? 理由は確かに一理あるけど、それよりも……本当は百式ちゃんの方が嫌なんじゃないの?」

その質問は、和麻の神経を逆撫でするだけの意味があった。和麻にとって、それを問うこと自体に意味があったのだから。

「……なに?」

その問いに、和麻が静かに目を鋭くさせて訊き返した。

その質問の意味は、和麻にとって最上級の嫌味と捉えることが出来たからだ。

「聖グロの人達とき、会うのが怖いんでしょ?」

「なッ——!!?」

そして次に出た杏の言葉に、和麻は激怒した。

バレエ部の制止を忘れるほど、和麻は杏に詰め寄る。

バレエ部四人を引きずらせながら、和麻は今にも殴りかかりそうな剣幕で杏を睨みつけた。

「角谷ツ!!? てめえ!!? よりにもよって『その話』をここでツ!!?」

口が悪い和麻でも、ここまで誰かに対して口を悪くしたことはなかった。

本来、口が悪い方ではない和麻なのだが、杏のその言葉は彼に感情のままに声を荒げさせた。

今、大洗戦車道メンバーが全員いる前で自分の知られたくない過去について話した杏に、和麻はそれを許すことは出来なかった。

例え自身の過去と向き合っていたとしても、今この場でその話をされることが一番許せなかった。

この場には、みほ以外は戦車道の初心者しかいない。

和麻の傷跡を見たことがあるのは、みほ達のチームだけだ。

和麻の聖グロリアーナでの過去は、戦車道の悪い面なのだ。

戦車の砲撃を人に向けて放つ。そして受けた和麻自身の傷。それを初心者に知られることが、和麻は耐えられなかった。

現実には和麻という戦車道の悪い面を体現した人間が居て、人に砲撃を放てる人間が戦車道界にいとこの場にいる全員に思われる。

そんなことがある戦車道なら、やりたくない。そう思われるかもしれない。

そんなことで戦車道を諦められるなど、和麻には到底容認出来なかった。

まだ種から蕾になる程度に成長し続ける彼女達に、そんな過去を伝えられて彼女達を摘み取られるなど——和麻には許せるわけがなかった。

しかし杏は、そんな和麻に呆れたように溜息を吐く。

まるで和麻の気持ちを理解しているように、むしろ理解しているの行動なら和麻は更に激怒する自信があった。

どこか哀れな人を見るような目で、杏は和麻に語りかけた。

「もうそろそろみんなに話しても良いんじゃない？ 百式ちゃんの戦車の砲撃を受けてできた眼帯の下にある目のこと」と、長袖を着て誤魔化している「身体中にある傷跡」のこと。それと聖グロから大洗に転校して、戦車道をやめた理由をさ」

和麻が顔を歪めた。遂に杏が話してしまったことを、もう元には戻せない。

周りのメンバーが驚いた顔をして、和麻を見た。

全員が和麻の眼帯を見つめる。その視線に、和麻は全員を見渡すと——諦めたように肩を落とした。

そして杏が言ってしまった話に、彼は堪らず強く言葉を返していた。

「そんなことをみんなに話すわけがないだろうが……俺の『コレ』は戦車道の闇なんだ。だから、だから、戦車道を始めたばかりのお前達

に知られるわけにはいかなかったのに……！」

和麻が表情を暗くする。

しかし杏は呆れていた。

「分かっていると思うけど、気付いてる子もいるよ。百式ちゃん、みんなもそんなに馬鹿じゃないって」

杏が周りを見渡す。そして彼女は全員に訊いた。

「全員、正直に答えてねえ。生徒会以外で百式ちゃんのこと、知っている人？」

杏の質問に、五人だけ手を挙げていた。

澤梓、エルヴィン、おりよう、秋山優花里、西住みほの五人だった。

「西住ちゃんは知ってて当然。秋山ちゃんも戦車道に詳しいからねえ。残りの三人は……自分で調べた？」

杏が残りの三人に訊くと、三人は揃って頷いていた。

「私は先輩のことが気になって調べました。今は全然ですけど、初めて会った時はすごく怖かったですから……有名な人って聞いたので調べたら先輩と聖グロリアーナのことがあつて……」

澤梓がいたたまれなさそうに顔を伏せていた。

「みんなに言わなかったの？」

「言えるわけじゃないじゃないですか、アレが本当なら尚更」

杏の質問に、梓が即答する。

杏はそれに「そっか」と微笑むと、残りの二人に目を向けた。

「私とおりようも同じ感じた。百式が怖いとかじゃないが、百式のソウルネームを考える時に試しに調べてみたら偶然出てきたんだ。内容が内容だからな、下手に言いふらす話じゃない。私とおりよう以外には口外しないことにしたんだ」

エルヴィンも梓と同じように話し出した。

「なるほどねえ……もう少し知ってる人が居ると思ったけど、少し意外だった。案外、百式ちゃんもちゃんと『信頼されてた』みたいだねえ〜」

杏の最後の言葉に、妙に含みがあった。

それに和麻が反応するよりも先に、反応した人間がいた。

「会長。それは、どういう意味ですか？」

みほが静かに会長を見据えていた。

その顔は今までのように気弱な表情ではなく、戦車に乗る時に見せる真剣な表情だった。

### 3. 向き合えていても、向き合えていない

「ん？ 言葉通りの意味だよ？」

みほの問い掛けに、杏は平然と答えた。

その返答に、みほは静かに目を据わらせていた。

「それはかずくんがみんなから信頼されていないと思つてた。そういう意味で良いんですか？」

みほを知る人間なら、それはすぐに理解できた。

更にみほを知る人間だからこそ、彼女の態度に素直に驚いていた。

あの西住みほが、怒っていると。

みほの人柄を知る人間なら、彼女が怒るところなど皆無と言えるほど見たことがない。

理不尽なことがあつても、怒りを露わにすることもなくその不条理を自分の中に閉じ込めるような人間であるはずのみほが見て取れる程の怒りを見せていた。

その変化に沙織達は勿論のこと、和麻も言葉を失っていた。

「これだけ真剣にみんなと向き合ってくれてるかずくんをみんなが信用しないと、本当に思ってたんですか？」

「向き合ってるのは、自分だけの間違いじゃない？」

杏の返答に、みほの目が大きく開かれた。

それは紛れもなく和麻に対する侮蔑とも言える言葉だった。

みほは知る由もないが、和麻は大洗を高校戦車道全国大会で優勝しなければ廃校という事実を知っている。それを知っているからこそ、



彼は正しい手順を踏まずに荒療治とも言える方法で大洗メンバーを育成している。

しかしながら和麻自身は、正直に言えば大洗が廃校になってもどうでもいいと思っていた。

和麻がこの大洗で戦車道に向き合う大きな要因は、大洗ではなくみほが作っているのだ。

みほが和麻へ戦車道と向き合う勇気をくれたこと。これが和麻の戦車道を始めることになったキツカケに過ぎない。

だから和麻はみほ達が歩く大洗の戦車道の行く末を見るために、今の大洗を成長させようと尽力しているだけだ。

大洗の現状を知らないみほにとって、和麻が戦車道をする理由は閉じ込めていた自分の本当の気持ちと向き合うことを決め、自分達と戦車道をしてくれるということだけだ。

更に事実を加えるなら、そこに大洗の廃校問題を免れるためという理由が加えられる。

みほの考え自体、大方間違っただけはない。

それを杏は真っ向から否定したのだ。

先程の言葉は、和麻は自分自身の為にしか戦車道をしていない。そう受け取れる発言だ。

みほから見て、大洗メンバーに真摯に向き合っている和麻に対して

——その杏の言葉はあまりにも和麻を侮辱していた。

「それ、本気で言ってるんですか？ 本気ならで言ってるなら——」

「本気で言ってるよ」

みほの言葉を、杏が遮った。

「みんなに向き合ってるって建前で、百式ちゃんは誤魔化してるだけ。そうやって誤魔化して、自分の過去と向き合うのを諦めてるんじゃないな

いい？ みんなを使って戦車道をすれば、自分も戦車道をしてるって気になれるし？」

杏が戯けたように小馬鹿にした笑みを浮かべる。

流石に和麻も、杏のその話を許容出来なかった。その言葉は、和麻を否定している言葉だ。

確かに、今の和麻には聖グロリアーナと向き合う勇気がない。しかし自分の戦車道を諦めたなど思ってたなどいいない。

自分に向き合う日が来ることなど、嫌でも理解してる。それと向き合わなければならぬことも和麻は理解している。

それは和麻の内面を考えれば、当たり前だ。自分のトラウマの原因たる学校と向き合えなど、簡単には出来るわけがない。

しかし戦車道を続けるには、そのトラウマと向き合うことをしなければならぬ。

それを杏は、諦めていると言い切った。だから大洗の戦車道チームを使って、自分も戦車道をしているという気になって自己満足をしているのだと。

「……………」

みほは一瞬、杏の言葉に呆気に取られた表情を見せた。しかしその瞬間、彼女は目を鋭くさせていた。

「…………訂正してください。今すぐ、かずくんに謝ってください」

非難の目をみほが杏に向けていた。

和麻はみほの人柄を知るが故に、啞然としていた。

ここまで誰かに怒りを露わにしているみほなど、見たことがなかった。

「嫌だよ、だってする必要がないじゃん？」

「今すぐッ！ かずくんに謝ってツツ!!？」

瞬間、みほが叫んでいた。声を荒げて、そして杏を睨みつけて。今度は杏が呆気に取られた。まさかみほが罵声をあげるなど思ってもみなかった。

みほが胸に両手を合わせて、強く握りしめながら強く叫んだ。

「あなたに、あなたにかずくんの何がわかるって言うんですか!?!? どれだけかずくんが辛い思いをしてきたと思ってるんですか!?!? あんな怪我までして！ すごく辛い思いをして！ 本当は戦車道をしたいのに諦めるしかなかったかずくんが戦車道を始めたことをこれ以上馬鹿にするのはやめてくださッ!!?!？」

そして驚いた杏は、静かにみほを見据えた。

しかしみほは、黙る杏に構わずに続けて叫んでいた。

「誰が見てもわかるに決まっています！ かずくんが私達をちゃんと見てくれてるって！ 辛い練習をさせても毎日ちゃんと全員を見てくれてることくらい、あなたにもわかるでしょ!?!？」

みほの目に、涙が溢れていた。

全員がその姿に、ただ何も言えずに見ることしか出来ずにいた。

その言葉に、和麻はただ呆然として。

みほを見つめる全員が、彼女の気迫に圧倒されていた。

「毎日毎日みんなの練習が大丈夫か心配してくれて！ 全員一人一人がどれくらい出来てるかちゃんと見てて！ 練習の計画も毎日考えてて！ これだけ私達に向き合ってくれてるかずくんを酷く言うのは——」

そこまで言って、みほは言葉を止めた。

地面に膝を落として、静かにみほは泣き崩れていた。

誰も駆け寄ることも出来ず、みほはただ泣いた。

先程までの気迫などどこにもなく、そこにはただ泣いている女の子しかいなかった。

そしてその姿に、ようやく周りが動き出した。

「会長、言い過ぎですよ」

小山柚子が、みほに駆け寄っていた。

そっと柚子がみほを抱き寄せると、みほは声を殺して泣き続けていた。

「流石に私達も、西住さんにあれだけ言われたら動くしかないな」

「そうぜよ、黙ってるわけにはいかないぜよ」

エルヴィンとおりようがみほと杏の間に立つ。そしてカエサルと左衛門佐も同じように杏の前に立っていた。

「会長、先輩のこと悪く言うのはそこまでにしてください！ 先輩は私達のために頑張ってるんです！」

梓が一年生メンバーを連れて、杏の前に立ち向かった。

一年生メンバー六人が、まっすぐに杏に対して非難の目を向けていた。

「みほさんがあんなに怒るなんて思いませんでした。私も、みほさんと同じように怒ってます」

「みほ、大丈夫？」

「みほ殿！ 私もみほ殿と同じ気持ちですよ！」

「私もアイツは気に食わないが、他の人にアイツを貶されるのも気に食わない」

華、沙織、優花里、麻子がみほに寄り添う。

「私達も行きたいのに！ でも行くと百式が暴れるかもしれない！」  
「キャプテン！ ここは根性で我慢です！」

そして和麻を抑えるバレー部も、全員と同じ気持ちでいた。

杏に対して、全員がみほを——和麻を庇っていた。

静かに杏を見据える全員に、杏は驚きながらも「ふーん」と戯けていた。

そんな杏に、そつと桃が歩み寄った。そしてどこか申し訳なさそうに、杏に語りかけた。

「会長、流石にもう良いでしょう。やり過ぎたみたいですよ」

その言葉に、杏が桃に振り返る。

杏を睨む全員を一瞥して、杏は「……そつか」と納得したように息を吐いて肩を落とした。

気付くと、先程までの小馬鹿にしていた顔はなく、杏は困ったような顔を見せて——頭を全員に下げている。

「……みんな、ごめんなさい。言い過ぎた」

今度は全員が目を大きくしていた。

先程とは違う杏の態度に、全員が困惑した。

そして杏が歩き出す。前を塞ぐ人達が杏を避けて、彼女がみほのところへと向かう。

そしてみほの前に立つと、杏は座り込むみほと目線を合わせるようにしゃがみ込んだ。

顔を俯かせて、柚子の胸で静かに泣くみほに、杏はその姿を見つめて「西住ちゃん、ごめんね」と呟いた。

「百式ちゃんがみんなに信頼されてるのは知ってたよ。でもね、私は確認したかったんだ。百式ちゃんの昔のことを知っても、みんなが百式ちゃんを見る目が変わらないことを……その意味、西住ちゃんならわかるでしょ？」

柚子に抱き寄せられながら、みほが頷いた。

「だから無理にでも私からそれを話そうとしてた。百式ちゃんが怒るのは当たり前だったよ。でも西住ちゃんが一番怒ったのは、正直意外だったけどねえ……」

困った顔で杏が苦笑いした。本人も、和麻との口論になることを予想していたのに、まさか別の人間が一番怒ると思っていなかったからだった。

「百式ちゃん、分かってるでしょ」

そして杏が和麻に切り出した。

和麻はその意味を理解していた。むしろ理解していたからこそ、それを危惧していたのだから。

「俺が戦車道なんてしてたからあんなことになったんだ。みほ達に言ったこともある。俺が戦車道をやると、誰かが傷つくと思われる。だから男が戦車道をやるのが間違ってると思われてもおかしくない」

和麻は誤魔化しきれないと判断して、吐き捨てるように言い捨てた。

その態度に、杏は呆れた表情を浮かべた。

「そう、それが間違ってるんだよ。百式ちゃん」

「……は？」

杏の返答に、和麻は思わず訊き返した。

杏は和麻のその反応に更に呆れて肩を落とすと、周りにいる全員を一瞥して、和麻を見つめた。

「馬鹿なんだよ、百式ちゃんは。自分に正直になってたくせに妙なところが変に偏屈になってさ、そんな過去なんて『私達には関係ない』じゃん。男が戦車道すると誰か傷つく？ 聖グロで起きた話をこの学校に持ち出すのが、まず大きな間違い」

「人のことを馬鹿にした上に、何を言い出すかと思えば……」

「間違ってるのは自分って、まだ気づかないの？」

「……何が言いたいんだよ、アンタは？」

杏の話に、和麻はなにひとつ理解が出来なかった。

意図も意味も理解できない話を語られたところで、和麻は杏の呆れた態度が酷く鼻についた。

「百式ちゃんの過去話を聞いても、この子達は今までと何一つ変わらない信頼を百式ちゃんに向けるのは分かったよ。じゃないとあんなにハードな練習なんて真剣にしないし……そもそも『そんな昔話を聞かされても、百式ちゃんは百式ちゃんじゃん？』」

杏は眉を寄せる和麻に、ため息をひとつ漏らした。

「私がこの子達に百式ちゃんのことを話そうとしたのは、私が確信を持てたことをちゃんと確認したかったことと……百式ちゃん自身に気づいて欲しかった」

そして杏は和麻にどこか寂しげな目を向けて、告げた。

「百式ちゃん、人の『目』を気にし過ぎだよ。他人からの視線に敏感になり過ぎてるから、そうだった。百式ちゃんがもつと自分に自信を持っていれば、そうはならなかった」

「……意味がわからない。もつとハッキリと言え」

杏の言い回しに、和麻は苛立ちを感じていた。

他人の目——視線に対して和麻は敏感になっていると、杏は説いた。

しかし和麻からすれば、それは当然と言えた。

男である人間が、乙女の戦車道を嗜んだことによる必然の話だ。

有無を言わない批判を受けた。一方的に責められた。それを和麻は身をもつて経験している。

それ故に、杏は和麻が「そうだった」と語っていた。

「誰だって人に好き嫌いはある。百式ちゃんはなにひとつ『諦める』必要なんて、たったのこれっぽっちもなかったんだよ」

その言葉は、和麻の紛れもなく神経を逆撫でしていた。

何を理解して、理解したつもりでその言葉を口にしたのかと。

和麻に諦める必要はなかったと、それは彼の過去の選択を否定する言葉だ。

人生を捧げていた戦車道を諦め、仲間と共にいることを諦めた選択をした和麻の過去を杏は否定していた。

そして杏は和麻に語った。和麻の過去の選択を否定したその意図を。

「少し前に進めた百式ちゃんが更に前に進むには、まず『それ』を理解しないと意味がない。この意味がわからないから、百式ちゃんは向き合っているつもりでも何も向き合えてないんだよ」

しかしその話に、和麻は何を話しているかわからなかった。



和麻には、杏の話している話の根元になる部分が理解出来ていなかった。

何を理解していないと言うのだろうか？

何をもって、向き合えていないと言い切るのか？

和麻には杏の話す内容自体、理解の範疇を超えていた。

呆然とする和麻を見て、杏は彼が自分が語る意味を理解していないことを察した。

だからこそ杏は言わなければならないと思い、彼にハッキリと告げた。

「今の百式ちゃんだから、ハッキリ言うよ。その向き合ったつもりでずつと抱え込んでる聖グロのことなり、男が戦車道をするとかの、くだらない」考えはやめちやいなよ」

#### 4. 前金を受け取るなら、それは承諾

「くだらない……？　くだらないって？　俺の……俺を……　くだらない”　って？”」

杏の一言は、和麻を静かに激怒させた。

くだらない。そのたった一言で、杏は和麻の「想い」を否定した。

男が戦車道をする意味。聖グロリアーナ女学院での出来事。和麻が戦車道の道を閉ざした理由のすべてを杏は簡単に否定していた。

和麻が抱いた願いを。自分の積み上げた戦車道の全てを投げ捨て、聖グロリアーナ——「彼女達」の道を裏切る形で守ろうとした想いを。

『お願いします……お願いだから……あの人達から、大好きな戦車道を奪わないでください。俺の全てを差し出します……俺の所為で、俺の所為で……あの人達から戦車を、将来を奪わないでください』

脳裏に焼き付いている「あの日」が、和麻の頭に過った。

白い部屋。身体中を包帯で包まれた身体で壊れたブリキのように動き、ベットから崩れ落ちてもおなほ、床に額を擦り付けて懇願した日のことを。

満足に動くことすらままならなかった身体をがむしやりに動かし、和麻は懇願した。

尊敬する母に、願った。

自分の全てを捨ててでも、守ろうとしたモノがあった。

その願いで、あの人達の戦車道は守られたのだと思って。

『どうしてアンタなんか戦車乗ってるの?』

『私達、〃乙女〃の戦車道を辱めないで頂けるかしら?』

『操縦が少し出来るくらいで男が戦車に乗れると思ってるの?』

色々な言葉を向けられた。

様々な人達から、様々な侮蔑を、蔑まれる言葉を。

その言葉を〃受け入れ〃て、なおも前に進もうとした想いを。

その選択は間違っていないと、そう願った。

男が戦車に乗る〃意味〃を受け入れて、進んだ道。

自身の道を〃裏切る〃形で捨て、守ろうとした彼女達。

その和麻が抱いた想いを。杏は全て否定したのだ。

「ここまで人に舐められたのは……本当に久しぶりだ。ここまで頭に  
来たのは……初めてだ」

未だかつてない怒りを、和麻は感じた。

自分のことをどんなに否定されても、すべて受け入れていた和麻の  
心がこの時、確かに異を唱えていた。

その言葉を、決して受け入れることなどできない。受け入れること  
など、許してはいけないのだと。

「百式……!?」

磯部が目を見張った。

バレー部の四人で抑えているはずの和麻が、四人を引き摺って動い  
ていた。

女子四人の体重を引き摺っている和麻に、満足に動くことなど到底  
できない。

例えば人一倍鍛えていたところで、男子高校生が女子高生四人分の体  
重を抱えた状態ではすり足で動くのが精一杯だった。

「お前……調子に乗るのもいい加減にしろよ？ そのふぎけた顔を泣き顔に変えてやることだつて簡単なんだからな？」

それでも、和麻は杏に迫ろうとしていた。

怒りに満ちた瞳で、その表情を歪ませていた。

しかし杏は怒り迫る和麻に、呆れたように溜息を漏らした。

「ほら、また逃げた。だから百式ちゃんは気づかない」

「俺はもう逃げてない！ 自分の気持ちだつて分かつてる！ お前に俺の何が分かるつて言うんだよ!?!?」

逃げないと決めた。もう一度、自分の失った戦車道を取り戻すと決意した。

だからこそ、和麻は大洗で戦車道をしている。断じて大洗の戦車道チームを利用して、戦車道をしている気になってなどいないと。

「そうじゃないんだよなあ、もっと根本的なモノだつて」

しかし杏は苦笑いして、和麻に呆れた目を向ける。

根本的に、二人の会話が噛み合っていないかった。

杏の言い分、というよりも彼女自身が真に伝えようとしていることを和麻は一向に理解出来ていなかった。

対して、和麻も自分自身と彼のトラウマと言える事柄すべてを否定されで激怒している。

互いに噛み合わない会話をしていると杏は気づく。そしてまた溜息を吐いて、和麻に問うていた。

「じゃあ訊いてあげる。百式ちゃんには、聖グロの人達に会える？ いや、百式ちゃんにはこう言ったほうが良いか……」

そう訊いた後、杏は少し考えて、再度問うた。

その質問に、その質問の仕方に、和麻は顔を顰めていた。

「百式ちゃんはさ。自分を信じてくれた人達に、もう一度ちゃんと会える？」

「……な、に？」

その問いに、和麻が思わず訊き返していた。先程までであった怒りが忽然と薄れるほどに。

その質問の意味を理解し切れず、そしてどうして杏は「聖グロ」ではなく、「自分を信じてくれた人達」と言い直したのかと。

「会える？ 会えない？ どっち？」

続けて、杏が問う。

その質問に、和麻は会えると答える「はず」だった。

「そんなの決まってる！ 俺は——！」

しかし和麻の口から、その言葉は出てこなかった。

「ほら、やっぱり思った通りだった」

「違う、違う……俺は、俺は——！」

杏が納得したような表情を見せる。しかしその事実が一番動揺したのは、和麻自身だった。

その言葉を和麻が口にしようとした途端、口が全く動かなかった。自分の道を見つめ直す先には、自分の戦車道を塞いだ原因の一端である聖グロリアーナの人達と会うことなど分かりきっている。

決めていた筈だ。自分に嘘をついていたことを謝り、そして戦車道をしたという気持ちを伝えると。

だからその時までには考えないようにしていた。その時が来たら、

ちやんと向き合おうと決めていた。

みほに自身のしがらみと向き合うことを告げたように、自身にも言い聞かせたはずだ。

なのにどうして、そのことを口に出ることが出来ない？

そのことに、和麻は自身を理解出来ていなかった。

「そう、それが百式ちゃんの気づかなかったことだよ」

そうして杏が目を伏せて、告げた。

そして続けられた杏の言葉に、和麻は言葉を失った。

「百式ちゃん。君はね、人から『嫌われること』を必要以上に人一倍怖がってるんだよ」

「えっ……？」

杏の言葉を聞いて、和麻は背筋が凍った。

この感覚を、和麻は一度感じたことがあった。

言葉を失い、まるで心臓を鷲掴みにされたような感覚。

冷泉麻子との会話で、過去に一度この感覚を和麻は体験したことがあった。

まさしくこれは、和麻自身ですら理解していなかった自身の事実を告げられた瞬間だった。

「いつからかは知らないけど、百式ちゃんは他人すら、更には自分も信用してなかった。自分を信じない人が自分を信じてくれた他人を信じるのがなんて無理。信じられる人達を信用しないで、他人の目の色だけ優先したから歪んだだけ」

そして杏は語った。和麻が理解していない、自身のことを。

和麻は誰も信用していないと、故に自分自身も信用してなかったと。

「自分に自信を持って、仲間を信用すれば——百式ちゃん折れなかった。聖グロの件も、自分を信じていけば怖くなかったんじゃない？」

それは和麻のトラウマを抉る言葉だった。

自身の道を塞ぎ、そして聖グロリアーナの戦車道を生かす為に選んだ和麻の選択。

それを否は端的に必要な選択と言い切っていた。

和麻が自分のことに、戦車道を「男」がすることに自信を持っていれば——そして自分を信じていた仲間を信用していれば、そんな選択をする必要はなかったのだと。

「ふざけるなッ！ お前に何がわかる!?？ 俺がそれを選んだ意味が！ あの時の俺にはアレしかなかったんだよ！ 間違はなく聖グロの戦車道は「あの一件」で潰されるはずだった！ だから俺は聖グロからいなくなったんだ！」

和麻の話通り、聖グロリアーナの一件で確かに戦車道チームの解体話が確かにあった。

それを和麻は自身が「聖グロリアーナに元々居なかった」という強引な手を使って揉み消したのだ。

勿論、和麻だけで行った話ではない。戦車道連盟の蝶野亜美、百式流家元の百式一姫、そして聖グロリアーナ女学院など様々な人達関わって成り立った話だ。

しかしそれを現実として消せていないのが事実だった。記録としては消しているが、人の記憶からは消えていない。

故に噂が噂を呼び、聖グロリアーナの一件が戦車道界の裏では有名な話になっている。

今の和麻には知る由もないが、聖グロリアーナに数々の美名という名の悪名が付けられているのだから、あまりにも報われない。

自分の人生を注いだ全てを捨てた果ての結果が聖グロリアーナの戦車道を生かしても、和麻を信頼していた聖グロリアーナの戦車道メンバーの心にずっと消えない傷を付けているのだから。

「なら、なんで仲間と“それ”に一緒に挑もうとは思わなかったの？相談もなしに、勝手に全部一人で決めたのはなんで？」

和麻の叫びに、杏は即答で言い放った。

「もう悲しませなくなかった！あの人達が俺のせいで悲しい思いをするのが耐えられなかったんだよ！だから——！」

そこまで出て、和麻は言葉を止めていた。

そして和麻の目が大きく揺れていた。まるで何かに気づいたように。

『……でも、俺はみんなを悲しませることになる。そうなるくらいなら』

『あなたに戦車道をやめろなんて、その人達は一言でも言った？』

『それは……』

『それが答えよ』

蝶野亜美との過去の会話が、和麻の頭を過ぎった。

たったの一度も仲間から戦車に乗るなど言われていない。

仲間は誰一人も、和麻を責めることはなかった。

和麻の昔の仲間達は、一度も和麻を見捨てはしなかった。

そう、見捨てたのは、紛れもなく——

そして和麻は、今この時——杏の言葉の意味を全て理解した。

「違う……俺はそんなことを思ってたわけじゃない。俺は、あの人達を守りたかったから……だって俺は……」

先程まで暴れようとしていた身体が嘘のように力が抜け、和麻は顔



を蒼白にしていた。

誰に告げるわけでもなく、ただ一人でうわ言を呟いていた。

「でも、それを選んだ時点で……百式ちゃんは本当の意味で誰も信じてなかったんだよ。自分でさえも」

杏が向ける言葉が、和麻の心を抉った。

嫌われることを必要以上に、人一倍嫌っている。

自分をもっと信じていれば、自信があれば。

仲間を信用していれば、自分は折れなかった。

見捨てたのは、仲間ではなく自分自身。

聖グロリアーナの人達に、会う勇気がない。

自分を信じてくれた人達に、会う勇気がない。

どうしてだろうか？

そんなことは簡単だった。

百式和麻という人間は、こと戦車道に於いて、家族も、友達も、仲間も、誰も信じていない。

そして自分自身の心の奥底で見捨てた人達に、嫌われたことを心の底から怖がっている。

そのことを理解した和麻は、これまでにない焦燥感を感じた。

頭の中でひたすらに肯定と否定を繰り返す。

そして繰り返す心の矛盾に、和麻は言葉を失っていた。

「人から向けられる批判の目に耐えきれなくなつて、誰も信用しなくなったんだよ。きつと戦車道で名前が広まった辺りからじゃない？」

そんな和麻に、杏は静かに語り出した。

第三者から見た和麻の在り方。自分では到底理解出来ない、和麻自身  
の矛盾を。

「心の弱い人はね。自分と同じじゃない人や自分より優秀な人を外に

弾き出そうとする。だから百式ちゃんは色んな人達から弾き出されたんだよ。百式ちゃんに悪口言ってた人達、みんなほとんど戦車道してたでしょ？」

和麻が動揺している中で、可能な限り振り返る。

戦車道を和麻がしている以上、彼と関わる人達は全員戦車道をしていた。

向けられた侮蔑の言葉は、紛れもなく戦車道を嗜む女からだった。

またはその知人から、またはその友人から、否応なく酷評の言葉を聞かされた。

「それを振り払えなかった。その周囲の目をありのままに受け止めた。だから人を信用しなくなった。有名なスポーツ選手にありがちな話だねえ〜」

和麻は正面から「それ」を受け入れた。

自分が尊敬する人と同じ戦車道をしていることを誇りに思っ、男が戦車道をする批判を受け入れた。

「私が言うのもアレだけど、百式ちゃんレベルで世間から色々言われたら普通の人は潰れちゃうよ。でも百式ちゃんは潰れずに、それを振り払わずに抱えたままやって来たんだから、そこまで歪んだんだよ」

反発することなく、全ての酷評を受け止めた結果、次第に人に対して信用するということをやった和麻は見出せなくなっていた。

「誰かを信頼しても、信用はしてない。よくある言葉だけど、今の百式ちゃんにピッタリな言葉」

仲間として信頼していても、戦車道を嗜む乙女である以上は信用出

来ない。

その強迫観念を本人すら理解出来ない内に、和麻は心の奥底に植え付けていた。

そしてその強迫観念の発端たる自分自身ですら、和麻は信用出来なかった。

人間不信。それも歪んだ形で生まれた特殊なモノだった。

「だから百式ちゃんが前に進むには、その『歪んでる心』を治さないといけない。そうしないと、君はなにひとつ前に進めない」

「歪んでる？ 俺が、歪んでる？ 違う。俺は歪んでなんかいない、歪んでなんか……」

「じゃあ百式ちゃんが聖グロの人達に会えない理由は？」

杏の質問に、和麻が口を開こうとする。

しかし自身の心を整理し切れていない和麻に、その質問に答えられるわけがなかった。

何か話そうとしても、今話すことが間違えているとすら思えてしまう。

しかしそれでも考えて、様々な考えが巡るなか行き着いた答えは――  
簡単だった。

「俺は、あの人達に嫌われているのが怖かったんだ。これ以上悲しい想いをさせたくないと思って、勝手に聖グロからいなくなった。俺はあの人達を裏切った。信じていなかったのは、俺だった」

その答えを口にして、和麻は俯いた。

そしてその気持ちを理解しなければ前に進めることが出来ないという杏の言葉を真に受け入れた。

「だけど俺には、治せる気がしない。もうどうしようもない」

そして和麻は力無く呟いていた。

自分ですら理解していなかった気持ち、心の底に植えついた強迫観念を取り除くことなど到底不可能だった。

幼い頃から染み付いた心の在り方を、今になって変えることはできない。

和麻の在り方を変えるということは、和麻自身そのものを否定することになる。

全てを否定するということは、百式和麻という存在を否定してしまう。

「百式ちゃんがそのことにわかっただけで十分。その気持ちに気付いたなら、君はまた一歩前に進める」

杏が和麻に近寄る。そして和麻の眼前まで顔を寄せた。

その表情は、いつものように飄々と。そして確固たる芯の通った目をして、杏は和麻を見つめた。

「百式ちゃん、君には私達の大洗を全国大会で勝たせてもらわないといけない。私達は百式ちゃんの歪んだ心を捻じ曲げてでも元に戻す“お手伝い”をしよう」

「それは、あの時の続きか？」

以前に杏と生徒会で話したことを和麻は思い出す。

大洗の廃校を防ぐために和麻に戦車道をさせようとした杏との一件。

その時は、杏が大洗が戦車道をする理由を知る条件に和麻が大洗で戦車道をすることを承諾した。

和麻はその話のことを思い出して、呆れた笑みを浮かべた。

「そう、それが私が百式ちゃんに提示する条件。さっきの話は私の前

金だよ。前金を受け取った以上、君にはこの話に乗ってもらおうからね」

「前金……？ よりにもよって前金ときたか？ ははっ……馬鹿かアタタ？」

杏の話に、和麻が可笑しそうに笑った。

そしていつのまにか身体を抑えていたはずのバレー部達の力が緩んでいることに気づいた和麻が右手で杏の頭を掴んだ。

眼前にある杏の顔を睨みつけるように見つめて、和麻は面白そうに嗤った。

「良いだろう。お前の言う『前金』には十分なモンを貰った。お前達を文字通り、死ぬ気で全国大会で勝たせてやる努力をしてやる。みほ達の戦車道の先を見るついでだ。覚悟しろよ、角谷」

「良いねえ。百式ちゃんもその歪みきった心で聖グロから逃げようとしないでね？」

「うるせえ、聖グロには今週末会うんだ。逃げねえよ」

そう言い放って、和麻はバレー部に離れろと告げる。

啞然とした表情で和麻の言うことを聞くと、バレー部達はそつと和麻から離れた。

話を聞いていた全員が啞然とした顔で和麻と杏を見つめている。

和麻は全員を一瞥すると、

「そういうことだ。角谷が言うには、俺はお前達を信用していないらしい。だけど俺はお前達を信頼してるし、信用する。俺の過去話なんて幾らでも聞かせてやる……そうだな、俺がお前達に渡す『前金』はこれで良いか」

そう言って、和麻は全員を一瞥した。不思議と清々しい気持ちだった。

和麻が右手を顔に添える。そして顔の右側にある眼帯に触れると――彼はそれを勢い良く取り外した。

それは彼の意思の表れでもあった。

見るだけで思い出すのが不快で隠していた顔の傷跡。それを表立って出すことで、自分の気持ちと向き合うという意味を込めて。

和麻の顔を見たことがない全員が息を呑んだ。

変色した肌に、何か刺さった痕がある閉じられた右目。痛々しさが強く感じられる和麻の眼帯の下を、初めて全員が見た瞬間だった。

「これが戦車の砲撃を受けて出来た傷跡だ。俺の戦車道の全部をお前達に死ぬ気で教える。だからお前達……俺を信用してくれないか？

俺と戦車道をする気はないか？」

そして和麻が今一度、ここで全員に問い掛けた。

ある意味、自分への覚悟として。

新しい一步として、和麻は全員に問い掛けた。

「戦車道が楽しい、やってて良かったと思わせてやる。男で戦車道をやるやつのお話を聞く奴がいるなら、俺と戦車道をやるぞ」

全員が啞然として和麻を見つめる。

楽しそうに和麻が笑みを浮かべて、全員を見つめる。

そんな和麻に、ある一人が目の前に立っていた。

「その話、乗ったらお前を倒せるか？」

「麻子!?? こんな時でもそれ言うの!??」

麻子が和麻の前に立っていた。

沙織が目を大きくして呆れていた。

そんな麻子の話に、和麻は可笑しそうに笑った。

「俺を倒すか？ 心意気は良い、俺のところまで来れるなら来てみる。俺を倒すやつを俺が教えるか……馬鹿な話だ」

「ふん、お前を倒せるならなんだってやってやる。お前の腕、全部盗んでやる」

「やれるもんならやってみな」

和麻が右拳を麻子に向けた。

麻子が目の前に突き出された拳を見て怪訝な表情を見せるが、その意味を理解すると溜息を吐いた。

「お前、良い顔になった。だいぶマシになってるぞ」

「うるせえっての」

麻子が和麻の拳に、自分の拳を突き出した。

そして二人が同時に拳をぶつけると、和麻はニヤリと笑みを浮かべた。

「覚悟しとけ、明日から朝練だ」

「……終わった」

「だから考えなしに動かない方が良かったのに！」

麻子が膝から崩れ落ちた。そんな彼女に、沙織が後ろで頭を抱えていた。

落ち込む麻子を和麻は笑う。しかし和麻はすぐにその表情を元に戻すと、彼は足を動かした。

そしてある少女の前で立ち止まると、和麻は膝について少女を目を合わせていた。

「みほ、ありがとう。俺のために怒ってくれて」

小山柚子に抱きしめられているみほに、和麻は心から感謝の言葉を

告げた。

「……かずくん」

「そこまで怒ってくれるとは思ってなかった。だから、本当にありがとう。」

あと俺から、ひとつ質問して良いか？」

「えっ？ な、なに……かな？」

和麻が立ち上がると、中腰でみほへ右手を差し出した。

その手に困った表情をみほが見せるが、恐る恐る彼の手を握る。

和麻が座り込むみほを立ち上がらせると、彼はみほを見つめて告げた。

「お前には訊かれてばかりだった。だから俺から訊きたいんだ。」

みほ……この大洗で、俺と戦車道をしてくれないか？」

みほが目を大きくした。和麻の手を握っていない手で、彼女は口を抑えた。

目尻に涙を溜めて、みほが何度も頷いた。

「うん……うん……！ やる……戦車道！ かずくんが誘ってくれたんだもん！ 絶対にやる！」

「そっか、なら良かった。ありがとう、みほ」

和麻がその言葉をみほに告げた途端、みほが和麻に抱きついていった。

「良かった……！ 本当に良かったよお……！」

そう言って、みほが大きな涙を流して泣き出した。

泣き出したみほに少し慌てる和麻だったが、和麻は泣いているみほ



に「ありがとう」と言つて頭を撫でていた。

せめて落ち着くまでは、胸を貸してあげよう。

この学校で一番心配してくれていた友人に対しての恩返しのひとつと思つて。

「良がっただでず〜！ びやくじぎどの〜！」

「もう泣かないの！ はい、ティッシュユ！」

「ありがとうございませ〜！ だげべどの〜！ ずび〜！」

空気を読まない優花里には、あとで拳骨でも授けよう。

そんなことを思いながら、和麻は泣き止まないみほの頭を撫でるところにした。

## 5. 勝つことに、負けることに、意味がある

大洗学園艦が茨城県大洗町に帰港するのは、先々月の二月以来だった。

先々月は学園艦の定期的に行われる資材補給の為に帰港していたが、今回は違う。今回は戦車道の練習試合を行う為の臨時帰港となっていた。

大洗町の飛び地として建造された大洗学園艦。

全長は七千六百メートル、艦内の居住者は三万人程度。

全体で約七キロという巨大な船を用いているが、この大きさでさえも他にある学園艦の中では「小さい部類」になるわけなのだが――  
さて、ここで大洗学園艦・大洗女子学園の話をしよう。

角谷杏が生徒会長として、つまり長として務める大洗女子学園・大洗学園艦。

生徒の自主性を重んじる為に、ここ大洗学園艦では生徒会長率いる生徒会が例年学園艦の運営を任されている。

学園長は勿論存在しているが、生徒会長に関しては学園長と同等の権限を有しているのが特徴的な学園艦である。

中学校と高校で通学する生徒数は各校約九千人ほど、計一万八千人が艦上にある町に、そして艦内に居住して通学をしている。

艦内の総住民三万人の中で学生が半数を超えているのが、この学園艦という名を体現している。

それもそのはず、大洗女子学園には八つの学科が存在しているのだから。

普通科から始まり、商業科や被服科、船舶科など学園艦での生活、そして運用する為の学科が存在している。

そうは言っても、これほどの大きな船を運用しているほとんどが学生というのだから驚きを隠しきれない。

加えてこの学園艦の運営を学生に任せているところも、十分に常識

外れと思えるが……この体制で長きに渡る歴史を作っているのだから不思議な話である。

「母港に帰港するのも、久々か」

大洗学園艦内にある甲板の一角にある公園で、和麻は学園艦から見えてくる大洗町を見ながら、小さく呟いた。

甲板の手すりに肘を置き、頬杖を突きながら和麻は次第に大きくなる陸上の小さな町を眺める。

別段、和麻には茨城県大洗町に思い入れはない。

生活必需品などについては学園艦内で事足りる上に、特に故郷でもない土地である大洗町の本土に上陸してまですることもない和麻には、当然のごとく思い入れが出来るわけもなかった。

そんな和麻が、今頃は船舶科の生徒達が艦内で大慌てになっているのだろうと内心で苦笑する。

学園艦が母港への帰港の為に船舶科の生徒達が様々な準備で、それこそ馬車馬のように走り回っている頃だろう。

先日の一件から聖グロリアーナ女学院との試合に向けて準備する為に、和麻はバイトを一週間程休んだ。

その点は学園長からの許可を得ている。もとより学園艦の存続に関わる案件なのだから、学園長も快く承諾していた。

バイト先の学園艦整備班からも快く休みを取ることを許していた。むしろやるからには勝てと背中を叩き出すほどの勢いだった。

和麻としては、自身が戦車道を嗜むことに何一つの疑問を持たれなかったことが意外であり、そして応援までされたことに戸惑ってしまったほどだった。

そんな艦内整備士達に後押しされ、船舶科の生徒達とも少なからず面識がある和麻としては、今日の彼女達の忙しさに静かに黙祷を捧げようと思うばかりだった。

本来なら和麻も駆り出される筈だが、勿論今日は休みである。

きつと次に会う時は小言のひとつやふたつ……いや船舶科の生徒数的に数百は貰うのだろう。

それを思うと顔が引き攣る和麻だったが、一度あの忙しさを経験している身としては……甘んじて受け入れようと力なく彼は肩を落とした。

「……かずくん？ 元気なさそうだけど、やっぱり聖グロの人達と会うのは緊張する？」

溜息を吐く和麻を、隣にいるみほが心配そうに見上げた。

見当違いなみほの気遣いに和麻は呆気に取られるが、彼は首を横に振って答えた。

「いや、そんなんじゃない。ちよつと考え事をしててな」

「そうなの……？ じゃあ、なにを考えてたの？」

「今頃、大洗の船舶科が大慌てで忙しいんだらうなって」

みほが目を点にした。そして彼女は可笑しそうに小さく笑っていた。

「ふふつ……かずくん、そんなこと考えてたの？ 確かに黒森峰に居た時も各地へ寄港する時は船舶科の人達すごく忙しそうだった気がする」

「少し前にバイトで手伝いに行ったことがあったんだ。あれは凄かった」

「そう言えばかずくんって前にバイトしてるって言ってたね。そんなに……忙しいの？」

そう問われて、和麻は少し考える素振りを見せる。

そして良い例が浮かぶと、一人頷いてみほに告げていた。

「みほも一回経験してみたほうが良いぞ。マウスにCV33で挑むのが楽だと思える」

「……遠慮しておこうかな。船舶科じゃなくて良かった」

和麻の話にみほが引き攣った笑みを浮かべた。

そんなみほを見て、和麻は思わずくつくつと笑った。

「まあその話はもういい。上陸したら忙しくなるのは俺達も同じだからな」

そしてそう告げると、和麻は真剣な表情を見せた。

「いよいよだね。試合」

みほがポツリと呟く。その言葉に、和麻は小さく頷いた。

「そうだな。あれから一週間くらいか……早いもんだ」

「……うん。でも多分、みんなは今日が来てくれて良かったと思ってるだろうけど」

みほが目を暗くした。どこか虚ろな目で虚空を見つめる表情に、和麻は首を傾げた。

「そんなにみんなは試合がしたかったのか？ やる気があるのは良いことなんだが……ならもつと練習をキツくした方が良かったのか……？」

みほの言葉に和麻が考える素振りを見せる。

しかしみほはすぐに和麻を慌てて制していた。

「絶対にやめた方が良いよ。多分、アレ以上キツくするとかずくん後ろから刺されるかもしれないよ?。」

みほが頬を痙攣らせて、和麻に話す。

そんなみほに和麻は首を傾げた。

「少なからず、練習試合を全員が望んだ結果だぞ?。聖グロと試合をする為には、アレくらいやらないと話にならないだろ?。」

和麻がみほに肩を落として淡々と答える。

そしてみほに呆れた表情を見せながら、和麻は溜息を漏らした。

「それにどれだけ俺が頭抱えてあの練習を組んだと思ってるんだ。朝練と昼から下校時間までの七、八時間程度の時間で一週間もない期間で試合が満足に出来るようにするには突貫作業で、文字通り死ぬ気でやってももうしかなかった。」

聖グロリアーナ女学院との練習試合までの期間は、僅か五日程度だった。

その間に全国強豪校と言われる聖グロリアーナ女学院と「勝つ」試合をすると言うのなら、それこそ鬼畜とまで言われる練習が必要になるのは必然と言える。

と言っても、その一番の荷を背負ったのは車長でも通信手でも装填手でもなく——砲撃手と操縦手なのだが。

「聞いた話だと……操縦手の人達には授業中まで参考書読ませたって聞いたよ?。」

みほが白い目で和麻を見つめる。

和麻には、みほのその言葉に心当たりがあった。

それは確か、聖グロリアーナと大洗の試合が決まった翌日のこと

だった。

『百式君……これ、絶対時間足りないと思っただけど……?』

小山柚子が震えた手で操縦手の参考書を握り締めていた。

和麻は、操縦手全員に数冊の参考書をあらかじめ渡していた。

実技だけでは理解できない部分、感覚だけではなく座学の部分で理解しなければいけない面があると和麻が思っただけの判断である。

しかしながら柚子達操縦手メンバーは、本来の学業と戦車道の実技だけでも現時点で柚子達は使える時間を全て使っていた。それこそ家でも参考書で座学の勉強をしている程だ。

だが和麻が全員に提示する座学のノルマが、明らかに時間が足りない判断できる目標となっていた。

柚子に続き、他の操縦手メンバー達が首を揃えて縦に振っていた。ただし、麻子だけは例外だった。その分、実技で悲鳴をあげることになるのは必然なのだが。

和麻はそんな操縦手達の訴えに、あっけらかんと答えた記憶があった。

『座学の時間がないなら作れば良いじゃないですか？ 戦車に乗る時間は限られています。家でやっても足りないなら、それ以外に戦車に乗れない時間を使えば良いと思いますよ?』

『え……? え、それってまさか……?!?』

察しがついた柚子が目を大きくする。

和麻はそんな柚子達に何食わぬ顔で答えた。

『時間の使い方は、それぞれ。今ある時間を試合まで、戦車道の為に有効に使わないと——俺達は試合には勝てませんよ』

確かに強要はしていないが、明らかに時間が足りないと判断して練

習が出来ない時間を使えば良いと論じた覚えが和麻にはあった。

和麻は眉を寄せると、困ったように頭を掻いていた。

「……仕方ないだろう？ 一番手間暇を掛けるのが操縦手なんだ。試合において一番作戦に左右する要因なのは、みほも分かっているだろう？」

和麻が同意をみほに求めるが、彼女は半目で渋々頷いた。

「そうだけど……流石にやりすぎ」

「……悪かったとは思ってるって」

それこそ、和麻は鬼と評されるまで練習内容を濃密にした。

かなり荒療治と言えるほどに、和麻は他校の生徒が見たら絶句する内容を組んでいた。

和麻も彼女達が嫌いななどという理由で辛い練習をさせているわけではない。

これも彼女達が決めた選択の結果であるのだから、和麻は彼女達に余計な慈悲を与えるつもりは毛頭なかった。

「本当かなあ……？」

半目で見つめてくるみほに、和麻は苦笑いしてしまう。

和麻の内心は、悪かったと思っても止める気はないのだが……それみほにはバレているのだろう。

明らかに先程の言葉を信じていない顔をするみほに、和麻は諦めて答えた。

「何度も言うが、悪かったとは思ってる。今日の為に本来よりかなり予定を早めただけだ。俺だって心を鬼にしてきたんだって」

「なら良いけど……」



みほが半信半疑で和麻を見つめる。  
和麻はみほの反応に困りつつも、話を続けた。

「まあ、全員が努力してあれだけの練習を乗り越えたんだ。勝ち負けはともかく、ある程度戦えるようにはなった」

和麻が見る限り、荒削りではあるが大洗女子学園の戦車道チームの戦力は当初に比べるとかなり上がっていると判断している。

勝ち負けを無視すれば、ひとまずは試合がまともに出来ると判断出来るくらいにはなっている。

「後は、試合でみほ達がどう頑張るかだ。そこからは俺が立ち入る部分じゃない。仮に俺が試合に入ったところで、話は一緒だ」

肩を竦めて和麻は気だるく語る。

みほはそう語る和麻に、口を尖らせた。

「かずくんが居れば、勝てるかもしれないのに……」

みほの返事に、和麻は眉を寄せた。

その表情は、僅かに怒りの色が見えた。

「みほからそんな話が出てくるとは……お前、分かかって言ってるだろ？」

「だってえ……」

みほが口を膨らませる。

みほの言いたいことが分かる和麻は、とりあえずは隣にいるみほの額を中指で軽く突いた。

「あう……」

「俺が居ても居なくても、結果は変わらない。戦車道は一人でやる武芸じゃないんだ。みんなで勝つ、それだけだ」

和麻の話に、みほは自分の額を撫でながら頷く。

仮に和麻が試合に入ることで戦力面が強化されたとしても、チーム戦である以上は全員で勝たなければならない。

和麻はそのことを重視している。一人で勝つ試合などないと、その考え故の発言だった。

「俺が試合に居れば勝てる。俺が試合中サポートすれば勝てる。そんな自惚れをする気なんて更々ないし、するつもりもない。チームで戦う競技なんだから、それに……今だけは勝ちに拘る必要もない」  
「えっ……っ？」

みほが目を大きくした。和麻の言葉に、思わず驚いていた。

「あれだけ試合で勝つ為に練習してきたのに、勝ちにかずくんがこだわってると思ってた」

「たったあれだけの練習で、歴戦の強豪校に勝てると本当に思ってるのか？」

本末転倒な言葉だった。今まで和麻は勝ちに拘る故に、大洗戦車道メンバーに辛い練習をさせているとみほは思っていたのだから。

「みほ、正直に言ってみろ。お前、勝ちにこだわってるか？」

唐突の問いに、みほが言葉を詰まらせた。

しかしみほは目を一度伏せると、正直に答えていた。

「ううん、私はどっちでも良いと思ってる」

「理由は？」

答えたみほに、和麻が重ねて問う。

みほはすぐに訊いてきた和麻に、妙な威圧感を感じて言い淀む。

しかし伏せていた顔を上げて和麻の目を見ると、みほはそんな気持ち  
ちが吹き飛んだ。

真剣な表情をしている。だがその表情は穏やかだった。

いつも練習の時に起こっているような怒った顔ではなく、真剣に自  
分と向き合ってくれているとわかる優しい表情だった。

みほはそんな和麻の顔を見て、自分も知らぬうちに質問に答えてい  
た。

「私はみんなと戦車道がやれたら、それで良いって思ってる。別に今  
は試合で勝っても負けても、みんなと戦車道が楽しいって思えば、  
私はそれでも良いって思ってる」

「良い答えだ。お前は、それで良い」

みほが首を傾げた。

まるで今までとは正反対の和麻の話に、みほは意味が分からなかつ  
た。

勝ち負けにこだわる必要がない。それはつまり練習を必要以上に  
する必要はないと言ってるようなものと、みほは受け取った。

「じゃあ、なんであんなに練習キツくしたの？」

「それはそれだ。あれだけの練習をするからこそ試合をする意味があ  
るし、みほの答えにも繋がる」

和麻の答え、その意図をみほは理解出来ずにいた。

眉を寄せるみほに、和麻は「みほには話しても良いか」と呟いた。

「戦車道をやるからには、楽しくないと意味がない。楽しいって思え  
ないことをやっても、つまらない。試合をするからには勝ちたい。当

たり前のことだ。負けたら悔しい、勝ちたかったと思うだろう。

勝ち負けを含めてみんなで戦車道をやって楽しいと感じられることが大事だと俺は思ってる。じゃないとやってる意味がない。

だから全員に勝つ為の練習を必要以上にしてきたんだ。勝てば自分達の練習に意味があつたと、負ければあれだけ練習したのに勝ちたかつたと思うだろう。

それを全部ひっくるめて、楽しいと思えば……結果がどうなつても、アイツらは勝手に伸びてくれる」

みほの思う戦車道の在り方と似ている考えだった。

みほは必要以上に勝つことへこだわることを疑問に感じている。

それは西住流とは真逆の考えである。

勝つこそがすべて。そう唄う西住流の在り方、そしてそれを受け入れることが出来なかつたみほが自然と考えた違う在り方。

勝ちと負けにこだわらない、自分の戦車道を見つけることをみほはこの大洗で見つけようとしている。

今のみほが思う戦車道の在り方を、和麻はほとんど口にしていたのだ。

「……アイツらには内緒だからな？」

そして和麻がそう締め括ると、気恥ずかしそうに頭を掻いていた。

「後は生徒会がうるさいから全国大会優勝を目指しているだけだ。練習試合を勝手に組まれたことは今でも腹が立つが、やるからには勝つ。勝ち負けどっちでも良いが、勝った方が嬉しいだろう？」

和麻は、大洗が戦車道をする本当の理由を知っている。

全国大会で優勝。それが大洗女子学園の最終目標だ。

だが今回は練習試合、勝つても負けても現状は問題はない。

故に和麻は、この試合で勝ち負けどっちでも得られるものがあると

判断している。

と言っても、やるからには勝つ。そう思っている一面があるのは和麻の性分とも言えるのだが。

「うん！ 勝った方が嬉しいもんね！」

その話を聞いて、みほは嬉しそうに頷いた。

やはりしっかりとみんなのことを考えてくれている。そのことが改めて再確認したみほは、思わず笑みを浮かべていた。

「そういうことだ。だからちゃんと『隊長』は頑張れよ」

「……そのことを思い出させないでよ、かずくん」

しかし和麻の口から隊長と聞いた瞬間、みほは肩を落として落ち込んでいた。

「作戦会議で決まっただろ？ お前がチームを引っ張れよ？」

「うう……なんで私、あの話受けちゃったんだろ……」

溜息混じりに、みほがボヤク。

昨日にあった聖グロリアーナ戦に向けての作戦会議で、試合の総指揮はみほになったのだ。

詳細は割愛するが作戦の内容を話し合った結果、みほが全体の指揮を取るようになった。

話の流れでそうなってしまった分、その責任がみほには少々重苦しいと感じていた。

「お前がやってくれるなら、俺も応援してる。だから頑張れ、みほ」

「うん……かずくんがそう言うなら、がんばる」

和麻に頭の上に手を乗せられ、みほが口を尖らせながらも頷く。

やりたくない気持ちが大いだが、和麻の応援に応えようと思う気持ち  
ちが半分半分と言ったところだった。

「……………？」

そして頭を撫でられてみほが和麻の顔を見上げると、みほは先程ま  
でとは違う和麻の表情があった。

遠くの海を見つめて、どこか不安そうな表情を浮かべる和麻に、み  
ほは訊いていた。

「ねえ、かずくん。本当に、大丈夫？」

その意味を和麻はしっかりと理解した。

つい、聖グロリアーナのことを考えていた。

読まれたと確信し、思わず顔が歪むが和麻は頷いた。

「……角谷にあれだけ言われたんだ。心底ムカついてタコ殴りにした  
いところだったが、〃本気の拳骨〃を一発で手を打った。みほを泣か  
せたし、俺に隠して勝手に色々やったことと俺に最大級の喧嘩売った  
罰だ。安いもんだろ？」

先週、杏に色々なことを言われたのだ。和麻に、もう逃げるとい  
うことはない。

そしてみほや和麻へ好き勝手にした杏には、勿論和麻は文字通り、  
〃制裁〃を与えていた。

「……確か会長、あの後しばらく蹲ってたよ。たんこぶ出来たって嘆  
いてたって聞いたけど」

「良い気味だ。角谷にはたまに痛い思いをしてもらわないと割に合わ  
ない」

余談だが、和麻の本気で振り下ろした拳骨は杏を涙目にさせる程の痛みを伴った。

杏の頭には小さなたんこぶが未だにある。治るまでしばらくは痛みが伴うが、和麻はそれを知ると嬉々として喜ぶだろう。

「さて、もうそろ着く時間だ」

「え？　もうそんな時間？」

和麻が腕時計を見ると、予定されている接岸の時間が近づいていた。

「あつ！　かずくん、あれ！」

その後、みほが海の手を指差した。

指の先を和麻が見遣る。その先にあるモノに、和麻は久々に見た“ソレ”を見て、懐かしそうに呟いた。

「アーク・ロイヤル型、聖グロリアーナ女学院学園艦。随分と久々に見るが……やっぱリデカイな、アレ」

海の手に見える小さな船。しかし数十キロも離れているのに見えるということは、それだけ大きい船ということだ。

もう目の前に聖グロリアーナ女学院が来ているのだと、和麻は改めて実感した。

学園艦専用栈橋への接岸予定時間まであと僅か、試合の時間が着々と近づいていた。

## 6. やることやって、テンション上げてこい

久々の帰港は、やはり混み合った。

大洗学園艦に住んでいるほぼ全員が大洗町へ向かう為に、学園艦から陸へと降りる。

まさか徒歩で降りる稀な人間は限りなく少ない。ほとんどの人間が上陸用に用意された専用のバスや自動車を使つて学園艦から陸へと向かう。

その為、帰港後の本土への住民の上陸許可が学園艦から出ると一斉に自動車が降りていくとどうなるだろうか？

まるでダムが決壊するように一斉に自動車が陸へと向かうこととなった。

結果、当たり前のように交通規制が行われた。警備員や警察の指示通りに、緩やかな速度で陸への上陸を全車両に促されることとなってしまう事態になった。

まさに大渋滞だった。緩やかな速度でゆったりと動いていくそんな大渋滞の波を、和麻はのんびりと本を読んで過ごしていた。

「わぁー！ 久しぶりの陸だ！ 私、陸に上がったら買い物したいなあ！」

本のページをめくりながら、耳に聞こえる沙織の声に和麻は呑気だなどと思いつつ溜息を吐いた。

IV号戦車の後方で座りながらページを一枚捲り、後ろから聞こえる沙織の声に思わず和麻は口を動かしていた。

「武部、嬉しいのは分かるが我慢しろ。買い物くらい試合が終わってからだ」

「ええ〜！」



「お前は何しにわざわざ大洗に帰港するか思い出して……」

頭を抱えなくなる気持ちを込めて、和麻が沙織にそう吐き捨てた。そんな和麻に、沙織は頬を膨らませていた。

「別に良いじゃん！　だって昔は学校はみんな陸にあったんでしょ？　良いなあ、私もその時代に生まれたかったよお……」

不満そうな沙織の嘆きに、和麻は何を今更と思うながら本のページを捲る。

その沙織の話は、実のところ和麻も理解できなくもないと珍しく同意したい気持ちだった。

学園艦の歴史については、和麻も昔に学校の座学で学んだことがある。

昔は全国の学校は全て陸の上にあった。しかし来るべき国際化社会へ向けて広い視野を持ち、世界に羽ばたく人材育成と生徒の自主独立心を養い、高度な学生自治を行うために海上で生活する為の学園艦が生まれたと。

そんな奇天烈なことを唱えた人間がいたらしい。和麻には全くもって理解が出来なかった。

しかしながら学園艦での生徒教育や経済効果は大きかったらしく、今の学園艦制度が一般化しようになったのだから、世の中は不思議だと思える。

「でも私は海の方が良いです！　気持ち良いし、星もよく見えるし！」

優花里の馬鹿な発言に関しては、和麻は聞き流すことにした。

能天気な優花里はいつものこと。少しの付き合いで、和麻は優花里の性格を少しは理解しつつあった。

「そう言えば……西住さんと百式さんは、まだ大洗の町を歩いたこと

はないんですよね？」

ふと、華がそんなことを二人に訊いていた。

思い返すと、和麻もそんな話を世間話で華にした覚えがあった。

和麻も大洗学園艦へ来てもう少しで半年というところ、その間にあつた数回の帰航で一度も陸に上がったことはなかった。

特に否定する話でもなかったたので、和麻は華の話に素直に頷いていた。

「ああ、歩いたことないな」

「うん、私も」

みほも和麻と同じように頷いていた。

そんな二人に、沙織は楽しそうな声色で応えた。

「じゃあ二人共試合終わったら、あとで案内するね！」

「うん、ありがとう。武部さん」

武部の提案に、みほが嬉しそうに返事をする。

しかし返事をしなかった和麻に、沙織がむくれた表情を作っていた。

「百式君！ 返事は！」

「……俺は遠慮しておく、試合が終わったら艦に戻る」

本に視線を落としながら、和麻が即答する。

沙織は和麻の反応が気に食わず、頬を膨らませる。そして彼女がIV号戦車の後方に座る和麻に近づくと、彼の手に持っている本を上から引き抜いた。

「あつ……お前、本をかえ——」

「百式君！　へ・ん・じ・はっ!?？」

和麻の声を遮って、沙織が和麻を睨む。

思わず、和麻が珍しくたじろいだ。

沙織に睨まれて、和麻は不本意そうに表情を硬くする。

こういう顔をしている沙織は、とてつもなく面倒くさい。それを和麻は理解していた。

おそらく拒否しても、沙織なら頷くまでしつこく訊いてくるのだろう。それも和麻には面倒だった。

拒否と了承を天秤に掛けて、自分への被害が大きくない方を考える。

そうしね肩を落とすと、諦めた表情で頷くことにした。

「まったく……わかった。だから本を返せ」

「うん！　それでよろしい！　というか百式君、こんな時でも整備の本読んでるの？」

「うるさい、人の読んでる本に文句言うな」

沙織に本を返してもらい、和麻が呆れる。

たまにだが、沙織がこういう気を使わない素の態度を見せることが多くなった気がする。そう素直に、和麻は思った。

日に日に面倒臭くなっていく、沙織の今後の対応はどうすれば良いか真剣に考える日も近くないかもしれない。

彼氏でも出来れば……いや、多分無理だろう。沙織にそういった出会いが来るとは和麻には色々な意味で考えられなかった。

「百式殿、顔に出ていますよ」

「そのデコ、また指で弾かれないか？」

顔を覗き込んで来た優花里に中指を構える。

それを見た途端、慌てて逃げていく優花里に和麻は呆れた笑みを浮

かべた。

そして和麻がようやく落ち着いたと思い、沙織から返してもらった本に視線を向ける。

しかしその時——今まで日向にいた和麻に、影が差した。白いペー  
ジが黒く染まっっていく。

ふと、和麻が上を見る。そして視界に入った船を見て、彼は少しだけ目を大きくした。

「……さて、ご対面。一年振りか」

目の前に広がる大きな艦。大洗学園艦と比べると二倍の全長を持つ、超巨大艦船『聖グロリアーナ女学院学園艦』。

間近に見て、和麻はまた近づいたような錯覚を覚えた。

いや、近づいたというより来てしまったという方が和麻には合っているのかもしれない。

もうここまで来て、逃げるなどあり得ない。和麻自身もそれを理解し、自身が逃げることを許しはしない。

しかしそうは思っていない、不思議と実感がわからない。こうして目の前に聖グロリアーナがいると分かっている。こうして目

試合が始まるまで、もう少し。

しかし和麻には、今は関係なかった。

どれだけ聖グロリアーナが近くにあっても、和麻にとって大切な人達がすぐ目の前に居ても。

百式和麻は“この試合が終わる”まで——あの人達に姿を見せることが出来ないのだから。



時刻は、午前八時になろうとしていた。

大洗女子学園と聖グロリアーナ女学院の試合開始時間は、午前八時から行われる。

戦車道連盟の公式審判が各校へ向けて、集合のアナウンスが会場に流れる。

実のところ戦車道の試合をするのは、面倒なのだ。学園艦内などで練習をする分には大した問題はないのだが、他校との練習試合となると話が違う。

まず場所、これに関しては“陸”を使わなければならない。

この条件の時点で、艦である学園艦は使用できない。

陸を使うということは、何処かの敷地を使うことになる。

つまりは、何処かの自治体から許可を得る必要があることになる。

今回は大洗女子学園の申請による親善試合という名目で、聖グロリアーナ女学院との試合が行われる。

大抵、試合を申し込んだ方の土地で試合が行われるのが通例である。

なので今回は大洗女子学園の本土である大洗町で試合が執り行われるわけだ。

大洗町で試合が行われるということは、つまりその町に住む住民から許可を得なければならない。

そして試合をする範囲を決め、住民が観戦できる発砲禁止区域を設定することを義務付けられている。

それに伴う交通規制や住民の立ち入り禁止の規制などで警備員の配置など、数多くの規則を守らなければならない。

加えて、試合開始時間を午前中から行う。これも通例の取り決めになっている。

戦車道の試合は、終了するまで時間が掛かる。大抵は数時間で終わるのだが、酷ければ数ヶ月などあり得る珍妙な事態もある。

正直に大人達が言うなら戦車道の試合で起きた被害を迅速に対応する為、というのが本音なのだが……

それは大人の事情、和麻達の知る由もないことだった。

「全員、整備は大丈夫か？」

和麻が大洗チーム全員に向けてそう告げる。

試合前の最後の車両点検だった。

勿論、全ての車両は和麻と自動車部のメンバーが細かくメンテナンスを行なっている。

しかし今までの練習で苦難を過ごしてきた戦車、愛着が沸くのが自然だろう。

試合で共に戦う戦車を試合前に自身で点検したいと思うのは、戦車乗りの性というものだ。

試合前日に和麻へ各チームの車長並びに各担当者達が、最後の点検をさせて欲しいと提案してきた。

その気持ちを和麻は十分に理解出来た。

和麻自身も、同じ立場ならば必ず同じことを言う自信があると答えられる。自分が運転する戦車の調子を自分で確認出来ないなど、和麻には考えられなかった。

もとより車両の構造については、和麻の指導の賜物でなんとか全員がある程度は把握している。車両の不備の確認等は問題なく行えると判断して、和麻はその提案を了承したわけだ。

和麻の言葉に、全員が声を揃えて大丈夫と返した。

そう聞いて和麻は頷くと、彼は全員に集合を指示した。

最終点検をしていた全員がすぐに和麻もとに揃い、和麻が全員を見渡す。

「最後の確認だ。全員、しっかり聞けよ」

全員が和麻の声に耳を傾ける。

そして和麻が続けた言葉に、彼女達は大きな声で返事をした。

「車長、作戦は覚えてるな？」

『はいっ！』

「りよ〜か〜い！」

車長に向けた和麻の言葉に、車長四人が声を揃える。そして遅れて杏が呑気に返事をした。

相変わらず、杏にはやる気が感じられない。和麻は溜息が出そうになった。

「次、装填手に通信手。色んな事態に備えておけよ？」

『はいっ！』

「良い返事だ」

装填手と通信手の返事を聞いて、和麻が満足そうに頷く。

「砲撃手、練習を思い出してちゃんと撃ってこい」

『はいっ！』

砲撃手の声に、和麻は「それで良い」と頷いた。

そして最後に残った操縦手達を一人一人の顔を見て、和麻は深く息を吸うと――

「操縦手ツ！ あれだけ練習してきたからには本気でぶつけて来いッ！ 試合でふぎけた運転してくるんじやねえぞツ!!? 舐めた運転してきた奴はタイムトライアル五十本だからなツ!!?」

和麻は全力で罵声を吐き出していた。

今までと違う和麻の声色に、全員が驚く。

しかし驚いたのは、操縦手を抜いたメンバーだけだった。

そして「いつものこと」かと理解すると、操縦手以外の生徒は呆れた顔を見せていた。

だがそれに反して、操縦手メンバーというと。

「操縦手ツ！ 返事はツ!!?」

『はいいいい！ 全力で頑張りますツ!!?』

麻子以外、全員が大きな声で和麻に返事をしていた。和麻はその返事に「良し！」と頷いた。

「で、お前……やる気あるのか？」

そして流れるように、和麻が麻子に近づき頭を掴んでいた。顔を近づけて、和麻が麻子を睨みつける。

麻子はそんな和麻に恐れもせず、淡白に答えていた。

「私はいつも通りにやるだけだ。気合も何もない、お前も私を舐めるのもいい加減にしろ」

「それだけ口が返せるなら十分だ」

頭を掴んでいた麻子の頭を軽く撫でるように叩くと、和麻が先程まで立っていた位置に戻っていく。

そうして和麻が全員を見渡して、小さく笑みを浮かべた。

「試合開始だ。全員、今までの練習の成果を全力を尽くしてこい。試合を全力で楽しめ、やることやってテンション上げてこい」

最後の締めと言いたげに、和麻が穏やかに告げる。

それを聞いた全員が不意を突かれた。

いつもと違う和麻の穏やかな声色に、全員が驚いていた。

和麻を見た全員が互いに顔を見合わせる。そして互いに頷くと、声を揃えて返事をした。

『はいっー』

その言葉に、和麻は満足そうに頷いた。



## 7. 珈琲と紅茶、どつちが良い？

スポーツとして行われる戦車道の試合は、とても礼儀正しく行われる。

それは誰もが思う常識とも言えることだった。

礼節のある、淑やかで慎ましく、凛々しい婦女子を育成することを目指した武芸ということから、非常に礼儀に厳しい。

挨拶、これがとても大事なものとして戦車道は扱っている。

まず試合を始める前、必ず主審の元に車長が集められ、そして車長の後方に出場戦車を配置し、各戦車の前に搭乗者を整列させる。

これは試合後も同じである。ただ違うのは試合前にいた戦車がないことだが、それは撃破なり破損をした戦車を整備する為のやむを得ないことと認識してほしい。

ともかく、試合前には挨拶をしなければならない。

大洗と聖グロリアーナ、この二校の試合が始まろうとしていた。

審判の待つ集合地点に先に集まった大洗チームから車長達が先に並ぶ。

そしてすぐに聖グロリアーナの戦車達が到着した。

大洗の保有戦車はⅠⅤ号戦車D型、38t戦車B/C型、八九式中戦車甲型、Ⅲ号突撃砲F型、M3中戦車リーの五両編成。

対して、大洗の向かいに並ぶ聖グロリアーナの戦車を見た車長達は、その車両達に目を大きくした。

聖グロリアーナが保有する戦車はチャーチル歩兵戦車Mk.Ⅶ、マチルダ歩兵戦車Mk.Ⅲ及びMk.Ⅳ、そしてクルセイダー巡航戦車Mk.Ⅲである。

聖グロリアーナ女学院では、主にチャーチルとマチルダを使用した強襲浸透戦術が使われる。クルセイダーはそれに加えた陽動や奇襲などで使われる。

今回の五両編成での試合。間違いなくチャーチル一両とマチルダ四両で編成されると大洗チームは予想していた。

しかし現時点で、目の前に立ち並んだ戦車達を見た大洗チームは僅かに動揺していた。

「……流石に、これはマズインじゃないか」

みほの右隣にいたエルヴィンが小さく呟いた。

「百式先輩の言う通りなら……かなりマズイですよね？」

そしてエルヴィンの更に右隣にいた梓も、同じように呟いていた。

「相手、やる気満々だねえ」

杏の話に全員が頷きなくなる表情だった。

みほも、聖グロリアーナ側で並ぶ戦車を見て僅かに目を伏せる。

真ん中にチャーチル歩兵戦車、そして両隣にマチルダが並び更に右端にもう一両のマチルダが並ぶ。

しかし左端にはマチルダではなく——銀色の装甲が煌めいていた。

クルセイダー巡航戦車 Mk. III。まさか本当に導入してくるとは、大洗は思いもしなかった。

先日の作戦会議で、和麻の話していたことが本当になるとは思いたくなかった。

「あと五分で八時になります。両校、整列してください」

そうして審判の声に、両校の車長が向き合って整列した。

赤いタンクジャケットを着た聖グロリアーナの車長が五人並び、そして向かい合うように白と緑の制服に身を包んだ大洗の車両が並ぶ。

八時になると同時に、審判からの合図と共に各校が挨拶をする。

そして各校が指定された試合開始地点に移動し、試合が始まる。

審判からの指示を待つ間、聖グロリアーナの一人の少女が口を開い

た。

「貴女達が、大洗女子学園でお間違いないかしら？」

凜とした、澄んだ声が響いた。落ち着きのある、綺麗な声色だった。その声を聞いて、その少女を見たみほは素直に思った。

非常に綺麗な人だと。

後ろで編んで纏めた綺麗な金色の髪に、蒼い瞳が印象的な人だった。

外国人のような整った顔立ちがそれを更に引き立て、可憐と評するに値する容姿だった。

とても日本人とは思えない。これで日本国籍で日本人なのだから不思議である。

クォーターかハーフと思える美少女と言える容姿に、みほは素直に見惚れていた。

「初めまして。私は聖グロリアーナ女学院の戦車道隊長のダーズリンと申しますわ」

そしてその少女が「ダーズリン」と名乗った瞬間——みほを含む車長全員が僅かに目を大きくした。

この少女が「あの」ダーズリンなのかと。

和麻が聖グロリアーナで共に戦った仲間であり、そして中学からの友人である人間。

最も聖グロリアーナで和麻との関わりが強い人間。つまりは、最も和麻に強い信頼を向けていた仲間。

そんな驚く大洗の車長達を知る由もないダーズリンが視線で大洗の車長五人を見渡す。

そしてダーズリンの前に立つみほを見つめて、彼女は微笑んで告げた。

「ところで……ひとつ良いかしら？ 私達聖グロリアーナは、あなた達に訊かなければことがあるわ。是非、答えて頂けるかしら？」

ダージリンが目を閉じる。

そして目をそつと開けて、大洗に問うた。

「——百式和麻さんは、そちらに本当にいるのかしら？」

「ッ——!?？」

その瞬間——みほの背筋が凍った。

文字通り、戦慄した。その目から感じる迫力が段違いで違った。その目を見た途端、みほはその凄味に圧倒されていた。

自身の姉のモノと同等の圧力。先程までの穏やかな表情を崩さず、僅かに細めたその視線に、みほは鳥肌が立つような気さえした。

「私達はその言葉を聞かされて、ここまで来たの。だから私達は問わなければならぬわ」

ダージリンがみほ達から視線を外し、彼女達の後方に並ぶ戦車等を見遣る。

そしてまた、ダージリンがみほ達車長五人を見ると静かに告げた。

「貴女達が私達に向けて、あのお方の名前を出した意味……分かっていて？」

強く灯る瞳に、みほはしっかりと理解していた。

聖グロリアーナに対して、百式和麻の名を出した意味。

まさしく宣戦布告である。一番出してはならない人間の名前を、大洗は出している。

自分が同じ立場なら、きっと会いたいと思うだろう。

色々なことを一人で背負い、そして勝手に消えてしまった大事な仲

間に、会いたいと思うだろう。

だからこそその名を出した意味を、みほは十分に理解していた。

「それが本当だというのなら、私達は貴女達に心の底から感謝を送ります。だけど、それが仮にも『嘘』だと言うのなら……私達は貴女達に果てのない怒りを向けることになりますわ」

感謝する旨を伝え優しい笑みを見せた後、後半を告げるダージリンの顔が正反対に歪んだ。

憎悪と嫌悪に歪んだ怒りの表情だった。しかし表情はお淑やかなはずなのに、目だけが告げていた。

嘘なら——絶対に許さない。

目が語っていた。

思わず後ろに下がってしまいたくなる。それほどにダージリンという人間が発する威圧に、慄いていた。

「さあ、答えてくださる？」

「さあ？ どうだろね？」

しかしダージリンに、杏が恐れることなく流暢に答えていた。

ダージリンが杏を見て、僅かに眉を寄せる。

だが杏はそんなダージリンにいつも通りに、そして茶化すように笑っていた。

「百式和麻がいるかどうか、教える理由はこっちにはないんだよねえ」  
「……私を本気で怒らせたいのかしら？」

はつきりとダージリンが嫌悪の声を発した。

この時、杏を含む車長全員が同じ思いだった。

こんな時でも、この人は揺るがないのかと。

呆れを通り越して、感心さえしてしまう。

杏の相手を煽る行為は全員の共通認識だが、まさか相手にまで同じことをするのかと。

しかしそんな四人の心中を無視して、杏は続けた。

「別にいく私達に答える理由がないってだけだよ」

「減らず口を……！」

目を吊り上げたダーズリンが僅かに声を大きくした。

今にも大声をあげそうなのを我慢しているのが見て取れた。

しかしその点は聖グロリアーナ女学院であるが為か、そこだけは押し留めたらしい。

「両校、静かに」

審判が、静かに窘めた。

ダーズリンがハツとした顔で、目を伏せた。

自身の行動を顧みて、ダーズリンが自身を咎めた。

そんなダーズリンに、杏が小さく笑った。

その顔を見た和麻が言うならば、その顔は間違いなく悪巧みを考える憎たらしい顔だと。

「ならこうしよう。私達に勝ったら、教えても良いよ」

杏の言葉を聞いて、今度は聖グロリアーナの車長達が啞然としていた。

ダーズリンもその一人、そしてその車長達を代表して彼女が少し間を置いて訊いていた。

「……私達が負けると思っているの？」

それは紛れもない自信だった。

黒森峰ならばともかく、戦車道を始めて間もない学校のチームが自分達聖グロリアーナに勝てると思っていることに啞然としていた。

「さあ？　勝負の世界は何が起こるか分からない。勝ちを確信してる人ほど、足元を掬われる。常識じゃん？」

しかし一切の揺らぎも見せない杏に、ダージリンが真顔で彼女を見つめる。

そこまでの自信がどこから湧いているのかとダージリンには純粹に疑問だった。

本来なら問い詰めてでも聞き出したいところ、そして大洗中を隅々まで探して百式和麻を見つけ出したい。

だがここで強行作に出たとしても、おそらくは百式和麻は出てこない。不思議とそんな気がダージリンにはした。

ダージリンが目を閉じて、静かに黙する。

「……良いでしょう。その言葉、忘れることないように」

その後、ダージリンが目を開くと、杏にハッキリと頷いた。

杏が楽しそうな笑みを浮かべる。みほ達が肝を冷やしていることなど我関せずと言いたげに。

ダージリンはそんな杏を真剣な表情で見つめていた。

「八時になりました。両校、これより現時点でいる選手の増員は認められません。よろしいですか？」

審判の声に、両校の車長が頷いた。

それを確認して、主審が頷くと——大きく宣言した。

「それではこれより、聖グロリアーナ女学院対大洗女子学園の試合を始める。一同……礼ッ！」

『よろしくお願ひします!』

「それでは両校、試合開始地点まで移動してください」

そして礼を見届けた主審が両校へ告げる。

両校の車長が戦車に戻ろうとしたところで、ダージリンが最後に言い残した。

「私達はどんな相手にも全力を尽くしますわ。サンダースやプラウダみたいに下品な戦い方は致しませんわ。騎士道精神でお互い……頑張りましょう?」

そう言い残して、ダージリンは立ち去っていった。それに続いて、残りの車長達が去って行く。

それを見届けて、みほ達も揃って自陣の戦車へと向かった。

「百式の言う通りになったな……こうなると話が変わってくる」

「あれ良いんですか? 先輩の頼まれた話と全然違うんですけど……」

「流石に私もあの空気じゃ言えなかつた……」

「西住さんは悪くない。あれは私も無理だ」

「百式先輩と同じくらいあの隊長さん、すごく怖かったです」  
「かずくん、本気で怒るともつと怖いよ」

戦車に戻る最中、エルヴィンがボヤいた。

エルヴィンの呟きに、みほが頷く。

同じように梓も、不安そうに頷いていた。

「こう来なくっちゃ、面白くないじゃん?」

だが杏の呑気な発言に、三人が頭を抱えたくなった。

間違いなく、聖グロリアーナは潰しに来る。



そのことを分かっていてそう話す杏は、どうしようもなく一線を超えている。

もし和麻なら杏の頭に拳骨のひとつでも落とすだろう。

作戦会議の時にした和麻との約束を、こころも極端に守る杏に全員が呆れて溜息を吐いた。



戦車の上で各校の戦車が試合開始地点に向かうのを眺めていた。

待ちに待った試合、それも弟分が育てたチームが戦うというのだから楽しみで仕方ない。

蝶野亜美は朗らかな笑みで、丘の上から見える設置モニターと会場を見渡した。

「……蝶野さん」

ふと、声を掛けられた。

その声に亜美が振り返ると、そこにいた顔に嬉しそうに微笑んだ。

「和麻くん、こっちに来たの？」

和麻がこの場にいることに、亜美は少しだけ驚いた顔を見せた。

「ええ、大洗の方にいると聖グロのメンバーが来そうですから」

「……まだ会ってなかったの？」

亜美の怪訝な表情に、和麻が困った表情を作る。

亜美に隣を指差された和麻が、彼女の隣に座る。

そして亜美から向けられた言葉に、和麻は言いづらそうに答えた。

「ええ、まだ会ってません。色々理由はありますが」  
「そうなの？ 訊いても良いかしら？」

和麻の返事に疑問を抱いた亜美が素直に訊く。  
和麻はそれに頷いて、恥ずかしそうに答えた。

「ようやく俺もあの人達に会う決心がついて大丈夫と思ってるんですが。それでも少し緊張しまして……少しだけ待ってもらってるんです」

「それ、聖グロの人達知ってるの？」

「ええ、あらかじめ伝えるように頼んでいます。試合が終わったら、俺は貴女達に会いますって」

亜美がその話嬉しそうに表情を緩めた。

隣に座る和麻の肩を叩くように掴むと、そのまま頭を雑に撫でた。

「そう！ なら聖グロの子達も試合が早く終わるように頑張って戦うでしょうね！ 貴方に会いたがってるわ！」

「なら良いんですけど……本当に会って良いのか不安なんです」

「そんなこと言うんじゃないの。胸を張って会いに行きなさい」

額に皺を寄せる和麻に、亜美が和かに話す。

和麻もまさか杏が勝手に話をややこしくしているとは、夢にも思っていないだろう。

和麻は亜美に頷くと、亜美に訊いていた。

「きつと怒られるんですかね？」

「ええ、怒るわ」

「殴られるかもしれないですよね？」

「私なら、一発キツイのお見舞いするわ」

「……そりゃ、こわい」

和麻が苦笑いする。

どこか肩の重荷が落ちたような和麻の表情に、亜美が目尻を下げた。

前に会った時の重苦しく、そして歪んだ表情ではなく、今は色々なモノが落ちた子供のよような表情。

そんな和麻が、亜美にはようやく自分の記憶に近づいた顔になったと思った。

まだ肩に力が入っているようだが、きつと聖グロリアーナの子達に会えば変わるのだろうか。

色々なモノを取り戻そうとしている和麻が弟のように愛おしく、亜美は素直に嬉しかった。

「じゃあ私と一緒に試合見る？」

「ええ、ご一緒させてください」

「なら飲み物なにかいるかしら？　珈琲と紅茶、どっちが良い？」

亜美が茶化すように和麻に訊く。

和麻は呆気にとられたが、苦笑して答えた。

「珈琲でお願いします。俺はまだ紅茶を飲めない」

首を横に振って、和麻が珈琲を選んだ。

——自分が紅茶を飲むなら、あの人達とでなければ和麻はそう思い、亜美に言った。

亜美もその意図が分かったのだろう。戦車の中から亜美が缶珈琲を和麻に放った。

「紅茶、美味しいのが飲めると良いわね」

「ええ、そうなると良いです」

缶珈琲のプルを開けて、和麻はそう呟くように言った。



気づけば、試合開始地点に到着した。  
後は試合が始まるのを待つだけだった。

「アッサム、久々の大仕事。頼んだわよ」

試合開始の空砲の合図が鳴るまでの間、ダージリンがアッサムに車内無線でそう語る。

そうすると無線の向こう側から、アッサムの声が響いた。

『勿論、一年ばかりのブランクですが、問題ありません。試運転は既に終わらせています』

「そう？ 向こうはやる気満々だったわ、貴女も一泡吹かせられるかもしれないわよ？」

思いもしていない軽口をダージリンが叩く。

アッサムのお淑やかな笑い声がダージリンの耳に届いていた。

『仮に本当に百式様が居て、あちら全員の操縦手が百式流を使えるか  
思っただけ強気になるのは良いですが……』

アッサムの声が止まる。

ダージリンはその時、分かった。

珍しく、アッサムが怒っている。ローズヒップを嗜めるような怒りではなく、本気で怒っている声だと。

『百式流の “一端” を使える人間が貴女達だけではないことを、忘れて頂きませすわ』

間を置いて、アツサムが告げた。

そして次に出てきた台詞に、ダージリンは思わず笑みを浮かべた。

『あの方の言葉を借りるなら——やることをやってテンションを上げてみませすわ』

そこまで言われて、ダージリンは我慢出来なかった。

口に手を添えて、ダージリンがお淑やかにお腹を抑えて笑う。

そして一通り笑うと、ダージリンは穏やかな声色で言った。

これから戦う仲間に、そして今から駆ける白銀の馬に乗る乗り手に向けて——一言告げた。

「アツサム、期待してるわ」

『ええ、期待してください』

それを最後に、アツサムが通信を遮断した。

ダージリンが無線機を元の位置に戻す。

準備は全て済ませた。

勝つための作戦は考えている。

勝つ以外に、選択肢はない。

騎士道精神で、優雅に、勝ちを掴み取る。

それが聖グロリアーナの戦い方なのだ、あの方に見せる為に。

「和麻さん、隠れていても私達は必ず貴方を引きずり出すわ」

ダージリンが呟く言葉、それをオレンジペコはどこか不安そうに見つめていた。

## 8. 追う者、追われる者

戦車道の試合では、互いに決められた試合開始時点から試合が始まる。

尚、開始地点は両校共に試合開始直前まで知らされることはない。それは試合での不正行為などが行われないうようにするための規則ということ周知されている。

試合開始地点を知った状態では地形などを予め理解し、各校で必要以上に戦術の偏りが生まれることか過去にあった為、平等にするために定められている。

今では、それを見越して試合会場での箇所を指定されてもいいようにするのが戦術に特化した学校の基本とも言えるようになってある。

と言っても、どんな場所から始まったところで「呐喊」で統一する稀有な学校もあるから、その点は各校それぞれという話。

今回の試合、大洗対聖グロリアーナ。この試合は殲滅戦で行われる。

予め定めた旗車両を撃破された時点で勝敗の決まるフラッグ戦ではなく、自陣の全車両が撃破された時点で勝敗が決まるルールだ。

果たして、試合開始の空砲が鳴り響き、大洗女子学園と聖グロリアーナ女学院の試合開始後の立ち回りは、至って平凡だった。

試合開始後、各校が接敵するまでは遅くて約二十分程度。

試合が始まって十分後。岩山地帯を走る聖グロリアーナ女学院の戦車達を、岩陰から見届ける二名がいた。

双眼鏡を覗き込み、岩山地帯を右から左へ走る聖グロリアーナをみほは視認した。

「マチルダ三両、チャーチル一両、クルセイダー一両前進中」

みほの覗く双眼鏡の先には、旗車両のチャーター車を中心に両側に各二両並び、三角を描いた魚鱗の陣で走行するのが見えた。

その陣形に、優花里が感嘆の声を漏らしていた。

「流石……綺麗な隊列を組んでますね」

「うん。あれだけ速度を合わせて、隊列を乱さないで動けるなんです  
ばっ」

優花里の言葉に、みほは素直に頷いた。

こと戦車において、隊列を崩さず、一定の速度で周り合わせて動くことは並大抵のことではない。

操縦手は前の限られた視野しかないと、車長の指示を文字通りの確に実行しなければならぬ。そして速度を一定にして走行し続けるのは、非常に難しい。

操縦手の僅かなミスでさえ戦車はそのまま動き、隊列を乱す。

それを十分に理解しているみほは、そのことに素直に感嘆した。

「それにあのクルセイダー、多分すごく上手い人が乗ってる」

特に、マチルダとチャーター車と並んで走る右端のクルセイダーにみほが思わず目を大きくした程だ。

マチルダとチャーター車の不整地での速度はほぼ同じ。よって隊列を組んで走ることは、ある程度難易度は下がる。

しかしクルセイダー巡航戦車 Mk. III の最高速度はリミッター付きで四十三キロを叩き出す。不整地では速度がかなり下がるが、それでもマチルダとチャーター車とは出せる速度が違う。

それなのにみほが覗く双眼鏡の先で走る隊列で、クルセイダーがそれを苦とも言わぬように並列して走行していた。

「確か、クルセイダーって……速い戦車でしたよね？」

「うん。だから普通に運転すると簡単に速度を合わせられない。すご

く操縦が上手いか、戦車の中を弄らない限り無理だと思っただけ……」

優花里も、みほと同じようにクルセイダーの走行に疑問を持つ。

みほの話通り、普通なら速度を合わせるのは難易度が高過ぎる。安易に考えるなら、クルセイダー自体に速度を意図的に下げる仕様になっていると思うのが自然だろう。

しかしクルセイダーにそれを行う自体、あり得ない。速度を強みとする戦車をそのような仕様にする意味がない。それをするくらいなら、クルセイダーではなくマチルダを出せば良い。

——ということとはつまり——

「あのクルセイダー、かずくんの言う通り要注意」

「ですね……どう動くか分かりませんし」

「クルセイダーなら陽動か奇襲に使うのがセオリーだと思っただけ……どちらにしても、先に倒せたら倒したいな」

みほがチャーチルとマチルダより上にクルセイダーを危険視する。

クルセイダー巡航戦車 Mk. III の運用方法は、戦車道においては速度を活用した運用を自分ならすると、みほは考える。

逃げるにしても、攻めるにしても、足が速いというのは非常に強みになる。奇襲なら相手に対応する前に攻めれるし、陽動も十分に使える戦車だ。

しかしそのセオリーを無視して、仮に百式流ならば攻撃に特化した戦車に化ける。

撃たれる砲弾を潜り抜けて接近してくる足の速い戦車が相手に仮にいるとしたら、考えるだけでみほはゾツとする。

聖グロリアーナのクルセイダーについて。和麻に知らされたことを思い出して、みほはクルセイダーの撃破の優先順位を上げた。

「勿論クルセイダーも危険ですが、他の車両はこちらの徹甲弾だと正



面方向は抜けません」

クルセイダーを危険視するみほに、優花里が他の車両の危険度も論じた。

事前情報から、マチルダとチャーチルの二種類の戦車装甲を正面から砲弾で撃ち抜くには大洗保有戦車ではほぼ不可能だ。それこそ零距离で撃てば可能性はあるが、それより先に撃ち抜かれる方のリスクが大きい。

「そこはやっぱり……戦術と腕かな？」

不安そうな優花里に、みほが微笑んで答えた。

みほの笑みに優花里がキョトンと惚けるが、意味を理解すると優花里は嬉しそうに頷いた。

「はいっー」

優花里の声にみほが頷くと、その場から二人が姿を聖グロリアーナに視認されないように隠れて立ち去る。

そしてみほと優花里がIV号戦車に乗ると、みほは操縦手席で首を船のように揺らして寝ている麻子に声を掛けた。

「麻子さん、起きて。エンジン音が響かないよう転回してください」

「ん……了解」

麻子がIV号戦車を駆動させる。そしてみほの指示通りに転回して走行を始めた。

IV号戦車の後ろに控えていた他四両が続いて発進する。

布陣は聖グロリアーナと同様に三角形を描いた魚鱗の陣。

僅かな乱れはあるが、大方陣形は保たれている。

大洗が、先手を取ろうと動き出した。

◆  
「大洗、何か仕掛けるみたいね」

モニター中継を見ている亜美が、面白そうに呟いた。  
同じモニターを見つめる和麻は、モニターから目を離さなのまま答えた。

「ええ、とりあえずは最初の作戦を使うんでしよう」

モニターから映る大洗の車両達を見つめて、和麻がこれから起きることを告げる。

大洗の隊列は、和麻が見る限り及第点。練習通りに動いている。

「最初、ね。てことは色々考えてきてるのかしら？」

和麻の話に、亜美が興味を持つ。

しかし和麻は苦笑いしていた。

「流石に聖グロリアーナとの戦いに、作戦のひとつやふたつは要りますよ。それに、俺が作戦を考えたわけじゃないですから」

「えっ……？　和麻君が決めてないの？」

亜美が少し目を大きくした。

まさか練習などを指導していた和麻が作戦を考えていないとは思ってもしいなかったからだ。

「今回はみほ達に色々考えさせてるんですよ。全国大会なら話は変わ

りますけどね。

俺が全部を決めたところで、アイツらは何も進みませんよ。俺が試合に出るわけでもなく、ましてや隊長でもない。総指揮はみほに一任してますし、今回の作戦はみほ主導で車長全員で考えて決めていきます。俺は不安要素を指摘した程度です」

「そんなことで大丈夫かしら？」

亜美が見る限り、みほの実力は確かに高いと判断出来る。

伊達に黒森峰で過去に副隊長を務めていたわけではないだろう。その点は亜美は納得できる。

しかし全てをみほに一任したと言う和麻に、亜美は怪訝な表情を作った。

和麻がモニターから目を逸らし、亜美の顔を見遣る。

亜美の表情に、和麻はモニターを見つめながら告げた。

「俺が大洗で全員に仕込んだのは、みほの指示をある程度出来るレベルに引き上げることでした。俺とみほは、根本的に違うんです」

和麻が静かに告げる。

亜美が「何が違うのかしら？」と問い、和麻は言いづらそうにして答えた。

「俺とみほは戦術の考え方が違うんです。百式流と西住流、その時点で違いますが……みほは全く違うんです」

和麻の話し方に、亜美が続きを促す。

和麻はIV号戦車が単独で移動する映像を見ながら、話を続けた。

「俺と違ってみほには、柔軟な発想がある。本人は分かかってないでしょうが……アレは強い。黒森峰や聖グロみたいなセオリーに囚われない柔軟な発想、みほの戦術は相手からすれば厄介ですよ」

和麻がはつきり強いと断言したことに、亜美は納得した表情で頷いた。

百式和麻にここまで言わせる人間、西住流の次女。話を聞く限り、みほの戦い方は本来の西住流とはかなり本質が違うらしい。

「でも、なんでそんなことまでわかったのかしら？」

ふと、疑問に思うことを亜美が訊いていた。

和麻とみほは、それぞれ違う学校にいた。大洗で一緒になったとしても、校内で団体戦を出来る戦車数はない。

和麻がそれをどういう経緯で知ったのか、亜美は純粹に疑問を持った。

「ゲームで」

「……ゲーム？」

和麻の返答に、亜美が思わず復唱していた。

話が見えない亜美に、和麻はそのことに不思議そうに訊いていた。

「蝶野さんもやったことありません？ 戦車道大作戦？」

「それくらいなら、あるわよ」

戦車道をモチーフにしたボードゲームだ。

かなり昔に、よく和麻の母である一姫に対戦させられたことがある。

しかしその話を持ち出したことに、亜美は納得出来ずにいた。

「あのゲーム。意外と勉強になること、多いんですよ」

和麻が缶コーヒートを飲みながら、しみじみと話す。

亜美には、いまいち分からない話だった。



キューポラからみほの双眼鏡が敵機を捕捉する。

約一キロ程度離れた位置する岩壁の高所から、隠れるようにIV号戦車が鎮座していた。

チャーチルとマチルダ、クルセイダーが進行している陣形に、みほは双眼鏡を覗きながら指示を出す。

「敵、前方より接近中……砲撃準備」

「装填完了！」

みほの指示を受け、優花里が砲弾の装填完了を伝える。

後は砲撃の合図、車長の発射指示を受けるまでに砲撃手はすぐに準備を開始する。

砲撃手席で五十鈴華はようやく慣れたとは言えども、少し緊張した手つきで敵機へ照準を合わせ始めた。

「えっと……チャーチルの幅は……」

『三・二五メートル！』

華の呟きに、優花里と沙織が声を揃えた。

和麻から嫌というほど暗記を強いられた聖グロリアーナの戦車情報。スペック性能は即答できるレベルに二人は暗記していた。

「四シュトリヒだから……距離は八百十メートル」

二人の声が聞こえないくらいに集中しているらしい。華は動くチャーチルに照準を合わせていく。

緊張している華に、みほは彼女を心配して声を掛けた。

「華さん、大丈夫？」

「大丈夫です！ いつでも撃てます！」

即答とばかりに返ってくる華の返答に、みほは安心した表情を浮かべる。

そしてみほはすぐに表情を真剣に変えると、すぐさま指示を出した。

「——撃てっ！」

炸裂する砲撃音。

飛翔する砲弾は進行するチャールルに向けて飛んでいく。

しかし砲弾は旗車両であるチャールルの手前数メートルの位置で着弾していた。

着弾にはならなかった。本来なら叱責される場面だろう。しかし約一キロ離れた位置に移動している標的に、一週間程度しか練習を積んでいない華が放った砲弾が標的に対して僅か数メートルしか誤差がない時点で、十分に評価されるべき点だった。

「……すいません」

「大丈夫、目的は撃破じゃないから」

謝罪する華に、みほは問題ない旨を伝える。

みほからすれば、華の砲撃は十分に評価できた。むしろ上出来と言える。素人の華があそこまで正確に撃てていることは、間違いなく褒められて当然とみほは言いたかった。

もとより、今の砲撃における本来の目的は撃破ではない。

撃破出来れば御の字だが、装甲を抜くことが難しいチャールルとマチルダには難しい話だ。

「麻子さん！ 大変だと思っけど目標ポイントまで移動お願いします！」

華が放った砲撃後、みほはすぐに麻子へ命令を出す。

麻子が静かに頷くと、即座にIV号戦車の操縦を開始した。

岸壁に身を隠すように後方へ退避。聖グロリアーナ陣営に背を向けて前進を開始した。

そしてそれを追うように、聖グロリアーナ陣営が動き出す。

逃げるIV号戦車。それを追うチャーチルとマチルダ、そしてクルセイダー。

一対五の鬼ごっこが始まった。

岩山地帯の不整地を縫うようにIV号戦車が走り抜ける。

IV号戦車を操る麻子は、操縦手席から見える僅かな視界とみほの指示だけで無駄な減速をすることなく左右のハンドルレバーを操作する。

直線的な走りをすれば、後方から追って来る聖グロリアーナ陣営からの砲撃を受ける。

「なるべくジグザグに走行してください！ こっちの装甲は薄いからまともに食らったら終わりです！」

「……了解」

それを麻子は理解した上で、みほの指示通り左右に車体を揺らしながら走行を始める。

まず左右に動きながら走っていれば、余程のことがない限りは後方からの砲撃を受けることはない。

それこそこちらの動きを先読みされ、動くであろう地点に撃たれでもしない限り有り得ない。

麻子もその点は理解している。もとより嫌というほど練習されられた彼女にとって、その手の操縦は造作もなかった。

IV号戦車が逃げていく先は、左右に岸壁が続く直線の道。

後方に聖グロリアーナ陣営の五両が陣形を乱さずに横並びで並列し、IV号戦車へ絶え間なく砲撃を放っていた。

IV号戦車が回避する為に使用できる横幅は、左右の岸壁に阻まれた道の横幅分。聖グロリアーナ陣営の五両が横並びで丁度良く収まる程度の幅しかない。

終わることのない砲撃の嵐を後方から受けるIV号戦車だったが、それを左右に動きながら回避し続ける。

ただ左右に大きく動いていると思えば、小さく右に動いて更に右に大きく動いたりなど、左右に動くだけで様々なパターンを変えてIV号戦車が動く。

一向に当たる様子のない光景を見て、チャールに乗る車長はカップに入った紅茶を飲んで呟いた。

「……妙に上手いわね、あのIV号戦車」

「随分とトリッキーな動きですね……流石にあんな動きだと狙うのが大変です」

ダージリンの呟きに、オレンジペコが先を走るIV号戦車を見て感心していた。

単純に左右に動かれるだけなら、熟練の砲撃手なら狙いを定めるのは難易度は高いが出来る。

しかし目の前のIV号戦車は、右へ二回に分けて動いたり、左に動く予備動作を見せたと思えば右に移動している。

簡単に左右に大きく動くだけと思えば、そんなトリッキーな動きをされれば狙う方も一苦労だとオレンジペコは装填手としての責務である砲弾の装填を行いながら思った。

「ねえ、ペコ。あれが戦車道を始めて一ヶ月経ってない操縦手の運転に見える?」

「……いえ、全然」



ダージリンの問いに、オレンジペコは素直に答えた。

たった一ヶ月も満たない期間で、あそこまで細かい操縦をできる選手はオレンジペコも見ることがない。

それをオレンジペコがダージリンに伝えたと、ダージリンは何か考える素振りを見せた。

「たまたまというのもあり得るわ。咄嗟に適当に操縦しているだけという可能性とあるけど……」

「……けど？」

「あのIV号の車体、揺れが少ないのよ」

「揺れ……ですか？」

オレンジペコが小首を傾けた。

ダージリンは訊き返したオレンジペコに、自分の考えをまとめるように話を始めた。

「戦車って適当に操縦すると車と同じように簡単なミスで車体が必要以上に動くの。だけどあのIV号……全然揺れてない」

ダージリンがIV号戦車を操る操縦手の実力を推察する。

適当にハンドルを切っているなら、もつと蛇行的なわかりやすい動きになるはずだ。

そして雑にハンドルを操作しているのだから、本来必要のない動きや車体の揺れが起きてもおかしくない。

しかし目の前のIV号戦車は、それが無かった。

ということはつまり、あのIV号戦車は目の前で起きている奇抜な動きを自ら行なっているということだ。

もしそれが自分の意思で出来ているなら、IV号戦車を操縦する人間はなかなかの腕を持っている。

まさかダージリン本人も、たった二週間程度しか練習していない人

間が操縦しているとは思わないだろう。

それこそ以前から操縦手として戦車に乗っている人間が乗っているのだと思うのが普通の考えだった。

だがダージリンは、その先の予想をした。

もし大洗女子学園に、百式和麻が居ればと。

百式和麻という人間が居て、彼が先導して操縦手を教育したとすれば——目の前のIV号戦車の動きに納得が出来た。

「あの人……なかなかの捻くれ者ね」

「はい？」

オレンジペコが思わずダージリンの呟きに反応した。

ダージリンは先程会った憎まれ口を叩く背の小さかった女の子を思い出して、苦笑いした。

そしてダージリンの中で半信半疑だった願いが、少し確信へと近づいた。

間違いなく、百式和麻が大洗にいます。

それを理解したダージリンが目を見開く。

その後、ダージリンが目を見開くと鋭かった瞳は消え失せ、穏やかな瞳で笑みを浮かべた。

「良いだろう。相手が『そういう』気なら、こちらこそその壁を破つてやろうと。」

ダージリンは手元にある通信器具を手にとると、すぐに各車両に指示を出した。

「全車両、速度を上げて！ 追うわよ！ クルセイダーは陣形を乱さずについてくること！」

聖グロリアーナ陣営の速度が徐々に上がっていく。

陣形を乱すことなく、五両の戦車達がIV号戦車へ向けて砲撃を放ちながら迫る。

しかしそれを見たIV号戦車も、全速で逃げていく。

一向にIV号戦車を撃破出来ない聖グロリアーナ陣営が、たった一両の戦車を追っていく。

後方から追う聖グロリアーナ陣営の車両を見て、みほは気を抜かずにポツリと呟いた。

「まずは最初のポイントに向かえば、第一段階」

みほがIV号戦車が向かっていく先を見つめる。

目的地点。そこに向かえば、ひとまずみほ達のIV号戦車の役割が終わる。

麻子が操縦する戦車なら、たどり着くまでに撃破はないだろうとみほは冷静に判断する。

——これで聖グロ陣営に大きな痛手を与えることが出来れば

みほがそう思いながら、麻子に指示を出していく。

しかしみほの勘が告げていた。

いや、分かっていたと言えば良いかもしれない。

今から行う作戦が、聖グロリアーナに対して決定打を与えることが出来ない。



「さあ、仕掛けたわね。大洗」

モニターに映る試合の様子を見て、亜美は楽しそうに微笑む。

亜美が見るモニターには、IV号戦車と聖グロリアーナの五両が走っ

ている様子が見える。

そして更にモニターには地図の全体図が映され、試合に参加している全車両の現在地が簡略化した地図に映されていた。

IV号戦車が走る道の先に、四つの車両が映される。

左右が大きな壁で囲まれた直線の道の先に、大きな崖がそびえ立つ。

その上に、四両の戦車が待ち受けていた。

それは紛れもなく、IV号戦車を使った陽動作戦が手に取るようになる画面だった。

「最初の一手、この作戦が通るかどうかですね」

亜美と同じモニターを見ていた和麻が、ジッと画面で起きている光景を見てしみじみと言った。

亜美はその言葉に、興味津々と言いたげに楽しそうに和麻へ話し掛けた。

「和麻君は、成功すると思う?」

まずは先手を打った大洗。

簡単な陽動作戦も用いた大洗側の作戦が、どう動くかと。

和麻は画面から目を離さずに、缶コーヒートを啜ると淡々と答えていた。

「全然、全く通じると思ってますんよ」

「あら? 意外と正直に言うのね?」

和麻の答えに、亜美は意外そうに目を少し大きくした。

和麻はそんな亜美に、呆れたような苦笑いをしていた。

「それで倒せるようなら、聖グロもそこまでの学校です。ですが……

そう上手くわけがない」

モニターに映る聖グロリアーナ陣営を見て、和麻の目が鋭くなる。  
「伊達に全国強豪校の名前を張ってるんです。こんな作戦で倒される  
ようなら、全国大会なんて大したことない」

和麻が淡々と告げる。

その言葉に亜美は随分とハッキリと言ったと思った。

亜美自身も、大洗側の作戦が素直に聖グロリアーナに通じるとは  
思っていない。

仮に一両でも撃破出来れば、大洗側には大きなアドバンテージが生  
まれる。

それを和麻は少しでも願ったりしないのだろうか。

しかし和麻の目を見ると、亜美は少しその考えを改めた。

和麻の目が鋭くモニターを見つめていた。

缶コーヒーを握っている手に力が込められているのが亜美にはわ  
かった。

大洗に対して余計な甘えを捨てて、冷静に盤面を見ている。

大洗と聖グロリアーナ。二つの戦力を知る和麻が、試合の行く末を  
見守っている。

まずはこの作戦で、どう動くか。

それでこの試合の結末が変わる。

それをなんとなく感じた亜美は、真剣にモニターに向き合う和麻に  
小さく微笑んだ。

間違いなく、和麻は少しずつ昔の顔に戻ってきている。

その顔を見て、亜美は少し懐かしい気分になった。

今の和麻の顔は、紛れもなく戦車に乗っていた頃の顔だと。

## 9. 好きに走つてくると良いわ

大洗女子学園の最初の作戦は、待ち伏せによる奇襲という不意打ちだった。

大洗側の戦力——保有する戦車を総動員させたとしても、聖グロリアーナ女子学園の戦車を各個撃破する攻撃力は大洗にない。

聖グロリアーナが保有する戦車は高装甲を持つチャーチル歩兵戦車とマチルダⅡ歩兵戦車。その二種の戦車に対抗できる戦車は、大洗側にはⅢ号突撃砲F型しか対等に撃ち合える攻撃力を持っていない。

つまり正面からの聖グロリアーナとの撃ち合いは大洗側の圧倒的な不利。よって大洗は必然的に奇襲などを用いた正面以外での戦いを強いられていた。

その為、大洗側が仕掛けた作戦は必然的に待ち伏せからの奇襲となった。

まず最初に大洗陣営の一両が聖グロリアーナの戦車達を引きつけ、そして予め決めていた地点に待つ四両で総攻撃を行う。

全て撃破するとまで言わずとも一両でも聖グロリアーナの車両を撃破することができれば、大洗は聖グロリアーナに対して僅かながらでも有利を取ることができると言える。

本来なら圧倒的な攻撃力を持って高装甲を打ち破るなどが無難なのだが、それは大洗側には不可能な話だ。

しかしそれは聖グロリアーナも理解している点だった。

自分の強い面を知るといことは、同じくして弱い面を理解しているということ。

そうなれば聖グロリアーナ側は大洗側の試合参加車両を試合開始前に見ている時点で、大洗側から攻撃力で圧倒されるとは思っていない。

つまり聖グロリアーナは、正面以外での攻撃を予想できていると予

想することはごく自然な流れだった。

大洗で先日に行われた生徒会と車長を集めた作戦会議で、まずはじめに河嶋桃から出された奇襲というこの作戦に、みほは正直なところ異を唱えたかった。

しかしその作戦よりも良い作戦を提示することの難しさを理解してた故に、みほも異を唱えられなかった。

頼みの綱である和麻も、今回の聖グロリアーナ戦では作戦などの立案はしないと言い切っていた。

この聖グロリアーナ戦において和麻が全員に提示したのは、試合で使う作戦は全て自分達で考えることだった。作戦を自分達で考えて、自分達で行動すること。それが和麻がまずはじめに全員に言い放った言葉だった。

正直に言えば、みほは和麻の助力を得たかった。作戦のアドバイスを何か貰えれば、良い案が思いつくかもしれないなかった。

しかし一貫して、和麻は作戦会議中は黙って手に持っている本を開きながら話を聞いているだけだった。

しかしそんなみほが異を唱えたかった待ち伏せ作戦に、異を唱えた車長がいた。

それはエルヴィンだった。まさに理由はみほが思っていたことと同じく、聖グロリアーナならばその作戦を見透かされていてもおかしくない。

その話にみほは同意し、同じく車長である澤梓も賛同していた。磯辺典子は意味を理解しておらず、角谷杏に関しては楽しそうに眺めているだけだった。

そこから桃とエルヴィンとの口論が始まった。

互いに意見がぶつかり合い、待ち伏せ作戦が駄目なら他の作戦を出せと桃が言えば、エルヴィンが提案する作戦を桃が駄目だと言い合う押し問答になっていた。

対立する二人にみほと梓が慌てだし、杏は楽しそうに眺め、典子に關しては話について行けずに傍観しているだけだった。

流石に柚子も止めようかと仲裁に入ろうとしたところで、和麻が「そこまでだ」と桃とエルヴィンに呆れた声を掛けていた。

いつまでも終わらない押し問答に呆れた和麻は、溜息を吐きながら桃とエルヴィンに言った。

『そんな言い合いしてばかりだといつまでも終わらないぞ？ 作戦をひとつだけにする訳じゃないんだ。別にひとつだけにする必要があるか？ 数を出すんだよ、こういうのは……作戦は何個あっても良いって言ったよな？ なら順番にやっていけば良いだろ？』

そう告げて、和麻は持っていた本を広げると「続きをどうぞ」と言いたげに傍観に徹した。

和麻以外の全員が顔を見合わせる。桃とエルヴィンはどこか納得いかないと言いたげだったが、和麻の言い分も十分に理解できていたのか渋々と納得していた。

そんなやりとりの末。そして小一時間に渡り、大洗は作戦会議で出た作戦の中から二つの作戦を実行することにした。

その後日、みほが和麻にこっそりと二つの作戦にどう思うか訊いたのだが、和麻は悩む素振りもなく答えていた。

『最初の作戦で有利を取れば上々、でもかなり厳しいと思う。二つ目はその時点で残った敵車両の数次第だろう。俺的には二つ目が面白と思うが……車長と操縦手次第だろうな』

端的に言えば全部厳しい作戦と言っているようなものだった。

戦力的に不利な大洗では、まず聖グロリアーナに有利を取れる作戦を考えること自体が難しいのだから。

ともかく、大洗は考え出した二つの作戦を実行することになった。

まずはひとつ。みほ達のIV号戦車が誘導する待ち伏せ作戦が始まった。



◆  
後方から絶えず発射され続ける砲撃をIV号戦車は回避し続けていた。

「麻子さん！ 前方に大きな段差！ 左側には岩があるから行けませ  
ん！ 右に！」

「……了解」

背後の聖グロリアーナ陣営五両からひたすらに発射される砲撃を回避するIV号戦車。みほはキューポラから顔を出して周囲を確認しながら麻子に指示を出していた。

大洗が仕掛ける奇襲作戦の要と言える囿。このポジションを引き受けたというよりも、必然的に麻子選ばれた。

それもそのはず、大洗チーム内の五人の操縦手の中で一番技術を付けさせられた。麻子は有無を言わずに選ばれるのは必然とも言えた。

「麻子さん！ 後方の車両が右側に砲身ズラしてます！ 注意して  
！」

「……面倒だ」

ぼやきながら、麻子はIV号戦車を二段階に分けて右へと移動させる。

五両から怒涛の如く放たれる砲弾を苦もなく回避し続けられる麻子の胆力に、みほは正直に言つて素直に驚いていた。

いくら練習を積んだと言っても、本番ではどうしても練習と同じようにはいかない。更に言えば隊長車両が撃破されれば試合が終わると言っても過言ではないIV号戦車を操るとなれば、普通の人間ならプレッシャーに負けてもおかしくない。

しかし麻子は淡々と操縦をこなしていた。それも涼しい顔でプレッシャーなど感じてないと言いたげに。

事実、麻子はこの状況でプレッシャーなど微塵も感じていなかった。

指示通り動かすことを苦もなくできる麻子にとっては、言われていることをしているだけに過ぎない。

それで撃破されれば、麻子から言わせれば極端な話をすると車長が悪いと言えたからだ。

後ろが見えない状況で指示通りにまっすぐ走りながら左右に動くだけ、この運転にどう緊張すれば良いか麻子には理解ができないと言えた。むしろ欠伸すらできる自信が麻子にはあった。

実際のところ、そんなことを思えるのは大洗の操縦手の中で麻子ただ一人だろう。

麻子自身がハッキリと自覚して背中をひりつかせて操縦したのは、いつも「あの男」が試合相手の時だけだったからだ。

和麻と試合をしてもまず麻子には勝てない。どれだけ側面と背後を取ろうとしても、いつの間にか背後を取られるかゼロ距離まで接近されて撃破される。麻子が乗る戦車の砲撃を全て回避し、そして迫る和麻の戦車が文字通り不気味と思えるほどだ。

あの試合を思い出せば、こんな状況など屁でもない。

「意外と下手だな。相手の砲撃手」

呑気に麻子は気だるく呟いた。

背中から感じる砲弾の音を聞いても、近くに着弾している砲弾は少ないと麻子は判断できる。

相手の砲撃手の力量はあるに違いないが、停止していない状況での砲撃ならこの程度かと測れるほど麻子の感覚は「おかしく」なっていた。

それもそのはず、麻子自身はこのような状況を嫌というほど練習させられていたのだから。

相手が移動しながら砲弾を撃たれるのを回避するだけ？

そんなの「あの練習」に比べれば大したことない。

百式和麻という頭のネジが吹き飛んだ男が考えた『決められた幅五十メートルの道を直進し、前方一キロメートルから四両の戦車が撃つ本弾を躲しながらゼロ距離まで接近する』という頭のおかしい練習をさせられた麻子からすればこの程度の砲撃など怖くもない。

あの時の練習を麻子が思い出して向っ腹が立つ。後であの男の脛でも蹴ろうと一人で麻子は決意した。

「だが一方的に撃たれるのもむかつくな……西住さん」

操縦しながら麻子はみほへと声を掛けた。

みほは不思議そうな顔をして訊き返していた。

「どうしました？ 麻子さん？」

「こつちから攻撃しても良いか？ というより相手の頭に血を登らせてやりたい。その方が待ち伏せ作戦も成功しやすい」

麻子の言葉に、みほは少し顔を顰めた。

「前を走りながら砲身を後ろに向けるのはこつちが不利になります。流星にそれは……」

「なら砲身だけを後ろに向けなければ良い」

麻子の返事に、みほは今が変わらずに首を傾けた。

「それってどういう……？」

「撃破される気はない。それで良いのか、駄目なのか、どっちなんだ？」

麻子の提案に、みほは少し考える。

確かにこの状況で一両しかない相手を追ってくる聖グロリアーナから見れば、何か大洗に作戦があつて囷として逃げているなど簡単に看破できるだろう。

それならそれを踏まえた上で相手を正しい判断ができない心理状況にするのも一つの手だろう。

要するにおちよくる。相手を馬鹿にしたことをすれば良い。

戦車道の試合に於いて、ルール上各戦車が使える砲弾には制限数があり、撃てる砲弾の数は限られる。

ならば相手の使用できる砲弾数を減らすことを考えても、良い案かもしれないとみほは考えた。

「私達が倒されたら作戦が駄目になつて終わりますが、大丈夫ですか？」

「大丈夫だ。西住さんはどつちに進めば良いか指示を出してくれるだけで良い。五十鈴さんは相手に向かつて砲撃してくれば良い」

麻子の話が、みほにはイマイチ分からなかった。

進む方向を指示すれば良い？

みほがそれを理解する前に、麻子は「じゃあ行くぞー」と気の抜けた声を出したと思えば——麻子の両足と両手が素早く動いていた。

「ちよつと麻子!?」

「これは大胆です！」

沙織と優花里が揃つて声をあげた。

ガタンと音を立てて、IV号戦車が右に回る。

そしてみほが気づくと、IV号戦車の正面が聖グロリアーナの車両に向いていた。

流星のみほも「コレ」をすることは思つてもいなかった。

後退しながらIV号戦車が「前に」進んでいた。

まさか後退しながら前に進むなんてことをするのは、みほも予想し

ていなかった。

「西住さん、どつちに進めば良いか指示頼んだ」

半回転してバック走行している麻子が、みほに指示を仰ぐ。

その時点で、みほの役目は決まってしまった。

麻子から見て後ろが見えない以上、みほが進む方向の指示を出さなくてはならなくなった。

慌ててキューポラから顔を出し、みほが行く方向を指示する。しかしその間に、みほは麻子に追加の指示を出した。

「ずっとバック走行したままだと追いつかれるかもしれません！ 二発だけ砲撃したらすぐに車体を元に戻してください！」

「……了解した」

流石の麻子も、このみほの指示には素直に従った。

そして華は既に優花里が砲弾を装填し終えたのを確認して、照準を合わせていた。

「動いているから……狙いづらいです」

「当てるのが目的じゃないので大丈夫です！ ある程度照準が合えば撃っていいですー！」

「はい！ わかりました！」

その指示を受けた途端、華は砲撃の引き金を引いていた。

炸裂する砲撃音。飛翔した砲弾は右側を走っていたマチルダの手前に衝突した。

激しく車体を揺らしながら、マチルダが体制を整える。

更に優花里が素早く装填し、華が再度砲撃を行う。

今度は左側にいたマチルダの側面を砲弾が掠めた。偶然とも言える敵戦車への砲撃が当たっていた。

「二発砲撃しました！ 麻子さん！ 戻して！」  
「了解」

即座の指示に、麻子も素早く対応する。

ガタンと大きく音を立てて、IV号戦車は元通りに車体を前に戻していた。

「ふう……もうこれはやめましょう。失敗したら大変です」

「ちよつとだけドキドキしましたね！ みほ殿！」

呑気なことを言う優花里に、みほは思わず苦笑いしかできなかった。

この不整地での車体転回の操縦と不意を撃つような攻撃。まさしく百式流の一端とも言える動き。

咄嗟に指示を出せたが、先程のように後退して前に進む戦車の行く先を指示しながら周りの状況把握がこんなにも大変なんだと改めてみほは実感していた。

「かずくんのお母さん、やつぱり凄い人なんだなあ……」

「何か言いました？ みほ殿？」

優花里の訊き返しに、みほは「なんでもないよ」と誤魔化す。

先程のような動きをしながら指示を出せる百式流に、みほは改めて心の中で感心していた。

「ツ——！！？」 砲撃の間隔が短くなってます！ 麻子さん、より一層注意して！」

聖グロリアーナからの攻撃の勢いが増した。

みほは麻子へ再度注意を促して、先程を同じように待ち伏せている

仲間の元へ向かう為、指示を飛ばした。

◇

「……なんですか？ 今の？」

チャーチル歩兵戦車内で、一人の少女が呟いた。

その声色はありえないと言いたげに、困惑の色が伺えた。

撃破されない為に逃げていたはずの大洗のIV号戦車が、突如半回転して砲撃してきた。

しかもこの不整地で、履帯が外れてもおかしくないはずなのに平然と動いていた。そしてこちらから撃たれる砲弾を回避しながら、砲撃を撃ち返した。

見たことのない操縦だった。あんな奇妙な運転を少女は見たことがなかった。

そう思ったその少女——オレンジペコの驚きよりも、ふと横を向いてオレンジペコが見たダージリンの顔に、彼女は更に驚いていた。

「……………」

ダージリンが今にも紅茶のカップを落としそうになっていた。目は大きく見開き、口元は僅かに引き攣っていた。

それもそのはず、IV号戦車が今見せた動きは——紛れもなく。

「…………ドライブアクション」

ポツリとダージリンが呟いた。

「なんですか？ それ？」

オレンジペコがダージリンの呟きを聞いて、思わず訊き返す。

ダージリンは見えている前のIV号戦車を見つめながら、淡々と答えた。

「この不整地で車体の方向転換なんて普通しないわ。それに走りながら車体の方向転換なんて奇抜なことできる人の方が少ない」

そしてダージリンが目を鋭くさせると、ハッキリと驚いている理由を語った。

「あれは百式流が使う技術よ……和麻さんが使っていた技術のひとつ。移動中に自在に任意の方角に転回出来る技術。あの方と比べると動きにムラがあつて大きいけど、間違いなくアレは百式流の動きだつたわ」

百式流の操縦。本当にそうだとするのなら、目の前を走るIV号戦車の操縦手は百式流の教えを受けた人だということ。

ならその百式流を教えた人間は誰なのか？

答えは言うまでもない。大洗側の挑発は、大洗側の予想していない面で聖グロリアーナ側を怒らせていた。

「そう……貴女達が“それ”を私達に見せた意味。分かっているのね？」

そう呟いて、ダージリンは通信機を手を取った。

ダージリンが声を発する。その声は、オレンジペコが知る中で一番……怖い声だった。

有無を言わさない静かな声。オレンジペコは分かってしまった。ダージリンが、今までにないくらいに“怒っている”と。

「全車両、今の動きを見たわね。あの動きの意味を……分かっている



でしょう。あちらの人は言ったわ。私達が大洗に勝てたなら、百式和麻に会わせましょうと……ここまで小馬鹿にされるとは思ってもいなかったわ」

ダージリンが続けて、指示を出す。

頭に血がのぼるような感覚を抑えながら、ダージリンは告げた。

「全車両、砲撃。全力で大洗を倒しに行きなさい」

ダージリンの通信機から各車両の了解の返事が聞こえる。

そしてダージリンは最後に一人の操縦手に向けて、指示を出した。

白銀の戦車に乗る金髪の少女に、ダージリンはある意味で言うなら自分よりも怒っていると思う少女に向けて、言葉を告げた。

「アッサム、まだ出てはダメよ。私が指示を出したら行きなさい。その時は……好きに走ってくると良いわ」

『……それは全車両撃破しても良いと判断しても?』

「もちろん。久々に本気を出して来なさい」

『分かりました。初めからそのつもりです』

その言葉を聞いて、ダージリンは通信を終えた。

後はその時が来るのを待つだけだろう。

大洗が待ち伏せをしているなど——初めから分かっているのだから。



「あの馬鹿……なにふざけたことしてんだ……?」

IV号戦車のバック走行。その光景を見た和麻が頭を抱えていた。モニターから見えた映像を見て、和麻の表情が引き攣っていた。

「あれって、アレよね？　和麻くん？」

隣にいた亜美が和麻に問う。

その質問に、和麻は渋々ながら頷いていた。

「ドライブアクションですよ、アレは」

「……もう教えたの？」

和麻の答えに、亜美は目を大きくした。

まだ一ヶ月経っていない操縦手に、百式流の技術を習得させているとは亜美も思っただけだった。

しかし和麻は首を横に振っていた。

「ドライブアクションは教えてないです。俺が冷泉——IV号戦車の操縦手に教えたのはクイックだけです。しかも未完成で」

未完成。その言葉を聞いて、亜美は眉を寄せた。

百式流の技術には、数多い操縦技術が存在する。

その中でよく使われる技術が『クイック』と『アクセルブロー』、そして『ドライブアクション』である。

その中でドライブアクションは、任意の方角に転回する技術を指している。

「クイックができていないならドライブアクションはまだ無理じゃない？　なのはどうして……？」

亜美の言う通り、和麻には疑問しかなかった。

和麻は覚えていた限り、ドライブアクションは一度たりとも麻子に教えた覚えはない。

クイツクという技術を少しだけ教えただけだった。

どうしてだと和麻が麻子が教えてないはずの技術を使った理由を考える。

そして行き着いた答えに、和麻は呆れるしかなかった。

と言うよりも、麻子が仮にそうだとしたら本当に未恐ろしいとすら和麻は思ってしまった。

「俺が練習試合で使ってるのを『見て覚えた』のか……あのチビ？」

麻子と練習試合の時、和麻は大人気なく全力で叩き潰しに掛かっている。

それこそ百式流の技術がある程度使って、操縦において勝てないと思わされている。

その試合の中で、和麻は確かにドライブアクションを使っている。教えた覚えがない以上、和麻にはそれしか思いつかなかった。

「それでIV号の子。和麻くんから見てもどうなの？」

世間話と言いたげに亜美が和麻に訊く。

和麻は苦笑いしながら答えていた。

「生意気なチビですよ。勿論、後で説教です」

本心は言わないでいた。

どちらにせよ、麻子にはキツイ説教が必要だと試合後の練習メニューを考え直す決心を和麻は心の中ですることにした。

## 10. 聖グロの疾風、最速の淑女

聖グロリアーナ陣営の五両の戦車が大洗陣営のIV号戦車を追う道の先、行き止まりのように左右に道が広がる崖の上から左右を岸壁に阻まれた一本道に向かい合うように、四両の戦車が待機していた。

38t戦車B/C型、八九式中戦車甲型、III号突撃砲F型、M3中戦車リリー。

国の統一感が全くないアンバランスな戦車達が並んでいた。

III号突撃砲F型では、エルヴィンとカエサルがキューポラから上半身を出し、いつIV号戦車が到着するかを待ち遠しにしている。

おりよう、左衛門座も自分の席に座りながら静かにその時を待っていた。

M3中戦車リリーに乗車している一年生組は全員が車両の外に出て戦車の上で持ち込んでいたトランプで遊んでいた。

しかし梓だけは内心で流石にまずいんじゃないかと心穏やかではなかったのだが……これは余談としておく。

この状況をモニターで見ていた和麻が試合後、試合中に操縦手席から離れていた桂里奈へ説教が飛ぶことになるのも、また余談としておく。

八九式中戦車甲型。この戦車に乗っていたバレー部四人に関しては、戦車から離れてバレーボールでバレーの練習をしている始末だった。

勿論、このメンバーにも見ていた和麻が試合後に有難い練習メニューを言い渡すことになるのは、言うまでもない。

38t戦車B/C型には生徒会の三人が乗り込んでいる。

河嶋桃がキューポラから苛々した表情で岸壁の先を眺めながら「遅い……！」と愚痴る。

そんな桃を戦車の上で横になっていた杏が気だるく宥め、そして操縦手席には柚子がしっかりとハンドルを握りながら待っていた。

そんな操縦手席にしっかりと座っていたおりようと柚子の二名は試合後、和麻の特別メニユーを受けることになるメンバーを見て心から操縦手席に座っていて良かったと安堵することになる。

そんな各人がIV号戦車が聖グロリアーナの戦車達から砲撃の嵐に遭っていると知りながらも、呑気に待っていた。

そうしてしばらく経ち、河嶋桃が付けていたヘッドホン型の通信機から声が響いた。

『こちらAチーム！ 敵を引き付けつつ待機地点に約三分後に到着します！』

桃はみほからその通信が来た瞬間、全員に激怒を飛ばした。

「Aチームが戻ってくるぞ！ 全員戦車に乗り込めッ！」

その怒号を受けて、全員が揃って戦車に乗り込んだ。

その中で全員が桂里奈と忍が先程まで呑気に遊んでいたのとは打って変わって、一目散に戦車に乗り込んで行く。

試合前の和麻の言葉が響いているのだろう。既に説教と特別メニユーが決定している二人だけに、この動きが残念で仕方ないと和麻はモニターの先で思っていた。

全員が戦車に乗り込む。車長はキューポラからIV号戦車が来るのを待ち、砲撃手は予め決めていた地点に照準を合わせながら引き金を引く準備をする。

そして操縦手はいつ指示が出ても対応できるようにハンドルを握りしめていた。

戦車の駆動音が聞こえてくる。そして同じように砲撃の炸裂音が響く。

「この砲撃の嵐を逃げてくると考えるとゾツとするな……」

「冷泉には驚かされるばかりだな、本当に」

明らかに砲撃の間隔が短く撃たれていることに気づく炸裂音の数に、エルヴィンとカエサルが苦笑いしていた。

確かに自分ならゾツとするとおりようも思う。しかしそんな大役を任された麻子に、何故か心の何処かで僅かに黒い感情が湧いていた。

本人すら理解していない感情、それをおりようは不思議に思いながら一蹴した。

嫉妬。それをおりようが知ることになるのは、まだかなり先の話になる。

操縦手としての自覚が大洗の中で誰よりも早く芽生えていた証拠だった。他のメンバーはその時点では誰にもその感情が芽生えてなく、五人いる中でただ一人、おりようだけが持っていた。

この気持ち、後々の向上心に繋がる。それを自分自身でおりようが気づくことはまず無いだろう。

「来るぞ来るぞ来るぞ！ 全員！ 私の合図と一緒に砲撃開始を忘れるな！」

『了解』

桃が震える指で引き金に指を掛ける。どこか声色も震えていた彼女、この女がこの作戦で一番の失態をすることになる。

それこそ、IV号戦車が苦勞して逃げていた時間を無駄にするような失態。

大洗の廃校問題を知る桃は、この試合に勝てるか負けるかが重要なことを人一倍理解していた。

これから大洗は、全国の強豪校に勝たなくてはならない。ならばこの聖グロリアーナ戦でも、負けることなどあってはならないのだと。

それ故に、桃には負けることは許されないと強迫観念に駆られていた。

そんな桃がスコープから覗く先。桃は緊張するあまり、IV号戦車を視認して次に聖グロリアーナの戦車が来た時に砲撃をする認識を焦りから——“IV号戦車が見えたら撃つ”という誤認をいつの間にかしていた。

次第にエンジン音が近づいてきて、大きく鳴り響く。今まで逃げていたIV号戦車が作戦通り待ち伏せしていた地点まで辿り着いていた。そして桃の目に、待ち望んだ“IV号戦車”が見えた瞬間——彼女は怒号を飛ばしていた。

「撃てえええ!!? 撃て撃て撃てえええ!!?」

人というのは反射的に反応してしまうことのある生き物だ。

撃つことを指示があるまで待つていた人間に、大きな声で撃てと叫んだ場合はどうなるだろうか？

例え指示を待っていた各々がそれぞれ砲撃手のスコープから先を視認していたとしても、耳に待つていた指示が聞こえた瞬間、反射的に身体は反応してしまう。

桃の声と共に、砲撃手全員が反射的に引き金を引いた。

よって結果、一番起こしてはならない結果を作ってしまった。

桃の怒号。その声と共に四つの炸裂音が響いた。



「——ッッッッ」

その音に一番先に反応したのは聖グロリアーナ陣営ではなく、はたまたIV号戦車車長の西住みほでもなく——操縦手の冷泉麻子だった。

先程まで呑気に運転した麻子の耳に大洗側の戦車から砲撃の炸裂音が響いた瞬間、身体が「反応」していた。

操縦手席から見える視界から四両の戦車を視野に入れて視認していた麻子が、無意識に大洗陣営の戦車の砲身を見ていた故の反応だった。

この時点で、既に冷泉麻子という少女は戦車の向いている砲身から砲撃がどの位置に向かって飛んでくるかある程度理解していた。

和麻によるクイックの技術習得の練習、そして和麻との試合に勝つ一心で身につけていた無意識でも視界内にいる相手戦車の砲身の向きを把握する習慣を麻子は会得していた。

その為、麻子は大洗陣営の四両の戦車の砲身から放たれた砲撃が後ろを走る聖グロリアーナの戦車に向けられているのではなく——自分に向けられていると察知した。

自分達が走り抜けて、追いかけて来る聖グロリアーナの戦車達が来た時に砲撃を開始すると思っていた故に、砲撃の音が聞こえた瞬間、流石に麻子も驚いていた。

しかし咄嗟に反応したのは、練習の賜物とも言えた。

繰り返される反復練習は、無意識にその行動をする為に身体に覚え込ませる練習。よって麻子は、今までの練習の成果により自分の意識が反応するよりも早く身体が動いていた。

砲撃の炸裂音が鳴ると同時に、麻子の手と足がハンドルレバーとペダル、クラッチレバー。そしてギアレバーを操作する。

IV号戦車に向かつてくる砲弾は四発。その内、二発は車体の外に向かつている。しかし残りの二発はこのままでは車体に当たると麻子は確信していた。

左に動けば、本来当たらない砲弾に当たってしまう。更に車体の後ろに向かつて一発飛んでいるので、後方への避難も不可能。もとより停止した時点で迫る二発が向かつている時点で停止すら選択肢にならない。

右に動くしかない。すぐ動かなければ間違いなく砲弾が当たると麻子は確信していた。



この時、麻子是不運か幸運か和麻から未完成だと言われていた技術を偶然にも完成させてしまった。

百式流の戦車が不気味と言われる所以である砲弾が戦車を避けているような動き——クイツクという技術を。

向かってくる砲撃に対し、走っている車体を任意の距離で軸を左右にズラす技術。

車体を右にズラす為、麻子がブレーキを一瞬踏みながらハンドルレバーを切り、同時にクラッチを一瞬踏みつつギアレバーを操作し、アクセルを踏み抜く。

その麻子の動作には、拙い動きがなかった。全てが最速で行われ、そして最速で車体が動いた。

その結果、麻子が車体を強引に右へ移動した瞬間、IV号戦車は右に向かって直進していた。

砲撃が放たれた瞬間に、その早業と言える動作を麻子は行った。

隣の通信手席にいた沙織は、たまたまその動きを見ていたのにも関わらず麻子が何をしたか分からなかった。

いつの間にか戦車が右に動いていた。その認識しかできなかった。しかし同じく見ていたみほは圧倒されていた。操縦手席で見せたこの動きを彼女は知っていた。

紛れもなく、これは和麻が使う百式流の動かし方だった。

今まで練習の時に見ていたような拙いものではなく……その一瞬だけ、みほの目には麻子の背中が昔に見ていた和麻の背中と重なって見えた程の完成度だった。

麻子の咄嗟の判断により、右へ即座に動いたIV号戦車が駆け抜けた地点に二発の砲弾が飛翔する。

地面に四発の砲撃が突き刺さる。大きな土煙を上げて、その威力を見せつけていた。

そうして最悪の隊長車両の撃破という結果を免れたIV号戦車は、大洗の四両が待つ崖へと駆け上がった。

「味方を撃つてどうするのよおー!!?」

撃破を逃れたIV号戦車で沙織が我慢出来ずに怒りを露わにする。しかしその声を掻き消すように、大洗の四両は砲撃を続けていた。

『撃て撃て撃て撃てええええ!!?』

それも全て河嶋桃が叫んでいた所為だった。

IV号戦車が難を逃れた後、すぐに聖グロリアーナの戦車が射程内に映った時点で砲撃を止める選択肢が桃にはなかった。

加えて他の車両の砲撃手もIV号戦車を誤射したことに冷や汗をかいたが、すぐに敵車両が来てしまったことに焦ってしまい継続して砲撃を続けてしまった。

「そんなバラバラに攻撃しても……! 履帯を狙ってください!」

流石のみほも、この判断を見過ごせなかった。

左右に広がる緩やかな坂を登り、砲撃を続ける四両の戦車の元に辿り着くとみほはすぐに指示を出した。

しかし履帯を狙えと言っても、既に戦闘を始めた時点で状況は変えられなかった。

練習と本番は違う。それを河嶋桃以外、身をもって各車両の砲撃手は理解した瞬間だった。

焦りから心の余裕がなくなり、冷静な判断が砲撃手には出来なくなっていた。

その為、最初に出された「撃て」という指示を実行することしか出来なかった。

『撃て撃て撃て! 見えるものは全て撃てえええ!!?』

そして叫びつつける桃に、みほは頭を抱えなくなった。

不味い。このままでは挟み撃ちになると。

左右の緩やかな坂を二手に分かれて聖グロリアーナの戦車達が登って来る。

なんとか砲撃を止めて、次の行動をしなくてはならない。それか砲撃手に履帯を撃ち抜いて足止めをする。この二択しかなかった。

『沙織さん！ すぐに通信で通信手にも全車両の砲撃を止めさせるように伝えてください！ 今すぐにこの場から逃げます！』

みほは前者を取った。そして沙織に急いで指示を出した。

幸いにもIV号戦車の乗員は焦ることはなかった。

混乱している場面を外野から見えていたお陰と、みほが冷静だったことから沙織はすぐに通信機を操作した。

「全員！ 砲撃ストップ！ 今すぐ移動するよ！」

「各車両！ 砲撃を中断してください！ この場から退避します！」

『なに！ 敵から逃げるのかっ!?!?』

桃の返答を無視して——みほが各車長に、沙織が各通信手に連絡する。

そして数秒後、各車両は砲撃を中断していた。

『すまない！ ミスってしまった！』

『すいません！ すぐに止められなくて！』

エルヴィンと梓がみほに返答し、謝罪する。

『すごいアタック！ 隊長！ 私達、どうしたら良いですか!?!?』

『西住ちゃん、まかせたよー』

典子と杏がみほに指示を仰ぐ。

その指示を聞いて、みほは安堵しながら指示を出した。

「二つ目の作戦を使います！ 全車両私達について来ててください！」

みほの通信後、全員から了承の返答をみほが受ける。

そしてみほは麻子に動くように指示を出した。

「全車両！ 住宅街に向かいます！」

みほが二つ目の作戦を使う為に、住宅街に向かうように告げる。

大洗が仕掛ける二つ目の作戦。

正面から戦うことの出来ない聖グロリアーナの戦車と戦う為に、隠れながら戦うことを選んだ作戦。

その作戦の名前を、みほが告げた。

「——もつとこそこそ作戦を始めます！」

今回、和麻がこの試合が始まるまでの間に文句を言いたかったことがひとつあった。文句と言うよりも、困惑とも言える。

作戦名、みほのセンスはどうにかならないかと。

そんなことを思っていた和麻も、今はモニターの先では呆れるような作戦の破綻を見て頭痛がするほどの怒りに震えていた。

◇

「あらあら、お粗末なこと」

チャーチル歩兵戦車に乗っていたダージリンが、紅茶を飲みながら呆れていた。

待ち伏せをしていると読んでいたが、まさか大洗で味方の車両が味方を撃つなんてことをすることは思ってもいなかった。

失笑ものである。思わずダージリンが呆れた笑みを浮かべていた。

「ちゃんと待っていていれば良かったのに、どうして撃っちゃったんですかね？」

オレンジペコが装填手としての責務である砲弾の装填を行いながら、不思議そうにしていた。

聖グロリアーナからすれば、初歩も初歩と言える待ち伏せ作戦を間違えるという選択すらない。むしろ味方車両と敵車両を間違えるなどあり得ない。

「さあ？　でも、アレを見れば大洗が初心者の人達の集まりと言うのもわかった気がするわ」

拙い作戦、そして戦車と隊員達の動き。まさしく素人と言えた。

ダージリンから見て、あのIV号戦車以外の四両の戦車は大きな脅威にならないと認識しつつあった。

「逃げますね、大洗。追います？」

オレンジペコがダージリンに指示を仰ぐ。

ダージリンは紅茶をまた一口飲みながら、少し考えるように一拍置いてから答えた。

「ペコ、そう言えば貴女はまだ見てなかったわよね？」

「……はい？」

返事になっていない返答にオレンジペコが小首を傾ける。

ダージリンはそんなオレンジペコが面白かったのかくすくすと笑うと、

「昔、私達三年には——最速の淑女がいたのよ」

ダージリンが通信機を手取る。

そしてダージリンが通信機に向けて、ひとつだけ命令した。

聖グロリアーナにおいて、データと計算の元に成り立った精密な操作を得意とした名操縦手。どんな戦車も乗りこなせる腕を持った乗り手——最速の淑女と言われた淑女に向けて。

「アツサム、先に行きなさい。私達は後ろから追いかけるわ」

『了解しました。先に全部倒しても文句は言わないでくださいね』

『できるならしてみなさいな。撃ち漏らしは私達で撃破しておくわ』

『その時はお任せします。では、先に』

通信が切れた瞬間、逃げていく大洗の戦車達を一両の戦車が追うように飛び出した。

白銀の戦車——クルセイダー巡航戦車 Mk. III が今まで抑えていた速度を上げて、疾走した。

「待ってましたわあ！ いっきますわよー！ 最速と言えばこの私！

聖グロの疾風！ このローズヒップが行きますわあー！」

「静かにしなさい、ローズヒップ」

キューポラから赤髪の少女——ローズヒップが身体を出して叫ぶ。

そんなローズヒップを操縦手席からアツサムが窘めていた。

聖グロの疾風、最速の淑女。二人の最速が地を駆けた。

「本当に大丈夫ですか？ アツサム様とローズヒップさん、あの二人にしても？」

「そう？ ペコは知らないの？ あの二人、実は意外と良いコンビなのよ？」

クルセイダーに乗ってる時だけね、とダージリンが続けて話す。

そしてくすくすと笑うダージリンの言葉が、いまいち信用出来ない  
オレンジペコだった。

11. つんつん作戦開始です！

大洗の住宅街に向けて、五両の戦車が走る。

戦車道の試合では、試合中の決められたフィールド内では試合参加者及び審判のみしか立ち入れないようにしている。

そのため今回の大洗対聖グロリアーナの試合では、大洗の人間が全て一時的に試合区間内から退去させられていた。

国が試合の管理をしているからこそできる荒技である。今回の試合中、大洗の試合区間では完全に住宅街は無人の町となっていた。

待ち伏せ作戦が失敗した大洗は、次の作戦の為に住宅街へ移動していた。

大洗の次の作戦は、住宅街を使用した奇襲にも近い作戦だった。

土地勘のない聖グロリアーナを住宅街に誘い込み、住居入り組んだ町の中で不意打ちをする。

大洗の町を知り、小回りの利く操縦を必要とする作戦となる。それがみほが命名した『もつとこそこそ作戦』だった。

本来の予定では待ち伏せ作戦をして、少しでも聖グロリアーナを翻弄してから移動する予定だったのだが、予定と大幅にズレてしまったことから劣勢のまま移動を強いられていた。

IV号戦車が先陣を切り、残りの四両の戦車が追うよう走る。

大洗では今回、聖グロリアーナのチャールとマチルダでは、不整地での速度が遅いことから追いつかれることはほばないと読んでいた。

しかしその想定は大きく裏切られ、大洗の五両の戦車を追う車両が一両現れた。

その音を五両の中で一番後ろを走っていたIII号突撃戦車のキューポラから身を出していたエルヴィンが気づいた。

エルヴィンが後方からエンジンの駆動音が響いたのを聞いて振り向く。そして視界に“その戦車”を取られた瞬間、彼女は慌てて通信



機でみほに連絡していた。

『隊長！ マズイぞ！ アレが来たツ!!?』

後方を走るⅢ号突撃砲F型からの通信を聞いて、みほはすぐにキューポラから身を出して確認した。

大洗五両の後方から、連絡通り聖グロリアーナの四両の戦車を置き去りにして、一両の戦車がこちらに向かっていた。

遂に出してきた。みほの背筋が凍った瞬間だった。

一番出されて欲しくないタイミング。Ⅳ号戦車が一両で逃げている時ならともかく、五両で逃げている状態でアレが追ってくるこの状況を危惧していたというのに。

白銀の戦車。クルセイダー巡航戦車Mk. Ⅲ。

全長約六メートル。重量は二十トン。六ポンド砲のL/43戦車砲Mk. IIIを搭載。そして一番着目するのはナツフィールド・リバティというエンジンを搭載して時速四十三キロメートルという速度を叩き出す戦車だ。

更に加えるなら、この戦車にある調速機というリミッターを解除すれば戦車には、エンジントラブルという代償を払うことで本来戦車には出すことのできない時速六十キロメートルを超える破格の速度を叩き出す。

大洗の戦車では、クルセイダー巡航戦車から逃げ切ることがほぼ出来ない。

そしてその操縦している人間——みほから見ると限り奇妙な操縦をする危険な人間が乗っている。

本来、チャーチルもマチルダに速度を合わせて隊列を組んで走ることなど難しいはずなのに、それを平然と行なっている。

戦車の中身を弄っているとは思えない。それなら他の戦車を使えば良いだけだ。それをしてまでクルセイダー巡航戦車を使う利点がない。

ならば操縦手が精密な操縦をしている。そう考えるのが普通であ

る。しかし本当にそれを実現しているのなら、みほからすればその操縦手は異端としか思えなかった。

仮に百式流が操縦しているなら理解はできる。精密な操縦を得意とする百式流ならば、実現は可能だろう。

ということなら、話は簡単だ。

今、みほ達を追っている戦車。その中にいる操縦手は紛れもなく百式流を知り、そしてその技術を使っている人だと。

和麻が以前に話していたことをみほは思い出していた。

◇

久々の操縦と言えど、長年の経験はなくならない。それを改めてアツサムは実感していた。

去年のあの日から砲撃手としてしか乗っていなかったが、やはり操縦手席の視界は悪くない。自分の思う通りに戦車が自在に動いてくれる感覚がたまらなく好きだったことをアツサムは再確認していた。

「アツサム様！ アツサム様！ あの五両の戦車を倒せばお兄様に会えるんですの!?!?」

そんな心地良い気分を邪魔する大きな声のアツサムの耳に入った。

操縦手席の後ろから大声をあげる赤髪の少女——ローズヒップにアツサムは溜息を吐くのを堪えながら彼女を窘めた。

「声が大きいわ。静かにしなさい、ローズヒップ」

「うう、っめんなさいですの。でも私……! 待ちきれないでございませのよ! 本当にお兄様があつちの学校にいるんでしたらお会いしなくてはなりませんわ!」

落ち込んだと思えばすぐに元気に騒ぎ出す。相変わらず落ち着きがない子だと、アツサムは操縦手席で呆れてまう。

聖グロリアーナでは珍しい気品が足りてない生徒である。しかしそれでもこの学校で数少ない自分の名前に「紅茶の名を冠した」生徒でもある。

それならもつと落ち着きのあるお淑やかな振る舞いをしてほしいと思うアツサムだったが、今時点でもかなり「まともになった」方と思っっている時点で当初のローズヒップのやんちゃ振りが伺える。

「この試合を申し込んできた大洗の話していたことが本当なら、あの学校に和麻様はいるはずよ。私達が勝てたら会わせるなんて言ってくるぐらいなのだからどれほど強いのかと期待してみたけど……大したこと無さそうね」

アツサムが先程のローズヒップの質問に答えながら、落胆の表情を見せた。

先程の待ち伏せ作戦を見た時点で、アツサムもダージリンと同様に大洗の実力がある程度理解していた。

ダージリンと考えは同じく、あの「ドライブアクション」をしたIV号戦車以外は今のところ戦力として見なくて良いだろうと。

「でも妙ね。あの方なら……一両だけ教えるなんてことをしないはずだわ」

アツサムが知る限り、百式和麻はそんなことをしないと知っていた。

それもそのはず、和麻は過去に聖グロリアーナに入学後、クルセイダーチームの一年生の育成をした時のことだ。

和麻はたったの二ヶ月程度で、育成した一年生の中のクルセイダーチームで二年生と三年生のクルセイダーチームを試合で下した。

元々、一年チームが実力がある生徒が多いこともあったが、それを飛躍的に伸ばした百式流の実力を聖グロリアーナに知らしめた出来事だ。

その中で、アツサムも当時二年生でありながらも和麻から教えを受けた。そしてその練習を間近で見っていた彼女は、和麻という人間は人一倍厳しいがやる気のある人を誰一人として見捨てるようなことをしないと分かっていた。

だからこそ、考えられるのは二つ。

ひとつはIV号戦車に乗っている以外の生徒はやる気がなく、和麻が育成をしなかった。

もうひとつは和麻は既に途中と言えど全員を育成していて、先程の待ち伏せ作戦は何かのアクシデントが起きて失敗したと。

前者ならあの拙い作戦も理解でき、そして後者も一応無理矢理だが理由にはなる。

更に前者の理由なら何も考えずに全車両を撃破すれば良いだけ。しかし後者だというのなら、話は変わってくる。

アツサムはそう考えて、和麻ならはどうするかを予想した。

「そうなら操縦手はある程度育ててるはず、それに自分達が勝てる自信があるなら隊長も実力者がいると考えるのも当然」

仮に後者の理由なら、先を走る五両全車両が百式流の教えを受けている操縦手が乗っている。

更にそれを生かせる指示を出せる隊長がいるのなら、聖グロリアーナは負けるとは言わないが苦戦を強いられる。

仮にも「疾風迅雷」も謳われた操縦手の百式和麻がゼロから育てた操縦手がいるチームを、彼を知る者なら油断して見れるわけがなかった。

「あまり甘く見ない方が良いかもしれないわね」

アツサムがそう呟いて、ハンドルレバーを少しだけ強く握り締める。

気合いを入れ直そう。一度だけ、深く深呼吸。

そしてゆっくりと目を閉じて、開く。  
そうすれば、自分は久々に本気になれる。  
そう思つて目を開けたアツサムの瞳が、鋭くなつていた。  
普段から見せる優しい瞳ではなく、そこにあるのは砲撃手として見せる瞳でもなく、操縦手として本気で戦うと決めた瞳だった。

「ローズヒップ、和麻様に会うならちゃんとしなさい。勝ちに行くわ」

そしてその声に、ローズヒップも気付いた。

アツサムのこの声を久々に聞いたと、過去に操縦手として本気で戦つた時にしか出ない頼りになる威圧のある声色だと。

一瞬呆けた顔をしたローズヒップだったが、アツサムの言葉を理解すると嬉しそうに笑つていた。

「まっかせてくださいまし！ あの五両を倒しますでございませうわ！

お兄様が待っていますもの！」

「ギアを上げるわ、指示任せたわよ」

「了解でございませうわ！」

クルセイダー巡航戦車の速度が上がる。

まずは後方にいるⅢ号突撃戦車から、白旗を上げさせよう。



「マズイ、やっぱり私達のところに来たぞ！」

「一直線にこつちに向かつて来てるな……」

「砲塔が回らないのがやはり痛手……！」

Ⅲ号突撃砲F型の中にいたエルヴィン、カエサル、左衛門座の三人が顔を強張らせた。

一番後方を走つていたⅢ号突撃戦車。この戦車は方法が回らない

固定砲台、よって後ろから狙っても撃ち返されることはない。一番に狙われることは読んでいた。

「戦うにしても私達に分が悪過ぎる……どうするべきか」

エルヴィンが考える。しかしこの状況を打破できる作戦などを考えられるわけもなく、エルヴィンは素直にみほに連絡を取ろうとした。

「私は戦ってみたいぜよ。あのクルセイダーと」

しかしそこで、おりようが告げた言葉にエルヴィンは目を大きくした。

まさかおりようがそんなことを言うとは思わなかったと。

「流石にそれはキツイだろう?」

「あのクルセイダー、確か百式が言っていた車両だ。操縦手の人が相当ヤバイって言ってたぞ。私達には無理だろう?」

カエサルとエルヴィンがそれぞれおりようの提案に異を唱える。しかしおりようは、そんな二人に首を横に振っていた。

「二度だけ、戦わせてほしいぜよ。百式に教わって、百式と二回戦ったからわかる。私には“まだ”勝てないくらいわかるぜよ」

普段のおりようが話す声色とは違う声に、エルヴィンが「じゃあなぜだ?」と訊き返す。

その言葉に、おりようは悔しそうに答えた。

強くハンドルレバーを握り締めて、おりようが心から思ったことを。

「今の私がどこまで戦えるか知りたいぜよ。百式に届かなくても、私ができる全部を出し切ってみたい」

そう言われて、三人は顔を合わせた。

おりようが今日までどれほど努力してきたか三人は知っていた。

たまたま始めた戦車道で、Ⅲ号突撃砲F型に乗る四人の中で一番辛い練習を続けてきたおりようの努力。

和麻に嫌になる程に戦車に乗せられ、学校の授業と家で好きな坂本龍馬の本を読む時間を削ってまで戦車の知識を勉強していた日々を見ていた。

弱音を吐いたこともあったが、辞めるといふ選択をしなかったおりようがここまで強く自分の意思を示したことに、三人は困ったような顔をしたが……どこか納得した顔を見合わせていた。

おりようの言葉を聞いたエルヴィンは通信機を取ると、みほに向けて告げていた。

「隊長、こちらエルヴィン。後ろのクルセイダーを足止めしても良いか？」

エルヴィンの言葉に、おりようは思わず操縦手席から振り向いた。

反対されると思っていた。しかしエルヴィンはそんなおりようのように「危ないから前を向いている」と笑って答えた。

『一両だけであの戦車と戦うのは不利です。やめた方が良いかと』

しかしみほは一両でも聖グロリアーナに対して不利になることを危惧してやめるようにと言っていた。

しかしここまで言われたとなれば、折れるわけにもいかない。

「すまない。うちの操縦手が珍しくやる気を出してな、それに応えるのも車長の務めだ。それに誰かが足止めしないと、あのクルセイダー

に全車両がやられる」

確かにこのままだとエルヴィンの言う通りの結果が訪れる。ならば一両が足止めをして、残りの四両が逃げ切ることを優先するべきだと。

みほもエルヴィンの言いたいことを理解した。

しかし、それをしてしまうと——唯一の聖グロリアーナととともに撃ち合える攻撃力のあるⅢ号突撃砲F型を失ってしまう。

この試合に勝てる道筋が、更に狭くなる。

◇

耳から聞こえたエルヴィンの提案に、みほは悩んだ。

そんなみほの顔を不安に思った優花里が、彼女に訊いていた。

「どうしたんです？　西住殿？」

「それが……エルヴィンさん達がクルセイダーの足止めをするって」

「えええ!!？　それ本当ですか!!？」

みほの話を聞いた瞬間、優花里は目を大きくして驚いた。

沙織も華も、みほが言ったエルヴィン達の選択がどういう意味があるかを理解した。

「所謂、撃破覚悟の捨て身ですか？」

「ううん、優花里さんの言い方とは少し違うみたい。おりょうさんがやる気あるって」

「みほりん、それどういう意味？」

優花里の話をみほが首を振って答え、そしてその言葉に沙織が首を傾げる。



「……わからない」

みほ自身も、おりようの意図が分からずにいた。

そしてこのままエルヴィン達を行かせてしまうと、大事な戦力を失ってしまう。それは良くない、更にみほはそれよりも容認できない理由があった。

「だけど私は、仲間を切り捨ててまで勝ちたいって思いたくない。だからエルヴィンさん達に行かせるわけには……」

みほは過去に一度、仲間を見捨てるか助けるかの二択を迫られたことがあった。

去年の戦車道全国大会。そこで起きた事故のことを。

仲間を見捨てれば、全国優勝。仲間を助ければ、負ける。

その二択で、みほは迷うことなく後者を選んだ。

間違えた選択と思っていない。それをしてしまうと自分の筋が通らない、みほはそれを強く心に刻んでいた。

しかしこのままだと、全車両が撃破されてもおかしくない。それも十分にみほは理解していた。

「二両だけじゃ無理だ。あの戦車は止められない」

そこで今まで話していなかった麻子が、淡白に告げていた。

「後ろの戦車。なんとなくだが、あの男と同じ感じがする。一両で戦っても時間稼ぎにならない」

「ならどうするって話してるの！ 麻子は良い案あるの!?!?」

淡白に話す麻子に思わず沙織が声を大きくする。

このままだと状況が変わらないのだからどうするべきかを話しているのに、事実を突きつけても仕方ないと。

麻子は沙織を一瞥して、自分の握っているハンドルレバーを見つめた。

そして面倒そうに溜息を吐くと、麻子はみほに提案していた。

「私達も行こう。二両で行けばなんとかなるかもしれない」

その提案に、麻子以外の全員が目を大きくした。

「私達も倒されちゃうかもしれないじゃん！」

「そうですよ！ 西住殿が倒されたら試合そのものが終わりますよ!!？」

沙織と優花里が反対するが、麻子はまっすぐに前を向きながら答えた。

「どの道、このままだとやられる。なら賭けに出るしかない。私とおりょうさんで後ろのクルセイダーと戦う。撃破できれば良いが、クルセイダーの後ろにいる他の戦車が来るまでの時間しかないから撃破は無理だろう。できても履帯を壊して時間稼ぎくらいだ」

麻子がそこまで話したところで、みほも麻子の提案を理解した。

そしてそれがどれほど難しいか、みほは麻子の提案の難易度に眉を寄せてしまった。

「麻子さん、できると思えますか？」

思わず、みほが訊いていた。

そんなみほの質問に、麻子は即答していた。

「決めるのは私じゃない。西住さんが決めることだ。西住さんのしたようにすれば良い。私は、西住さんの行く道を走るだけだ」

そう言われて、みほは麻子の背中が頼もしく見えた。自分のより小さな背中が、この時は大きく見えてしまう。

みほがどうするべきかを悩む。そんな彼女に、優花里は楽しそうに微笑んでいた。

「西住殿！ 命令してください！」

その言葉をキツカケに、華と沙織も続いて微笑んだ。

「隊長は西住さんですよ」

「私達、みほの言う通りにする！」

「どこへだつて走つてやる」

そして最後に麻子がそう告げて、みほは一拍だけ間を開けて頷いた。

そうだ。自分の好きなようにすれば良いんだと。

和麻が前に言ってくれたように、自分が後悔しない道を選べば良い。

「わかりました！ では私達IV号はエルヴィンさんとクルセイダーの足止めを始めます！」

みほがそう言つて、首の通信機から全車両に通信した。

「全車両、このまま住宅街へ行つてください。私達IV号とIII突は今からクルセイダーの足止めをします」

『隊長!?? それは流石に!??』

エルヴィンから非難の声が返ってくる。

しかしみほはその言葉に、すぐに答えた。

「負けるつもりはありません。私達とエルヴィンさん達、誰も欠けずに住宅街へ行きます」

ハッキリと、みほが言い放った。

その自信のある声にエルヴィンが息を飲む。

そしてしばらくして、エルヴィンから『了解した！』と返答を受けていた。

『西住ちゃん？ 大丈夫？』

「会長、大丈夫です。なのでそちらの三両の指揮を任せます。当初決めたポイントで合流しましょう」

『了解！』

そこまでの指示を出して、みほは深く息を吐いた。

これから神経を使う指示をしなくてはならない。気合いを入れなくてはと。

「西住さん。私の付けてる通信機、使っても良いか？」

麻子が首に付けている通信機を指差して、指示を仰ぐ。

和麻がいざと言う時の為に操縦手に付けさせた通信機、まさかこんなにも早く使うとは思ってもなかった。

みほは麻子に頷くと、通信機のエルヴィンに向けて指示を出した。

「エルヴィンさん、おりょうさんに通信機を使うように言ってください」

みほの指示を受けて、おりょうが通信機を使ったのだろう。

麻子の耳に、通信の音が聞こえた。

『冷泉、聞こえるぜよ?』

「ああ、聞こえ……ます」

『別に無理に敬語は使わなくて良い。やりやすいようにしていいぜよ』

「……わかった」

操縦手同士の通信機が良好なのを確認する。

「通信、大丈夫そうですね。なら行きましょう」

勿論、操縦手の通信は回線が一緒の車長にも聞こえていた。

みほが指示を飛ばす。後ろのクルセイダーじゅに向けて、二両の戦車がUターンした。

前方にクルセイダーが一両。遙か後方に四両の聖グロリアーナ陣の戦車が視認出来る。

「——つんつん作戦開始です!」

みほは意を決して、咄嗟に浮かんだ作戦名を告げた。

## 12. 止めれば良いんです！

IV号戦車にIII号突撃砲F型とクルセイダー巡航戦車が対峙する。クルセイダー巡航戦車に向かい合うように右側をIV号戦車、左側をIII号突撃戦車が駆ける。

互いに距離が縮まりつつある中で、初手に行動を開始したのはIV号戦車だった。

IV号戦車から放たれる砲撃。華が撃った飛翔する砲撃は、確かにクルセイダー巡航戦車の正面へと向かっていた。

「——狙いは悪くないわ。でも、甘い」

クルセイダー巡航戦車に乗るアッサムがポツリと呟いた。

声と同時にアッサムの手足が動く、それに応えるようにクルセイダー巡航戦車が反応した。

IV号戦車の砲撃が、本来当たるはずの軌道を描いていたはずだったクルセイダー巡航戦車の右横を駆け抜けた。

砲撃が曲がって戦車を避けたような錯覚を与える。相手に「動いた」ということを悟らせない僅かな車体移動。

その完成された技術。それは紛れもなくみほが知る技だった。

「やっぱりあの動き……かずくんの！」

初手の砲撃で、みほはすぐに看破した。

注意して見なければ錯覚する動き。和麻が操縦していないはずなのに、あのクルセイダー巡航戦車は行なっていた。

クイツク——百式流がその名を知らしめた動きだと。

それも百式流を知るみほですら見逃すと錯覚してしまう完成度。

その熟練度はみほの見る限り和麻のモノと大差ない。それほど同

じに見えた。

同時に操縦手席から見ていた麻子も思わず眉を寄せた。話には聞いていたが、これほどまで「あの男」と変わらない動きをするのかと。

麻子の中で、目の前のクルセイダー巡航戦車の危険度が増した瞬間だった。

「やっぱりマズイ。こっちもタイミングを間違えるとやられる」

『私はクイックはできないぜよ。一応、やり方は見てるからわかるが……』

麻子とおりよう、そしてアツサムが互いに百式流を知る人間。

つまり互いに手の内がわかる状態。故に、大洗の方が不利だった。

大洗の二両で百式流の一端しか扱えない麻子と知識でしか知らないおりよう。しかしクルセイダー巡航戦車——アツサムの方が百式流の技術を十分に使える。そのアドバンテージがある。

唯一、大洗が有利なのは車両の数だけだ。

しかしみほは、それすらも相手に対して有利を取れていないと察していた。

「もし完璧に車長が私達の動きを指示されたら……」

みほが百式流の真髄、それを危惧した。

百式流が西住流、島田流と並ぶ御三家と言われ、強いと言われる理由は試合中の各車両の生存力にある。

どんな砲撃も回避する運転技術。そして誰にも捕まえられない機動力。

操縦手のみでは、その力は半分も出せない。それを最大限に発揮するのが車長と砲撃手の力が必要だった。

敵が多くても各車両の砲身がどこを向いているか操縦手に的確に伝えられる状況把握、そして相手がどの動きをするか予測する状況判

断。そして一瞬の隙を突いて砲撃する瞬発的な判断。

更に様々な指示があるが最低限にこの三点の指示を車長が完璧に行うことができたとしたら、普通ならまず勝ち目がない。それが速度の百式と謳われた流派の強み。

クルセイダー巡航戦車から顔を出している赤髪の少女に、もしそれをされたら……とみほは考えてしまう。

仮に完璧にできないとしても、ある程度の指示を出せると仮定して考えなければならぬ。それを突破する必要がある。みほは何か案がないか思考した。

操縦技術では明らかに大洗が不利。何か相手の意表を突いた行動をしなければ隙すらもつけない。

大洗で和麻と練習試合をして、みほは未だ一度も勝てたことのない。それなのに和麻と同等の技術を持ち、そして百式流の真髄たるクルセイダー巡航戦車を使われている状態で勝つ作戦を考えなければならぬ。

必死にみほが考えるが、何を考えても彼女の頭には最善の案が浮かばなかった。

「やっぱりあんな風に避けられたら勝てないよ！」

「確かに当たる射線でしたのに……」

沙織と華の驚く声が聞こえる。

そして沙織が頬を膨らませながら、思わず叫んでいた。

「あんな風に動かされたら『動いてない時』に倒すしかないじゃん！」

「……あつ!?？」

沙織の言葉に、みほは天啓を得た。

咄嗟に浮かんだ活路。みほは沙織の言葉に感謝した。そんな当たり前なことに気づかなかつたと。



「それです！　ありがとうございます！　沙織さん！」

「えっ……？　どういうこと？」

首を傾げる沙織に、みほは引き攣った笑みを浮かべて答えた。

「動いてるのがマズイなら、止めれば良いんです」

みほは思い立った作戦を沙織達に伝えた。

そしてみほの口から出た作戦に、麻子以外が声を揃えた。

「それなら危ないですが隙ができるかもしれません！　西住殿、流石です！」

「でもそれだと私達の方が大変じゃない？」

優花里と沙織がみほの作戦にそれぞれが意見する。

しかし麻子は少し考えた表情を見せたが、納得して頷いていた。

「わかった、やろう。相方とタイミングが合わないと無理だが」

「私から伝えます」

みほが通信機に先程の作戦をエルヴィンに伝えた。同時に通信機を使っていたおりようも同じように話を聞く。

『隊長の作戦は面白いと思うが、互いにかなり負担が大きいぞ？』

『いや、それよりも大変なのは冷泉ぜよ……できるのか？』

「それを私がやれと西住さんが言うならやろう。あの男を倒す練習になる」

『相変わらず百式のことになると目がないぜよ……』

エルヴィンとおりよう、麻子が通信で会話する。

その会話を了承と取られて、みほは指示を出した。

「私達が一番危ないですが、それでもエルヴィンさん達がやってくれれば逃げる隙ができますー!」

「だからつつん作戦なんて名前にしたんですか? みほさん?」

華の何気ない質問。みほはそう訊かれてキョトンとした顔をした。

「うーん、そういうわけじゃないかな? クルセイダーにつんつんって邪魔するって思ってたから」

みほが苦笑いして答えた内容に、みほのネーミングセンスはやはりズレているとIV号戦車に乗るメンバーは思ってしまった。



クルセイダー巡航戦車とIV号戦車、III号突撃砲F型の距離が縮まる。

互いに砲撃を開始。しかし大洗側から放たれる二発の砲撃をクルセイダー巡航戦車は苦もなく回避した。

対してクルセイダー巡航戦車からIII号突撃砲F型に放たれた砲撃。それをIII号は大きく左に動きながら、危なげに回避していた。

「やはりIII突はまだできないみたいね」

その動きを見て、アツサムはIII号突撃砲F型に乗るおりようが百式流の技術を習得していないと看破した。

百式流の基礎と言える“クイック”の動き、それができないなら他の技術もできないと思うのも当然だった。

「二両で来るとは強気な姿勢ね。一両だったら負ける気はしないけど……二両、あのIV号が厄介だわ」

もしクルセイダー巡航戦車にⅢ号突撃砲F型が一両で向かってきた場合、アツサムは即座に撃破できる自信があった。

砲塔が回らない戦車な上に、自在に砲塔を回せる技術が操縦手にないのなら攻撃力が高いだけで敵にすらならない。側面に接近し、すれ違い様にゼロ距離で砲弾を叩き込めば良いだけの話だ。

しかし状況は二両の戦車が向かってきていた。IV号戦車の実力もまだ未知数、そしてIV号戦車に気を取られればⅢ号突撃戦車の砲撃があり得る。

どちらの砲撃もまともに直撃すれば撃破される攻撃力を持っている。故に一撃足りともクルセイダー巡航戦車は被弾するわけにはいかない。

なら当たらなければ良い。それが百式流の考え、それが和麻がアツサムに教えたクルセイダー巡航戦車の乗り方。

それを自分に行えば良い。アツサムのハンドルレバーを握る手に、僅かに力が込められる。

一年のブランク。そんなものの身体感覚でねじ伏せてしまうだけだとアツサムは感覚を研ぎ澄ませる。

「アツサム様！ IV号が砲塔合わせてきますわ！ Ⅲ突は左に少しずつ移動してるでございます！」

ローズヒップの指示に、アツサムは操縦手席から視認する。

IV号戦車の砲塔が動く。そしてクルセイダー巡航戦車の左側へとⅢ号突撃戦車が移動する。

「IV号は私が確認するから、ローズヒップはⅢ突の方を任せるわ」「了解ですわ！」

ローズヒップにⅢ号突撃砲F型の動向を把握させる指示をアッサムが出す。

アッサムの視界の外に動くⅢ号突撃砲F型の行動を懸念する。大洗が何か仕掛けてくると。

しかしこちらのすることは変わらない。二両共に撃破。それが結末だと。

まずは目の前のⅣ号戦車を仕留める。アッサムは砲撃手に指示を出した。

「克蘭ベリー、任せたわ」

「了解です！」

克蘭ベリーと呼ばれた少女が照準器を覗き、引き金に指を添える。

実のところ、このクルセイダー巡航戦車には本来の聖グロリアーナの編成ではあり得ないメンバーが乗っていた。

ローズヒップと克蘭ベリー、そしてアッサムの三人はそれぞれが本来は車長としてクルセイダーに乗るはず人間だった。

現在の聖グロリアーナではローズヒップと克蘭ベリーは車長として戦車に乗っている。そしてアッサムは過去に操縦手として戦車に乗っていたが、現在は砲撃手としてチャールズ歩兵戦車に乗る。

しかし今回、ローズヒップが車長として乗り、克蘭ベリーは入学当時は砲撃手として、そしてアッサムは操縦手としてクルセイダー巡航戦車に乗っていた。

過去に自分が一番自信のある担当であった場所に各人が座る。この試合だけの為に組まれた特別な編成だった。

この時点で聖グロリアーナ女学院——ダージリンが選抜したメンバーを乗せた意味。この時点で聖グロリアーナでこの試合に出した一両のクルセイダー巡航戦車の扱いが特別だと言える。

故にダージリンが誇る最強の布陣で投入したクルセイダー巡航戦車——聖グロリアーナが誇る最強と言える攻撃力。それと大洗は対

峙していた。

クルセイダー巡航戦車の全員が、互いに何を望んでいるか熟知している。そして三名全員が百式流を熟知している。

みほは知る由もない。相手の操縦手だけが百式流を知っているではなく、クルセイダー巡航戦車に乗る三名の全員が和麻の手で一度育てられたメンバーしか乗ってないということ。

「撃てっ!!?」

みほの声で、IV号戦車の砲撃が放たれる。

アツサムの視界内で撃たれた砲撃。それを彼女が回避するのも造作もない。

クルセイダー巡航戦車が回避して、すぐに再度IV号戦車が砲撃を放つ。

連続で二度、続けて放たれる砲撃だったがアツサムは撃たれる砲撃の射線を潜り抜けるように走る。

「初心者にしては速いわね。砲撃の間隔は十五秒ってところかしら？」

その時、アツサムはIV号戦車の砲撃間隔を把握した。

目安としてその時間を把握すれば、その時間を管理すれば相手がいっつ砲撃するか手に取るように分かる。

アツサムが把握した時間よりも更に速い間隔で砲撃をしない限り、彼女の意表を突くことはできない。

IV号戦車が出せる最大速度の砲撃。これでアツサムが操るクルセイダー巡航戦車に、決して正面からIV号戦車は砲撃を当てることができなくなった。

「やっぱり回避される。でも……!」

しかしみほもそれを予想していた。

だからこそ、相手が百式流ならばこそ通じるとみほは信じた。

こちらが撃てる最大速度の間隔で砲撃を放った。

これでクルセイダー巡航戦車は、IV号戦車と正面では負けることはないと判断してくれると。

「麻子さん！ 行きますー！」

「了解」

みほの合図と共に麻子がギアを上げ、アクセルを全開にした。

IV号戦車が一直線にクルセイダー巡航戦車に向かった。

「なっ!?? まさか正面に!??」

「こつちにまつすぐ来るでございませすわ」

流石のアツサムも、IV号戦車の行動に驚いた。

正面からの砲撃を回避されると分かっている気にも気にせず突っ込んで来るとは思っていなかった。

驚くアツサムだったが気持ちを切り替える。向かって来るといふのなら、向かい打つと。

「撃てっ！」

「撃てですわ！」

みほとローズヒップが互いに声を上げる。

そして声と共に、互いの戦車から砲撃が飛翔した。

麻子とアツサム。二人の操縦手が互いにハンドルレバー動かし、ペダルを踏み締める。

百メートルしか離れていない至近距離の撃ち合った砲撃を互いに回避していた。

一見同じような動きに見えたが、僅かに麻子の操るIV号戦車の方が

クルセイダー巡航戦車より動きが荒い。

「上手い……」

操縦手としての技術の力量が出た瞬間、思わず麻子は少し顔を顰めた。

しかしアッサムも、この距離で砲撃を回避したIV号戦車に眉を寄せた。

「僅か一ヶ月も経たないで……ここまで」

目視で互いの距離は百メートル。この距離で撃たれる砲撃は一瞬の内に自車両に向かって来る。

アッサムはこの至近距離で砲撃を回避したIV号戦車の操縦手——麻子に驚くしかなかった。

中距離ならともかく、至近距離で砲撃を正面から撃たれるのを怖がらずに見るなんて初心者には無理な筈だと。

それをダージリンの話が本当なら戦車道を始めて僅か一ヶ月も経たない操縦手がした。そしてその中で繊細な車体操作を行った麻子の胆力。アッサムはそれを心から評価した。

間違いなく、目の前にいるIV号戦車の操縦手——冷泉麻子は成長する。自分と同等、もしくはそれを超える存在になると。

「でも今のあなたなら負けないわ！」

その一端を垣間見たとしても、アッサムは負けないと確信した。

まだ発展途中、そんな操縦手に自分が負ける訳がない。

「揺れるぞ。しっかりと掴まってる」

対して、麻子も同じだった。

相手の動きを今一度見てわかった。まだ自分の持つ技術では、到底足りてないと。

クイツク。それは百式流の入門と言える動き。そして最も百式流の名を有名にした技術。それを何度も見てきた和麻と大差ない動きをした。確実に自分よりも上だと分からされた。

さっきの砲撃も、たまたま先程の咄嗟の回避でコツを掴んだクイツクで回避しただけ。まだ自分のモノにできていない。

「今は『まだ』だが、必ずお前も抜く。あの男を倒すなら、お前も私の踏み台にしてやる」

だからこそ、麻子の心に火がついた。

みほの指示をやりきる。麻子は更にアクセルを踏んだ。

「まさかぶつかって来るつもり……!」

次第に狭まる二両の距離。五十メートルを切った瞬間に、アッサムは走る車線を変えないIV号戦車の意図を感じた。

「アッサム様! Ⅲ突が三時の方向から向かってきますわ!」

「ローズヒップ! Ⅲ突の砲塔が少しでも動いたら教えなさい!」

目の前にIV号戦車、三時の方向からⅢ号突撃砲F型が向かって来る。

アッサムは目の前で向かって来るIV号戦車に側面から砲撃を放つか、すれ違うように距離を離すかの二択が迫られた。

しかし三時の方角にⅢ号突撃砲F型がいる時点で停止して砲撃するなど不可。つまり撃破するにはIV号戦車の側面に砲塔を合わせながら移動するしかない。

アッサムはその操作は簡単にできた。しかしそれをするると車体を持たないかもしれないと理解もしてしまった。



不整地。地面が凹凸で歪んだ場所で大きな動きをすると履帯が外れる可能性がある。

しかしここでIV号戦車を倒せば、間違いなく試合で勝てる確信に近いモノがアツサムにはあった。間違いなく、あのIV号戦車は隊長車両だと察していた。

だが初心者のチームの一両と相打ち覚悟で撃破される。そんな姿を百式和麻に見せて良いのかとアツサムが思ってしまった。

見せれる訳がない。そんなお粗末な自分の操縦を和麻に見せることをアツサムは到底許せない。そんな自分をあの方に見られること自体を自分自身が許せなかった。

「くっ……！」

その判断で、アツサムは目の前にいるIV号戦車から左に逸れるように車線を動かしした。

右側にいるIII号突撃砲F型の砲撃の射線から逃れつつ、IV号戦車から距離を離すために。

ほぼすれ違う寸前、車長同士の顔がはつきりと視認できる至近距離。アツサムが取った二択のひとつ。撃破狙いではなく、ひとまず場を仕切り直す為の選択を選んだ。

「それを待ってた」

麻子がギアを上げて、アクセルを踏んだ。

IV号戦車の車線がクルセイダー巡航戦車から見て「左」に動いた。

クルセイダー巡航戦車の側面に向かって、IV号戦車が勢いよく向かっていった。

「マジですのっ!!？」

ローズヒップが大きな声を上げた。

「全員！ 衝撃に備えてください！！？」

みほの言葉に、IV号戦車の全員が身構える。

そしてクルセイダー巡航戦車に乗る三人が気づいた時、IV号戦車はクルセイダー巡航戦車に衝突していた。

不整地でIV号戦車が出せる速度は二十キロ程度。ぶつかると衝撃は大きな大きさではない。

しかしアツサムはこれをされることの意図を察していた。

一瞬でも速度が強みのクルセイダー巡航戦車の足が止まる。それが一番不味いと。

アツサムが衝撃で身体が左右に揺れる中で、車両を操作していた。

「撃てっ！」

「させません！」

みほの指示で砲撃が放たれる。

しかしアツサムはクルセイダー巡航戦車を咄嗟に前へ動かしていった。

紙一重というタイミングでIV号戦車の砲撃がクルセイダー巡航戦車の背後を掠め、そのままクルセイダー巡航戦車は前へ飛び出した。

間一髪だったと安堵するアツサムだったがその時、彼女は思い出したようにローズヒップへ声を掛けた。

「ローズヒップ！ 皿突は！！？」

「えっ！！？ あっ！ どこですの！！？」

アツサムの声にローズヒップがハッと周りを見る。

そして皿号突撃砲F型を見つけた瞬間、ローズヒップは声を大きくした。

「横ですわ！ 横！ 三時の方向からまっすぐこっちに向かってきますわ！」

アッサムがすぐに車体を動かす。アクセルを更に踏み込み、前に進む。

Ⅲ号突撃砲F型から撃たれた砲撃をなんとか回避したクルセイダー巡航戦車だったが、それだけでは終わらなかった。

「Ⅲ突がこっちにまっすぐ向かってきてますわ！」

気がつけば、クルセイダー巡航戦車の側面に向かってⅢ号突撃砲F型が迫っていた。

クルセイダー巡航戦車の砲塔は構造上で前方しか動かない。よってローズヒップ達は攻撃ができない。

クルセイダー巡航戦車とⅢ号突撃砲F型の距離は既に至近距離まで迫っていた。

Ⅲ号突撃砲F型の砲撃間隔では、先程の砲撃から次弾の砲撃までかなり時間がある。

それなのにまっすぐにクルセイダー巡航戦車に向かってくることに、アッサムはすぐにその意図を察していた。

この時、アッサムは不覚にも焦ってしまった。まさかこんな手でクルセイダー巡航戦車を止めてくるとはと。

「こんな手を……！」

アッサムがアクセルペダルを踏み締める。

しかし加速する前のクルセイダー巡航戦車よりも早くⅢ号突撃砲F型が接近した。

「冷泉！ 良い仕事したっ！」

エルヴィンの声と一緒に、Ⅲ号突撃砲F型がクルセイダー巡航戦車の側面に衝突した。

再度、衝撃が二つの車両に走る。Ⅲ号突撃砲F型の衝撃でクルセイダー巡航戦車が少し横に弾き出された。

「ローズヒップ！ IV号の位置は！」

衝撃で横に移動するクルセイダー巡航戦車の中でアツサムがローズヒップに指示を出す。

その中でアツサムが横に移動していくクルセイダー巡航戦車の車体を無理矢理操作していた。

ハンドルレバー、ペダル、ギア。全てを操作して前に進ませようと身体を動かす。

しかし二度に渡る横からの衝撃で最大速度を出していたはずのクルセイダー巡航戦車は既にその速度を大きく落とし、僅かな速度しか出ていなかった。

「IV号は五時の方角！ 砲塔合わせてるでございますわ！」

ローズヒップの目に、IV号戦車の砲塔が動いてクルセイダー巡航戦車に合わせたのが見える。

「華さん！ 撃ってください！」

そして次の瞬間、IV号戦車の砲撃が放たれていた。

至近距離からの砲撃、外すわけがない。間違いなく砲弾の軌道はクルセイダー巡航戦車の側面を捉えていた。

「アツサム様！」

ローズヒップが声を大きくする。

その声の意味をアツサムは分かっていた。だからこそ、彼女はアクセルを全開にしていた。

クルセイダー巡航戦車が動くのと、IV号戦車の砲撃。僅かに速く動いていたのは……クルセイダー巡航戦車だった。

その差だった。

その僅かな差で、側面に当たるはずだった砲撃がクルセイダー巡航戦車の後方——右後ろの履帯に当たっていた。

駒のようにクルセイダー巡航戦車が一回転する。その光景を見て、大洗側は声を大きくして喜んだ。

「クルセイダーの履帯破壊！ このまま撃破を——！」

『今すぐ離脱します！ おりようさん！ 麻子さん！ すぐ場から離脱してください！』

そしてエルヴィンがこのままクルセイダー巡航戦車を撃破しようとするのを、みほが止めていた。

「隊長！ このまま撃破した方が！」

『後方からチャーチル、マチルダが来ました！ 今すぐ逃げないと私達が撃破されます！』

みほからの通信が聞こえた後、エルヴィンの耳に砲撃の炸裂音が響いた。

音が聞こえたと同時に、III号突撃砲F型の付近に砲弾が着弾する。その衝撃にキューポラから身体を出していたエルヴィンが慌てて車内に戻った。

「これは……隊長の指示に従った方が良さそうだ」

エルヴィンが堪らず苦笑いする。

目の前にあるクルセイダー巡航戦車を叩くことより、勝利を選ぶし

かない。

履帯が壊れたクルセイダー巡航戦車の横を、大洗の二両の戦車が慌てて横切つて逃げていく。

その二両を追いかけるように、チャーチル歩兵戦車とマチルダⅡ歩兵戦車が砲撃を放っていた。

『アツサム、珍しいわね。あなたがそこまでやられるなんて』

アツサムの耳に、ダージリンの声が聞こえる。

アツサムは頭を抱えなくなる思いで、通信機に応じた。

「……油断しました。それと申し訳ありません」

『別に問題なくつてよ。あなたを失わなかっただけで運が良いわ。それと……直りそう?』

離れていく大洗の二両。それを見届けて、アツサムが車両から身を出した。

そしてクルセイダー巡航戦車の砲撃を受けた箇所を確認して、アツサムは通信機を手に取った。

「履帯が外れてます。車体は装甲が少し剥がれてるだけで問題ありません……直します」

『それならこつちから人手を貸すわ。一時大洗を追うのをやめて仕切り直した方が良さそうね』

ダージリンがそう言って、通信を終える。

その後、アツサムは壊れた履帯を見た後に大洗が走って行った方を見つめていた。

まさかクルセイダー巡航戦車をあんな手段で止めに来るとはと。

あんな作戦を思いついた人間に、アツサムは呆れるばかりだった。

それとそれを実行したあのⅣ号戦車の操縦手に、アツサムは末恐ろ

しいと心の中で呆れてしまった。

### 13. 休める時に休め

「それにしてもさっきの戦闘は中々だったわ。あんな手で百式流のクルセイダーを止めるなんて」

試合の中継が映されるモニターを見つめながら、亜美が楽しそうに話す。

亜美と同じようにモニターを見ていた和麻も、それには素直に頷いて同意していた。

「俺もそう思います。クルセイダーの方も、あんな手を使われるとは思ってなかったでしょう」

和麻自身も、先程のIV号戦車とIII号突撃砲F型がクルセイダー巡航戦車の履帯を壊す場面を見た時は、正直言って驚くしかなかった。

みほがまさか百式流を止める手段をあんな作戦で行ったことに、和麻はみほの発想に再度驚かされた。

確かに大洗のあの二両で各乗員の能力を考えれば、あれが一番効果的だと思えた。

「やっぱり和麻君も“あれ”をされると対処できないのかしら?」

亜美がからかうように和麻に訊く。

和麻は少し悩んだ顔を見せながら、答えた。

「あの状況で俺が同じくクルセイダーに乗ってたなら、もしかしたら引つかかってたかもしれないね。初心者と舐めてたら、の話ですが」



そうやって、和麻はもし自分が同じ立場ならと想定して考えた。

「対処するなら、きつと俺ならIV号を先に撃破しに行つてたと思ひます」

「あのすれ違いの時かしら？」

亜美が先程の戦闘を思い出す。もしクルセイダー巡航戦車にIV号戦車を撃破する場面があったら、それは互いに至近距離に接近してすれ違つた時だと。

それに和麻は頷いて、続けて話し出した。

「あの場面、クルセイダーは不整地で車体を転回すれば履帯が外れる可能性もありました。でもあの場面ならそうしないと詰まれる可能性もある。だから履帯が外れても良いと覚悟してIV号を攻撃したと思います。それで履帯が外れなければ、そのままIII突を撃破すれば良いですから。」

もし相手が百式流を知ってるなら、相手は普通なら百式流の戦車に下手に近寄らない。なのに近寄ってくるとしたら、相手にはそうしなければならぬ理由があると俺は考えてたと思います」

と言つても結果論ですけどね、と言つて和麻は肩を竦めた。

和麻自身、大洗側の作戦を使われたとしたら本当に気付けるか分からなかった。咄嗟に相手の意図を判断して看破できる自信があるかと言われれば、和麻にはその時にならないと分からないと言えたからだ。

本来、戦う相手が百式流と知られているなら、相手はまずその戦車に接近しない。

中距離から近距離での戦闘に持ち込まれた場合、圧倒的に不利になるからだ。近距離での戦いが得意な百式流に、わざわざ得意距離での戦闘を行う理由がない。

ならばそれをわざわざしたということは、相手にはそれをする意図があると判断できる。

速度の名を謳う百式流。その車両と戦うセオリーがあるとすれば、西住流のように圧倒的な火力で押し潰すのが無難な答えだろう。

それを和麻も理解している。一両に対して、完全に統率のとれた十両が攻めたとすれば生存力の高いと言われる百式流も苦戦する。

少数対多数で戦うことが多い百式流だとしても、数の暴力には勝てない。

数両での自滅覚悟の足止めをした後に、足が止まった戦車を残った叩けば良い。それだけの話だ。

もしくは回避すらできない数の砲弾を叩き込む。時間差などではなく、純粹に同時に砲撃の壁で叩き潰す。これが純粹に百式流を倒す手だと和麻は知っている。

と言っても、それをされると不味いと百式流も分かっているのだから、それを回避する技術を持っているが……それを言ってしまうえば押し問答になってしまう。

とどのつまり、和麻はその場にいる時でなければあの場面のクルセイダー巡航戦車の行動に正解も不正解もできなかった。

「でも……不思議なんですよ」

「何がかしら？」

和麻が不思議そうに小首を傾げたのに、亜美が眉を寄せる。

和麻は少し悩んだように答えていた。

「あのクルセイダーから出てきた金髪の人……多分、操縦手で乗っているとと思うんですけど、今思うと俺はあの人ならIV号を撃破しに行くと思っただけですよ」

クルセイダー巡航戦車から出てきた長い髪をオールバックにした女の子。間違いなく自分の知るアツサムだと和麻は分かっていた。

一年振りに見たが、変わってない。というよりまた一段と大人びた雰囲気が出てきたと和麻は思っていた。

あの人の顔を見た途端、胸が痛くなる感覚に囚われた和麻だったが、それを自分への戒めと思えば素直に受け止めていた。

和麻もまさか自分が聖グロリアーナ女学院から立ち去って約一年間もアツサムが操縦手として戦車に乗っていなかったとは思ってないだろう。

そしてアツサムのIV号戦車とのすれ違い時に、何を思っただろうか。本来勝てるはずだった。選択を選べなかつたかなど知る由もない。

「あの金髪の子ね……上手いの？」

亜美が訊く。何が、と言わないが和麻にはその意味が分かった。

和麻は試合中継がされているモニターを見ながら、昔を思い出して答えた。

モニターの向こうでは、既に住宅街に隠れた大洗の後に続くように、クルセイダー巡航戦車の修理を終えた聖グロリアーナの車両達が住宅街に入っていく場面が映っていた。

「俺が知る限り……天才だったと思います」

和麻が「天才」という言葉を使ったことに、亜美は少し驚いた顔を見せた。

幼少期から亜美は知っていた。和麻はこと戦車道で天才という言葉を使いたがらない。

才能があつても無くても、全ては努力の元に成り立つと和麻は思っている節があつた。

その和麻の考えも、和麻の母である百式一姫が説いた言葉だった。戦車道に於いて、才能に溺れることなかれ。日々の努力が自分の才能を育てると。

だからこそ和麻は亜美の知る限り、過去に一度も数多く会った戦車

乗りの才能がある人に対して天才と呼んだことがほとんどなかった。才能の種があれど、努力という水と栄養をあげなければ育たない。その人間が自分自身をどう思っているかは置いて、和麻自身は努力を惜しまなかった人だからその人はその場に立てたと思っている。

だからこそ、和麻が素直に天才と言ったことに亜美は驚いていた。

「俺が聖グロに居た時期の話ですが、会ってすぐにあの人は操縦で相当努力してきた人だったと思いました。クイツクも、ドライブアクションやアクセルブローと数多い百式流の技術を短期間で習得しました。多分、聖グロの中で一番早く百式流の極意に辿り着けたかもしれない人だったと」

疾風迅雷と過去に謳われた和麻ですら辿り着けない百式流の極意。疾風迅雷の先にある百式流の極み、その頂にアツサムが辿り着けた人だったと言った。

そこまで言い切った和麻の評価に、亜美はクルセイダー巡航戦車の操縦手——アツサムに興味が湧いていた。

「一姫さんが聞いたらスカウトしそうな話ね」

「でしょうね。実際、本当にやりかねないです」

「あの人、自分で良い人材と思ったらすぐに声掛ける癖あるから」

和麻と亜美が揃って苦笑いする。

当の一姫本人が聞いたら機嫌を悪くしそうな話だった。しかし事実なのだから仕方のない話でもある。

そんな話をしているうちに、和麻と亜美が見ていたモニターに変化があった。

その瞬間、二人が揃ってモニターに視線を向けていた。

「さて、これで大洗は最後の作戦ですね。色々と腹立つことがありましたが、運良く五両がまだ生きてる。この作戦で車両を少なくとも二

両は仕留めないと勝ち目がない」

大洗が最後の作戦を使う。

そこで大洗は聖グロリアーナの車両を最低でも二両、もしくは三両以上を撃破出来なければ勝ち目はないと和麻は判断する。

そして一番先に撃破しなくてはならないのは、間違いなくアツサムの乗るクルセイダー巡航戦車。

「上手くいくと良いわね。その作戦だと聖グロも即座の対応はできないから、その間にどこまでやれるか楽しみだわ」

亜美の楽しげな表情に、和麻が苦笑いする。

今回の試合で、和麻は一切口出しをしていない。

正直なところ、その和麻からすれば、今回の試合の全てが危ういと思っただけではなかった。

最初の作戦の砲撃のミスなんて以ての外だ。それに麻子が勝手にドライブアクションを使って相手を煽る行為も、下手に見様見真似の技術を使うなんて試合経験者からすれば鳥肌モノである。

この大洗最後の作戦も、言ってしまうえば大洗側が自分の住んでいる街をどれだけ詳細に「把握」しているかに尽きる。

一応だが和麻もかなり苦労したが大洗町の地図は把握している。その点を踏まえて試合の反省点を考えなくてはならないのだ。

よくあるスポーツのチーム監督もこんな気持ちで試合を見ているのだろうか、和麻は内心で肩を落としたい気持ちになる。

やるが多過ぎて頭が痛くなる気持ちだった。



IV号戦車とIII号突撃ほがクルセイダー巡航戦車を無事足止めしたことで、大洗側の士気は上がっていた。

あの話に聞いていた強豪のクルセイダー巡航戦車を撃破一步前ま

で追い詰めたど、それは必然的にチームの士気を上げていた。

聖グロリアーナがクルセイダー巡航戦車の修理を完了して、ダージリン達が大洗町の住宅街に入った時には既に大洗学園側の準備は完了していた。

『聖グロリアーナ来ました！ 五両全部来てます！』

偵察に向かわせていた八九式中型戦車甲型から典子の通信が全車両に届けられる。

その通信が来た瞬間、みほは全員に指示を出した。

「了解しました。では八九式以外の車両は所定の位置に待機。典子さん、お任せします」

『了解しました！ 大洗は私達の庭です！』

みほからの通信を終えた典子は、すぐ忍に指示を出した。

「よおーし！ 全員！ 相手にサーブだ！」

『了解！』

典子の言葉に、全員が声を揃える。

大洗の最後の作戦。これも待ち伏せ作戦からの地形を利用した不意打ちだった。

本来想定していた予定よりも整った状態での実行、これは実に運が良かった。

聖グロリアーナから無事逃げ切り、大洗町に入った途端に各車長がどこ位置で待機するかを決め、みほが地図で把握する。

そして誘き寄せる役割を一両決めて、各車両が待ち伏せしている箇所を全て通るようにルートを選ぶ。あとはそのルートを相手の砲撃を避けながら通るだけだ。

みほの見立てだと、思った通りに相手が動いてくれれば確実に一両

から二両は撃破できる。

まずは最初の門である。大洗の誘き寄せに聖グロリアーナが何両ついてくるかだった。

「相手のスパイクをブロックだ！ 根性！」

そしてその誘き寄せの役割を担った八九式中型戦車甲型が隠れていた路地から飛び出した。

敢えて、聖グロリアーナの車両に見つかるように飛び出し、そしてそのまま住宅街へと走っていく。

その光景を聖グロリアーナが見逃すわけがない。

八九式中型戦車甲型の後を追うように聖グロリアーナが追いかけた。

典子がキューポラから身を乗り出して確認する。間違いなく五両全車両が八九式を追いかけていた。

「こちらDチーム！ 聖グロの全車両が追いかけて来ました！」

典子からの通信を聞いて、みほは安堵した。まずは一つ目の問題は突破できたと。

『わかりました。では、そのまま予定通りをお願いします。あとその場の判断で予定の各ポイントまでのルートが通れなければ変えても構いません。その際は大きな道は通らないでください。必ず相手の車両が一列に並んで走らなければならぬ道を通るようにお願いします』

みほから最後の指示を受けて、典子は元気良く了承の旨を伝えた。その指示を終えて、みほは「ふう……」と深く息を吐いた。

「西住殿、良かったんです？ やっぱり冷泉殿に任せの方が良かった

んじゃ？」

そんなみほに、優花里が訊いていた。

その質問の意味、流石にみほもすぐに分かっていた。

何故、一番大変な役目——誘き寄せ役を麻子に任せなかったのかと。

「ううん、大丈夫。河西さんがわざわざやるって言うてくれたし……それに麻子さんも最初の作戦とクルセイダーの戦いでかなり疲れているから休んでもらいたいから」

みほが誘き寄せ役に麻子を出さなかったのは、まず第一に操縦手としての疲労を考えてのものだった。

最初の作戦で五両からの砲撃を避けながら逃げ、そしてクルセイダー巡航戦車との戦いでは神経を擦り減らす操縦をしていた。

明らかに他の操縦手に比べて疲労が蓄積しているとみほは判断していた。

少しの間だが、麻子には休んでもらう。これがみほの選択だった。

そして誘き寄せ役を決める際に、八九式中型戦車甲型のメンバーが名乗りを上げたのもひとつの理由だった。

みほも知る由もないだろう。おりようと麻子がクルセイダー巡航戦車の足止めに成功したことに、自分も試合で力にならなくてはと思った人間がいることを。

最初に誘き寄せ役をやりたいと言い出したのは典子だった。

そしてそれを聞いた忍も、すぐに同意していた。

忍も、試合で活躍したいという気持ちが少ないからずあった。

——辛い練習したのに本番の試合で活躍できないことを良しとしなかった。

だからこそ、忍も典子の話に乗った訳だった。



「私は疲れてないぞ。別にやっても良かったのに……」

操縦手席で麻子がむくれていた。

沙織から渡された紙パックのオレンジジュースを飲みながら、麻子が納得がいかない口を尖らせる。

「練習の時に百式君に言われてるでしょ、試合の時は休める時に休めって」

むくれる麻子に、沙織が溜息混じりに彼女を窘める。

みほを含め各車長、そして通信手には予め和麻から試合の注意点を伝えられていた。

砲撃手と装填手、操縦手の乗員に負担を掛け過ぎないこと。これを第一に考えろと和麻から全員に伝えられている。

装填手は重い砲弾の装填で身体に疲労が溜まる。砲撃手は砲撃を続ければ神経を擦り減らす。そして操縦手は身体と神経を擦り減らす。

だから和麻はこの三つの担当に時間がある時は適度に休ませろと言われていた。それを管理するのも車長とそのサポートで通信手だと。

それに付け加えるなら、和麻は車長と通信手も神経を使うから休める時に自己判断でしっかり休めと言われていた。

その言葉にあやかっつて、沙織も麻子と同じように呑気に紙パックのオレンジジュースを飲んでいた。

「あの男の言い分なんて知らん」

「じゃあ試合終わった後、百式君に言っとくからね？」

「……………鬼か、沙織」

沙織の反論に、麻子が目を大きくして震えていた。

まさかそんな言葉が沙織の口から出ているとは、麻子は思いもしなかった。

「麻子、こういう時に百式君のこと出せば大人しくなるから」  
「くうう……」

反論できない麻子だった。事実、麻子がこと戦車道の練習や練習の遅刻で和麻の言いつけを守らなかった時はことごとく彼女は罰を受けていた。

それに対して武力で対抗する麻子なだけに、日に日に和麻と麻子の闘争は大きくなっていった。

しかし沙織達から見れば、犬猿の仲に見えるかもしれないが実は仲の良い二人と思われているから当人達にとってはタチが悪い話だった。

「とりあえず磯部さん達に任せてみましょう。こちらはまだ五両いますし、相手は町の入り組んだ地形も分からないから大丈夫」

みほがそう言って締める。

その言葉に、全員が八九式中型戦車甲型からの通信が来るまで、肩の力を抜くことにした。

## 14. クルセイダーの上手い使い方

練習と本番は違う。それは経験上知っていたが、改めて理解させられる。

ハンドルレバーを握る河西忍の手に、僅かな汗が滲む。

背後から怒涛に撃たれる砲弾の炸裂音、そして着弾する音。

練習では修理の関係で実弾よりも照明弾を多く使っていたので、その実弾が生み出す音が忍の心を締め上げた。

大洗の住宅街を八九式中型戦車甲型が走る。路地を曲がり、更に路地を曲がる。直線では左右に動いて砲弾に当たらないように気を張り続ける。

絶えず聞こえてくる砲撃の音に、忍は戦車の操縦を間違えないようにするのに必死だった。

後ろから来る圧迫感の中で、こんなことを冷泉麻子はやっていたのかと忍は驚いていた。

尊敬さえできた。戦車に乗った期間は自分と変わらないはずなのに、ここまで差があることに忍は嫉妬心などではなく素直に尊敬の念を持っていた。

「後ろからスパイクの準備！ アタックが来るぞ！」

「次の路地を右に曲がって！」

典子からの警告。そして地図を膝の上で広げている通信手の近藤妙子から指示を受けて、忍が手足を動かす。

路地を曲がった瞬間に砲弾が通り抜けていく音が鳴り響いた。

「キャプテン！ 猛烈なアタックです！」

「耐えるんだ！ もう少して皿突がある地点に着く！ まずはそこま

で軽快にレシーブ！」

車内の後ろで典子と砲撃手の佐々木あけびが騒ぐ。

いつもなら忍も二人のテンションに乗っていたが、正直なところそんなことをしてる余裕が彼女にはなかった。

自分がミスれば車両が撃破し、全員が退場する。しかも自分から誘き寄せ役を言い出した以上、作戦が破綻するミスなんてしなくない。

妙子の指示を聞き逃すわけにもいかない。忍は神経を使って操縦していた。

「こちらDチーム！ そろそろⅢ突の地点を通ります！」

『了解した！』

典子がエルヴィンに連絡する。その連絡にエルヴィンは待っていたと言わんばかりにⅢ号突撃砲F型の乗員に指示を出した。

住宅の並ぶ中にある細い路地。そのひとつにⅢ号突撃砲F型が車を潜めていた。

そして典子の連絡から数分も経たない内に、Ⅲ号突撃砲F型に乗るエルヴィン達の耳に戦車の駆動音が聞こえてきた。

「よし、左衛門座。生徒会みたいにミスしないでくれよ。八九式が通ってから撃て」

「流石にそれはしない。エルヴィンも見間違えたら笑えない」

「そりゃそうだ」

エルヴィンの煽りと左衛門座の返事に、二人揃って苦笑いする。

最初の作戦でとんでもないミスをしてしまったが、運良くⅣ号戦車は撃破されなかった。流石にあの後で同じミスをするのは笑えない。それこそ和麻に何を言われるか分かったものではない。

そんな二人の会話が終わるなり、エルヴィン達の耳に入る戦車の駆動音が大きくなっていく。

すぐそこにいる。Ⅲ号突撃砲F型に乗る全員に緊張感が走った。

左衛門座が照準器を顔を近づける。装填は既に万全。あとは覗く照準器の先に相手の戦車が見えたら引き金を引く。たったのそれだけがいい。

そして遂に、エルヴィン達の前を八九式中型戦車甲型が通り過ぎて行った。

八九式中型戦車甲型が通り過ぎてすぐに待ち望んだモノがやってきた。

全員の目にマチルダⅡ歩兵戦車が映る。そして左衛門座の照準器の先にマチルダⅡ歩兵戦車の側面が見えた。

「撃てッ！」

その瞬間、エルヴィンの声が車内に届く。

あとは手筈通りだった。左衛門座が引き金を引き、車体に砲撃の余韻が走ることになる。それを身体で感じたおりようが即座にペダルを踏み抜けば良い。

Ⅲ号突撃砲F型から砲弾が、元より大洗の車両の中で一番の威力を持つ砲弾が超至近距離から撃たれた。

瞬く間に、Ⅲ号突撃砲F型の砲弾がマチルダⅡ歩兵戦車の側面装甲を抜いた。

軽い爆発と煙が上がり、そしてマチルダⅡ歩兵戦車の車体から白い旗が飛び出す。

戦車道に於いて、戦車から白い旗が飛び出した意味——それは行動不能による撃破判定だった。

大洗の初めて敵車両の撃破。それをⅢ号突撃砲F型が行った瞬間だった。

「良しッ！ マチルダⅡ撃破！ 一時離脱する！」

即座におりようが車両を後方に退避させながら、エルヴィンがマチ

ルダⅡ歩兵戦車から白旗が出たのを確認して、通信機に歓喜の声をぶつける。

大洗の各車両から歓喜の音が響いた。これで聖グロリアーナに対して、車両数で有利を取れたと。

このまま作戦が進めば、更に敵車両を撃破できるかもしれない。

誘き寄せ役の八九式中型戦車甲型に乗る典子達は、更に士気を上げていた。

この作戦の中核を担う自分達が活躍している。そのことに典子達は心を躍らせていた。



一両撃破されたことに、ダージリンの眉が寄せられた。

町に入った時点で予想していたが、まさか本当に車両数で有利を取られるとは思っていなかった。

マチルダⅡ歩兵戦車を待ち伏せて撃破したⅢ号突撃砲F型が路地の中に消えていき、変わらず自分達から逃げている八九式中型戦車甲型を見て、オレンジペコはポツリとダージリンに進言していた。

「やはり誘われてますね」

「ええ、やっぱり地の利を取られるのはマズイわね」

この時点でダージリンは大洗側の作戦をおおよそ理解した。

あの一両を囮にして、残りの車両を待ち伏せさせている。そしてその地点を通過する度に撃破していく。

地の利を生かした良い作戦だ。それに逃げるという点で、操縦を生かす百式流は更に相性が良い。

八九式中型戦車甲型の運転を後ろから見ているが、まだ拙いながらも淀みなく左右に動いているのを見れば目の前の車両も間違いない

百式流の教えを受けていると分かる。

アツサムからの情報では、Ⅲ号突撃砲F型は百式流の技術を習得していない。今のところ、危険視する必要があるのはⅣ号戦車だけ。

しかしダージリンの知る限り可能性は「かなり低い」が、他の車両も百式流を使えると想定した方が良い。

そもそも操縦して一ヶ月も満たない操縦手が百式流の技術を使えるのがおかしいのだ。

ダージリンもアツサムと同意見で百式流を使うために最低限必要なのは、相手の放つ砲弾を正面から見ても怖がらないこと。

これを初心者ができること自体が戦車道経験者からすればあり得ない。試合に慣れた選手でも、近距離で正面から砲弾を撃たれば戦車の車内に居ても怖いと思う選手は多いのだから。

「普通に追い掛けても不利になるわ。そうね……なら、私達も仕掛けてみるのも良いわね」

まずは砲撃して逃げていくⅢ号突撃砲F型に一両向かわせなくてはならない。そしてダージリンは通信機を手に取った。

「アツサム、どうかしら？」

『今、地図を広げてますが……流石に道を短期間で全部覚えるのは困難です』

想定範囲内。ダージリンは特に表情を変えずに続けた。

「遊撃、できそう？」

『それは問題ありません。元々、クルセイダーはその為にありますから』

「なら私達は八九式を追い掛けるわ。アツサムとローズヒップは〃と〃りあえず〃Ⅲ突を追って。その後は遊撃として動いてもらおうわよ。良いわね？」

『了解でございますわ！ アッサム様！ いつきますわよ！』

『だから静かにしなさいとあれほど……』

『さつきは油断したただけですわ！ この聖グロの疾風が簡単に負けるわけありませんのよ！』

『はあ……』

アッサムとローズヒップの騒がしい会話を最後にダージリンが通信機を終える。

隊列の一番後ろにいたクルセイダー巡航戦車が、Ⅲ号突撃砲F型が消えていった路地に曲がっていくのをダージリンとオレンジペコが見送った。

「このまま追っても大丈夫なんです？ またこちらの車両が撃破されるかもしれませんよ？」

思わず、オレンジペコがダージリンに進言する。

ダージリンは紅茶を飲みながら、オレンジペコの言葉に首を横に振っていた。

「ペコ、私達の流儀は浸透強襲戦術よ。その流儀を変える気はないわ。私達は、私達の流儀で大洗を倒すだけ……でも今回はその流儀に加えて、少し変わった手で行くわ」

聖グロリアーナの得意戦術——浸透強襲戦術。敵の陣地にその名の通り“浸透”する作戦。相手の陣に乗り込み、内側から相手の陣形を崩すことだ。

今まさに聖グロリアーナの戦車達は、大洗が敷く陣形に乗り込んでいる。あとはこの陣形を、相手の作戦を崩す手を出せば良いだけだ。

そんなダージリンがカップをソーサーの上に置くと、オレンジペコに小さな笑みを見せていた。



「それに誰も八九式が走る道順通りに走るなんて言っていないわ……ねえ、ペコ？　こんな言葉を知っているかしら？　視点を変えれば不可能が可能になる」

「ハンバニル・バルカですね」

オレンジペコの返事に、ダージリンが満足そうに頷いた。

ダージリンの視線の先に、八九式中型戦車甲型が走るのが見える。敵から逃げているという点、誘われているという点を不利とは捉えず、他の見方をすれば新しい見方が出てくる。

「見方を変えれば、八九式の進む先に相手の車両はいるのよ」

「……はい？」

オレンジペコが首を傾げる。当たり前なことを話し出したダージリンの話が、彼女は意味がいまいち分からなかった。

「この大きな町で隠れて探るのが大変な車両のいる場所をわざわざ教えてくれるのなら、こっちにもやり方はあるわ」

楽しそうにダージリンが通信機を手取る。

そしてダージリンが全車両に向けた指示を聞いて、オレンジペコは目を大きくした。

そんなことができるのかと、オレンジペコがダージリンに訊いてしまふ。

ダージリンはくすくすと笑うと、楽しげに答えた。

「忘れてはいけないわ。誰もクルセイダーチームだけが和麻さんに教わったわけじゃないの。私も、和麻さんから色々なことを教わったのよ」

クルセイダーの上手い使い方を。  
そう最後に言ったダージリンの言葉に、オレンジペコは素直に驚くばかりだった。



「無事、一両撃破できましたね！ みほ殿！」

「うん！ 機部さん達が頑張ってくれたからだよ！」

エルヴィンからマチルダⅡ歩兵戦車を撃破したと連絡を受けて、IV号戦車ではみほ達が喜んでいた。

早速、みほが開いていた地図に印をつける。まずは一両撃破。

ここから次の五百メートル離れた地点にはM3リーが待機している。超至近距離でなら、M3リーでもマチルダⅡ歩兵戦車を撃破できるかもしれない。

しかしみほは忘れていた。

今の自分達の大洗では、みほ以外が初心者ということ。

目の前の大きな戦果を得た時、人は油断する。

だからこそみほは耳から聞こえた通信を聞いた瞬間、そのことを思い出してしまった。

大きな戦果を得た後でも油断してはいけないと指示を出さなかったことをみほは悔やむことになる。

『先輩！ M3リーが撃破されました！ 本当にごめんなさい！』

「えっ………!?？」

梓の通信に、みほの背筋に寒気が走った。

「澤さん！ 全員怪我はありませんか!!？」

『全員大丈夫です!』

「良かった……! どの車両に撃破されました!?!」

撃破された車両はその後は審判に撃破判定を確認された即座に隊員は退場となる。そして退場した後の選手は試合中にまだ試合に参加している車両との連絡は禁止される。しかし上空にヘリコプターで監視している審判に撃破判定が確認される前の僅かな時間で、みほは情報を聞き出ししていた。

そして梓がすぐに答えた。その車両の名前を聞いて、みほは眉を寄せることになる。

『クルセイダーです!』

その言葉を最後に、梓からの通信が途絶える。

みほはすぐに本来クルセイダー巡航戦車を追っていたはずのⅢ号突撃戦車に連絡していた。

「エルヴィンさん! クルセイダーはどの地点で居なくなりました!?!」

『すまない! 逃げていたらいつの間にか居なくなっていた! こちらの確認不足だった!』

エルヴィンの返答を受けて、みほは広げた地図に目を向けた。

「磯部さん! 今そちらに何両追いかけて来てます?」

『三両追って来てます!』

「M3リーが撃破されるのは見ましたか!」

『いきなり路地から煙が出てきたのしか見えなかったです!』

地図を見ながら、みほが頭の中で先程の話を思い出す。

M3中戦車リーが撃破。Ⅲ号突撃砲F型を追っていたはずがいつ

の間にか姿を消した。そして典子が話していたことから察するに相手は突如どこからともなく現れてM3中戦車リールが撃破されたと。

細い路地から前方しか見ていない状況で、目の前からクルセイダー巡航戦車が現れて撃たれるとは考えられない。

つまり相手は、M3中戦車リールが隠れていた路地の後ろから攻撃をしたとしか考えられなかった。

そこまで考えて地図を広げたみほが、ハッと息を飲んだ。自分ならどうするかと考えて思いついた策、まさかそんな手を聖グロリアーナが使うことがあるのかと。

地図の上に指を当てて道をなぞっていく。そして何かに気づいたみほはすぐに通信機から全車両に連絡した。

「全車両！　いますぐその場から離れてください！　このままだと背後にクルセイダーが来ます！」

みほはそう指示出して、地図と睨み合う。

そんな慌てて様子のみほに、沙織達が困惑していた。

「みほ、一体そんなに慌ててどうしたの？　たまたま見つかって撃破されただけじゃ……？」

「そうですよ、みほ殿。こんな大きな町で隠れてる戦車を意図的に見つけるのはほぼ不可能です」

沙織と優花里がみほの慌てように首を傾げる。

しかしみほはそんな二人に首を横に振っていた。

「いえ、違います。このままだと確実に相手にバレてしまいます」

みほがそう断言した。

そんな慌てていたみほを見て、麻子がおもむろに沙織が持っていた地図を手取る。

その地図には各車両が隠れている地点が記入されていた。そして進む予定のルートも細かく書かれていた。

Ⅲ号突撃ほ居た地点からM3中戦車リーが隠れていた地点のルートを麻子が目で追っていく。

そしてなるほど気づいた麻子は、淡々とみほに告げていた。

「そういうことか……外周りで走って来てるのか、クルセイダーは」

麻子の発言に、みほは驚いて頷いていた。

「そうです。よく気づきましたね、麻子さん」

「地図を見てたらわかった。これならこっちの位置がバレてもおかしくない」

みほと麻子が互いに分かっているように話しているのを、他の三人がキョトンと顔を見合わせた。

「みほさん、どういうことですか？」

思わず、華がみほに訊いていた。

みほは全員に地図を見せて、地図に指を当てて説明した。

「相手は八九式の走っているルートをそのまま走って来てます。そのルート of 路地にこちらの車両は隠れてましたが、このルートの左右の道を見てください」

沙織と優花里、華がみほの広げる地図を見つける。

みほが指差す色で線を引かれたルート。それに合わせたようにもう一つの道が書かれていた。

「相手は八九式が走ってるルートに合わせて、クルセイダーを外周り

の要領で走らせたんです」

「……つまり、こっちの隠れてる車両の背後を取れるように走ってるってことですか!?!?」

優花里が目を大きくした。沙織と華も同じように驚いていた。

「そうでなければ説明できません。待ってるこちらの車両に戦車の駆動音が至近距離から聞こえたら、前と後ろから両方聞こえても注意してなければ気づけません」

「でも外周りで走ってるなら普通は追いつけないんじゃないの?」

沙織が疑問をみほに告げる。

本来の道より遠回りになるような道を走っているなら、移動する距離が多い時点で追いつけるはずがない。

しかしみほはそれは聖グロリアーナにいる一両の車両がいるからこそ可能にしたと判断した。

「それはクルセイダーならできます。整地ならクルセイダーの速度はかなり速いです。しかもかずくんと同じ百式流を使える人なら、細い路地も苦もなく最速で曲がれます……多分、本来走ってるルート車両より少し早く走れてるかもしれません」

そうでなければ先手を打たれた説明ができない。

聖グロリアーナのチャーチル歩兵戦車とマチルダⅡ歩兵戦車が八九式中型戦車甲型の走るルートをクルセイダー巡航戦車に逐一報告し、そのルートに合わせて並走していなければ大洗の待ち伏せている車両の背後を先手で取れない。

「そんなことできますか? あちらは大洗の町を知らないのに……戦車が隠れてる路地を簡単に探すのは無理では?」

華の意見も確かだった。

八九式中型戦車甲型が予定していた走るルートは僅かにズレている。敵車両からの砲撃を逃れるために不規則に路地に入ったりなどをしているので、そのまま順当にクルセイダー巡航戦車に外周りで走りせても普通なら簡単ではない。

しかし聖グロリアーナがそれをしている可能性があるとするれば、安易に考えて今の作戦を続行しても大洗の車両が撃破される確率の方が高い。

みほはその判断をした。聖グロリアーナがわざわざ隊列から外してクルセイダー巡航戦車を遊撃に回している。それだけでその可能性が強いと判断していた。

「待ち伏せは中断です！ 次の作戦です！ 全車両はその場から離れ次第、地形を利用して敵を攪乱して応戦してください！」

そしてみほが通信で全車両に指示を出す。

本当なら二両から三両まで撃破してから使いたかった作戦を前倒しで使う。

この町を知る大洗の人間だからこそできる手。視野の狭い住宅街で相手を分散、そして攪乱させて撃破する。

これで決定的にこちらに有利にできなければ、大洗の敗北が彼女達の背中に張り付いてくる。

「私達のIV号戦車は一番離れている位置なのでまだここに居ても大丈夫。でもこのままだと他のみんなが……」

みほが顎に手を添えて考える。

しかし今から使う作戦は、各車両の自由行動になる。

みほが把握できる範疇を超えている。それこそ頭上から相手と味方の車両をすべて把握でもしてなければ不可能だ。

そしてみほの乗るIV号戦車より、残る三両は聖グロリアーナの車両

と近い距離にいる。

互いに残る車両は四両。とりあえずは先に大洗が聖グロリアーナの車両を撃破したい。

「麻子さん、この町の地形は覚えてますか？」

「大体は覚えてる」

「わかりました。では私達IV号も向かいますよ。こちらが着く頃には相手の車両が分散していれば戦います。分散していなければこちらの火力でまず一両倒します」

「了解」

みほの指示を受けて、麻子がIV号戦車を走らせる。

それに合わせるように華はいつでも砲撃が撃てるように身構え、優花里が装填準備を開始し、沙織が地図を膝の上で広げる。

大洗の住宅街で、計八両の戦車の鬼ごっこが始まった。



## 15. 戦車に乗るのが楽しい

大洗の町中を八両の戦車が走る。

大洗女子学園は聖グロリアーナ女学院の一手でM3中戦車リーを失い、残りは四両となった。

対して聖グロリアーナ女学院も大洗女子学園の一手でマチルダII歩兵戦車を一両失ったことで、残りの車両は大洗と同じく四両。

M3中戦車リーを撃破された時点で、みほは聖グロリアーナの手を推察して即座に作戦を変更する。

それと同じくして、ダージリンも予想よりも早く大洗女子学園が即座に動いたことに意外と言いたげに驚いていた。

「思っていたより早いわね」

紅茶を一口飲んで、ダージリンが僅かに微笑む。

八九式中型戦車甲型をチャーチル歩兵戦車とマチルダII歩兵戦車が追いかけているなか、別行動をしているクルセイダー巡航戦車の通信で得た情報からダージリンも推察していた。

先程からわざと遠回りさせていたクルセイダー巡航戦車から敵車両発見の連絡が一向に来ない。加えて、聖グロリアーナの車両が大洗の作戦通りに誘き寄せられているはずなのに、先程のマチルダII歩兵戦車が一両撃破されてから現時点までの間、未だに自車両が撃破されていない。

ダージリンが察するに仕掛けてきた大洗の作戦は八九式中戦車甲型を囿にした待ち伏せ作戦のはず、しかしその待ち伏せが一向に出てこないということは——待ち伏せをしていたはずの車両が全て一時離脱していると考えるのが妥当だろう。

更に先程までチャーチル歩兵戦車に乗るダージリンの視界に取ら

れていた八九式中戦車甲型が、路地を明らかに先程よりも細かく曲がっていた。

ダージリンが見る限り、先程までの動きとは違う。先程までは逃げるように自分達を誘き寄せていたはずが、今はこちらから姿を消して逃げ切るという強い意志が感じられる動きだと思えた。

「バレてるわね。もう一両か二両は撃破したかったのだけど」

「えっ……もうですか？」

「ええ、向こうの隊長さんは随分と頭が回るみたいだわ」

驚くオレンジペコに、ダージリンが頷く。

一向に待ち伏せしてはるはずの敵が姿を見せない。八九式中戦車甲型が全力でダージリン達の視界から姿を消そうとしている。その二つの要因で、ダージリンも結論は出ていた。

聖グロリアーナが大洗の車両を一両を撃破しただけで、大洗はダージリンが仕掛けた作戦を看破していると。

おそらく八九式中戦車甲型を追う聖グロリアーナ車両の中にクルセイダー巡航戦車が居ない状態で、大洗が自分達の車両を不意打ちで撃破された時点で知られたに違いない。

それをあえて「偶然」と思わず、相手が意図して行つたと大洗は即座に判断したのだろう。

その判断を即座にした。その点にダージリンは素直に内心で驚くだけだった。

「でもダージリン様、正直さっきのはかなり危なかったと思いますよ？ もしクルセイダーが走ってる道の反対側に大洗の車両が居たら、どうされるつもりだったんです？」

「その時は素直に撃破されるしかなかったかもしれないわね。でも、私達の方が早かった」

オレンジペコの質問に、ダージリンがくすくすと楽しそうに答え

た。

ダージリンも、ある意味で言えば「賭け」に勝っていたのだ。クルセイダー巡航戦車が隠れている車両を見つけられる確率は、実のところ半分しかなかった。

八九式中型戦車甲型が逃げている道に対して、クルセイダー巡航戦車がその道を外周りか内回りをしようとしても、その道に対して左右の道のどちらかひとつしか走れない。

仮にクルセイダー巡航戦車が走る道が違えば、大洗側の隠れている車両を見つげられずに聖グロリアーナの車両が撃破される。

しかしその撃破されるといふ確率を聖グロリアーナが背負うなかで、聖グロリアーナのクルセイダー巡航戦車が先手で大洗の車両を半分の確率で見つげられたのは、ダージリンにとつて実に面白い結果だった。

「それに大洗は、あのまま作戦を続けなかった。知ってか知らないかは分からないけれど、このまま私達のクルセイダーに見つかるとは確率が「半分」と分かった上で作戦を続行して、もし先に見つかってしまった時点で自車両を失ってしまうリスクを戦略面で劣勢になることを考えてすぐに作戦を変えたのね……あつちの隊長さんは初心者ではなく、頭の回転が早い良い隊長だわ」

作戦を変えた判断した大洗に、ダージリンが素直に褒めていた。

大洗の隊長は、随分と機転が利く人間だと。

ここまでしつかりとした判断ができるということは、明らかに初心者ではない。

大洗にいる隊長は、実に良い隊長だとダージリンは素直に思う。今までダージリンが会ったことのないタイプの人間だと。

操縦技術において異端と言われる百式流を使うクルセイダー巡航戦車をたつたの二両で強引に足止めした定石とは違う異様な策、そして今回の判断の早さ。

大洗の隊長はダージリンが思うに、おそらく突発的な状況変化に対

しての対応が早くて上手い人間だと。

初心者の集団を使って、ここまで聖グロリアーナと善戦していることを考えても十分に評価に値する。ダージリンが戦っていて面白いと思える珍しい相手だった。

「形が違えば、もっと楽しい試合になったかもしれないわね……」

「なにがですか？ ダージリン様？」

「独り言よ。気にしなくていいわ」

つい言ってしまったことに、ダージリンはオレンジペコに首を振って誤魔化した。

実に残念だった。百式和麻の件が無かったら、もっと違う気持ちで試合ができていたかもしれない。どちらにせよ、自分達が勝つという気持ちは変わらないが。

この試合に勝てば、百式和麻に会える。

その気持ちだけで、今は戦えば良い。

この試合がどれほど「楽しい」と感じて、それだけは譲れない。

ダージリンは遂に自分達の前から八九式中型戦車甲型が姿を完全に消したのを確認して、そつと通信機を手を取った。



「やられた。これを聖グロがするとは思わなかった」

モニターに映っている光景に、和麻は苦笑いして肩を落とした。

まさかダージリンがクルセイダー巡航戦車を「その形」で使うとは思わなかった。

ダージリンがまさか半分しかない確率の手を使うとは和麻も思わなかった。

「珍しいわね。聖グロがあんな賭けに出るなんて」

「ええ、もつと堅実に行くと思つてました……いや、あの状況だと聖グロにクルセイダーがあるなら『ある意味』堅実かもしれません」  
「半分しかないのにな？」

亜美も、聖グロリアーナの策は理解していた。

しかし聖グロリアーナなら、真つ向から対抗していくと亜美は思つていた。

純粹に重装甲で無理矢理敵陣に乗り込み相手の陣形を崩す。これが聖グロリアーナの戦術。大洗にいる車両なら聖グロリアーナの装甲を簡単には抜けないはずなのだから、いつも通りの戦術で戦えば良かったのではと。

「いいえ、半分もあれば十分です。どの道、あれをされた時点でみほは作戦を変えるしかない」

「……そうね。大洗の戦力を考えたら、一両でも失うわけにはいかなしいし、安易にあのまま作戦を続けるのも危険」

亜美の言葉に、和麻が頷く。

大洗からすれば、半分の確率で車両を失うデメリットがある作戦を続行する訳がない。みほなら、確実に作戦を変えると和麻は確信していた。

「仮にあの作戦を『偶然』と思つて続けて更にもう一両撃破された後でも、みほはすぐに作戦を変えたでしょう。結局、その判断が遅いか速いかです。でもみほはその判断を即座にした。それだけ半分の確率はそれだけデカイのを分かつてる証拠ですね」

どこにいるか分からない隠れている車両を半分の確率で見つけられる。和麻ならその確率ならダーズリンと同じように同じ作戦を絶対に使うと思つた。

隠れている車両を相手よりも早く見つけられる確率なんてとてつ

もなく低い。それが半分まで確率が上がるなら、喜んで使うと。

「おそらくクルセイダーがいなければ、聖グロはこんな手は使わなかったはずです。クルセイダーがいるからこそ使える手だ」

「あんな手、よく思いついたわね」

亜美の言う通りだった。和麻も同意だった。

ダージリンがクルセイダー巡航戦車を相手の裏を突くような使い方をするとは思えない。

よくもあんな手を思いつく、誰がそんなことを教えたのか？

「……あ」

そこで和麻は思い出してしまった。

「どうしたの？ 和麻君？」

「いえ……なんでもありません。ちよつと昔のことを思い出しただけで」

小首を傾げた亜美に、和麻が戯けて答える。

和麻はつい言えなかった。ダージリンに攪乱や奇襲以外でクルセイダー巡航戦車の「本来以外」の使い方を教えたのが自分自身だったとは。

聖グロリアーナに入学した時、ダージリンとその手の話を嫌と言うほどしたことがある。

まさか、と言うより流石と思える。ダージリンの記憶力に、和麻は感心していた。

「このままだとクルセイダーに全部倒されるぞ、みほ」

気づくとモニターの先には、Ⅲ号突撃砲F型がクルセイダー巡航戦

車に追われている場面が映されていた。

一両対一両の戦い。それは百式流が最も得意とする戦いだ。その段階に持ち込まれた時点で、大洗はかなり不利を背負っているのは明白だろう。

百式流を使うたつた一両のクルセイダー巡航戦車に対抗するには、それこそ数で戦うしかない。

みほならどうするか、和麻は背中がひりつく気持ちでモニターを見つめていた。

◇

『こちらチーム、すまない！　クルセイダーにやられた！』

みほの耳に入ったエルヴィンの通信。それを聞いて、みほは背筋を凍らせた。

早すぎる。まだIV号戦車を動かしてから数分も経っていない。

「皆さん！　怪我はありませんか!??」

『全員大丈夫だ！　それよりもすまない！』

「怪我がないから良かったです！　撃破されたのは気にしないでください！　あとクルセイダーに見つかってからどのくらいで撃破されました!??」

みほが審判に撃破判定される僅かな時間で情報を聞き出す。

しかしエルヴィンからの返事に、みほは再度驚かされる。

『五分も経ってない。見つかって逃げようしたらいつの間にか追いつかれていた』

「分かりました！　エルヴィンさん達が撃破されたポイントを教えてください！」

そしてエルヴィンから返事が返ってきた瞬間に彼女との通信が途絶えた。

みほはエルヴィンから伝えられた撃破された地点を地図で確認して、印を付ける。

その後、みほは首の通信機から全車両に通信を行った。

「皆さん、今いる地点を教えてください！」

その通信から返ってきた残存車両の地点を更にみほが地図に印を付けた。

現在の車両の地点を確認し、みほが思考する。

「ここからクルセイダーが一番近いのが八九式で、次に近いのが私達。チャーチルとマチルダの位置はわからない状態」

良くない状況。みほが眉を寄せた。

このままでは八九式中戦車甲型がクルセイダー巡航戦車に見つかってしまうかもしれない。

残存車両に逃げるように指示を出しているが、速度面の速さではクルセイダー巡航戦車に大洗の車両は太刀打ちできない。

マチルダⅡ歩兵戦車とチャーチル歩兵戦車の装甲を抜ける攻撃力がある車両は、現状だと38（七）戦車B／C型とIV号戦車D型くらいしかない。

「やっぱりあのクルセイダーをなんとかしないと……」

つまるところ、大洗の勝つ為の道にはクルセイダー巡航戦車が邪魔をしていた。

ただでさえ、聖グロリアーナには高装甲のチャーチル歩兵戦車とマチルダⅡ歩兵戦車がある。それに加えて機動力に特化した車両があるのは実によくはない。



しかしこの場面でクルセイダー巡航戦車と十分に戦える車両、そして操縦手が大洗にはいない。いや、いないことはないが……みほにはその選択を取るべきかどうか悩んでいた。

百式流のクルセイダー巡航戦車に対して、こちらの車両はスペック面で速度面で有利を取られている。これがみほの頭を悩ませた。

「悩むくらいなら私を使ってくれ、西住さん」

そんなみほに、麻子が声を掛けた。

まるで考えを読まれたような麻子の発言に、みほはキョトンと呆けた顔を見せていた。

「流石に私達でも分かる。この状況、クルセイダーをなんとかしないと試合に勝てない。むしろこのままだと見つかる車両が次々と撃破されるかもしれない。勝つ為にクルセイダーを倒さないといけないなら、私を使えば良い。その為に私はここに座ってる」

操縦しながら、前を向いている麻子が淡々と告げる。

そんな麻子に沙織が目を大きくしたが、どこか納得したように肩を竦めていた。

「麻子、相変わらず百式君のことになると目の色変えるよね」

「うるさいぞ、沙織」

苦笑いする沙織に、麻子が僅かに口を尖らせる。

そんな二人の話を聞いて、みほもなるほどと納得した。

麻子は、百式流のクルセイダー巡航戦車を倒したいのだと。

もしそれができれば、つまり百式和麻に勝てる可能性があるということだ。

だからこそ、クルセイダー巡航戦車と戦わなければいけないと麻子は言っている。

沙織が言った麻子は百式和麻のことになると目の色を変える、その言葉の意味をみほが理解すると相変わらずだなど苦笑いした。

こんな状況でも、いつもと変わらない麻子や沙織達を見ているとみほの肩の力が自然と抜けていた。

「……そうですね。じゃあ、みなさん。やってみますか？」

麻子にみほが尋ねる。

麻子は待つてましたと言いたげに即答した。

「任せろ。西住さんの言う通りに動いてみせる」

「砲撃ならお任せを。至近距離なら外しません」

「装填もお任せください！ 西住殿！ 冷泉殿！」

「私は地図と通信でみほと麻子をフォローするね！」

IV号戦車に乗る全員が楽しげにみほに答える。

負けそうなのに楽しそうに戦車に乗る沙織達の姿に、みほも不思議と楽しいと思えてしまう。

そう思うと、みほはハッと思った。

いつの間にか黒森峰にいた頃、昔と同じ気持ちで戦車に乗っていたことにみほは気づく。

今まで西住流として乗っていた頃とは違うこの気持ち。負けたらダメだという強迫観念に囚われたマイナスの気持ちより、みんなと戦車に乗っているのが楽しいと思えるこの気持ちが、とても心地良いと思える。

『戦車道をやるからには、楽しくないと意味がない』

試合前に和麻がそんなことを言っていた。

なら、自分も勝ち負けに拘らない気持ちで試合を楽しまなければならぬ。

「でも、負けるのは悔しい」

試合をするからには、負けるのは悔しい。

勝負をするからには、勝ちたいと思うのは当然。

なら、全力で楽しんで試合に勝とう。

「麻子さん。早速、一両撃破しに行きましょう。あちらの車両が分散しているといいんですが」

「多分、してないと思う」

「麻子、そういうこと言わないの!」

麻子と沙織の言い合いを聞きながら、IV号戦車が聖グロリアーナ陣営に向かっていく。

「危険ですがもし分散していなければ、私達で分断させましょう。そうなったら麻子さん、結構大変ですよ?」

「それぐらいやってみせる。さつきオレンジジュース飲んで休んだから大丈夫だ」

やる気のなさそうなやる気のある麻子が、不思議と頼もしく見える。

みほはそんな麻子にクスツと笑っていた。

## 16. こんな格言を知ってるかしら？

大洗の街を聖グロリアーナの車両が走り回るが、一向に大洗の車両が現れない。

先程、クルセイダー巡航戦車 Mk. III が III 号突撃砲 F 型を撃破したという連絡をダージリンが受けて以降、一向に大洗が攻めて来る様子がなかった。

足が速いクルセイダー巡航戦車を遊撃として自由に走らせているが、それでも敵車両発見の連絡はない。

完全に雲隠れしている。聖グロリアーナの索敵範囲から大洗の全車両が大きく外れて撤退をしているか、聖グロリアーナが知らない大洗の街の中に潜んでいるかのどちらかだろう。

そんな状況のなか、ダージリンが少し悩んだように僅かに口を尖らせる。

車両数では大洗が残り三両、対して聖グロリアーナは四両、よって聖グロリアーナが有利。そして各車両のスペックでも聖グロリアーナが優勢。

しかし現在の状況は少しだけ大洗の方に分がある。大洗が目視できず隠れている状態なら、大洗側は好きなタイミングで聖グロリアーナを攻撃できる。

それだけが大洗の有利な点だとダージリンが思考する。

だが本来なら、この状況などはダージリンが考慮すらせずに勝ちを確信できた。大洗の残存車両で聖グロリアーナの車両を撃ち合いで撃破できる車両は少ない。

攻撃されても、撃破できないと分かっているのなら恐る理由がない。

しかしダージリンは否応なく警戒を余儀なくされていた。それもそのはず、相手には拙いと言えども——あの『百式流』を扱う車両が

いる。たったのそれだけでダージリンの頭に油断という言葉は出てこなかった。

百式流は、たった一両の車両で盤面を変える力を持っている。

それを過去に嫌というほど体感している身からすれば、ダージリンの思考も自然の流れだった。

「……やっぱり来たわね」

だからこそ、唐突にチャーチル歩兵戦車の正面に現れたIV号戦車にダージリンは冷静さを失うことはなかった。

距離は約五十メートル先。聖グロリアーナの車両が進む路地の先にある大きな道路から、IV号戦車が砲塔を横に向けて飛び出していた。

次の瞬間、IV号戦車から砲弾が放たれた。しかし放たれた砲弾はチャーチル歩兵戦車の正面に当たるが、分厚い装甲により右へ砲弾が弾かれていく。

「……砲撃」

冷静に、ダージリンが砲撃の指示を出す。

しかしIV号戦車は聖グロリアーナの車両が砲撃を始める前に、既に走り出していた。

聖グロリアーナの車両が放つ砲撃が、IV号戦車の通り抜けた場所を駆け抜ける。

あの砲弾が当たるとはダージリンも思っていない。まさかダージリンが一番危険視しているIV号戦車が、そんな素直に砲撃を受けるとは思ってもいない。

「追いかけるわよ。全車両、前進」

目の前に現れた以上、追いかけない理由はない。何か作戦を仕組ん

でいる可能性もあるが、それを無理矢理こじ開けるのが聖グロリアーナの戦車道とダージリンは自分を律する。

「アツサム、IV号が出てきたわ。こっちに來なさい」

IV号戦車を追う指示を出した後、ダージリンはすぐにアツサムに通信を行った。

随時互いにダージリンとアツサムは位置情報を伝え合っていたので、現時点でダージリンはクルセイダー巡航戦車の位置を把握していた。

クルセイダー巡航戦車は、チャーチル歩兵戦車からあまり離れていない地点にいる。四分も経たずに合流できるだろう。

「さあ、鬼ごっこの続きをしましょう」

そしてダージリンがゆつくりと紅茶を飲みながら、呟いた。

大洗は明らかに聖グロリアーナのクルセイダー巡行戦車を警戒している。それは先程にクルセイダー巡航戦車を二両の戦車を使って足止めしたことから予測できる。

普通のクルセイダー巡航戦車だけなら、足の速い戦車という印象しかないはず。しかし大洗は事前情報があったに違いない。

聖グロリアーナのクルセイダー巡航戦車は、普通ではない。それを知るのは戦車道履修者か、*“あの人”*だけである。

だからこそ、大洗はクルセイダー巡航戦車が聖グロリアーナと合流するまでに何かをしたいと思うのは当然。

先にダージリン達がクルセイダー巡航戦車と合流するのが先か、大洗が何か仕掛けてくるのが先か。

大洗の残存車両はIV号戦車D型、38(t)戦車B/C型、八九式中戦車甲型。

聖グロリアーナが一番警戒するべきは、百式流を扱うIV号戦車。しかし可能性として他二両も百式流を扱える可能性があるのを考慮す

る。

しかしアツサムの情報から先程撃破したⅢ号突撃砲F型は百式流を使えないと断定。そもそも戦車道を始めて一ヶ月で百式流を使用すること自体がおかしいのが、聖グロリアーナの在校生であるダーズリン達の総意である。

そこから仮にⅣ号戦車のみが百式流を扱えると想定するならば、この試合で聖グロリアーナがああⅣ号戦車を撃破できれば……必然的に試合の勝敗は決まったとも言える。

「全車両、あⅣ号を最優先で撃破しなさい。残りの車両は見つけ次第報告、状況次第で追う指示はこちらから出すわ」

ここまで考えた上で、ダーズリンは指示を各車両に伝える。

果たして、それが確実に合っているのかダーズリンには確信はまだ持てない。

しかしそれが紛れもなく“正解”の選択だということは、今のダーズリンには知る由もなかった。



背後からの砲撃の数々をⅣ号戦車が回避しながら進んでいく。

後方からはしっかりと聖グロリアーナの三両が追い掛けているのがキューポラから身を出しているみほの目には映っていた。

「やっぱりさっきの砲撃じゃ倒せなかった。一度路地に行つて裏をかきます。麻子さん、お願いします!」

「了解」

麻子がみほの指示を受けて、すぐに路地へⅣ号戦車を向かわせる。

後方からは、絶えず砲撃してくる聖グロリアーナの車両達が迫る。幅の短い路地では、横に並んで砲撃はできない。よって先頭車両と二番目に走る車両のみしか砲撃してこない。

大洗の路地を走り抜け、大きな下り坂をIV号戦車が駆け降りる。

そして駆け下りた先には、T字路に近い曲がり角があった。曲がるのに失敗すれば目の前の建物に激突して足を止めてしまう。つまりIV号戦車にとって撃破されると同じである。

「麻子さん！ 曲がってください！」

言われるまでもない。麻子はみほに言われるまでもなく速度の出ている車両で直角に近い曲がり角を、減速を極力行わずに曲がろうと手足を動かした。

物理的に直線に速度の出ている車両で曲がろうとすれば、直線に進む勢いで曲がる動作は意味を持たず、前に進むもうとする勢いに勝てずに前にある建物に車両は衝突するだろう。

しかし「この手」の運転を今まで嫌と言うほどさせられた麻子には、できないと言う選択肢はなかった。

というよりも、仮にこの状況で曲がり切れずに建物に衝突して撃破されてもされたら……麻子の頭に苛立つあの男の顔が思い浮かんでしまった。

きつとあの男なら高らかに笑いながら誇らしげに自分を下手くそと罵るに決まっている。そしてまだ下手くそな癖に自分に勝つなんて早いと死ぬほど憎たらしい顔で言うに決まっている。

みほや沙織が聞いたら、流石に和麻はそこまでは言わないと声を揃えて言うが麻子には関係なかった。

そのことを思うだけで麻子は腹が煮えくり返る。失敗なんてするわけがない。

アクセル、ブレーキのペダルを狙ったタイミングで踏み、クラッチペダルを踏む。そしてギアを変え、ハンドルレバーを操作しながら、アクセルを踏み抜く。



今出ている速度なら、車体がどれほど「勢い」に持っていられるかなど麻子には感覚で分かっていた。

前に進もうとする勢いを上手くコントロールし、麻子は難なく目の前のコーナーを曲がり切っていた。

「おお、やつぱりちゃんと曲がる……流石は麻子、百式君にしごかれてるだけある」

「うるさい、曲がれて当たり前だ」

「どうせ曲がれないと百式君に馬鹿にされるからとかでしょ?」

「別に、アイツなんて関係ない」

車両のギアを上げながら、麻子が感心する沙織にむくれて答えた。そしてすぐにIV号戦車の背後から大きな音が響いた。

みほが確認すると、聖グロリアーナのマチルダ歩兵戦車が曲がり角を曲がり切れずに建物に衝突していた、

しかし建物に衝突して停止したマチルダ歩兵戦車が復帰に時間の掛かっているのを放置して、聖グロリアーナの残存車両の二両がIV号戦車を追って来た。

聖グロリアーナ陣営の一両が、隊列から僅かに外れる。これを見まほが見逃さなかった。

すぐに通信機を使い、みほが八九式中型戦車に連絡をした。通信から八九式中型戦車の現在地を確認するなり、みほは指示を告げている。た。

「磯部さん! 今、聖グロリアーナの一両が隊列から少し外れます!

背後から砲撃して隊列から離してください!」

八九式中型戦車の現在地は運良く隊列から外れたマチルダ歩兵戦車を攻撃できる。三両の内の一両を離せれば、IV号戦車に向けられる戦力を削げる。加えて一両だけ、クルセイダー巡航戦車ではなくマチルダ歩兵戦車ならば八九式中型戦車でもある程度は戦えるはず。

「もし攻撃して追ってくるなら逃げながら応戦してください！ 無理はしないで、駄目だと思ったら逃げてください！」  
『了解しました！』

みほの指示に対する了承の返事を受けて、みほは後方を確認する。背後には二両の聖グロリアーナ車両。そしてそれよりも後方に一両が追って来ている。

上手くいけば、このまま分散ができる。このまま分散していけば、各個撃破も可能になってくる。

「会長、今の地点を教えてください！ 合流します！」

更に続けて、みほが38（t）戦車に連絡を入れていた。

このまま聖グロリアーナがIV号戦車を追ってくるなら、38（t）戦車に奇襲をもらう。その指示をみほが出した。

杏の返答から、IV号戦車とあまり離れていない地点にいる。そしてクルセイダー巡航戦車とも遭遇していない。

まだ状況は、こちらに分がある。みほはそう判断した。

「麻子さん！ このまま逃げてください！」

そしてみほの指示のままに、麻子はIV号戦車を走らせた。

どこをどう曲がるかなどの指示をみほから受けていないので、道の走り方は麻子の独断になっている。

街の構造を知っているが故に、みほが事前に麻子にそう指示を出していた。

麻子もある程度なら大洗の街並みを知っている。住んでいたこともあり、そして「地図も頭の中にある」。どこの路地を曲がれば、どの道に出て、そしてどこの道を進めば目的地に最短で行けるかなども麻子の頭にはあった。

しかし、地図と記憶だけではどうすることもできないことがあった。

「あつ、まずい」

突如、路地を曲がった後に麻子がIV号戦車のブレーキを踏んでいった。

麻子がブレーキを踏んで車両を止めようとしていることに、みほが驚く。

慌ててみほがキューポラから身体を出して前を見ると、前には『工事中』という看板が進む道路の真ん中に立っていた。

無理矢理進もうと判断したかったが、明らかに道路が工事の最中、そして工場の機材が数多く置かれていた。

工事道具や機材が置かれている所為で無理に前に進むことができない以上、止まるか曲がるかの二択しかなかった。

流石の麻子も、予想外だった。

工事をしていることを麻子は把握していなかった。

地図と記憶だけの地形把握の限界。和麻がよく言っていた話を思い出してしまった。

予定ではまっすぐに進むつもりだったので、麻子も判断が遅れてしまった。

工事中で通行止めになっている手前に、左右に曲がれる道が一本ずつある。右に曲がる道と左に曲がる道。そのどつちかを選ばなければならぬ。

先に左側の道があり、そして少し先に右の道がある。

「ちよつと揺れるぞ」

そして麻子が咄嗟に左に曲がろうとハンドルを操作しようとしたところで――

「あつ!!? ダメツ!!? 左はダメですツ!!?」

みほから制止の声が響いた。

みほの声が聞こえた麻子も曲がろうとしていた左側の道を見ていた。

みほの声と共に、その道から——“ナニカ”が出てきていた。

麻子の目には、不思議とゆったりと時間が進むように見える。

白銀の装甲。それを見た途端、麻子の目が大きくなった。

出てきた白銀の装甲から伸びる砲身がこつちに向こうとしている。

「——揺れるぞー!」

「えっ! 麻子、まさか!!?」

沙織の声を無視して、麻子は反射的に動いていた。

突如現れたクルセイダー巡航戦車の砲身がIV号戦車に向くよりも先に、IV号戦車がクルセイダー巡航戦車に向かって走る。

ほぼ至近距離の状況で砲撃をされる訳にはいかない。

麻子は咄嗟の判断で、IV号戦車の車体をクルセイダー巡航戦車の車の先端へ僅かに衝突させた。

クルセイダー巡航戦車が駒のように半回転で突き飛ばされて、壁に衝突する。

そして突き飛ばしたIV号戦車はクルセイダー巡航戦車に衝突した衝撃で車体が一回転していた。

このままだと、衝突でコントロールの効かない車体が壁に激突して停車してしまう。

だかしかし、麻子はすぐに手足を動かしていた。

ブレーキペダルとハンドルレバーを操作。そして勢いを殺すために、勢いに逆らうようにアクセルを踏み抜く。

その判断と操作で、IV号戦車が地面に跡を残しながら止まろうとする。

そして麻子の視界に先程見えた右側の曲がり道が見えた。

なんとかして曲がるしかない。背後には二両の聖グロリアーナ車両。そして左横にはクルセイダー巡航戦車。止まってしまえば、間違いなく終わる。

麻子が右側の曲がり道に入ろうと操作する。

麻子も想定外な状況での操縦、その中で彼女は必死に模索していた。

衝突の所為でコントロールが効きにくい車体。僅かに勢いが収まっても、曲がるのが困難。

必死にアクセルとハンドルレバーを操作して、麻子が車体を曲がり道を持って行こうとする。

——だが、それを素直に聖グロリアーナがさせるわけがなかった

瞬間、麻子の背筋に悪寒が走った。

今、右の曲がり道に入ったら「ヤバイ」と。

その悪寒は、過去に数回感じたことのある感覚だった。

それはすべて百式和麻と練習試合をして、自分の乗る車両が「撃破

”される時に感じた悪寒と同じだった。

止まるしかない。選択がない。

その思考が、麻子の頭を駆け抜けた。

麻子は右に曲がるのをやめて、手足を動かす。

そして麻子が選んだのは、工事中と書かれた通行止めの手前で止まることだった。

瞬間、麻子が本来進もうと思った右の曲がり角に二発の砲弾が飛んでいた。その砲弾はIV号戦車に当たることなく地面に衝突する。

「……すまない。今曲がると、アレに当たってた」

その光景を見て、麻子は素直に謝っていた。

IV号戦車を完全に停車させてしまった。

IV号戦車の背後には、通行止めの道。前にはチャーチル歩兵戦車と

マチルダ歩兵戦車、そしてクルセイダー巡航戦車。

「いえ、麻子さんは悪くないです。工事中だったのは予想外でしたし、むしろあの砲撃を回避できただけですごいです」

「でもどうするの！ もう撃たれちゃうって！」

「これは絶体絶命ですよ！」

麻子の謝罪をみほが気にするなと言うが、沙織と優花里が慌てて騒ぐ。

みほも、流石に詰まされたと思った。

この状況は、どうしようもない。前には、敵前車両がいる。

明らかにこちらが行動するよりも、相手の砲撃の引鉄を引く方が速い。

合流の指示を出した38（t）戦車が来るには、僅かに時間がある。

だが、もうあと数秒で撃破される。

思わず、みほが目を瞑りたくなつたが――

――ふと、チャーチル歩兵戦車のキューポラが開いた

みほが驚いてその光景を見ると、チャーチル歩兵戦車のキューポラから一人の少女が顔を出した。

間違はなく、その少女は聖グロリアーナの隊長――ダージリンだった。

キューポラから身を出したダージリンが、穏やかな目でみほを見つめる。心なしか口元が笑っていた。

みほも、不安な目でダージリンを見つめていた。試合をしているはずなのに、なぜ彼女の顔はあんなに穏やかなのかと。

そうしてダージリンが口を開くと、みほに向かって告げていた。

まるで友人に声を掛けるように穏やかに、何気ない世間話をするような声色で。

「ねえ、こんな格言を知っているかしら？」

ダージリンの目が、細く鋭くなった。

その目を見た瞬間、みほの全身の鳥肌が立った。

IV号戦車に乗る他のメンバーには、まだ分からない。みほだけしか感じなかった。

試合開始前を見た、あの目。

紛れもない、強者と分かる威圧感だった。

## 17. この距離で外す？

ダージリンの目を見たみほは、純粹に慄いた。

いや、それは初めから分かっていた。初めてダージリンと試合前に会い、彼女の目を見た時から。

強豪校の隊長としての格を。みほの姉が持つ強者の気迫が、はつきりとみほに理解されられた。

負ける。勝てない。その思考を相手に与えるだけの気迫が、ダージリンから感じられた。

「ねえ、こんな格言を知ってるかしら？」

ダージリンはそう言うのと、鋭い目のまま告げた。

「イギリス人は恋愛と戦争では——手段を選ばない」

みほは、その言葉の意味が分からずに反応に困った。

それもそのはず、ダージリンの言った言葉はイギリスのことわざだった。

恋愛と戦争において、あらゆることが許される。それを体現した言葉である。

まさか試合前に騎士道精神で戦うと言っていたダージリンが、そんな矛盾したことを言っているとは、まさかのみほも思わないだろう。

しかしダージリンにとっても、この状況まで持ち込めた時点で手段を選ぶなどと言えなかった。

勝ちが目の前にある状況で、正々堂々と一騎討ちしようなどと言えるほどダージリンも余裕はなかった。

幸運に幸運が重なった。その結果だったからだ。



IV号戦車が工事中で通行止めの道に進み。運良くクルセイダー巡航戦車がIV号戦車の進もうとしていた道のひとつを塞ぎ、そして二つ目の最後の道に砲撃の指示を瞬時にダージリンが出せたこと。この全てで、大洗のIV号戦車を「詰ませた」のだ。

IV号戦車を倒せば、まず間違いなく大洗に勝てる。

つまり、百式和麻と会うことができる。

それが目の前まで来た。それが分かっているダージリンには、手段など選んでられるわけがなかった。

「騎士道精神で戦うと言えど、私達はあなた達に勝たなければならぬ。一両に三両で砲撃なんて無粋なことをすることを許してもらえるかしら？」

勝ちを確信したダージリンだからこそ言える言葉だった。

チャーチル歩兵戦車の砲塔がIV号戦車に向けられる。

それに続くように、残りの聖グロリアーナ車両の全ての砲塔がIV号戦車へと向けられた。

「やはり百式殿に会いたいと言う一心であちらは戦ってるってことですかね、みほ殿」

優花里がみほの足元でそんなことを話す。

しかし流石のみほも優花里の話に言葉を返す余裕がなかった。

勝つために、自分が何をしなければならぬか。それをみほは考える。

みほの視界に見える唯一空いてる左側の路地。そこに入るしかない。

しかし至近距離に三両、加えて砲塔が全てIV号戦車に向けられている。

砲撃を躲して進むのは、ほぼ不可能。麻子に細かい指示を出そうとすればすぐにダージリンが砲撃の合図を出す。同じく通信機で38

(七)戦車B/C型と八九式中戦車甲型に連絡することも同様に不可。ダージリンに何かしようとしていると思われる時点で終わりである。なら、どちらにせよ方法がひとつしかない。

三両の砲撃を受けるの前提で、麻子にIV号戦車から撃破判定の白旗が出ないことを祈って逃げる指示を出す。これしかない。

「優花里さん、麻子さんに指示を。麻子さんのタイミングで左側の路地に走ってください」

みほがまっすぐ前を向いたまま、小声で指示を優花里に告げる。

優花里も、そう言われてすぐにみほがその選択肢しかできないことを理解した。

優花里が小声で「了解しました」と返事をすると、そつと麻子にみほの指示を告げた。

「……本気か？」

「ええ、みほ殿がまかせると」

「……わかった」

麻子も、戦略などの知識は詳しくないがこの状況でできることはみほと同じくひとつしか浮かんでいなかった。

どの道撃破されるなら、最後まで足掻こう。そのみほの意思を、麻子は理解して領いた。

エンジンはしっかりと駆動してる。ただアクセルペダルとギアレバー、クラッチレバーを操作しながらハンドルレバーを動かせば良い。

下手なフェイントなどは意味はない。純粹に早く動けるか、これに尽きる。

既に聖グロリアーナ車両の全ての砲塔が向けられている。全弾当たるのが前提なら、一発くらいは回避してやろうと麻子は内心で意気込んでいた。

「では、大洗の隊長さん。是非とも約束通り、後で和麻さんに会わせてくださいな」

そしてダージリンがそつと一言、「砲撃」と告げようとする。

同じくして麻子がアクセルペダルを踏もうとする。聖グロリアーナ車両の砲撃する前の僅かな時間で、先に動こうと。

「砲——」

しかしダージリンが告げようとした瞬間、みほとダージリンの両方が驚くことが起きていた。

IV号戦車が逃げようとしていた左側の路地から響く駆動音。

ダージリンが砲撃と告げようとした瞬間、唯一空いていた左側の路地から一両の車両が飛び出してきた。

「参上〜！」

角谷杏が気の抜ける声で楽しげに声をあげていた。

角谷杏が率いる38(t)戦車B/C型が路地から飛び出していた。

突如、現れた38(t)戦車が左に曲がり、チャーチル歩兵戦車とマチルダ歩兵戦車の前に向かっていく。

その光景を見て、麻子は僅かに目を大きくしていた。

「おい、まさか砲撃しに行くつもりか？」

「えっ!?? 確か河嶋先輩の砲撃の的中率って——!??!」

突然現れた38(t)戦車に驚くIV号戦車の面々だったが、麻子と沙織が声を揃えて違う意味で驚いていた。

38(t)戦車がチャーチル歩兵戦車とマチルダ歩兵戦車の前に出て、その砲塔を即座に向ける。

至近距離の砲撃。相手の不意を突いたおかげで、相手の反応が送れている。間違いなく38（t）戦車が放つ超至近距離の砲弾は、相手の車両に白旗を上げられるだろう。

だがしかし角谷杏が車長の38（t）戦車。その砲撃手担当の河嶋桃、彼女はこと大洗にいる戦車道履修者全ての共通認識の事実がある。

この河嶋桃は、大洗にいる五人の砲撃手の中で最も――

「――喰らえッ！」

川嶋桃の声と共に、38（t）戦車の砲塔から砲弾が放たれる。

そしてその砲弾は、チャーチル歩兵戦車とマチルダ歩兵戦車の間を抜けて飛んで行った。

38（t）戦車に乗っていた操縦手の小山柚子も、その光景を目にして流石に頭を抱えていた。杏に関しては、桃のしてしまったことがおかしくて仕方ないとばかりに笑っていた。

そう、河嶋桃に対する大洗の全員の共通認識。

過去に百式和麻が桃の砲撃の練習を見て珍しく震えた声で言っていたことが、全員の記憶に新しいことだった。

『こんなにも砲撃の才能がない人間がいるとは思わなかった』

あの百式和麻がそう言って匙を投げようとしてるほどのノーコン砲撃手だったのだ。

「桃ちゃん……この距離で外す？」

「うるさいっ!!?。」

聖グロリアーナの全車両の砲塔が38（t）戦車に向けられる。

そしてすぐに、全ての砲塔から砲撃が放たれた。

三発の砲撃を受けた38（t）戦車から白旗が上がる。

しかしみほは38（t）戦車が撃破される瞬間、反射的に指示を出していた。

38 (t) 戦車が撃破されたのは痛手だったが、この場を乗り切る機会を逃してはならないと咄嗟にみほが叫んだ。

「麻子さん、前進！ 華さん、砲撃準備！ 一時停止で砲撃！ 一撃で離脱して路地左折！」

麻子が指示を受けた瞬間、すぐにIV号戦車を動かしていた。

まずは前進、左側の路地に入るために車体を左側に向けつつ、一時停止後、またすぐに麻子はアクセルペダルを踏みつけるだけで良いように車体の向きを調整しておく。

それと同じく華もIV号戦車が前に進んだと同時に砲塔を操作していた。目標は砲塔が一番早く向けられるマチルダ歩兵戦車。

IV号戦車が一瞬だけ一時停止し、即座に発進する。

麻子が嫌になるほど練習した一時停止と発進。百式流が得意とする操縦においての車両の砲撃時の停止時間の短縮、これを麻子は十分に行えていた。

そして華がその僅かな一時停止の時間にある程度合わせていた砲塔の照準を微調整し、引鉄を引いていた。

華が放った砲弾が飛翔する。そしてその砲弾は間違えることなく、マチルダ歩兵戦車の正面装甲に突き刺さっていた。

炸裂する爆発音と共に、マチルダ歩兵戦車から撃破判定の白旗が上がった。

しかしここで一番に驚くべきことだったのは、操縦手の麻子ではなく、砲撃手の華だった。

麻子の操縦の技術に関しても勿論そうだが、この場面では華の照準調整については映像で見ている和麻と亜美が揃って驚いていたほどだった。

極限に追い詰められた状況。車両が動いている中で、どの車両が一番狙いやすいか見極めた瞬時の判断。そしてほんの僅かな一時停止の時間の中での繊細な照準合わせ。これを華は、僅かな時間で行った。

並大抵の精神力では無理だろう。間違いなくプレッシャーに負けて素人ならまともにも狙うこともできない。

しかし華はただ静かに、それを行った。これをモニター越しに見た和麻は、素直に驚いていた。

「ッ……！」

マチルダ歩兵戦車から白旗が上がる。煙が立ち昇る視界の中で、IV号戦車が路地に走って逃げていくのをダージリンの視界が捉えた。今起きた出来事に、苦悶の顔をダージリンを作る。

目の前にあったはずの勝利を逃してしまったこと、その事実にはダージリンは顔を顰めていた。

自車両のマチルダ歩兵戦車が撃破された。だがしかし、大洗の38(t)戦車をこちらも撃破している。これで相手の残存車両は残り二両。聖グロリアーナの残存車両数は三両。まだ大洗に対してアドバンテージが聖グロリアーナにはある。

「アッサム、追いかけてなさい！ 私は回り込むわ！」

「了解です！」

逃げていくIV号戦車をダージリンの指示を受けたクルセイダー巡航戦車が追いかける。

ダージリンが乗るチャーチル歩兵戦車も、IV号戦車に回り込むように動き出した。

そしてすぐにダージリンは通信機を手を取っていた。

「ルクリリ、もう八九式は無視してこちらに戻ってきなさい。あちらに残るはIV号と八九式。八九式の攻撃は私達の装甲は抜けないわ」

先程、運転トラブルで建物に衝突して出遅れていたマチルダ歩兵戦車に、八九式中戦車甲型が攻撃を仕掛けていたらしい。

わざわざ出てきた敵車両を見逃すわけもなく、出遅れたマチルダ歩兵戦車に八九式中戦車の対応をダーズリンは任せていた。

しかしもう状況はIV号戦車を倒すだけで試合が終わる。そうダーズリンは判断した。故に、八九式中戦車と戦闘しているルクリリが率いるマチルダ歩兵戦車を呼び戻す指示をダーズリンは出した。

『隊長！ マチルダが居なくなりました！』

みほの通信機に典子から通信が来る。

一度隊列から離していたマチルダ歩兵戦車が八九式中戦車から離れた。その連絡に、みほは眉を寄せた。

やはり、この状況なら間違いなく聖グロリアーナは全車両でIV号戦車を潰しにくるとみほも分かっていた。

IV号戦車の後ろにはクルセイダー巡航戦車がいる。おそらくチャーチル歩兵戦車はIV号戦車に回り込むように動いているに違いない。

まだ相手が二両なら対応できる。クルセイダー巡航戦車がかなり厄介だが、まだなんとかなる。

しかし三両はまずい。これ以上、麻子にも負担を掛ける訳にもいかない。

「磯部さん！ 我々の現在地を伝えます！ 至急こちらに来てください！ こちらの合流次第、敵車両を攻撃して相手を翻弄してください！」

「了解しました！ でも八九式の砲撃だと撃破が難しいですよ!?!?」

「問題ありません！ 砲撃してIV号以外にも敵がいることを相手に教えるだけで十分です！」

「了解です！ ダッシュで向かいます！」

みほも、八九式中戦車を呼び戻す指示を出した。

聖グロリアーナは残存車両全てでIV号戦車を撃破しに来る。三両

対一両よりも、三両対二両と相手に思わせるだけで相手に少なからずプレッシャーを与えられる。

「麻子さん！ ご存知と思いますが、後ろのクルセイダーは足が速いです！ 相手の速度がこちらより速い以上、追いつかれます！」

「知ってる。どうするつもりだ？」

「一度地形を使って待ち伏せします。華さん、この先の路地を曲がったところで一度停車して砲撃してください。その後、すぐに離脱しましょう」

「了解しました、みほさん」

麻子と華が了承した後、すぐにみほが優花里に声を掛けた。

「優花里さん、今から砲撃の回数が多くなります。装填大変と思いますがよろしくお願いします」

「任せてください、みほ殿！」

「沙織さん、常に八九式と連絡を取り合って我々の現在地を伝えてください。敵車両発見した際は砲撃して離脱、それを繰り返すように連絡を」

「まっかせてー！」

みほが沙織にも忘れずに指示を出していく。

八九式中戦車のみほ達の元に来るまでに、クルセイダー巡航戦車を倒すことができればかなり状況は楽になるが……容易ではない。

チャーチル歩兵戦車も隊長車両である以上、簡単に撃破はできそうにないだろう。

逃げながら、こちらの奇襲でどちらか一両撃破。それをまず行わなければならぬ。

振り向いた先にいるクルセイダー巡航戦車を見て、みほはうまくいくことを内心で祈るばかりだった。



「よくも履帯を壊してくださいましたでございませうね！ さっきの仕返しでございませうよっ！ 今度はこつちが攻めるでございませうのっ！」

クルセイダー巡航戦車からローズヒップが顔を出して血気盛んに騒いでいた。

明らかにおかしな言葉を使っているが、エンジン音でみほの耳には到底届かない。

「はあ……ローズヒップ、いい加減にしなさい」

ローズヒップに今日何度目か数えることも面倒になる注意をして、相変わらず淑女として成長しない後輩に対して、アッサムは一人操縦手の中で深いため息を吐いていた。

## 17, 5. ジャイアントキリング

クルセイダー巡航戦車がIV号戦車の後方にいる。  
そしてチャーチル歩兵戦車が回り込んでくる。

大洗の残存車両は残り二両。同じく聖グロリアーナの残存車両も二両。

装甲面では相変わらず大洗が不利。聖グロリアーナの車両を撃破できるのはIV号戦車のみ。八九式中戦車では普通に攻撃しても砲弾が装甲を抜けない。

みほは、今使える二両の車両を使って、相手を出し抜かなければならない。

「うーん、かなり厳しいわね」

隣に座っている亜美が、ポツリと呟いた。

和麻は、モニターにこれから映る最後の戦いが起こるまでの僅かな時間を待ちながら顔を曇らせた。

「正念場です。もうこうなると作戦がどうこうの話じゃないですし、その場の判断だけの戦いですね」

「そうね……この状況、和麻君ならどうする?」

亜美の問いに、和麻は考える。

しかし和麻は、苦笑いしながら答えた。

「むしろ亜美さんならどうします? あの状況で、聖グロには装甲の硬いチャーチルと足の速いクルセイダー。しかもクルセイダーは完璧ではないですがほぼ純粋な百式流です。対してこっちは素人の乗

る二両の車両だけ、IV号だけ指先の先くらい百式流が使える程度の戦力しかない。これでどう戦うんですか？」

肩を竦めながら、和麻が呆れた表情を見せる。

そんな呆れた和麻に、亜美は笑いながら力強く拳を作って答えた。

「そんなの気合よ！ って言いたいところだけど……もう詰みね」

亜美が作った拳を下ろすと、僅かに肩を落としていた。

戦車道連盟に属する、戦車道のプロである蝶野亜美から見ると、既に試合の結果は目に見えている。

むしろ戦車道を始めたばかりの素人でも、この場面を見せられれば勝敗はすぐ分かる。

「この試合を『部外者』の目で見てるなら詰み、だけどね」

しかし亜美はそんな結果の見えた試合だと分かっているにもかかわらず、和麻に小さな笑みを浮かべていた。

「ねえ、和麻君。あなたはまだ大洗が勝てる見込み、あると思ってるでしょ？」

悪戯をした子供を小馬鹿にするように亜美が和麻に問い掛けた。

和麻は、笑っている亜美に視線をちらりと向ける。

そんな亜美に、和麻は「さあ……？」と答えていた。

「絶対勝てる。なんて断言できるほど、戦車道は甘くないですよ」  
「それもそうだけど、じゃあなんで……そんな風に和麻君は笑ってるのかしら？」

亜美が見る和麻の顔は、にんまりと笑っていた。

亜美の目には、しつかりと映っていた。

今見ている和麻の顔が、楽しくて仕方ないと笑っているのが。

和麻はそう指摘されてちよつとだけ意外そうな顔をしたが、その笑みを崩さずに答えた。

「俺から見れば……正直に言うとう聖グロ戦でここまで来ることすら予想できなかったですよ。俺は大洗の街でみほ達の作戦がクルセイダーで潰された時点でほぼ詰みに近いと思ってました。

隊長だけ一級品でも色々足りてなかった。全員で考えた拙い作戦で、しかも練習したばかりのまだまだ下手くそな連中ばかりしかいない突貫チームで、まさかここまで戦えてる試合なんて見てて面白いに決まってるじゃないですか？」

大洗のチーム全員が聞いたら総出で怒りそうなことを和麻が平気で言つてのける。

まるで馬鹿にしているような話し方だが、その顔は心の底から楽しいと言いたげに笑っていた。

「ここまで戦えたのはみほが、全員が真剣に戦つてた結果だ。俺から見れば全部が冷や汗もので、見てられない場面ばかりでしたけどね」

最初の待ち伏せ作戦の失敗。クルセイダー巡航戦車に追われたのを二両の突撃での足止め。大洗の町で待ち伏せの失敗。IV号戦車が撃破されそうになった場面。助けに来た38(t)戦車が砲撃を外した場面。そして今起きている二両対二両の戦い。

全てが和麻にはどうしようもないくらいに見てられない場面ばかり。

だが、それでも大洗は諦めることをしなかった。それが和麻には嬉しいことだった。

「大洗の全員がああ強豪に『勝ち』に行ってる。諦めるってことを全

員がしてない。だから大洗にも聖グロと同じように運が向いていた。だからこの場面まで来れたんです。これが見てて面白いって思わない方がおかしいです」

少しでも勝てないと諦めという気持ちがあれば、そこから崩れていく。しかし諦めていない。だから大洗は聖グロリアーナの車両を残り二両まで減らすことができたのだ。

このままだとヤバイと思っけていても、魅せてくれる大洗の番狂わせ。それがもし最後の最後まで聖グロリアーナに届くことができるなら。それこそ最後まで何が起こるか分からない戦車道の醍醐味だった。

大洗が抱えている和麻と生徒会しか知らない廃校問題。

これを解消するには、戦車道全国大会優勝という困難極まりない門を突破しないといけない。

それはつまり、弱小とすら言えない戦車道初心者の大洗が全国の強豪校に勝たなければならないことだ。

「これからこの先、全国大会に行こうとしてる大洗がやろうとしてるのは正真正銘のジャイアントキリングそのもの。例えこの試合で勝てなくても、彼女達がここまで戦えたことに十分な意味がある」

もし勝てれば、これは和麻の予想を超える結果になる。

しかし負けても、この結果ならば十分過ぎる糧になる。

それを和麻は嫌でも理解させられていた。

「みほ達はこの先、絶対に『伸びる』ことができる。伸び代しかない彼女達が更に伸びる。課題はまだまだ山積みですが、それを加味してもこの試合にはお釣りが来るくらい価値があった」

だからこそ断言できた。初戦で、素人の集団がここまで戦えた。その結果が彼女達の心を育むことができる。

「今回活躍した奴も、活躍できなかった奴も、試合結果がこれなら嫌でも今後成長する。戦車道において俺が心配している一番の課題だった“心”を伸ばすことができたら、後は勝手に伸びるだけだ。これから忙しくなりますよ」

和麻がそう楽しみに話している姿を見て、亜美は彼が楽しそうに戦車について語っているのが嬉しいと思いつつも——内心で彼の話していることに震えていた。

ここまで考えて試合を見ている時点で、百式和麻は選手としての枠を超えていると。初めて見た和麻の一面に、亜美は驚くしかなかった。

昔の和麻には、操縦手としての面しかなかった。

しかし今は選手を育成する者の面を見せている。

亜美の知らない過去に、選手の育成面で和麻はどこかで良い隊長に会っていたのだろう。聖グロリアーナか、それとも中学生の頃か。

それが誰か亜美には見当もつかないが、そうでなければ操縦手一筋だった和麻に選手を育成すること対して、ここまでの考えができるとは思えなかった。

思い出してみれば、和麻の母である百式流家元の一姫も選手の育成に関してはずバ抜けて優れていた。

間違いなく、和麻もその血を受け継いでいると実感した亜美だった。

本当に男であるのが惜しいと世間に言われただけある。

彼が男でなければ、戦車道の頂に至る一人になれた。

和麻が、男だった。それだけでこの才能を潰すのはあまりにも勿体ない。

楽しそうにモニターを見る和麻の顔を覆う眼帯を見て、亜美は切実にそう思っていた。

## 18. 二人の読み合い

クルセイダー巡航戦車が逃げるIV号戦車を追う。二両の距離は目視で約五十メートル程度。

至近距離、故にクルセイダー巡行戦車がIV号戦車を撃破する絶好の好機。しかしIV号戦車を追うクルセイダー巡航戦車が砲撃をしても、IV号戦車は砲撃する瞬間にタイミング良く路地を曲がるか、車体を左右にズラすことで放たれる砲弾を回避していた。

クルセイダー巡航戦車の各乗員の視界には、IV号戦車はしっかりと見えている。砲撃も敵車両に向けてしっかりと撃っている。それなのに撃破できない。目の前にはあるはずなのに一向に掴めない相手を目の前に、操縦手席に座るアツサムは堪らず眉を寄せるばかりだった。

「やはりあのIV号、本当に厄介ね。それにあそこまで細かく動かされたら、流石にダージリンも回り込めないわ」

クルセイダー巡行戦車の操縦手席からIV号戦車を見据えるアツサムが顔を顰める。

アツサムが見る限り、大洗は——IV号戦車の車長は間違いなく分かっているのだろう。クルセイダー巡航戦車に追われている現状で、もし単調で簡単なルートを進めばダージリンが率いるチャーチル歩兵戦車に予測されて回り込まれると。

クルセイダー巡航戦車がIV号戦車の後方にいる時点で、IV号戦車はクルセイダー巡航戦車の視界から姿を消さない限り、聖グロリアーナに対して待ち伏せなどの不意打ちはできない。

IV号戦車がクルセイダー巡行戦車に砲撃してきたのは、逃げようとした時に撃ってきた一発のみ。それ以降IV号戦車は砲撃を一切せず、逃げることを第一に走っている。

そのためクルセイダー巡航戦車がIV号戦車を背後を取っている以上、大洗から先手を取られることはないだろう。またIV号戦車の砲塔

も前を向いている時点で、IV号戦車からクルセイダー巡行戦車に向けて砲撃をされるといふ心配もない。

加えて、先程の通信で八九式中戦車はマチルダⅡ歩兵戦車と先程まで戦闘中だった状態である。この場から離れた地点にいるはずの八九式中戦車がこの場にすぐ来ることは、まずあり得ない。ならば現状、この場を他の車両に邪魔をされるといふ心配すら今は考えなくても良い。

さらに言うならば、アツサムがクルセイダー巡航戦車を操縦している時点で、戦車が互いに砲塔が向かい合った状態で撃たれる砲撃は全て当たることはない。敵車両の砲塔から撃たれる砲弾の射線は、近距離ならばアツサムには『視えて』いるのだから。

「アツサム様！ バシバシ撃つてくださいますわよ！」

クルセイダー巡航戦車が砲撃をローズヒップの指示で撃っているが、一向にIV号戦車に当たる気がしない。何度目か分からないIV号戦車の砲撃回避の動きを見て、アツサムも流石に見慣れたが、それでも引き攣った笑みを思わず浮かべてしまった。

「傍から見れば砲撃を至近距離で避ける私も大概かもしれないけど。本当に向こうも大概ね。和麻様もとんでもない人材を育ててしまったみたいだわ」

後方から撃たれる砲弾を避けるのは、一見前から撃たれる砲撃を避けるより容易いと思うが、内容によっては実のところそうでもない。適当に左右に車体を揺らしながらジグザグに動くなら誰にでもできるが——的確に回避するために車長の指示を受けて、その指示を正確に実行しているなら話は全く別になる。

流石に百式流のように前方から撃たれる砲撃を躲すよりは圧倒的に難易度は下がるが、車長の指示通りしっかりと動かせるだけでもアツサムからすれば十分驚愕に値することだ。



忘れてはいけない。聖グロリアーナが戦っているのは、戦車道の初心者なのである。

この状況下で自車両が撃破されれば大洗が確実に試合に負けることが分かる中で乗っているIV号戦車の操縦手の内心は、尋常ではない。焦りも緊張も、生半可なものではないはずだ。

戦車道経験者ですらIV号戦車の状況なら緊張するに決まっている。この状況のIV号戦車の操縦手席に座り、平常心でハンドルを握るなんて並大抵なことではない。

操縦手として熟練した腕のアツサムでも、同じ状況ならば緊張するとアツサム自身でも思う。ならば初心者はそれ以上なはずだ。

だがしかしIV号戦車の操縦手は、平然と操縦している。そんなことができる人間は、アツサムから見れば逸材ではない。

心臓に毛でも生えている胆力の塊なのか、それとも感情というものがない機械の生まれ変わりか。どちらにせよ、戦車道の経験者から見れば、IV号戦車の操縦手は文字通り変人と思えなかった。

本当にしっかりと和麻に育成される前で良かった。アツサムはIV号戦車に乗る操縦手の異質さに、ある意味で安堵していた。

どうにかして逃げるIV号戦車に、回避が不可能な距離で砲撃を撃ち込むしかない。

そのために至近距離のIV号戦車との距離を更に詰めなくてはならない。そこからまず始めるしか砲撃を的確に回避する車両に一両で対抗する方法しかない。

そう思い、アツサムはクルセイダー巡航戦車のギアを更に上げていた。



「麻子さん。私がタイミングを言いますので路地を曲がって停車した後、全速後退。敵車両にぶつかってあちらの足を止めます。その後にもう全速で再発進してください。皆さん、その際は衝撃に備えてるよ」

背後から速度を上げてIV号戦車に迫るクルセイダー巡航戦車を見ながら、みほが麻子に指示を告げる。

アッサムの考え通り、みほも同じように分かっていた。クルセイダー巡航戦車に追われている時点で、IV号戦車は聖グロリアーナに対して待ち伏せや奇襲ができない。故にIV号戦車が攻める為には、まず背後にいるクルセイダー巡航戦車を引き離す必要があった。

その時、みほが咄嗟に立てた策は追い掛けている相手に自分から突撃することだった。

先程からIV号戦車はクルセイダー巡航戦車から逃げている。相手からは『IV号戦車が全力で逃げてクルセイダー巡航戦車を撒こうとしている』と思っているはず。

みほはそう思い、咄嗟に不意打ちの手を思いついていた。

「砲塔は後ろに向けなくても大丈夫ですか？」

砲撃手席から華がみほに提案する。

しかしみほは首を横に振り、華の提案を却下していた。

「もし砲塔を回したのが見られたら間違いなく警戒されます。相手を油断させるために相手にはIV号が全力で逃げていると思わせていなければいけません。我々が逃げているだけで何もできないと思わせてからの突撃をして、まずはクルセイダーを我々の後方から離しましょう」

「なるほど……わかりました」

「その後、見つけ次第チャールを撃破します。華さんには大変と思いますますがその時に頑張ってもらいます」

「はい、おまかせください」

みほの説明に、華は納得して頷く。

しかしその説明を聞いて、優花里が首を傾げていた。

「ですが、みほ殿。チャーチルが何処にいるか分かりませんか？」  
「ううん、分かるよ。優花里さん」

即答したみほに、優花里が更に分からないと言いたげに首を傾げる。

そんな優花里に、みほは簡単に説明をすることにした。

「絶対にチャーチルは私達の近くにいます。多分、クルセイダーが我々のIV号と自車両が走ってる道をチャーチルに教えてるはず、ならこの近くにおいて私達を追い混む為にいつでも回り込めるように動いてると思います」

「なんでそうだと分かるんですか？ みほ殿？」

「クルセイダーが私達の裏を突いてM3リーを撃破した時も、さつきIV号が追い詰められた時も、クルセイダーが的確に動いてた。入り組んだ街の中で、互いに正確に位置を連絡なしに分かるなんて普通でないよ。ならクルセイダーは常に他の車両と連絡を取り合ってるって思ったの。」

百式流のクルセイダーほど遊撃に向いてる戦車はないから、今回の聖グロの編成で攻撃の要は間違いなくクルセイダーのはず。なら自由に使えるようにクルセイダーの現在地を常に把握しておきたいって隊長が思うのが普通だと思うの。

クルセイダー以外が隊列を組んで動いてたからその隊列のどれか一両が連絡役と考えてたけど、今はもうクルセイダーとチャーチルとマチルダしかいません。マチルダはこの場から離れた距離にいる以上、考えられる限り間違いなく連絡を取り合ってるのは隊長車両のチャーチルしかいません」

みほの説明で、優花里もようやく理解した。

IV号戦車の裏をかくために、クルセイダー巡航戦車から常に連絡を受けてチャーチル歩兵戦車が動いている。つまり、IV号戦車とクルセ

イダー巡航戦車の近くにチャーチル歩兵戦車が走っていることになる。

「だけど私達はチャーチルの位置が近い場所にいるってことしかわかりません。磯部さん達がチャーチルを見つけて正確な位置が分かってくれば助かるんだけど……」

「八九式が私達のところに来るのはもうちよつとみただよ、みぼりん」

沙織の話に、みほが「むう……」と唸る。

八九式中戦車が合流するまでもう少し掛かる。理想としては八九式中戦車がIV号戦車と合流して聖グロリアーナの車両と戦えれば良かった。

更に言うなら、八九式中戦車がIV号戦車と一緒にいる状態でクルセイダー巡航戦車と戦いたい。二両以上でクルセイダー巡航戦車と戦うのが現状で最善な手になる。

しかし残念ながら、そのどちらも今のところは叶いそうにない。明確なチャーチル歩兵戦車の位置が分からないのが痛手だが、どちらにせよIV号戦車がクルセイダー巡航戦車から離れなければ話にならない。

それならばどちらにせよ早い内にクルセイダー巡航戦車を離すことが賢明だろうと判断して、みほは先程麻子に指示した手を早速実行することにした。

「麻子さん、早速ですが次の路地を曲がったら先程の指示をお願いします。百式流の動きなら最速で曲がってくるので、指示通りに動かせば勝手に相手がぶつかってくれるはずですよ。まずはそこにIV号をぶつけてクルセイダーを突き飛ばします。クルセイダーの復帰までの時間に我々はクルセイダーから逃げて、全速でチャーチルを探しましょう」

「了解」

みほの指示を受けて、麻子はすぐに指示通りにIV号戦車を動かした。

麻子自身も毎回思うが、戦車にバックミラーが欲しいと思って仕方がない。背後のクルセイダー巡航戦車の正確な位置がみほの言葉でしか分からないので、自分でも分かれば大分運転が楽になるというのに。

まずは目の先にある路地に入る。そして路地に入った後に一度ブレーキペダルを踏み、車体を止めつつ更にクラッチペダルと踏みながらクラッチギアをバックへと変更してアクセルペダルを踏みつける。

あとは勝手に車両が後ろに走っていくだけだ。次の車両操作はクルセイダー巡航戦車と衝突した瞬間、麻子はそのタイミングが見えないのでいつ来るか分からない衝撃に備えて気を引き締めた。

そしてみほの考え通り、クルセイダー巡航戦車の視界から路地を曲がったIV号戦車はしっかりと僅かな時間だけ消えていた。クルセイダー巡航戦車はIV号戦車を追うことに意識を向けているので、まさか後退してくるとは思っていない。

クルセイダー巡航戦車が滑らかな動作でIV号戦車に続いて路地に入ってくる。みほも少しだけIV号戦車の動きを予測されるかもと一瞬警戒したが、路地に入るクルセイダー巡航戦車の動きを見る限りそれはないと確信した。

そしてクルセイダー巡航戦車がIV号戦車が入った路地に入った瞬間の光景に、アツサムはみほの作戦通りに驚愕した。

「なッ——！！！！」

クルセイダー巡航戦車の操縦手席から見える視界に、全速で後退してくるIV号戦車。咄嗟の回避は、もう間に合わなかった。

「マジですのっ！！！！」

ローズヒップの声と共に、IV号戦車がクルセイダー巡航戦車に衝突した。

アツサムとローズヒップ、克蘭ベリーの三名が衝撃に備えたが戦車同士の衝突による衝撃はかなり大きい。

全速で後退していたIV号戦車がクルセイダー巡航戦車を弾き飛ばす。クルセイダー巡航戦車は弾かれた勢いのままに、車両を引き摺らせながら民家へ突っ込んでいた。

それはみほの誤算。それも良い意味での誤算だった。

みほの予測ではクルセイダー巡航戦車は路地の壁にぶつかって止まる程度と思っていた。しかし予想を外し、クルセイダー巡航戦車は木造の民家へ突っ込んでいた。

間違いなく復帰に時間が掛かる。確実にクルセイダー巡航戦車から離れられる。

「みほ殿！ 今ならクルセイダーを撃破できますよ！」

「無理です！ クルセイダーの砲塔がこつちを向いてます！ こちらが砲塔を回してる間にクルセイダーが砲撃してきます！」

みほも優花里と同じく“それ”を一瞬考えたが、自分自身ですぐに却下した。

運良く予想以上の結果になったが、クルセイダー巡航戦車を撃破するチャンスにならなかった。

民家に車体を通り込んだクルセイダー巡航戦車の砲塔がIV号戦車の方を向いている。これが反対で車両の前部が民家に向いていれば、みほも予定を変えてクルセイダー巡航戦車の撃破を優先したのだが、その点だけは運が悪かった。

「麻子さん！ 行ってください！」

そして衝突した後すぐに、IV号戦車が全速で前進した。

クルセイダー巡航戦車が履帯を全力で動かしているのがみほの目に

映る。しかし突っ込んで破壊した民家の建物が僅かに邪魔をしているらしく思った様にクルセイダー巡航戦車が動けていなかった。

これならクルセイダー巡行戦車から逃げ切ることができると。離れていくクルセイダー巡行戦車を見て、作戦がしつかりと成功したことにみほは胸を撫で下ろして安堵した。

これでチャーチル歩兵戦車を探せる。みほは安堵した気持ちを引き締めると、すぐに地図を広げてチャーチル歩兵戦車のいる地点を予測し始めた。

ここからはまた大洗か聖グロリアーナの二校のどちらが先に敵戦車を見つけるかの戦いになる。それを分かっていたみほは、すぐ麻子に指示を飛ばしていた。



「まさか突撃してくるなんて！」

「またやってくれましたでございませうね！」

アッサムとローズヒップが声を合わせて驚いていた。

離れていくIV号戦車を見て、撃破しに来ないことにアッサムが唇を思わず軽く噛んだ。

相手も流石にそこまで馬鹿ではない。砲塔がIV号戦車に向いている状態でわざわざ向かってくるような選択を大洗はしなかった。

クルセイダー巡行戦車から離れていくIV号戦車を見ながら、アッサムは通信機で連絡を即座に行った。

「ダーズリン！ IV号を見失います！」

『まさか……撃破されたの？』

アッサムの通信から、ダーズリンが返答する。

明らかに驚いている声色だった。しかしアッサムはそんなことを気に留めず、返答した。

「撃破はされてません。いきなりIV号が不意打ちで車両をクルセイダーに衝突させてきました。民家に車体を衝突されられて足止めされています。その僅かな時間にIV号を見失ってしまいます」

『あなたがそこまでしてやられるなんて、本当に珍しいわ。本当に、あのIV号はやってくれますわ』

アツサムの通信で返ってきたダージリンの言葉は、驚愕と苛立ちの色が見える声色だった。

「すぐに復帰して追いかけます。ダージリン、気をつけて」

『勿論よ。だから早くそっちも戻ってきなさい』

「はい！ 申し訳ありません！」

クルセイダー巡航戦車の履帯を全速で動かす。

運が悪い。クルセイダー巡行戦車が民家に突っ込むとはアツサムも予想していなかった。

まだ壁などに衝突してくれれば追いつけたかもしれないというのに、運が悪い。

大洗か、それとも聖グロリアーナか、どちらも運が向いているはずで、そして運が向いていない。

その結果、また勝ちの目を見失ったことにアツサムはつい唇を軽く噛んでいた。

◇

「まさか二度もアツサムがしてやられるなんて……」

IV号戦車がまたもやクルセイダー巡行戦車を出し抜いた。その事実にはダージリンは舌を巻いていた。

聖グロリアーナ女学院である『最速の淑女』とまで謳われたアツサ



ムを二度も出し抜くとは、ダージリンには予想外のことだった。

ここまで聖グロリアーナのクルセイダー巡行戦車を出し抜いた相手に会うことは本当に数少ない。

それこそ百式和麻が過去に聖グロリアーナ女学院に来たおかげで得ることのできた百式流という操縦の極みともいえる技術。その百式流というクルセイダー巡行戦車の運用方法の最適解と言える技術を持った聖グロリアーナのクルセイダー巡行戦車と対等に戦える学校は、それこそ黒森峰くらいである。

和麻がまだ聖グロリアーナにいた時期の練習試合で、百式流のクルセイダー巡行戦車に対応できた学校はほとんどいなかった。

あの実力高校のサンダースやプラウダですら、初見で百式流のクルセイダー巡行戦車に対応できていなかった。それこそ車両数の暴力で押し切るくらいしか手を思いつかないのが普通である。

それをたったの一両で対応し、クルセイダー巡行戦車を出し抜いた。その事実がダージリンには驚愕に値した。

どうしてまだ初心者チームに勝てないのか？

やはり百式流が原因なのか？

たったの一両がここまで戦況を変えるのか？

ダージリンはそう考えるが、すぐに否定した。

一両の車両で戦況を変える。そう謳われる百式

いや、大洗の百式流は百式流であっても百式流ではない。

油断などしていないのは重々理解している。油断などとしてはいけない敵とわかっている。

しかし百式流といえど、大洗の操縦は“本当の意味”で百式流などではない。

ただ百式流の入門たる“クイック”と“ドライブアクション”を使えるだけ、そして“初心者とは思えない程度”の運転技術しかない。数多くある百式流の技術を会得していない百式流の操縦手などダージリンからすれば百式流の操縦手とすら言えない。

たったその程度で、戦況を変えるなどあつてはならない。それを認めるのは、なによりもダージリン自身が許せなかった。

それを認めれば、百式和麻という操縦手の格を下げってしまう。百式和麻の操縦と大洗の操縦を一緒にしてなどあってはならない。比べることすら、おこがましい。彼と今戦っている操縦手が同格など、認めるわけにはいかない。

見た者に感動を与えることのできる。戦車の動きが美しいと思える操縦、そんな操縦がこの世の中にある。それが百式流の操縦なのだ。

大洗の戦車には、まだ技術の荒さが目立つ。まるで見様見真似のような拙い技術をどうしてダージリンが認められるものかと。

故に、苛立ち。その気持ちがダージリンに募る。だがそれでも、ダージリンの中には、また別のある気持ちが生まれていたのも確かだった。

下手な選手の集団で、ちぐはぐな車両の集まりのチーム。圧倒的に勝ちを確信できる試合のはずなのに、それができない。

百式流の一端を使うとは分かっているが、それでも根本的に実力の足りていない相手との試合など、苦戦するはずがないのに。

「どうしてこうも、高ぶってるのかしら……?」

強豪校と戦うのとは違う、今まで経験したことのない不思議なこの試合にダージリンは「面白い」と感じてしまっていた。

苛立ちながらも、面白いと思う矛盾がダージリンの心に困惑を生む。

「クルセイダーからIV号が離れた。相手は足止めしたクルセイダーを撃破するよりも、クルセイダーから姿を消すことを優先している。クルセイダーと一両で戦うことを避けたということは――」

だが困惑しながらも、ダージリンは思考していた。彼女には大変珍しく独り言を呟くほどに。

オレンジペコも、ここまで考え込むダージリンを見たのは初めて

だった。未だかつて、ダージリンが考え事で独り言を呟くなど見たことがなかった。

勝ちにこだわる故、意地でも勝ちたいというダージリンの気持ちの現れでもあった。無意識に思考を整理するために、言葉にしていた。そしてダージリンの考察は、みほの思考を読み切っていた。

一両同士の戦いをクルセイダー巡航戦車にしなかったのは、間違いなく百式流のクルセイダー巡航戦車と単体で戦うのを避けた。よって一両ではなく二両での交戦を望んでいることになる。

だが八九式中戦車はまだ距離が離れた地点にいる。それはマチルダ歩兵戦車の情報から知っているので、まだ合流はしていない。

大洗は合流をしたいができない。そして大洗の二両が合流するよりも早く合流するために動いた聖グロリアーナの車両が早く合流できる。

しかしそれを大洗は望まない。相手の車両が合流して増えることは、戦いが不利になることになる。

よって、IV号戦車の次の行動はふたつしかない。

まずはこの場から離れ、八九式中戦車と合流して仕切り直すこと。そこから作戦を新しく考え、再度仕掛けるという手がある。しかしダージリンは、これをまず大洗は選ばないと却下した。

聖グロリアーナの全車両がバラバラになっている状況を逃すことを選ぶわけがない。聖グロリアーナの残存車両が合流した際、明らかに大洗は不利になる。またそれを崩す手は大洗の残存車両ではほぼない。

なら、残りのひとつしかない。

それはクルセイダー巡航戦車がIV号戦車を見つけるより早く、そしてチャーチル歩兵戦車に合流するよりも早く、更にマチルダ歩兵戦車も合流するより先に、IV号戦車がチャーチル歩兵戦車を撃破すること。

合流されるまでに隊長車両を撃破する。それを大洗は狙ってくる。と、ダージリンは考え切った。

おそらく大洗も読み切っている。クルセイダー巡航戦車の近くに

チャーチル歩兵戦車がいることを。だからこそ先に倒せる可能性があるあるチャーチル歩兵戦車を探し出し、撃破する。

大洗がそこまで考えてないという可能性もあり得るか、ダージリンはそれも却下した。この試合を戦えている相手の隊長がそこまで考えられていないわけがない。

つまり、IV号戦車は逃げることなくチャーチル歩兵戦車の近くにいる。

その結論に至ったダージリンがすぐにキューポラから身を出し、辺りを見渡した。

現在、チャーチル歩兵戦車は一車線道路を走っている。今まで走っていた路地と違い、大きな道路だった。

もし路地からIV号戦車が出てくればすぐに見える。ダージリンが警戒していると——その時、路地から勢い良く飛び出す戦車が現れた。

「なっ——!?？」

ダージリンが一瞬、自分の目を疑った。

それは見間違いない。紛れもなくIV号戦車だった。

「——砲撃っ！」

しかし目の前の車両がIV号戦車だと視認した瞬間、それを敵車両と自分の脳が理解するよりも早くダージリンが口を動かしていた。

身構えていなかったチャーチル歩兵戦車の砲撃手が車長の指示に反射的に動く。

チャーチル歩兵戦車から放たれた砲撃がIV号戦車へと飛翔した。



クルセイダー巡航戦車を振り切ったIV号戦車が幾つかの路地を曲

がり、大きな道路に出ることを選んだのは、みほには理由があったからだ。

それがダージリンとみほの考えと読み合いの違いだった。

みほは、クルセイダー巡航戦車の近くにチャーチル歩兵戦車がいると読んだ。これは間違いではない。しかしチャーチル歩兵戦車がいるとおよその位置をみほは読み間違えた。

みほはチャーチル歩兵戦車はクルセイダー巡航戦車の走っている道の付近と予想していた。

しかしダージリンはそれをしていなかった。

ダージリンはIV号戦車が町の中の入り組んだ路地を走ると読み、回り込むためにクルセイダー巡航戦車が走る道の付近を走るよりも、あえて大きな道路を走り、いつでも回り込めるようにしていただけだった。

その違い。故にみほは自分の予想なら先に大きな道路に出て、チャーチル歩兵戦車が出てくるのを待つか、または索敵を行う予定だった。

「えっ——!?？」

しかし大きな道路に出た途端、自分の視界の右側にチャーチル歩兵戦車がいるとは思いもしなかった。

そしてみほの目にはチャーチル歩兵戦車の砲塔が僅かに動いているのが見えた。

照準の微調整。そしてその揺れが止まる。

それを見た途端、みほは声をあげた。

「——曲がらずに前進！」

本来、みほは大きな路地に出た後、左右のどちらかに曲がる予定だった。それは麻子も把握していた。

しかし曲がるために車体を僅かに減速させた時点で、今チャーチル

歩兵戦車が放つ砲撃に当たる。そのため、IV号戦車は止まらないという選択しかなかった。

みほの突然の指示に、麻子も当然驚いた。しかしみほが咄嗟に指示したにも関わらず、麻子はアクセルを緩めることなく踏めていた。それと同時に響いた炸裂音に、麻子も理解した。近くに敵車両がいたのだと。

飛翔する砲弾がIV号戦車の後部を掠める。

止まっていれば当たっていた。しかし安堵してる余裕がない。みほはすぐに指示を出していた。

「右側にチャーチル発見！ 右折してチャーチルに砲撃します！ 麻子さん、相手の砲撃に注意！ 華さん、右折したらすぐに砲撃してください！」

麻子と華が指示を受けて、即座に実行する。

IV号戦車が右に曲がり、チャーチル歩兵戦車と向かい合うように走る。そして向かい合った瞬間、華が砲撃を放っていた。

しかし華の放った砲弾は、チャーチル歩兵戦車の装甲に弾かれていた。

互いに目視で距離は五十メートル程ある。しかしこの距離でもIV号戦車の砲撃はチャーチル歩兵戦車に通らなかった。

チャーチル歩兵戦車の装甲をIV号戦車が砲弾が貫くには、更に接近して砲撃するしかない。

「麻子さん！ 前進して接近してください！ 右前に向かって走りつつ、チャーチルの砲塔が止まったら左前へ前進して砲撃を躲してください！」

「別にそこまで指示する必要はない。正面から撃つ砲撃なんて当たらない」

みほの指示に麻子がチャーチル歩兵戦車を見据えながら、不安そう

に鼻を鳴らした。

しかしみほはそれを気にする余裕はなかった。麻子ならその指示をする必要がないと判断できたが、もしもと考えて指示を出した後に華と優花里に指示を出していた。

「華さん！ 移動中でも良いので装填完了したら砲撃してください！

優花里さん！ 装填が大変と思いますが早くお願いします！」

「了解です！」

華と優花里の返事を聞いて、みほは今から行う行動を全員に告げた。

「ここでチャーチルを撃破します！ チャーチルに接近して側面か背面に砲撃します！ 相手に読まれてる可能性がありますますが、相手の対応より早く行動して反撃されるより早く撃破します！」

偶然見つけたチャーチル歩兵戦車をこの場で撃破する。

その選択を選んだみほだったが、同じくダージリンもそれを読んでいた。

「IV号が向かってくるわ。正面からの砲撃は当たらないと思って、お相手は私達の側面か背後に攻撃してくる。必然的に至近距離になるところに砲撃を放ちなさい」

ダージリンが今からIV号戦車が行う行動を予測して、全乗員に伝える。

大洗と聖グロリアーナ、互いに動きが分かっている。

対峙する二両、競うのは相手に砲弾をどちらが早く撃破判定とされる場所に当てられるか。

向かうIV号戦車と待ち構えるチャーチル歩兵戦車。

二両の一騎討ちが、開始された。

## 19. 当てられるものなら当ててみる

西住みほとダージリンが各々の車両のキューポラから互いに視線を交わす。

この二人の読み合い。それは間違いなく互いの思考を把握していた。

大洗——西住みほは、選びようのない選択を選ばされていた。五十メートル程度離れた至近距離で放つIV号戦車の砲撃でも、チャーチル歩兵戦車の正面装甲を抜くことができない。よって至近距離でも撃破は困難。

よってIV号戦車がチャーチル歩兵戦車を撃破するには、厚い装甲である正面以外の装甲に、砲撃の威力が限界まで下がらない零距离に近い超至近距離で砲撃を撃ち込むしかない。

そのため必然的にこの場面でIV号戦車がチャーチル歩兵戦車を撃破するためにできることは、ひとつしかない。それはIV号戦車がチャーチル歩兵戦車に可能な限り近づき、側面もしくは背面の装甲に砲撃を零距离で叩き込むことだけだ。

他の仲間車両からの援護はない。本来なら複数の車両で戦うべきである。だがしかし最優先で探していた敵の隊長車両が車両数で有利を取られている状況のなか、それが単独でいる状態で遭遇してしまつた以上、この場で撃破することをみほは最優先にせざるを得なかった。

加えて、みほはダージリンにこの手を読まれていると予想している。この状況で大洗が選べる最善の手、それをダージリンを理解しているはずだと。故に、みほは相手に対策されるより早く砲撃をしてチャーチル歩兵戦車を撃破することを選ばざるを得なかった。

必ず接近してくると読まれてる以上、高装甲を持つ敵車両の行動はひとつしかない。

相手に全力で近付いて、砲撃を放つ。相手に砲弾を撃たれるよりも



早く。

よつてみほが予想する勝敗は、どちらが先に砲弾を撃てるか。それだけだった。

聖グロリアーナ——ダージリンも理解していた。クルセイダー巡航戦車から逃れたIV号戦車は、間違いなくこちらの隊長車両を撃破してくると。大洗側からすれば、あの「百式流」のクルセイダー巡航戦車に対して単体ではなく多数の戦車で戦いたいと思っっていると。

運良く全力でクルセイダー巡航戦車を振り切り、索敵をしていたところに敵の隊長車両が単独で出てきたのなら間違いなく大洗は撃破しにくるに違いない。選択のひとつでもある逃げて仕切り直す選択は、まず大洗は選ばないとダージリンは確信していた。

仕切り直して聖グロリアーナの車両が合流される方が、大洗が不利になる。故に仕切り直すための撤退を大洗が選ぶわけがない。負ける可能性を増やすよりも、現時点で勝てる可能性のある手を選ぶ。逆の立場なら、ダージリンも間違いなくそうする。また、それを大洗も選ぶと確信できるのは、ある意味で大洗の隊長をダージリンは信用していた。

実力のある隊長。それも百式流のクルセイダー巡航戦車に対応できる隊長をダージリンが優秀と判断するのは必然とも言える。

IV号戦車がチャールズ歩兵戦車を撃破するためには、正面装甲では撃破は困難。つまりIV号戦車はチャールズ歩兵戦車の側面または背面に向けて砲撃をしてくる。

近づかれる前に撃破したいが、それは難しいとダージリンは即断する。接近するIV号戦車に正面から砲撃しても、おそらく着弾しない。拙いといえど百式流の「クイック」が使える以上は正面からの砲撃は、当たらないと思っただけの方が良い。

よつてダージリンの選ぶ行動は決まっていた。この状況では必然的にIV号戦車がチャールズ歩兵戦車の側面または背面を狙ってくる。勝手に近づいてくるなら、それに合わせて砲撃を撃ち込むだけだと。百式流の技術では回避しようがない距離で、相手よりも早く砲弾を叩

き込む。

互いに正面から向かい合った状態での砲撃では撃破はできないと判断。その結果、自然と互いに狙うべき行動が読めてくる。

一方では、相手に対応される前に最速で砲弾を撃ち込む。そしてもう一方では、砲撃をされるよりも早く躲されない距離で砲弾を的確に撃ち込もうとする。

大洗は、最速の砲撃。聖グロリアーナは、的確な砲撃。

この二面の戦いで、最も神経を擦り減らすのは間違いなく砲撃手だとみほとダージリンが理解するのは当然だった。



「華さん！　かなり大変ですがお願いしますー！」

「おまかせくださいー！」

みほが華に掛かるプレッシャーを心配するが、華はそれを物ともしない声色で答えた。

明らかに初心者 of 砲撃手である華が背負うには大き過ぎる砲撃だと、みほも理解していた。

IV号戦車が出せる最速の速度で、ほんの僅かしかない時間だけで敵車両に砲塔を合わせて撃つ。先に撃っても外せば、間違いなく撃破される。つまり隊長車両が撃破される。それは同時に試合に負けるということだ。

そのプレッシャーは並大抵ではない。撃破判定の砲撃が当たることを避ける麻子のような操縦手とは違い、決定的な場面で砲撃を外してはいけないという必中を求められる砲撃手は操縦手とは違う精神的重圧にさらされる。

先程も同じような場面を華は乗り越えた。的確に砲撃を的中できた。同じことをもう一度、やれば良い。

だがむしろ、それが更に無意識に華の心にプレッシャーを与えていた。

一度できた、ならもう一度できる。その思考が頭を過ぎる。できないことをできるよりも、できることをこころ一番でやる方がある意味では一番心に堪える。

花道を嗜む華にとって、その苦悩は嫌でも経験してきた。常に自分の最高の花を生ける。色んな人に褒められた花を生け続ける。その期待のプレッシャーに、華は耐えていた。

だからこそ、五十鈴華は集中できた。期待に応える、いつも通りにするだけで良いと。息を深く吸い、そしてゆっくりと吐いて、

「——花を生けるように集中して」

そう呟くと、華は自然と頭を切り替えていた。

ただ前を見て、敵車両に照準を合わせて引鉄を引くだけ、それだけで良い。他のことを考える必要はない。

そう思うと、自然と先程まで聞こえていた戦車の駆動音などの雑音は華の耳から消えていた。

照準器を覗き込み、敵車両にいつでも照準を合わせられるように心を静かに整える。

「冷泉さん、お願いします」

「任せろ。五十鈴さんが外さない位置まで連れていく」

そうやって華が心を「整えた」のなら、後は操縦手の麻子の仕事だった。

砲撃手が外すかもしれない不安があるのなら、決して外すことができない距離まで連れて行くだけ。たったのそれだけで良いと。

「麻子さん！ チャーチルの砲撃を回避しつつ、接近してください。その後、近づいたらチャーチルを背後に回り込んで砲撃します！」

「背後に回り込むのならコンクリートの上だと履帯、壊れるかもしれないぞ？　良いのか？」

みほの指示に、麻子が淡々と答えた。

麻子も短いながらも操縦手として乗っている経験から察していた。ゆっくりと回り込むなら車体と履帯に負担は掛からない。だが相手が撃つ砲撃を躲しながら、相手が対応し切れないように回り込むなら訳が違う。

この道路。コンクリートの上を速度を乗せた勢いのまま車体を滑らせて回り込もうとすれば、かなりの確率で履帯が外れる。

間違いなく走行不能になり、短時間で復帰ができない。撃破判定とはならないが、復帰するまでの時間に他車両に撃破もしくは相打ちになる。

一両同士の戦いなら、履帯が外れても良いだろう。しかしこの状況なら、その選択ができないことをみほも理解していた。

「麻子さん……操縦する上で履帯が壊れないでチャールルの側面か背後に接近できますか？　チャールルだけなら壊れる覚悟でも問題ありませんが、クルセイダーがいるのでそれは避けたいです」

随分と無茶苦茶な指示を出してくる。麻子は素直にそう思った。

しかしそれをやれなければ、この試合に負けることも理解していた。

麻子が少し思考を巡らせる。そして自分ができる可能性がある手を思いつくと、静かに頷いた。

「わかった。やろう。あの男なら“アレ”を平気でやりそうだ。私にできないわけがない」

麻子の頭に百式和麻の顔が浮かぶ。憎たらしくて仕方ないあの顔を思い出すだけで、腹が立つと。

「走りながら、相手の砲撃を躲して、零距离まで接近して砲撃を外せない距離まで行けば良いんだな？」

そうして麻子が続けた言葉に、みほは疑問に思いながらも頷いた。

「え……ええ、そうです。できますか？」

「やれる。あの男がやってたことを私がするだけだ」

麻子がそう告げる。しかしその後が続けた言葉に、みほは別の意味で震えてしまった。

「——やったこと、ないがな」

「麻子さん、何するつもりですか？」

みほの不安げな質問に、麻子は珍しく笑いながら答えた。

「走りながら回る」

「えっ……!?! 麻子さん！アレをやるつもりですか!?!」

麻子の答えに、みほは察してしまった。

数多くある百式流の中で、奇抜な動きのひとつである動き。

和麻がごく稀に使う、麻子を負かす時に使っていた技術。

今までの練習の中で、麻子が一度も使わず、使おうと思えなかった技を。

「ターンブロー、やるぞ」



停車するチャーチル歩兵戦車に、IV号戦車が全速で接近する。

ダージリンはまだIV号戦車がチャーチル歩兵戦車に零距离まで接近する時間に猶予があると思ひ、命令する。

「砲撃」

チャーチル歩兵戦車から砲弾が放たれる。

しかし放たれた砲撃は、IV号戦車の横を通り過ぎていた。

「今の砲撃、射線はどうだったかしら？」

「間違いなく合っていました。本来なら外すわけがありません」

オレンジペコが次弾を装填しているなか、ダージリンが砲撃手に確認を即座に行う。

やはり当たらない。いや、当てさせてもらえないと言った方が正しいか。

だがダージリンも、今の動きを見て少し震えていた。よく見ていなければ分からないと判断してしまう程に、あのIV号戦車の動きの練度が増していると。

クイツク、撃たれる砲弾を躲す技術。先程まで見ていた拙いものと全く違っている。

IV号戦車の操縦手の集中力が増しているのだろうか。いや、それでも「上手すぎる」とダージリンは思ってしまった。

紛れもなく逸材である。聞いた話が本当なら、一ヶ月も練習していない操縦手がIV号戦車に乗っているはずだ。

明らかにIV号戦車の操縦手が異常であると、ダージリンは思わざるを得ない。そんな短時間で初心者が百式流の技術を会得できるわけがない。

本当に、短期間で百式流の一部を習得して、拙い技術を本番の試合の中で技術の練度を上げて習得しつつあるのなら、IV号戦車に乗るその操縦手は異常である。

間違いなく操縦手をやるために生まれた人間だと、喉から手が出る

ほどに欲しい人材である。

聖グロリアーナで操縦手随一の腕を誇るアッサムに並ぶ操縦手になるかもしれない。それかもしくは――

「ここで倒さないといけないわ」

ダージリンが、そつと呟く。

あの操縦手の心を折らなければならぬ。この場で撃破しなければ、あの操縦手は後々に手のつけられない人材になる。

それは許してはならない。ダージリンの中で、最も優れた操縦手は一人しかいないのだから。

その「確信」を覆す訳にはいかない。絶対に倒さないといけない。そして百式和麻に会うためにも、必ず倒さないといけない。

「次の砲撃は控えて。あのIV号が左右のどちらかに来るわ。その動きをしつかりと見て砲塔を合わせることに。あとは外さないと判断して、砲撃を撃ちなさい」

IV号戦車から放たれた砲撃がチャーチル歩兵戦車の正面装甲に弾かれる。

その中で、ダージリンは静かに砲撃手へ命じた。



二両の距離が縮まっていく。

一両は全速で接近し、もう一両はその場から動かずに待ち構える。

互いに砲撃はもうできない。時間の関係上、今の時点で砲撃を撃てば接近時の砲撃に装填が間に合わない。残すのは互いに超至近距離まで接近した時に放つ一発のみ。

IV号戦車が左右に車体を揺らす、チャーチル歩兵戦車から見れば左右のどちらに動くか分からないフェイントをIV号戦車が見せる。

「絶対に引つかからないようにしなさい。IV号の車体がどちらかの方  
向に車体が大きく向いた時だけ反応しなさい」

IV号戦車の動きを見て、ダーズリンが指示を出す。

「麻子さん！ ギリギリまで左右に細かいフェイントを入れてくださ  
い！ 接近するタイミングは麻子さんにお任せします！」

みほも同じく、相手に対応されないように麻子に指示を送る。

そして二両の距離が十メートルを切るまでで、二両の本当の戦いが  
始まった。

「五十鈴さん、砲塔は動かさなくて良い。車体が真横になったら撃つ  
てくれるだけで良い。自分で撃てなくても撃つタイミングは西住さ  
んがする」

「大丈夫です。お任せください、外しません」

「安心しろ。外すなんて思っていない」

麻子が仕掛ける寸前で、華にそう告げた。

華も麻子がそう言うってくれたことに、どこか安堵していた。

集中は切れていない。緊張もしている。だけど、不思議と安心して  
いた。

百式流において、一両同士の戦いで負けない条件がある。

それは砲撃手と操縦手の連携が完璧なら、負けない。

その条件を、少しだけこの二人は満たしつつあった。

「行くぞ」

麻子の声と共に、IV号戦車の車体が左に動く。



「来ましたわ。右側から来ましてよ」

ダージリンもチャーチル歩兵戦車から見て、右側からIV号戦車が攻めてくると察知した。

即座にチャーチル歩兵戦車の砲塔が右に回転する。

互いに右斜め前に相手車体を捉えている状況で、麻子はタイミングを間違えないように行動した。

「当てれるものなら当ててみる」

麻子がそう告げた瞬間、彼女の手足が即座に動いた。

ハンドルレバーを両手で動かした後、僅かな時間でギアレバーを操作しつつクラッチペダル、アクセルペダルとブレーキペダルを両足で手際良く踏む。

そして最大速度で動いていたIV号戦車が、出している速度を限界まで落とさずに右側へ半回転していた。

「えっ……っ？」

ダージリンも急にIV号戦車の車体が回り始めたことに、一瞬理解が追いつかなかった。

しかし、その動きをダージリンは忘れるはずがなかった。

砲塔が回るのはどれだけ早く回しても、少し時間が掛かる。

なら砲塔が前を向いたままの最大速度の車両がそのまま向きを変えれば、砲塔を回す時間より早く相手車両に砲塔を合わせられる。

ダージリンは“それ”を思考から除外していた。

できるわけがない。それを素人ができるはずがないと。

アクセルブロー。それは攻撃に特化した百式流の技術。

クイツクよりも難易度の高い、熟練の操縦手しかできない“それ”をするなどダージリンは夢にも思わなかった。

「私はお前達の上を行って、あの男に勝つ」

履帯を壊す訳にはいかない。車体が回る勢いを乗せ過ぎると、履帯に負担が掛かり過ぎる。

最大に気を遣って、麻子が車体をチャールス歩兵戦車の横で走りながら半回転させる。

走りながら車体を半回転させている時間。その時間が華の仕事だった。

右に回る勢いで身体が左に揺れる。しかし華は絶対に引鉄から手を離さず、照準から目を離してなかった。

確実に狙えている。あとは車体が真横になった瞬間に、引鉄を引くだけで良い。

そして――

「撃てっ――！」

みほの声と共に、IV号戦車から砲撃が放たれた。